昭和四年八月出版

群書類從

第拾壹輯

東京
續群書類從完成會

群書類從第十一輯目次

和歌部

群書類從第十一輯目次終

群書類從卷第百六十三

和歌部十八千首四

撿挍保己一集

爲尹卿千首和歌

春二百首

立春朝

紀の海や春は長閑に立かへて今朝聲となし興津白波

立春天

とはゝやなすめるは空と成しより霞も春もたちやそめしと

立春日

あら玉の春や外山の朝日影先さしむかふ空そのとけき

立春風

春やはや立ける波の岩こすけそれもなひきて河風そ吹

立春霞

あさもよひ木々の梢のうす霞分來る春やしをりしつらむ

立春雲

横雲のわかるゝきはも見えわかてかすめる山の初春の空

立春雪

亂れちる雪をはいかに春のけふこんといふなる嶺の松風

立春氷

御吉野や氷にむすふ瀧の糸を岩ほにみたす春は來にけり

立春水

けふといへは春の岩井の朝氷まつ若水にくたきつる哉

都立春

今朝は又都のてふり引かへてちひろのみしめしつか門松

早春山

下もえの若草山の雪とけにそれも見え行谷のむもれ木

早春關

春やはや木幡の關の朝ほらけ都のたつみやゝかすみぬる

早春河

氷とく浪こそあらめはやせ川はやくも春のたちにけるかな

早春湖

春のきる霞の袖に成にけりを花は枯しまのゝうらなみ

早春浦

今ははや浪ものとけしおふの浦に舟のりしてや春のきぬらん

野子日

賀茂山のすそののあふひそれならて今も二葉の松やひかまし

子日松

群書類從第十一輯目次終

群書類從卷第百六十三

撿挍保己一集

和歌部十八千首四

爲尹卿千首和歌

春二百首

立春朝
紀の海や春は長閑に立かへて今朝聲となし興津白波

立春天
とはゝやなすめるは空と成しより霞も春もたちやそめしと

立春日
あら玉の春や外山の朝日影先さしむかふ空そのとけき

立春風
春やはや立ける波の岩こすけそれもなひきて河風そ吹

立春霞
あさもよひ木々の梢のうす霞分來る春やしなりしつらむ

立春雲
横雲のわかるゝきはも見えわかてかすめる山の初春の空

立春雪
亂れちる雪をはいかに春のけふこんといふなる嶺の松風

立春氷
御吉野や氷にむすふ瀧の糸を岩ほにみたす春は來にけり

立春水
けふといへは春の岩井の朝氷まつ若水にくたきつる哉

都立春
今朝は又都のてふり引かへてちひろのみしめしつか門松

早春山
下もえの若草山の雪とけにそれも見え行谷のむもれ木

早春關
春やはや木幡の關の朝ほらけ都のたつみやゝかすみぬる

早春河
氷とく涙こそあらめはやせ川はやくも春のたちにけるかな

早春湖
春のきる霞の袖に成にけりな花は枯しまののうらなみ

早春浦
今ははや涙ものとけしおふの浦に舟のりしてや春のきぬらん

野子日
賀茂山のすそののあふひそれならて今も二葉の松やひかまし

子日松

袖ふれていくとせなれんうつしてもいまそみとせの梅の初花

紅梅

心して誰かゝれとはうへそへし柳のいとにむめのくれなゐ

落梅

よしやたゝおこたれ庭の朝きよめ梅うちちりてかほる春風

柳露

朝みとりぬきたる露の玉柳こほさぬ風は吹としもなし

池柳

これやまたつゝみのうへのさし柳ならひの池に春風そふく

岸柳

立田川きしの柳やうかふらむみなかたふちの色に見えつゝ

門柳

さほ姫の柳のかみやくらふらん門のゐつゝになひく春風

河柳

雨ふかき淀の川浪こえにけり今はと中の岸の青やき

路若草

冬かれのもとのよもきもましりつゝむら〳〵青き道の芝くさ

岡早蕨

さすか又おりのこしけり道よりは遙におくの岡の早わらひ

樵路早蕨

初わらひ先おりそへて山人の歸るつま木やすくなかるらん

山春月

引わたす春の霞のひとへ山月やそなたにかけにほふらん

關春月

相坂の關の杉まを出てたに清水にうとき月そかすめる

江春月

はやしほや春の霞のなかれ江に猶かけとまる夜半の月哉

春曉月

月は猶霞のそこにこもりつゝかねの音すむ明かたのそら

春月幽

更にまたかすめるほとのしらるゝは袖にうつらぬよ半の月影

朝春雨

朝戸明にしのふの露やみたるらんふるにもまさる軒の春雨

夕春雨

遠近の入相のこゑのうちこもり長閑き空そ雨に成ぬる

谷春雨

水音のまさる計もなかりけり谷の木くれの春雨の空

野春雨

あをみゆくふるからをのゝ春雨にまた枝さひし柏木のかけ

庵春雨

絶てすむ心よいかにかやか軒かゝる葛屋のよはの春さめ

春駒

春駒のたけにもたえぬ程みえてをかやかくれにあさるのへ哉

岡雉

焼すてしかたをか野への夕霞またやけふりときゝす鳴らん

野雲雀

しはしたゝ行人すくすほとなれや野へにもをちぬ夕ひはり哉

路雲雀

すきいれし野田の芝生やのこるらんゆくてのつゝみ雲雀鳴也（落イ）

歸鴈知春

うかりけるそのならはしや思ふらん鳴てそかへる春の鴈かね

曉歸鴈

涙さへとまらさりけり春の鴈鳴すてて行あかつきの空

夕歸鴈

聞侘ぬ友はさきたつ春の鴈一二のゆふくれのこゑ

夜歸鴈

我かたによるとおもはてみよしのの田面の月に歸るかりかね

歸鴈連雲

うきて行そなたの雲のあとに又したひてかへる春の鴈かね

峯歸鴈

天津かり春やあらぬと思ふらん雲こえかぬるこしの大やま

海歸鴈

を舟こくうなかみかたの朝ほらけ興めかりかね波になくなり

歸鴈似字

うす霞下行鴈や玉章のうらまてとほるよそめ成らん

歸鴈幽

はかせにもはらひかねたる夕霞をのれそきえて歸る鴈金

遠歸鴈

さすか又山をはこえぬ程なれや霞にのこる鴈の一行

春山

今は又花のかまへのはともなし雪うちきえす春の山さと

春野

紫のねはふよこのはこゝかとよゆかりの色にすみれさくなり

春關

東路やその名に聞し關越て霞を分るむさし野の原

春河

水上の雪けの水やまさるらん氷を越るはるの川なみ

春海

伊勢の海や波たかき浦は名のみして霞む日よりの奥のつり舟

野遊

あきつのの薄みしかき面かけのつはなぬきつゝけふも暮しつ

遊絲

永日の空にみたれておたまきのくりかけてけり春のいとゆふ

待花

なにとなく雨にはならぬ花曇り咲へき頃やきさらきの空

栽花

梢こそ中々見えね櫻花まやのあまりにちかくうへつゝ

尋花

あくかるゝ心のまゝにこえきつゝかへるさ遠きはなの山ふみ

初花

さきぬともよそのうはさはきかさりつひまある比の庭の初花

見花

かたとほり先やみ山の花のかけやすらははまた暮もこそすれ

翫花

あさおきの夕くれまてはめかれせす月にも又や花のしたふし

折花

くたり行山路の雲や里人の花おりかさしかへる成らん

夾花

嵐吹尾上の花も入あひも袖におちたるしかの山こえ

曉華

さてはや花成けりな山かつらかけもはなれぬしの〻めの空

朝花

花の色いあさゐる雲の立田山ゆふつけとりの聲にあけつ〻

夕花

問人はかへりすみぬる山里のはなに音なふ入あひのかれ

夜花

明は見む梢の櫻ちらすなよ春の一夜の床のやまかせ

山花

常よりも山のよそめや近からむ花にしらめるはるの明ほの

嶺花

あらし吹きそ山櫻ちりにけり峯にとたえの雲のかけはし

谷花

山かせに花のうは波かけこして櫻にしつむ谷のしははし

岡花

花見つ〻ことたりぬへき夕暮に月もむかひの岡のへの里

杜花

あまのすむなきさの森の櫻花さすかしほ木に殘しなきけり

野花

有とみし野中の櫻咲にけり山にもそはぬ雲そか〻れる

關花

逢坂や梢の花を吹たてて關にとまらぬ春の夕かせ

瀧花

布引やおちくる瀧のそれならてよそにちらすや花のしら波

禁中花

鳥の聲花のかほりもた〻ならす雲井の春の明ほのの空

社頭花

神垣は花咲にけりうれしとも今こそ御戸のあけほのの空

古寺花

初瀨山ひはらの嵐おちにけり花にたまらぬ入相のかれ

故鄕花

あはれたかもとの軒はの跡ならん櫻ふりぬる淺茅生のやと

里花

花さかはつけんといひし音信のほとふるさとのみよしのの奥

山家花

白雲のまきたつかたと人や見む軒はかすまぬ花のゆふはへ

庭花

さきおもる花の下枝のしつみきて散ぬも庭の苔の上葉

閑居花

今そしる竹のひとむらめくりつ〻おくある花の道のみえぬか

花雲

さそひたつる風の宿りそしられぬる松よりなひく花の薄くも

花雪

しはした〻風のかしたる程見えて松の葉うすき花の白ゆき

花枝

枝はみなえたにか〻りてさきなもり庭にうつまぬ花の白雪

花梢

梢こそ冬の木立に成にけれふかきは庭の花のしらゆき

花本

引わたす霞のうへの花さかりいつくかさても木かけ成らむ

花根

鳥はまたよそなる谷の櫻花ねにかへりても山かせそふく

花挿頭

はつせめのこれやかさしのおりのこしなよふ計は見えぬ花散

花手向

いくたひか心ならひの手向しつ花にはあかす神やおもふと

花廊

おしやけに神路のさくらおほぬさのとりあへす吹春の夕風

花袂

さほ姫の春の袂やかすむらんうす花そめの明ほののそら

花衣

木のもとの柴すり衣それなから花もみたるゝ山風そ吹

花鏡

歸るさやはや暮ぬらん櫻かり野守のかゝみ月そうつれる

花錦

しはしまた引とめて見るこま錦花成けりなあけほのゝ山

花匂

そことなくうきたる花の匂ひ哉櫻にたかき春の山かせ

花色

暮やらぬ遠山もとの花の色になくれてひゝく入相のかね

花使

筆は猶かきりありとや咲花のさかりなつくるつかひ成らん

花主

つくしと花に心なすます哉人こそとはれやとの夕くれ

花面影

面影そなうとみえぬ櫻花散はうかりし春の山風

花影見

たか植し花そとたにもいはれはやみて忍ふへき人はなくとも

惜花

これそとよ待し日數のつもりきて程なきにの庭の白雪

落花

さてはやみ山さくらはちりにけり花もかさゝて歸るさと人

殘花

今まてはまてはや風ものこしけめめくれる山のそはの櫻木

三月三日

さらは又三月の三日の月の影はやさしそへよ桃のさかつき

桃花

しはしたゝ此まゝ見はや夕日影なこり色あるもゝの花その

梨花

さてはや軒のつまなし散にけり雜の門なとちてみえつゝ

山田苗代

たれはまつこゝにやひたす小山田のたゝ一町の苗代の水

路苗代

あせなこす苗代水のほとみえて道のぬかりのかはく間もなし

河・苗代

三輪川の水せきかけて今や又ふるの山田の苗代のころ

夕蛙

蘆ふかきいりの堤の下水に聲うちそへてかはつなくなり

田蛙

雨かゝるあれ田のさゝめ末ふして水のあさみに蛙鳴なり

野菫

御馬草のかるてにもれしつほ菫今こそ野へに花咲にけれ

庭菫

野すちやる庭にうつして菫草秋待花のすさみにそみる

摘菫

露なから袖にすみれな摘いれて歸れはしたふのへの月影

松下躑躅

こゝろそあらぬつゝしは松の下紅葉しくれめきたる風渡る也

躑躅紅

あはれたかきぬかさ岡の岩躑躅それもあかもの色にみえつゝ

池杜若

ちらてたに花こそうかへかきつはたみさひなはらふ池の夕風

澤杜若

水よりも進にうへのかきつはたけにあさ澤のほとやみゆらん

欵冬露

影うかふ井手の河かせ吹にけりおちても水の山ふきの露

夕欵冬

やとりとりしはしも見はや夕暮のまかきは山の欵冬の花

路欵冬

行やらて花にしはしそせかれぬる川そひみちの山吹のころ

池欵冬

池水のひしのうき葉にとちられて影みぬ岸の山吹の花

河欵冬

はし姫のきぬの色なる山吹に波おりかくるうちの川かせ

嶋欵冬

咲にけり月のかつらの花ならて又河嶋のやまふきの比

岸欵冬

朝日山きしの山ふき咲にけり花の下行宇治のしは船

里欵冬

よしとはしさてもいはての里の名な花にみせたる山吹の比

庭欵冬

春なへて猶所せく成にけりうへし垣ねの山ふきの花

籬欵冬

さきおもる花もさまてにみたれぬは籬にかゝる庭の山吹

夕藤

さゝかきの夕はへふかき色そへてみとりのうへの春の藤なみ

岡藤

たちならふなかへの松のひまとちて梢にたむる藤のむらさき

池藤

せりなつむ袖かと見れは紫の藤さきかゝるはるの池水

江藤

しほのひく江河の末のそなれ松又こえて行春の藤波

浦藤

多枯の蜑のこれはかつかぬ藻屑かとそこにも藤の波や立らん

岸藤

杣川やおとす筏にかゝるなりうちはへさけるきしの岩ふち

松藤

岩代の松のたくひに見えぬへしむすひかけたる藤の花ふさ

春欲暮

花鳥の色音なせめて殘さなん春の日かすは限りありとも

暮春月

名殘をはいかにせよとて三月山かすみてかゝる有明のつき

暮春雲

物おもふわさなりけるよ春の行雲のはたての夕暮の空

暮春霞

さてはや霞のみ尾に舟出してかへるか春のすゑの白波

暮春鐘

あちきなくね覺もつくす心哉三月いまはのあかつきのかね

留春不留

何方にすてゝか春のくれはとりあやしやさても行衛とはゝや

惜三月盡

かひなしや心は春にそふとてもかへりみもせぬけふの別ち

三月盡夕

限りあらは秋の涙もかゝらめや春よいまはの夕暮のそて

三月盡夜

なれ〳〵て花の面かけ鳥の聲夢になせとや宵のうたゝね

閏三月盡

三月猶もとの日數のまゝならは今日まて殘る花もあらまし

夏百首

首　夏

谷の戸にかへりし鳥の聲とちて花の行衛の夏の山かせ

朝更衣

袖にこそ先かへてけれ夏きてもまた音にたてぬ蟬の羽衣

更衣惜春

今日の袖たちかふるとも花染も猶みそかけに影やとゝめん

餘　花

をそかりし限りも今は山櫻花なきころの花にむかひて

新　樹

なにとなく軒はにうへし若かへてまたかけあさき夏木立哉

路卯花

すみ燒しその比分し雪よりも卯花ふかきをのゝかよひち

籬卯花

まかきなる竹より下の花うつ木うつみし雪を見せて咲けり

田家卯花

おなしくは月をもやとせ卯花のその田にかゝる雪の下水

卯花似月

いりはてぬ月は影をや殘すらむ卯花山のあり明のそら

卯花似雪

玉川の里の垣ほの袖すりに雪こほれます卯花のころ

葵

をのつからかくるあふひや袖なから又うき草のかもの川なみ

待郭公

つれなさも限りやあらん郭公小雨のゆふへ月の明ほの

尋郭公

行衛なくしたひ來にけり時鳥花の所はさたかなりしを

人傳時鳥

時鳥それこそあらめ鳴つとはさたかになとかきかせさるらん

初聞郭公

せめてたゝひと聲まてと思ひしをいつはりになす郭公かな

時鳥未遍

きゝつはやそなたはいかに時鳥一むらさめのすゑの里人

月前時鳥

月見てもなくさみぬへきやすらひにそれさへきゝつ山郭公

雲外郭公

時鳥うす雲かけて行月のあと叉したふ一聲のそら

雨中郭公

軒をうつ雨のまきれの時鳥さそ忍ふ音も今もらすらん

曉郭公

横雲はわかるゝかたの郭公をのれそとまるやまのはの聲

曙郭公

かくてこそ聞ともきかめ郭公月は殘りてあけほのゝこゑ

朝郭公

もし人のあさいするとやおもらん〔マヽ〕しのひね〔にイ〕もらす時鳥哉

夕時鳥

出にけりゆふ山こしの郭公まだまたるへき月をのこして

夜郭公

もしやとてよひの手枕數かれてねぬに聞つる郭公かな

山郭公

夕雲の木ふかき嶺の時鳥一むら雨のふりいてゝなく

杜時鳥

月にほふけしきの森の郭公いかにつれなき音をもおしまし

岡郭公

うき身には人うとくとも時鳥なれたにせめてかたらひの岡

野郭公

いつくよりさても出らん郭公山にはとをきむさしのゝ原

原郭公

伊吹山さしも待つる時鳥あをのか原をやすくすきぬる

關郭公

鈴鹿路の關にとまらぬ郭公山田の杉に今夜鳴らし

浦郭公

郭公せとの入しほ落やみてをのれまかはぬあかつきの聲

渡郭公

村雨の今は山田の渡りして月にきゝつる時鳥かな

夢中郭公

夢とのみおもひやはてん時鳥あくる枕にこゑをきかすは

ね覺郭公

曉の目さまし草のねをそへて涙露けき郭公かな

獨聞郭公

忍ひ音を今宵そもらす郭公枕ならへぬ程やしるらん

郭公幽

くゐなかとおもふね覺の郭公それにさたまる一聲も哉

田家早苗

十代にもたらぬ庭田のさなへ哉ゆい〔ひイ〕のてまいる程たにもなし

急早苗

小山田のかたなるあせの一町もけふのこさしと早苗とるなり

早苗多

うちむれて千町のさなへとるならし此一村はすむ人もなし

池菖蒲

池水に一もとすてしあやめ草軒ふくほとにことしなりぬる

沼菖蒲

今は早かりてつかれんあやめ草ぬまのぬなはの先むすひつゝ

刈菖蒲

かりこむる雲の行衛を尋來てあやめに契る軒の月影

盧橘薫風

むかしとてとをくはゆかぬ夢なれや匂ひ(はイ)にさむる風の立花

雨中盧橘

雨をもき花たちはなの枝たれて匂ひにちかき軒の下ふし

簷(軒イ)橘

昔たかうへし軒はの朽木にて花たちはなにのこる夕かせ

樗

花の春紅葉の秋も何ならすあふちうちゝるもりの夕かせ

夜五月雨

さすか又月の夜比の五月雨の明ぬにしらむ軒のたま水

山五月雨

けふいくか猶五月雨のふるはたをなたれて埋む山のしゐ柴

杣五月雨

杣川のをのつからなる山くたし筏にならふさみたれの比

橋五月雨

五月雨は下ゆく舟もなかりけり橋まてをよふうちの河波

江五月雨

鷺のゐる江川におほふふし柳いまは波こすさみたれの頃

瀧五月雨

水上の日ころなかりし瀧津瀬(波イ)の今をちこちの五月雨の比

河五月雨

梓弓生田の川の瀬をはやみ鳥もうかはぬさみたれの頃

潤五月雨

まのゝ浦やまさる汀の五月雨に薄も今は波のした草

浦五月雨

海士のすむ磯邊に近く波越てしほひも見えぬ五月雨のころ

古宅五月雨

しのふ生る軒のいと水それなからみたれそへたる五月雨の頃

夜水雞

すゝむ夜の槇の戸口のあけとをしさてやたゝかぬ水雞成らん

夏　夜

月の名のかつらしけれる追風にせめてとすゝむ夕やみの空

雲間夏月

短夜の頃をやいそく夕雲にちかひて出る山のはの月

水上夏月

夏刈の草こそあらめ澤水に移れる月のみしか夜の空

樹陰夏月

ならの葉の今やかけゆくほとならん袖にしはしは夏のよの月

夏月涼

いく夜またゝ此まゝに明ぬらんやり水ちかき月のうたゝね

夏月易明

すゝむとてあたりの友をよひたてゝふりさけみれは月の曙

瞿麥露

たくひなやまかきにしのふ姫ゆりのそひふししたる床夏の露

夏瞿麥(にイ)

露のうへ・なひかぬ花もうつろひて苔に色つく庭の撫子

夏草露

花さかぬ夏野の草にむすひてやこと色からぬ露とみゆらん

社夏草

あはれたか花にかよひし跡ならんしけりをくるゝ森の下草

野夏草

さをしかのなかぬはかりそ夏ふかき薄をかやのをのゝ夕かせ

徑夏草

露ふかみ夏野の草のかたふきて分ぬにみゆる道の一すち

庭夏草

はなをそきそれこそあらめ月影をへたてゝ茂る軒の下草

夏山

これや見し櫻の山の青木立おもかけうとく茂りあひぬる

夏野

茂り行野への高かや青つゝらそれさへかゝる露の下道

照射

いつかたの草ふしならんともしにもよる程をそき嶺のさを鹿

鵜河

暮行はやかて見ゆるや上かつら前の瀬のほるかゝりなるらん

夜螢

ともし火のすき間にもゆる光かとみゆるや窓の螢成らん

橋螢

しはしまた河せのほたるとたえして橋の下行夕やみの空

水上螢

池の面にうかふ螢のほし月夜水くらからす更に見えつゝ

池螢

夕闇にことに螢のみたるゝは月に光やかゝるのいけ水

江螢

おほくらの入江の月の跡に又光殘してほたるとふなり

澤螢

月ははや松をへたつる深くさのふしみの澤に飛螢哉

浦螢

海士人の夜鹽くむ間もけちやらていそやのかたにもゆる螢火

草螢

をかや原薄にきえて飛ほたる又あらはるゝ道柴のうへ

螢似露

飛螢みたるゝ露もそれなから草のすゑ野に夕風そ吹

螢似玉

草の糸に玉ぬく露の數そへて螢もすかる野への夕闇

蚊遣火

をちかたや煙つゝかぬ蚊遣火にすくなき里のよそにみえつゝ

垣夕顏

なをさりの竹のあらかき末こして夕顏うつむ道のへのやと

池蓮

池水にもふしのふなやみたるらん蓮の浮はのゆるき立ぬる

氷室

いつれをかけふはそなへん松か崎うた野も近き氷室なれとも

夕立風

風さはく林の鳥もたちうかれあらくも過るゆふたちの空

夕立雲

玉水の音は殘りて夕立の跡すむ軒のむら雲の月

山夕立

夕立はや山しなのおく晴て音羽になひくうき雲の空

河夕立

ふりにけりきふれのおくの夕立に一のせまさるかもの川波

夕立易過

白雨の水まさ雲のはやすみて涼しくうかふ三日の月影

杜　蟬

鳴蟬の聲一しきり雨かけて雫はいつかもりの下かけ

樹陰蟬

川そひの汀の涙もうつせみの柳にかゝる夏のゆふかせ

松下泉

松陰やよりゐる岩に先ひえて清水はやかて結ふ共なし

夕納涼

山影やすゝみにきぬる瀧のもと花にもかゝる夕なりしを

樹陰納涼

日ころより朽木の柳かけあさみむすふし水そぬるく成ぬる

納涼忘夏

まとあけてはしゐすゝしき夕暮にこぬ秋うかふ松の下風

六月祓

ふけぬとてかはらに出ぬ里人やたゝこゝもとの御祓しつらん

秋二百首

立　秋 朝イ

さそふらん一葉も見えす朝またき木かけに遠き秋の初風

立秋天

秋はゝやけふたつ波の天の河ほしあひちかくなりにける哉

立秋日

朝戸明のめにさやかにも見えてけり日影にむかふ初秋の空

立秋風

荻に吹まくすにふれて今朝ははやいつしかなれや秋の初かせ

立秋露

いつしかとあさちかうへに結ひけり秋くるよひの露の手枕

初秋曉

なにとなくね覺の枕物さひし秋此比のはつ鳥のこゑ

初秋夕

秋よたゝ日數かされはいかならんいまたに涙ゆふくれの露

初秋夜

夕月夜それこそあらめ夢をたにさても見はてぬ初秋のそら

初秋雲

今はまたしくるゝまてはなけれ共秋のならひのうき雲の空

初秋衣

小夜衣かされもあへす吹にけりまたあきつはの袖の秋風

待七夕

一とせをくらすたにある棚機のいま此きはにこゝろつくすな

七夕雲

夕雲の立ゐにさこそいそくらめ契りしまゝの星合の空

七夕霧

しのひけり霧間をとほるよはひ星天の河原の夕暮の空

七夕橋

をた卷のくりかへし猶ちきれとやふみきの橋の星合の空

七夕衣

棚機の海士の羽衣引かされうらみもさこそまたはむつこと

七夕舟

さてもまたこそのわたりやこれならんうつろふ月の天の河舟

七夕後朝

なとさらにかちもかくさて徒然にけさかくすらん天の河舟

曉露

明ぬより手向にとりつ朝畠うね野のいもの露ものこらす

朝露

朝あけの月は空にそのこりける露のやとりも草に捨つゝ

夕露

見るまゝに夕日かくれのあさち原露になるかと末なもりつゝ

夜露

夜な〳〵に月こそかれす問てけれ人は分こぬよもきふの露

野露

あつま野の空には雲の晴ぬれと袖にしくろゝかやか下露

原露

月そまつ分行袖にみたれけるしのふかはらの露の秋かせ

徑露

あはれたかもすそにかけし跡ならん露かはきゆく道のさゝ原

故郷露

枕にも袖にも月のあひやとり軒はやあれて露のふるさと

庵露

雨そひし野分のゆくゑ猶見えて露所せき閭のへの庵

庭露

みたすへき草葉の風もなかりけり露のしらすい庭い月かけ

草露

中垣をこえたる萩のねわたりに一もと分るあきのしら露

淺茅露

明かたに行野の末や成ぬらんあさちか露に月のかゝれる

苫露

かたきしにあまれる露のさかり苫玉ゆらふくな山の下風

袖露

秋はたゝ露も涙もわかさりきおほえすそての雫なちつゝ

枕露

うちしほれいと露しけきね覺哉かならす草の枕ならねと

夕萩

夕しめり軒はの荻に吹風のみたるゝほとは音なかりけり

夜萩

風の音のふくれは庭にしつむ哉露にしかるゝ夜萩原

江萩

あしへよりこなたにみゆる萩原も鹽の入江に打なひきつゝ

庭萩

さのみよもしけくはうへし月のいるそなたの窓の萩の一むら

簷萩

軒ちかく見ても聞てもなくさむは梅の紅葉に荻の上かせ

野萩

なく露の朝ゆく鹿もみえぬへしもとあらに咲野への萩原

行路萩

あふ人の袖なる露の花すりに末野の萩の比そしらるゝ

河萩

散らすま萩みたる、立田川紅葉やまたぬ錦なるらむ

崎　萩

小舟こく野嶋か崎の海士人の袖にをよはぬ萩か花すり

庭　萩

宮城野の秋のさかりもかゝらめや小萩こほるゝ庭の夕かせ

女郎花露風

さても又たか秋風にをみなへし結ひもとめぬ露こほるらむ

野女郎花

をく露のはやおちにきや女郎花さか野の風にうちなひくなり

徑女郎花

衣々の面影みせて女郎花さゝ分る野の露に咲なり

岡　薄

片岡の岩もと薄ほに出てとふ人まねく秋かせそふく

原　薄

こゝまても又さゝ波のなよふかと尾花そ見ゆるあはつのゝ原

徑　薄

分とまる尾花か袖にうつる日のをちかたのへに秋風そふく

刈萱亂風

里人の所々にかるかやの殘るもすこきのへのゆふかせ

岡刈萱

岡のへの松の下かけはれにけり誰かるかやのあとのゆふかせ

庭刈萱

さひしやなたゝさはかりの風ふれて一ほ出たる庭のかるかや

岡蘭風

なをさりの花かとみれは藤はかまひと野に匂ふ秋かせそ吹

蘭　露

ぬれてたゝほすかとそみる藤はかま吹たつ風に露はこほれて

野　蘭

藤はかまそのゝつゝきに咲萩の花のよそめはいつれともなし

籬　槿

いかならん花の千種もよしやたゝ籬にかゝる露のあさかほ

曉　虫

草に猶あれぬと見えて有明のもらぬ軒はに鈴虫のこゑ

夕　虫

夕露のまかきの草に聞ゆなり月のやとりをまつ虫のこゑ

夜　虫

霜をかぬ軒の下草したひきてまかきにうとき夜半の虫の音

野　虫

小鷹狩それにはあらて鈴虫の聲ふりたつる野邊の草村

原　虫

草よりもそれにそうつむまゆみちるあたちの原の虫の聲々

徑　虫

分こほす露もさなから道もせの草にかけたるはたをりの聲

庵　虫

あはれなる草の庵のね覺哉雨そほふりて虫もなくなり

庭　虫

庭の面のよもき淺茅のそれにしも猶音をそへて虫の鳴也

閨　虫

身をこふるそのともし火の虫ならて枕のうへに聲そ聞ゆる

閑　虫

村雨のなひく草葉にうつもれてしはしはしつむ虫の聲哉

曉初鴈

有明の月もいなはの雲のうへにをちて亂るゝ初鴈の聲

夕初鴈

なにとなく木の葉色つく夕暮の空に時雨て鴈は來にけり

夜初鴈

山のはの月出る比の浮雲をこなたにみせて渡る鴈かれ

雲間初鴈

天津空をのか羽かせやはらふらん雲にわかるゝ初かりのこゑ

山初鴈

やかてはやそはの水田にうかふ也山のはこゆるかりの一つら

嶺初鴈

つくはねの峯飛越て來る鴈やこのもかのもの小田に落らん

遠初鴈

いまはまた渡る小鳥の程なれや遠よる鴈の夕暮のそら

近初鴈

守小田のね覺の枕夢たえて袖こす鴈のあけほのゝこゑ

初聞鴈

めつらしやけふは八月のたのもにやかならす鴈の渡り初らん

初鴈

聲きえて後こそしらめ夕暮の雲か鴈かの山のはのそら

朝鹿

野分せしそなたのなかや露とちて朝ゆく鹿の聲とまる也

夕鹿

月はまた夕の山を出やらてのへに先たつさをしかの聲

夜鹿

おなしくは月を涙にやとさはやしかの音かよふ秋の手まくら

山鹿

山かせのそれはとたえて椎柴やをさゝ分よるさをしかの聲

谷鹿

川波も鹿のなく音もさらにたゝみ山おろしの底にきゝつゝ

岡鹿

なをさりに誰か聞らん夕月夜むかひの岡のさをしかの聲

野鹿

有明の月のほそみちほの〴〵と小野より出る小男鹿の聲

原鹿

さをしかのつまとふよはのうす霧に月もこもれる春日のゝ原

海邊鹿

舟いたすいそ山もとの明ほのにをのれも鹿もかひよとそなく

田鹿

さひしさも哀も今はすゝみけりむろのかり田のさをしかの聲

野鶉

深草の野へもつゝきてをのつからうつらや床にふしみ成らん

江鶉

入江なるまのゝ浦舟こく袖と尾花をみてや鶉立らむ

里鶉

かり人のこなたや分る程ならん末野の里にうつらなくなり

曉鴫

鳥はなと八聲に數をさたむらんさは田の鴫は百羽かくなり

澤鴫

あはれなはたゝ夕暮とおもひしな鴫立澤の曉間の月

田鴫
水ほしてなしれ刈つる跡なれやそなたにやかて鴫のふすらん

秋田風
鹽風やこえて吹らん湊田のほなみ波よる秋の夕くれ

秋田露
露は袖月は枕になれにけり軒はみしかき小田のかり庵

秋雨
山もとのうすき夕日にもす鳴て梢にはるゝ秋のむらさめ

山霧
松ひはらさのみなかりし山なれやあらしはらはぬ峯の夕霧

野霧
わけてなたゝ一むらの夕霧や野中の森なこめて立らん

關霧
あれぬとも月やはもらぬ不破い關秋の夜霧は軒に立つゝ

河霧
水無瀨河ありても見えぬ波のうへに霧なそなかす秋の夕風

浦霧
和田のはら嶋かくれにはならねとも行舟見えぬなみの夕きり

駒迎（題）
けふはまた雲井の庭の引分に逢坂いそけ望月のこま

八月十五夜
わたつ海の最中にすめる我からや今宵の月のなにしあふらん

夕月
夕月影なた色とまるうす雲のこなたに出る三日月の空

夜月
さりみまたふけさりけりな月影は軒はな近ぬ秋の夜の空

曉月
つく〳〵とおほえすみつる月影におりうらめしきしは鳥の聲

山月
富士の根の雪より出る秋の月氷やくたく田子のうら波

峯月
月はゝやこなたの松にかゝる也かさなる山の嶺なつくして

谷月
嶺ひはらしけれる山の木の間よりおちてすくなき谷の戸の月

杣月
さひしさの限りなりけり杣山のこやさす月の有明の空

岡月
いつかたにあくかれ出る程ならん里しつかなるなかのへの月

杜月
月さゆる森の梢に聞ゆなり雫のしたなる夜からすの聲

野月
月はゝやいはたの小野にかたふきぬ山路の末や有明の空

原月
水音のいりのつゝみの秋風に月影なひくたのゝしのはら

關月
月影のすまの關路にあくかれて中々人やとまらさるらん

徑月
玉鉾の道の行てにむら立て人音すまぬ月の夜すから

橋月

水邊月

さゝ波やうち出のはまに月さえて一すし埶せたの長はし

池　月

名なとへはこれこそ月の都鳥角田川原の秋の夜の空

澤　月

山鳥のなさきの池の秋の月さてやかゝみなかけてすむらん

沼　月

かけははや伏見の澤にうつろひてなかるゝ月のうちの山かせ

江　月

所せき岩かき沼にやとりてもおなし空なる秋のよの月

瀧　月

月影のかたよりしてそやとりける汀にかゝる水のみさひ江

川　月

明かたに夜はなりにけり鳴瀨やにしの河瀨におつる月影

湊　月

月影や田上山な出ぬらむ氷なこえる宇治かはのなみ

湖　月

いり舟のいなの湊にうかふなり柴山出る秋の夜の月

浦　月

月はまたとなかに見ゆるよこの海の明ぬにしらむ波の上哉

濱　月

和田のはら八十の嶋はもみえてけり浪にくもらぬよはの月影

磯　月

下なれなきかぬはかりそ月影は松なのこさぬ雪のしらはま

引しほのあとそとみえてさゝ嶋のいそへにとまる夜半の月影

汀　月

早瀨川となかの波のたゝみきて汀にかゝる夜半の月かけ

崎　月

興津浪ゆらのみさきの霧晴て夜わたる月に秋風そ吹

嶋　月

松嶋や小嶋の海士のひまとへはいさりに出ぬ月の一ころ

潟　月

鳴海かたしほのうきすにとまる也月なためたる海士の捨舟

泊　月

松陰の遠あさかけてとまり舟月見むためと今そしらるゝ

渡　月

しかの浦や舟出やらぬやすらひに先さしむかふ月の影かな

田　月

今はたゝほなみそかけぬ刈てたに跡も水田の秋のよの月

都　月

しら川もかつらもいさや月影はいま中空のほとにすみつゝ

禁中月

なく露の猶それよりも萩の戸のあくれはうつる袖の月影

社頭月

住吉の松の秋かせ夜や寒き行あひの間に月もふけつゝ

古寺月

（名にしおふイ）昔おもふ橋寺はさもあらてかはらの松にあり明の月

古鄕月

月はかりすむそとおもふふるさとの萩よりおくに人音のして

村　月

月や見る餘所にやさてもあくかるゝ戸口かためぬ里の一村

里　月

花の比かならすそれは音信しよしのゝさとを月にとはゝや

山家月

よしさらは月はとへとや思ふらん柴のかた戸をたて殘しつゝ

庵　月

いまは又月見んためとしられけり軒はふきさす草のかりいほ

庭　月

月にたゝくまあらせしのためとてや草木もうへぬしらす成覽

井　月

月は猶そこにとまれといた井つゝ袖にもおなし影やとりけり

閨　月

雨の音のうかりし程はなかりけりあれてねやもる夜半の月影

隣　月

野分して皆中垣はふし柴の庭ひとつなる秋のよの月

閑居月

さらにたゝ月やとれとの住居哉むくらの垣ほよもきふの露

舟　月

松原のこなたに月やいり海の興まて出ぬあまのつりふね

惜　月

ふけまさる我よはなきて秋の月かたふく空を侘つゝそみる

夜擣衣

宵の間はあたりの友もよりきてや人をとしけく衣うつらん

里擣衣

生駒山月や出らん衣うつ戸口はなへて秋しのゝさと

聞擣衣

有明の月をしたひてうつ衣にしのつまにそ音の聞ゆる

遠擣衣

しつのめかときあらひきぬうつなれや川を隔て音の聞ゆる

近擣衣

こなたまて音とゝろきて床ちかくあなかま夜半の衣うつなり

秋夜長

をしかへし夢もね覺もしけゝれと猶のこりある有明の月

野　分

あらかりし野分の行衞月晴てなひきしまゝの軒の高かや

葛　風

吹かへす風のまゝにやむすふらんうらはにかゝるくすの夕露

徑　葛

こと草もみなとちませていとゝなを分こそかぬれのへの葛巻

牆　葛

月をさへかきほにいまはかけてけり露ほしはてぬ葛の秋風

野草欲枯

なにとなく尾花か袖も物さひし初霜かれのをのゝしの原

栽　菊

これも又山路よりこそうつし〔マヽ〕けり千代へん宿の白菊のはな

菊　露

うつろはぬ程そとみえて置露のをのか色なる庭の白菊

山　菊

散ちらすなかるゝ菊の下水に月ゝみますする秋の山人

谷　菊

たえ／＼にさゝれとめゆく谷川のうは波さはく菊の夕かせ

水邊菊

天津空うつれるかけも廣澤に星の數そふきしの白きく

暮紅葉

暮ぬとはさてもおほえす紅葉々の色てる山の入相のかね

初紅葉

露やまつ一しほそめのうす紅葉しくれもまたぬ秋の山本

蔦紅葉

太山ちや秋にさひたる梢哉つたの紅葉に槙のたちかれ

柞紅葉

はゝそ原うすきならひを忘れつゝ時雨にかこつ秋の山こえ

櫨紅葉

山かせの露ふきかくるほとたれやちらぬにはしの色そきえ行

山紅葉

立田山越つゝ跡も遠けれと霧におくある木々のもみち葉

嶺紅葉

暮るゝとやおもはさるらん日をのこす紅葉の影の峯の山人

谷紅葉

秋ふかき嶺の木立のうつろひて紅こゆる谷のかはなみ

岡紅葉

いかにして時雨分ける途ならん松にならひの岡の紅葉々

杜紅葉

生田川そなたは月に成ぬれと色くれはてぬ森の紅葉々

行路紅葉

分くたる山のかたその下紅葉おしても袖になれにける哉

瀧紅葉

紅葉はや中なるよとにうつるらんおちてもそむる瀧の白いと

河紅葉

柚河や紅葉の枝の谷わたり紅くゝる秋のいかたし

岸紅葉

立田川みむろの岸やうかふらん紅葉にしつむ有明の月

古寺紅葉

泊瀬山もみちに暮ぬ色なからさてしもきゝつ入相のかね

遠村紅葉

紅葉々の色うつもれて薄霧のそなたにけふる里の夕暮

里紅葉

そことなき霧の立枝の櫨紅葉誰里見えぬ秋の夕暮

牆紅葉

うちはへて蔦の紅葉のかこふ哉我とあれゆく庭の松かき

庭紅葉

村時雨そむるもあさき梢哉山路にとなき庭の紅葉々

簷紅葉

いとゝなをなしのふのすゑのしたる哉かゝれる軒の蔦の紅葉に

松間紅葉

村時雨ぬるてもはしも見えわかす松よりおくに色をこめつゝ

竹間紅葉

山もとのいさゝ村竹打なひきちらぬ紅葉に夕風そふく

紅葉帶雨

村時雨杉たつ山の下紅葉そめぬ梢も色をそへけり

紅葉映日

紅葉はもおなし日影の色見えて霧はれのほる遠の山もと

紅葉移水

さらに又つたはふまゝの色なれや垣ねなかるゝ庭のやり水

紅葉如錦

山姫のこれや錦のたちさしと紅葉うち散夕かせそふく

暮秋風

したはゝやかきほにはへる葛の葉のかへるか今は秋のゆふ風

暮秋雲

あちきなく有明の月も打時雨秋も今はのうき雲のそら

暮秋露

行秋の露のなさけもとめしとや草葉を風のほして吹らん

暮秋雨

空たにも一時雨そと見えつゝるに涙久しき秋の暮かた

暮秋霜

秋はゝや末野の月の霜くもり名殘もうすき明かたの空

九月盡夕

月の夜は紅葉のかけの餘波までかきあつめたる今日の暮かな

九月盡夜

さめてたゝ夢にもなして忘るやとはたまし物を秋の別ち

九月盡曉

秋も又限りなりけり衣々にしたひなれにししのゝめの空

冬百首

初冬曉

山風やまさの葉かつら打散てくる冬しるきしのゝめの空

初冬朝

むすひつる霜夜の夢の朝明に風音信て冬は來にけり

初時雨

今はゝや袖にふるやの初時雨さて玉水の音とまりけり

山時雨

そのまゝや夕の空に成ぬらん時雨てかへるみねのうき雲

嶺時雨

立のほる雲またかけて遠方や嶺に峯そふ時雨降たり

谷時雨

さゝれ行谷の水音それなからしくれてくたる山風そふく

杜時雨

村雲のうきたの森のみしめ繩暮ぬと見れは時雨降なり

關時雨

逢坂や時雨は杉の下露の又袖ぬらす關のやまかせ

野時雨

風ませのしくれになひく程なれやぬれて露なきのへのかや原

河時雨

山さきやむかひの雲の一むらは淀の河瀬に時雨來にけり

里時雨

めにかけて見まていそく一時雨跡こそ里にはや成にけれ

閨時雨

いつの間にさてしもねやの村時雨音はとまりて月の明ほの

曉落葉

さひしさは夕になれしまゝなれや木葉音なふ窓の明方

朝落葉

今朝さそふ程もしられて置霜のうへに紅葉を散す山風

夕落葉

山本のそれもあらしやさそふらん木葉につるゝ入あひのかね

落葉隨風

吹たてゝしつみもやらぬ落葉哉木の下めくる庭の夕風

落葉混雨

落葉たに聞侘つるをはては又時雨に成ぬ軒の木からし

山落葉

日影たにもらすとみえし太山路の落葉にはるゝ木枯のかせ

谷落葉

梢こそ今はうつられ山かせの落葉にうつむ谷の下みつ

路落葉

落葉かく程成けりな吹かせのひまにもそよく森の下道

橋落葉

山人の跡に嵐や送るらん木の葉みたるゝ谷のかけはし

庭落葉

一となりたむる木葉にしられけり垣ねやこえぬ嵐成らん

野霜

吹しほる程よりもなをものさひし風もゆるかぬのへの霜ゐて

田霜

霜かゝる山田のくろの村薄秋のほなみにまたかへりつゝ

庭霜

今は又霜こそうつめ昔にとちし落葉は軒の松の下かけ

草霜

駒たにもすさめぬ杜の下草ものこらす成ぬ霜枯の頃

篠霜

霜かれの草葉のほかのあさみとりなさゝかはらは風そよく也

谷寒草

冬かれの草こそあらめ谷かけの松の落葉の色たにもなし

岡寒草

さしもこそひまなく見えし葛垣の霜に荒たる岡のへのやと

野寒草

更にたゝあまるみとりの色もなしみな霜かれのをのゝしの原

原寒草

をく霜の朝の原の草枯にあとも行衛も道みえてけり

庭寒草

庭にまつあまれるかたは冬枯て風ひとへなる軒の下荻

池寒蘆

ひまもなく汀にめくる蘆原のかるれはみゆるこやの池水

江寒蘆

をく露の玉江にみえし蘆の葉も霜にそいまは結ひかへぬる

湊寒蘆

みなと田の一ほも今はのこらぬに霜をきみたす蘆の夕風

谷氷

水上の氷にとまるほとみえてさゝれに成ぬ谷川のすゑ

瀧氷

岩ほにやかゝりてこほる程ならんしたまて落ぬ瀧の白糸

湖氷

白波はこほるとみゆる濱松の梢にかゝるしかのうらかせ

田氷

下樋もる山田の氷とちあけて月さへ影そかさなりにける
懸樋氷
軒はもるかけひの朽めいまみえて所々にたるひゐにけり
冬寒月
野へは霜もりには雪をつもらせて更にくまなき冬枯の月
冬月冴
なへてみな木葉残らぬ冬枯に月もたまらぬ山風の聲
曉千鳥
あはちかたやゝ月影も明かたになるとの千とり聲渡る也
夜千鳥
みつ鹽に月のうきすの小夜千鳥しはしうかれて浦つたふなり
川千鳥
淀川や水の煙の明くれに立きえて鳴むら千鳥哉
浦千鳥
鳴海かた興の月影曇り來てしほひにちかく千鳥鳴なり
濱千鳥
おほとものみつの濱邊の夕千鳥松かせさへに聲添てけり
池水鳥
曇り來て空にはみつるあちむらのすむとしもなき廣澤のいけ
河水鳥
こゝは又よとそとみえて川舟たなしの一つれやゝくたるなり
夜網代
宇治川のゐくらにねふる網代守波のよるをやかさねきぬらん
網代寒
山風にまつふき落て宇治川や網代に氷る瀬々の白波

竹霰
葉なかはす竹のさ枝にゆりためてもろほとなそき玉霰哉
篠霰
時の間の眞砂のうへのを篠原風のためける霰成けり
柏霰
梢はや散しく庭のもとかしはうつすもちかき霰降なり
屋上霰
窓たゝく音はとまりて一しきり篠屋の霰風にちる也
寢覺霰
霰ふり荒つる空の行衛ともおほえぬ月のね覺とふらん
初雪
へたつらんかたをはしらす山のはの見ゆる限りは今朝の初雪
山雪
へたてこし遠山鳥の尾上まて雪にまちかき明ほのゝ空
嶺雪
こなたなる松よりうへに顯はれてつもらてつもるみねの白雪
谷雪
降雪の谷の柴扉跡たえて妻木はかりの道はありけり
杣雪
山人の嶺の杣木のとりのこし又かすそふる雪のしたをれ
杜雪
松ひはらそれもましらぬ柏木の森の梢そ雪にさひしき
野雪
千種さく野への面かけ露もなし雪ひといろの明ほのゝ空
關雪

なのつから關なは越てふる雪のふゝきしとまる不破の中山

河　雪

むら／＼につもると見るや白雪のふる川水の瀬たえ成らん

湖　雪

雪はまたあさつま舟にふりつまてかゐけにみゆる浦風そ吹

浦　雪

しほかまの煙なよはぬ松なれや風ははらはて雪のあさ明［曙イ］

濱　雪

これのみそうつゐふ色はなからまし雪の花さく菊のなかはま

嶋　雪

海士人のこれもしほ木に成ぬへしとな嶋松の雪のかさなれ

田　雪

鴫のゐし秋よりさひしかきたれてふるの田面の雪の朝あけ

都　雪

春のみと何おもひけん降雪の花の都のあけほのゝそら

禁中雪

九重のさくら橘更に又はなにまかへてふれるしら雪

社頭雪

いかにせん雪のふる日の宮めくりこれなは神の跡やなしまん

古寺雪

ふりおもる河原の松は見えわかて雪より出る入あひのかね

故郷雪

さゝ波やふるき宮木は埋れて又このころの雪のはなその

里　雪

雪よとて窓引あくる明ほのにとなりのさとも人音のして

閑居雪

夕からす音信て行それたにも聲うちむもる雪の山さと

松　雪

降むもる雪にややかてかゝるらん下おれとまる軒の松かえ

竹　雪

雪にみな垣ほの竹やふしぬらん軒あらはなる閫のへの里

杉　雪

ふる河の外なる杉の雪さけに又ふたもとゝなりてみゆらん

檜　雪

雪はまたつもり定めぬほとなれや峯の檜原にふゝく山風

狩場風

みかり野やはやひとよりとみえてけり毛花た散す雪の夕風

夕鷹狩

暮ぬとや友よひたてゝかへらまし鳥のおほえた野へに殘して

野鷹狩

けふは又遠見まてにはつれねはや山まてゆかぬ野へのかり人

炭竈煙

すみやきの市に出たる跡なれやたゝすかれたゐうす煙かな

遠炭竈

いかはかり山よりなくの炭かまの暮ぬにうすき煙なるらむ

爐　火

落葉にもくぬ木のかれ枝焼まぜてさてやほとある跡の埋火

神　樂

今はゝや神樂おもてのならふ夜庭火しろくともよほさせつゝ

佛　名

鐘もすみ夜明かたに成にけり三世の佛のかすとなへつゝ

年内早梅

いまはゝや春のへたてや程ちかき花になりゆく庭の梅かき

年欲暮

年もはやいまはの末のくたりやみ松火ふりたて人いそくなり

夜歳暮

いくたひかねさめてきけと里人のいとなみたえぬとしの暮哉

山歳暮

ゆつり葉やしたとりそへて行しつに山ちも年の暮は見えけり

路歳暮

年の暮さもいそかしとあふ人のたゝひと言に行わかれぬる

河歳暮

年もはや流にせまる河波のやすくそ春にたちかはらまし

歳暮松

さまく\の松つみなきて道のへや子日ににたるとしの暮哉

山家歳暮

是なれいとなみそとて山里のとしなつま木につみやそへまし

閑居歳暮

さはらすや年は越まし冬枯のむくらのかきのいたくあせつゝ

老後歳暮

いつかたにさても忍はん老らくにかされて春のいまも尋ねは

惜歳暮

一とせの名残よいかにはなの春おほろ月夜はめくりあふとも

戀二百首

寄天戀

空にすみ後に逢はん[illegible]らひのそれもいかてか世にはもりけん

寄日戀

山のはに入日の影ないそく哉くれはといひし契りはかりに

寄月戀

これさへに袖のわかれないかにせん月のそひての明かたの空

寄星戀

心なそしるへにきつる星月夜さてもくまある道のさゝはら

寄風戀

忘れてもさてありぬへき夕暮の心すゝむる軒の松かせ

寄雲戀

待なれし夕のまゝの浮雲にやかて涙のひとしくれして

寄煙戀

さてもそのしめしにほひの煙よりひとりのはいや空に立けん

寄霞戀

いとゝなな霞に成てへたて行あはれいもせの山のなもうし

寄霧戀

あちきなや人の契りのあさかへり行衛も霧に隔てはてつゝ

寄露戀

起わかれ出つるまゝのしのゝめのたもとになりぬ道芝の露

寄雨戀

いさとはゝたやのあまりの雨そゝき泣ぬれここそ情見えまし

寄霜戀

秋ふくる浅茅かすゑのはつ霜に契りのやかて枯ぬへき哉

寄霰戀

待侘る涙の玉の緒もとけて霰みたるゝゆふくれのそら

寄雪戀

それも又わすれぬつまと成ぬへしいとふかゝりし雪の通路

寄稲妻戀

玉ゆらの人の契りはさもあらていなつまかよふよひの手枕

寄暁戀

よそにのみおもひし物を横雲に袖の別のしのゝめの空

寄朝戀

衣々をゝくりてかへるそのまゝやあさと口には丸ねしつらん

寄晝戀

草のうへの露はひるまとみゆれ共袂そいたくしほれはてぬる

寄夕戀

人は又我音信を待やせん契りし暮とまつしらせはや

寄夜戀

恨侘れなまし物とおもへともまたさりけりと人やかこたむ

寄山戀

もろこしの吉野はしらすあら熊のすむなる山も我はをしれし〔そ乙〕

寄峯戀

うき人の袖ふる山の峯の雲猶面かけにたちて戀つゝ

寄谷戀

あさかりし世々の契りのすゑなれや同し瀬むすふ谷の下みつ

寄岡戀

風かよふ岡のやかたの眞葛原ねてのあさけにたれかへるらん

寄杣戀

うかりけるみほの杣木のいつ迄かかくふしなれぬ契ならまし

寄社戀

おなしくは思ふあたりにいてもせよとても浮名の森の言の葉

寄野戀

色かはる野もせの草の秋風にわか身ふけぬる契をそしる

寄原戀

分みたすしのふか原の夕露を袂にかけてきえかへりぬる

寄關戀

あちきなやとはんとのみはおもへとも我をなこその關の夕暮

寄徑戀

したへたゝ此世ならすときくそかし袖ふりかはす道の行衞も

寄橋戀

涙こそ猶ふる道にまよひぬれいたゝの橋のかけもはなれす

寄水戀

とはゝ人ともに月見むためなれやうき草はらふ庭の遣水

寄池戀

いかゝきくならひの池のをしの聲わかかたらはて明かたの空

寄沼戀

いかにして淺香の沼の草の名のそれしもつまにひかれきぬ覽

寄江戀

今は又いかなるえにかかゝるらん我身こかるゝ床のうら舟

寄瀧戀

泪こそ大井におつれとなせなる瀧も袂のうへをこえつゝ

寄河戀

いとけなきそのかたらひになくさみぬつらき行衞の中川の宿

寄淵戀

つれなくは身を沈めんとかこつよのそなたの月よな入その淵

寄瀬戀

しのふとも川ともなしに淀舟のたかかたにかは瀬をくたす覧

寄湊戀

うきねするいなの湊に思ふ哉さてもいくたのむかしかたりを

寄海戀

たのますよ人の心はおほうみのかた行舟の風にまかせて

寄浦戀

かた／＼の又おもひてと成やせし月こゝもとのすまの浦波

寄濱戀

かけていまおもひも出ようと濱の沖のかたほの夕くれの空

寄礒戀

つれなさはあまのしほ木のこりもせてはては恨のいその松風

寄汀戀

ふしつけしよとの汀の魚の名のこひする身とや人にいはれん

寄崎戀

忘るなよゆらのみさきを出舟のほのかたらひし波のうきねを

寄嶋戀

その名けにほふかほりに橘のこしまの涙のうちの川かせ

寄瀉戀

涙なを袖はひかたもなかりけりうらみに出るあまのつりふね

寄泊戀

同しくは人の手なれのからことの泊りに今宵うきねをやせん

寄渡戀

夜をふかみ淀のわたりをする舟やみつのゝ妹かきぬ／＼の空

寄岸戀

名におふる忘れにけりな住吉のきしもせぬよの獨ねをして

寄石戀

あた涙のかけつる跡のしつく石のたちろくけなき人も恨めし

寄沙戀

吹上やまさこにたてるまつよひもはや過ぬとて浦風の聲

寄巖戀

とことはに更にふかしてきくもうし岩ほに松のおふのうら風

寄田戀

思ひ出よともにふしみの月をみていなはにかゝる露も忘れす

寄都戀

さてもその尾花をかかりの契りしてうちの都に秋風そふく

寄禁中戀

とにかくに心のとまるつまなれや春の藤つほ秋の萩の戸

寄社頭戀

おなしくは人の心もかゝれかし風（よりイ）うちなひく御戸のゆふして

寄寺戀

人もいまとはゝとふへき比そかしいりあひきをふ軒の松風

寄里戀

明石よりうつろひきても月の名のかつらや人の住む處けん

寄庵戀

刈てふく軒はも今はさゝかにのいと戀しきといかてしらせん

寄門戀

あはれたかしつまるほとを待かねてかためぬ門に立忍ふらん

寄戸戀

寄墻戀
忍ひつゝ車なよするつま戸口しはしほそめよ人もこそみれ
寄籬戀
いかにせんかきほの葛はさてなきて人の心のいろのかはらは
寄庭戀
はなた見る籬の露のあさおきと人のあやめはこたへこそせめ
寄井戀
人や見む庭のおさちの一となり分てかへりし露の行衛な
寄屋戀
涙こそむすはぬさきの雫なれいた井の水のあさき契に
寄柱戀
うかれたつ人は音せぬ夕暮のまやのあまりに物そかなしき
寄簾戀
あはれとも見つらん物な槇はしらすき間にいりし人の言のは
寄窓戀
なさけなく人は軒はに秋ふけてしのふにかこつ夜半の月影
寄床戀
さりともとととらめぬ窓のそれもはや明かたに成しのゝめの空
寄閨戀
もしも来て袖なや人のしかすると枕もそへぬ床のさむしろ
寄隣戀
夢にたにやかて別と成にけりわひつゝねやの明かたの空
寄籬戀
きぬのなとの猶こそしのへ中垣の我かいまみや人のしるらん
つてにみしさてもすこしの面影の涙なさへにかけそふるかな
寄初草戀
いさや又むすひそめぬる初草の露の契の行末のそら
寄忍草戀
これさへにつらきつまにそおもはるゝ人な忍ふのうち亂つゝ
寄忘草戀
ことのはゝ又かきたえつ草の名のわすれやしつる夕暮のそら
寄思草戀
契らすよ月は入野のおもひ草尾花かもとに露かゝれとは
寄月草戀
歸るさのたか袂にかうつるらん袖に有明の月草のつゆ
寄下草戀
せめてその涙の行ゑ月もとへうかるゝ野への袖の下くさ
寄葵戀
引かへて又たかゝたにあふひ草その神かけていひし心に
たかへイ　言葉イ
寄菖蒲戀
後にしもかゝる契やなからましあやめのまくら月にかほりて
寄薦戀
ちきらすよあれ田のさはに刈こもの思ひ亂れて袖ぬらせとは
寄菅戀
いとゝなな人の心のますけ原露もあはれといふときかれは
寄葛戀
面かけはたゝ立そひて葛かきの人うらめしき夕くれの空
寄萱戀
つれもなき人の心のかゝれかしさもおれやすきかやか下風
寄淺茅戀

かけとめよ人の契のあさち原せめては露のなさけ也とも

寄蓬戀

さすか叉木立わすれぬ前わたり車なとむるよもきふの宿

寄芝戀

かゝらすは猶きぬ〳〵にうからまし月のしのゝめ道芝の露

寄苔戀

いとゝ叉涙まきれすみえぬへし袖になよはぬ苔の通ひち

寄蘋戀

いかにしてさそひも出んうき草のさこそは淺き瀬によとむ共

寄藻戀

なけくそよあまのかるものうち亂れたゝひとりねの床の浦風

寄沼繩戀

忘なよその江に生るねぬ繩のなかき世まてといひし契を

寄海松戀

いつまてかあはての浦にうきみるのみるめ計に袖ぬらさまし

寄松戀

せめてけにそれそなくさみおき別いなはの山の松はうけれと

寄椿戀

いくかへり八尾の椿さくまてにかはらぬ世にと契りおかはや

寄榊戀

乙女子か玉くしの葉のなひかしと祈らは神のそれやうけまし

寄杉戀

相坂の名をたのみてもいたつらに幾とし月か杉の下みち

寄檜戀

秋なやくひはらの山の紅葉々の我もこかるゝ色なみせはや

寄槇戀

今ははやこなたに人なおもひたて眞木の梢の夕雲の空

寄椎戀

なにゆへに涙の袖にたまるらんしゐなそひろふ山の下風

寄桂戀

人ゆへのその言の葉はちらはちれ月のかつらの夜半の秋風

寄檜戀

雨かもしときゝかけて檜の葉の人は音せぬ夕暮の空

寄柏戀

袖はたゝさしもしくるゝ夕暮に栗もおちぬならのはかしは

寄桐戀

あちきなや桐の一葉のおちそめて人の秋こそやかて見えけれ

寄柞戀

いかさまにいはたのをのゝはゝそ原あさき色には人の見ゐ哉

寄櫨戀

もすのゐし行衛もつゝきはし紅葉あとかたもなき秋風を吹

寄楸戀

いもかりとゆくてのひさきうち散て河かせ寒み夜は更にけり

寄常磐木戀

色かへぬときはの杜とおもへともうき身契りの秋に見えけり

寄柚木戀

いつかたに心ひくらん月影のいつみの柚木ふしもとなさす

寄宿木戀

有明の月は梢にやとりきのあらぬくさそふかけもうらめし

寄朽木戀

鹽木つむあまの小舟のなにとたゞかれてこがるゝ心なるらん

寄朽木戀

うき契さてもくち木のたくひかなその言のはの行衛たにみす

寄埋木戀

うき人よ身は埋木のくすをれて思ふとたにもいかてしらせむ

寄鶯戀

さてもうき誰心にかならふらん花にうつろふうくひすの聲

寄雉戀

我も又涙にかへる衣々のあさのゝきゝすねをや鳴らん

寄郭公戀

思ひ出よともにねぬ夜の手枕に山ほとゝきすかたらひてゆく

寄水雞戀

これまてもふかしけるよと今更に我心さへくゐなゝくなり

寄鴈戀

人はたゞ音信たにもかきたえて空飛鴈の夕くれの聲

寄鶉戀

尾花しくまのゝ濱風秋ふけてとはれぬ床や鶉鳴らむ

寄鴫戀

鴫のたつ荒田の澤の忘れ水誰かためにかは袖のぬるらん

寄鵙戀

聞もうし人の心の秋されはもす啼おつる山のしたみち

寄鳩戀

身をしほり物おもへとのわさなれや鳩ふく秋の夕暮の空

寄千鳥戀

明かたになるやかなしき手枕をかにすゝ千鳥音信てゆく

寄鳰戀

かた淵のにほのうきすのそれよりも人の心や下かよふらん

寄鴛戀

今は又名殘を鴛の聲すなりたかわかれちの床の山川

寄鴨戀

なかれても末にたつ名をいかにせんはやせにうかふ鴨の川波

寄鵜戀

しるや人鵜舟の手繩くゝる夜を待ほとをそき思ひ有とは

寄鷺戀

とをさかる名殘も見はや鷺のたつむつた河原の夕くれの空

寄鵲戀

うき契身をしる雨も降ぬへし曇夜月のかさゝきの聲

寄鷹戀

つれもなき人こそあらめなとてかく木居とる鷹の渡りかぬ覧

寄山鳥戀

さすかはや恨も今は山鳥のをのつからにやおもひしるらん

寄雞戀

別ちの鐘をはいかゝ空ねそとゆふつけとりはまきらはすとも

寄鶴戀

身を秋のさもしき忍ふ蓮田に人のかさねぬ鶴の毛ころも

寄熊戀

人すまはかよはん物をうつほ木のたつきもしらぬ熊はあり共

寄虎戀

くるしさはそれも戀路になよはめや虎かふる山の夕暮の空

寄馬戀

かゝる名にさも立ぬへし駒とむるうちの渡りの忍ひかよひは

寄猪戀

うき契り我もねられすかるもかくゐなのさゝ原風そよきつゝ

寄鹿戀

とはゝやな誰きぬ〳〵にならふそとさゝ分る野のさを鹿の聲

寄蝶戀

花にのみうつろてふ名のあらはれてしのふにかゝる夕暮の空

寄蛙戀

物おもふやとのやり水せきとめてかはつも聲をすます夕暮

寄螢戀

しのふ中月出ぬまと人とへはそれもうかれてほたるとふなり

寄蛬戀

ゆか近くなれこそなるれきり〳〵す人にはうとき夜寒なれ共

寄松虫戀

聞侘ぬつらき契のかきくれて軒はしくるゝ松むしのこゑ

寄鈴虫戀

あらかりし野分のませもみたれつゝ露かふ庭の鈴虫の聲

寄織促戀

くりかへし物おもふ身に聞もうし誰かたた巻のはたなりの聲

寄蛛戀

かことにもつけたる文は見えもせて荻ひき結ふさゝかにの糸

寄繭戀

袖おほふね亂れ髪の繭こもりおやのかふこのたくひならねと

寄我捕戀

われからそ人の心のうなはらやもにすむ虫のたくひならねと

寄玉戀

海人の行にひろふたま〳〵によるもとまらてかへる浪かな

寄鏡戀

我にうき人の契の朝かゝみ涙なからそなしのこひつる

寄匣戀

たか方にふたとりちかへ玉くしけあふこともなき身とは成剱

寄櫛戀

さしくしの暁かたになるかとよあはれわかれの名殘かなしも

寄鬘戀

たらちをのおやめきなから玉鬘かけはなれてや思はさりけん

寄本結戀

うき名又をちふれやせんもと結のすへり心はきぬ（すにとイ）にたまらす

寄枕戀

しろといふ枕にさらはかこつけて今宵は人の袖をしかはや

寄筵戀

逢と見る夢のそひねのさむしろにさもところある床のうへ哉

寄衾戀

此まゝの夢をも見はやさよ衾なこやか下に[illegible]かはして

寄裳戀

暫しまた人のもすそをひかへてもたゝ一言をいかてきこえん

寄衣戀

やかてまたそれとみせしとをしこめてきかへ衣の[illegible]のそら

寄紐戀

さしもこそ心を人にいれひものいはせしかひもなき契り哉

寄帶戀

あちきなやこれはいもゐと云なして解んともせすよはの下帯

寄書戀

引かへしそれまて見よとはしかきに言葉をつくすも人の玉章

寄繪戀

かた〳〵にとり合せたる繪なみてもすまのうらみや猶殘る覽

寄硯戀

人心これやうき世のさか石の筆もすみなもつくしはてつゝ

寄筆戀

いくたびかさてもかきやる水茎の哀とたにもいふ人のなき

寄笛戀

これぞとよたとへは今はこま笛のこちよる音さへ明かたの空

寄箏戀

ものゝ音をつくすむ月のしらへとも猶其ことやもりて聞えし

寄弓戀

いつまてか人に心なつき弓のゆるふかたなき物おもはまし

寄箭戀

あつさ弓はや波かゝる生田川その瀬のとりのたつ空やなき

寄扇戀

とりかへしさてもさくらの三重かされいとゝ心や移りはて劔

寄簑戀

おき別出つるかたの一夜つま涙か雨かみのゝなかやま

寄笠戀

忘れめやいまこそ三輪の市め笠たゝなをさりの姿なれ共

寄糸戀

あさ衣たゝときすつる糸くつの心みしかく待そ侘ぬる

寄錦戀

唐錦一むら山の紅葉々に秋の袂は涙しくれて

寄挿頭戀

さしかさし紅葉も菊も折からのたゝえならすや心とめけん

寄手向戀

宮ゐするいつくにあれと契なやむすふの神に手向しつらん

寄被廉戀

さていかに人の心はおほぬさのひきもとめえぬ別ちのそら

寄木綿戀

風吹は御戸のゆふしてうちそよきなひくな人の心とも哉

寄四手戀

逢事なさのみきゝけんやしろかと所せきまて四手かけてけり

寄注連戀

くすかゝる田中の杜の御注連繩さてたか秋の行ゑなるらん

寄車戀

心なやしはしとおもふ戀々に車なよせて人そ一なとなふ

寄舟戀

手枕にむすひもはてす初尾花袖の別のまゝのうらふれ

寄機戀

さらに又まかちしけぬきひまもなし誰松嶋の奥津舟人

寄帆戀

嶋隱れはるかの奥にゆく舟のほかけなたにも見せしとや思ふ

寄碇戀

碇おろす奥のとまりなしりもせてさそ松かけの涙のうかれめ

寄篷戀

寄網戀

秋ふくる蘆屋の濱にうきねして笘もる月も袖ぬらしけり

寄網戀

いさなとるあみの浦人涙さへめにもたまらぬ夕暮の空

寄泛戀

根つゝ(わひイ)おもふかきり(こゝろイ)や石見かたうけひく海士のうけひかす共

寄筏戀

あさ瀬なみ猶こしかれて此暮も杉の筏のさはりきぬらん

寄篝火戀

人心うふれの篝いまは又ほのめかしつるかひやなからん

寄綱戀

人よたゝあらたつ駒にさす綱のひかれはすると心ゆるさし

寄繩戀

いつ迄か海士のたくく繩なからへてたえしとはかり猶藻はまし

寄瀸蘆戀

しるや人難波のみつのみほ盡ぬれてほす間もなき名立とは

寄貝戀

しゝみとる堅田の浦の海士人よこまかにいはゝかひそ有へき

寄斧戀

うかりけるつま木のをのゝ音絶てこりはてにきや夕暮のそら

寄答蓋戀

わかなつみ根せりないれし後も又人のかたみそ身に成にける

寄燈戀

見せはやな袖口いたく燒しめて人まちふくるともし火のかけ

寄鐘戀

入相もれよとの鐘も聞すみていまは心をつくすはかりそ

雜二百首

山榊

神かきの外とは見えす三笠山みなさかきはをさしてみえつゝ

嶺椿

久しさもたゝあひおひにみえてけり椿にならふ峯の松かえ

澗槇

雲晴るゝ峯もさなからうつり來て槇の數そふ谷の下水

麓柴

たもとにやおつる嵐をうけぬらんかるてそよかぬ山の下しは

杣檜

とりつくすあなたの杣の程みえて檜原くもらぬ嶺の明ほの

杜柏

下草の露やさまてになかるらん雨うけなかす森のかしは木

岡椎

月殘るむかひの岡の椎のはに山風しらむ明かたのそら

濱楸

波やまたなよはさるらん濱ひさき久しく苫の色もかはらす

磯松

海士の子のうらを戸口の出入のいそやにちかき松のねあかり

門杉

なのつから前なる杉を門にしてかきほはめくる山のそはいほ

窓竹

荻の葉にいくほとならす見えてけり窓にならへるいさゝ村竹

籬草

野へよりも花のかすこそ猶見ゆれまかきの草はかる人もなし

庭　苔

草ふかく野と成庭はせめてたゝ苔にや道の猶殘るらん

簷忍草

つたひゆく玉水とたく成にけりしのふにかゝる軒の村雨

岸忘草

住吉やこその床夏それなから岸のゝ草のはなも忘す

野　篠

露分て先立人やなかるらむ月こそのこれ野への篠原

路　芝

小車のわたちはかりやいまも又うち野のしはのしけらさる覽

沼　葦

あしつゝのひとへ計に刈なしてひまこそみゆれぬまの月影

江　菅

夕しほの入江にしける眞菅原からぬに見えぬ波やかへらん

河　藻

ゐくゐうつ河瀨の水のなかれ藻のかけとめてけり夜はの月影

名所山

雲や今うつまさるらんかひかれのさやかに見ゆる明ほのゝ空

名所嶺

くれゆけと猶あらはれて風こしの峯なや雲のうつまさるらん

名所岡

里人の往來の岡の小篠原風もいくたひわけて吹らむ

名所杣

斧の音の聞ゆるまてもなかりけりいまや朽木の杣となるらむ

名所杜

下葉ちる生田のもりの秋風にさゝたおとこの行衞とはゝや

名所野

旅衣夕風立ぬあつま野のそてにしくるゝかやゝか下つゆ

名所原

高嶋のかちのゝはらに行暮てやとりとるへき方たにもなし

名所關

伊勢路にと又いそきけり旅人のふはの關より行分れぬる

名所路

是やまたせたにもかゝる道ならむいまうち出の濱のうきなみ

名所橋

猶ぬれぬ雨もこほれてふる路のいたゝの橋の夕くれの空

名所池

こすけかる跡そと見えて汀まて月になり行まのゝ池みつ

名所澤

松陰のふしみの澤やうき草にあらぬみとりの色なみすらん

名所沼

下水のあさゝは沼は名のみしてひしのはしつむ雨そかゝれる

名所瀧

岩にかけ河せに音やあまるらむ雨さへそひてふるの瀧なみ

名所河

鳥の名なとはてもとまる心哉すみた河原の月の暮かた

名所湊

さゝ波の山のあらしなたひてにてしかのみなとな出る舟人

名所海

興津風吹ぬと見えていせの海や波は梢のあのゝ松はら

名所湖

山風はなよはぬかたのさゝ波に木の葉の浦の名をちらすらん

名所浦

松原の今やかけ行程ならんかたほはかりをみほの浦ふれ

名所濱

よせかへる高師の濱の松風に聲をあらそふ興津白波

名所磯

薄墨のゑしまか磯もくれにけりなるとのかたや夜舟ならまし

名所汀

こゝは又みきはの浪や早からむまつゝなてこすよとの河舟

名所崎

あたらしや花鶯のころならて霞の崎の明ほのゝそら

名所嶋

もしほくむ程かと見えてしはし又あみをはひかておくの嶋人

名所瀉

あはちかたせとの入しほおちすみてかもめいさよふ曉の空

名所泊

今やまたしほのとゝゐの松かけにならふうきねのとこの浦舟

名所渡

おほ嶋のなるとを過る程なれや夜舟にちかき松風の聲

名所田

さかこえてそのめかゝりも程となしあへの田面の明ほのゝ空

名所里

玉嶋の里のあるしやそれならんあゆつる岸の夕暮のそら

名所市

けふ暮ぬあすかの市にいそけ人うきをはかふる事のありやと

羇中山

いそきてもこゝまて木曾の坂口のおくは五百重の雲の遠方

羇中嶺

さらに猶かさなる峯と見えつるや今分すくる跡のうき雲

羇中野

とまるへきすへ野の里の夕煙めにかけてたにはるか成けり

羇中原

山はまたこえぬ友さへ隔てけり道のすへなる野への松はら

羇中關

とめすともやすらひぬへし旅人のみな行なやむあしからの關

羇中道

鳴海かたしほのひかたのすく道にみな打むれて人いそくなり

羇中橋

分てその苔のむすともよもみえし草ふみ渡るさのゝ舟はし

羇中川

あつま路や心をかけて渡る哉波の花よる關のふし川

羇中湊

月はまたをそかりぬへし松たてるかけの湊の夕やみのそら

羇中海

難波なるあまの浮ねもいかならんかせかし今宵こやのかた橋

羇中湖

草津より濱に出たるかたなれやはやめにかゝるしかのうら波

羇中浦

心こそ猶ひかれぬれ朝ほらけゆく舟みゆるしほつすかうら
　羇中濱
さきたつもなくろゝ友も見えてけり又かけもなきこしの白濱
　羇中磯
清みかた磯うつ浪も聲そへてはるかになくるいりあひのかね
　羇中汀
行すみて又友もなき夕暮の汀につるゝ川なみのこゑ
　羇中嶋
あまた友あれともさひし雨かゝるたみのゝ嶋の夕くれ空〔マヽ〕
　羇中瀉
月殘るしほひの跡のあさかゝた見せはや人にかゝるなかめを
　羇中泊
此暮は同しとまりに入舟のゆらのとなみにこきならへつゝ
　羇中渡
しはしたゝなくろゝ人を待ほとゝいたしもやらぬ淀の舟さし（またイ）
　羇中里
山よりはこなたと見てもまた遠しとまらん里の夕暮の空
　山家春
燒すつる眞柴の後も山里のそらのすゝけやかすみ成らん
　山家夏
夏そかしとてもすゝまん柴垣をなに夕風のひまはありとも
　山家秋
山里のかゝるすまゐを人もとへかきほはつたに軒の紅葉は
　山家冬
柴の戶はいとゝ落葉に猶あれてあらし立いる山陰の庵
　山家曉
鳥の聲かれにもうとき山陰のねさめはなにのおとそかすらん
　山家朝
朝手あらふそれにそかけのならひぬる我獨ゐの柴の戶のうち
　山家夕
薪とる程こそ友よ里人をかへしてとまるいほのゆふくれ
　山家夜
月のため松かけよりははなれ庵うときあらしや夢むすふらん
　山家風
軒はなる松よりあまる山風のやかてをさゝかうへになりぬる
　山家雲
雨しはる音なをさひし夕暮の雲にしくるゝ軒の山かせ
　山家煙
かすかなる煙をみてもおもひやれあまたはすまぬ庵成けり
　山家雨
山陰やいまなら柴の音もなし雨ふりしめる夕暮のには
　山家路
とふ人のおもひよらしと柴の庵うしろの山に道つけてけり
　山家水
水むすふたよりやとなき谷こしの軒に筧をかけてみえつゝ
　山家庵
なのつからめくれるかやをたてをきてかきほと賴む山の下庵
　山家草
さひしさや軒の下草うらなひき松ほと風の音はなけれと
　山家苔

是や又久しくすめる庵ならん苔こそ庭に道をなしぬれ

山家木

心ありてたれすむならん大かたの岩木のほかの庭のうへまつ

山家鳥

雨の日のうちむもれてそ聞えぬるいほより下の谷の鳥の音

山家虫

月をそき山下庵のかやかきのほのめきあかす蛬かな

田家春

暮ふかき門田の面の苗代に霞のみをゝまつ引てけり

田家夏

かり庵のあれにし跡に夏ふかみ田中の清水又むすふ也

田家秋

さひしさをとりあつめたるねさめ哉暁のはねかき鹿の遠聲

田家冬

小山田のひたのかけ縄引絶て殘るひつちはもる人もなし

田家風

雨かゝる山田の庵のこもすたれ吹まく風のをもけなる哉

田家雲

なへてはや岡田のいなは刈てけり枕の月のうすくものそら

田家煙

あせかよふ道もそなたのほそ煙おき田の庵の夕くれの空

田家雨

降雨のすこかいなやの夜もすからもりぬしほりぬれん方もなし

田家鳥

いほりさすをちの田面のすへ晴て山本わたる秋のむら鳥

田家虫

いなむしろ露まとろます聞ゆなり野田のつゝみの松虫の聲

春夜夢

梅かほり月かすむ夜の手枕にいかなる夢のしゐてみゆらん

夏夜夢

すゝむとてたゝうたゝねのまとなれや水音なから夢そ別るゝ

秋夜夢

月にはやふかしけるこそしられぬれこよひは夢の明かたの空

冬夜夢

川音も氷にとまる冬の夜の夢をさへこそむすひそへぬれ

曉夢

鳥のこゑ枕のかねにさはかれてみえつる夢そいやはかなゝる

短夢

やかて見えやかてさむるに思ひねも少なき夢の程そしらるゝ

夢驚

かきこしのあなたの人の夢かたり我もねさめにやかて成ぬる

山眺望

いつかたにさて横雲はわかつらん松のみ殘るあけほのゝやま

野眺望

夕日影あさちか原にやゝ消て遠方人の野路の行すゑ

海眺望

雲のなみ八重たつ方のおくの海も今あらはるゝあさなきの空

雨中懷舊

物そおもふひろはぬ軒の玉水の雫にあかす雨の夜すから

深夜懷舊

過きつるたゝそのかたを思ふにもあかつきまたぬ寢覺成けり

庵懷舊

引むすふ草の庵もふることのたゝしのはしきつまとなりけり

閑居懷舊

つく／＼と獨おきゐる窓の中にあはれ昔のさしむかひぬる

夢中懷舊

おほえすも枕にたまる涙かなむかしを見する夢の行衛に

寢覺懷舊

あはれなる我寢覺かないにしへのおほゆる程をとふ人もなし

懷舊涙

いかにせん袖の涙のかたおちにふるきあとそといふ人もなし

獨懷舊

かた／＼におもひ出るもかなしきは心ひとつのむかし成けり

老後懷舊

過きつるかたゝにいまは一むかし猶そのかみの事なきかはや

懷舊非一

今はたゝ心にかけて聞はかりすまの浦なみ八はしのあと

寄日述懷

曇りなき御代そと更に仰く身にやふしをわかぬ日影もらすな

寄月述懷

さらに今めてこしかたを舊くは我身ふけぬる夜はの月影

寄星述懷

せめてよし月待ほとの賴み哉空にはれたる夕つゝのかけ

寄風述懷

君もしれ家の風をはふかせても猶徐ことの身に殘るとは

寄雲述懷

いつかけに心はれてもおもはましたゝかきみたす浮くもの空

寄煙述懷

いかにせんをのゝ山柴ことたらて猶たてかぬる宿の煙を

寄露述懷

きえぬ世に光あり共おもはゝや我道芝の露のことのは

寄雨述懷

數ならぬ身をしる雨のうちそゝき人をうらみぬ袖そしほるゝ

寄霜述懷

ことの葉の猶色そへて礼霜のふるきあとをも（はイ）いかてみえまし

寄雪述懷

おもひ出の心にとまるかすなれやうす雪降て明ほのゝ空

寄山述懷

あらましは杉たつ山のかけの庵たれかはさてもすみなれに劔

寄關述懷

なに事も心とめしとおもへともすゝかの關のふりもすてえす

寄道述懷

ともすれは道の便にまよひつゝすくにはゆかぬ事なしそ思ふ

寄橋述懷

おもふ事つゐには末やとならましはしとたえの橋にあり共

寄沼述懷

ひき／＼の沼のあやめは見ゆれ共いかてみくりの猶殘るらん

寄江述懷

思ふ事しるしもあらは深き江の身をつくしてはさのみ歎かし

寄河述懷

おほけなき身のゝそみにもあらしかしいつか結はん細河の水

寄瀬述懐

みたらしやその瀬の波にいくたひか憂身かはらぬ御秡しつ覧

寄海述懐

ひかれはと思ふ計のたのみ哉しほせにかゝる海士のうけなは

寄浦述懐

いかにせんおなし苫屋の月たにも我身に曇る鹽かまの浦

伊　勢

更に今岩戸のむかし思ひいつや神路の山の明ほのゝ空

石清水

濁りなき世にかくしこそいはし水たえぬなかれの今か今まて

賀　茂

河原をは唯はや過よいもゐにはそれをそ結ふかものみたらし

松　尾

爰かとよあけの玉かきほの見えて一むら曇る松の尾のみや

平　野

難波津の風の音をや殘すらんひらのゝ松にうち時雨つゝ

稻　荷

山人のいまうちむれて歸り坂その初むまのおもひ出つゝ

春　日

おもふ事いまはやさらはみつや河なかれをしらは春日野の神

布　留

あけは又みとりになりぬいくとせを布留の神垣苔のむしつゝ

大原野

神かきそあらはにみゆる大原野をしほの小松たけもしられて

住　吉

わきて猶あふきやせまし敷嶋の道まもるてふ住吉の神

日　吉

日よしとてさもたのみこし跡そかし哀をかけよしかのうら波

梅　宮

名もしるしなみ木の梅の宮居して所々にましろ榊葉

吉　田

程ちかき吉田の宮のかくら岡さて松風の聲しほりけり

祇　園

山よりもこなたにとまるからす羽に神のそのふは早暮にけり

北　野

神や又まもるしるしの杉間とて北野の森にまつあふくらん

貴布禰

鞍馬より又山こえの貴船河玉ちる計おちたきりつゝ

出　雲

つまこめしその八重垣の名をとへはいつもの宮の夕暮の空

三　輪

やまとちやその名もしるき神垣の杉も老木の三輪さすらん

玉津嶋

神もさて心とめけり玉津嶋入江の月の明かたのそら

熊　野

おちたきり岩うつ瀧のなちこもりさても心は猶やすむらん

如是相

あともなきたゝうき雲のそのまゝに綠の空そあらはれにける

如是性

風わたる池のうき草とたえしてすみける物を夜半の月影

如是躰

これはさはきえし霞の行衛かはやかて卯月の光りをそみる

如是力

岸なたれ岩にもたるゝふし松のこれより後は風さはく（しほるイ）とも

如是作

水こえし河そひを田のかたあらしをこせやさらは末を頼みに

如是因

苗代のあせぬりたてゝまくほ（種イ）とに早苗とるへき頃もみえけり

如是縁

はしらかす與津舟人今はゝや風をしるへの江にやよるらん

如是果

秋ふかみ落る木かけの柴栗のこのみをしほる山風そふく

如是報

此世にて人の心にかなはゝやむくひあれはそあまり物うき

如是本末究竟等

草の原葉のほる露をやかて又雫に見せて月をちにけり

大日

あまつたふ光の及ふ草も木もおのかさま〳〵あらはれにけり

阿彌陀

是も又花のうてなのためとてやまつあつけをく十聲成らん

釋迦

世にちらすわしの高ねの御法こそ木のはにうつす行衛也けれ

聖觀音

すくへかしはちすの糸に引結ひよしかはさきのそこゐなり共

千手觀音

數の手に露の惠をそゝかすはなにをかさてもくゐのやちたひ

馬頭觀音

頼むそよひまゆく駒のをこたりもその玉の緒に引やむすふ（とむるイ）と

十一面觀音

あらましくひはらからたち吹かせに露うちそゝく小初瀬の山

准泥觀音

たのめ人その名もしるく聞ゆ也花の外なる入相のかね

如意輪觀音

色々のあまの羽衣引かされ心まかせのひかりをそみる

二乘

一かさり花にふゝきし山風の聲をうつして木のは散也

寄天祝

あふくへし行かふ雲もみたれなくおさまる御代の久方の空

寄日祝

天の原いくめくりとも限りなき日影や君かためし成らん

寄月祝

いさゝらは君か御かけにくらへ見む空にかはらぬ月のゆく末

寄星祝

曇りなく空にみちたる光哉星のはやしの夕闇の空

寄雨祝

苗代や又水無月のてる頃もおもふはかりの雨くたるなり

寄風祝

花もみちのとかに御代のしるし哉枝吹風の音も聞えす

寄國祝

御調物のほろよほろのいさむにも國ゆたかなる程やみゆらん

寄郡祝

ふるはたものこらすうちの郡より昔にかへる御代そしらるゝ

寄都祝

長閑なる月の都のすまゐとて道のよこふえうたふ聲々

寄道祝

敷嶋の道のことわさしけきにも長閑なる代の程はみえけり

寄水祝

池よりもしたなる小田の千町にもことたる水をまかせつる哉

寄巖祝

さゝれ石のなれる巖のそれよりも猶うこきなき御代にも有哉

寄苔祝

苔むしろ敷て久しき跡ふりぬ碁をみしこれや山ち成らん

寄竹祝

とはゝやなこゝらの竹の林にもいかにかしこき人の住らむ

寄松祝

萬代に千世又そへて龜の尾の山松かえはならふなりけり

寄椿祝

あつさ弓八尾の椿さきにけりいさ引うへんときはかきはに

寄榊祝

榊葉のいつくはあれと分て猶名にあらはるゝ四の神垣

寄杉祝

いくとせを杉のふる枝の是も又松にやをよふ色をみすらん

寄鶴祝

沖津波それはをさまる朝なきのしほひにかよふ鶴のもろ聲

寄龜祝

さらにたゝ蓬か嶋を庭にして汀の龜の萬代のやと

和歌の浦に玉もましらぬ藻鹽草いにしへ今の數をとめぬる

這千首可₂詠進₁之由去八月廿四日從₂室町殿₁(義滿)蒙レ仰同月八日持參之

應永二十二年十月十日

右爲尹卿千首以百花庵宗固本校正畢

群書類従巻第百六十四

和歌部十九

千首和歌太神宮法楽 天文十一年二月九日

第一

立春

出る日に向ふ神路の山高く雲ゐも同し春や立らん　前内大臣

子日

代々かけて引しはいつの子の日とてわかの松原色もかはらぬ　三條大納言

霞

久かたの天のうき橋いくめくりかはらぬ春に立かすみかな　廣橋中納言

鶯

鶯の心も今はうちとけて聲のとかなる春や知るらむ　伯二位

若菜

長閑なる霞とゝもに立いてゝ野への若菜に日なや摘まし　左衛門督

殘雪

立春の空とは知るく霞む日もかたへは殘る雪のひとむら　藤中納言

梅

のとかなる時そと見えて咲初る梅かゝ匂ふけさの春かせ　右衛門督

柳

吹かせも治る御代のけふ毎にくる春しろき青柳の糸

早蕨

常盤木のかけも春とやさわらひの萠る烟の霞そむらん　甘露寺大納言

櫻

幾春のかさしなれとか雲の上に咲や櫻の千世ふかき陰　新大納言

春雨

草も木もうるふ緑の春雨のあまねき露を今やみすらん　高倉三位

春駒

のとかなる風の行衛にいはひてや手馴のこまも春を知らん　内大臣

歸雁

世にしたふ心は知るや春の雁ふりぬる道の跡とめてゆく　中務卿宮

呼子鳥

それとしもわかす太山の春の色まつあらはれて呼子鳥哉　萬里小路中納言

苗代

秋をまつ心の色やかつみえむまたあら小田の水のなはしろ　藤原氏直

菫菜

すみれ摘む野へは霞の袖はへて薄むらさきの色そ匂へる　中院宰相中将

杜若

紫のゆかりの色に今咲て夏もへたてぬかきつはたかな　飛鳥井大納言

藤

ときはなる松もさなから春にあひて猶色そふる藤浪の花　宣治朝臣

款冬　　四辻宰相中將
春風のけさ吹立て川水にうつる影さへにほふ山ふき
三月盡　　雅敎朝臣
行春なまたこん物としたふにも思へはとほきけふにそ有ける
更衣　　廣橋中納言
夏きぬと大宮人の白かされ櫻かさせる匂ひたになし
卯花　　左衛門督
賤の女かさらせる布や懸てほす垣ねつゝきに咲る卯花
葵　　基孝朝臣
末かけてふたはも同し葵草日かけにむかふ露の涼しさ
郭公　　甘露寺大納言
待えての心も知らす時鳥何おしむらん夜はの一こゑ
菖蒲　　高倉三位
けふにあひて曳やあやめもいくとせの長き根そへて深き澤水
早苗　　新大納言
小山田に早苗やとりしけさみれは濁りておつる谷の下水
照射　　前內大臣
ともしさすさつおの眞弓男鹿ふす野山の露やあかぬ短夜
五月雨　　中務卿宮
降そむるけふ五月雨の天津風吹とちけりな行雲もなし
盧橘
うつし植したかのきはより橘のむかしな忍ふ香にゝほらん「マヽ」
螢　　三條大納言
光らして玉藻にましる螢もや清き渚の心なはしる
蚊遣火　　藤原氏直
夕まくれ月待ほとのすさみとや宿なあきたの蚊遣たくらん
蓮　　右衛門督
たれも見よ濁りにしまぬ色に出て清き心な池の蓮は
氷室　　飛鳥井大納言
あとたれし昔なとへは氷室山そなへきにけり千世も盡せし
泉　　雅敎朝臣
涼しさの心や秋も結ふらし庭のいつみになつなわすれて
荒和秡　　飛鳥井大納言
つもりにし心のちりと御秡川なかしてさらす神や憫まむ
立秋　　藤中納言
いつのまによものなかめも秋きぬと夕の山の霧の一むら
七夕　　飛鳥井大納言
かされこし雲の衣の千夜も又うら珍らしきほし合のそら
萩　　前內大臣
江の水にあらふときゝし唐錦ほしあへぬ露や秋にみすらん
女郎花
風わたる霧のまかきの女郎花へたつと見るもなひく色哉
薄　　內大臣
吹むすふ風の色よりちる露のよそに亂れぬ糸すゝき哉
苅萱　　宣治朝臣
終夜月はやとりなかるかやの露もよすかの光りそへつゝ
蘭　　藤原氏直
かせさそふかななつかしみ聞きてみるからにあかぬ色かな
荻　　甘露寺大納言
きけはまた忍ひになるゝ風の音もまたき秋しる荻の聲哉

雁　基孝朝臣
秋かせのをとも淋しき夕くれの月に聲すむかりの一つら

鹿　新大納言
あき深き草のとほその明かたに妻こひ侘てお鹿鳴也

露
歌欠

霧　廣橋大納言
吹わたる風のあとよりさやかにも山見えそむる霧のうち哉

槿　中務卿宮
咲出しよの間はしらす槿の朝日に移るはなのほとなさ

駒迎　四辻宰相中将
えにしありてけふは雲ゐに逢坂や駒のあしなみいさみてそ引

月　左衞門督
曇なき空をうつして海原や二見の浦のなみの月影

擣衣　中務卿宮
はらふともけぬへき物か白妙のきぬたにおもき月のはつ霜

虫　前内大臣
思ひ殘すこともあらしの吹すさふ野を松虫の所えて鳴く

紅葉　甘露寺大納言
色深く染るもみちに立ならふ松ひとしほの秋の山里

菊　中院宰相中将
白きくの千年の秋を花の上に今朝置く露の先みする哉

九月盡　三條大納言
なにをかもけふしたふらむ紅葉ちり菊も移らふ秋の行衞は

初冬　中務卿宮
今朝は猶冬にしくれの秋の雲ほしあへぬまてうつる空哉

時雨　萬里小路中納言
そめ置し後いくめくり夕時雨おちはか上におもき山かせ

霜
置そふも空にそ知るき初霜の殘る夜ふかき鐘のひゝきに

霰
ふる音はまなく聞えて一村はたか玉さゝのたま霰かな

雪　内大臣
埋るゝ雪には何をみをつくしまつをしるしに立波もなし

寒蘆　新大納言
霜寒き入江のあしのかれはにも波よせかへる浦風そ吹

千鳥　飛鳥井大納言
鈴鹿川かはをと高く月更て聲もすみ行友千鳥かな

氷　廣橋中納言
をのつからみれはおち葉をしからみにかけて小川や氷初らん

水鳥　甘露寺大納言
氷る夜はをしのふすまを重ねてもさそな寒けき池の水鳥

網代　高倉三位
瀬を寒み明行波のあしろ守袖にはさそなよるの川風

神樂　萬里小路中納言
天津かみ惠ひくよのこゝら枕たかせのよとの聲そ添ゆく

鷹狩　左衞門督
はしたかの上毛の雪を打拂ふ手ふるひ寒きけふの狩人

炭竈　三條大納言
雪なから松よりのほる夕烟とき知らぬ風や峰の炭かま

爐火

さえ／＼て松のあらしの更る夜もよそにしらてや向ふ埋火　前内大臣

除夜

行としをよすからあかすこもるとは闇こゆる松も空に知らむ　左衛門督

初戀

それとなき野への初草はつかなる俤をしもしたふわりなさ　甘露寺大納言

不逢戀

いかにして我も逢みむとはかりの心ことはも人にかひなき　前内大臣

忍戀

身をしれは涙もさそなをはさりに思ふ絶まにもりや初けん　内大臣

初逢戀

したひきて知る夜もあれや初草の露のかことを袖の物とは　廣橋大納言

後朝戀

さらてたに思ふなこりを移りかも消えなて慕ふけさの俤　中院宰相中將

逢不會戀

甲斐なしや夢はかりなる俤もこよひ定めむうつゝならねは　雅敦朝臣

旅戀

仇に置くつゆとないひそ草枕むすふ契は千世の一夜を　四辻宰相中將

思

秋かせも拂らはぬまゝのやへ葎しけき露より思ひ亂るゝ　伯二位

片思

かくはかりなと慕ふらむわりなくも我のみ深くくゆる思を

恨

今更に身をこそたとれ何故と人にはるけむ恨とこゝろも　前内大臣

曉

しるへせむ鐘はきくにもとくおそし我ねさめ社時をたかへね　萬里小路中納言

松

立そはむ枝にかそへは君か代の千世はかねてもわかの松はら　前内大臣

竹

窓の内に夜ふかく月もさし入れよしつえたをすかす竹の涼しさ　中務卿宮

苔

稀にきて心やのへむちりもなく清き岩ほの苔の莚に　内大臣

鶴

空にみついくよの霜の翅をもわすれすたつの聲の長閑さ　中院宰相中將

山

守るてふ誓ひもしるし神路山やまとそ高き君か榮は　飛鳥井大納言

河

時し有とふりさけみれはいすゝ川ゆたかにすめる波の春風　萬里小路中納言

野

うつりくるいつれはあれと春秋の俤かはる野への夕暮　雅敦朝臣

關

たれに今心とゝめて夜もすから月も清見か關路もるらん　四辻宰相中將

橋

夜をこめて遠かた人やわたすらむ霜に跡みる谷の板橋　伯二位

海路

數々の御調もさそなわたつみの末はるかなる舟のかよひち　高倉三位

旅

うち出てはるけき末の山のはも麓になれる雲をわけつゝ　宣胤朝臣

別

立別れ歸らむと思ふ契たに歸るさ遠き旅ころもかな

山家　藤中納言
淋しさも身にはいとはし柴の戸にすむを心の山のゐの水
田家
守捨し跡とも見えす假庵に遠やま賤の殘すかよひ路
懐舊　甘露寺大納言
身にしのふ共ふることは年をへて老に數そふ物にそ有ける
夢　內大臣
行々てしらぬさかひもみし夢に殘るを思ふ小夜の手枕
釋教　三條大納言
神かきのうちともおなし光り哉さかひふたつのもとの悟りは
述懐
道しあれや誰もなへての家の風傳へしまゝの代々にまかせて
祝　飛鳥井大納言
いやつきに神もそ守る天地も動きなき世の時を待えて

第二　九日

立春天　中務卿宮
明てけふ霞にたてる春ならし天つたふ日の影もへたてす
立春日　飛鳥井大納言
曇りなき雲ゐをさして出る日の光りにしろき四方の春哉
立春水　萬里小路中納言
吹かはる風もあつまの空かけて波に立そふ春の池みつ
立春風　新大納言
治れる御代も知られて吹風の音ものとかに春はきにけり
立春雲　宣治朝臣
をのつから雲も霞に立かへて今より春の色はしろしも
山霞　伯二位
雪消えぬ山ちもなへて長閑なる春の色そと立霞哉
關霞　内大臣
いかに見て心にとめん霞のみへたての關のはるの明ほの
橋霞　飛鳥井大納言
月雪にかけても知らす霞しく濱名のはしの春は忘れし
湖霞　中院宰相中將
そことなく霞む汀ははるかにて波の音のみしかの辛崎
海霞　中務卿宮
よろとみし春の海邊は波もなく霞やよそも立かはるらむ
岡殘雪　萬里小路中納言
くさも木も花し匂はゝ岡のへの道なしとても春のしら雪
谷殘雪　四辻宰相中將
山はみな霞こめても白雪の殘るに谷の深きをそしる
杣殘雪　前內大臣
下草の駒の心をもりのかけ人もすさめぬ春の淡ゆき
嶋殘雪　右衞門督
うつろ日の光りもおそき嶋かけに猶きえ殘る雪の色かな
庭殘雪　甘露寺大納言
山ちにはさそふかゝらし都たにまた村きえの庭の白雪
舊巣鶯　飛鳥井大納言
春寒き雪のふるすを出やらて花も盛とうくひすそ鳴
初鶯
寒かへり雪もふるえの梅の花まつひらけたる鶯の聲

谷鶯
さきさかぬいつこの谷の鶯も花の都といてゝ鳴くらん
竹鶯　中院宰相中將
いろかへぬかけを宿りと春にまつ竹のうてなの鶯の聲
聞鶯　藤中納言
しのゝめの宿も霞める朝な〳〵なれてくるてふ鶯の聲
朝子日　三條大納言
とし寒み後あらはさむ千世の色を子の日にこむるのへの朝霜
野子日　新大納言
野へに出て子の日の小松引植む君かちとせの限なき世に
子日松　伯二位
若みとり春に立そふ小松原千世よろつ代のためしにそ引
子日友　廣橋中納言
ねの日する野への小松の引つれて心へたての袖はみゆらむ
子日興　左衛門督
子の日する松にひかれて歸るさも知らぬ閑への春の長閑さ
原若菜　前内大臣
萬代を祝ふ心は松原もおなしみとりにつむわかなかな
澤若菜　甘露寺大納言
ひまみゆる山澤水のうす氷心もとけぬ若な摘なり
尋若菜
いさ行かむめくむ若菜はそことしもまた白雪のかすかのゝ原
摘若菜　飛鳥井大納言
うちむれてわかな摘のゝ花かたみめならふ人を雪まにそしる
若菜多　中院宰相中將
知るしらす行かふ袖や花かたみかたみに野へのわかな摘らん
餘寒霜　藤中納言
春なからさえかへる頃の色みえてまた霜深きのへの草村
餘寒嵐
さえかへり吹盡してよさかぬまの花にはきかん嵐なりとも
餘寒氷　藤原氏直
春寒み宿や雪けにかへるらむあらしもこほる山川の水
山居餘寒　前内大臣
朝夕にむすひなれても山のゐに春また淺き氷をそみる
二月餘寒　新大納言
吹風のあらしも寒くきさらきの宿冴かへりふれるしら雪
梅始開　三條大納言
なへて世の匂ひになりぬ咲梅の枝より出て風や吹らむ
梅有遲速
咲梅のおなしえなから吹かへて朝露寒き北の山かせ
簷梅　前内大臣
ふりぬとも香をたにとめよ梅の花軒の忍ふは拂はてそみん
梅薫袖　雅敎朝臣
なのつから軒はの梅の香をとめてつゝむ匂ひそ袖に餘れる
依梅待人　甘露寺大納言
告やらはなと問はさらむ待てこそ梅咲ころの心をも見め
江柳　雅敎朝臣
つのくまぬ玉江のあしの浦かせもまつみたれぬる青柳の糸
岸柳　三條大納言
遲くとき柳か枝は河きしに朝日ゆふ日の色やわくらん

門柳　左衛門督
行人のしはし休らふ門の前に露も宿れる青やきのかけ
隣家柳　高倉三位
中垣のへたてともなき春の色やこなたかなたの青柳の糸
遠村柳　飛鳥井大納言
陰しけき川そひ柳打けふる遠の一村くるゝ空かな
麓早蕨　左衛門督
ふもとより先おり取りて薪こる道にや殘す峰の早蕨
岡早蕨　四辻宰相中將
行人もまつ立よるや岡のへの木の下蕨おりなしる頃
樵路早蕨　同
咲花のかけみとめきて山賤のやすらひかてらおれる早蕨
野徑早蕨　萬里小路中納言
折そへてたれも行きの袖の色は同しみとりの野への早蕨
岩根早蕨　廣橋中納言
春そとはをのれいはれの早蕨のもゆるけふりや先霞らむ
深夜春月　右衛門督
天津空かすみなからも更る夜や月はさすかに光りそひ行
曉更春月　三條大納言
稀にあふ花をや□そふ月たにもかたふきやらぬ春の曙
旅宿春月　高倉三位
霞む夜は草の枕の空としも思ひもあへぬ月のあけほの
春月懷昔　内大臣
昔見し宿はとゝへは月ひとりありしもあらす影霞らん
春月言志　三條大納言
さやにみぬ朧月夜のみしかさはたかあやにくに慕ひ馴けん
社頭春雨　内大臣
神ち山さらに木のめも春ふるを惠みなるへき雨の色哉
古寺春雨　四辻宰相中將
入相の聲も霞て初瀬寺檜はらにくもる春雨の空
草庵春雨
頃ははるたれかは草の庵しめて靜けき雨の限りをも知る
旅行春雨　萬里小路中納言
こえは又浦の笘やの夜の夢露けきかけむ春雨のそら
苗代春雨　廣橋中納言
せき入るゝ苗代水も豐なる行末しるき春雨のそら
水邊若草　甘露寺大納言
春の色の先うるほふや行水の岩ねの小草綠となる
故郷若草　中務卿宮
故さとも人めにかへる春やみむ垣ねの草の下萌てゆく
山家若草　基孝朝臣
崩出るみとりも見えて山里の垣ね色そふ春の若草
野亭若草　甘露寺大納言
春秋をいかに見るらん置えたる野守の庵の露の若くさ
垣根若草　藤中納言
かこふともみえぬ垣ねは春といへはかつ萌出る庭のわかくさ
皈雁知春　内大臣
朝な〳〵春はをとなき浦なみに立こと安き雁の一むら
皈雁連雲　甘露寺大納言
聲たてゝ行たにそれと見も分ぬ空もひとつの雁の別路

皈雁成字
たか方につてやもしうの玉章のこたへなかいまみ歸る雁かれ　左衛門督
皈雁越峰　中院宰相中將
峰高みこえけんかたもしら雲に心やしろへ歸るかり金
皈雁幽
したはれて春に心はひく琴の音に通ひて雁歸るらん　内大臣
待花
待つけてことしの花やいかゝみむ忘れかたきは盡ぬ物から　雅敬朝臣
栽花
萬代なかれてうへ置く山櫻はなも常盤の春や契らん　廣橋中納言
遠花
思ひこし心の色やさくら花雲こそかゝれ遠の山のは　中務卿宮
近花
色も香もちかまさりする花の上に心な染て置る露哉
馴花
年なへて色にやそめし唐衣馴にしほとの花の木の下　内大臣
落花隨風
けふそ思ふ心とちれる花の色はいとひし風のうらみともなき
落花似雪
冴かへる程とやみらん木の下にまたふり積る花のみ雪は　飛鳥井大納言
落花難駐
木のもとに心つからと散る花も慕ふなさすか思ふとはしれ　前内大臣
落花盈庭
雪と見は心もとめし散る花の梢にゆるす庭の朝風　伯二位
落花埋路
分入て散らぬ梢な尋はや花に埋める春の山みち
朝菫菜　雅敬朝臣
日影さす野へのすみれの露なおもみ淺紫の色そこほるゝ
夕菫菜　高倉三位
摘袖もこゝにすみれの名なとめて花の宿りの袖や賴まん
菫菜露　廣橋中納言
紫のゆかりの色やつほすみれ露深くとも摘て歸らむ
野菫菜　前内大臣
散もせし野へのかくれのすみれ草木高き枝の花になさはや
籬菫菜　右衛門督
賤かすむ垣ねのすみれ春にあひてうら紫の色に出らん
河邊欵冬
花とみてせくやよし野の川水にえもゆふはへのやへの山吹
里欵冬　新大納言
いはぬ色に花は咲とも山吹の盛り告こせ井手の里人
人家欵冬　宣治朝臣
見る人に春もいまはの色ふかく咲やまかきの山吹の花
欵冬盛　中務卿宮
咲そふや匂ひこほれて山吹の下行水も花の淵せに
欵冬散　三條大納言
山吹はかろく散へきたくひとや秋の梢はの色に咲らむ
池藤　甘露寺大納言
のとかなる世に立かへる春の色な花にみせたる池の藤浪
瀧邊藤　藤原氏直
松かえにかゝれる色も岩はしる瀧ついはれの藤浪の花

松藤　右衛門督
千とせふる池の汀の松高く梢はるかに咲るふちなみ
折藤　前内大臣
めもはるに見てもかひなし紫の色こき藤は折て歸らん
暮春藤
行春にしはし手おらん藤浪にこえたる花の枝はあらしな
三月盡夕　高倉三位
したひてん夕山こえて行春の霞の衣たちもかへらは
三月盡夜　中務卿宮
行とまるゆくゑな思ふ彌生山なこり夜ふかき鐘に向ひて
三月盡鐘　高倉三位
惜と思ふ空にれよとの鐘の音はしたふあすかの春のよはかも
惜三月盡
兼てより三月の春のかきりとは聞しにまさる鐘の聲かな
三月盡祝　中院宰相中將
月も日も違へぬ空にけふ行やよもに道ある君か代の春

第二　九日

歳中立春　内大臣
みとりたつ松もいくよかふる年のみきりの春な更に向へて
山霞　右衛門督
なとは山春に成り行色みえて今朝は霞の峰にかゝれる
春雪　廣橋中納言
花なおもふ梢に春の風さえて俤見するけさの雪哉
朝鶯　新大納言
雪はまたふるすなからの谷のとに春とやけさは鶯の鳴
澤若菜　右衛門督
雪消て道しある世と諸人の野澤のわかな今や摘らん
餘寒　四辻宰相中將
霜氷とけしはいつら山里のこのめも春に冴かへるそら
梅薫風　新大納言
咲花の立枝も見えぬ春の夜にあやなく匂ふ梅の下風
行路柳　内大臣
行袖もなひきあひてや世は春の風に治る青柳の糸
春雨　中務卿宮
ふり出る空なも分かて行末の袖にかすめる春の雨哉
若草　高倉三位
ひまもゆる芝生の雪のあさみとり物にまきれぬ草は成らん
春月　左衛門督
風かほる花に光なとられてや殘る月よの春の曙
歸雁　甘露寺大納言
年々にいへは更なる名殘今有とたに知れ歸る雁かれ
初花　雅敎朝臣
世に匂ふこと葉の花も咲そむる色かにこもる山櫻哉
見花　甘露寺大納言
見てもあかぬ心な染んよしや猶花ちる跡の春は有とも
翫花
春いくかけふ諸人の逢にあひて花もかさしの色香なや思ふ
惜花　三條大納言
よしさらは盛はまたし移はん日數にちかき花はあやなし

落花　中院宰相中將
ちるころのあらしも知らて長閑きや花なき里の心なるらん
籬山吹　萬里小路中納言
咲のころやへ山吹や行春のせきしまさしき笆なるらむ
松藤　前内大臣
かけそめし契も深し藤波になみの聲ある松のしたかせ
暮春
くれて行春しもあやし菅のねの長き日いかていかに過けん
首夏　飛鳥井大納言
わすられす春を思は皆人の衣に夏そおとろかれぬる
待郭公
初聲は忍ひもあへし夕やみの月待てとや山ほとゝきす
聞郭公
待し夜の恨をつくす時鳥きくもなこりのいねかての空
早苗　前内大臣
取のこすは草も見えすゆく水の早苗こす波露の涼しさ
谷五月雨　中院宰相中將
谷のとは明ゆく空も晴やらぬ雲まに分ぬ五月雨の頃
夏草　前内大臣
拂はれは草のみ高き岡のへの小松の緑夫としもなし
夏月　飛鳥井大納言
見るほとの影もとゝめす天の川早瀬に成りぬ月の短夜
水邊螢　新大納言
草深き澤への螢よろ〳〵はもえて思ひに身をこかすらん
夕立　中務卿宮
なる神は夏にしろして夕立のふりこむ空をいかに聞覽
六月祓　前内大臣
諸人の千わきに分て思ふことけふみな月に祓いてゝむ
早秋　甘露寺大納言
詠やる夕あやしき秋はいまこゝろのほかにわく色もなし
乞巧奠　萬里小路中納言
かゝけなく庭のほかけも星合の明る夜しらむ露の玉琴
荻風　前内大臣
ねさめして今こそ永き夜はの月見よとすゝむる荻の上風
萩露
をく露の匂ひにあまる枝もはもとあらの小萩花に咲ぬる
秋夕　左衛門督
いつはあれと夕の空のわきてなと秋の寂しき物と成りけん
初雁　中院宰相中將
秋かせの光も清くすむ月の空にさやけき初雁の聲
秋田　三條大納言
幾千里いなはの雲に雨風も□にまかせたる門田守らん
夜鹿　中務卿宮
山鳥のよるの思ひをさをしかのおのへ隔てゝねには鳴らん
曉虫　内大臣
草のとに思もそふやおり〳〵のねさめの友の松むしの聲
山月　宣治朝臣
ふもとよりのほると見えて澄む月にかゝらん峰の雲霧もなし
湖月　萬里小路中納言
あま人もひろふ計やさゝ波によりくる月の秋の見るめは

野月　廣橋中納言
置露に光かはらて草深き野守か庵も月やすむらん
渡月　內大臣
くまなさは波にもみえて御渡の秋更る夜の月なしそ思ふ
庭月　前內大臣
あふくなりかきほの中に海山なうつせる月の光あまねき
關霧　甘露寺大納言
おき出る關の戶さしは明る夜な何殘すらん霧こめてけり
聞擣衣　伯二位
吹かせの音うちそふる麻衣よその哀はおもひしらすや
重陽宴　甘露寺大納言
折かさす菊も千歲の秋のまゝにけふみきたまふ秋はかはらし
杜紅葉　藤中納言
露しくれ染てし木々の紅葉々な何といはせの松の下かけ
河紅葉　雅敎朝臣
河なとはよるのまくらによるの雨あすの紅葉の幾しほかみん
九月盡　三條大納言
うき秋といひならひしも暮て行名殘にけふの袖の露けさ
初冬時雨　同
わきて知る心も怪し神無月秋にきゝしもおなし時雨な
落葉　左衞門督
心からもろくて散やさそふらむ嵐のまゝの木のはともなき
寒草
かれわたる野への草はも霜にけさ又さく花の色なみる哉
淺雪　廣橋中納言
古き世の跡かはらすは初雪の淺きも深きこゝのへの庭
積雪　伯二位
白ゆきの積るか上に運ひ上てつくりなしたる山なみすらん
池氷　右衞門督
池水の深き氷のよな重ね床したひつゝさはくなしかも
豐明節會
賢きや豐の明りの小忌衣袖なつらぬる雲の上ひと
冬月　四辻宰相中將
更る夜のあらしも晴れて行月の影は氷らぬ庭の池水
潟千鳥
曉の潮のひかたのしらむより千鳥も波に別れてやたつ
歲暮　中務卿宮
名殘ななしくやはあらぬ一年の身に行とまる數な知にも
寄月戀　同
こぬ人にいてやと思ふ山のはの月もつれなき光見せつゝ
寄雲戀　內大臣
雲のみにたくへんもいさ心のみ思ふ色には行かへるとも
寄雨戀　甘露寺大納言
わか涙雨となりなはうき人のはれまありとも見えぬ物かは
寄風戀　左衞門督
おとつれなまつに殘して吹風のたよりもわれになと恨むらん
寄烟戀　前內大臣
涙せく袖は鹽木のこりもせぬ思ひの烟けつかたもなし
寄關戀　高倉三位
程は只關のあしかきへたつれとまとなにもあらぬ中に戀つゝ

寄瀧戀　中院宰相中將
淵せとも涙せきあへぬ袖の上やしからみもなき瀧はおつらん

寄原戀　雅敎朝臣
年をへてあふのまつ原待よひも猶つれなさの色そかはらぬ

寄橋戀　藤中納言
つれなさを何とか人にいは橋のくちぬ思ひに年はふりつゝ

寄湊戀　藤原氏直
うき名のみおふの湊による舟のあふ瀬をなみにこかれ侘つゝ

寄木戀　宣治朝臣
忍ふへき心の色もこからしのもりてあまれるわか思ひかな

寄草戀　廣橋中納言
蓬生のかれも果なてなく露のなさけもかゝる年もふりけり

寄虫戀　雅敎朝臣
いひ出は哀ともしれ夏虫の音にたに立すもゆる思ひを

寄鳥戀　基孝朝臣
人しれす君もやくると呼子鳥聲にはたてし忍ふ心を

寄獸戀　四辻宰相中將
よそにても哀ときかは秋の夜に我もをしかのねにや立へき

寄玉戀　飛鳥井大納言
人めには猶やひろはむ玉霰袖にきゆるは涙とも見し

寄鏡戀　甘露寺大納言
おとろふる鏡の影に人のうき數の外なる思ひ添ひぬる

寄枕戀　三條大納言
あふとみし夢さへ「マ」うとし儘（）に丸木の枕まろれせよとや

寄衣戀
よしさらは夢にはなさしうらもなくよるの衣を今は頼まん

寄弓戀　右衞門督
問はて又待夜も明ぬ梓弓たか方にかは引たかふらむ

曉鷄　藤中納言
さらぬたにねさめかちなる曉を何おとろかす鳥の聲々

夜燈　萬里小路中納言
鳥かねもまた夜ふかきを床の上に雨はさゝせの灯の下

嶺松　飛鳥井大納言
千世よはふ雲ゐかはらす通ひきて幾年みねの松風の聲

里竹　中院宰相中將
一村に心かはしてすむ里や竹のはやしのいにしへの友

磯巖　伯二位
あら磯の波にも苔の色そへて高きいはほのかけそふり行

嶋鶴　三條大納言
四方の波音たに立すあきつ嶋雲井の鶴の聲計して

岡篠　飛鳥井大納言
故里を思ふ岡へのさゝ枕一夜の夢もかれしとそ思ふ

江蘆　伯二位
よせかへる浪にひまなく打そよく入江の蘆の一村のかけ

浦船
うきわさと思ひなから行歸る浪もしかまの浦の釣船

杣山　廣橋中納言
それとのみ絶々斧の音はしてたゝよふ雲の三保の杣山

岸苔
むす苔のちりも拂はし庭清み動かぬきしの水のみとりに

山家水　内大臣
たれかすむ宿もる水の末々も又たくひなき山の下道
山家嵐　左衛門督
やま深く思ひ入にし心より峰のあらしもしつかにそきく
田家雨　前内大臣
晴くもる雲の行きゝも程ちかき山田の軒にくらき雨かな
旅行　飛鳥井大納言
夜をこめて旅たつみちは遠くみしけふの野山を兼て問つゝ
旅宿　前内大臣
行末をいそきたつとてふかくみし宿の情も知らす皃なり
旅泊　甘露寺大納言
きゝ馴はなをさりならぬ涙枕おなしつらさの浦風そ吹く
海眺望　藤原氏直
波の上ものとかに見えていせの海や渚にさらぬ友鶴の聲
寄社祝　中務卿宮
跡たれて守る内外の宮はしら動きなきよの下つ岩ねに
寄日祝　四辻宰相中將
代におほふ君か惠みは久かたの天てらす日も同し雲ゐに

第四　九日

歳暮立春　前内大臣
歳の内はさすか日影も朝熊の山をへたてゝ春そ霞める
山霞　雅敦朝臣
春はまた冴る朝けの風の上に絶々かすむ遠近の山
海霞　高倉三位
海原やわかぬ霞の色なから紅くゝる沖のしら波
舊巣鶯　宣治朝臣
谷の戸をまた出やらて鶯の聲やふるすにあらたまるらん
澤若菜　基孝朝臣
長閑にも澤邊の水のにこりなくわかな摘つゝ千世もへぬへし
松殘雪　左衛門督
春寒みしはしは雪のうち散も下葉にましろ軒の松風
庭梅　四辻宰相中將
長閑なる色に今はた咲やこの花の香霞む庭の朝風
野梅　新大納言
さして行かたは有とも春の野のむめ咲宿や分て問まし
朝柳　三條大納言
朝またき長閑き風に青柳の糸も亂れす露や置らん
故郷春雨　中務卿宮
人めなき葎の門は春の雨に跡見え初る雪のむらきえ
春月
春はたゝ霞そわきて浮雲は風をそ待し秋の夜の月
曉皈雁　甘露寺大納言
思ひなく花に都の名殘もや有明の月に雁かへるなり
待花　廣橋中納言
待ほとをさかりとやいはん咲はちる花に心のやすけくもなし
尋花
尋ね侘ぬ問てやみまし呼子鳥花ある方のしるへ也せは
見花　内大臣
千早振神かきかけて咲やこの櫻の宮の花のしらゆふ

折　花　飛鳥井大納言
ちるをおし花もしるらし見ぬ人の爲にと手折ならひ有世を

惜　花　藤中納言
しるへとも移ろふ色の山さくら猶こりすまの花の下ふし

里款冬　中院宰相中將
あかす思ふ心の色は山吹のはなの上にやいてのさと人

池　藤　飛鳥井大納言
すむをしのをのか毛色も紫の藤なみかくる池の春かせ

暮　春　藤原氏直
くはゝれる春の日數や花鳥の外に盡せぬ名殘成らむ

里卯花　右衛門督
うの花の咲る里もや問てまし鳴すはあらしやま時鳥

挿頭葵
あふひ草月の桂のえたそへて今や手にとるかさしにはせん

杜郭公　中院宰相中將
子規ちよをならせる聲なれや杜の梢の松高きかけ

關郭公　萬里小路中納言
きかてもや山時鳥せき守のうちぬる程の夢の通ひ路

岡郭公　三條大納言
しけるらん岡の葛葉のかへれとは人のあきにや鳴ほとゝきす

五月雨久　雅敦朝臣
けふ幾日めくる日影もしら雲のしらすかさなる五月雨の頃

田邊螢　中務卿宮
露のほる小田の早苗のひま毎にかけ顯れて飛螢かな

浦夏月　内大臣
浦なみのよるともわかぬ月影やよひのまゝなる空の涼しさ

水邊納涼　四辻宰相中將
むすふ手は猶いか計松かけにしるもすゝしき瀧ついはなみ

遠夕立　前内大臣
あふきもて月ならは先まねきてむ夕立すらし雲の涼しさ

早秋朝　甘露寺大納言
色みえぬ秋をしれとや露たにも置あへぬけさの荻の上風

七夕夜深　高倉三位
更行か露をきそへて河なみに今宵みてぬる鵲の橋

野　萩　飛鳥井大納言
いとはすよ朝露分て遠き野は袖も千もとの萩か花すり

荻　風　左衛門督
きのふけふ軒の下荻そよ更に秋とはしるき風のをとかな

薄　露　飛鳥井大納言
さそへとも契は秋に絶せしとおはなにすかる露の夕風

夕　鹿　藤原氏直
暮て行秋の思ひをゆふは山ひとりおしかのれに立て鳴

初聞雁
秋になる今はたきつゝ雁金はいなはの風や音つれやせし

草　虫　雅敦朝臣
さやかなる月にはなれも鳴出て虫の音しけき庭の草村

川　霧
さす舟の袖より立て薄くこく川瀬うつろふ浪のうき霧

秋　田　内大臣
ふりかはる露霜なから小山田のいねすも秋の夜を明すらん

禁中月　甘露寺大納言
雲の上の秋になれては名にしおふ所も月に忘れてそみる
社頭月　高倉三位
もれさらむ千々の手向のことのはの露をもてらせ月よみの宮
古寺月　前内大臣
峰高み月の桂にならふ樹の寺こそ秋を光なりけれ
山家月　飛鳥井大納言
谷かけは軒はの山を出そめてもりくる影も月のしたいほ
閑居月　萬里小路中納言
夕まくれ心かはさは澄月のみやこも同し淺ちふのかけ
隣擣衣　三條大納言
小夜衣うつや人けのまちかきはうれしきものゝ夢路くるしき
岸菊　四辻宰相中將
なく露も淵とやならむ川波のよするとみゆる岸の白菊
嶺紅葉　新大納言
露しくれ分て染てや立田山峰の紅葉の千しほ成らむ
谷紅葉　萬里小路中納言
染あへぬ梢にも哉谷川の音はしくれのたえまなきそら
九月盡　廣橋中納言
かきりある日數にくれて長月はたゝ僞の名にこそありけれ
行路時雨　左衛門督
こと岡にふるとはみえし道のへの行きさはらぬ初時雨かな
橋落葉　飛鳥井大納言
山かけやわたせる橋に散しきて霜の落はゝ風も拂はす
寒草霜　同
朝な〳〵置そふ霜は深草のくさはみなからかるゝいろかな
湖氷　高倉三位
浦かせの氷もゆくかさゝ波のこゑはみきはの松にのこりて
冬月
空淸くあたりの雲を吹なして嵐の上にさゆる月かけ
湊千鳥　中院宰相中將
ゆく舟もよする湊の浪風になれも鳴たつ友ちとり哉
朝雪　前内大臣
夜のほとは降かされてもおき出るけさ社雪は光そひけれ
夕雪　廣橋中納言
くれゆけは埋もれ果て松風の拂ふやいつら雪の木高さ
夜雪　中務卿宮
うは玉のよのまの雪も知るはかり松にしつまる山風の聲
歳暮　内大臣
いかになしみいかになかめむ行年の光の影を名殘なる空
寄山戀　同
朽ぬとは思ひ入てもまたしらぬ山分ころもたれかかされん
寄嶺戀　廣橋中納言
仇にこそ心もかれてみねの雲おもひきゆともかひやなからん
寄杜戀　四辻宰相中將
つゆしくれ染なす秋のかひそなきはゝその杜の薄き契は
寄關戀　三條大納言
關守は鳥かれなれやあふ坂を人にゆるさぬしのゝめの空
寄岡戀
又もこむなこりをとめて初霜のねての朝けの岡こえの道

寄野戀　萬里小路中納言
袖の上に移ろふからや分入しはろけき野への露の心よ
寄原戀　前内大臣
たえすふる涙も染よこぬ人をまつ原檜原色もつれなき
寄川戀　飛鳥井大納言
心のみへたて果すは中川の中に流れてたえす頼まん
寄江戀　廣橋中納言
あふ事は袖のみぬれてみしま江のしけれる蘆の一よたになし
寄沼戀　甘露寺大納言
思ふともかつ見し行衛いかならん淺かの沼の名にたくへなは
寄澤戀　藤中納言
いひよらむたよりも波の澤水の心あさくも人や見てまし
寄池戀
かくなからうき名なりとも池水のいひ出てたに□もらさなん
寄瀧戀　中務卿宮
せきあまる袖にやみせん物おもふ瀧つ心を水かみにして
寄橋戀　新大納言
かけて思ふ長柄のはしの中絶は扨もやいかゝ戀わたるへき
寄海戀　甘露寺大納言
わたつみも深きかきりは有つへし思ひの淵そそこひしられす
寄浦戀　内大臣
いかにしてぬるゝ袖しの恨をはいひもつたへむ遠つ舟人
寄濱戀　三條大納言
ほし侘ぬ浦のはまゆふへたてなきて重ねぬ中の夜の衣に
寄潟戀　宣治朝臣
今更にうしともいかゝいはみ潟立よるなみのほともあらしな
寄湊戀　左衛門督
つゝめとも袖にみなとの涙しもさはく心ないかにとかせん
寄鴫戀　前内大臣
ひとりねの鐘つく嶋を思ひにて答へもきかぬ世をつくせとや
曉寐覺　伯二位
きぬ〳〵の空にはつらき鳥かねを寐覺の友ときゝもなさはや
谷松年久
年高くかたふく松に仙人の名をやとゝめし谷のかけくさ
籬竹　四辻宰相中將
栽おきて今や千ひろのかけならん籬の竹のよゝをこめつゝ
路苔　新大納言
いかにして分やは入らむ山深き岩間かくれの苔の通ひち
蘆間鶴　前内大臣
霜雪を上毛に拂ふたつのふむ跡より蘆もうら枯やせん
羇中送日　甘露寺大納言
都出し春の霞を立かへて行袖しめる秋きりのそら
羇中懷都　右衛門督
旅の空月よ花よとみる中も都の外のなくさめそなき
旅泊重夜　左衛門督
すむ月に磯への涙の打もねすいくよあかしの浦の友ふね
海邊眺望　内大臣
暮ぬまたいそくや釣にともす火の影ほのかなる浦の初嶋
寄夢述懷
いさむるもありしなからにたらちねのいく度夢の昔をかみし

寄老述懷　伯二位
さらてたにしたふ昔を老か身の上には猶そ思ひ知らるゝ
寄世述懷　中務卿宮
思へたゝ今をみるにも古にかへるはおなし道としらすや
寄情述懷　高倉三位
情あらはなと問さらむもとこしを待にはたかふ雨のつれ〴〵
寄涙述懷　右衞門督
おもほえす身はいたつらに涙川なかれて早く年そ積れる
寄身述懷　新大納言
さりともと思ふ心のあらましようき身忘れて年をふる哉
寄榊神祇　廣橋中納言
榊はのさかゆく御代や鈴鹿山ふるきにかへる道守るらん
寄鏡神祇　雅敎朝臣
君守る神の惠は曇なく鏡にてらす御代そかしこき
寄水釋敎　伯二位
愚なる身にわかてたに行水の濁らぬ末や法のことわり
寄燈釋敎　中院宰相中將
をのつから心の月の晴しより光そひゆく法のともし火
祝言　甘露寺大納言
岩戸明し光かはらす出る日の曇なき世や君かまに〳〵

第五　九日

早春　甘露寺大納言
打なひく色にもみはや春はまた遠山のみの朝かすみ哉
隣霞　新大納言
見てもなをあかすそ思ふ春の色を霞の袖にえやはつゝまん
聞鶯　四辻宰相中將
朝日さすかたへの梢うつりきて聲ちかくなるそのゝうくひす
子日　雅敎朝臣
立出る野へもはるけき小松原引手あまたの春やみゆらむ
若菜　前内大臣
朝日さすをのゝ白雪かつ消てわかなもとむる人の袖ふり
殘雪　右衞門督
重れる上より消て春は今ふり初し色に殘る雪かな
餘寒　萬里小路中納言
頃日は嵐も空に冴かへりたれこめてすむ松のしたいほ
春月　飛鳥井大納言
霞む夜も思ひまきれし梅かゝに月の桂の花の春かせ
春曙　高倉三位
おき出て見る程しはし山のははかすむ夜ふかき曙の空
岡梅
立よらむ影はわすれぬ花のえに思ひ岡へのやとの梅かゝ
皈雁
かへるさの道にといそく一連はをくれぬ雁の峯の白雲
春雨　雅敎朝臣
かけろふのあるかなきかに有草の下崩いそく野への春雨
遠柳　左衞門督
風ならてなひく柳のすかた□や雨に成行をちの一村
春草　藤原氏直
山里は垣ねの草のはつかにも雪まに見えし春の色かな

山花　中務卿宮
咲花をつゝむ霞の袖のかも淺いてゝ匂ふ春の山かせ

杜花　内大臣
春の色は霞にもれて一村の杜の木立も匂ふ花かな

水上花　宣治朝臣
よし野川ちりかふ花の下水やとまらぬ春の行衛ならまし

歎冬　新大納言
色深きやへ山吹やうつり行かけまてにほふきしの下水

路藤　中院宰相中將
玉ほこのたよりにみえし藤波やかへるさ慕ふ春の夕暮

暮春
彌生山そことも分すくれて行霞そしろへ春やしたはん

更衣　藤中納言
霞こし空はいつしか夏衣うすき一夜やへたて成らむ

卯花　四辻宰相中將
ふり積る雪にまかへて卯花のかきほ有とも見えぬ山里

神祭　前內大臣
珍らしき假れののへの露けさをけふはあふひの上にみせけり

時鳥　右衛門督
宵々はまつにつれなき時鳥あり明の月やおき出て見ん

菖蒲　飛鳥井大納言
こよひしく枕のみかは軒にふくあやめも長きためしにをひけ

夏雨　甘露寺大納言
あつき日をへたつる雲のしく〳〵に降出て涼し夕くれの雨

夏夜　三條大納言
更ぬるか月の木かくれ涼しさは夕日の名殘あとものこらて

鵜川　新大納言
鵜舟さす川波となく入月のあとを光のかゝり火の影

蚊火　左衛門督
假そめもすまれぬものに蚊遣たく賤か家ゐは見るもいふせき

夏草　高倉三位
夏の野に末葉の松は下草の先おひのほる程そ見えける

叢螢
草のはの露もみたれて光有と見えて涼しく飛ほたるかな

氷室　廣橋中納言
今も猶木のしたさえて氷室山夏としもなき風のをと哉

夕立　三條大納言
山かせの時雨の雲や歸るらむ楢を分るゆふたちの空

納凉　飛鳥井大納言
日も淺らぬ杜の木陰の涼しさの風はいつくを傳ひきぬらん

夏祓　伯二位
水上も猶いさきよき川波に心すゝしくなかす麻の葉

立秋　中院宰相中將
今朝よりは置そふ露の涼しさを心に荻の秋のはつ風

七夕　前內大臣
鳥は猶はれをならふ空にしも星の契のいかに裕なる

荻風　甘露寺大納言
毎もきく風のひゝきのかはり行荻をやとりの秋かあらぬか

對萩　中務卿宮
白露のをきてそみつる萩の戶のあたり夜深き花か道か

女郎花　三條大納言
かはすらむれさしもゆかし女郎花れたる眞萩の同し笆に
原蘭　三條大納言
ぬれてこし袖の香深き藤はかま分る野原の露は拂はし
薄滋　高倉三位
夕かせの吹たつ野への村薄そゝろに秋や袖かへすらん
悲露　藤原氏直
たか秋のゆふへの袖にせきとめて露はあたなる名には立らん
霧深　三條大納言
山もとは雲もましりて立霧の埋まぬかたや入相の聲
秋夕　左衛門督
身にしめて思ふよりこそ虫のねもたゝならぬ秋の夕暮の空
庭虫　内大臣
庭の面は露の染けり萩かえに錦おるてふ虫の聲々
野鹿　藤中納言
くれわたる遠山もとは身に寒くしめ野の露に小鹿鳴也
初雁　廣橋中納言
かこつへき春の別れのつらさゝへ忘れてそきくはつかりの聲
待月　右衛門督
出ぬまの月にいく度立よれは心いられの秋のそらかな
見月
しらしかし千尋の底にふかめても月のみるめにおよふ物かは
惜月　飛鳥井大納言
なれてみし秋はいくかもあらし吹峰ゆく月をしたひ侘つゝ
擣衣　高倉三位
都にはまた秋風も吹あへぬをとは山への衣うつらむ
菊移　萬里小路中納言
待人もわすれん花の匂かは色そめかへすきくのしら露
紅葉　高倉三位
秋きてはかたへに見えし太山木も花にけたれぬ峰の紅葉々
暮秋　甘露寺大納言
なへてうき物とはいへとさすか又名殘なきにはあらぬ秋哉
初冬　内大臣
山高み朝けはけしく木からしも吹たつ四方に冬はきにけり
時雨　藤中納言
しくれ行うき雲見えていく度かはるゝもやすき山風の空
落葉　雅敦朝臣
染盡す時雨の後の梢より嵐も色にふる木のは哉
寒草　中院宰相中將
色々に露は染にし野への霜千種におなし花や咲らん
千鳥　新大納言
滿しほの夕波高き浦かせに友なし千鳥うらみてそなく
水鳥　萬里小路中納言
うす氷むすひも果ぬ池水の月明かたやをしのむら鳥
谷氷　甘露寺大納言
なかれ行をとを嵐に吹かへてほとなく氷る谷の下水
冬曉
霜氷かさなる夜半のおもほえすれ覺に成りぬ有明の空
鷹狩　中務卿宮
かり衣木ゐをもわかし箸たかのしらふにまかふ雪の下道

閨霰　内大臣
玉さゝの上にはしるや閨の内にくたくる夢のよるの霰は
初雪　同
珍らしと見そめし空にかつ散りて雪げの空やまた氷るらん
深雪　基孝朝臣
日數へてふりつむ雪にとひゆかん里のしるへもわかぬ遠方
爐火　伯二位
さえまさるよはの嵐は音すれと春もや通ふ埋火のもと
炭竈　飛鳥井大納言
冴くらし此頃たえすやく炭のけふりは峰の雪そくもれる
歳暮　前内大臣
身の上に積らぬ年のくれならはさのみおしまし春を向かへん
初戀　甘露寺大納言
しれかしなこたへせすともかくてのみ思ひやむへき我心かは
忍戀　左衛門督
たれ故と人やとかめむ軒の草忍ふにあまる袖の白露
尋戀　右衛門督
分侘る鴫の草くきそれならてまよふやおなし心なるらん
契戀　甘露寺大納言
また馴ぬほと社あらめ契てもかゝる思ひのあちきなのよや
待戀
ねたしとは思はしいはし住吉のまつてふ色のかはりやはする
逢戀　高倉三位
たまさかのあふ夜なからも手枕の上に殘らん思ひともなし
別戀　新大納言
又いつの契もしらて鳥かねにおきわかれ行きぬ／＼の空
久戀　右衛門督
年月は恨にたへてほとふるもつゐの情な心にそまつ
絶戀　中務卿宮
末終にかゝらんとてやおり／＼もならはしきつる絶まなる寛
恨戀　雅敦朝臣
はるけても又いかならんことわりの外にわりなき恨み所は
朝戀　前内大臣
しらしかし人の心そ朝またき消えぬ露とも身な歎くとは
晝戀　廣橋中納言
あちきなく暮しかれてはしたひけりよるは夢にも見えし俤
夕戀　前内大臣
さりともとたのむ心や偽も思ひもしらぬゆふくれの空
夜戀　四辻宰相中將
忍ふ夜の徒ふしなあやむしろあやめはいかゝのへもやるへき
曉戀　中院宰相中將
うき事もしらてや雲のかへるらむわかきぬ／＼の曉のそら
岡松　左衛門督
さしそふや岡への松の深みとり常盤なからに侍なしるらん
岸竹　四辻宰相中將
旅ころも行袖さひし雪ちりて川風なひく岸の村竹
峽猿　甘露寺大納言
秋の雲はるゝ梢に啼さるや山のかひある月をみるらん
林鳥
いつよりかねくらと頼む鳥ならん人もゆるさぬ木々の梢な

浦　鶴

難波かたつのくむ蘆へにはる〳〵と汐干しらるゝ蘆たつの聲

淵　龜　内大臣

君か齡くらへは山も龜の上すむてふ淵のはかりもそなき

瀬　魚　前内大臣

たれもみな數ならすとも瀧つせにのほれる魚を心とやせん

磯　波

あしかりし名殘もなみの磯つたひ又漕よせてあかぬ友船

沼　水　三條大納言

あひにあふけふの手向やかくれぬの埋れも果ぬ水莖の跡

巖　苔　萬里小路中納言

動きなきたくひにや見むむす苔の緣をうつす巖なりせは

山　家　中務卿宮

のかれきてすめは住ぬる山としもしらてや人の言とふもなき

野　亭　前内大臣

名にしおはゝ茂る木草をたよりにて緣のゝへをすむかけにせん

海　村　藤原氏直

夕日さす浪の釣舟數そひぬかへる海邊の松の一村

水　鄉　廣橋中納言

藻しほやく烟とのみや難波人かすむもしらぬ春の夕暮

關　屋　右衛門督

治れる君か御代をも守るてふ鈴鹿の關や名にも知かな

第六　九日

早春霞　飛鳥井大納言

氷とけ波やはらくる春の日のいすゝ川原は霞そむらん

早春雪　三條大納言

春やときこほす計にふるもたゝしはしの程のえたの淡雪

山早春

長閑なる春に千里の外はあらしいく重の山もわかやまと國

海早春　高倉三位

しほみちて氷もしらぬわたつみの波はいつより春と立らむ

早春鶯　左衛門督

谷の戸もけさより春に明そめて霞をいつる鶯のこゑ

白梅盛　伯二位

にほはすは猶たとらまし冴返り雪見る頃の庭の梅かえ

紅梅遲　四辻宰相中將

雪の内に咲てふ花も紅に匂ふや遲きやとの梅かえ

隣家梅

軒ちかき梅吹ちらす笛ならはふるきを思ふ聲はやめてよ

折梅花　甘露寺大納言

とはるへき便に植し梅かえをあやなく手折る人や恨みん

梅浮水　同

咲初て光影うかふ色もかも散る迄をみむ梅の下水

都春曙　中院宰相中將

吳竹の都の春の空なれや綠に霞む明ほのゝやま

關春曙

明ほのゝいつはあれとも駒なへて春をそとはん關の邊のやと

崎春曙　萬里小路中納言

辛崎や松も千しほの霞より汀にまさる春の明ほの

春曙雁　藤原氏直
折にあふなかめもさそな雁鳴て霞める月の明ほの丶山
春曙朧望　雅敦朝臣
横雲も残れる月の影うすく霞にしらむ明ほの丶山
漸待花　内大臣
とけそめて誰にかみえん花の紐心にかけし春の契は
松隔花　新大納言
花の香はいつくもれまし深みとり松に立そふ朝霞かな
花参差　飛鳥井大納言
おなし枝も咲みさかすみ櫻花いつを盛りの梢とか見ん
未飽花　廣橋中納言
咲つくもあかれやはせん櫻花はるに春そふ日数なりとも
花隨風　宣治朝臣
おしむとも思ひしらてや山櫻風の心にまかせはつらむ
暮春雨　右衛門督
おしと思ふ空も今はた暮て行名残そそふる春の雨かな
暮春躑躅　前内大臣
くれて行春をおしとや岩つ丶しいはても花の色に出らむ
暮春欵冬　中務卿宮
わかうへにこえ行春といひかほに遅くも花の咲る山ふき
暮春藤　内大臣
くれぬとも立や歸らん咲藤の花のしなひの松に見えなは
惜暮春　飛鳥井大納言
暮て行春の色かよわつかなる霞のうちに残る鶯
首夏郭公
したひつるきのふの春の名残をも聞てなくさむ時鳥哉
朝郭公　廣橋中納言
朝と出てそれかとたとる一聲の行衛もつらき山ほと丶きす
杜郭公　雅敦朝臣
時鳥き丶しはそれか玉鉾の道の行手の杜の下かけ
嶋郭公　甘露寺大納言
夕波にうちはへて猶時鳥をちかへる聲を松か浦しま
郭公稀　飛鳥井大納言
とひたえてなと待るらん時鳥をちかへり鳴く去年の古聲
墻夏草　内大臣
あらはなるかきねにしける夏草は人のかこはぬ隔とそみる
岸夏草　基孝朝臣
岸かけやよせかへる波の下草を夏のやとりに敷しのふらん
原夏草　前内大臣
ひととほり吹とはみえて草の原露のしけみを分る夕風
夏草露　四辻宰相中将
夏の夜はしのひになける露のまの〔ママ〕ふ色もみゆる艸の上哉
夏草滋　飛鳥井大納言
庭のおもにしけりそふとも夏草をからてそ秋の花もみるへき
初五月雨　左衛門督
降そめしけふを五月のなか雨と思ふ日数をいかに送らん
閑五月雨　藤原氏直
五月雨の晴まとみしも人とはぬ夕淋しき閑のへの露
濱五月雨
さす潮のひかたやいつ丶海士のすむ里のしるへは五月雨の比

川五月雨　中務卿宮
さゝら波みきはまさりて歩人のわたるせ遠き五月雨の比
五月雨晴　前内大臣
雲のみか晴行けさは五月雨の川邊の水もかつすみにけり
五月蟬　新大納言
さみたれの晴まの露に啼せみの聲もおちくる杜の下陰
山路蟬
雲かゝる梢の蟬のれに立てちる露すゝしは山しけ山
林頭蟬　前内大臣
九重のみはしまちかく空せみの羽の林をやとめてなくらん
瀧上蟬　廣橋中納言
落瀧つみたれてかゝる山風の梢にさはく蟬のもろ聲
故郷蟬　高倉三位
拂はてや置そふ露の故里は梢の蟬も聲まさるらし
鵜川螢　萬里小路中納言
飛ほたるなのか光りや川浪の鵜舟の篝けつとしもなき
古溪螢　高倉三位
朽やらて草うちしける谷水のなかれもあへす飛ほたる哉
池螢　四辻宰相中將
秋のこゑ波に通ひて池水のあしまほのかに行螢哉
湖螢　中院宰相中將
さゝ波にうかふ螢や螢をふれ漕行あとの漁火の影
晩夏螢
よな／＼にひかりもうすく行螢つゝむ袂に近き秋風
初秋風
吹音もさしてそれとは白雲の夕のそらや秋の初かせ
初秋荻
白露もまたをきあへぬ荻のはに先をとつるゝ秋風の聲
初秋萩
いとはやも花もてはやす萩の戸の明る光は露の白玉
初秋薄
秋も今はつ花すゝき吹風になひく末のゝ露みたるらん
初秋虫　藤原氏直
月になる夕の雲の末のより早秋しるき虫やなくらむ
野秋夕　右衛門督
分行も秋は末のゝ夕くれに淋しさそへてきり／＼すなく
浦秋夕　前内大臣
うき秋の夕は波の上にたになかめかれてかかへる釣ふれ
山居秋夕　雅敦朝臣
堪てすむ身は山陰のものなから哀も深き秋の夕暮
旅秋夕　内大臣
また馴ぬ秋の夕の旅衣ひとへに露や身にはしむらむ
秋夕述懷　三條大納言
うき秋はなき名也けり見る人の心にかはるゆふへなりせは
月迎秋明　藤中納言
雲なき光もわきて萬代の秋をしらする雲の上の月
遊子待月　伯二位
おもはすもさそはれいてゝ行人の月みかてらに誰をとふらん
釣夫棹月　三條大納言
釣の糸のおさまる風をすむ月に待出てけりなうたふ舟人

樵客歸月　　内大臣
はるかなる里をもいはす歸るさを待えたる月にうたふ山人

曉月歇雲　　中務卿宮
思はすよすみまさる夜の月に又遠山かつらかけてみんとは

聞擣衣　　廣橋中納言
しらてこそ衣うつ□め更る夜の月におきゐて袖ぬらすとは

江邊擣衣　　左衞門督
浦風に入江の浪も音そへてたゆむまもなく衣うつなり

擣衣誰家　　萬里小路中納言
からころもうちぬる聲はそこともしも分ぬ千里の霜に覺ゆる

擣衣爲愁　　宣治朝臣
いとゝ猶はかちなる秋の夜に哀をそへて衣擣なり

擣衣幽　　前内大臣
かけ高き松より落て荻に吹く風の絕々衣うつ聲

紅葉未遍　　中院宰相中將
秋に先そむる心を立田姬また世にしらぬ紅葉成らん

紅葉山錦
七夕の手にもまさりて山姬や色なる秋の錦なるらん

霧籠紅葉　　藤中納言
きのふみし梢はいつら朝霧やしはし立田の山のもみちは

露添紅葉　　甘露寺大納言
なきそふとみしはきのふの薄紅葉またき染なす露の山かけ

紅葉秋深
山姬の染しは深きもみちはに及ふ色なき常盤木のかけ

初冬時雨　　雅敦朝臣
冬きぬといつしか殘るときに木のかけゝ淋しく降時雨かな

田家時雨　　新大納言
露のもるを田のかりほにをとつれて又袖ぬらす夕時雨哉

驛中時雨　　高倉三位
降出て時雨をすくす宿りさへなれぬる旅の行衞をそ思ふ

簾覺時雨　　中院宰相中將
ほともなきはれさめの空にいく度か過る時雨の枕とふらん

袖上時雨　　甘露寺大納言
はらはしよ露も時雨も紅葉ちるかけになれこし名殘なりせは

嶺落葉　　左衞門督
嶺高み染し千しほの秋のはなきそふ嵐の行衞とそみる

里落葉　　内大臣
散々て行跡もなし山里は朝夕霜の落はなからに

關落葉　　萬里小路中納言
明ぬとて行空そなきあふ坂やおちはに埋む關のとさしは

窓落葉　　中務卿宮
稀に明て月にそ向ふ窓の前おちはをつくす山風の跡

落葉深　　前内大臣
ちりひちのなれる山をも風の跡に積れる落はにそしる

寒夜霜　　同
明てみんわかうちとけてふしかぬる夜寒は篠の霜深き宿

竹間霜　　伯二位
冬かれの草木にわきて吳竹の青葉の霜の色そ珍らし

筏上霜　　中務卿宮
さし下す筏の棹のさはりある夕や床の霜拂ふらん

苫徑霜　甘露寺大納言
たえ〳〵の跡さへ見えぬ苫の上の霜のふる道誰にとはなん
鶴拂霜　三條大納言
蘆たつの拂ふ跡よりましらゝの濱松かれの霜の寒けさ
水路氷　飛鳥井大納言
棹さしてそこともえやはつなき舟渡るつ泪は氷果つゝ
湊畔氷　右衛門督
みなと江の蘆まの氷閉そひて遠く成ゆくなし鴨の聲
蘆洲氷　三條大納言
淺き瀬の白洲にたてる蘆つゝの一夜二夜にかつ氷つゝ
石間氷　雅敦朝臣
行やらて水さへむせふ岩かねをたよりに閉るあさ氷哉
橋下氷　新大納言
風わたる谷のかけはしおと絶て氷れる水そよそに知らるゝ
庭初雪　藤中納言
問ふ人の跡はいとはし庭の面に今朝珍らしきうす雪の空
雪似花　四辻宰相中將
雲はるゝ夕の山は村々にさなから春のはなのしら雪
旅泊雪
波まくらいとはん物か玉くしけ二見の浦の雪の明ほの
雪埋竹　雅敦朝臣
ほともなき垣ねの竹も梅かゝも冬こもりせり雪深くして
歳暮雪
いつのまに移る月日としら雪の積るに見えて年の暮行

第七　十日

都初秋　新大納言
入たゝぬ秋のへたてや袖にふく風のたとはの山のうす霧
山初秋　左衛門督
秋にしもまた立あへぬ山のはの薄霧匂ふ三日月の影
杜初秋　基孝朝臣
今朝よりや杜の下露數そひて月に成行秋の初風
岡初秋　藤中納言
けさよりや草はなしなみ白露の岡へに通ふ秋の初風
關初秋　宣治朝臣
旅人の袖にしられてけさよりや關吹こゆる秋の初風
野初秋　甘露寺大納言
草木にはまたわきかれつ秋の風色なみよとやのへの白露
田初秋　四辻宰相中將
露もいまむすへは結ふ小山田の庵あまたに秋やしるらん
海初秋　三條大納言
打よする波も頃日濱荻のひゝきに成て浦かせそ吹
川初秋　中務卿宮
行まゝにいすゝ川なみ袖かけて涼しく成ぬ秋立らしも
湖初秋　甘露寺大納言
鳰の海は色もかはらぬさゝ波の聲より秋や立はしむらん
七夕月
此ゆふへ待つけかほのあふ瀬にや月もいさよふ天の川波
七夕風　甘露寺大納言
さそひつる風に殘りて一筋の雲やとはりの星合のそら
七夕露　中務卿宮

ことの葉の數々うけよ手向とて草の露とるほし合の空

七夕霧　　飛鳥井大納言

よをおしむ心しるらし彦星の別れもしはし天の川霧

七夕雲　　雅敎朝臣

別れ路のうき瀨をや思ふ天の川夜深き雲の立かさぬとも

七夕橋　　同

戀わたる年に一夜は七夕の契あやしきかさゝきの橋

七夕船　　左衛門督

行末は雲にやつゝく彦星のけふの逢せの天の川舟

七夕扇　　四辻宰相中將

天の川ふたつのほしの影みゆるあふきは秋もおかむ物かは

七夕枕　　前内大臣

織女や天の川原の岩枕ならふる秋はかたき秋かな

七夕衣　　左衛門督

たちぬはぬ雲の衣も七夕にけふやかすらん久かたの空

草花始開　　藤原氏直

とくるより心やおかむ移らふも千種の露の花の下紐

草花未遍

百草に思ひもかへし秋の花かつ咲ころの色の千しほは

草花盛　　高倉三位

うへそふる心を花の色には野への千種の色も及はし

移草花　　飛鳥井大納言

なくさむは花の千種をうつし植て秋の錦にしく物そなき

折草花　　中院宰相中將

露なからおらては過し朝かほのあへす移ふ色は有とも

露添草花　　左衛門督

玉まくや野邊の千種の花の上に今朝なく露の所せきまて

月照草花　　飛鳥井大納言

露しけき花の千種の色々に月も光やわきて染らむ

月前草花

豐なる草のたもとは秋の風立てゐて見ん花の千種を

雨中草花　　中院宰相中將

名殘ある夜のまの雨になく露も花もうつろふ庭の秋萩

霧間草花　　雅敎朝臣

さま〳〵の千種の花のほのかにも月さへくもる野邊の夕霧

三日月　　廣橋中納言

夕附日のこれるほとゝ白雲のたえ間に今そ三日月の影

夕月夜　　飛鳥井大納言

さやかなる空もほとなし夕月夜おほつかなくも誰恨むらん

弓張月　　雅敎朝臣

みる人の心も淸し村雨の空に晴たる弓はりの月

十五夜月　　前内大臣

ふしのねのけふりかは□るけふなしも秋に數へて月もみつ覽

不知夜月　　中院宰相中將

山の端のくるゝ光もうす霧の雲ゐにしるきいさよひの月

立待月　　廣橋中納言

くれしより松のとほそに立待の月にわりなき山のはの雲

居待月　　甘露寺大納言

秋風を光にやみむ霧晴るゝゐまちの月の匂ふ山のは

臥待月　　伯二位

あふくにそわりなき程に思ふ哉けふふし待の月のひかりは

廿日月　前内大臣

夏のうちは花に色こき深見草はつかの露は月や待けん

有明月　新大納言

くもりなきひかりなよもに仰きみよ世にあり明の月よみの杜

山居秋夕　藤中納言

とふ人そ今はあらしの山すみな月はわすれぬ秋の夕くれ

田家秋夕

夕露の外面にひろき千町田のなしれ色つく秋や淋しき

古寺秋夕

小初瀬や峰のひはらの秋の色霧に深むる入相のこゑ

野亭秋夕　内大臣

拂ふともしらぬ野守か草かきは袖の外なる秋のゆふ露

水郷秋夕　甘露寺大納言

身の秋もよしや難波の月のくれうきなわするゝ折も社あれ

關屋秋夕　三條大納言

こよひたに枕やとらん關こえはしらぬ山路の秋のゆふくれ

橋上秋夕　中務卿宮

川風に浮たつ霧やうち橋のたえま多かるゆふへ成らむ

江邊秋夕　萬里小路中納言

わすれしな月に夕やすみのえに生てふ草の其名也とも

澤間秋夕　飛鳥井大納言

さらぬたに夕は秋の澤水にいかにせよとて鴫の立らむ

海路秋夕　右衛門督

秋霧も深き波ちの夕なきに海士の釣舟こき歸るみゆ

鹿聲始聞　雅敎朝臣

山里はいとゝ淋しき打つけにはや妻こひのさなしかのこゑ

鹿聲幽

山とほく月さしのほり空澄てなしか鳴也夜も明ぬへし

鹿聲近　宣治朝臣

さなしかの聲もふり行秋かせになれて淋しきな田のかり庵

鹿聲繁　飛鳥井大納言

小田守のえやはまとろむ遠近に妻こふ鹿の聲そ隙なき

鹿聲催涙　三條大納言

わか袖の夕にもあらすよな〳〵の涙はしるやさなしかのこゑ

鹿聲寄興　高倉三位

山かけの秋はさそなと思ひやる空なことはるさなしかの聲

鹿聲爲友　内大臣

なれきつゝ哀なしかも音にたてつ秋のかくれの同し雲ゐに

鹿聲驚夢　新大納言

いくれさめ夢も殘して長き夜の枕に近きさなしかの聲

鹿聲連夜　左衛門督

よな〳〵に行かへる山は若草の嬬やこもれるさなしかの聲

鹿聲稀　前内大臣

かり殘すいなは一村霜なきて岡への道はさなしかの聲

曉虫　右衛門督

夜寒なやむしも侘らん聲々にねさめの枕ちかく鳴よる

朝虫　中務卿宮

うらかれの草ねにきけは朝露の日影によるの虫のこゑかな

夕虫　前内大臣

いろ〳〵に組とく花の夕露も聲にみたれてむしの鳴らむ

夜虫　高倉三位

なほさりにきけは社あれ松虫は霜より後の曙のそら

旅虫　廣橋中納言

草まくらわれこそまされ長き夜の恨たゝのか虫の聲々

籬中虫

はなちけんもとの垣ねの庭もせに所もさらぬ松虫の聲

枕邊虫　萬里小路中納言

狩衣たゆむ夢路や虫のねもありしに成ぬ草のかり庵

床間虫　内大臣

いさとさも身にしる霜のとことはに哀そひてや蛬なく

月下虫　四辻宰相中將

わく〳〵もあらぬ野もせの露をたに月にたのめて松虫のなく

露底虫　三條大納言

かくなからかれすもあれな虫のねに朝夕露は霜と成るとも

初鴈一聲　内大臣

よそにきく空は有とも雲の上に鳴や名高き鴈の一つら

初鴈似字　高倉三位

雲間にもつくれる文字の墨かきはいく世の秋の初鴈の聲

初鴈夜霧　藤原氏直

ひとかたに待ともしらてうす霧の峰よりはるゝ初鴈の聲

初鴈連雲　前内大臣

見よや此けさくるからに鴈かねもつらなみたれぬ雲の上哉

初鴈橫月　中院宰相中將

久かたの月をためしに契てやかはらぬ空に鴈もきつらん

嶺頭鴈　藤中納言

はる〳〵とこえてきつゝも初鴈のたかねの雲に迷ふ一つら

湖上鴈　中院宰相中將

にほの海の霧の上ゆく舟ならし聲たほにあけ渡る鴈金

關路鴈　廣橋中納言

秋風にたのむの鴈の玉つさは誰爲ならぬもしの關守

橋邊鴈　三條大納言

峰こえてけさくる鴈の跡なれや初霜白し谷のかけ橋

旅泊鴈　宣治朝臣

舟よするうきねの涙のかち枕夢もむすはぬ初鴈の聲

初紅葉　前内大臣

露しくれ松のあたりや染あへぬ色もめにたつ木々のもみちは

尋紅葉　飛鳥井大納言

山里のまた色薄きもみち葉にしくるゝ雲のおくや尋ねん

遠紅葉　中務卿宮

世に知れぬとほ山姫のかさしとや先染出す峰のもみちは

階紅葉　伯二位

なく露の心や年のくれなゐにみはしの櫻秋なしる頃

紅葉曝錦　四辻宰相中將

山姫の錦やさらす夕日影移るもみちの色も更なり

紅葉留人

行つるゝ紅葉のかけは小車のやすらふ程に心見えけり

紅葉帶霜　左衛門督

村しくれいたらぬかたのもみちはた霜やつくさむけさの初霜

紅葉移水　萬里小路中納言

かけひたす水の木のはや中絶ぬ錦をわたる秋の川風

紅葉欲散　新大納言

露しもにうつろひ初てもみちはのあすのあらしにまたぬ山哉

紅葉随風　廣橋中納言

わきて猶名にさそはれて嵐山梢あらはにもみちちるらん

暮秋雨　内大臣

かれ／＼の草木の露も長月の秋の末葉に時雨ゆくらん

暮秋嵐　三條大納言

霜寒きあらしの鐘の聲のうちに尾上の秋やくれんとすらん

暮秋木　伯二位

露時雨おちはをとつれ淋しくも暮行秋を木々にみる哉

暮秋草　新大納言

草木にはなをしたひみん暮て行秋の名殘の露の深さを

暮秋鳥　内大臣

ゆく鴈やかすみの末の俤も殘れる秋にまたしたふらむ

暮秋獸　甘露寺大納言

小萩さく野へになれつゝ暮て行秋やをしかの音にも立覽

暮秋衣　萬里小路中納言

袖の上の露にたにみむ且戸やる空にしはしの秋の名殘は

暮秋鐘　中務卿宮

名殘しも心やくたく秋ならん月おちかれの明かたの聲

暮秋興　右衛門督

行秋をしたふ心は隔なくましはりしろきけふのくれ哉

暮秋旅

行秋もたれことの葉に取そへて紅葉も菊も手向にはせん

第八　十日

曉立春　藤中納言

をしなへてまた夜を殘す鳥かれに先あら玉の春はきにけり

谷餘寒　萬里小路中納言

山風も猶さえかへれ谷のとに花をあらはん雪けなりせは

檜原霞　廣橋中納言

初瀬山ひはらか末の暮初て霞にこもる入相のこゑ

杜霞　甘露寺大納言

それとなき信太のもりの朝霞霞も千重に立やそふらん

名所鶯　同

花にたにとはれぬ滋賀の故里にかれぬ契や鶯の聲

若菜　中務卿宮

代々かけて鶴すむ春の澤へより若菜は君に摘もそめまし

草漸青　左衛門督

日影さす澤への小草春の色に顯はれそむる雪の村消

里梅　伯二位

名にしおふ梅津の里の梅の花往來の袖にふれて咲らし

門柳　四辻宰相中將

門のまへ植し柳のとしふりて露も老せぬ絲をそみる

初花

さきいてし其世もゆかしはな櫻何の色よりうつし初けん

朝花　前内大臣

露もれし柳は髪もみたれけりあしたのかほの花そ色こき

峰花　藤原氏直

くれやらぬ麓のかれの響にて花より匂ふ峰の春風
嶋花　基孝朝臣
白妙の色なふかめて咲花のそれかあらぬか波の遠嶋
殘花　三條大納言
散あとに雲たにうつめ日に近き一木二木な花に殘して
濱春月　右衛門督
霞み行うら波となく長濱の月にめてつゝ明す夜は哉
湖歸鴈
唐崎や波はふもとの鏡山おもかけとめてかへる鴈かれ
松藤　内大臣
なそへなき梢つゝきの松かえにめくれる藤の色なそふらん
苗代　雅敦朝臣
せき入るゝ苗代水に賤のなか心のたれもまきやそふらん
折山吹　伯二位
したひみる心の色はいはれとも手折てしるや山吹の花
暮春　飛鳥井大納言
ちり果て花のみなしと思ふまに日數おとろく春の夕かた
遲櫻　萬里小路中納言
夏かけて思ひし花は藤かえに又立ならふ山さくら哉
岸卯花　内大臣
行とくとやすらふ岸の舟道におる手すさみの卯の花もなし
待郭公
此みやは忍ひ果へき時鳥村さめ晴るゝ月のゆふへに
海郭公　前内大臣
わたつみの渚なかけてひろふてふ玉の聲して啼時鳥
遠郭公　中院宰相中將
雲に猶なきてやしたふ時鳥有明の月もなちかたの聲
瞿麥　甘露寺大納言
花もしれ咲なてしこに山賤の垣ほの昔おもひ出ぬる
岡邊早苗　中務卿宮
殘る日の岡への早苗涼しさはとりも盡さし松かけにして
樹陰照射
ともしさすほかけそしたひつくは山しろきか中も明る短夜
五月雨　前内大臣
ふり初し空の色にて朝なもくれなもわかぬ五月雨の雲
鵜川　三條大納言
やすらはし月いてぬへし行々もはや河の瀬の鵜舟さすらん
簷盧橘　高倉三位
かつさくも近き守りの袖の香ははな橘のまた一重なる
旅夕立　右衛門督
こえわひし山のかひある夕立の袖にすゝしき旅の空哉
野螢　新大納言
夕露のみたるゝ野への草はにもひかりなそへて飛螢哉
納涼　飛鳥井大納言
あつき日なわするゝ水の山陰な人より先に行て涼まむ
六月祓　廣橋中納言
御祓する川せの波のよるかけて麻の葉末になひく秋かせ
早秋　四辻宰相中將
吹かせのそれとはなしにきのふけふ衣手涼し秋や立らん
七夕別　三條大納言

年にありて星の別は別ちにあらぬ物から名殘なや思ふ

秋風　前内大臣

おりしけと風こそ絶すしほりけれ波の音そふいせの濱荻

籬荻　左衛門督

秋□のまかきの内はなく露の風もよきてやなひく萩原

行路薄　中務卿宮

玉ひかる糸かと見えて行袖に露なかけたる花すゝき哉

田上鴈　四辻宰相中將

一つらのこゝにむれきて深邊なるおくてのなしれ鴈あさる哉

外山鹿　雅敎朝臣

吹くるや外山の風に鹿の音もねさめ淋しき床の上哉

原露　萬里小路中納言

咲ましろ尾はなか袖の玉とみる露はなへての秋の萩原

夜虫　廣橋中納言

今宵しもよはると思ふ虫のねにおき初けりな秋の初霜

渡霧　新大納言

世なうみのみわたり遠く立霧も朝夕かせの神のまに／＼

駒迎　前内大臣

神かきに年ふる駒も迎へてし共望月の秋はわすれし

關月

月ふくる身なはいかにと鈴鹿山越てうれしき關ち成けん

竹間月　甘露寺大納言

吹風のはわけ稀なるくれ竹のよ床さひしき月の影かな

浦月　藤中納言

所から月に假寐なすまの浦のあまの笘やはいふせくもなし

古宅月　中務卿宮

あれ行もよしやと秋の月みてそ思ひまきれし露のふる里

涙月　高倉三位

秋のよの光なちらす岩波は月よりおつる瀧のしら玉

擣衣

たか里もまきれぬよはの寐覺哉秋の聲とはひゝく砧に

秋時雨　内大臣

夕日かけみれにも尾にも行雲のいく時雨せしもみち成らん

江紅葉　三條大納言

散すなよ名にしおふえは吳竹の千ひろに深き秋のもみちは

九月盡　中院宰相中將

行秋のけふのわかれな花薄草の袂に猶まねくらし

初冬　藤中納言

山のはの雪はいつみむ冬きぬと池の汀はうす氷せり

瀧落葉

散りくるや水のこのはも岩そゝく瀧の白糸染かへすらん

庭霜　雅敎朝臣

すむ月も雲ゐの庭はおのつから影白妙に霜そくもらぬ

柴霰　三條大納言

吹かへす葉風の色は雪なから霰おちくる峰の椎柴

峰雪　萬里小路中納言

神風や天の岩戸も明る夜のひとつ光なみれの白雪

杉雪　左衛門督

あふ坂や鳥かね遲き關の戸も雪に明ゆく杉の村立

松雪　四辻宰相中將

拂ふへき嵐もまたてけさは先なれおきかへる雪の松かえ

枯蘆　中務卿宮
波にふし霜に枯たつあしのはにおくあらはなるこやの程なき

杣寒月　右衛門督
あはれその名さへ朽木の杣山や霜よの月はみる人もなし

磯千鳥　高倉三位
あら磯のなみのよる／＼なれきてもまた立かへり千鳥啼なり

冬曉
はた寒き空あかつきの山櫻打しく宵やかけやそむらん

川氷　伯二位
ふる雪の水かさおちそふ山川の末は氷のとくるまもなし

鷹狩　飛鳥井大納言
木のうつる鷹をしるへに狩人の鳥立いつくと行山ち哉

澤水鳥　前内大臣
日くるれは山風さゆる澤水のうきねわひたるをし鴨の聲

歳暮　廣橋中納言
行年もさのみしたはしくれぬとも今より千世の春に歸らん

不逢戀　藤中納言
ひろひてもかひ社なけれうつせ貝ありて恨の積る計は

切戀　前内大臣
つゐにさてしらせてたゝにやみやせん思ひし事は言葉殘りて

遠戀　右衛門督
はるけきもたか心なる行衛そと思ふにいとゝ恨そひぬる

近戀　三條大納言
隔てある思ひやそはんしゐて猶我ねぬる夜のかへにみえなは

閑居戀　中務卿宮
とはぬをも堪てふる身や蓬生の露のちきりのかゝる所に

忍戀　飛鳥井大納言
契のみ積る思ひの忍ふ草かれしとすゑを頼くるしさ

片戀
人よいかに見えぬ心のほと計したふつらさのくらへくるしき

別戀　甘露寺大納言
扨もうきわかれをいかゝ年月のあはぬ思ひはかゝらさりしを

貧戀　四辻宰相中將
つれなさのかきりよ人にさりともと思ふ心の末よはりゆく

遇夢戀　中院宰相中將
思ひつゝぬる夜の夢のうき橋やとたえし中に又わたすらん

後朝戀　伯二位
手枕の袖のうつり香のころとも猶したはるゝきぬ／＼の空

聞戀　高倉三位
へたてうき人にきけとの聲やたゝことなしくさを心成らん

久戀　中院宰相中將
たのめつゝ待とせしまにことのはの花も紅葉も移り行空

白地戀　內大臣
ことのはもとりあへぬよに一目みし行衛あやなき袖の上哉

恨戀　宮内卿
つれなくてつもる月日を思ふにも心つからの身をや恨みん

新戀　飛鳥井大納言
いのりてもうけぬ契にいく度かつれなき人に神をかこちし

絶戀　前内大臣

いひてみついはて恨みつ其程の月かは空に知らすつもりき

契戀　宣治朝臣

僞のある世成りとも神に今かけし契の末やいのらむ

僞戀　左衛門督

待てふをたかいつはりのことのはと思ひ果んも又さすか也

變戀　雅敎朝臣

思ひきや結ひし中の露のまに花田の帶の色かへんとは

寄衣雜　中務卿宮

苔靑きいはほをみるも天乙女かけしはいつの衣なるらん

寄枕雜　左衛門督

假ねする春の手枕みる夢も花におとろくあらし吹なり

寄花雜　飛鳥井大納言

靜なる柴の戸明て春ならは花とや峰にかゝる白雲

寄市雜　廣橋中納言

治れる道にたゝしき始とや分ても更にたつの市人

寄舟雜

末つゐに思よるへきさためおきて浪にさはらぬ遠つ舟人

寄橋雜　甘露寺大納言

うつゝとて何たのむらんみる事もうつれはおなし夢のうき橋

寄木雜　内大臣

今はとて宮造りせて山道にけつらしてたてむ木々もふりけり

寄苔雜

君か代は千世そと見えて動なきいはほの苔も綠そふらん

寄水雜　三條大納言

たえせしと契りし君か御裳濯やなかれての世の水のみな上

第九　十日

立春　廣橋中納言

朝かすみ日の本よりや立初てこま唐も春をしるらん

朝霞　左衛門督

鈴鹿川八十瀨の波も立つゝく末はひとつの朝霞かな

谷鶯　高倉三位

世はなへて春のそらとや谷の戸の明ほのしるくうつる鶯

殘雪

太山木の花とやみましなへて世の春のかたへに殘る白雪

若菜　内大臣

もろ人の摘ともあかし雪消て廣き山田の里のわかなは

里梅　中院宰相中將

匂へ猶先咲うめの心よりいく里かけて風ものとけき

簷梅　飛鳥井大納言

たき物に匂ひあはせて釣簾の内に春風ふかき軒の梅かえ

春月　四辻宰相中將

雲の上に立る櫻の花の香はへたてぬものを月そ霞める

春曙　甘露寺大納言

遠近の野山にかはる春霞又珍らしき明ほのゝそら

歸雁　三條大納言

みすてゝん波の春かは常盤なる松もこそあれ歸る雁かね

春雨　藤中納言

靜にもふりくらしつゝ春の雨の軒の玉水なかき日のかけ

岸柳　萬里小路中納言

春の色に明るみとりの糸ゆふもみたれてかゝる岸の青柳

待花　前內大臣

春寒き山に心な置初てことしも花や猶またるらん

初花　中院宰相中將

くもりなき春のひかりな雲の上に先咲花の色にみる哉

見花　萬里小路中納言

いくかへり花も櫻の宮はしら春にみしめの內外へたてし

花盛　中務卿宮

かくなからいく春か見む風吹ぬ櫻の宮の花なためしに

落花　內大臣

くはゝれる春かけてみむちるもの□時な忘れぬ花には有とも

歎冬　廣橋中納言

心なき垣ねともなし山吹の花もてかこふ玉川の里

池藤　四辻宰相中將

のとかなる春の心によせきてや水も動かぬ池の藤浪

暮春

くれにけりきゝしも見しも蝶鳥のうつろしらへの春の名殘は

更衣　內大臣

ぬきかへて思ふ心の花染ものこる匂ひやうすき衣手

卯花　中務卿宮

卯の花に垣ねの草は埋れて去年の雪みるなの山陰

待郭公　甘露寺大納言

ほとゝきす積る夜かれなしひて猶人やりならす待もわりなし

聞郭公

ほとゝきすきたかに鳴て時しもあれ一夜な千夜の明ほのゝ空

郭公稀　飛鳥井大納言

かへり行聲のかきりは白雲のへたてゝうとき時鳥かな

故鄉橘　雅敎朝臣

吹つたへ風の□のみきりにははなたちはなの先かほるらむ

早苗　左衞門督

植わたす小田の早苗の末かけて水もみとりに澄る涼しさ

五月雨　中務卿宮

さみたれの晴行雲に風過てあふちの木陰露かほる也

鵜川　前內大臣

鵜かひ舟岩波高くさしのほるほとや篝の影みたれつゝ

螢　萬里小路中納言

露深く下はくちぬる螢なかれなて近く飛螢哉

夏草　廣橋中納言

とこなつの色かも見はや百草のしけみな分るはなの紅

夏月　左衞門督

さす舟の川風すゝし柳陰月に成行かたやとはまし

夕立　三條大納言

みるか內に早く移りてあま雲はよその峰こす夕立の空

杜蟬　新大納言

かつそむる杜の下葉や鳴せみの羽におく露の秋なみすらん

夏秡　廣橋中納言

松に吹風も涼しく大淀のけふの御秡な神やうけゝん

早秋

なとは山音こそかはれ都にはまたいりたゝぬ秋の初風

七夕　萬里小路中納言

年のはにしたふ心やつもりては淵と成へき天の川瀬か

荻風　中務卿宮

風わたる荻を枕のかたしきにねぬまを秋の夢や恨みん

荻露　三條大納言

おきながら露をこそ見め眞萩原うつろふ花の枝はをる共

女郎花

しるといへは枕はゆかしをみなへし誰爲ならぬ露にこそあれ

夕虫　左衞門督

待出る月影遲き夕くれをなくさめかほの虫のこゑ〳〵

夜鹿

妻こふる鹿の思に秋そ猶まさきのつなのよるや侘しき

初雁　新大納言

明わたる鳥羽田のいなは露みえて秋風寒み雁やきぬらん

秋夕　四辻宰相中將

うきことは山里もおなし秋の色を誰にかこたん夕くれの空

山月

月遲き心いられはちりひちのいつのふもとの山のはの雲

野月

うつろはん花咲野への草の上の露によかれす宿る月影

川月　中院宰相中將

末遠きいすゝの川の世々かけてすまん限りは大そらの月

江月　伯二位

沖つふねよりくる波の濁り江をすまして月の影そさやけき

浦月　右衞門督

たきすさふもしほの烟空に消て月ははる〳〵澄のほる影

籬菊　甘露寺大納言

移ろひし笆の菊も霜の色に染て盛にかへる花哉

擣衣　前内大臣

袖にのみおくと思ひし秋の霜うつや衣の聲も寒けき

曉霧　萬里小路中納言

鐘の音もあけのそほ舟明る夜の沖つ小嶋や霧の一面

岡紅葉　宣治朝臣

夕日さす岡への松の下紅葉しくれにそめぬ色やみすらん

庭紅葉　内大臣

誰ありてすむらん秋の紅葉はのいはかきこむる影もみえつゝ

九月盡　飛鳥井大納言

月にめて紅葉になれし秋もけふわすれぬ物と暮て行らん

初冬　新大納言

ゆく雲の嵐もけさは吹かへて空にもしるゝ冬やきぬらん

時雨　内大臣

谷せはみ吹のほる風の山陰に落る瀧浪しくれてそ行

落葉　前内大臣

山風の空は時雨の晴てたにおちはくもれる木かくれの道

朝霜

行かよふ人より先におき出る鳥の跡のみふかき霜かな

寒草　廣橋中納言

常盤木の梢の色にとられてやいとゝ寒けき霜の下草

千鳥　烏井大納言

立さはく哀よさむの友千鳥磯うつ波に聲をかはして

水鳥

けなかふる廼の霜に夏かりのあしまな思ふなし鴨の聲

氷始結　甘露寺大納言

よな／＼の嵐も同しさゝれ水いかて氷のけさむすふらん

冬　月　藤原氏直

降雪に思ひたゝしな更る夜の嵐に向ふ山のはの月

鷹　狩　三條大納言

雪の上の行幸のみかは御狩野や□□□□道も殘らむ

野　霰　内大臣

〇あらし麓の野へに行ほとやとなきは山の霰成らん

淺　雪　伯二位

はけしくも猶吹そはん夕嵐またてつもるや淺きしら雪

積　雪　中務卿宮

かきくらし積れるうちは松竹のけちめわかれぬ雪の庭哉

閑中雪　右衞門督

鳥の聲松のあらしもなとたえてつもれる雪にくらす閑けさ

歳　暮　中院宰相中將

日數のみ重なる水のこほりには行としなみのよとむともなし

寄月戀　内大臣

たくへてもやかて待みは眞木の戸のよな／＼毎に物は思はし

寄雲戀　前内大臣

わすれしのたのみもうはの空の雲手なかへす開も知らぬ心は

寄露戀　藤中納言

かひなしやおきゐるわすれし忍草露の身にしも消ぬおもひは

寄雨戀

ほしやらてよしやみせはや契たにあらは逢よの袖の村雨

寄風戀　高倉三位

わすれきや打吹からに松風の音はなへての夕くれのやと

寄山戀　飛鳥井大納言

情あらは舍りもとらむ夕くれのまかきは山と人にいひつゝ

寄關戀　甘露寺大納言

いかにせんつらき人めの關ちのみ打ぬるひまのなとなかる覽

寄海戀　新大納言

しられめやみるめ計の契より猶あま人も袖しほるとは

寄原戀　四辻宰相中將

しられしよ拂はぬ露の小笹原わけし計の袖のうへとも

寄橋戀　左衞門督

戀そむる夜の契のためしにもたのめやおかん天のうき橋

寄木戀　中務卿宮

見しは其たくひもなしや山梨の雨にしなるゝはなは花かは

寄草戀　中院宰相中將

心なき草はも秋の夕くれはわきて置そふ露としらすや

寄鳥戀　三條大納言

思ふことよく物いはゝ心なき鳥にも告む恨成しな

寄蟲戀　左衞門督

なかき夜もねぬに明ぬるわか床に思へはおなし松虫の聲

寄獸戀　雅[illegible]朝臣

いつかさて逐みてわれもいさみある心なみせん野への春駒

寄玉戀　前内大臣

衣々の明るあかりの一ときは玉にもかへぬ思ひとなしれ

寄[illegible]戀　廣橋中納言

わか中にかけし契は山鳥のはつをのかゝみ影もくもらし

寄枕戀　雅教朝臣

ひとりねの床にはちりの積る共人にはいつかつけのを枕

寄衣戀　前内大臣

我身のみおもひしをるゝしは衣き馴ぬ道を恨み果てき

寄糸戀　飛鳥井大納言

ひとよさてよそに心を引糸のなかよりふしと成ちきり哉

浦松　内大臣

風のをとも松にきこえて絶またつ涙の隙なき浦の靜けさ

窓竹　甘露寺大納言

灯はきえて夜ふかき呉竹の雪をひかりのまとのうち哉

山家嵐　三條大納言

靜けさを山ともいはしあさ市の聲もさなから立あらし哉

田家　右衛門督

通ひちの近き門田のいなはにもかりほの庵にむすふとはなき

故郷　飛鳥井大納言

花にとひ月に行しも名を殘す昔戀しき滋賀の故里

海路

かきりなきあをうな原の波の上雲もひとつの蜑の釣舟

羇旅　基孝朝臣

かり枕たひの衣の日にそへて分行野への袖の露けさ

述懐　中務卿宮

君か代の光をそ思ふ伊勢の海の玉にましれるちゝのことのは

神祇　前内大臣

いのる世は色々ことに頼みなきにきてにみせて神そうくらし

祝言

雲ゐより雲井になるゝ老の鶴はおなし千年の聲きこゆ也

第十　十日

立春　三條大納言

山松のみとりにかへる春風や下つ岩ねも氷とくらし

山霞　中院宰相中將

春に今おほうち山の朝霞動きなき世に立かへるらん

海霞　廣橋中納言

あらましき波風もなしいせのうみやのとかに霞む春の曙

子日

子日して友とはけふを二葉よりひかてそ松の千世はかそへん

若菜　新大納言

來る春の雪まありとや行袖も猶數そひて若菜摘らん

朝鶯　甘露寺大納言

をきまとふ朝霜まよふ鶯の聲の色のみ春にきけとや

津梅

梅かゝのいつくはあれと難波つや名におふ花の春の一入

夜梅　飛鳥井大納言

さそひこし風いつくそと夢さむる夜はの枕にたとる梅かゝ

岸柳　中務卿宮

よる船に柳も釣のいとはへて涙にえたつゝく春のきし蔭

春雨　宣治朝臣

あかすのみ詠るからに長き日も猶くれやらぬ春雨のそら

春月　内大臣

春ふかく霞みなはてそ故里におもふ人とも向ふ月かけ

春曙　　飛鳥井大納言

雲かすみあかぬ色哉山のはは紫たちてあけほの、そら

歸雁　　四辻宰相中將

海山もひとつ霞の中にしもしるへもありやかへるかりかれ

栽花　　前内大臣

移し植つゝもとのあるしの情をはわすれてことし花はさかなん

翫花　　中務卿宮

物の音もほころひ出て花にけふ匂ひくはゝるこすの春風

惜花　　左衛門督

思ふそよ春のかきりはうつろはぬ色香を花に見るよしも哉

春駒　　藤中納言

萠いてゝ早青み行若草をたのか物とや駒いはふらん

歎冬　　高倉三位

咲はなにくまく見えて山吹のやへの波〔マヽ〕たちの面かな

紫藤　　伯二位

水のおもにうつれるかけも紫の色にそ深き池の藤浪

暮春　　雅敎朝臣

明ほのや月は霞みておほろけの春の日數もうつり行らん

首夏　　高倉三位

から衣立かふる袂ゆたかにも涼しさつゝむ夏はきにけり

更衣　　中院宰相中將

夏衣大みや人の袖よりや先立かへて世にへたてなき

卯花

月雪のひかりに夏の涼しさの色にはあらて咲るうのはな

郭公　　中務卿宮

ひろもなくならひなしらて都には夜のみと待ほとゝきす哉

盧橘

たちはなのかけふむ道にちる花の色香は深き緑ともなき

早苗　　高倉三位

をちこちの門田の早苗靑やかにとる手あまたの袖の涼しさ

沼菖蒲　　萬里小路中納言

あやめ草ねさしかよはゝ沼水の雫もかほれ蘆のむら立

梅雨　　四辻宰相中將

今よりははるゝと見えて山風の雲吹かへす五月雨のそら

夕立　　萬里小路中納言

さそひこし山路の雲の行衞をもまたて足とき夕立の空

夏草　　中院宰相中將

夏深み松見しまゝの緑なるひとつ草はやしけりやはせん

夏月　　宣治朝臣

夏の夜はみるかうちにも月影やまた山のはにうつり行らん

瞿麥　　廣橋中納言

をきそへて猶こそ露のちるならは拂ひやせまし床夏の花

氷室

岩たゝみせき入し水の氷室山冬をもらさぬ松風そ吹

結涼　　内大臣

涼しさは山下水のさしくみに結ひもあへぬいはまくらかな

夏祓　　三條大納言

いさきよき心はひとつ川風も七瀬にかはるみそきすらしも

早秋　　飛鳥井大納言

荻か吹風はなとせてさそひちる桐の一葉に秋なみせけり

七夕　内大臣

又ことし昔の秋に迎へみんその夜もとなき星合の空

稻妻　三條大納言

朝かほの花のひかりもあらそふや露はつれなきいなつまの影

籬荻　飛鳥井大納言

淋しさの夕もしらすうへて見る笆は荻の風のたとつれ

隣槿　廣橋中納言

よそまてもいかにみよとか中垣にあまりてかゝる槿の花

葛風　前内大臣

なかき夜な秋くり返し今朝たにも風吹たえぬ葛のはかつら

野萩　中務卿宮

咲ましろ花はありとも秋のゝの露はまはきの枝なからみん

路薄

道のへや穗に出る頃は行袖もましろな花の露の秋風

曉露

誰かうへもはらひ盡して明方の秋のおもひの露は殘らし

夕鹿　四辻宰相中將

里となきふもとの野への夕霧に妻こふ鹿の立やなれけん

初鴈　雅敎朝臣

したはれし春の名殘も今宵又思ひそいつる初鴈の聲

叢虫　基孝朝臣

露ふかき秋の末のゝ草むらにそことしもなき虫のこゑかな

崎霧　甘露寺大納言

行舟のほのかになりぬ霧わたるかれの御崎の秋の浦なみ

嶺月　高倉三位

すみのほる秋の空とは先しろき高ねの月のそらにほのめく

湖月　前内大臣

月はたゝそこのみるめも渚より鳴てる涙に月よせてみん

關月　新大納言

あふ坂の山路なこえて今宵猶更行月に關守もかな

濱菊　伯二位

波かせに匂ひも深し吹上の濱へに咲る秋のしらきく

擣衣　中院宰相中將

風の音も猶身にしむや麻衣打もれぬ夜の秋深き頃

黄葉　前内大臣

うすもみち時雨に染てあかれさす日影なよその色や分らん

暮秋

歌闕

初冬　前内大臣

いつよりか身にはならさん昨日けふけしき計に開くうつみ火

時雨　飛鳥井大納言

散のころ山の木のはの風の花に染つくるとや又しくるらん

落葉　廣橋中納言

しけりつる梢はいつく木枯におちはみたれてなける朝霜

枯野　飛鳥井大納言

秋せかの恨みし色か霜に今野へのまくすはそれとしもなき

寒蘆　中務卿宮

あしま行舟もあらはに湊えの霜の枯はの風の寒けさ

井氷

冬のきて夜なも重ねぬつゝゐつのいつより氷むすひそめけん

千鳥　中院宰相中將

なく聲にしるくも君か八千世とはさして指出の礒千鳥かな

殘鴈　伯二位

春に猶かへらすも哉冬深き刈田の面にわたるかりかね

網代　雅教朝臣

宇治川や波風あらく更る夜は猶よるひなの網代守らん

寒月

うは玉の夜わたる月は空の海や氷なしきて影そ流るゝ

庭雪　萬里小路中納言

村すゝめおきいてゝみれは吳竹もとなよる庭の雪の靜けさ

炭竈　右衛門督

ふり晴るゝ雪にまちかく炭かまの煙も見えて明わたる空

埋火　甘露寺大納言

ほのみつゝかきおこさても霜冴る夜半社たのむ埋火のもと

佛名　左衛門督

唱へぬる三世の佛の名なきくにいかなる罪か有て殘らん

歲暮　三條大納言

やすけくも暮てよ星のあふことの三といふなる今年と思へは

初戀　雅教朝臣

うちつけに戀の路芝ふみまよひ猶ゆく末や身にたとらまし

忍戀　新大納言

音にたに立すはいかて涌かへる心の瀧も人にしられん

聞戀　雅教朝臣

なとにのみ聞し計の恨なはいつかは人にいひもよらまし

見戀

いかさまの限しらせよま近くもさすかに見るはつらき物から

尋戀　內大臣

たつねこし名もあらはさて難波なるよしあしにのみ物思ふ覽

祈戀　飛鳥井大納言

祈りこし誓はいつかきふれ河しらぬあふ瀨な神に任せて

契戀　中務卿宮

かけおきし誓は神もかはらしの契な人に猶たのむかな

待戀　前內大臣

身におはぬ道なしらせよ今はとて待もよはらん宿の夕暮

會戀

いかてかは新手枕の黑髮のあかぬ思ひのむすほゝるらむ

別戀　右衛門督

契りおく人の心は白露の曉ふかくわかれゆくそら

顯戀　三條大納言

しらすしてしたにも過る浮名さへ思ひしものな色に出ける

稀戀　四辻宰相中將

祈るてふしるしもあれなあふ事の稀なる中にかゝるゆふして

絕戀　內大臣

いひ出てかすかく計水莖の人つてさへやうとみいつらん

怨戀　藤中納言

とにかくにつれなきへよ葛のはの恨むる程なしるよしも哉

舊戀　雅教朝臣

ふるさるゝうき身軒はの忍草しのふにあまる露のみたれは

山家　新大納言

今はとて深き山路にすむ人も賢き御代にいてゝつかへよ

田里　　右衛門督

天地のふかき惠もしられけりたのもつゝきの民の家々

隣家　　萬里小路中納言

へたてなき心はしるや中垣に花も紅葉も枝をかはして

閑居　　雅敦朝臣

折々はたゝ松かせのをとならてわかかくれ家そとふ人もなき

離別　　甘露寺大納言

わすれしの其かれことも立別れ程へん旅のなくさめにせん

羈旅　　左衛門督

旅にしもゆかすはかゝる海山の詠めはあらし明ほのゝ空

海路　　廣橋中納言

御調物今はこふらし四の海波おさまれる君か御代とて

野宿　　内大臣

ともす火の影あらはなる一庵や野へのくまなる道のはるけさ

故鄕　　中務卿宮

吳竹のよゝにかはらぬ陰に社里はふしみの名にものこらめ

眺望　　萬里小路中納言

打出る波も千ひろの濱風に曇なき世の日の御影哉

述懷

神代よりたのみこし身のうけつきて數は百枝の松もむつまし

懷舊　　藤原氏直

かしこしな時いたりつゝ君か代の古にかへる道を思ふも

釋敎　　前内大臣

たのもしな世を祈れとてさためつゝ國に分てる寺の數々

瑞籬　　三條大納言

川上やあまくたりにし道しより千々の社もあとをたれけん

祝言

雲の上のひかりもさらす天照す神の誓の千世もかはらし

右十百首丙寅之歲於二浪花一得レ之。頗雖レ有二不審一依レ無二類本一不レ能二挍合一矣

和歌部二十

白河殿七百首

文永二年當座七百首於禪林寺殿被行之

作者

御製（後嵯峨院）　五十八首　前左大臣（實雄）　廿六首
民部卿入道爲家　七十九首　五條前大納言資季　四十二首
新大納言顯朝　四十五首　皇后宮大夫師繼　廿八首
侍從中納言爲氏　百十四首　源宰相資平　廿七首
從三位行家　三十七首　右兵衛督爲教　廿五首
富小路三位中將公雄　十五首　雅言朝臣　廿七首
忠繼朝臣　廿三首　具氏朝臣　廿八首
經任　廿首　眞觀（右大弁光俊）　四十五首
禪信（侍從入道）　十五首　範忠朝臣　十四首
重名朝臣　七首　資有　八首
賢阿（俗賢入道）　十五首

題者

民部卿入道　春百三十首　戀百五十首
侍從三位　夏七十首　冬七十首
眞觀　秋百三十首　雜百五十首

文永二年七月七日於白河殿當座御會也

春百三十首

年中立春　御製
初ねとはおもはさらなん一年にふたゝひきたる春のうくひす

都初春　同
もろ人の袖なつらねてたちまふに春来りともみゆる宿かな

初春風　眞觀
かこ山の松風はやく春立て波にそかへる池のこほりは

子日祝言　重名朝臣
子日する松は千年ときゝしかと猶末遠き君か御代かな

子日松　御製
子日とてけふひきそむる小松原こたかきまてなみるよしも哉

山霞　民部卿入道
山のはのみえぬな老にかこちても霞にけりな春のあけほの

野霞　重名朝臣
旅衣袖にさきたつ春風に猶末かすむむさしのゝ原

關霞　侍從中納言
春のきる霞の袖の色そへて衣の關のなにやたつらむ

里霞　同
霞むより春そしらるゝ吳竹の伏見の里の明ほのゝそら

橋霞　融覺

鳰の海や霞てくるゝ春の日にわたるも遠し瀬田の長はし

瀧霞　前左府

水上は雲のいつこもみえわかすかすみておつる布引の瀧

渡霞　侍從中納言

舟人の淀のわたりは明やらて春の夜ふかくたつ霞かな

湖霞　範忠朝臣（御製イ）

志賀の浦やおなし緑の松かえもいくとせ春のかすみきぬらん

海霞　御製（爲氏イ）

久かたのあまの鹽くむ袖なれやかすみにかゝるおきつしら波

濱霞　侍從中納言

沖津波高師のはまの松かれのあらはれかたくたつかすみかな

舊巢鶯　新大納言

あら玉の年かへりぬと鶯のふるすのはつねいまやなくらん

雪中鶯　忠繼朝臣

春きてもまた雪ふかき山里にをのれ時しる鶯の聲

竹鶯　源宰相

きくからに聲なひくまて鶯のねくらの竹に春かせそふく

寢覺鶯　侍從三位行家

春の夜の明行まとのくれ竹に夢もみしかき鶯の聲

夕鶯　新大納言

大かたにかすむとみえて鶯のなくねのうちに日はくれにけり

春氷　經任

春風もまた吹とかすいかはかりむすひかされし氷なるらん

野若菜　前左府

消そむる雪まもあらはとふひ野にはやした萠の若な摘てん

原若菜　雅言朝臣

白妙の袖ふりはへて片岡のあしたの原に若なつむなり

澤若菜　御製

うらやまし年はつめとも澤に生る草なは人の若なとそいふ

水邊若菜　皇后宮大夫

つらゝゐし野澤の清水下とけて若なつむへく春めきにけり

殘雪　重名朝臣

春日野の草はみとりにそめなから木陰さえたる雪のむらきえ

餘寒風　皇后宮大夫

春きても霞のま袖猶うすみさむさかはらぬやまおろしかな

二月餘寒　具氏朝臣

今ははや霞の衣たちぬれとなをきさらきの袖そさむけき

依風知梅　三位中將公雄卿

咲にけり難波のみつの梅花里のしるへの春かせそふく

里梅　具氏朝臣

さきぬとはいはての里のいはれ共よそまてしるく匂ふ梅かえ

簷梅　忠繼朝臣

うつしうふる宿こそ年はふりぬれと春しりそむる軒の梅かえ

古宅梅　新大納言

風吹は雪とふるやの梅の花おりによるとてとふ人もなし

梅薫枕　眞觀

いかにせんねやもる梅の花のかにねんかたしらぬ夜半の手枕

暗夜梅　資有

梅のはな夢にはまさる匂ひともやみのうつゝに尋ねてそしる

梅移水　新大納言
咲日より花のかゝみとみゆる哉梅の下ゆく庭のやりみつ
梅香留袖　侍従三位
しのひにも折やしつらん梅かゝをありとなふきそ袖の春風
梅浮潤水　御製
谷川のその水上に梅のはなおりとやこゝになかれきぬらむ
梅落衣　侍従三位
おれはかつ袖にそもろき梅の花老かくろやとかさすかひなく
柳露　源宰相
ぬきとむる玉かとそみる朝露にまた風たゝぬ青柳のいと
門柳　侍従中納言
青柳の春の梢のたか門に奥ゆかしくもよそにみすらん
行路柳　同
春風のたよりしられて道のへにまつなひきける青柳の糸
柳靡風　雅言朝臣
春毎に風や心にまかすらんなひくもしろき青柳のいと
河柳　具氏朝臣
立田川うきて波よる青柳のわたらはいとゝみたれこそせめ
橋邊柳　侍従中納言
古河のよとのつきはしそれなら（いと・しくイ）て春まちわた（かせイ）るやなき（青柳のいとイ）かけ哉
田邊柳　同
遙なる田中の道の古柳春のみとりはよそにみえつゝ
春夕月　前大納言
なかき日のなをくれやらぬ雲まよりまた影うすき月をみる哉
春夜月　眞観
春のよはたかくれをまつ名殘（ならひイ）とてくもるさへとも月のみる覽
春曉月　前左府
なかめても我身にあまる光哉花の木かけのありあけの月
故里春月　融覺
思ひいつる春や昔の月そともたれにとはまし志賀の故里
浦春月　御製
ところから光りかはらぬ春の月あかしのうらはかすますも哉
歸鴈連雲　前左府
なこりこそ一かたならね鴈金の雲のよそなる春のゆふくれ
歸鴈幽　同
歸る鴈霞のよそに鳴すてゝほとは雲井に遠さかるかな
歸鴈似字　雅言朝臣
うす墨によみもとかれぬ玉章は霞の遠にかへるかりかね
峯歸鴈　前大納言
夕霞たちへたてたる高ねより聲にしらるゝ春のかりかね
海歸鴈　賢阿
難波かたしほちはるかに聲たてゝ今は春へとかへる鴈金
待花　侍従中納言
かすむ日も花はつれなく咲やらて心つくしのきさらきのそら
尋花　同
まちわふる心を花のしるへにて雲もいくへの山ちこゆらん
栽花　融覺
心をはとめしと思ふ老か世にことしも春の花をうへつゝ
初花　淨信
けふよりそよしのゝ櫻咲そめておられぬ雲をよそにみる哉

見花　右兵衛督

春毎にあかすなれても山さくら花にやけふもなかめくらさん

翫花　侍従三位

花もまたあはれをかはせ春の日のなかくもあかぬ心みえなは

交花　新大納言

芳野山このもかのもの花さかりいつれとわきていかゝ眺めん

花忘老　前左府

老らくの道もさこそはまかふらめ身をわすれてもみつる花哉

折花　新大納言

飛鳥風あすもこそふけ櫻花おりてかへらんみぬ人のため

頭挿花　融覺

けふもまた大宮人の櫻花のとけき春（なかきはるひのイ）のかさしにそさす

曉花　御製

是もまた有明のかけとみゆる哉よしのゝ里のはなのしら雪

朝花　融覺

朝な〳〵櫻さきそふよし野山雲より外はめにもかゝらす

夕花　前大納言

山里の軒端の花の夕はへに大宮人はかへらさらなん

夜花　前左府

みてもなを夢かうつゝかむは玉のよる共花のかけはわかれす

花交松　融覺

高砂の松にかゝらぬ白雲はおなし尾上のさくらなりけり

竹間花　皇后宮大夫

木にもあらす草にもあらぬあたりまて千年を契る花さくら哉

花似雲　侍従中納言

さかぬよりよしのゝ櫻おも影にまつかゝりけるみねのしら雲

花留人　眞觀

木の本に送る日數のつもりなは故里人や花をうらみん

花下忘歸　御製

みる人の家ちわするゝ花さかりなとしもかへる春のかり金

依花待人　前大納言

都人いつかとはんと故郷の花のあるしにまかせてそふる

花未飽　雅言朝臣

なからへはなを行末の春もまたあかてそ花のかけにくらさん

絲櫻　皇后宮大夫

白河やちかきみ寺の糸櫻としのをなかく君そかさゝむ

八重櫻　侍従中納言

春の日の光もそひて九重にさかりひさしき八重さくら哉

禁中櫻　右兵衛督

吹風ものとけき春の九重にかされてにほふはなさくらかな

社頭花　皇后宮大夫

神たにもあはれをのこせ三笠山花のよそなる我身なりとも

古寺花　前大納言

はつせ山尾上の櫻さきしよりけかれぬ花とたむけつるかな

山家花　雅言朝臣

人とはぬ山のかきほに咲そめて花のうきなになりぬへき哉

閑居花　侍従中納言

ひとりみる花を主とかこちても身のつらきにはとふ人もなし

志賀花園　同

すきにける昔の春のなこりまてさきてかはらぬ志賀の花その

山花　同
高砂の尾上の雲の色そひて花にかさなるやまさくらかな
嶺花　經任
山櫻さきにけらしな春風のこすえに匂ふみねのしら雲
溪花　新大納言
くれかゝる谷陰しろくさく花をゆふへにかへる雲かとそみる
岡花　融覺
旅人のゆきゝの岡はなのみして花にとゝまる春の木のもと
野花　御製
雪とのみふるからな野の櫻花なを木の本はわすれさりけり
里花　具氏朝臣
立かへりなをみてゆかん櫻花衣の里ににほふさかりは
杜花　新大納言
つれならぬ世のためしとや櫻ちる森を夢てふなにはたてけん
林花　融覺
咲にけり雲のたちまふ伊駒山花のはやしの春のあけほの
關花　具氏朝臣
さらてたに心をとむる白河の關路すきうき花さかりかな
池邊花　前左府
吹風もおさまれる代にすむ池の花のかゝみはいつもくもらし（すイ）
雲間花　皇后宮大夫
まかふ共なにこそたてれ峯の雲うつろひやすき花のあたりに
霞中花　御製
立かくす花をはしらす大かたのかすみそ匂ふ春のあけほの
月前花　經任
春の月かすめる影のうつろひて花も朧のにほひなりけり
雨後花　侍從中納言
春雨にこぬれかくれて足引の山のこかけの花（はイ）にほふらし
水上花　融覺
春ふかくうつる日影も山水の花のかゝみいくもるにそしる
庭花　侍從中納言
君か代は庭の春風のとかにてちらぬさかりの花そひさしき
瀧花　融覺
石はしる瀧つみなはの櫻花おちてもあはれかすまさりけり
落花如雪　皇后宮大夫
おしめともあひもおもはぬ櫻花心つからそ雪とふりける
苔上落花　融覺
こけのむす庭の通路さらてたにあとなきうへの花の白雪
惜花　具氏朝臣
猶かへりことにはりしらす惜むらんちるはならひの花の名殘を
殘花　融覺
人しれぬみ山櫻はほかのちるのちとてたれか尋ねてもみん
曙春雨　侍從中納言
はれやらて雲もわかれす朝霞たなひく山の春雨のそら
庵春雨　具氏朝臣
人とはぬみ山の庵のなかき日にさひしさそひて春雨そふる
旅春雨　三位中將
かへりみる都のかたはかきくれて朝たつ旅の春雨のそら
春曙　具氏朝臣
みるまゝに心うかるゝけしきかな山のはかすむあけほのゝ空

山田苗代　資有
我のみと心ひきつる山里にまたなはしろの水もありけり
河邊苗代　賢阿
山城のゐての川水せきかけて田面をみれはしめはへてけり
路苗代　重名朝臣
み山路やたかなはしろとしられともゆきゝの人の水やひく覧
野菫　眞観
淺茅生の小野のしめゆふ人もありとつまてはいかゝ菫さく也
庭菫　雅言朝臣
數ならぬまかきにさけるつほ菫をのれ時しる春の色かな
松下躑躅　御製
さきましる山のつゝしの春の色をいはれの松にかけてみる哉
嶋欵冬　眞観
さきにほふ小嶋か崎の山吹や八十氏人のかさしなるらん
河欵冬　融覺
行春をいかてしるらんくちなしのいはぬを色の井手の川波
夕欵冬　御製
くれぬとも遠かた人にことゝはんいはぬ色なる花はなにそも
里欵冬　右兵衛督
里のなはいはてもしるしくちなしの色に出たるやまふきの花
籬欵冬　融覺
行春もよるはこえしととまるらんくるゝまかきのやま吹の花
松藤　侍従中納言
君かため松の千年をためしにてかゝるもひさし春の藤波
池藤　前左府
さきかゝる松のみとりに色そひて底さへにほふ池のふちなみ
夕藤　新大納言
たつれつゝいく田の森の藤花あかぬなかめに日はくれにけり
岸藤　源宰相
手折とて袖こそぬるれ瀧つせのかた岸かけてさける藤波
浦藤　御製
心ある蜑や植けん春毎に藤咲かゝる松かうらしま
惜春　前左府
風ふけは殘りすくなくちる花にかれて物うき春のくれかな
春欲暮　御製
たえてみる我をつれなく思ふらん春くれかたのあり明の月
惜春不留　融覺
山川の花のしからみかけてたによとまぬ春はとまるせもなし
三月盡夕　前左府
悲しさは秋のゆふへと思ひこしなこりもたとる春のわかれち
三月盡夜　侍従中納言
慰むるかたこそなけれくれはつるこよひ一夜の春のなこりは

夏七十首

首夏朝　右兵衛督
ひとへなるうすき袂のから衣けさたちかへて夏はきにけり
杜首夏　賢阿
みな人の花の袂をかへしよりみとりにみゆる衣手のもり
谷餘花　三位中將
なをのこるやよひのゝちの山櫻心ありけるたにの下かせ

岸卯花　前大納言
此河のきしの卯花さきしよりよせくる波のかへるとそみる

籬卯花　融　覺
卯花のまかきは雲のいつくとてあけぬる月のかけやとすらん

卯花盛　侍從中納言
人もとへさくやう月の花さかりこてふににたる宿のかきねを

待郭公　眞　觀
時鳥たのめてたにもつれなくはまつにつけてや猶うからまし

初郭公　忠繼朝臣
み山いつる道やは遠き時鳥さよ更てこそはつねきくなれ

聞郭公　眞　觀
たか世よりかくはきゝけん時鳥いつもはつねと思ふはかりに

郭公一聲　範忠朝臣
時鳥たゝ一聲のなこりたに雲のいつこにとをさかり(ゐらんイ)ぬる

曉郭公　三位中將
待人もいかにせよとか時鳥あり明まてはつれなかるらむ

曙郭公　右兵衛督
あけわたる嶺のよこ雲たえ／＼に聲もほのめくほとゝきす哉

朝郭公　同
夜な／＼はまてとつれなき時鳥けさ遠かたの雲になくなり

夕郭公　源　宰相
月をのみまたぬゆふへの心とは思ひしりけるやまほとゝきす

夜郭公　侍從中納言
待えてもきくとはなくて時鳥なくや五月のよはそほとなき

雲外郭公　(具氏イ)重名朝臣
雲のゐるみねたちはなれ時鳥ふもとのかたに聲ふるすなり

月前郭公　眞　觀
待ほとはつれなくみえし時鳥さもそ有明の月になくなる

雨中郭公　禪　信
くれかゝるたそかれ時の村雨にぬれてもなのる(れイ)山ほとゝきす

郭公幽　眞　觀
しはしこそそれかともきけ時鳥さかひはるかに聲やなりぬる

山郭公　範忠朝臣
時鳥山路も末になりぬれはかたらふ聲にけふはくらさん

里郭公　新大納言
時鳥はつねはもらせしのふとはたゝ大かたの里のなゝらし

渡郭公　眞　觀
淡路かた沖こく舟のほかにまたこれもとわたるほとゝきす哉

關郭公　同
山陰の不破の關守とはねとも心となのるほとゝきす哉

岡郭公　新大納言
とゝめはや岡の椎柴しはしたにやすらはてゆく郭公かな

原郭公　右兵衛督
み山をは今や出らん郭公すそのゝ原のむらさめのそら

郭公稀　三位中將
今もまたはつねならねと時鳥まれなるころはまたれやはせぬ

盧橘初開　御　製
むかしへの匂ひときけと(はイ)たのまれすけさ開けたる軒のたち花

盧橘薫風　範忠朝臣
みしか夜の明かたちかく吹風にありかもしるくにほふたち花

故鄉盧橘　三位中将
これやまた〻ちし軒はのあとならん志賀の都にのこるたち花

沼菖蒲　貴　有
人とはぬか〻れの沼のあやめ草なみのひくにそれは浮にける（根イ）

池菖蒲　融　覺
なかきねをためしにひきてあやめ草千代もすむへき宿の池水

苅菖蒲　具氏朝臣
をのつからかりたにのこせ菖蒲草さひしかるへき淀の渡りに

簷菖蒲　雅言朝臣
山かつの軒のしのふにめなれつ〻あやめもわかぬ五月雨の頃

袖上菖蒲　經　任
時しあれは五月の蟬のはころもの袂ににほふあやめ草かな

田家早苗　新大納言
岸ちかきたよりの水をせき入て門田の早苗いそきとるなり

急早苗　侍従三位
けふのみと急くやたこの手もたゆく千町の苗の節た〻ぬまを

嶺五月雨　皇后宮大夫
雲ふかき峯の椎柴しは〳〵もはれまをのこせ五月雨の空

杣五月雨　同
日にそひて水もいつみの杣川に宮木をなかすさみたれのころ

磯五月雨　侍従三位
汐みたぬ近江の海も五月雨にいりぬるいそとなれるころ哉

湖五月雨　融　覺
か〻み山かけたにみえすさ〻波に雲もおりたつ五月雨のころ

橋五月雨　眞　觀
みし人も袖やぬるらん五月雨になさへわする〻あさ水のはし

船中五月雨　同
舟人はとまの雫に袖ぬれていく夜とまりのさみたれのころ

濱五月雨　前大納言
湊川となつひかたもなかりけり水まさりゆく五月雨のころ

閑中五月雨　御　製
くもる日の五月雨しけき此ころはわか影たにもみえぬ宿かな

連日五月雨　雅言朝臣
きのふといひけふと暮せる五月雨に飛鳥の川の水まさるらし

五月雨欲晴　忠繼朝臣
五月雨は雲まかちになりにけるたえ〳〵月の影もみえつ〻

寢覺水鷄　侍従中納言
ぬともなき夏のよのまの程たにもなにおとろかす水鷄なる覽

深夜鵜河　御　製
かたふけは山陰くらき大井河月にもくたすうふねなりけり

瀨鵜河　禪　信
大井川せ〻に棹さすうかひ舟くたせははやきか〻り火のかけ

遠村蚊遣火　賢　阿
蚊遣火のけふりたつなり里遠きゆつはの村に日はくれにけり

庭夏草　新大納言
しけれた〻庭の夏草あともなく道ある御代はたとりしも（たにイ）せし

路夏草　御　製
駒なへて野路をすくるかち人の弓末もみえすしける夏草

澤夏草　侍従中納言
うちわたす淺澤水の影をたによそにへたて〻しける夏草

聞蟬聲　皇后宮大夫
ちりなたにすゝしと思ふ撫子に逆きあたりのことゝはそうき

野草待露　忠通朝臣
とこなつの花の白露かすく／＼になく物からや色のみゆらん

行路夕立　三位中將
ゆふ立はよそにやすくる雲ほこの道のゆくてに風そすゝしき

湊夕立　侍從中納言
おきつ波なと吹たてゝしほ風のみなとにかゝるゆふたちの空

野夕立　侍從三位
夕立の木の下風に露おちてなこりもすゝしみやきのゝはら

名所夏月　雅言朝臣
待いつる月ななつみの河なともすゝしさそふる山の下かせ

水邊夏月　具氏朝臣
みしか夜い蘆まの水にかけすみて明るほとなき夏の月かな

夏月似秋　融覺
あけやすき夜のまならすは月影を秋の空とや思ひはてまし

樹陰蟬　侍從中納言
うつ蟬の身ないたつらにれなそなくしけき木かけの夏の夕暮

瀧邊蟬　同
嶺たかき瀧のひゝきに打そひて山下とよむ蟬のこゑ／＼

叢端螢　前大納言
日なへつゝやゝしけり行草村にひかりかくれすとふほたる哉

螢過窓　侍從三位
みるまゝにとかれにけりな行螢あつめぬ窓をよそにしらせて

曉夏螢　侍從中納言
秋風や雲井はるかに通ふらんみそきにちかくゆくほたる哉

夏夜待風　前大納言
五月雨のはれ行空に月すみて雲吹はらふ風をまつかな

松下納涼　同
ゆふつく日さゝぬ岡への松陰に夏をわするゝ風のをとかな

野泉避暑　融覺
手にむすふ泉の水のすゝしさは秋をこえてや波もたつらん

河夏祓　御製
河へなるあらふる神に祓して民しつかにといのるけふ哉

秋百三十首

立秋曉　皇后宮大夫
御祓してかへりもあへす袖の露曉かけて秋はきにけり

新秋雨　[illegible]
秋たちていく日もあらぬ村雨にあさく木のはの色やそむらん

初秋風　新大納言
袂のはにいかなる色をつけそめて悲しき物そ秋のはつ風

早涼至　融覺
いつのまに秋はきぬらんうたゝねの我衣手に風そみにしむ

山早秋　[illegible]
風のをとのふしみのくれにかはる哉秋やきぬらん木幡の山

田早秋　新大納言
いとはやも雲とやみえん門田なるきのふの早苗穗はきにけり

待七夕　同
天川あすわたらんと思ふよりあふせをまたてぬるゝ袖かな

織女契久　御製

七夕のあまの羽衣いはなてゝつきぬやけふのためしなるらん

二星適逢　新大納言

彦星のつまむかへ舟いかにしてまれに逢瀬をわたしそめけん

海邊七夕　眞観

いせの海やあまの河原につゝくらんこよひなにあふ星合の濱

野外七夕　前左府

星合のひかりやこゝにうつるらんかたのゝ□□□天の河なみ

七夕別　右兵衛督

けふもまたたえぬ契をたのみにてわかれはかなし星合の空

羇中七夕　侍従中納言

七夕のあふたくひこそしられけれ一夜はかりのおなし旅ねに

聞荻　同

人とはぬ庭の荻原をとたてゝ風のみ秋の夕くれのそら

遠荻　賢阿

遠かたや荻の葉そよくをとす也たかすむやとに風わたるらん

近荻　侍従中納言

うたゝねのよはの秋風をとたてゝ枕になるゝ庭の荻はら

山居荻　前左府

それとなき草にやつるゝ山里は風にそしるき庭の荻はら

垣荻　眞観

哀ともたれかはきかん我宿の垣ほにしける荻の上かせ

簷荻　侍従中納言

契りなく軒はの荻のたよりにもたのみかたしや露のかことは

荻驚夢　御製

さらてたにねさめかちなる老らくの夢なさましそ荻の上風

女郎花多　侍従中納言

あたにたつなをは思はす女郎花おほかる野へに宿やからまし

野亭女郎花　融覺

庵むすふさかのゝ秋の女郎花心つからや露もをくらむ

澤女郎花　忠繼朝臣

おも影をうつしてとめよ女郎花野澤の水に秋はくるとも

原萩　同

さきそむる色たにふかき萩の花末そゆかしきむさしのゝはら

岡萩　新大納言

旅人の花すり衣きぬはなしゆきゝの岡のはきさけるころ

行路萩　雅言朝臣

なをさりにおりてかさゝん玉ほこの道の行ての秋はきの花

河邊萩　右兵衛督

影うつる色さへふかし秋はきの花にせかるゝ野路の玉川

萩盛　具氏朝臣

なへてはや色に出にけりはきの花いまや盛と人のとふまて

折萩　侍従中納言

うつろはん色をはしらす朝露にぬれて折つる秋はきのはな

萩欲散　同

おしめ共ちりやそめけんさをしかのむねわけにする秋萩の花

籬薄　皇后宮大夫

白露の庭もまかきも玉散て薄をしなみ秋風そふく

薄似袖　侍従中納言

ほに出る遠かた野への花すゝきたか袖とてか秋かせのふく

薄隨風　同

一かたになひきにけりな花すゝき草のたもとの秋のゆふかせ

蘭蕙枕　三位中將

ぬきすてしたかなこりとて藤袴夢の枕に今にほふらん

戸外槿　侍從中納言

山かつの柴のかき（とさしイ）とのなし明（あけぬれはイ）に露もをきける朝皃のはな

草花露　同

高圓の野へのしら露色そへて尾花にましる萩か花すり

淺茅露　資有

風わたる岡の淺茅にをく露のしはしのほとをやとる月哉（かけイ）

苔徑露　雅言朝臣

朝ほらけあとなき苔にたとりつゝ露わけわふる山の下道

朝露　具氏朝臣

朝毎におきてそみつる庭もせの草の葉末の露の白玉

夕露　新大納言

袖にさへ秋は夕をしらせてや草葉をかけて露のをくらん

袖上露　侍從中納言

いまそしる草葉にあらぬ我袖も露のやとりと秋はきにけり

尋虫聲　範忠朝臣

尋ねきてそれともわかす虫のねのおほかる野へに日を暮す哉

虫聲滋　眞觀

たか植し一村すゝきしけりあひておなし野原に虫のなくらん

雨夜虫　雅言朝臣

秋も今ふけ行夜半の急雨にしほれて虫の聲そうらむる

虫怨　源宰相

山陰の夕日かくれの葛かつらくるゝもまたてむしそうらむる

蛬思　侍從中納言

露ふかき草葉の末の蛬思ひのほとなくねにそしる

秋夕雲　融覺

さらてたに心うかるゝ夕暮の雲のはたてに秋かせそふく

秋夕雨　侍從中納言

なかむとて夕は露の我袖をいかにかほさん秋のむらさめ

秋夕風　賢阿

いとゝしく袖にすゝしきゆふへ哉またれし秋の荻の上かせ

閑中秋夕　眞觀

身になれて年はへぬれと今更にあはれさひしき秋の夕ゝれ

古渡秋夕　同

まてしはし何かはいそくわたし守こかのわたりの秋の夕くれ

嶺鹿　御製

夕くれは小倉の山の峯つゝき鹿もあはれにたへぬ聲かな

溪鹿　融覺

谷ふかく思ひ入ても鳴鹿の（はイ）かくしやられぬ妻やこふらん

杣鹿　具氏朝臣

宮木引いつみの杣に鳴鹿はやむ時もなくつまやこふらむ

麓鹿　融覺

小倉山ふもとの鹿の聲きけは老のねさめもねこそなかるれ

叢間鹿　釋任

小男鹿のよはにこふなり秋の野の草のしけみに妻やこもれる

田家鹿　侍從中納言

露むすふ田面の庵の風のまに鹿のねちかき秋の山もと

逢聞鹿　御製
あらし山嵐につけてきこゆ也ならひの岡の小男鹿の聲

鹿聲何方　侍従中納言
秋風のつてにきかるゝ鹿のねはいつかたとたにえやは別れん

旅宿鹿　融覺
こよひしも鹿のねきかぬ宿ならは都にかよふ夢はみてまし

寝覺鹿　右兵衛督
さらてたにね覺の床のさひしきに何と尾上の鹿のなくらん

初雁連雲　侍従三位
たえ／＼にそれかとそきく村雲の行衛にまかふ初かりの聲

風前雁　具氏朝臣
たれか今秋風吹とつけつらんいとはや雁の聲きこゆ也

雨中雁　侍従中納言
天原秋風ふくとくる雁のつはさしほるゝゆふくれのあめ

薄暮雁　新大納言
嶺とをくたつうす霧の絶まより入日かすかに雁はきにけり

深更雁　經任
小夜ふくる枕の上にをとつれて雲井の雁のいつちゆくらむ

雁作字　同
かけてこそくとはきゝしか玉章をかきつられたる秋の雁金

湖上雁　侍従三位（中納言イ）
鳰の海やなかれぬ水の上にたにかくははかなき雁の玉章

湊畔雁　侍従中納言
みつしほの湊はるかにこく舟の葉をほにあくる秋のかり金

葦邊雁　源宰相
をく露の玉江の蘆にみかくれてたのむむれある秋の雁金

關駒迎　具氏朝臣
いつよりか絶ぬためしに相坂の關のこなたにこまむかへせし

待月　侍従中納言
まちわふる心もしらすゝゝろ、まの山のはをそき月のかけ哉

月出山　禪信
山端にたなひく雲やはれぬらん出るにしろき（をそきイ）十六夜の月

月契秋　忠繼朝臣
なかき夜は月みん人のためとてや秋をさしても契りをくらん

叢祠月　具氏朝臣
すみまさる秋のしるしのかけみえてみわの神杉月そさやけき

蕭寺月　侍従中納言
月影も更行まゝに初瀬山尾上のかねに秋風そふく

禁中月　侍従三位
雲もなき月をみる哉九重のうちはあらしの聲もきかれと

花洛月　眞觀
限りあれはすまも明石もいかならん花のみやこの秋のよの月

草庵月　前大納言
かりそめの草のいほりの旅枕あかつきしるき月のかけ哉

庭月　範忠朝臣
庭の草をけはかつちる露なれと猶あとゝめて月そやとれる

遠郷月　前大納言
浦／＼やをのか物とやなかむらん明石の里の夜半の月かけ

野店月　侍従中納言
なをさりの野原の庵の秋風にあれまくしらすすめる月影

關屋月　融　覺
あれにけるふはの關やの秋風にひとり影もる秋の夜月
水郷月　經　任
秋の月いかなる影にすみそめてかつらの里のなにはたつらん
池上月　御　製
大空の雲こそあらめ月すめは池なも風のはらふよには歳
海路月　前　左府
さしのほる三笠の山の月影やもろこしまてのしるへなるらん
浦　月　侍従中納言
波の上に入まてはみん淡路嶋まつほの浦の秋のよの月
磯　月　雅言朝臣
しほの山さしての磯の秋の月八千代すむへき影そみえける
濱　月　侍従中納言
すみのほる月もひかりは増りけりおきつしほ風ふきあけの濱
潟　月　同
浦風に雲もかゝらすなるみかた汐干にとなきあきの月影
江　月　範忠朝臣
古河の入江の水も底すみてのとけきよはゝ月そさやけき
泊　月　同
高砂やふりにしとまり今とても月にかはらぬよはのなさけな
嵴　月　具氏朝臣
曇りなきゆらのみさきの月影によるもしほひの玉やひろはん
瀧　月　範忠朝臣
おちたきつ瀧の白糸よるといへと月に玉ぬく數そかくれぬ
橋　月　前大納言
いかはかりすみわたるらん秋の夜のなからの橋の月の光りに
月前遠鴈　具氏朝臣
淡路[illegible]たにとみゆれとしほのまなめくらは月や遠さかりなん
月前海舟　皇后宮大夫
波の上にうきなをかへし唐人も月みんとてや夜舟こくらん
月前行客　右兵衛督
とまるへき宿ないつことさたむらんよるさへ月にすゝむ旅人
關見月　道　親
老か身も心のとかにみつる哉おさまれる代の月のひかりは
獨對月　御　製
枕にもあとにも人のなきねやにをきゐてみつる秋のよの月
老惜月　忠継朝臣
みてもまた老となるみのかなしさに心にしたふ山のはの月
擣衣聞　侍従中納言
里遠き夜半のねさめの秋風にそれかあらぬか衣うつなり
松下擣衣　範忠朝臣
松に吹風のまに〳〵をとつれて閨への庵にころもうつなり
連夜擣衣　右兵衛督
秋風の吹につけてやしつのおかよな〳〵ねやに衣うつらん
擣衣稀　融　覺
秋風のまた身にしまぬ里人やをともたえ〳〵衣うつらん
擣衣到曉　御　製
ゆふつくよ月みかてらはいかゝせんあかつきやみもうつ衣哉
山路菊　同
きえぬまや千年なるらん[illegible]毎に山ちの菊にをけるしら露

水邊菊　同

くみてこそ千年もかれてしられけれぬれてほすてふ菊の下水

菊久馥　侍從三位

露のまにいかて千年と思ふまて山路のきくの色そひさしき

遠村霧　經任

いとゝ又なかめも遠し秋きりのたちへたてたる里の一むら

霧隔帆　皇后宮大夫

思ひやるかた帆の風はつれなくて霧かくれ行浦の友ふね

霧底筏　右兵衞督

筏しや石まつたひは心せよやまもとくらき霧のまよひに

驛路霧　侍從中納言

旅人のむまやつたひに聲はしてゆきゝへたつる秋の夕霧

梯霧　同

日影さす嶺の梯たえ〳〵にあらはれわたる秋のゆふ霧

曙鴫　前左府

明わたる門田のかりほ打なひきなともさひしき鴫のはれかき

初紅葉　雅言朝臣

しくるとも思ひもあへぬ梢たにいつしかけふは色かはり行

露染山葉　新大納言

白露も秋はいかにとなきかへて山の木の葉の色なそむらん

雨後紅葉　融覺

村雨はすきぬるあとの夕日影秋のもみちそ色ことになる

紅葉所々　資有

今も猶時雨しくれぬほとみえてもみちもみちぬ秋の山里

紅葉遍　前左府

山めくりおりしろ時の雨なれはそめぬ草木の色そまれなる

松間紅葉　御製

ふかみとりひとつ梢とみし松のけちめことなる（しらするイ）紅葉なりけり

杜紅葉　侍從中納言

秋はまつたれにかとはん紅葉するいく田のもりのよもの梢な

隣紅葉　源宰相

あしかきのへたてなからも隔てぬはよそのもみちの梢也けり

紅葉誰家　眞觀

しくるめりたかすむ宿としらす共ゆきてこそみめ秋の木末は

紅葉映水　御製

木のもとなかけはなれたる山のゐに移るも淺きうすもみち哉

秋徐暮　範忠朝臣

秋の色のくれ行日影けふも猶かり田のなしれほしあへぬかな

暮秋霜　侍從中納言

暮て行秋の色さへうらかれて霜になりぬるなのゝあさちふ

故鄕秋蘭　同

故鄕のあさちか虫もかれ〳〵にあり明ちかき秋のくれかた

鐘聲送秋　雅言朝臣

いかにせんこの曉のかれてより心つきにし秋のわかれな

惜九月盡　三位中將

とゝまらぬ秋の日數は命にもまさりておしきわかれ也けり

冬七十首

山初冬　侍從中納言

あらし山みれのうき雲けさよりや神無月とはまたしくるらん

里時雨　　同

神無月さためなきにもしられけり冬はしくれのふる里の空

時雨告冬　　前大納言

冬きぬと空にしれとや曉のまやの軒はにしくれすくらむ

朝時雨　　融覺

いつとなくかはかぬ苫の衣手にけさそしくれて冬はきにけり

夕時雨　　賢阿

小くら山冬のきたるにさかなれはしくれ／＼てけふそ暮ゆく

時雨易過　　同

いつのまに曇るとみゆる山のはのやかてはれ行むらしくれ哉

杜時雨　　御製

つの國のいく田の森の夕時雨袖はぬるやと人のとへかし

嶺時雨　　融覺

峯わたる嵐の山のうき雲にふりもさためぬ村しくれかな

關時雨　　侍從三位

雲まよふ關のあらしのしくるゝに世をすくすとや袖ぬらす覽

閨時雨　　侍從中納言

神無月ねやの板まのいたつらに袖ぬらせともふるしくれかな

旅宿時雨　　融覺

から衣はる／＼きぬる旅ねにも袖ぬらせとやまたしくるらん

山家時雨　　雅言朝臣

とにかくに晴まもみえすしくるめり木のはおちそふ冬の山里

落葉殘秋　　禪信

秋の色もしはしそのこる山風のもみちふきしくつたの下道

落葉如雨　　眞觀

木のはこそさてもまかはめわか袖の涙よ何にまたしくるらん

庭落葉　　融覺

日にそひて庭の木のはもふる里は風こそはらへ人はかよはす

聞落葉　　侍從中納言

ほともなく時雨すきぬる槇のやになとは變らてふる木のは哉

落葉不待風　　右兵衞督

音たてゝむへ山風はさそはねといかにしくるゝ木のはなる覽

冬田霜　　忠繼朝臣

いとゝまたたれかしるへき足引の山田のひつち霜にくち（かれイ）なは

野外霜　　融覺

さらてたにうきはさかのゝ草の原人めかれねとなける霜哉

樵路霜　　同

くれかゝる谷のつま木の追風に霜をかされてかへる山人

見殘菊　　同

秋をゝきて色そめかふる菊の花みしにはあらぬかたみ也けり

垣根寒艸　　新大納言

をく霜の垣根とわけてさゝれともれすも草のかるゝ比哉

凋寒草　　眞觀

さらぬたに霜をく草を朝な／＼またふみからす谷の山人

江寒蘆　　雅言朝臣

難波江や蘆のかれ葉に降霜にほのみし秋の色そのこれる

枯野朝　　具氏朝臣

けさみれは草の袂い霜かれにすそのゝ原の色そさひしき

冬曉山　　重名朝臣

霜しろく風もさえ行冬の夜はあくるもしろし天のかく山

冬夕嵐　具氏朝臣

いつも吹嵐なれともはけしさのをともゆふへそ寒まさりける

冬夜難曙　同

冬ふかき夜寒の床の明やらていくたひはかりね覺しつらん

氷初結　融覺

夜のまにや冬はきぬらん足引の山下水そけさこほるなる

水氷無音　源宰相

朝氷むすひにけりないまさらにをとなし川の名にやたつらん

淵氷　前左府

風さゆるあすかの川のあさ氷きのふの淵もえやはわかるゝ

汀氷　右兵衛督

よせかへる渚は波の音もなし氷とちしく志賀のからさき

石間氷　同

谷川の氷もいくへとちつらん石間の水のをとつれもせぬ

海冬月　前左府

都にもかくやすむらん松嶋やあまのとわたる冬のよの月

泊冬月　眞觀

浦かくれとまる泊のかちまくらうきねをさむみ月をみる哉

水郷冬月　融覺

氷とやかつさえぬらん宿かりし天のかはらの冬のよの月

浦千鳥　雅言朝臣

風さむみ我すむかたをたつ千鳥こと浦にこそ鳴わたるなれ

戸渡千鳥　侍從三位

波のまに行衛もしらすゆらの戸をわたる千鳥の聲そきえぬる

寒夜千鳥　三位中將

さえこほる明石の浦の鹽風に月をおくりて鳴千鳥哉

池水鳥　侍從中納言

冬の池の上はつれなき氷にもしたにはやすくかよふ鳰とり

獨聞千鳥　新大納言

水鳥のうきねの床に鳴聲を枕ならへてきく人そなき

篳網代　融覺

舟もかないさよふ波の音はしてまた夜はふかしうちの網代木

霰殘夢　侍從三位

行やらぬ夢のたゝちの關守ををのれすへてもふる霰かな

竹霰　侍從三位

竹ちかく何そ夜とこれそよさらに霰たはしり朝ゐせられす

鷹狩日暮　侍從中納言

はし鷹の同しつかれのあととめて日影ほとなく狩くらしつゝ

岡邊鷹狩　融覺

狩人のならしの岡のなら柴におなしとたちのをときこゆなり

初雪　具氏朝臣

ふりぬらんと山はしらすこの里にけさめつらしくつもる雪哉

淺雪　忠繼朝臣

消ぬまを人のとへかし降雪のたまるともなき庭のおも哉

積雪　新大納言

よもすから軒はゝ雪のほとみえて砌にたかくけさはつもれり

雪中望　融覺

年をふる老の身なからうつもれて道ふみわけぬ雪の山里

雪埋松　皇后宮大夫

色かへぬ名のみふり行白雪に松のねたくもうつもれにけり

依雪待人　同

さりともと思ふ日數そ積りぬるまたあとみえぬ庭の白雪

雪似花　侍從中納言

さかぬまは花かとそみるみよしのゝ山下かせにふれるしら雪

霧中雪　三位中將

旅衣日數もいくかかさねきぬかちのゝなのゝ雪の夕くれ

逐日雪深　經任

あすもまたさそかさならん冬の日のつもれはふかき庭の白雪

深山雪　侍從中納言

思ひやれ鳥たになかぬ奥山のあらしにつもる雪のふかさを

原　雪　御　製

行駒のあしにまかせてみつる哉しらぬの原のけさのはつ雪

池岸雪　新大納言

池水にあとなくきゆる白雪のふるほとみゆるきしの松かえ

濱邊雪　御　製

八十日ゆく濱の眞砂ちはる〳〵とかきりしられすつもる白雪

崎　雪　侍從中納言

ふりにけるおなし緑にしられけり雪につれなきから崎のまつ

嶋　雪　同

雪にさへすきこそやられあま衣たみのゝ嶋は宿もなければ

磯　雪　御　製

波よする磯の洲崎のひとつ松梢はかりにつもる白雪

河邊雪　侍從中納言

降積る雪なかされてみよしのゝ瀧つ河内にこほるしらなみ

水上雪　右兵衞督

池水の上には殘る色もなしさらてもふかき雪のあけほの

社頭雪　前大納言

ちはやふる神のみ室のみしめ繩しらゆふかけて雪はふりつゝ

古寺雪　三位中將

雪のうちに人こそとはね初瀬山尾上のかねはしるへなれとも

炭竈烟　源宰相

をの山のまきの炭かまよそなからそことしらせてたつ煙哉

向爐火　同

埋火のあたりもいたくさゆる日は硯の水も猶こほりつゝ

歲暮近　前大納言

くれはつる飛鳥の川の年波のいとふもしらすみにやつもらん

家々歲暮　侍從中納言

やとことにかはらぬ物は暮ぬとてこ年を急くならひなりけり

戀百五十首

寄天戀　侍從三位

空になる心のほとも我なから物思ふ時になかめてそしる

寄日戀　同

こひしなん命はけふもたのまぬをあすの春日と何いそくらむ

寄月戀　三位中將

そのまゝになかきかたみとみるもうしありし別れの有明の月

寄星戀　侍從中納言

しるやいかに雨夜の星のみえすのみうはの空にも戀渡るとは

寄雨戀　忠[illegible]朝臣

村雨に袖はぬれつといひなして心のまゝに人や戀まし

寄風戀　前大納言
人しれす物思ふ袖に音信て涙ふきほせ秋のゆふかせ
寄雲戀　融覺
伊駒山へたつる中の峯の雲なにとてかゝる心なるらむ
寄霞戀　侍從三位
我妹子に霞の衣いさゝらはみたれはてなんやま風そふく
寄霧戀　侍從中納言
川きりのうきて思ひの中空になにと心の末へたつらむ
寄露戀　眞觀
人しれぬ袖の涙にまかへとて秋をく露やなさけなるらん
寄霜戀　侍從中納言
竹の葉によな〳〵さえて置霜のしみつくはかり人そ戀しき
寄雪戀　源宰相
うくつらく人の心のたくひとやあとたにみえぬ春の淡雪
寄霰戀　新大納言
玉といひていつれをわけてひろはまし霰かたしく袖の涙を
寄時雨戀　融覺
涙のみ猶もふる哉神無月しくるゝころもたゆむ袂に
寄烟戀　同
いかにせん富士の高根の名にたにもたくはくるしき下の烟を
寄山戀　賢阿
さりともな下に心はかよふらんしのふの山の道とをくとも
寄嶺戀　融覺
唯ゆへといかにいふきの峯なれはさしも思ひにもえ初めけん
寄杣戀　眞觀
いたつらに戀やわたらんちはやふる神の杣木の年はへぬとも
寄谷戀　侍從中納言
淺く思ふ契りもつらし谷深くみをすてゝたにいかてしらせん
寄岡戀　御製
たのめをきし跡をたのみて水莖の岡のやかたに人をまつかな
寄杜戀　經任
さてこそは袖もしほらめ思ふことといかていはせのもりの下露
寄野戀　融覺
もえこかれなけくもはてはいかにそと飛火の野守いさ尋みん
寄原戀　禪信
かへるさのあしたの原と思はすはしたはふ葛の恨みしもせし
寄關戀　侍從中納言
うちもねぬよその人めをまち侘ぬよひ〳〵ことのなかの關守
寄田戀　忠繼朝臣
思ふこと苗代水にことよせてうけひくほとの色をしらはや
寄里戀　右兵衛督
ことに出ぬ心の奥のみたれにもしのふの里はあるかひもなし
寄市戀　侍從中納言
徒に人めはかりはたつの市のあふにはかへぬなこそつらけれ
寄河戀　前大納言
年へぬる古河のへにたつ杉のいつかは人にまたもあひみん
寄瀧戀　新大納言
せく袖の下にもりてや涙河猶をとなしの瀧となるらん
寄江戀　侍從中納言
難波江の蘆の下れのしたにのみつらき節をもいはてやめとや

寄沼戀　　御製

かくれぬに生るあやめは我なれやしけき浮れもしる人そなき

寄池戀　　眞觀

頼めたゝくゝりの宮の池にすむこひこそ遂のしるへとはなれ

寄海戀　　侍從中納言

わたつみにかつきする蜑よいかにして思ふ心の深さくらへん

寄浦戀　　前大納言

から衣袖師の浦にみつしほのひるまをいつと君にとはゝや

寄濱戀　　雅言朝臣

いとゝまたしほたれわふる袂哉思ひなくさのはまもかひなし

寄磯戀　　融覺

いくかへりうたて心のあら磯によせては波の身をくたくらむ

寄湊戀　　眞觀

山のゐの湊わかれて行舟のあかても人にぬるゝ袖かな

寄汀戀　　侍從中納言

いたつらに我身一つにくたけつゝあふ夜なきさによする白波

寄嶋戀　　忠繼朝臣

我戀はうらの初嶋はつかにもしらせやそめんおもふ心を

寄潟戀　　侍從中納言

わたつうみもしほひの潟はある物をほすましられぬわか袂哉

寄崎戀　　融覺

ほのかにもみそめのさきの花の色にうつる心をしらせてし哉

寄橋戀　　源宰相

いたつらになからの橋のなからへて戀わたれとも契やはせし

寄網代戀　　侍從中納言

網代木にたゝよふ波の我はかり心くたけてものおもへとや

寄井堰戀　　侍從中納言

つれなくも戀わたれとや大井川ゐせきにこゆる波のうたかた

寄掛樋戀　　融覺

名につらき人を掛樋の水なれとかよひたゆれは袖ぬらしけり

寄松戀　　前大納言

かくはかりみにしむ物と松風をつれなき人にいかてしらせん

寄杉戀　　融覺

中絶て又もあひみぬ初瀬川ありてかひなき二本のすき

寄檜戀　　同

頼めとも同しかさしのかひもあらし難面き儘の三輪の檜原に

寄眞木戀　　侍從中納言

しられしな色に出れは槇の葉の我つれなくもこふるこゝろは

寄桂戀　　新大納言

あまつ空月の桂のいくめくりなかむる袖になみたおつらん

寄柞戀　　眞觀

さほ山の柞は霧のへたつともかゝれぬ袖そ色にいてゆく

寄楢戀　　新大納言

うき人の心やゆきてそめつらんまつ色かはるならのはかしは

寄榊戀　　禪信

ちかひをは神にかけつゝ榊葉のかはらぬ色のちきりをそまつ

寄柏戀　　前大納言

片岡のはひろ柏に降雨のをとにたてゝや人にしらせん

寄紅葉戀　　皇后宮大夫

木の葉さへ移ひゆくかあた人のわれをふるせる秋のしくれに

寄竹戀　侍従中納言

あふことは一よたになきむら竹のつらきふしをも猶忍ふかな

寄篠戀　侍従三位

をのつからさゝわけし袖をほさて社露はかりたに形み共みれ

寄菅戀　侍従中納言

年月を人こそしられ奥山の岩本菅のねにはなけとも

寄葛戀　眞観

いかにせんつゝきの岡の葛の葉の恨みて後はまたもかへらす

寄葦戀　融覺

世々かけていひしにかはる契り故短かき蘆のねをのみそなく

寄薦戀　侍従三位

つれなくは淺香の沼にかる草のなさへかひなく戀やわたらん

寄菖蒲戀　御製

いつ迄かあやめもしらぬ菖蒲草けふ顯はれてねこそなかるれ

寄蘋戀　新大納言

人心さもうき草のねをたえてさそふ涙のしるへたになし

寄沼縄戀　侍従三位

よをへては思ひますたの池に生るねぬなは戀のかきり也けり

寄藻戀　侍従中納言

いせしまや蜑のかるもの人しれすわれからつらき戀もする哉

寄海松戀　同

戀わひるかひこそなけれ朝夕にみるめもしらぬ志賀の浦波

寄葵戀　〔マヽ〕前大納言

あふひ草その名をけふと頼みつゝあすには關す人はとはなん

寄蓬戀　眞観

哀にもわれこそとはめとはかりを今やまつらん庭のよもきふ

寄苔戀　侍従三位

思ふともよしや岩ねの苔むしろしきしのふれは色もみえしを

寄芝戀　新大納言

かへるさの涙や袖にあまるらんけさをきそふる道芝の露

寄淺茅戀　忠繼朝臣

涙こそ露とをくなれ淺茅原とひこし人のあとたえしより

寄萱戀　新大納言

思ふとも人はしらしな霜枯のかやかしたおれしたにくちなは

寄忍草戀　賢阿

君もさは軒端の草に思ひ出よしのふちきりは昔なれとも

寄忘草戀　範忠朝臣

つらき人わすれんと思ふ草のなの心にかゝる身のならひかな

寄月草戀　源宰相

月草のうつろひやすき心ともかつしりなからなにうらむらん

寄鶯戀　重名朝臣

折からや鳴音ももろき鶯の春ひもなかく戀やわたらん

寄郭公戀　雅言朝臣

時鳥をのかなくねといひなしてつれなき人にまちそわひぬる

寄水鶏戀　範忠朝臣

よもすから人まちわふる槙の戸をたゝく水鶏の聲そ明行

寄鶉戀　忠繼朝臣

荒にける鶉の床も我ことやかくれもはてぬものおもふらん

寄鴫戀　融覺

こぬ夜のみ數積りつゝねをそなくあくるあしたの鴫の羽かき

寄鷹戀　前左府
はし鷹のとかへる山をたつぬとも同しこひちにかくは迷はし
寄千鳥戀　御製
よもすから友なし千鳥鳴侘ぬわれはかりやはものおもふらん
寄山鳥戀　前大納言
山鳥のをのれとなかき秋のよをなとてかよそにふし習ひけん
寄鴛戀　右兵衛督
誰もまたうきにはたへぬ獨ねをつかはぬ鴛のねにやなくらん
寄鷄戀　經任
聲たつるゆふつけ鳥はよそなから我わかれちの心をやしる
寄蛛戀　融覺
豫てしるかひ社なけれさゝかにのいとゝ軒端にかき絶しより
寄螢戀　同
我はかり思ひしもせしかつ／＼に澤のほたるは身にあまる共
寄蛬戀　前大納言
きり／＼すなくやつゝりのさしもなと人に重ねぬ袖となる覽
寄松虫戀　雅言朝臣
あた人の頼めもをかは松虫のなくねやよそのたくひならまし
寄蜻蛉戀　皇后宮大夫
侘ぬれは猶やたのまんかけろふのあるかなきかの人の契りを
寄屋戀　前大納言
年をへて思ひみたるゝ蘆のやのいつかは人にこやといはれん
寄窓戀　眞觀
あちきなや窓うつ雨に袖ぬれていくよむなしく戀わたるらん
寄廂戀　皇后宮大夫
朽ぬとも雨降軒の板ひさし久しくしのふ我なもらすな
寄柱戀　右兵衛督
契りしもありしなからの橋柱たつなはかりに朽やはてなん
寄床戀　侍従中納言（右兵衛督イ）
あはてふる涙はかりや獨ぬる床は草はと露けかるらん
寄庵戀　前大納言
今更にまつともとはゝ秋のよの草の庵のなかきねさめを
寄門戀　同
我門の柳の糸のくりかへしたえすも人にあひみてしかな
寄戸戀　同
槙の戸を有明の月のさすまてに今宵も人めとはてすきぬる
寄垣戀　御製
年月をなかにへたつるしのかきの一よ二よもあふよしもかな
寄庭戀　眞觀
つれもなき人もきたらはいかゝせん野となる庭の草の深さを
寄玉戀　皇后宮大夫
なにゆへに思ひそめけんしら玉とみえし涙の色かはるまて
寄笛戀　新大納言
笛による男鹿もさそなみにかへて思ひはたへぬならひなる覽
寄箏戀　侍従三位
身にそしむ玉のをことのしらへまて人の心の秋ときくより
寄弓戀　侍従中納言
心ひくかたをもしらて梓弓我をしかへしうらみつるかな
寄箙戀　融覺
いかにせんともやたはさむ武士のとりあへぬ程に人の戀しき

寄簾戀　同
かけてやはしられやはせん蘆簾こひぬまなくて年はへぬれと

寄笠戀　源宰相
宮城野や笠もとりあへぬ露にたにかくは袂をしほりやはせし

寄蓑戀　融覺
たつれきて田みのゝ嶋とたのめとも涙の雨も名にはかくれす

寄緒戀　侍從三位
絕ぬへきはてもはかなしうくつらき戀のみたれてゆらく玉緒

寄稜麻戀　融覺
つゐによる末もたのます大ぬさのひく手あまたは猶そ悲しき

寄鏡戀　御製
かたみとてみるもはかなします鏡とまらさりける人のおも影

寄錦戀　侍從中納言
人しれぬ涙の色のからにしき戀そむる名やよそにたつらん

寄衣戀　經任
さよ衣かへしてみつる夢にたに猶うらめしき人こゝろかな

寄糸戀　眞觀
かくはかり忍ふもくるしかはちめの手染の糸のいさ亂れなん

寄布戀　同
陸奥のけふのほそ布たか世にかつらきためしに織はしめけん

寄帶戀　侍從中納言
めくりあはん契りはかりを結ひても花田の帶の中そしられぬ

寄紐戀　眞觀
しゐて猶戀やわたらん下紐のとけしはかりを身のちきりにて

寄莚戀　御製
いつまてかしき忍ふへきそのまゝに我ちり拂ふ床のさむしろ

寄枕戀　侍從三位
歎くとてうちもねられすなりしより枕もしらしよ半の涙は

寄鬘戀　融覺
玉かつらいかにねしよの手枕につらき契りのかけはなれけん

寄挿頭戀　侍從三位
哀とはなへてそおもふ乙女子か玉のかさしのさしもしらしな

寄櫛戀　忠繼朝臣
しらせてもかひやなからん思ふ事つけの小櫛のなを賴みつゝ

寄匣戀　經任
いかさまに契りし中そ玉くしけ二たひあはぬ身となりにける

寄書戀　前大納言
玉章はことをつくさぬならひにて心の底はしる人もなし

寄硯戀　侍從三位
はてはまたいつれかつきん涙そふ硯の水とおもふこゝろと

寄筆戀　融覺
こひしともかきもやられぬ水莖になかれておつる我なみた哉

寄扇戀　侍從中納言
手枕のねやの扇を露よりもいつれかたみと契りをかまし

寄繪戀　忠繼朝臣
おも影は繪にかきとめてみつれともしらぬは人の心なりけり

寄木綿戀　右兵衞督
人はいさ心もしらすゆふたすきかけしちきりは今もわすれす

寄四手戀　具氏朝臣
榊さす杜のゆふして風すきてなひくとみはやつらきためしを

寄注連戀　侍從中納言
くり返しさのみはいかゝ恨むへきつらさいはての森のしめ繩
寄塵戀　前大納言
朝日さす光にみゆる塵よりもしけきは戀のかすにそありける
寄車戀　同
めくりあふたのみはかりにを車の年をかけても戀やわたらん
寄舟戀　侍從中納言
堀江こく蘆わけを舟しけくともかよふ心のさはらすもかな
寄檝戀　忠繼朝臣
いたつらによを重ねゆくかち枕さても恨みのはてをしらはや
寄碇戀　源宰相
朽はてぬあまの小舟のいかりなはさもうき人にひく心哉
寄筏戀　同
柚川やはやせの筏さすさほのうつりやすきはこゝろなりけり
寄篝戀　賢阿
山陰のう舟のかゝり我ことや人にしられてもえわたるらむ
寄燈戀　前大納言
曉のかへにそむける燈のきえすも物をおもふころかな
寄綱戀　三位中將
河舟のたかせによとむつなて繩引て數多をなけくころ哉
寄繩戀　源宰相
いせの海の蜑のたくなは一筋にくるしき物と人をこひつゝ
寄笘戀　融覺
人めもる山田の庵の笘をあらみぬるとなつけそ露も涙も
寄泛戀　侍從中納言
うらみてもかひこそなけれ年月のたえすくるしき蜑のうけ繩
寄澪標戀　源宰相
なきこふる涙の袖のみをつくしふかき思ひのしるしたになし
寄簗戀　前大納言
早河のせにうつやなの波よりも袖の涙はよとまさりけり
寄網戀　雅言朝臣
いせの海の網の泛繩我かたに心もひかぬ人をこひつゝ
寄答筥戀　侍從三位
つゝめとも人めそしけき花かたみいかにかせましもるゝ涙を
寄漆戀　源宰相
夢をたにえやは待みん花うるしぬるともしらすもの思ふとて
寄鐘戀　賢阿
忍ふれはよふかき鐘にわかれちを鳥よりさきに思ひたつ也
寄貝戀　融覺
わすれ貝わすれはさても身をすてゝおなし渚の波はかけしや

雜百五十首

社頭朝　前大納言
はふりこは早まつらんといさかはの神の宮居にぬさたむく也
社頭暮　融覺
あくるよりゆふかくるまてちはやふる神の宮人代を祈るらし
社頭榊　融覺
くもりなく天照神のしるしとて玉くしの葉にみかくしら露
社頭水　源宰相
石清水猶萬代をかさねても君かためとやすみはしめけん

社頭鷄　御製
昔たれ曉ふかくみそきしてゆふつけ鳥のなゝのこすらむ
祈年祭　賢阿
春毎にぬさとりむけて宮人の年をいのれはむへもとみけり
石淸水臨時祭　雅言朝臣
山あゐの袖になれにし櫻花春のかさしは猶そわすれぬ
加茂祭　侍從中納言
神代よりけふにあふひのもろかつらかけてそ渡る君か爲とて
春日祭　眞觀
大野なる三笠の森に小夜更て神まつれはや山ひゝくらん
新嘗祭　御製
ちきりあれや神のすこもを打はへて新嘗まつる昔おもへは
古寺嵐　融覺
名にたかきあらしの山の麓とて入相のかれに松かせそふく
古寺鐘　前左府
千代ふへきかめのお山の向ひなる鐘のひゝきは何れつきせし
古寺瀧　資有
春ならは花とやみましみよしのゝよしのゝ山の瀧のしらいと
古寺路　眞觀
かくらくのとよはつせちをわけ入(行イ)は尾上の寺に雲そかゝれる
古寺苔　具氏朝臣
年つもる程もしられて初瀨山軒はにふかき苔のいろかな
御齋會　皇后宮大夫
代をいのる春のはしめの法なれは君か行幸のあともありけり
最勝講　新大納言
百敷やなかきためしとさ月まてあらそふ法はわか君のため
仁王會　御製
千々の人命のへけんためしよりもゝさのうへにとける御法そ
維摩會　同
神無月時雨ふりをけるみのりとてならの都に殘ることのは
大乘會　新大納言
かみな月かれすや法の花の人おりをもわかすなさへつむらん
原上行人　融覺
夕日さすをのゝしの原吹風に旅行人の袖かへるみゆ
嶋漁客　雅言朝臣
よをへつゝもゆる螢とみゆる哉嶋つたひ行あまのいさり火
谷樵夫　經任
朝夕のかせのたよりに谷川のつま木の舟をたれかひくらん
市商客　忠繼朝臣
しるしらぬ人はたつたの市なれはたれをわきてか又も賴めん
船中遊女　前左府
心から哀あたなる契り哉行かふ舟にかはすことのは
岸頭傀儡　侍從中納言
河岸の波のよるよる契りにて妻まちわふるとま屋形かな
遊子越關　融覺
鳥のねに關の戶出る旅人をまた夜ふかしとをくる月影
隱子出山　經任
道ありと我君か代に出はてゝ山の奥にはすむ人もなし
老人夜長　源宰相
鐘のをともまた明やらぬ秋のよにいく度老のねさめしつらん

浄侶歸暮　侍從三位
暮ゆかは山路の苔の露わけて我すむ寺とたれいそくらむ
野行幸　右兵衛督
行幸せし昔のあとのなこりとて今もかひある千世のふるみち
山狩獵　御製
狩人のやの〻神山身にかへて妻かくしぬと鹿そなくなる
曉遠情　前大納言
けふ山をいくへこえんと草枕曉おきに妻やちきらん
夕幽思　新大納言
かへりこぬ昔を思ふ夕とや秋ともいはす袖はつゆけき
拜趨積年　右兵衛督
かくて今いくとせまてに成ぬらんつかふる道を君にまかせて
餞別欲夜　資有
旅衣たちなくれしとしたふまにたむけぬ月も影そいさよふ
眺望日暮　前大納言
なかめやるむかひの嶺のひとつ松夕ゐる雲のたちへたてつゝ
興遊未央　前大納言
千代をへて野へに引へき姫小松きしかたよりも末そはるけき
孤夢易覺　雅言朝臣
はかなさをなへて習ひの夢とたに思ひもあへぬ程にさめぬる
披書知昔　御製
むかしへやいかなる繩を結ひをきて今にその(もイ)世の事をしる覽
羇中春　右兵衛督
急くともこゝにやけふもくらさましみてすきかたき花の下陰
羇中夏　融覺
夏ふかきうつの山道越かねてつたの下葉に風をまつかな
羇中秋　融覺
うつりゆく日數しられて夏草の露わけ衣秋かせそふく
羇中冬　源宰相
降雪に野くれ山くれあとみえてけさ朝たつはわれひとりかも
羇中曉　忠繼朝臣
都人いく曉かなかめこし旅の空行ありあけの月
羇中朝　禪信
白露のおきてわかるゝ旅衣しほるゝ袖にのこる月かけ
羇中晝　皇后宮大夫
水ちかき松の木陰に駒とめて猶やすらはん日はたけぬとも
羇中夕　侍從中納言
嶺たかき夕日はよそにあらはれて木陰くれ行山の下みち
羇中夜　源宰相
行とまるやとゝさためて奥山の岩ねの枕夜をかさねつゝ
羇中風　禪信
すゝき野のお花わけ行旅人の袖ふきかへす秋の夕かせ
羇中雨　御製
急雨のすくるをまたていそく哉とまるも遠き道とおもへは
羇中烟　新大納言
暮はまた行とまるへき里なれや山の遠方けふりたつみゆ
羇中山　經任
都出し日數のみかはたひ衣こえ行山もかさなりにけり
羇中野　禪信
草枕かりそめとこそ契りしにいくよかへぬるむさしのゝ原

羇中關　雅言朝臣
秋霧の夜ふかき鳥のそらねにていそきたちぬるあしからの關

羇中河　侍從中納言
すきにける日數につけて角田川都を遠くこひわたるかな

羇中船　御製
袖のかや猶とまるらん橘のこしまによせし夜半のうき舟

羇中橋　侍從中納言
旅人はいくかをかけて東路のさのゝ舟はしまちわたるらむ

羇中衣　重名朝臣
行くれぬ草の枕のかり衣露をかたしく袖のうへかな

羇中枕　侍從中納言
かりそめにいく夜をすきぬ旅衣かさなる宿の草のまくらは

名所山　前大納言
よしの山雪にや道も絕にけん花のさかりは人もふろさす

名所野　侍從中納言
ふみそめし跡はかりをはたのむ哉草のしけみのむさしのゝ原

名所岡　前左府
假寢するならしの岡のなら柴のならはぬ夢はみるとしもなし

名所林　雅言朝臣
月は猶たのむこのまもいかならん雲の林のなにもかくれは

名所村　眞觀
いせち行人ややとらん河上のいつはのかたも日はくれにけり

名所關　右兵衞督
淸見かた波の關守とにかくにしほれてのみや年のへぬらん

名所驛　侍從中納言
ふり捨るなこりそおしき鈴鹿山關の驛も心とまれは

名所田　同
ほに出るいなは遙に打なひきふしみの田面秋かせそふく

名所瀧　御製
今も又ゆきてもみはや石上ふるの瀧つせあとをたつねて

名所河　侍從三位
つかへては君にひかれて萬代の行すゑたのむ關の藤川

名所堤　融覺
いくたひか道のためとて廣澤の池のつゝみを引かへるらむ

名所湊　侍從中納言
のとかなるあさなきみえて水莖の岡の湊は波しつかなり

名所津　御製
今も猶冬こもりする難波津に昔おほゆる梅のかそする

名所海　前大納言
いせの海月影きよき鹽ひかたあまの乙女子玉ひろふらし

名所濱　眞觀
みてすきし昔も遠しきの國や吹上の濱の明ほのの空

名所礒　禪信
みつしほにひかれても又たちかへれさし出の礒の蜑のつり舟

名所崎　御製
唐崎のまつものいはゝことゝはん志賀の都の昔いかにと

名所嶋　皇后宮大夫
あま衣たみのゝ嶋の夕しほにしはなくたつの聲そかくれぬ

名所湖　賢阿
みるめなき志賀の浦人なれはしもなにをあさりて世を渡る覽

山家春　禪　信
うつり行月日もしらぬ山里に春のしるしとうくひすそなく
山家夏　融　覺
世のうさを慰むと思ふ山里も蟬の日くらしなそなかれける
山家秋　雅言朝臣
とへかしなかた山陰のしはのいほさしもさひしき秋の氣色を
山家冬　融　覺
なにたてゝ猶そさむけきあらし山あたりの里の冬のあけほの
山家曉　侍從中納言
小倉山かけのいほりの柴の戶に殘るさひしき有明の月
山家朝　皇后宮大夫
たつねきて千代をそ契る朝つく日さすや岡への松陰の庵
山家夕　源宰相
たれしかもたへてしのはん山里にならはさりせは秋のゆふ暮
山家夜　眞　觀
なれなはとなに思ひけん柴の庵にね覺ゆるさぬ夜半の松風
山家雲　忠繼朝臣
月影は出てのゝちもまたれけり軒端にかゝる峯のしら雲
山家雨　源宰相
山ふかき住家なれともさひしさを雨にさはらすとふ人もかな
山家風　御　製
風たにも一かたよりそかよひける山たちめくる麓なるいほ
山家梯　同
かつらきの神にやこれもかこたまし人めもたゆる岩のかけ橋
山家岩　前大納言
山里のほかにもとめぬ岩かねにすかたもみえす苔むしにけり
山家水　三位中將
山里のかけひの水のをとつれは絕なはとてもさひしからすや
山家垣　御　製
心にはうき世へたつと思へとも猶ことしけし庭のさゝかき
山家戶　新大納言
柴の戶をさゝてや嶺の月をみんこよひと契る人しなけれは
山家猿　侍從三位
山深みね覺さひしきよるの雨に秋の思ひをましら鳴也
山家鳥　經　任
朝霧もふかきみ山の谷の戶に哀さひしき鳥の一こゑ
山家經年　新大納言
すむ人のおも影とめぬ山のゐにみ草もとらて年そへにける
山家待人　侍從中納言
山里はすみなれてたにさひしきをとはぬつらさと誰をまつ覽
窓　竹　前左府
友ときく物なりなからさひしさはまとの北なる竹の下かせ
簷忍草　禪　信
しのふ草かならすたれはまかれとも軒端にしける物と也けり
路　芝　前大納言
あさち原こなたかなたにふむ道をこれやいつちと問つゝそ行
澗　草　賢　阿
山本のかけのを草もいやおひに谷には春そふかくなりゆく
岡　篠　融　覺
露むすふむかひの岡の玉篠に光うつろふゆふつく日かな

岸忘草　源宰相
たれなかも忘るゝ草のたれとてか今はつもりの岸におふらん
巖麥門冬　侍從中納言
こりしける岩ねにおふる足引の山のやますけ色もつれなし
河玉藻　同
風わたる波にまかせて河のせになひく玉もの下みたれつゝ
沼葦　前左府
雨ふれはふかさもしらぬ沼水に苅人もなきあしのむら立
江菅　侍從中納言
みさひゐる堀江の眞菅下にのみたへぬうきねはしる人もなし
砌松　具氏朝臣
みる夢もやゝさめやすし軒はなる松の梢をわたるあらしに
庭合歡　同
晝咲て籬にたてるねふの木はくるゝよりこそ名にもしるけれ
山椿　同
かきりなきはこやの山はいく代ともしら玉椿しらす行末
嶺桂　侍從三位
きくからにあらしも今はをとすみて月の桂の嶺そさひしき
杣檜　具氏朝臣
しけりあふ檜原をみれはいたつらに朽木の杣もなのみ也けり
杜杉　資有
たつねゆく杜のあたりになりぬれは梢にしるき杉のむら立
岡椎　前大納言
染つくす千入の岡の夕時雨猶もつれなくのこる椎しは
麓柴　同
吹すさふみ山おろしも麓なるならのは柴にをとたてつなり
濱楸　同
風ふかは波のよせくる濱楸いくしほまてと色をそむらん
礒檉　源宰相
荒礒や岩ねにたてるむろの木の木立もみえすしほやみつらん
寄金述懷　侍從中納言
なとにきく（みちのくの）陸奥山の（山のこかねの）岩こかれ（とにかくにイ）さもありかたき世にもふる哉
寄玉述懷　融覺
和歌の浦おなし渚による玉も世のためにこそまつひろひつれ
寄鏡述懷　前左府
うつしみるかゝみの內の影ならて庭のよもきになけるしら露
寄錦述懷　侍從三位
かきつけてみれは名もおしから錦たゝまくしらぬ大和言の葉
寄絲述懷　新大納言
つかへきて色に出らしくれなゐのこそめの糸の深きこゝろは
寄布述懷　侍從三位
七夕のおるてふ布のけふは又ときにあひぬとたれかおもはん
寄衣述懷　侍從中納言
さかさまによるの衣を急きつゝ君につかふるみをはやすめす
寄紐述懷　侍從三位
ともすれは亂れておつる（ととくるイ）紐のをのゆふかひなきや我身なる覽
寄枕述懷　御製
我ひちを枕にしつゝ思ふかなけにたのしひはこれにすきしと
寄薦述懷　融覺

みをかくすみ山の奥の苔莚しきしのへともうき世也けり

寄扇述懐　同

何としてつかふはかりの道ならん扇の風もいとはるゝ身に

寄燈述懐　侍從三位

みるまゝに殘りすくなき老か世に思ひしらるゝ窓のともしひ

寄簾述懐　眞　觀

秋風のすたれうこかす夕くれも心ことはにえやはあらはす

寄弓述懐　具氏朝臣

うきみをはひく人もなし梓弓春にあふへき時はきぬれと

寄箭述懐　皇后宮大夫

くろとあくとともやを挾むますら男も治まる御代は手すさひやせん

寄琴述懐　新大納言

いとへとも玉のを琴の引かへし猶すてやらぬわかこゝろかな

寄笛述懐　御　製

末の世と思ふもひさしより竹はきりてそ笛のねをもたてける

寄車述懐　侍從中納言

思ひやるかたのなきこそかなしけれやふれ車のかゝる我身は

寄船述懐　經　任

うき身世に立こそめくれ捨舟の引人なしとなにうらみけん

寄筏述懐　新大納言

筏士の棹とりみたる雫にもあまりておほき思ひ也けり

寄天祝　禪　信

天つ空ひさしき御代の行末をみまくのほしき我身也けり

寄日祝　侍從中納言

くもりなき嶺の朝日の影にこそ君に久しき萬代はしれ

寄月祝　範忠朝臣

おさまれる御代ともしるく照月の千年の秋は君そみるへき

寄星祝　皇后宮大夫

あきらけき星の林をかそへつゝ君かよはひのありかすにせん

寄雨祝　侍從中納言

降雨も時もたかへぬ御代なれは空にそあふく君か千年を

寄地祝　融　覺

動きなくさためをきけるあらかねは萬代までも久しかるへし

寄國祝　新大納言

すへらきのおほやけ國とまもるらしあまくたります神の心に

寄都祝　皇后宮大夫

君か代にあへるかひにや千年へんつるの都のなをのみつゝ

寄都祝　新大納言

いく春もさかへん君かためとてそ花の都となつけそめけん

寄道祝　忠輔朝臣

いにしへのあとを尋ねて今もまた道ある御代とたれもしる覧

群書類從卷第百六十六

和歌部二十一

龜山殿七百首

作者

御製(後宇多)　九十六首　勅點卅四首　此內清撰十八首
　藤大納言點四十七首

彈正親王(忠房)　十三首　勅四　藤一

前藤大納言(爲世)　八十首　勅廿一　清撰七

富小路藤大納言(實教)　四十九首　勅六　藤八

中御門前大納言(經繼)　三十六首　勅十四　清撰七　藤十六

中納言入道(頓覺)　六十二首　勅廿　清撰五　藤廿

富小路前中納言(季雄)　十九首　勅三　藤四

侍従中納言(爲藤)　六十八首　勅十九　藤十六

六條前中納言(有忠)　三十六首　勅五　藤五

吉田前中納言(隆長)　二十四首　勅一　藤二

左大辨宰相(公明)　二十四首　勅五　藤二

源三位(親教)　二十一首　勅一　藤二

右兵衛督(爲定)　三十五首　勅六　清撰二　藤十四

忠守朝臣　十二首　藤一

爲親朝臣　二十首　勅二　藤三

爲明朝臣　二十首　勅三　藤三

有光朝臣　九首　勅一　藤二

經季　八首　勅二

爲冬　十六首　勅三　清撰一　藤三

以通朝臣　三首　勅一

光吉　十九首　勅三　清撰三　藤三

道我法印　十九首　勅二　清撰一　藤三

計里丸　七首　勅二　藤一

祇壽丸　四首　藤二

春百三十首

立春天　　御製

久かたのあまのかこ山かすめるそ春たつけふの空には有ける

立春日　　前藤大納言

足引の山の端はれて春のたつ日影はけさもかすまさりけり

立春水　　六條前中納言

年ことにけふむすふてふ若水は老せぬ君かためしなるらん

早春山　侍從中納言

高砂の尾上の松の淺みとり色こそまされ春はきにけり

早春浦　富小路前大納言

いつのまにかすみたつらん春きても雪けに氷る志賀の浦波

子日松　中納言入道

いく千年君かよはひの限りなく松をためしにひく子日哉

嶺霞　光吉

龜山のみねの松かえ春をへてかはらぬ色にたつかすみかな

野霞　爲親朝臣

春霞へたつる末はいつくともみてたにゆかぬむさしの〻原

關霞　侍從中納言

越てゆく限りもしらす逢坂や霞も關とみゆる山路は

橋霞　前藤大納言

朽にけるなからの橋はいと〻なを跡たにみえすかすむ春かな

江霞　中御門前大納言

あはれけに難波入江のあけほのに春の霞のたち所哉

河霞　侍從中納言

大ゐ川岩まの波のよとむせもあさくはみえすたつ霞哉

海霞　六條前中納言

春は猶うちとの海そしられける霞へたつるあまのはしたて

湖霞　左大將宗相

ふりにける春や昔のおもかけもかはらすかすむ志賀のから崎

嶋霞　前藤中納言

はる／＼と春はへたて〻波間にもみえすそかすむ淡路しま山

渡霞　源三位

高瀬さす行衛もみえすかすむ也よとのわたりの春のあけほの　計里丸

谷鶯

谷陰も氷とけゆく春風にさそはれいつるうくひすの聲　爲定朝臣

雪中鶯

鶯のなくねはかりに春はきて猶そらはれす雪はふりつ〻　前藤大納言

曉鶯

ねさめしてまつそ聞つる軒ちかき竹のしけみのうくひすの聲　御製

里鶯

春きぬと今やきくらん里人も初音につくる鶯のこゑ　御製

竹鶯

鶯の千世の初音はさ〻竹の大みや人にはるやつくらん　前藤大納言

野若菜

名にめつる老ないとはて春日野の野守はゆるせ若なつみてん　爲親朝臣

澤若菜

里人はあさ〻は水のうす氷とけあへぬまに若なつむらん　爲世朝臣

田若菜

我君のしけきめくみとつくはねのすそわの田井に若なつむ也　吉田前中納言

岡殘雪

外よりも跡なや殘す水くきの岡へにつもるこそのしら雪　爲定朝臣

木殘雪

都たにきえぬ梢の雪折にみやまの松をおもひやるかな　經季

餘寒風

消かぬる尾上の雪に風寒て春をもしらぬ山のおくかな　前藤大納言

餘寒氷

立歸りさゆるあらしに二月やとけし氷もまたむすひけり

梅雪　同
梅がえに降かされては白妙の雪こそ花のいろをそへけれ
梅風　同
さきしより軒端の梅の匂ひをは花にもそへすさそふ春風
夜梅　前藤大納言
梅の花色はみえねと香をのみや闇にも袖にうつしとむらん
山家梅　御製
梅かゝの匂ふ春へは山里も物うからすそうくひすもなく
簷梅　同
我宿の梅咲ぬとはいはすとも人にはつけよ軒の春風
梅移水　同
春風のかをとめくれは谷陰にかゝみくもらぬ梅の下みつ
梅薫袖　侍従中納言
さそひゆく匂ひそとまる梅のはな袖こそ風のやとりならねと
折梅　経季
山人の匂ひとそしる梅のはなたをれる袖にかよふはるかせ
紅梅　中納言入道
白妙に雪のふるえも紅のこそめの梅のいろそかくれぬ
落梅　同
みるまゝに花の鏡そくもりゆく木の下陰の庭の池水
柳露　侍従中納言
青柳の糸のみとりも長閑にてちらさぬ風にむすふしら露
池柳　彈正親王
枝をそめ波をも染て青柳の糸にそかゝる庭のいけ水
行路柳　中納言入道
玉ほこの道行くらすなかき日にあしたゆくくろ青柳の糸
若草　御製
いつのまにやくともみえぬ春日野のけふ崩わたる春の若草
早蕨　祇壽丸
春きぬとのへのさわらひ下もえて降つむ雪のとけやしぬらん
山春月　光吉
なかむれは長閑にかすむひかり哉都の山のはるの夜の月
關春月　富小路前大納言
鳥のねに添てそいそくあけやすき關のとさしや春の月影
江春月　前藤大納言
影うつす波もおほろに難波かた入江をかけてかすむ月哉
春曉月　侍従中納言
別つる雲ともみえす山端のはれぬ霞にあくる月かけ
春月幽　忠守朝臣
いつのまにかたふくまてになりぬらん霞のうちの春の夜の月
夕春雨　侍従中納言
春雨に霞もふかく成にけり立そふ雲のゆふくれの空
野春雨　御製
今いくか飛火の野守たち出ん若なをいそく春雨のそら
庵春雨　御製
心すむ老の涙にあらそふは草の庵の軒のはるさめ
春駒　富小路前中納言
をのれとやはなれもやらぬ若草に人はつなかぬ野への春駒
雉　爲定朝臣
草の原かすみもふかき春の日にありかそしらぬ雉子なく也

雲雀　　爲冬

春の野のまたはつかなる草葉より空まてあかる夕雲雀哉

歸雁知春　　同

おもひたつたのかころとや天津空かすむよりゆく春の雁かね

夜歸雁　　同

むは玉の闇はあやなき春のよの雲路たとらてかへるかりかね

歸雁連雲　　前藤大納言

歸る雁うはの空なる玉章なかすむ雲路にかきそつらぬる

海歸雁　　御製

春ことにとまらぬ物かあまのすむ里のしるへにかへる雁かね

遠歸雁　　同

行末は雲路にとちてみえすともかすまてかへれはるの雁かね

野遊　　同

白妙の袖は霞にうつもれて春日たくらす野へのもろ人

遊糸　　御製

春の野の駒にそまかふみわたせは霞のひまにあそふいとゆふ

待花　　富小路前大納言

またきよりまつ白雲の立田山それかとみても花そまたるゝ

栽花　　侍從中納言

君かへん御代のためとや櫻花植て千年の春をまたまし

尋花　　前藤大納言

咲ぬやと越はゆけとも山櫻猶めにかゝる雲たにもなし

初花　　源三位

けさみれは花咲ぬらしゝら雲のかゝりそめたるみよしのゝ山

見花　　御製

春ことにさきまさり行山さくらわれな老木と花やみるらん

翫花　　彈正親王

山さくら手ことに折てかへるさも風なそいとふはるのたひ人

折花　　中御門前大納言

ちらぬまにしはしかさゝん櫻花おるてにゆるせはるのゆふ風

交花　　爲定朝臣

いとゝしくあかぬ心も山さくらなれてしらるゝ花のかけかな

曉花　　忠守朝臣

ふかき夜の哀なそへて有明の月にいとはぬはなのしら雲

朝花　　前藤大納言

山さくらへたつる嶺もとたえして梢なみするあさかすみ哉

夕花　　侍從中納言

花なみる心ひとつにいとへとやよそにそいそく入相のかね

夜花　　前藤大納言

みぬまにもちりもやすると山櫻よるも心に花そかゝれる

山花　　同

かつらきやよそにみえつゝ花ははや咲ぬとかゝる嶺の白雲

嶺花　　六條前中納言

尋ね入まゝにそ花にあらはるゝよそにみえつる嶺のしら雲

谷花　　富小路前中納言

今そみる谷の老木の櫻花風たにしらて春やへぬらん

閑花　　左大將實明

旅人のたよりにつけてことゝはんゆきゝの關の花はさくやと

杜花　　侍從中納言

片岡のもりの梢の春ことにしけりてまさる花のいろかな

野花　富小路前大納言
さく花なたむけにそ折春日野やはこふあゆみに春なかされて

關花　御製
逢坂やゆふつけ鳥もなきわたり梢に明るはなのしら雲

瀧花　爲定朝臣
みよしのゝよしのゝ河の瀧つせにたえすもかなと花なみる哉

禁中花　忠守朝臣
九重の雲井の櫻君か代にちらてさかへん春そひさしき

社頭花　爲明朝臣
さそひ行風にもあへす移る也神のいかきにさけるさくらは

古寺花　中御門前大納言
吹風ものとかなれとは初瀬山花のためにや猶いのるらん

故郷花　吉田前中納言
さかりなもちるなも誰かしたふらん花はかはらぬしかの故里

里花　御製
住吉の遠里なのゝ花さゝら松にさそひてはるかせそふく

山家花　富小路前大納言
中々に心やちらん山ふかみ花より外に人めまちえは

庭花　中納言入道
花みてもかひこそなけれたらちねの春なしらせぬ庭の訓は

閑居花　六條前中納言
人とはぬ春や昔の宿の花我身ひとりの友とこそみれ

花雲　吉田前中納言
まかへとてたちのほれとも嶺の雲花になよはぬ色としらすや

花雪　前藤大納言
庭にのみ積りかされて風さそふ梢はきゆる花のしら雪

花梢　光吉
なのみして山はあらしのふかぬ日に梢のさくら長閑にそみる

花枝　爲親朝臣
さそはるゝならひもあらし咲花の枝なならさぬ御代の春風

花本　前藤大納言
さきしより心とゝめて山櫻たちもかへらぬはなのこのもと

花根　道我法印
山櫻あたにしちれはねにたにも猶かへさしとはる風そふく

花插頭　左大辨宰相
櫻花君かかさしに手折てそ萬代ちらぬためしとはみる

花手向　計里丸
みわの山みわのさくらな手なりても手向におしき花の色哉

花扉　道我法印
せめてなとぬさもとりあへす散花な神も心にまかせさるらん

花袂　光吉
袂にも移りにけりな人しれす心に染しはなのにほひは

花衣　爲明朝臣
あたにのみちるてふ花のかり衣きても山路に日數へにけり

花鏡　爲定朝臣
うたてなとうつる鏡の池水にくもるなしらて花のちるらん

花錦　計里丸
春霞たゝたちかくせ風吹は花の錦のみたれもそする

花匂　有光朝臣
匂はすはしらてやすきん山櫻木のもとたとる春の夕暮

花色　前藤大納言
山さくらあたなる花の色をみていたつらにこそ我も老ぬれ
花便　光吉
花ゆへは風のたよりもつらけれは人をもまたし春の山里
花主　富小路前中納言
はなゆへに人もとひこは春ことになを植そへん庭のさくら木
花面影　六條前中納言
おもかけをかすめる雲にさきたてゝ櫻いろなるきさらきの空
花形見　中納言入道
墨染の色になこりそとゝまらぬ昔の袖のはなのかたみは
惜花　前藤大納言
とゝまらて散とも花の面影はおしむ心に猶やのこらん
落花　中納言入道
散花のなこりはなへてしたへともふりゆく身をは人も惜ます
殘花　富小路前大納言
今は身によそなる春のつらき哉一木か花もなこりある世に
苗代　御製
せきかくる苗代水のさま〳〵にわくるや人のこゝろなるらん
蛙　富小路前大納言
うき草のねを絶てなと池水のおなし汀にかはつなくらん
躑躅　祇壽丸
うすくこく岡部にさける岩つゝしいはねと春の色とみえけり
杜若　前藤大納言
咲ぬれはうつれる池のかきつはたをのか影をもへたてさり鳬
欵冬露　左大辨宰相
朝ほらけ花のひもとく春風に露もこほれてにほふ山吹
夕欵冬　御製
咲つゝく岸の山吹かけみえてなかれはゆかぬ花のゆふなみ
河欵冬　爲親朝臣
をく露のひまこそなけれ吉野川波うつ岸の山ふきの花
里欵冬　富小路前大納言
さかりとはいはても人にとはれけり里のなにさく山ふきの花
籬欵冬　道我法印
くれてゆく春の形見と故郷のかきほにさけるやまふきの花
池藤　富小路前大納言
咲にけり底にうつろふ影みれはおなしすかたの池の藤波
江藤　侍従中納言
松かえによせてかさなる住の江の波にも藤の色をやはみる
浦藤　源三位
あま人のかさしなるらし春ことに波もてかへる田子のうら藤
岸藤　爲定朝臣
住の江の岸にはいかて咲ぬらんよすともみえぬ春の藤なみ
松藤　中御門前大納言
老か身に又もやありと君か代のめくみを松にかくる藤波
春欲暮　御製
老か身を嶺の入日にたとへてもたのまぬ春のくれんとすらん
暮春月　同
有明のわかれはやよひ今いくかくれなはなけの月の影かは
暮春霞　經季
くれかゝる日數しられて三月山うすくなりゆく春霞かな

三月盡夜　　中納言入道

限りありて足もやすめす春やゆく夢までおしきけふの別れち

閏三月盡　　御製

一年に三月かさなる時にこそふたゝひ（びイ）春のものおもふなれ

群書類從三十八首　　爲世

夏百首

首夏　　侍從中納言

春とのみ猶したはれて心にもしられぬ夏やけさはきぬらん

朝更衣　　爲明朝臣

よとゝもに春のわかれをしたひきて明れはかふる花そめの袖

惜更衣　　經季

けふかふる花の袂の移りかを春の形見と猶したふかな

餘花　　中御門前大納言

ちりのこる花かあらぬか夏山の青葉か下にかゝるしら雲

新樹　　吉田前中納言

花さかてひとりさめにしまつか枝のおなしみとりに茂る夏山

夕卯花　　前藤大納言

山賤は夕くれことにうの花のまかきはかりに月やみるらん

夜卯花　　爲親朝臣

夏のよの空にのこらぬ月影をかきれに埋むやとのうの花

河卯花　　侍從中納言

山城のゐ手の玉川はる〳〵ときしうつ波にさける卯の花

行路卯花　　光吉

雪ならはわけつる跡もありなまし道たとるまてさける卯の花

山家卯花　　中納言入道

老てすむ山のかきほのいかにして身を卯の花のさかりみす覧

葵　　前藤大納言

もろは草かけてわたりし昔をは神もわするなかもの河なみ

待郭公　　御製

郭公いまはまたしとまちかれてねなんこよひやなきてすく覽

尋時鳥　　侍從中納言

一聲も鳴てしらせよ足曳のやま時鳥いつくなるらん

人傳郭公　　富小路前中納言

なきぬとも我とはきかす時鳥人のかたるをおなしねにして

始聞郭公　　御製

時鳥われは初ねときくものをまた誰里になきてきつらん

郭公未遍　　忠守朝臣

われにのみ猶も初ねやおしむらん人傳にきくほとゝきすかな

月前郭公　　前藤大納言

つれなしと思へはさすか時鳥有明の月になきてすきぬる

雲外郭公　　同

おなしくは聞さためはや遠さかる聲は雲井の山ほとゝきす

雨中郭公　　有光朝臣

降雨にぬれ〳〵きてや時鳥はれぬ雲まにことかたるらん

曉時鳥　　前藤大納言

よな〳〵はまたれてそなく時鳥いつもね覺を聞ときにして

曙時鳥　　中納言入道

きぬ〳〵のうさもしらしを天の戸ををし明かたになく時鳥

朝時鳥　　爲親朝臣

いつくよりなきていつらん鶴戸明てなかむる空のやま時鳥　前藤大納言

夕時鳥

僞の人こそあらめ時鳥まつ夕くれのそらなすこしそ　中納言入道

夜時鳥

やとりとる人や聞らんみしか夜の空もくらふの山ほとゝきす　爲親朝臣

山郭公

時鳥たれにまたれて足引のやまちをいつる聲きこゆらん　道我法印

杜時鳥

もらせたゝしのふの森の時鳥きゝつとたにも人にかたらし　六條前中納言

岡時鳥

時鳥聞てそあかぬ誰になたしのふの岡のよはの一こゑ　中御門前大納言

野時鳥

ほとゝきすしはしなすきそむさしのは鳴て入へき山端もなし　御製

原時鳥

夏きてもけふみかの原泉川いつしかもなく時鳥かな　前藤大納言

關時鳥

一聲をなきて過れとほとゝきす空にはとむる關守もなし　富小路前中納言

浦時鳥

しほたれてまつとはしるや時鳥心つくしのすまの浦人　爲定朝臣

渡時鳥

いつくにかやとをはからん時鳥さのゝわたりを鳴てゆく也　中納言入道

夢中時鳥

思ひねの心つくしの夢路にはみれともきかぬ時鳥哉　御製

獨聞時鳥

人しれす我ためとてやほとゝきすひとりね覺の枕とふらん　富小路前大納言

時鳥何方

行方なしのひやすらん時鳥たゝ一聲をそらになくなり　同

郭公幽

ね覺とふ雲井のよその郭公聞なも夢とおもひけるかな　御製

田家早苗

山里の門田のおもに水こえてすゝしくけふは早苗とる也　道我法印

急早苗

かきくらし雨は降きぬ早苗とる山田の田子や猶いそくらん　前藤大納言

早苗多

けふもまた取手あまたにいそけとも山田の早苗猶もつきせぬ　源三位

沼菖蒲

君か代のなかく久しきためしとて沼のあやめのねをやひく覽　前藤大納言

簷菖蒲

あやめ草何とふくらん五月雨はもらてあるへき軒端ならぬに　同

苅菖蒲

たか袖のものとはなしにおしなへてさ月の沼にあやめかる覽　御製

曉廬橘

曉のまくらに匂ふ立花は老のねさめのおりな知けり　前藤大納言

廬橘風

むかししろ花橘のゆふかせにぬしさたまらぬ袖のかそする　爲冬

故郷廬橘

立花のにほはさりせはふりにける昔なからのやとはしられし　爲親朝臣

樗

露はらふ風そすゝしきあふちさく外面のかけの夏の夕くれ　左大辨宰相

夜五月雨

あらし山くるゝよりふる五月雨にふけてそ瀧の音はきこゆる

山五月雨　　御製

日數へてかさなる雲のひまもなしくらふの山の五月雨のころ

杣五月雨　　吉田前中納言

宮木引杣山河に浪こえてくたすもはやき五月雨のころ

橋五月雨　　富小路前中納言

人はいさかよひやすらん五月雨のふりて久しきまゝのつき橋

江五月雨　　光吉

蘆の葉に波やこゆらん入江こく舟もさはらぬ五月雨のころ

瀧五月雨　　源三位

五月雨のはれまもまたす山姫のさらしそへたる布引の瀧

河五月雨　　中御門前大納言

五月雨にみかさまさりて泉川いつはるへくもみえぬ空哉

湖五月雨　　爲冬

さみたれにみかさやまさる音たてゝ打出の濱の沖つしら波

浦五月雨　　侍從中納言

須磨の浦やあまの衣のほす日さへまとゐにはるゝ五月雨の空

故宅五月雨　　爲定朝臣

はれまなき程にもすきて故郷の軒端くち行五月雨の頃

水鷄　　侍從中納言

つれもなきたか槇の戸をあくるまてたゝきも捨ぬ水鷄なる覽

夏夜　　富小路前大納言

夜をかさね秋にや夢も通ふらんかたしきすゝしうたゝねの袖

雲間夏月　　御製

立まよふ雲まにとめよ夏の月いるへきかたの嶺をへたてゝ

水邊夏月　　御製

手にむすふ水には秋のかよふとて月はすゝしくやとる也けり

夏月似秋　　中納言入道

夏衣袂に月をやとしても秋のこゝろそいとゝわすれぬ

夏月涼　　六條前中納言

村雲のたえまはうすき影なから涼しくふくる短夜の月

夏月易明　　御製

また宵と思ふものから夏のよのしらむか月の明やすき空

瞿麥露　　爲定朝臣

ちりならて又やはらはん床夏の花のまかきにをけるしら露

庭瞿麥　　爲親朝臣

くれなゐの色こそまされ夕つく日さすやかきねのやまと撫子

夏草露　　中納言入道

夏草のしけみにをけるしら露は(にイ)しられぬ秋そみれはさきたつ

杜夏草　　侍從中納言

夏木立露も雫も數そへてしける三笠のもりの下草

野夏草　　富小路前大納言

かち人のわくるもしろく吹風の絶まになひく野への夏草

徑夏草　　前藤大納言

夏草はいかにもしけれ我道のかさなる跡を誰かうつまん

庭夏草　　御製

小田わけん人もたのまぬみやまへの宿にはしけれ庭の夏くさ

夏山　　中納言入道

いかにしてうきみかくさん夏山のしけき木陰に宿りとめても

夏野　　計里丸

里人もなをたとるらん夏草のしけみか末のをの丶ふるみち

照射　　前藤大納言

短夜のあくるにつけては山なる嶺のともしの影そきえゆく

鵜川　　爲定朝臣

大井川さてしもともすか丶り火に闇はあやなきうかひ舟かな

夜螢　　侍從中納言

きえやすき思ひなるらし夏のよのみしかきほとにもゆる螢は

橋螢　　御製

夏のよはとふや螢の玉ちりてをたえの橋にみたれゆくらん

水上螢　　中御門前大納言

水くらき蘆まにすたく夏虫はをのれもえてやよをは知らん

池螢　　中納言入道

みれは又移ふかけも大澤の池のたまもに飛ほたる哉

江螢　　御製

蘆火たく煙はみえす難波かた入江のなみをやくほたる哉

澤螢　　富小路前中納言

飛螢さはへの水にうつれはやもえても影のす丶しかるらん

浦螢　　六條前中納言

蜑のたく浦のあし火のよる／＼は波にもゆるやほたるなる覧

草螢　　源三位

よもすからすたく螢のひかりにて草葉の露のかつやみゆらん

螢似露　　爲定朝臣

飛螢きえすはありとも人とは丶野原の露と猶やこたへん

螢似玉　　忠守朝臣

いせの海やきよき渚の夕波にひろはぬ玉はほたるなりけり

蚊遣火　　六條前中納言

いと丶猶にきはふ里の夕煙またたてそふるかやり火のかけ

夕顔　　・富小路前中納言

咲てこそ人にとはるれ夕貝の花はいやしきかきねなれとも

・蓮　　前藤大納言

吹風にうへこす池のさ丶波そはすのうきはの玉なしける

氷室　　侍從中納言

夏衣たちよる袖やうすからし山下風もさゆるひむろに

夕立風　　中御門前大納言

空くもりた丶ひとしきり吹風のをやむとみれは過るゆふ立

夕立雲　　御製

なる神も雲のいつこになりぬらんよそにすきゆく夕立のそら

山夕立　　中納言入道

なる神の音は高雄の山風に雨よりも猶雲そさきたつ

河夕立　　前藤大納言

一しきりやまちにしつる夕立のすきてそにこる谷川の水

夕立早過　　同

かきくれてやかてそはる丶山端にか丶るとみつる夕立の雲

杜蟬　　中納言入道

蟬の聲きけは秋こそいそかるれいつも常葉の杜のな丶れと

樹陰蟬　　有光朝臣

夏ふかくしける木陰になくせみの聲もす丶しき庭のゆふ風

泉　　左大辨宰相

す丶しさは水の心にまかせけり秋をともにはせきいれねとも

夕納涼　　中納言入道

納涼風　吉田前中納言
小倉山松の木陰の下すゝみゆふくれはかりかよふ秋かせ

納涼忘夏　爲　冬
扇をもわするはかりに吹風を秋やゆふへとおもひける哉

六月祓　左大辨宰相
わすれては秋かとそ思ふ小くら山音もすゝしき峯のまつかせ

御祓川ゆくせにうかふあさのはのをのつから吹風そ秋なる

秋百三十首

立秋朝　御　製
今朝のまに袂すゝしき夏衣一夜にたちぬ秋のはつかせ

初秋風　經　季
をとつるゝ荻の葉よりも吹風のすゝしきにこそ秋はしらるれ

初秋露　前藤大納言
老か身は涙の露のいとゝしくこほれやすきに秋そしらるゝ

待七夕　同
あふことはけふと思へと七夕のくるゝまつまの心をそしる

七夕雲　爲定朝臣
かさぬともおもはぬ物を七夕の雲のころもやたちわかるらん

七夕橋　前藤大納言
秋ことにけふをさしてや天の川わたしそめけんかさゝきの橋

七夕衣　同
あまの川こよひ逢瀬の秋風に雲のころものつまかへるらん

七夕船　御　製
七夕のこよひとたのむ影なれや夕の月のつまむかひふれ

七夕別　源　三　位
七夕の雲の衣もうちしほれけさかへるさはさそしくるらん

七夕朝　御　製
七夕の五百機衣かされても今朝きぬ〳〵の袖そつゆけき

曉　露　前藤大納言
草葉より猶そしほるゝね覺する袖をさきにや露はをくらん

朝　露　道我法印
露をたに結ひもとめす旅ころもあさたつ袖に秋風そ吹

夕　露　中納言入道
身を秋の涙や露になしへけん夕はわきて袖ぬらせとは

夜　露　前藤大納言
露や猶をきまさるらん野原なる草はもわけてよるそしほるゝ

野　露　同
こぬ人をまれくにつけて花すゝき野原の露そ袖にとまらぬ

徑　露　御　製
諸人も道の露をやわけつらん鹿なく秋の君かなさけに

庭　露　前藤大納言
露のみそ秋といふより朝ことにまかきの草にまつむすひける

荻　風　中納言入道
時しもあれ荻のはむけのそよ更に空や秋なる風そ身にしむ

江　荻　光　吉
ほにいつる入江の荻のうは露に結ひもはてぬ秋の浦風

野　萩　中御門前大納言
萩か花咲そめしより宮城のゝこの下露にぬれぬ日はなし

河　萩　左大辨宰相

はきか花ちらまくおしみ駒とめて影をたにみん野路の玉川

庭萩　中納言入道

いれかてに老の袖をそぬらしける獨ある庭のはきの白露

女郎花靡風　爲定朝臣

ひとかたになひくともなく女郎花おほかる野へは秋風そふく

野女郎花　富小路前大納言

幾年か秋のさか野の女郎花つかふる道になれてみつらん

行路薄　爲定朝臣

旅人の野へのゆきゝはしけからてひまなくまねく花すゝき哉

原薄　御製

わけいれはあしたの原の花薄ほにいつる秋そふかくなりゆく

苅萱　中納言入道

我袖の老の涙をかるかやのおもひみたれて露そこほるゝ

蘭　侍從中納言

咲にけりたかぬきかけしふち袴きてこそとはめ匂ふかきりは

槿　前藤大納言

朝露のひぬまはかりをさかりにてまかきにかゝる朝顔の花

野虫　侍從中納言

つかふとてさかのゝ道はいそけとも聞すてらるゝ虫の聲かは

原虫　有光朝臣

夜さむなる野原のかせもふけぬとや有明月に虫のなくらん

徑虫　侍從中納言

よそなからきゝてやすきん秋のゝにわくれはたゆむ虫の聲哉

庵虫　前藤大納言

野原なる草の庵の夕露にたれにとへとかまつむしのなく

庭虫　中納言入道

老てすむ庭の淺茅生かれ／＼にとはれぬ宿のまつむしの聲

閨虫　六條前中納言

ねやにいる夜風もさむくなるまゝに枕になるゝきり／＼す哉

同　同

山かけはまつきゝそめぬゆふつく日さすや岡への松虫のこゑ

雲間初雁　前藤大納言

玉章の外にもをのかつはさには雲をもかけて雁はきにけり

山初雁　富小路前大納言

歸る山春そうかりし雁金のみやこにいそく道はかはらし

嶺初雁　中納言入道

霧のうちにまた玉章はみえねとも峯こえきたる秋の雁かね

遠初雁　富小路前大納言

まちえてもさたかにはみす村雲のへたつるをちの雁の玉章

近初雁　道我法印

みこしちや遠き雲井の音信もたとらてきぬる初かりの聲

初聞雁　爲冬

秋風の吹とせしまにさそはれて空にそきなく初雁の聲

初雁幽　源三位

おも影はそれとしもなし夕くれのみねとひこゆる初雁の聲

朝鹿　吉田前中納言

けさはまたいつくをかけとかくるらん猶妻こひの小男鹿の聲

夕鹿　左大辨宰相

小男鹿も妻を戀てやから衣日もゆふくれにねをはたつらん

夜鹿　富小路前大納言

妻こひのうらみをそへて眞葛原夜寒の風に鹿そなくなる

谷鹿　爲親朝臣

おもひいる谷のかけはしかけてたにあはぬ妻戀に鹿やなく覽

岡鹿　侍從中納言

鳴鹿のわか妻戀は難面てならひの岡に秋風そふく

海邊鹿　同

淡路嶋せと行舟のはやからてきかはやしはし小男鹿の聲

田鹿　富小路前大納言

もろ人のまとろむほとか秋の田の庵のあたりに鹿そなくなる

鶉　六條前中納言

うれへある涙の露やかゝるらん秋のうつらのころもての里

鴫　爲明朝臣

呉竹の伏見の澤にふす鴫の床もよさむに秋かせそふく

秋田　中御門前大納言

遲くとき門田の稲葉打なひきほなみにかはる秋の夕風

秋夕　中納言入道

此秋は老をそへてそなけきつるむかしよりうき夕くれの空

秋雨　同

我はかりたれか身をしる袖はあるとはゝや秋の村雨の空

關霧　同

關の戸はあけやしぬらん秋霧のなをたちこむるあふ坂の山

河霧　同

なみかくるゐせきもみえす大ゐ川霧になかるゝ音はかりして

浦霧　御製

みすもあらすみもせぬ霧の絶まよりゆくゑさためぬ浦の舟人

駒迎　中納言入道

今もかも絶せぬ物はとしことの秋のなかはの望月のこま

八月十五夜　祇壽丸

久かたのおなし雲井にすむ月も秋のもなかのひかりそひけり

夕月　前藤大納言

またれしとまたくれはてぬ山のはをひかりうすくて出る月哉

夜月　侍從中納言

いねかてに秋はこよひと大空のくもらぬことに月をみるかな

曉月　有光朝臣

空はまた霧のみふかくたちこめてかすかにのこる有明の月

山月　前藤大納言

しはしなを嶺をはいてゝしけりあふ松をそこえぬ秋のよの月

嶺月　六條前中納言

いとゝなを雪にひかりそさえまさるふしのね出る秋のよの月

谷月　光吉

流行をとはのこりてすむ月の影のみこほる谷川の水

杣月　同

月のすむ泉のそまの宮木をもくもらぬ御代のためしにそひく

岡月　爲定朝臣

ねてあかす人やなからん水くきの岡のやかたの秋の夜の月

杜月　中御門前大納言

身をしれはかたふく影そあはれなる老その森の月をみるにも

野月　中納言入道

すみれつみし春を忘れて秋のよも野をなつかしみやとる月哉

原月　同

秋のよは小野のしの原たく露にあまりてやとる月の影哉

關月　御製

昔よりすまの關守せきとめて秋は月夜のなかき也けり

徑月　道我法印

わけそめし小野の故道いまも猶たとらぬにかりすめる月哉

橋月　中御門前大納言

しなのなる木曾路の橋のあやうきも月にやすくや渡わたる覽

水邊月　爲明朝臣

しけりあふ秋の野中のわすれ水たえ／＼みえてやとる月かけ（かなイ）

池月　侍從中納言

よとゝもに影もくもらぬ大澤の池こそ月のかゝみなりけれ

澤月　中御門前大納言

秋風やみかきそふらん廣澤の池の玉もにやとる月かけ

沼月　侍從中納言

はるゝ夜は岩かき沼の秋の月底もへたてぬかけやみゆらん

江月　前藤大納言

秋の夜はひかりもきよく住の江に貝なうつして松風そ吹

瀧月　忠守朝臣

白玉のかすさへみえてかめの尾の瀧津岩ねにすめる月かけ

河月　侍從中納言

落瀧津よしのゝ河のはやくしもあけぬよのまの月そやとれる

湊月　同

あかしてもいてこそやられ湊舟波まの月の夜はのうきねに

湖月　爲親朝臣

さゝ波やにほてる浦の秋風にうき雲はれて月そさやけき

浦月　御製

明石かた猶たつねみん秋のよのこと浦にすむ月もかゝやと

濱月　侍從中納言

かす／＼によのまの月や照すらん八百日ゆくてふ濱の眞砂な

磯月　御製

浦風にあらき磯波のくたけつゝ玉ちる月のかけそさためぬ

汀月　忠守朝臣

浦風に影もさためす白波のよするなきさの秋のよの月

崎月　源三位

鹽風に夕霧はれてみほか崎松原となくすめる月かな

嶋月　六條前中納言

くもりなき蓬か嶋の秋の月老せぬかけは君のみそみん

潟月　爲定朝臣

難波かたみちくるほともいそかれてしほひに遠き月の影かな

泊月　源三位

まとろまて波のまくらに明石かた隣瀬くまなき月なみる哉

渡月　爲明朝臣

彥星の逢瀨はしらす天川このわたりには月そなかるゝ

田月　富小路前大納言

あかすもる小田のかり庵の稻葉露しく床のふくる月影

都月　同

もろともにひかりなそへよ昔もすむ花のみやこの秋のよの月

禁中月　爲定朝臣

なへてよにあまねき影と成にけりくもらすてらす雲の上の月

社頭月　中御門前大納言

君かよをさしてそいのる三笠山月に千年の秋をちきりて

古寺月　道我法印

住なるゝ我古寺の昔までこゝろにうかふ秋のよの月

古郷月　吉田前中納言

七よへて又かへりこし故郷の月にむかしのあとやとふらん

村　月　同

河上のゆつはの村の秋の夜は波まをかけて月やすむらん

里　月　中納言入道

月をみてつもりし老にこりはてゝ桂の里も住うかれにき

山家月　御製

秋をへて月もいく夜かすみにけんわれもふりぬる山のおく哉

庵　月　為冬

むすひをく柴の庵のしはしたに月みぬよはゝえやはすまれん

庭　月　左大辨宰相

色かはる庭の淺茅生秋更て夜寒の月そ霜とみえける

井　月　同

山の井のむすひし水に影みれはあやにくにすむ秋のよの月

閨　月　吉田前中納言

山里のねやの板まはあれぬとや心のまゝに月そもりくる

隣　月　為明朝臣

へたてこし宿ともみえぬあれまくにおなしまかきと月や澄覽

閑居月　忠守朝臣

きゝわひぬ夜寒の月の影なから音さへすめる庭の松風

船　月　富小路前中納言

入かたにとまりやとはん清見潟月の出しほに出る舟人

惜　月　同

秋をへてかたふく影のかはらすは我をもしたへ山のはの月

里擣衣　前藤大納言

きけはまた音そ絶せぬ誰里か夜さむの衣うちまさるらん

聞擣衣　中御門前大納言

衣うつをとは時しもわかれとも老のね覺はあはれにそきく

遠擣衣　御製

里人は打もたゆまぬさ衣の絶まはかせそさそはさりける

秋　夜　前藤大納言

秋はたゝね覺の後も明やらす我ためはかりなかき夜半哉

野　分　同

あたしのゝ千種なからの花の色は野分の風に露も殘らぬ

葛　同

露なから色かはるより秋風の吹をうらむる野への葛はら

栽　菊　六條前中納言

幾秋も植てちきりやむすはましときしろ露の玉の村きく

菊　露　御製

ちきりをく露も千年につもりてや老せぬ菊の淵となるらん

尋紅葉　同

はるかなる嶺のもみちのかくれれは尋ぬる道も迷はさりけり

初紅葉　六條前中納言

さかの山西こそ秋と露やまつ初しほそむるもみちなるらん

山紅葉　中御門前大納言

もみち葉の千入のうへを立田山いかにそめんと猶しくるらん

岡紅葉　計里丸

夕日さす岡へのもみち葉はてゝ遠さかりゆく初時雨かな

杜紅葉　為定朝臣

いつよりかしくれそめけん神なひの杜の梢の色まさりゆく

河紅葉　左大辨宰相

大井川昔のあとを思ひいてゝもみちやいまも御幸まつらん

松間紅葉　為冬

立ならふ松のみとりのつれなさもまさる紅葉の色にこそしれ

雨後紅葉　富小路前大納言

かつはるゝ日影にみれは村時雨そめける木々の色そわかれね

紅葉映日　吉田前中納言

時のまも移ろふ色のふかき哉はれて入日のみねのもみちは

紅葉如錦　侍從中納言

もみち葉は立田の川の水のあやに重ねてをれるにしき也けり

暮秋雲　同

月はかつのころもみえぬ村雲にしくれていとゝ秋やくれなん

暮秋霜　富小路前中納言

蘆かきのかれ葉は冬もちかしとや秋のとなりとをける霜哉（夕霜イ）

九月盡曉　御製

おしめとも今つきぬなり曉のかねをかきりの秋のわかれち

冬百首

雅案點三十首　為世

初冬曉　前藤大納言

吹おろす峯のあらしの音までもね覺はけしく冬はきにけり

初冬嵐　同

小倉山けさ音たかく松に吹みねのあらしも冬をしりけり

初時雨　為冬

晴くもるほとたにみえす初時雨ふりあへぬまに冬はきにけり

時雨雲　源三位

時雨つゝ夕日はもりて山のはをたえ〴〵めくる雲のかけかな

風前時雨　侍從中納言

山たかみ空にのみして吹風のめにみえぬかたにゆくしくれ哉

山時雨　前藤大納言

神無月よそなる雲もやかてまた山端こえてふるしくれかな

嶺時雨　同

あらしふくみねのうき雲とにかくに立もさためすふる時雨哉

杜時雨　御製

そめわたすしのたの森の夕時雨千枝もちしほの色そまさらん

關時雨　中御門前大納言

清見潟なみの關守ひまはあれと猶袖ぬらす夕しくれかな

里時雨　中納言入道

立よらんかさまの里の近けれはしくるゝ雲のはれまつほと

閏時雨　富小路前大納言

ね覺とふ閨の板まの村時雨月影ならてもるもいとはす

時雨過　六條前中納言

さそはるゝ涙は袖に殘れるにはやくも過るむらしくれ哉

曉落葉　源三位

風にちる木のはより猶曉のね覺にもろき我なみたかな

夕落葉　六條前中納言

夕されは又さそひゆくあらし哉人ははらはぬけさの木のはを

夜落葉
山里にさそふあらしの音たてゝ木のはふるよは夢もむすはす　吉田前中納言

落葉隨風
もろくちるもみちをよもに吹たてゝ風のまゝなる村時雨哉　左大辨宰相

落葉混雨
そめなれし杜の木のはに神無月ちれとふりそふむら時雨哉　侍從中納言

谷落葉
谷ふかき妻木の道やうつむらん朝夕風にちるもみちかな　爲定朝臣

路落葉
梢をはさそふ嵐も山路まてはらにてつもる木々のもみちは　富小路前中納言

河落葉
立田川わたらぬころとなりはてゝ紅葉はなかる瀨々のしら波　爲定朝臣

橋落葉
ちりかゝる谷のかけはしうつもれて木の葉の上をわたる山人　前藤大納言

庭落葉
梢にそ冬はきにけるもみちゝる庭のさかりを秋とみるまて　富小路前大納言

野霜
かれのこる野への草葉もなきものをおかすや霜の置結ふらん　忠守朝臣

田霜
秋はてし苅田のくろにをく霜のたゝいたつらに消ぬへき身を　中納言入道

庭霜
庭のおもに有明の月の白妙に殘るとみえてをける霜かな　御製

草霜
山里にわけし人めはかれはてゝ霜のみむすふみちのしは草　彈正親王

篠霜
かれはてぬ物からなとて小篠原よのまの霜に色かはるらん　侍從中納言

谷寒艸
山水の聲なからやこほるらんをく霜さむき谷のかけ草　彈正親王

杜寒草
この葉ちるいはせの杜はいつのまに下草かけて霜のをくらん　中納言入道

岡寒草
水莖の岡の萩原秋すきてかれ葉にのこる冬のゆふかせ　御製

野寒草
秋の色もはてなくみえし武藏野の草はみなから霜枯にけり　吉田前中納言

原寒草
かれはつるあしたの原をきてみれはのこる小篠の霜の一いろ　左大辨宰相

池寒蘆
水鳥の青には冬もかれぬともあしま寒行池のおもかな　御製

江寒蘆
なきわたる入江のたつの聲さえて蘆やそ冬のかけはみえける　同

水鄕寒蘆
蘆そよく難波のみつの浦風によるよるいとゝこほる波かな　中納言入道

氷初結
我庵の竹のかけ樋のよのほとにこほりそめてや音つれもせぬ　同

瀧氷
龜の尾の瀧のしら玉こほる也とけてや千代の數もかそへん　同

湖氷
さゆる日はにほの浦波とちそへてこほりのひまをわたる舟人　侍從中納言

田氷
春きてはまつせきわけし苗代の田中の井ともこほるころ哉　爲明朝臣

掛樋氷　　御製
きくまゝにかけひのたとも絶ぬ也夜のまにこほる谷川の水
杣冬月　　同
光そふ月のかつらはかれもせてわかたつ杣そ猶さかふへき
河冬月　　吉田前中納言
大井川さらてもきよき月影を冬はこほりや猶みかくらん
冬冴月　　御製
月影も更行まゝに霜そをくさゆるは冬のならひなれとも
豐明節會　　中納言入道
乙女子か袖ふることのわすれぬは豐のあかりのむかし也けり
寒夜千鳥　　御製
夜たゝ寒みさほの山風さえまさり河瀨のなみに千鳥鳴也
礒千鳥　　有光朝臣
更行はやとるもさむき月影を友とや礒にちとりなくらん
渡千鳥　　光吉
泉川わたりを遠み月さえて氷のうへにちとりなくなり
河千鳥　　爲定朝臣
立波のまなくもなくか友千鳥さほの河瀨のさゆる霜夜に
浦千鳥　　六條前中納言
つかへこし跡に殘りて浦千鳥あるかひもなきねをのみそなく
曉水鳥　　爲定朝臣
影やとす有明の月を池水のうきねこほると鴨やなくらん
池水鳥　　侍從中納言
池水につかはぬ鴛はねぬなはのくるよもなしとねをや鳴らん
江水鳥　　爲明朝臣
わひつゝはつかはぬ友と賴むらし入江の鷺のひとりは（をなし イ）
尋網代　　道我法印
立よりていさみにゆかんものゝふの八十氏河のせゝの網代木
夜網代　　中納言入道
袖ぬれてあしろにひをのよる〳〵に宇治の橋姬契りまつらん（富小路大納言イ）
朝霰　　左大辨宰相
いつこより霰ふるらんかきくもる朝けの空は雪けなからに
夜霰　　富小路前大納言（左大辨宰相イ）
宵のまはしくれてすくる閨のうへにまたをとかへてふる霰哉
竹霰　　御製
冴る夜のね覺のとこにをとつれて竹の葉そよきふるあられ哉
篠霰　　同
道のへのしのゝ小篠に降あられ一むらすきて玉そみたるゝ
屋上霰　　御製
板ひさし竹の柱のかりの世にうちおとろけとふるあられ哉
初雪　　同
冬もきぬさひしさまさる苔の庭はたれにふれるけさの初雪
山雪　　富小路前大納言
あらし吹末の松山いくかへりくたけてこゆる雪のしらなみ
嶺雪　　爲定朝臣
よそなからわくともわかし嶺たかみ雲もひとつにつもる白雪
谷雪　　富小路前中納言
山人のつま木の道もあとたえて雪にあやうき谷のかけはし
杣雪　　彈正親王
みわ川や消てなかるゝ白雪はくたす杣木にふりやつむらん

杜雪　爲定朝臣
降雪のかさなる色も白妙の袖とやみえんころもてのもり

野雪　富小路前大納言
ふる雪に道ふみまよふかち人のあともはてなきむさしのゝ原

關雪　前藤大納言
ふかくのみつもる關路をわけかれ（わひイ）て雪に心とゝまるたひ人

徑雪　同
雪ふかき野原の道もさきにたつ人のあとにそまよはさりける

湖雪　侍從中納言
ひらの海や氷も波もうつもれて降そふ雪に山かせそふく

浦雪　六條前中納言
浦遠くあまの戸明てなかむれは雪降にけり淡路しま山

濱雪　侍從中納言
降雪はつもりにけりなすみよしのいてみのはまの冬の明ほの

嶋雪　爲親朝臣
みわたせは浦のはつ嶋はつかにも雪より外の色そのこらぬ

都雪　前藤大納言
きのふまて外山はかりにふるとみし雪そ都にけふつもりける

禁中雪　彈正親王
九重の梢の雪をたちなれしみはしの花のかけかとそみる

社頭雪　富小路前中納言
ふりにける都の北野わきてしも雪まや神のあとをたれけん

古寺雪　經季
鐘の音やしるへなるらん初瀨山ひはらもみえすつもる白雪

故鄕雪　爲親朝臣
咲花の面影のこす白雪をとはぬもつらし志賀の故里

里雪　中御門前大納言
通ひこし家路もみえす白妙につゝきの里の雪の明ほの

山家雪　中御門前大納言
ふりつみてこ山の道の絕しよりつま木にたのむ松の雪おれ

田家雪　御製
雪ふれは門田の稻もかりにしを又くもをなす有明の空

閑居雪　同
山里の雪のうちこそしつかなれとふへき人もあらしと思へは

松雪　同
消なくに又降つもる松の雪かゝれる枝そさらにおれふす

竹雪　同
あとたえてまかきの山もうつもれぬ音さへさひし竹の雪折

杉雪　同
三輪の山杉のしるしもなかりけりみとりをうつむ雪の白ゆふ

狩場風　爲明朝臣
夕くれは淀の河かせ身にしめてかたのゝを野をかへるかり人

夕鷹狩　中納言入道
いくつかれ空とる鷹のおち草もみえすなりぬる野への夕暮

野鷹狩　六條前中納言
はし鷹のこゐにかゝりてたつ鳥のおち草なひく野への夕暮

炭竈煙　前藤大納言
冬寒み冴る日そ猶すみかまの煙は空に立まさりけり

遠炭竈　中御門前大納言
とはゝやなをのゝすみかまをのつから通ひし道は雪深くとも

爐火
身の春をさてもまちえは埋火の埋もれはつる名をはのこさし　爲明朝臣
神樂
白妙の霜をかされてさゆる夜にあか星うたふ雲のうへ人　爲親朝臣
佛名
つくりける罪も殘らしけふしはや三世の佛の御名をとなへて　中納言入道
年內早梅
難波人蘆火たくやの雪のうちに春やをそしと匂ふ梅かえ　中御門前大納言
山家歲暮
たかためかあけなん年を松の戶に春しらぬ身は住かひもなし　中納言入道
閑居歲暮
おしみえぬ今日の暮こそしられぬれ八十の年を送りむかへて　同
老後歲暮
哀なり昔にもにすのとかにて老てそ年のくれはいそかぬ　前藤大納言
惜歲暮
四十あまりつもれる年のいたつらに近つく老に春もまたれす　吉田前中納言
路歲暮
世中よいそくは年のならひにて行ともしらぬ老らくの道　御製
河歲暮
世をわたる人こそいそけ早瀨川はやくなかるゝ水のとし波　富小路前大納言
除夜
としはゝやけふくれ竹と思ふにも一夜はかりに惜むかひなし　中納言入道

戀百二十首　撰集點二十四首　爲世

初戀　光吉
こひそむる初山あゐの下衣したの心をしる人そなき
忍戀　爲明朝臣
いとせめてくるしきものは君にさへもらさしとする淚也けり
不見戀　御製
吹風のをとにはきけといたつらにめにみぬ中に年そへにける
見戀　御製
しられしな思ふ心はわたのそこみるめにやかてぬるゝ袖とは
不聞戀　有光朝臣
をのつからつてに通ひし言の葉のつらかりし世そ今は戀しき
聞戀　侍從中納言
かけふかき蘆のかれのをとなれや聞よりやかてくらす心は
詫戀　六條前中納言
戀しなはまよはん闇のはてもうしたゝ此まゝにとはゝ答へよ
請戀　侍從中納言
こたへしな杉の下陰ふみまよひ敎の道にゆきかへるとも
祈戀　侍從中納言
われはかり祈そかくる神垣にひくしめ繩のなかきちきりを
誓戀　同
戀しなんことたにせめておしき世をあたにも人の誓ひける哉
契戀　彈正親王
同し世にかはるをみんもつらけれは契しまゝに戀やしなまし
語戀　爲冬
いかはかりあひみんよはを重ねてか我むつことの限しられん
賴戀　前藤中納言
いさやまたともに心のかよはねは我はたのめと人はたのまし
不憑戀　吉田前中納言

僞のいくゆふくれになりぬらんわれもたのまぬ心とをしれ

思煩戀　前藤大納言

いつかたに思ひ定めてたのまゝしこの夕暮のまことといつはり

僞戀　侍從中納言

あたにわかたのみけゐ身はつらからてたか僞を猶たのむらん

疑戀　爲冬

かれてより人の心もしらぬよにちきれはとてもいかゝ頼まん

馴戀　富小路前大納言

なるゝをは厭はぬ物をみても又みまくほしさの後はしらねと

不逢戀　爲世朝臣

憂身にはまたきなき名もよしやさはそをたに中の契と思はん

待戀　御製

夕暮をなになけきけんまつよはの更行空は猶そかなしき

不來戀　中御門前大納言

蜑のすむ里とはきけと興津波たちよるまてもなき契り哉

逢戀　富小路前大納言

こよひたにいかて忘れんあふ事のあるにつけてもつらき別を

不留戀　中納言入道

とゝまらぬならひもうしや思ひ川流れあふせの又もなけれは

別戀　爲定朝臣

秋をたにまたてそやかてうらみつるうきわかれちの葛の下風

逢不遇戀　爲兼朝臣

わけなれしならひそつらき今更に行てはかへる道のさゝはら

欲顯戀　爲親朝臣

朽ぬへき袖にまかせてすくすかな今は心にあまるなみたを

顯戀　爲明朝臣

たへてしもつゝみはてしと歎ても昨日はみえし袖の色かは

疎戀　六條前中納言

つれなさを馴てもいはゝいたつらに憂年月はよそにつもらし

切戀　富小路前中納言

戀しなん後そうからん後の世と契りてかはる人のつらさは

驚戀　前藤大納言

きゝてまた人も哀といふはかりおとろかさはや荻の上かせ

増戀　富小路前大納言

人までもうしとはいはし數ならぬみには數そふ思ひなりとも

變戀　侍從中納言

わすれ行心とまてはきかしはやいひしはかはる契りなりけり

隱戀　爲親朝臣

おなし世に猶なからへてあるとたにしられぬ人をなに忍ふ覽

爭戀　侍從中納言

ちきらすと間にそたれも迷はまし忘られぬへき言のはならは

厭戀　御製

わすらるゝ身を浮雲のありはてゝなきたる空に眺めわひつゝ

悔戀　源三位

契りけん末もくやしき中そとはいはぬ物から人そつれなき

春戀　侍從中納言

人しれぬ谷の鶯うくてなをかすめる中にねをのみそなく

夏戀　源三位

逢ことはけに夢なれやはかなくもまた宵なから明るわかれち

秋戀　（源三位イ）富小路前中納言

しゐて猶すゝろに人のまたるゝや秋の夕のこゝろなるらん

冬戀　源三位（富小路前中納言イ）

とけてねぬ契りもつらし埋火のあたりもこほる霜のさむしろ

曉戀　前藤大納言

ありし世につらしとき〻し鳥の音そあはてわかれの曉もうし

朝戀　御製

袖にをく露をは秋と思ひしにあくるあしたのなみた也けり

晝戀　爲親朝臣

物思ふ涙の露をゝきそへてひるまもしらすぬるゝ袖かな

夕戀　六條前中納言

いかにせんあたにたのめてまつ人のこてもやと思ふ夕暮の空

夜戀　前藤大納言

夜半ことに思ひねにみる夢にたに心かよはてあかす中哉

老戀　中納言入道

今はよも逢にもかへしいたつらにおしまてすてん老の命は

幼戀　有光朝臣

つらくとも猶や心にかけてましふりわけかみの姿ならすは

遠戀　前藤大納言

一筋にたのみこそせめはる〳〵ともろこしまても心かよはゝ

近戀　爲明朝臣

かくはかりまちかき中を蘆かきのへたてぬ中のちきりとも哉

隔戀　吉田前中納言

蘆かきは荒ゆくひまもありぬへしつらき心そうきへたてなる

旅戀　富小路前大納言

戀しさはなへて都を旅衣かへさは人のあやしとやみん

思戀　同

あちきなく人を思ひのいかなれは心ひとつに身をこかすらん

片思　爲定朝臣

心かへする世なりともかくはかりわれをは人のえやは思はん

夢戀　六條前中納言

今も猶さめてうつゝに悲しきは心にのこる夢のおもかけ

稀戀　吉田前中納言

いかなれは七月のけふと契られと逢夜のおなし恨みなるらん

舊戀　彈正親王

今更におとろかすともいかならんあひみしことの昔かたりは

久戀　中御門前大納言

年ふりて波の下なる濱ひさきくちぬる袖はとふ人もなし

絕戀　侍從中納言

池水の汀の波のあさ氷かへらぬ中にむすほゝれつゝ

忘戀　左大辨宰相

いかなれはおなし軒端に生る草の人の爲なるたねとなりけん

恨戀　爲明朝臣

ひたすらに恨てもまたいかゝせんつらき限のなからましかは

寄天戀　祇壽丸

夕くれのうはの空なる思ひこそ我身なからも行衛しられね

寄日戀　侍從中納言

朝日影さしてもしらしくるとあくとはれぬ思ひにくたく心は

寄月戀　中納言入道

思ふともこふとも人につけなくにまつしりにける袖の月かけ

寄風戀　御製

色かはる人の心になく露の身を秋風にちるなみたかな

寄雲戀　中納言入道
よしさらは夕の雲のあともなくおもひ絶なはものはおもはし

寄煙戀　中御門前大納言
ちきりきなわれも忘れし時しらぬふしの煙はたゝすなるとも

寄露戀　吉田前中納言
消やらぬ露のかことのなかりせは何をたのみの命ならまし

寄雨戀　中納言入道
あひみても思ふ心のはれやらて身をしる袖の雨そかひなき

寄霜戀　中納言入道
よしさらはわかれしまゝの秋はてぬ心をくへきみち芝の霜

寄雪戀　前藤大納言
あはれとは人はおもはしいたつらに春ふる雪の思ひきゆとも

寄山戀　中納言入道
あちきなや人に心をつくは山はやまのしけき道にまよはゝ

寄谷戀　左大辨宰相
あさき瀬のまたいつかたにせかるらんとたえ勝なる谷川の水

寄杜戀　以通朝臣
大あらきのもりにし袖の露よりや下草かけて色にいつらん

寄野戀　富小路前中納言
よしなしやあたの大野の草枕たゝかりそめにむすふ契りは

寄關戀　御製
しのひつゝゆるさぬ中のへたてにて人をなこその關守そうき

寄橋戀　左大辨宰相
かつらきの神もうけすや成ぬらんくめちの橋のなかに絶ぬる

寄水戀　侍從中納言
ともすれは岩まつたひに行水のとゝこほりてもぬるゝ袖かな

寄江戀　六條前中納言
いたつらにあた波かけて逢事はいなさほそ江の恨みとそなる

寄川戀　中納言入道
いたつらにたつなはかりはかひもなし憂身を川のせゝの白波

寄海戀　彈正親王
契りても心をは猶おくの海やふかくは人をたのむものから

寄忍草戀　同
をのつから忘るゝことのたれもかなしのふ計は草のなもうし

寄忘草戀　富小路前大納言
うき人の心にいかゝまかすへきわするゝ草のたねはありとも

寄葛戀　道我法印
つれもなき人の契りも葛かつら絶にし日より秋かせそふく

寄蘋戀　侍從中納言
浮草のうきたる中と思ふにはいふにもたへぬれこそなかるれ

寄海松戀　中御門前大納言
かひなしな袖のみ濡て蜑のかるみるをあふにて年はへぬれと

寄松戀　侍從中納言
逢ことをまつとしならは言の葉もかはらぬなかの契りとも哉

寄杉戀　同
よそなから古川野へに立杉もまたあひみしと契りやはせし

寄桐戀　御製
契りしもたかはさらまし桐の葉をきさみし人の有世なりせは

寄鹽木戀　中納言入道

いつまてか埋の鹽木のこりもせてからき思ひに袖ぬらすらん

寄埋木戀　御製

人しれぬ谷のうもれ木年ふりて心ひくともいかてしらせん

寄雁戀　計里丸

戀わふる覺の床もいとゝまた涙數そふ初かりのこゑ

寄鳰戀　御製

我中のにほの通ひちそれならは池のこゝろも下にたのまん

寄鴛戀　同

つらからしうらやましくもをし鳥の羽をはかはせる契也せは

寄山鳥戀　爲明朝臣

かひなしや遠山鳥のよそにのみしられぬ中にねをはなくとも

寄馬戀　六條前中納言

黒かりし駒もつかるゝ山吹のいはぬ色こそくるしかりけれ

寄猪戀　爲親朝臣

我をたにまつとしきかは尋ねみんふす猪の床のすまゐなり共

寄鹿戀　經季

をのつから物を思はぬゆふへたにたへてやきゝし小男鹿の聲

寄螢戀　左大辨宰相

色みえてむせふ思ひを人とはゝもゆる螢そこれとこたへん

寄蠶戀　爲定朝臣

しられしな親のかふこのひきまゆの心にこむる思ひありとは

寄我栖戀　源三位

はかなくも我から人を戀そめて藻にすむ虫を哀とそ思ふ

寄玉戀　道我法印

いく度か涙の玉のをゝよはみ消かへりてはものおもふらん

寄鏡戀　六條前中納言

山鳥のはつ尾にかくるますかゝみなをかに人をこひん物かは

寄匣戀　光吉

をのつから逢夜もあらは玉くしけ明ゆく空も歎かれなまし

寄髪戀　忠守朝臣

せきあへぬ袖の涙の玉かつらかけてもしらしたきつこゝろな（はイ）

寄本結戀　爲定朝臣

よるよるは我もとゆひの霜ならて結ひもをかぬ契りをそまつ

寄枕戀　前藤大納言

はかなくもよるはすからにおきゐつゝ枕たにせて人を戀ける

寄席戀　彈正親王

をのつから思ひたにやれ戀わひてひとり片しく床のさむしろ

寄衣戀　富小路前中納言

うき中をしのふのみたれ限りなく誰身にふれし衣なるらん

寄帯戀　以通朝臣

むすほゝれ猶やいのらん常陸帯うちとけかぬる人のこゝろを

寄繪戀　富小路前中納言

我思ふ人をかたみにしのふともうきおも影をうつしとゝめし

寄硯戀　道我法印

水莖のたよりとみても石硯かたきちきりのはてそかなしき

寄筆戀　侍従中納言

徒にかきもつくさぬ水くきはあとをつけてもかひやなからん

寄笛戀　前藤大納言

あちきなくいさ現れて笛竹のねにたてゝたにさそときかれん

寄弓戀　中御門前大納言

いかてかく思ひそめけん梓弓我心ともひきかへさはや

寄箭戀　中納言入道

梓弓ひきもとむへき別れちをやといひしにもかへらさるらん

寄扇戀　侍従中納言

我中は秋にあふきのかせなれやうきみを人のならすよもなき

寄被麻戀　爲定朝臣

大ぬさのよるせあらはとまちしまにひくて數多の數やそふ覽

寄舟戀　前藤大納言

いたつらにあはての浦によるへなき我身そ今はあまのすて舟

寄網戀　侍従中納言

ひくかたはありとしられてあみ繩のめにたに人をかけぬ比哉

寄鐘戀　同

あけぬとていとひしものを獨寐にきくとしもなき鐘のをと哉

已上三十四首　此内清撰御點九首　僻案點十九首　爲世

雜百二十首

名所山　御製

春ことに匂ふさくらに麓かきのよしのゝ山をちかくみるかな

名所岡　忠守朝臣

いく年か猶もさかへん君か世に影をならひの岡の松かえ

名所杣　源三位

かしこきは泉の杣木ひけと猶つきぬためしの御代にそ有ける

名所杜　侍従中納言

ふりにけるしのたの森の惠あれは千枝にちえそふ時やきぬ覽

名所野　同

我道のためしとそみるむさしのや猶ゆくすゑの限りなけれは

名所原　六條前中納言

東路に通ひし道はわすられて今も心にうきしまかはら

名所路　彈正親王

今も猶みゆきはたえしさかの山君かすみかの千代のふる道

名所橋　御製

老らくの昔なからの身はふりて世にわたらぬはしつか也けり

名所池　同

くみてしる水の心やふかゝらんちかくなれたる大澤のいけ

名所澤　光吉

廣澤の流をうけて法の水萬代まても君そすむへき

名所沼　侍従中納言

花かつみかつみるかたもなかりけり淺香の沼のあさき心は

名所江　爲定朝臣

さらぬ（てイ）たにみたれやすきを難波江の蘆の末葉に浦風そ吹

名所瀧　富小路前中納言

雨はるゝむかひの山のちかけれはとなせの瀧のをとそ聞ゆる

名所河　御製

駒とめてしはしすゝまんうちわたすひのくま川の水のしら波

名所瀬　光吉

世々ふとも流はたえし松浦川七瀬のよとも末をふかめて

名所湊　源三位

世をわたる道はこれまて哀也ゆらのみなとをいつる舟人

名所海　經季

よさの海や松のあなたは雲はれて夕日にすける天の橋立

名所湖　爲明朝臣

さゝ波やしかのから崎かみさひて千代ふる松にあらしふく也

名所浦　六條前中納言

わきも子かふなのりしつゝまのゝ浦の入江の波に小菅かる覽

名所濱　同

行とまるやとはいつくそ山越て道もとをつのはまの眞砂地

名所磯　前藤大納言

旅衣波のたよりに東路の大磯小磯ともにみしかな

名所汀　左大辨宰相

よる波の音はかはらすからさきの渚の松はとしへぬれとも

名所崎　爲定朝臣

きの國やゆらのみ崎に日かすへて數かきりなく玉ひろふ也

名所嶋　富小路前大納言

かこの嶋よせくる波のさゆる日は日影をつたふたつのもろ聲

名所潟　六條前中納言

うらみしよ月は有明になるみ潟しほのみちひを空にしるとは

名所田　富小路前大納言

ゆたかなる年そ重ねん雲をなすとは田のおものゆくすゑの秋

名所村　爲親朝臣

すみのほる光をそへよ名にたつる玉井の村のやまのはの月

名所市　光吉

みわの市我道たつるしるしあらは扱も賤しき名をやかふへき

名所都　侍從中納言

さゝ波やしかの都はふりぬれと昔にかへる御代にあふらん

名所津　有光朝臣

我君のめくみもひろきなかれ哉秋津の嶋の波の外まで

羇中曉　侍從中納言

鳥の音もいそかれぬよそなかりける草の枕のかりねと思へは

羇中朝　中納言入道

行末を猶こそいそけ旅の空朝ふむ駒のあしにまかせて

羇中晝　左大辨宰相

今しはし夕影まちて山こえん清水すゝしきあふ坂の關

羇中夕　中納言入道

そことなき里のしるへの夕煙たちもとまらぬ旅の空かな

羇中夜　御製

みしかさも旅ねはわかす夏引の手引の糸のよるそかなしき

羇中嶺　同

行末もいくへ越なん岩ねふみかさなる嶺のあとのしら雲

羇中泊　左大辨宰相

うき枕波のとまりはかはれともおなし都にかよふゆめかな

羇中里　中納言入道

けふいく日ゆくを限りに行暮て里をはわかぬ旅ねしつらん

羇中渡　道我法印

打わたすみつのわたりはよをこめて末は淀のゝ明ほのゝそら

羇中關　以通朝臣

故郷をしのふにつけて秋風のいとゝ身にしむしら河の關

羇中情　前藤大納言

日數のみへたてゆくとも心をはみやこにかけてこゆる山みち

羇中夢　同

思ひねの夢をたよりに草まくらかりねにちかく都をそみる

羇中思　中御門前大納言

したはるゝ我故郷のことつてはなきも都の人そまたるゝ
羇中涙　前藤大納言
遠さかる都を戀て旅衣袖にかゝるはなみたなりけり
羇中別　忠守朝臣
此ころは道ある御代に逢坂の關はゆきゝの人もまよはし
羇中枕　中御門前大納言
ねられねは夢はさたかにみえもせて露社むすへ草のまくらに
羇中席　爲冬
草枕むすひかされて小莚にころもかたしきいくよかもれん
羇中衣　富小路前大納言
わけきても幾へになりぬ旅衣かさなる山の雲をたよりに
羇中船　同
こきとむる湊の舟のいまもまたしらぬとまりにかゝる夕なき
羇中鐘　御製
けふも又かさなる山を越くれて雲のそこなる入あひのかね
山家路　中御門前大納言
行歸り千代のふる道踏わけてつかふるさかの身とそなりぬる
山家橋　吉田前中納言
たれかまたわたしそめけん山里のあやうき道の谷の柴橋
山家水　彈正親王
龜の尾の山の岩ねにせきとめて千代のかけみる庭の池水
山家庭　富小路前大納言
秋をへておとろかぬまて成にけりまかきになるゝさを鹿の聲
山家草　同
誰かまた山のかけ草おいぬとも人にしられぬ身をかくすらん
山家苔　中御門前大納言
山里の岩ねにむせるこけ莚たれいにしへをしきしのふらん
山家木　侍從中納言
山陰はたつぬる人もあらはこそ杉のしるしをみてもとひこめ
山家鳥　爲冬
さま〳〵になきてそなるゝ鳥のねのきこえぬ山も有てふ物を
山家虫　同
秋もなをさひしとおもふ山里も身にしられぬるむしの聲哉
山家獸　御製
としふれはふすゐの床もへたゝらてなれぬる山のおくの庵哉
田家春　中御門前大納言
我門の苗代水やまさるらん小田の蛙の聲しきるなり
田家夏　源三位
あくるより門田の早苗とりそめてくれ行までに猶いそくかな
田家秋　中納言入道
よをあきの田中の庵のありしとてかゝる處に身をそすてぬる
田家冬　吉田前中納言
冬くれは田面のひつち霜とちて人なき庭に月そもりける
田家風　六條前中納言
今よりはあれにし庵やかこはまし稲葉かきわけ秋風そふく
田家雲　前藤大納言
庵むすふ田面のかせに吹しきていなはの雲そ立ものほらぬ
田家煙　中納言入道
あはれともけふりの末を人はみよ田つらの庵の心ほそさは[ぞイ]
田家雨　計里丸

まはらなる小田のかりいほもる雨に涙をそへてぬるゝ袖かな

田家露　爲明朝臣

よもすから露もおきゐて秋の田のいほもる袖をしほるころ哉

田家霜　侍從中納言

もろとせしかりほの庵もあとふりぬ田面の霜の冬の朝あけ

曉　夢　中御門前大納言

曉はおとろきやすき時しもあれなそいにしへの夢にみゆらん

短　夢　道我法印

さめやすきならひもかなしぬるかうちの夢計こそ慰みもすれ

夢　驚　御　製

むなしくて一夜の夢はおとろくになかき迷そさむるかたなき

寄風無常　光　吉

風の音に秋とはかりはおとろけと夢のうちなる月日也けり

寄露無常　御　製

あたしのゝ露はちりても又そをく消てあひみぬ人そはかなき

夢中懷舊　富小路前大納言

夜とゝもにねてもねぬにもみる夢は心にかへるむかし也けり

懷舊涙　御　製

老ぬれはもろき涙のくせとてやむかしをきけは袖ぬらすらん

獨懷舊　御　製

わきてその戀しきことはなけれとも昔わすれぬひとりねの床

老後懷舊　源　三位

むかしとて思ひ出もなき老かみに君かめくみを猶あふく哉

懷舊非一　中納言入道

身にすきし昔をいへは思ひ出の數にもすきてわれそ老ぬる

寄月述懷　御　製

なかめつゝ老とやつもる秋ことに我身ひとつの月ならねとも

寄星述懷　富小路前大納言

君か代にあふ嬉しさをこよひわれ七夕つめにくらへてやみん

寄關述懷　同

きみか代に今相坂の關ならはきゝていそかん鳥のねもかな

寄瀨述懷　道我法印

さりともと深くそたのむ石清水うきせに沈む身とはなさしな

寄木述懷　吉田前中納言

年月はよそにみてのみ過しかと昨日の木こそ身のたくひなれ

寄草述懷　左大辨宰相

ふみなるゝおとろの道の行末は神のめくみにまかせてそみる

寄鳥述懷　六條前中納言

いたつらに音をこそなかめ飛鳥のあすかと迄も頼みなきみを

寄虫述懷　侍從中納言

あひにあへる時とはしるや松虫のまつにかひある御代の惠を

寄玉述懷　中御門前大納言

ふりまさる老の涙のたま／＼もかはくましらぬわかたもと哉

寄鏡述懷　中納言入道

昔にはうつろひかはる世なれともかゝみの影そ我身なりける

伊　勢　爲明朝臣

君か代にあふく内外の宮柱千たひかへても猶やまもらん

石清水　富小路前中納言

君すめはすむとこそきけ石清水神も昔の世をやまちけん

賀　茂　中御門前大納言

思ひ出るかものみあれのもろかつら昔をかけてぬるゝ袖かな

平　野　　御　製

今も猶民のかまとの煙まてまもりそすらん我國のため

春　日　　中御門前大納言

君か代に契りありてそ春日山しかもさかへん北のふし浪

大原野　　吉田前中納言

君か代をさそまもるらん大原やたゝしき道を神はうけつゝ

住　吉　　前藤大納言

住吉の神しまもらは敷嶋やたゝしき道は今もかはらし

日　吉　　富小路前大納言

雲の上をてらす日吉のかけなれはつかふる身をもさそ守る覽

北　野　　爲定朝臣

跡たるゝ神の北野のみしめ縄なかき世かけて君まもるらん

玉津嶋　　侍従中納言

ことの葉にひかりをそへて玉津嶋神代なからの道てらすらん

不殺生戒　　富小路前大納言

うら／＼のあまのうけ縄なかきよの後も苦しき物としらすや

不偸盜戒　　爲定朝臣

里人の心もしらすかくとたにいはてはおらし井手の山ふき

不邪婬戒　　源三位

逢まてとしゐても人をしたはすはくらき道には迷ひしもせし

不妄語戒　　六條前中納言

をのつからまかひし雲も晴ぬれは嶺のさくらの僞そなき

不酤酒戒　　侍従中納言

瀬にかはる道をはしらし古のなさけはたきの名をなかすとも

不説四衆過罪戒　　道我法印

ことの葉をよそにもらすな吹風はよもの梢を猶さそふとも

不自讃毀他戒　　同

我宿の一木はかりとおもふなよいつくもおなし花の匂ひを

不慳貪戒　　道我法印

あかすみる庭の櫻の一枝をおるともいかゝ人におしまん

不瞋恚戒　　御　製

消ねたゝ富士の煙の空にのみむねの思ひは跡もなきまて

不謗三寶戒　　光　吉

高野山なくなる鳥の聲までもみのりときけはあふき社せめ

寄天祝　　左大辨宰相

岩戸あけし昔に今もかはらぬはおさまる御代の月日也けり

寄日祝　　富小路前大納言

玉くしけはこやの山の朝日影つかへつゝ身をてらす世もかな

寄雨祝　　侍従中納言

道しあれは日數のまゝに降雨のめくみやよもの海にみちなん

寄國祝　　爲　冬

いか計民のかまともさかふらん國ゆたかなる御代をまちえて

寄都祝　　富小路前大納言

君にこそさかり（もイ）はみゆれおさまれる花の都の萬代のはる

寄道祝　　爲定朝臣

敷嶋の道さかへてそしられける君と神とのすてぬこゝろは

寄松祝　　富小路前大納言

君かためさかへこそませ龜の尾の岩ねの松の千代をかされて

寄竹祝　　六條前中納言

我君の萬代ふへき竹のよのはしになりてもつかへてしかな

寄鶴祝　　光吉

西川や行幸のあとたかされても千世とそ契る鶴の毛衣

寄龜祝　　吉田前中納言

名にしおふ龜の尾山のかひありていく萬代も君のまにく

已上十八首　此內清撰御點七首　御案點□□□□首　錦世

私云　勅點分百五十九首。於二別御草子一被レ染二宸筆一。其內五十二首有二御合點一。清撰是也。依二書寫之煩一。加二兩點一畢。藤亞相點。已上百五十八首。本爲二墨點一。勅點爲二墨點一之間以レ朱替レ之。

元亨三年七夕。於二龜山殿一有レ之。已一點始レ之。黄昏詠訖。秉燭以後春部被レ講。講師經季。及二半更一各退出。九日被レ下二短尺於藤大納言一續二進之一。十三四日。予陪二御前一清二書之一。十六日爲二御使一持二向亞相亭一。勅定云。續進之間被レ著レ名。不レ依二貴賤一可レ被二點進一之由被二仰下一云々。先レ是。勅點百五十九首。別有二御書寫一。此內清撰御點五十二首也。彼御草子不レ可レ及二荒涼之披露一由。雖レ有二御沙汰一。依レ有二披閲之煩一。移二加勅點於此本一。輙莫レ免二許外見一而已。

光吉

朱墨點正本無レ之。重以二類本一可二考付一也。

文安四年三月十七日書二寫之一訖。

群書類從卷第百六十七

和歌部二十二百首一

堀川院御時百首和歌 稱太郎百首 康和年中

題

春二十首

立春　子日　霞　鶯　若菜
殘雪　梅　柳　早蕨　櫻
春雨　春駒　歸鴈　喚子鳥　苗代
菫菜　杜若　藤　欵冬　三月盡

夏十五首

更衣　卯花　葵　郭公　菖蒲
早苗　照射　五月雨　盧橘　螢
蚊遣火　蓮　氷室　泉　荒和秡

秋二十首

立秋　七夕　荻　女郎花　薄
苅萱　蘭　萩　鴈　鹿
露　霧　槿花　駒迎　月
擣衣　虫　菊　紅葉　九月盡

作者

正二位行權大納言兼春宮大夫藤原朝臣公實卿
正二位行權中納言大江朝臣匡房卿
正二位行權中納言源朝臣國信卿
參議正三位行右兵衞督源朝臣師賴卿
從三位行修理大夫藤原朝臣顯季卿
散位正四位下源朝臣顯仲
正四位下行越前守兼中宮權大進藤原朝臣仲實
從四位上行木工頭源朝臣俊頼
從四位上行右近權少將兼備中權介源朝臣師時
散位從四位下藤原朝臣顯仲
散位從五位上前左衞門佐藤原朝臣基俊
權少僧都永緣
阿闍梨傳燈大法師位隆源
前齋院肥後
高倉一宮紀伊
前齋院河內 百合花

春二十首

立春

春宮大夫公實
春たちて梢にきえぬ白雪はまたきにさける花かとそみる

權中納言匡房
氷ゐし志賀の唐崎打とけてさゝ浪よするはるかせそふく

權中納言國信
みむろ山谷にや春のたちぬらん雪の下水いはたゝく（そゝくイ）なり

右兵衛督師頼
吉野山つもれる雪のきえゆくはまたふる（たつイ）としに春やくるらん

修理大夫顯季
うちなひき春はきにけり山川の岩まのこほりけふやとくらん

源顯仲朝臣
春たつといはせもはてす朝またき風のけしきそまつ變り（ゆくイ）ける

中宮權大進仲實
朝またきゆるけき風のけしきにて春たちきぬとしられぬる哉

木工頭俊頼
庭もせにひきつらなれるもろ人のたちゐるけふや千代の初春

左近權少將師時
いかになく八聲の鳥の一こゑにとしに年をはそふるなるらん

藤原顯仲朝臣
いつしかと明行空のかすめるはあまの戸よりや春はたつらん

藤原基俊
よしの山ふもともみえす春のそら（けさイ）霞のころもたちてきたれは

權少僧都永緣
きのふまて雪ふる年とみしまゝ（かともイ）に今朝は氷をはるかせそふく

阿闍梨隆源
うちつけに春立きぬとみゆる哉きのふにかはるけふの景色は

肥後
つらゝゐし細谷川のとけゆけは水上よりや春はたつらん

紀伊
春たて（くれイ）は大宮人はそれなからあらたまりてもめつらしき哉

河内
春のくる夜のまの風のいかなれはけさふくにしも氷とくらん

子日

れのひして二葉の松を千代なから君か宿にもうつしつる哉

春霞たちかくせとも姫小松ひくまの野へにわれはきにけり

生初るはつれの松をひきつれはけふこそ千世のはしめ也けれ

子日しにいそく也（とイ）けり君か代の千年をまつの春のはしめに

君か代も子日の松もけふよりは千代のためしに引んとそ思ふ

いつしかと子日の松は春の野にさなから霞たなひきにけり

玉掃春のはつれにたをりもち（てイ）玉の緒なかくさかゆへらなり

いはひつゝけふしも松をひきつれははつれそ千世の始也ける

子日すとよろつの人のひきつれは千年をのへの小松也けり

今年生の二葉の松をひき植てけふより後の千代をかそへん

野へにいて（にイ）ゝ子日の小松引つれは二葉に千代の影そこもれる

春日野の子日の小松ひきつれて神にそいのる君かちとせを

野へにひく初子の小松さらに植てけふを千年の始とおもはん

行末をまつそひさしき君かへん千代の始の子日とおもへは

野へことにけふひきそふる小松原おひ行末そかきりしられぬ
君か代の千年なのへに子日して松のよはひなかそへつくさん

霞

春霞しかまのうらなこめつれはおほつかなしやあまの釣舟
わきもこか袖ふる山も春きてそ霞のころもたちまさりける
なしなへて春の霞のたつ時はかゝみの山もくもるなりけり
石上ふるき都も春くれはかすみたなひくたかまとのやま
みわたせは春のけしきに也にけり霞たなひく櫻ゐの里
賤の男かしはかりみたる鳥羽の野にけさそ霞は棚引にける
ほそ川のいはまのつらゝとちなから花その山の峯そかすめる
なみたてる松のしつえなくもてにて霞わたれるあまのはし立
春霞たちわたりつゝかひかれのさやにもみえぬ朝ほらけ哉
谷かくれまた雪きえぬみよしのゝおなし山へにたつ霞かな
まきもくのひはらの山の麓まて春の霞はたなひきにけり
みわの山たつれそゆかん春霞しるしの杉はたちなかくしそ
梓弓春のしるしにいつしかとまつ棚引はかすみなりけり
東路の木曾のかけ橋春くれはまつ霞こそたちわたりけれ
み渡せは春の霞にこめられていつこなるらんみよしのゝ山
いつしかとあしたの原に棚ひけは霞そ春のはしめなりける

鶯

春くれはいつれの谷の鶯も花の都にきつゝなくなり
谷ふかみきゝふるすてふ山里になためつらしき鶯のこゑ
いつしかとこと郷人にことゝはんはつ鶯の聲はきくやと
あられふりまた冬こもる山里に春なしらする鶯の聲
鶯の聲につけてや眞金吹吉備のやま人春なしるらん
山里の草のとさしにことよせて心ほそきはうくひすの聲
冬すみしふるすは雪にうつもれて谷の鶯春とつくなり
かすならぬ身なうくひすと思へ共なくなは人の忍はさりけり
いつしかと谷の鶯なくなるは山よりこゆる春のしるしか
まきの葉にすかるたるひの春風に打とけてなく鶯の聲
夜なこめて鳴鶯の聲きけは嬉しく竹な植てける哉
花さかぬ常葉の山のやま人に春なしらする鶯のこゑ
谷ふかみ人も尋ぬしはの庵になとなふものは鶯の聲
人めこそかすかなれとも山里はたえすそきなく鶯のこゑ
われならぬ人きくらめやめつらしき朝の原のうくひすの聲
山里に家ゐなせすは鶯のけさの初音ないかてきかまし

若菜

野へにいてゝ春ひつめともたまらぬはまた裏若き若な也けり
たはるてふ若なはたちぬ同しくは春ひつみても野へに社へめ
いくはくのいへつともなき若なゆへ野へに立出て日な暮す哉
旅人の道さまたけに摘ものはいく田の野への若な也けり
若な生る野なやしめまし今年より千年の春なつまんと思へは
みそれ降な野のあれ田にゑくつめは誰かはきせん菅のな笠な
春日野の雪けの澤に袖たれて君かためにと小芹なそ摘
老せすときゝし若なのなにめてゝ誰かはつまぬ春の野ことに
鷺のゐるあれたのくろにつむ芹も春は若なの數にやはあらぬ
春山のすくろなさゝなかきわけてつめる若なに沫雪そふる

きえ殘る雪またわけて春日野につめとたまらぬ若なたそ摘
春（くれはかたみ）ぬきいれて賤の女か垣根のこなたつまぬ日そなき
春たちてけふは七日に春日野の若なはまたき二葉なりけり
さそはれとかたみにそみる若なつむ心は野へに遁ひけりとも
つきもせすつむへき程そ遙なる千代たしめてし野への若なは

殘雪

きえ殘る朝日かくれのしら雪はこそのかたみのたえぬ（をた・ぬイ）也けり
道たゆといとひしものた山里にきゆるはおしきこその雪哉
春日野の下もえわたる草の上につれなくみゆる春の沫雪
春山の木下陰にむらきゆる雪こそこそのかたみ也けれ
山里のかきねに殘る白雪は草のもゆるにきえやはつらん
珍しきてらゐかうへにはかひせぬ片（岩羽）葉か下の（つイ）こそのふる雪
立かへる春のしるしはかすみしく小初瀬山の雪のむらきえ
あら玉の春たつ風のしるけれ（にふりつれはイ）はまた初雪のこゝち社すれ
むれてくる大宮人のふる袖に春さへはれすかゝるあは雪
春きては花ともみよと片岡の松のうは葉にあは雪そふる
春の日のうらゝにてらす垣ねには友まつ雪そきえかてにする
春風に谷の氷はとくれともきえ殘りたるみれのしら雪
むらきえし雪もほかにはみえなくにしりへの岡は猶そ殘れる
東風のまたうちとけてふかれはや雪きえやらぬみ山への里
春きては日數へぬれと岩かくれ殘れる雪はきえかたきかな
けぬかうへに（きえぬへきイ）春さへ雪の猶ふれはまた萌やらぬゑくの若なも

梅

梅かえた袖なつかしみたなるとてうらふれてなく鶯のこゑ
匂ひもてわかはそわかん梅花それともみえぬ春のよの月
つゝらおふる垣ねの梅なしるへにて尋てそくる春の山里
今よりは梅咲宿は心せんまたぬにきます人もありけり
梅花ふきすきてくる春風にたかふる袖とおとろかれぬる
おらすとも梅の匂ひに袖ふれてみつとはかりな人にしらせん
くれなゐの八重咲梅にふる雪は花のうはきとみゆる也けり
梅花色たはやみにかくせとも香はもれてくるものにそ有ける
梅花にほふ垣ねの宿守は人よりさきに春なこそしれ
春の夜の月にまかへる梅花たゝ香はかりそしるへ也ける
くれなゐに匂はさりせは雪きえぬ軒端の梅ない（かイ）かておらまし
梅花たなるたもとのしるきまてけさ吹風に匂ふなるかな
梅かえなおりつる袖のうつりかにあやな無名の立ぬへき哉
なつかしく吹くる風はたかしめし垣ねの梅の匂ひなるらむ
待人はたのつからきぬ我宿の梅の匂ひの色しこけれは
梅かゝの匂ふあたりは關路かは人とめれともゆきそやられぬ

柳

朝またきふきくる風にまかすれはかたよりしける青柳の糸
さほひめの打たれかみの玉柳たゝ春風のけつるなりけり
春風にしたり柳のかたよりに君に（たイ）なひけは國そさかへん
さほ川の岸のまに〳〵むれ立て風に波よる青柳の糸
さほ山に柳の糸た染かけて心のまゝにかせそふきくる
わか宿の一本柳春くれは吹くる風にかつみたれけり
あさみとり春のすかたにさほ姫はしたり柳のかつらしてけり
もかり舟ほつゝしめ繩心せよ川そひ柳風になみよる
四方山の花のにしきなぬひにとやこゝらよるらん青柳の糸

つなてひく川そひ柳春くれは水とゝもにそかせ(きしイ)になみよる
春風になみよるいとゝみゆるかな川そひ柳水にひかれて
青柳の糸はみとりのかみなれやみたれてけつる二月の風
河そひの柳の糸は打はへて波よることのたえすも有哉
青柳の糸はみとりのかみなれやふきくる風のけつりかほなる
風ふけは枝うちなひく青柳のいとこそ春のくるしるしなれ
青柳のみとりの糸はかはられとくる春ことにめつらしき哉

早蕨

春日野の草はやゝともみえなくに下もえわたる春のさわらひ
外山には年あけに見岩の上のたるひもとけてもゆるさわらひ
春の田(野イ)を事ありかほにかへせともおれる蕨はたはれたになし
武蔵野はまたやかなくに春くれはいそきもえ出る下わらひ哉
紫の塵うちはらひ春の野にあさるわらひのものうけにして
春山のすそ野にもゆるさわらひはみれの霞や煙なるらん
ふりつみし雪の下草いつしかとやくとみしまにもゆる早蕨
春くれと折人もなき早蕨はいつかおとろにならんとすらん
雨ふれと猶もえまさるさわらひや春のやけのゝしるしなる覧
春たては雪けの水やぬるからんまつもえいつる下わらひかな
みやま木のかけのゝ下の下わらひもえいつれ共しる人そなき(もなしイ)
飛火野にいまもえいつる早蕨のいつおるはかりならんとす覧
野へみれはまたやかなくに早蕨のおとろの下にもえ出にけり
飛火野にもえ出にけるさわらひをやくときゝてや人のおる覧
またきにそつみにきにけるはる〳〵と今もえ出る野への早蕨
武蔵野にことしはもえよ(はらえなんイ)紫のわらひは草のゆかりなられと

櫻

宿ならて遠にさけとも櫻花ちるをはよそのものとやはみる
山櫻ちゝに心のくたくるはちる花ことにそふにやあるらん
花さけは嶺にやへたつ白雲のはるゝたえまやちれるなるらん
木の下の苔のみとりもみえぬまて八重ちりしけるやま櫻哉
櫻花匂ふにつけてものそ思ふかせの心のうしろめたさに
くれなゐに匂ふ櫻のひとしほはみそめつるよりあく時そなき
花のちる木の下陰はをのつからそめぬ櫻の衣をそきる
櫻花さきぬる時はみよしのゝ山のかひよりなみそこえ(ねイ)ける
春風に霞の衣ほころひてぬひさへみゆる山さくらかな(ぬイ)
高砂の麓の里はさえなくに尾上の櫻雪とこそちれ
春をへて(すくとイ)花ちらましや奥山の風を櫻の心ともはゝ
花さかり櫻かさゝぬ人そなきものゝ心をしるもしらぬも
春ことにおなし櫻の花なれとおしむ心の年にまされ(すかなイ)る
山櫻匂ふさかりはしら雲のやへたつ嶺と人やみるらん
たくひなくみゆるは春のあけほのに匂ふ櫻の花さかりかな
よそにのみみれはあかぬか山櫻花のあるしになりてしらはや

春雨

野へことにみとりそまさる石上ふる春雨のひましなけれは
よも山に木のめ春雨ふりぬれはかそいろはとや花のたのまん
ふりかゝるしつくに花やたくふ覧うしろめたきは夜半の雨哉
春雨の野へのみとりをそむれはやきのふにけふは色増るらん
霞しく木のめ春雨ふることに花のたもとはほころひにけり
さらぬたにぬるゝ袂を春のよのかりのさゝやは雨もたまらす

冬草とみえし春野のをさゝ原やよひの雨にふかみとりなる
つく／＼と思へは悲し数ならぬ身をしる雨よをやみたにせよ
雨ふれは袂に色やうつるとて花のしつくにそほちぬるかな
春雨のしく／＼ふれは山も野もみなをしなへてみとりなる哉
春雨のふりそめしより片岡のすその〻原そあさみとりなる
岩の上の苔たにたえぬ春雨に野への草葉のいかてもゆらん
春雨は色もみえぬにいかにして野への緑をそむるなるらん
つれ／＼となかめてそふる春雨のをやまぬ空の軒の玉水
ふりそむる春雨よりそいろ／＼の花の錦もほころひにける
石上ふる春雨のつく／＼と世のはかなさそおもひしらるゝ

春駒

つのくめる蘆の若葉をはむ駒のあるゝをみるやなにはえの人
とりつなく人しなけれは春駒の野への澤水かけもとゝめす
我ものとしめ野にかひし春駒の手にもたまらすあれまさる哉
春のゝの駒のけしきのことなるは澤への草やわか葉さすらん
とりつなく人やなからん春の野にいはゆる駒のあしけなる哉
よそめにもむらはむ駒の氣色にて春野の草の程そしらるゝ
小笠原すくろにやくる下草になつまつあるゝ鶴ふちのこま
とりつなけ玉田よこのゝ離れ駒つゝしかけたにあせみ花さく
梓弓春の澤邊のはなれ駒やかてあれのみまさるころ哉
小笠原へみのみまきのはなれ駒いとゝ氣色そ春はあれます
なつくともいかゝとるへき草若みみつのみまきにあるゝ春駒
春駒のいはゆる音そ聞ゆなる美豆のまこもゝつのくみぬらし
むへしこそなつみし駒はいはひけれつのくみにけり荻の燒原
我せこかたなれの駒も澤にあれて春のけしきはあしけなる哉
美豆の江のまこもゝ今は生ぬれはたなれの駒を放ちてそみる
冬枯になつみし駒も春くれはいはゆはかりになりにける哉

歸鴈

鴈かれは霞をわけてけふよりや八重雲かくれかへりゆくらん
越路にはたかことつてし玉章を雲井の鴈のもてかへるらん
春ことにうはの空なる心もてものわすれせすかへるかりかね
玉章を雲井にむすふ鴈かねの花をみすてゝなにかへるらん
人ならはとはましものをちりぬへき花をみすてゝかへる鴈金
はかなしやいつくも鴈のすまゐをはなと中空にゆきかへる覧
いかなれは草の枕にゆきかへる鴈のやとりにとまるこゝろそ
春くれはたのむの鴈も今はとて歸る雲路に思ひたつなり
かへるらん行衞もしらす鴈金の雲のかよひ路霞こめつゝ
鴈金の春たちかへる越路にはみやこにまさる花やさくらん
世中はいつくやいつく歸る鴈なに故郷にいそくなるらん
鴈金はかへる空なく思ふらんみれともあかぬ花をみすてゝ
限ありて春もなかはになりぬれは越路にかへる鴈そなくなる
さよふけて雲井はるかに歸る鴈うはの空にや宿をかるらん
散花をみるやわひしき年をへて春しも都かへる鴈金
うかりけるならひなるかな春くれは花をみすてゝかへる鴈金

喚子鳥

もとつ人あかて歸りぬよふこ鳥猶よひかへせなかなたのまん
思ふこと千枝にやしけきよふこ鳥信田の森のかたになく也
立かへる道もはるけしよふこ鳥ことありかほに人なとかめそ
つれ／＼と春の夕暮なかめやるおりにしもなくよふこ鳥哉

さよなかにみゝなし山の喚子鳥こたふる人はあらしとそ思ふ
こたへする人なき山のよふこ鳥ひとりなきてや春をしるらん
常よりもをはつせ山のよふこ鳥聲むつましくきこゆなる哉
東路のなこその關のよふこ鳥なにゝつくへき我身なるらん
人影もせぬものゆへによふこ鳥なにとかゝみの山になくらん
鳴たひにたちしとまれは春山の道さまたけのよふこ鳥かな
おほつかな誰よふこ鳥なきつらんこたふる人もなき山中に
小夜更ていはせの森の喚子鳥山ひこのみそこたふへらなる
答へぬになにとよすから呼子鳥聲たえもせすなくにかある覽
こぬ人をまちかね山のよふこ鳥おなし心にあはれとそきく
またしらぬ道ふみまよふ山里によふこ鳥こそしるへなりけれ
鳴とてもたれかはとまる喚子鳥いさやかひなきなにもある哉

苗代

苗代にほそくまかする水なれはしめの外にはもらさゝらなん
苗代の山田の小田にしめはへてまかする水や雪けなるらん
賤の男の苗代かきをあせをきて今そたなゐにたねおろすめる
小山田のゐくの若なを打かへし苗代水をひきそまかする
小山田にたねまきすてゝ苗代の水の心にまかせつるかな
おほつかなたれかもるらん里遠み谷かくれなる小田の苗代
谷水をせく水口にいくしたて五百代小田にたねまきてけり
秋かりし室のをしれを思ひ出て春そたなゐに種そかしける
けふこそはあれ田の澤にねせりつめ苗代水をまかせかてらに
しめはふる山田の小田の苗代に雪けの水をせきそかけつる
我妹子か門田にうふるはやわせの苗代水をいかにひかまし
白露のをくてかるてふ小山田になに苗代をいそくなるらん
くはゐ生る野澤の荒田打かへしいそけるしるは室の種かも
み渡せは小田の苗代しめはへて種まくほとになりにけるかな
賤の男か苗代水もひき／＼にあはれなにとかいそくなるらん
あれはてゝしめたにはへぬ小山田は苗代水をひく人もなし

菫菜

むかしみし妹か垣ねはあれにけりつはなましりの菫のみして
はこれ山うす紫のつほすみれふたしほみしほたれかそめけん
こよひねてつみてかへらん菫生る小野の芝生は露しけくとも
淺茅原むらさき深くなりにけりいさや乙女にすみれつません
きゝすなく岩田の小野のつほすみれしめさす計なりにける哉
枯たてる蓬かふるねかきわけて澤田のくろにすみれ花さく
ひはりあかる飛火の原に我ひとり野もせにさける菫をそつむ
我妹子か花の袂をかたみにてつめるすみれそ心ことなる
草枕旅ねしつゝそひとりつむ伏見の野へに生るすみれを
あさちふのあれたる宿のつほ菫たれむらさきの色にそむらん
春野のつはなかもとのつほ菫しめさすはかりなりにけるかな
老ぬれは花の都にありわひて山にすみれをつまんとそおもふ
あれにける宿の外面の春の野に菫つむとてけふもくらしつ
故郷の淺茅か原におなしくは君とすみれの花をつまはや
すみれさく春の野へにはさしてゆく道さまたけに心とまりぬ
おもふとちならひの岡のつほ菫うらやましくも匂ふ花かな

杜若

花かつみましりにさける杜若たれしめさしてきぬにするらん
風吹は岩かき沼の杜若浪のおるにそまかせたりける

花はよしなそかひもなき杜若春のせきともなるときかれは
杜若あさゝはぬまの沼水に影をならへてさきわたるかな
東路のかほやか沼の杜若春をこめてもさきにけるかな
東路やいかほの沼の杜若袖のつますり色ことにみん
鳰鳥のかつく池への杜若これこそ夏のへたて也けれ
鳰とりのかつくみ沼の杜若人へたつへきわかこゝろかは
むらさきの色にそみゆる杜若池のぬなはのはひかゝりつゝ
住吉のあさ澤沼の杜若あかぬ色ゆへけふもとまりぬ
狩人の衣するてふ杜若花咲ときになりそしにける
池水をへたてゝさける杜若波をこさしとおもふなりけり
みくりはふ澤へしめたる杜若くる人ことにめてすやはある
もろともに伏見の里の杜若心はかりはへたてさらなん
ふかき色の心ことにそにほふめるたかすむ宿の杜若そも
杜若おなし澤へに生なからなにをへたつる心なるらん

藤

なつかしきいもかころもの色にさく若むらさきの池の藤なみ
みきはより底まて匂ふ藤の花いかなる雲のかけかみゆらん
打なひく風の氣色はのとけきに松のうら葉にかゝる藤波
墨江の松にかゝれるふちの花風のたよりに波やおるらん
松陰のみとりをそめし池水にむらさきふかくかゝる藤波
濱松のしつえにかゝる藤波はみる人さへそかへらさりける
紫のしき波よるとみゆるまて田子の浦藤花咲にけり
春きては心の松にかゝりつる藤の初花さきそめにけり
年ふれと老せぬ松の梢よりさかりとみゆる藤のはな哉
春日山おなしき氏の宿なれはわきてそ藤の花は咲ける
むらさきの糸よりかくる藤の花この春雨にほころひにけり
紫の庵の西の高根のふちの花間暮れかふ雲かとそみる
住江の岸にかゝれる藤波のかへらぬ色を人にみせはや
すみのえの松にかゝれる藤の花たれかかさしに波のおるらん
藤の花岸のしら波あらへとも色はふかくそ匂ひましける
むらさきにいくしほそめし花なれは色ふかゝらん池のふち波

欵冬

我宿をゐての里人きてもみよおなしやへさく山ふきの花
春ふかきゐての川水色そはゝいくへかみへんやまふきの花
若根こす清瀧川のはやけれは浪折かくるきしの山吹
蛙なくみつの小川の水きよみ底にそうつる岸の山吹
欵冬の花さく宿は春ことにおらまほしくもおもほゆるかな
岩間よりかけつゝ浪はあらへとも色もかはらぬきしの山吹
蛙なく眞野の池邊をみ渡せは岸の山ふき八重咲にけり
風吹は波うちかけてかへりけり岸にはうへし山吹の花
玉のゐにさけるをみれは山吹の花こそ春のさかりなりけれ
行水に岸の山吹うつれとも底のにほひはなかれさりけり
欵冬の花咲にけり蛙なくゐての里人いまやとはまし
山吹の花しさかすはなにゆへにうらやまれましゐ手の里人
さきぬれは人をとめるか山吹の小嶋か崎にあらぬやとにも
折てこそ匂ひもまされもろともにゐ手のわたりの山吹の花
やま吹の花みし人や昔よりこゝをゐてとはいひなかしけん

くちなしの色にさけはや山吹のえもいひしらぬ匂ひなるらん

三月盡

ゆく方もしられぬ春と（はイ）しりなから心つくしのけふにもある哉
常よりもけふのくるゝをおしむ哉今いくたひの春としられは
あさましや日數ゆくともおもほえて春の今夜になりにける哉
さもこそは春のくれなは一枝の花のかたみをとゝめをかなん
花のちることをなけくとせし程に夏のさかひに春はゐにけり
なにとて（ことにイ）かかくのみけふの惜からん花も留らぬ春としる〳〵
つかのまもとまらて行（すくイ）としりなから猶こりすまにおしき春哉
我宿をいとふかとこそ思ひつれ野へにもけふそ（はイ）春はくれぬる（くれにけりイ）
櫻花山路もみえす散にけりこれより春は暮ゆくかとよ
あやにくに歎けはくるゝ春かとてけふ惜まれと立もとまらす
春霞たちとまられは入日さす山さへけふはうらめしき哉
もろともに我もいなまし春のゆく今宵の道をしれる身ならは
花もちり鳥さへ雲に入ぬれは空をあふきておしむけふ（春イ）かな
春はたゝけふをかきりときくものを心ほそくもくるゝ空かな
けふのみと空にくれ行春なれはとゝむる關もかひなかりけり
けふ暮ぬ花のちりしもかくそありしふたゝひ春は物を思ふよ

夏十五首

更衣

けふよりは心さへこそ涼しけれうすきにかふる花のたもとは
夏衣花の袂にぬきかへて春のかたみもとまらさりけり
すてゝいにし春はうけれと夏衣いつしかかへん事をし（こイ）そ思ふ（へイ）
夏衣たちきるけふになりぬれは心にしみし春はわすれす
いつしかとけふたちきつるから衣ひとへに夏はみゆる也けり
つるはみの衣の色はかはられと一重になれはめつらしき哉
おしみかれ花色衣ぬきかへてけさより風のたつをまつ哉
夏衣たちきるけふのしらかされしらしな人にうらみなしとは
ぬきかふる花色衣おしき哉春のかたみをたつ（たしイ）とおもへは
いろ〳〵の花の袂をぬきかへて夏の衣にけふそなりぬる
けさかふるせみの羽衣きてみれは袂に夏はたつにそありける
山吹の花の袂をぬきかへてせみの羽衣けふそきるめる
春とても花の袂にあらぬ身は衣かへうきこともなきかな
あかさりし花になれたる唐衣心の外にかふるけふかな
身にしみて花色衣おしけれはひとへにけふはぬきそかへつる
うすきなのたちそめてけり夏衣きるより人や心をくらん

卯花

袖たれておれともぬれぬ白波は卯花さけるかきねなりけり
夏はきのをちの垣ねのうの花はよるさへ布をさらす也けり
うの花やさかりなるらん白河の渡に波のたつとみゆれ（るイ）は
卯花の青葉もみえす（ましらすイ）咲ぬれは雪もてゆへる垣ねとそみる
手玉ゆら賤機布を折かけてさらしえたるとみゆる卯花
卯花のさける岡へをこえくれ（ゆけイ）は雪まをわくる心地こそすれ
うの花のしらゝにさける夕暮は賤か垣ねそ月夜也ける
卯花も神のひもろきときて皃とふさもたはにゆふかけてみゆ
我妹子か門（宿イ）ならねとも卯花のさける垣ねはすきうかりけり
卯花のさける垣ねは布さらすいくく野の里の心地こそすれ

やみなれと月の光そさしてける卯花さける小野のほそ道
舟岡のわたりにさける卯花は汀によする波かとそみる
たれにかはきてもみよとはつけやらん我身のためと咲る卯花
卯花のさける垣ねは冬こもり友まつ雪の心地こそすれ
山かつの垣ねなそとふ卯花のおりにとのみも晃らさりしな
卯花の垣ねは雪の心地して冬の氣色にみゆるやま里

葵

神山のけふのしるしの葵草心にかくるかさし也けり
大空の日影になひく神山のけふのあふひやひかりなるらん
葵てふはかなき草のなはかりや神のしるしにかけてかへらん
日影山生る葵のうらわかみいかなる神のしるしなるらん
昔よりけふのみあれに葵草かけてそたのむ神のちかひな
葵草祈てかくる人ことになひかぬかみはあらしとそ思ふ
神山のそのゝ葵なくさりつゝけふのみあれにかさしつる哉
けふくれはしとろのみゆる山かつのおとろの髮も葵かけたり
かけまくもかたしけなきは千早振神のみあれにあふひ也けり
はふり子かいはひてとれる葵草かけてそたのむ神のしるしな
葵草てる日は神の心かは影さすかたにまつなひくらん
けふことに葵のかつらする人は神のしるしなおもふなるへし
神山のしるしと思へはけふ毎にあふひのかつらせぬ人そなき
もろ人のかさす葵はちはやふる神にたのみなかくる也けり
年なへて松の小山の葵こそ色もかはらぬかさしなりけれ
葵草いのりかけてしことの葉なあたのかさしと思はさらなん

郭公

われもさはいりやしなまし時鳥山路にかへる一聲により
我妹子かれくたれかみの五月雨にあけてそきなく山時鳥
今年しもなかてはやましものゆへに人苦しめのほとゝきす哉
情なくすきにける哉時鳥まつ夕暮はしはしとまれ
郭公夏の夜さへそうらめしきたゝ一聲にあけぬと思へは
明かたのみそらほのかに時鳥たまのよこ山なきてすくなり
我宿の松のけしきやしるからん山時鳥おちかへりなく
五月こに篠田の森の時鳥木傳ふ千枝の數ことになけ
久方のあまのかく山のほとゝきす玉ゆらきなけ神のまに〳〵
あらてくむ賤か垣ねの時鳥なけともなれる聲はやつれす
一聲のきかまほしさに郭公おもはぬ山に旅ねなそする
有明の月とゝもにや出つらん山時鳥今そなくなる
思ひ出に人つてならて時鳥まつ初聲なわれに聞せよ
山ふかくたつねきぬれは郭公しのふる聲もかくれさりけり
時鳥夏は山へに家ゐしてまちとなりし初音なそきく
夜なかされまつなはしらて時鳥いかなる里になきふるすらん

菖蒲

あやめ草淀野に生る物なれはねなから人はひくにやあるらん
五月雨は宿につくまのあやめ草軒の雫にかれしとそ思ふ
長かれとひくあやめ故かりはやす眞薦なさへにねこしつる哉
かくれぬに生ふとはすれとあやめ草尋てそ引なかきねなれは
夜とともにかよふ淀野のあやめ草けふたか宿のつまとなる覽
けふはみなしまへそ上るのほり舟つなてはひかて菖蒲なそ引
山へたて人もえしらぬかくれぬに生るあやめに波やひくらん

我宿は軒のしのふのしけゝれはふけるあやめもみえぬ也けり
さらぬたに草の庵となる宿にけふはあやめをひきそふる哉
たはれ男か袂にかくるあやめ草れよけなりとや人のみるらん
めつらしき君かよとのゝあやめ草ひきくらふへき物のなき哉
あやめ草なへてならぬを尋てそ世にたくひなき長き根はひけ
年毎にひけとつきせぬものはさは菖蒲の長きれに社ありけれ
菖蒲草けふはかゝらぬ軒そなき數しらぬまにひけるなるへし
蓬生のふせやかつまのあやめ草けふひきわかすかけてみる哉
逢事のひさしにふけるあやめ草たゝかりそめのつまと社みれ

早苗

急きとれ今は早苗もおいつらん田子のもすそは朝しめるとも
早苗とる深田にわたす板舟のおりたつことのさもかたき哉
暮ぬともけふ植はてよ早苗とる田子のてまえん事もかたけに
なみたてる田子の袂はそほちつゝ水口まつり早苗をそとる
わきも子かすそわの田井に引連て田子の手まなくとる早苗哉
小山田に今そ早苗は植てける乙女かもすそぬれてかへりぬ
こなきつむ深田の代はかきてけりいそきて植よ室のはやわせ
初苗にうすの玉かす取そへていくしまつらんたちつくりえに
五月雨にぬるゝもしらす此里の門田の早苗いそきてそとる
生わたる早苗もおなし色なれは水のみとりのふたへなる哉
雨ふれと急きてとらんけふすきは山田の早苗おいもこそすれ
早苗とる田子は戀すとなけれとも苗代水に袖そぬれぬる
殘り田はそ代にすきしあすは只ゆひもやとはて早苗とりてん
田子のとる早苗をみれはおいにけりもろてに急け室の早はせ
をくれしと山田の早苗とる田子の玉ゆら裳裾ほすひまそなき
早苗とる田子のもすそにあらなくに濡衣をのみなとかきる覧

照射

五月山みれたつ鹿も心せよともしのせなもみたれいろ也
ともしする宮城か原の下露にしのふもちすり亂あひけり
雲まなき五月の山のこの本はともしするにそ星はみえける
ともしすと五月きぬれはますら男の幾夜山へに立あかすらん
五月やみさやまの嶺にともす火は雲のたえまの星かとそみる
道遠みほくしの松もつきぬへし八重山こゆるよはのともし火
あひつ山すそ野の原にともしすとほくしに火をそ掛明しつる
照射するは山のすそに立鹿のめもみせぬ夜をなけきつる哉
名をたのみ鹿の隱るゝかひもなく小倉の山にともしをそする
五月やみ峯にともしのみゆる哉尾上や鹿のたちとなるらん
五月やみともしする夜は我もしかめをあはせても明しつる哉
鹿のふす小倉の山のやま人は火をともしてそいるといふなる
ともしすと鹿にもあはぬもの故にこくれの下に夜を明しつる
さ月やみ雲まの星とみえつるは鹿たつれいるともし也けり
ともしては山のかけに立鹿をまつとするまにいもや恨みん
夜を重れ木のした露にぬるゝ哉ともしの鹿のめをもあはせて

五月雨

旅人の眞菅の笠や朽ぬらん黒髪山のさみたれのころ
わきも子か小屋のしのやの五月雨にいかてほすらん夏引の糸
とけぬらん眞金なりとも五月雨のあまゝもみえぬ雲の氣色に

さみたれにぬまの岩垣水こえて眞薦かるへきかたもしられす
五月雨のいくかになりてせたえせしさのゝ中川舟かよふらん
ひまもなくふりもすさめぬ五月雨につくまの沼のみ草波よる
久かたのあまゝもみえぬ五月雨にみくまの菅も苅ほしかねつ
おほつかないつかはるへき侘人の思ふ心やさみたれのそら
いかにして眞薦なからん五月雨にたかせのよとも水増りけり
五月雨のはれせぬころは蘆のやの軒のいと水絶せさりけり
いとゝしく賤の庵のいふせきに卯花くたし五月雨そふる
五月雨のはれぬ限は早苗とる田子のさころもかはくまもなし
五月雨は日数ふれともわたのへのおほ江の岸はひたらさり鳬
もしほ草ほすひまもなき五月雨にやかてやあまの鹽なたる覧
五月雨は入江のまこもかりにこし渡もみえすなりにけるかな
五月雨のひまなき頃は水まさりあさかの沼もなにやたかはん

盧橘

やとことに花橘そ匂ひける一木か末にかせはふけとも
さつきやみわかまつ人はきまされと花橘の香にそなくさむ
なつかしき花橘の移り香はさもあらぬ人のなもたちぬへし
五月やみ吹くる風の匂ひにそ花橘は人にしらるゝ
我宿の花橘や匂ふらんやま時鳥すきかてになく
夕間くれしたてる宿の橘の花さくほとになるそ嬉しき
あるかうへに花の咲そふ橘はさつきの玉にぬかんためなり
橘のこの丸とのにかほる香はとはぬになのる物にそありける
吹風のなつかしきかな此里に花橘のにほふなるへし
わかその ゝ花橘の色みれはこかれのすゝなならす也けり
昔みし人のかたみと折つれは花橘に袖そしみぬる
さらぬたにむかしの人の戀しさに花橘のにほふなる哉
軒ちかき花橘のうつり香につゝまぬ袖も人そあやむる
故鄕は花橘の咲るにそかなしるへにて人もとひける
五月やみ花橘のかほるかにあやなく人のまたれこそすれ
なつかしき花橘の匂ひ哉思ひよそふる袖しなけれと

螢

難波江の草葉にすたく螢なは蘆まの舟のかゝりとやみん
五月雨に草の庵はくつれとも螢となるそ嬉しかりける
蘆ふきの宿はまはらにかこひしててらす螢に間もかくれす
草ふかき淺茅ましりの沼水に螢とひかふ夏のゆふくれ
大井川せゝにひまなきかゝり火とみゆるはすたく螢也けり
夜なてらす草の螢なあつめてもみぬ世のことたたつねしる哉
うさや川八十伴男のかゝり火にまかふはさよの螢なりけり
哀にもみさほにもゆる螢かな聲たてつへき此世とおもふに
五月雨に草栁にけり我宿の蓬か柚にほたるとひかふ
雨風にあれのみまさる野寺にはともしひかほに螢とひかふ
行螢夏の夜すからいかにして煙もたゝすもえわたるらん
いにしへはまとにあつめし螢なも今は雲井の星かとそみる
なかれ行河へにすたく螢なはいさこにましる玉かとそみる
ともしひとみゆる螢の光かなむへ玉章なかけてよみけり
風ふけは澤への草はみたるれとひかりきえせぬ螢也けり
澤水にいれともきえぬ螢かないかはかりなる思ひなるらん

蚊遣火

蚊遣火の下にもゆれは味氣なくむかひの里をふすふるになる

すゝたるゝ宿にふすふる蚊遣火の煙は遠になびけとそ思ふ

をのれ社下にくゆらめ蚊遣火のかへりて我をふすふるやなそ

蚊遣火の煙うるせき夏の夜は賤かふせやに旅ねをはせし

我妹子にいかてしらせん蚊遣火の下もえするは苦しきものを

蚊遣火の煙のみこそ山かつのふせやたつぬるしるへ也けれ

山かつの宿にたえせすをくか火の下もえにのみすくる比哉

世中をあくたにくゆる蚊遣火の思ひむせひてすくすころ哉

雲かゝるとをちの里の蚊遣火は煙立ともみえぬ也けり

柴のやのはいりの庭にをくか火の煙うるせき夏の夕暮

さらぬたに夏はふせやのすみうきにか火の煙のところせき哉

人しれす思ふところは蚊遣火の下にこかるゝ心地こそすれ

いなしきのとこそとはけにいひ乍蚊遣火たてぬ賤かやそなき

蚊遣火をまちかくたてゝ山賤のをのれ煙にむせふなにそも

賤の男のそともにたてる蚊遣火の下にこかれて世をや過さん

山かつの外面にたてる蚊遣火の下にこかれてやみぬへき哉

蓮

池水にうかふ蓮のうへにこそ人にしられぬ玉はなしけれ

こひちにもけかれぬ花そあはれなる心のうちの蓮のみかは

水はしるはすの浮葉のしつますてうらやましくも生のほる哉

乙女子か姿の池のはちす葉は心よけにも花さきにけり

つとめてはまつそ眺むる蓮葉をつゐに我身のやとりと思へは

むらさめに玉なすほとの露のまも蓮の上をわすれやはする

夏の池の蓮の露をみるからに心そことにすゝしかりける

雨ふれははすのうき葉にゐる玉のたえすこほるゝ我涙哉

はやことも小舟さしよせかのみゆる嶋根の蓮おらまくもおし

蓮葉はたへなる法の花なればまことの池の心にそさく

浮世にはきえなはきえれ蓮葉にやとらは露の身ともなりなん

いかにしてにこれる水に生なから蓮の花のけかれさるらん

ふたつなき法のたとへにとるのみかはちすは人の心とそきく

くれなゐにふかくも匂ふ蓮哉池の心やきよくそむらん

水きよみいけの蓮の花さかりこの世のものとみえすもある哉

諸人をすくふてふなる蓮葉の思ひしれとやうきしつむらん

氷室

夏まちていたす氷室はいにし年まかせし水のこほる也けり

六月もすゝしかりけり山陰のなにおはぬものや氷室なるらん

君かへん御代なかさかの氷室にはうつむ氷のとけぬ也けり

たちとまる衣の袖のすゝしきは秋は氷室にやとる也けり

夏の日もすゝしかりけり松か崎これや氷室のわたりなるらん

六月の空のけしきもかはられとあたりすゝしき氷室山かな

つけのゝにおほ山守かおさめたる氷室そ今も絶せさりける

皇のみことのすゑも絶せれはけふも氷室におものたつかな

またしらし氷きえせぬひむろ山夏てふ事は年にありとも

皇のかしこき御代のしるしには氷も夏のものとこそきけ

土さけて照日もしらすきえせぬは氷室は夏のほかにやある覧

名にしおはゝ氷室の内にいかにしてゐたる氷のとけぬなる覧

冬さむみゐてし氷た埋置てはや氷室とはいふにそ有ける

氷ゐて千年の夏も消せしな松か崎なる氷室と思へは

夏の日の氷室と思へはあやにくにすゝしき水の氷なりけり
とけねともうはなたらなるへかとよ名は氷室にて下は氷れる

泉

六月に岩もる清水むすはすは扇の風なわすれましやは
八重葎しけみか下にむすふておほろの清水夏もしられす
淺けれと岩まの清水きよけれはむすふ雫もにこらさりけり
夏の日も泉の水にことよせてかたへすゝしきかせそふきける
むすふてに扇の風もわすられておほろの清水すゝしかりけり
けふもたゝ雫ひまなくむすひつゝ岩まの清水人にくませし
影みれはやゝしら波のよする哉板ゐの清水むすふ雫に
さらし井の木下陰にゆきふれは衣手さむし蟬はなけとも
わきかへる泉の水のすむ宿はまた夏なから秋そきにける
夏の日もすゝしかりけり岩まよりもりくる清水むすふ袂は
いかなれはなゝくりのゆのわくかこといつる泉の涼しかる覽
むすふての袂すゝしくなりゆくは泉に秋のすむにやあるらん
眞清水のみれは涼しくおほえつゝむすはてたゝに過しつる哉
たちよれはすゝしかりけり夏衣秋やいつみの底にすむらん
諸ともにすめる泉を友として夏をわする丶宿にも有哉
人もみぬ高根にいつる泉をはたれか夏とはいひなかしけん

荒和祓

河の瀨になこしのはらへするけふやさはへの神も心よすらん
松陰のとなせの水に御祓して千年の命のへてかへらん
夏はらへ天津社の神うけは我思ふことを空にかなへよ
我妹子かうちたれかみの打なひきすかぬきかくる夏祓哉
六月の川そひ柳打なひきなこしのはらへせぬ人そなき
夏川になかす御祓の大麻はたきつ岩ねの波かとそみる
八百萬神もなこしになりぬらんけふすかぬきの御祓しつれは
さはへなるあさらをかりに人にして厭ひし身をもなつるけふ哉
麻の葉に思ふことをはなてつけて六月はつる御祓をそする
古へのさはへなしける神たにもけふの御祓になこむとそきく
みな底の清きなかれにいくしたてあらふる神をうけつらし
うき事をはや川の瀨になかすてふなこしのはらへ誰かせさ覽
千年まて人なからめや六月のみたひ菅ぬきいのる御祓に
夏はつるゆふへになれは河波に麻の御祓をせぬ人そなき
思ふこと大麻にてそ夏はつる河のせことに御祓をはする
河水にうきことの葉は六月の御祓のせゝになかすけふかな

秋二十首

立秋

とことはにふく夕暮の風なれと秋たつ日こそすゝしかりけれ
朝またき秋の初風立ぬれは思ひなしにそすゝしかりける
まちわひてかたしく袖のさむき哉我閨よりや秋はたつらん
きのふにはかはるとなしに吹風の音にそ秋は空にしらるゝ
朝またき袂に風のすゝしきは鳩ふく秋になりやしぬらん
夏の夜のあたねの床にふしなから身にしむ秋の風そふきける
秋たつと丶ふきの山のやまおろしの袂すゝしくふきいつる哉
千年ふる御祓はきのふせしかともけふはうき世に秋立にけり
これをさけ荻の上葉にかせふきて秋きにけりと人につくなり
吹風の荻の上葉に音信てけふこそ秋のたつひ也けれ
ひとりゐてたかむる宿に秋きぬと荻の上葉の驚かす哉

夕暮の物のあはれをいかゝ(にイ)せんけふより秋になりぬと思へは
秋たつと人にしらする風の音にすゝしやけさはころも重ねつ
朝またき秋立空のしるしには風の氣色そまつかはりける
秋のたつしるしなるへし衣手も涼しきけしきことになりゆく
いつしかとけさは身にしむ風にこそ秋きに鳬と思ひしらるれ

七夕

天川逢瀬はとなき七夕にかへらぬ色のころもかさはや
銀川夜の長月もある物をなと初秋とちきり初けん
織女にかせるころもの露けさにあかぬけしきを空にしる哉
銀河空にこそしれ棚機のくれをまつまの秋のこゝろを
彦星のまれにわたれる天河岩こす波のたちなかへりそ
彦星のいそきやすらん天河やすのわたりに舟よはふなり
渡士守ふなよとみすな織女の年に逢夜はたゝ今宵のみ
織女のかへる袂のしつくには銀河なみたちやそふらん
棚機のあかぬ別の涙にや花のかつらも露けかるらん
織女の天の岩舟ふなてしてこよひやいかにいそまくらする
銀河波たつなめ彦星のつまむかへ舟岸によるなり
逢はともなくてわかるゝ織女の心のうちそ空にしらるゝ
中々にうらやましきは織女のたえすあひみる契り也けり
七夕のあまの羽衣かさねてもあかぬ契りや猶むすふらん
織女の逢瀬のなとかまれならんけふひく糸のなかき契りに
こひ／＼てこよひはかりや織女の枕にちりのつもらさるらん

萩

ひまもなく眞萩しけれる秋の野は道ゆきすりも嬉しかりけり
河水に鹿のしからみかけてけりうきてなかれぬ秋はきのはな
秋はきはこそにかはらぬ色なれと猶珍らしき花のかほかな
二葉より朝たつ鹿はしからめと眞野の村はき花咲にけり
萩か花しからむ鹿そうらめしき露もちらさてみまく(ころイ)ほしきに
住吉の岸の小萩に打そへて波の花さへみつるけふかな
みるもおしとをゝにさける萩か花しほり(えをイ)せさすな露のしからみ
秋萩の末葉の露になつさひてさまにもおはぬすり衣か(らイ)な
時しあれは花咲にけりみやき野の本あらのこ萩枝もしとゝに
朝夕に(にけイ)みれともあかす白露のをくのゝ萩の秋のけしきは
朝露にうつろひぬへし小男鹿のむれ(をれるイ)わけにする秋の萩(萩の花イ)原
秋はきの花の上なる白露は錦にをける玉かとそみる
錦野や紐とく花とみゆる哉みたれて咲る眞野の萩原
しめゆひしわか(き)故里の秋萩は今そ紐とくさかりなりけり
置露もしつ心なく秋風にみたれてさける眞野の萩原
高圓の野を過行は秋はきの花すりころもきぬ人そなき

女郎花

ゆきてみんむかひの野への女郎花一枝もおらし花のさかりは
もとゆひの霜をいとはゝ娘部志我かさしとはならしとや思ふ
夕されは伏見(里イ)の野への女郎花おらてすくへき心地こそせれ
露しけき朝のはらの女郎花一枝おらん袖はぬるとも
秋霧にかくれのをのゝ娘部志わか袂には匂へとそおもふ
小夜衣片敷袖もあるものをあした露けき娘部志かな
いさなみに今もまたみん女郎花しなふの姿(姿イ)あくとしもなし
みよしのゝかたちの小野の女郎花たはれて人に心をかるな

心からあたの大野におひたちて風にたはるゝ女郎花かな
夕霧に立かくれつゝ女郎花われなつさひて翁さひせん
あたし野の心もしらぬ秋風にあはれかたよる女郎花かな
年をへて露をむすへる女郎花今さらにまたこゝろをかるゝ
おりつれは袂にかゝる白露にぬれきぬきする女郎花かな
みし人もあれ行やとの女郎花ひとり露けき秋のゆふくれ
女郎花匂ふ野へにはいたつらに旅ねしつへき心地こそすれ
秋の夜の露ならねとも娘部志さく野へことに心をそをく

薄

秋風にはらむすゝきのある野へはうつしの露や色にまかへる
花すゝき穂に出てまねくころしもそ過行秋はとまらさりける
花すゝき今夜はしめぬ秋風にけさしもなとか朝しめるらん
むれたてる篠のをすゝき片よりになひくは風のふけは也けり
風ふけは花のをすゝき穂に出て露打はらふ袖かとそみる
しほ風になみよる浦の花すゝき雫をはらふ袖かとそ見る
風をいたみ鶉鳴野の花すゝきわれをまねくと人やみるらん
花すゝきまそをの糸をくりかへしたえすも人をまねきつる哉
一かたになひかはなひけ花すゝきさこそは風の定めなからめ
みこもりてほには出ねとしの薄風にはえこそすまはさりけれ
鶉鳴をさゝか原のしのすゝきたれをうしとかほにいてさらん
秋風になひき／＼て花すゝき枯野にならんことをしそおもふ
花すゝき招くは袖とおほえつゝ秋は野路こそゆかれさりけれ
夕霧のたえまにみゆる花すゝきほのかにたれを招くなるらん

秋風になひく尾花の夕間暮たか袖かとそあやまたれける
道のへにまねく尾花にはかられて今宵もこゝに旅ねをやせん

苅萱

秋風になひくほとなき苅萱は下葉を上にふきみたる哉
みる程に時雨はふりぬおなしくは笠かるかやのもとに宿らん
野へ毎にしとろにふして亂るゝはたか苅萱そつかねをもなき
秋くれは思ひみたるゝかるかやの下葉や人のこゝろなるらん
鶉なく狩はのをのゝかるかやの思ひみたるゝ秋のゆふくれ
夕されは風のけしきにかるかやもこゝろほそくな思ひ亂れそ
大原や野風にしたくかるかやのしとろにのみもみたれける哉
朝夕になてつゝおほすかるかやをしめゐて君かみま草にせん
さらぬたに亂れかちなるかるかやをつかのまもなく結ふ露哉
苅かやも我心をはさこそみめ秋の野風にみたれかちなる
うなひ子か草苅岡の苅かやは下おれにけりしとろもとろに
鶉なく野へにみたるゝ苅萱のかりにたになと人のこさらん
秋風になにかるかやのすまふらん下おれせてもはてぬ物ゆへ
心なく露もこそあれかるかやのなとたはやすく風にみたるゝ
すきかてに吹秋風そ苅萱の心みたるゝつまにやありける
ともすれは風にみたるゝ苅萱にいつまてとてか露のをくらん

蘭

秋はきてまたおもなれぬ蘭野ことにみれはほころひにけり
ぬきかけしぬしはたれともしられとも一野にたてる蘭かな
秋の野にむら／＼みゆる藤袴むらさきふかくたれかそむらん

ぬしもなきものと思へと藤袴秋の野風になるゝ也けり
秋の野に香さへ匂へる藤袴きてみぬ人はあらしとそ思ふ
さゝかにの糸のとちめやあたならんほころひわたる藤袴哉
野ことにそほころひにける蘭秋のきるにはたへぬ也けり
そめかけてまかきにさらす蘭またきもとりのふみちらす哉
秋ことに誰きてみよと蘭きぬ笠岡ににほふなるらん
秋風にすそのかほらす蘭たれともなしにわかぬしにせよ
秋かせの日に／＼ふけは蘭きる人なしにほころひにけり
ぬしやたれぬふ人なしに蘭野ことにみれはほころひにけり
秋霧の野ことにたてる蘭たれかぬひけんほころひにけり
立田山麓に匂ふふちはかまたかきてなれし移り香そこは
蘭たれきなれけんなつかしき香に匂ひつゝ色はふりせす
秋霧や立かくしけんおほつかな野ことに匂ふふちはかま哉

荻

秋きてもまた穗に出ぬ荻の葉は風につけてそそよとつけゝる
秋きぬと賤かいほにはつけれとも荻のは風のしるき也けり
荻の葉のとはす語のそよめきにすゝろにめをもさましつる哉
さらぬたに秋はね覺もあるものを氣色ことなる荻の上風
山里にふきおとろかすかせなくは荻さへ音もせてやかれまし
まてといひし人やわけくる荻のはのそよく氣色只のならぬ哉
春ひみし荻の燒原いつのまに上葉の風のそよとふくらん
荻の葉を草の枕にむすはすはよそにや風の音をきかまし
くる人もなき我宿の荻のはにいとひきかけてくものふるまふ
今こんと契りしほとの夕暮は荻の葉風そ人たのめなる
秋風のやゝはたさむくふくなへに荻の上葉の音そかなしき
いとゝしくものゝかなしき夕暮にあはれをそふる荻の上かせ
まつ人もなき宿なれと荻の葉のそよとなるには驚かれけり
つれ／＼とさひしき宿の夕暮に荻の葉風そ人たのめなる
荻の葉を吹こす風の音たかみほに出て人に秋をしらする
小夜更て戰かはそよけ荻の葉に人またぬ身ははかられはせし

鴈

雲井よりをのか名をよふ鴈金はいつこをさしてなき渡るらん
めつらしくきくとはすれと初鴈の聲はこそにもかはらさり皃
天の戸をあくるほとをもまたぬ哉いそきやすらん旅の鴈かね
穗に出て久しくなりぬ秋の田の稻かり金も今そなくなる
故郷は歸る空とやなりぬらん天雲かくれ鴈そなくなる
つはくらめいそきやすらんあまの原雲路に鴈の聲きこゆ也
一つらに聲のきこゆる鴈金はわかまつふみをたより也けり
鴈金もはれしほる覧眞菅生るいなさほそ江にあまつゝみせよ
雲かくれなのりをしつゝ行鴈のなこり戀しき秋の空哉
春と秋とゆきてはかへる鴈金はいつくかつゐの住かなるらん
きくたひにめつらしきかな初鴈のわかまつ妹かつかへならねと
初聲にめつらしくきく鴈金をこしちの人やみゝなれぬらん
はれかるみ雲まにいれる初鴈の聲のはつかにきこゆなる哉
ことはりや旅の空にてなく鴈は秋の哀をおもひつらねて
初鴈の翅につけて雲井なる人の心を空にしるかな
雲かゝるあらちの山を鴈金の霧にまとはていかてきつらん

鹿

袖かたに道やまとへる小男鹿のつまとふ聲のしけくもある哉
かこ山のはゝかゝ下にうらとけてかたぬく鹿は妻こひなせそ
妻こふる床の山なる小男鹿のひとりねなく聲そ聞ゆる
夕間暮嵐にたくふ鹿のねは戀する人の妻とこそなれ
夜もすからしつくの山にうらふれて妻こひわふる小男鹿の聲
なにことを大原山になし籠てつきせす鹿のなきあかすらん
高砂の尾上の松はさしなからなにをしるしに鹿のなくらん
終夜まちかね山に鳴鹿のおほゐけにやは聲をたつへき
足引の耳無山に鳴鹿の妻戀すらしきく人なしに
世中を秋はてぬとや小男鹿のいまはあらしの山になくらん
風さむみはたれ霜ふる秋の夜は山下とよみ鹿そなくなる
秋ふかみものあはれなるたそかれに小倉の山に鹿そなくなる
夜をつらね妻を戀つる小男鹿のなかぬはいかに逢にけるかも
三室山おろす嵐のさひしきに妻とふ鹿の聲たくふなり
たくひなきあはれとそきく小男鹿の妻戀かれてよはに鳴音を
遠近のみねのつゝきに鳴鹿のいく夜になりぬ妻におはすて

露

山かくれ風にしらすな白露の玉ぬきかゝるしのゝをすゝき
月草の花色衣いかにせんをさゝをわくる秋のしら露
露しけき野へをはゆかしあちきなく戀になき名の立も社すれ
しのゝめの朝露ふかき淺茅生は玉つらぬかぬ草の葉そなき
風ふけはまつ打なひく淺茅生にいかてをくらん秋のしら露
ちらさしとをくらんものを箱根山あくれはこほる玉さゝの露
白玉を庭にはみてる道芝のしのになしなみなけるあさ露
女郎花朝なく露を帶にしてむすふ袂はしほれしにけり
終夜おきゐてそみる照月のひかりにまかふ玉さゝの露
小篠原しみゝになける白露を秋はたえせぬ玉とこそみれ
淺茅生のしのになしなみ置露をまことの玉とおもはましかは
風吹はなひく尾花になく露を世のはかなさによそへてそみる
玉をなす淺茅か上の朝露を置てきなからみるよしも哉
白露と人はいへとも野へみれはをく花ことに色そかはれる
日にみかき風にみかける草村の露こそ玉をぬきみたしけれ
朝日さす小篠か上の露よりもあなたのみかた人のこゝろは

霧

麓をは宇治の川霧たちこめて雲井にみゆる朝日やまかな
川霧の都のたつみふかけれはそこともみえぬ宇治の山里
石走音はかくれす夕霧のこへもの瀧をたゝこむれとも
吉野川わたりもみえぬ夕霧にやなせの浪のをとのみそする
白波の音はかりしてみえぬかな霧立わたる玉川の里
水まさる千曲の川は我ならす霧もふかくそ立わたりける
御田や守なるこの繩に手かく也晴まもみえぬ霧のみなかに
朝日さす尾上の霧の村きえて晴やらぬ身に世をそうらむる
秋霧の柚山川に立ぬれはくたす筏のをとのみそする
夕霧に道やまとへる宮木引柚山人もともよはふなり
秋山に入にし人の戀しきに麓をこめて霧たちにけり
秋きりの立田の山のもみちははれてのちこそ色もみえけれ
川霧にわたせもみえす遠近の岸に舟よふ聲はかりして
爪木こる小野の山へも霧こめて柴つみ車道やまとへる

秋霧の立へたてたる麓にはをちかた人そうとくなりゆく
いかにせんたつきもしらぬ山中にかへらん方は霧たちにけり

槿花

蘆垣の末(ひまイ)よりみえし朝良はおもかけさらぬ花にそありける
白露のおきてみつれはほともなく面かはりする朝かほの花
山里のしのゝあみ戸のひまをあらみ明てそみつる朝かほの花
朝良もうらやまれけり年ふれとまた花さかぬ人のためには
浦風に涙やおるらん終夜思ひあかしのあさかほのはな
世のうさを思ひしれとや朝良のさきてはかなき色(ほとイ)をみすらん
あたにのみみつゝそすくる軒近きまかきにさける朝顔の花
朝良の花のすかたのゆかしきになにこはなかき秋のよそとよ
朝顔の花のすかたをみつるよりくれをまつへき心地こそせれ
秋くれは霧のまかきに立かくれほのかにみゆるあさかほの花
玉ひこの露もさなからをきてみんけさ嬉しけに咲る朝顔
世中のはかなき中にはかなきはくれをもまたぬあさかほの花
朝良のはかなき花をいかにしてかしこき人のそのに植けん
いつ迄かをきてみるへき日影まつ露にあらそふあさかほの花
しのゝめにお(なイ)きつゝそみん朝良は日影まつまの程しなければ
きゆとみしきのふの露もをきなから面かはりせぬ朝良の花

駒迎

相坂の關路にけふや秋の田の穂坂のこまをつむ〳〵とひく
逢坂の關の夕霧ふかければさやかにみえぬ望月のこま
相坂の關の杉村葉をしけみ絶まにみゆる望月のこま
杉村のしつえやくらき桐原の駒引わたす相坂のせき
引わたす瀬田の長橋霧はれてくまなくみゆる望月の駒
君か代の千年の秋に相坂は駒の心ものとけかりけり
會坂の關の杉まにひくなるはこや望月の影ふちの駒
走井のかけひの霧はたなひけとのとかにみゆる望月の駒
鳴なるは相坂山のくつは虫駒迎する人やきくらむ
今夜ひく御牧の駒は相坂の山より出る月毛也けり
引駒のつめやひつらん相坂の關の清水の底そにこれる
會坂に雲の梯なけれとも空にそかける望月のこま
關の戸に尾花蘆毛のみゆる哉穂坂の駒を引にやあるらん
秋の夜のくまなき空に望月の駒は都に入やしぬらん
かすしらす君か爲にと引駒はいく代(かイ)の秋に相坂の關
相坂の關の杉村木くらきにまきれやすらんかひの黒駒

月

山端をよこきる雲の絶まより待(もりくイ)出る月のめつらしき哉
まこもかる淀の澤水ふかけれと底まて月の影そみえ(はすみイ)ける
嵐ふく生駒の山の雲はれて長井の浦にすめる月かけ
天原空行月をなかむれは秋はれぬよの數そつもれる
山のはにいさよふ月のたけゆくを眺むるわれそ人なとかめそ
月みれはうき世中につく〳〵と思ひもしらてす(すイ)むこゝろかな
諸ともにみるとはなしに行かへり月にさほさす舟路也けり
木枯の雲吹はらふ高嶺より寒ても月のすみ上る哉
雲の波あらふなるへし天川夜わたる月の影きよくして
かもめゐる入江の水はふかけれと底まて月の影はすみけり
秋のよは闇にさしいる月影のあかぬに明る山のはそうき(もそしイ)

秋のよの月は曇らぬ眞寸鏡影をうかめぬ水はあらしな
いつくとも月はわかしをいかなれはさやけかるらん更級の山
月影を心にいれておしめとも思ひくまなくかたふきにけり
久かたの月をはるかになかむれは八十嶋（さへてらすイ）めくりみる心地する
やまおろしに木葉落つむ谷河の底にもすめる秋のよの月

擣衣

戀つゝやいもかうつらん唐衣砧の音の空になるまて
衣うつ槌の音こそたゆむなれたふさに霜の置にやあるらん
小夜深く砧にあたる槌の音のしけきはたれか衣うつらん
秋風はすゝしくなりぬ唐衣たかためにとていそきうつらん
ころもうつ槌の音にてよそなから人の心のほとそしらるゝ
故郷の夜さむになれは衣うつたひにや君も思ひいつらん
まつほとのすきやしぬらん衣うつ砧の音のうらみ聲なる
松風の音たに秋はさひしきに衣うつ也たま川のさと
我妹子か手玉もゆらに打ころも千聲になりぬ夜のなかけれは
唐衣此里人のうつ聲をきゝそめしよりぬる夜はそなき
たか爲にいかにうてはか唐衣千度やちたひ聲のうらむる
なかき夜に衣してうつ槌の音や物思ふ人の友となるらん
いかはかり思ひそめたる唐衣なかきよすからうちあかすらん
たか爲と思ひそめてか終夜をちの里人ころもうつらん
たのめをきしほとふるまゝにさよ衣うらめしけなる槌の音哉
小蓮もさゆる霜夜に終夜をちの里（人イ）にはころもうつ也

虫

萩のえの下葉を宿にする虫はうらかれてゆく秋や悲しき
駒なへて麓の野へにたつぬれはをくらにすたくつはむし哉
みかりする片野のゝへの鈴虫の戀する聲や（かイ）ふりはてゝ鳴
鈴虫の聲する野（かたイ）へをたつぬれは心にもあらぬ花をみる哉
夕暮はすきうかりけり秋の野に我松虫の聲ならねとも
たのめ置しことの葉による戀草や人松虫の栖なるらん
山里はさひしかりけり木枯の吹夕くれの日くらしの聲
よはり行虫の聲にや山里はくれぬる秋のほとをしるらん
夜をかさね音をなく虫の哀さに大かた秋はえこそねられね
山里の葎（おはらイ）ましりのかるかやのみたれもあへぬむしの聲かな
蛬秋のうけれはわれもさそ長き夜すからなきあかしつる
秋の夜の更行まゝに虫の音の心ほそくもなりまさるかな
秋ふかくなり行まゝに虫の音のきけは夜ことによはるなる哉
あれはてゝ人影もせぬ故郷に猶まつ虫の聲そたえせぬ
秋の夜の虫のねきけはいとゝしくわか物思ひもよほされけり
露をゝもみうつろふ花やおしからん草村ことにすたくむし哉

菊

しめのうちに八重咲菊の朝ことに露こそ花のうはき也けれ
かはかりの匂ひはあらし菊の花むへこそ草のあるし也けれ
みし人もすみあらしてし故郷にまたうつろはぬしら菊の花
奥山のみたにの底の菊なれはなかれをくみてたつぬ計そ
うすくこくうつろふきくにをく露は一色ならぬ玉かとそみる
たれとわか庭にたはれんませゆひしやとの村菊花さきにけり
五色に八重咲菊は昔より老せぬ秋のかさしなりけり
わすれては雪にまかへし白菊をよな／＼霜のをきかへてける
霜かれんことをしそ思ふ我宿のまかきに匂ふしらきくの花
白菊の匂ふさかりは長月にまたさく花のさらになき哉

谷川の岸へにたてる白菊をひろさへほしと思ひけるかな
霜かれんことをしそおもふ白菊の花よりのちに花しなければ
菊の花あらひておとす（落ろイ）谷水のなかれたくみてよはひのふ也
うつろはてひさしからなん白菊はまた匂ふへき花のなければ
霜枯の匂ひもさらにたくひなき籬の菊をのとけくそみる
うすくこくうつろふきくに置つれは色々にこそ霜もみえけれ

紅　葉

しくれの雨まなくしふれは駿河なるしつはた山に錦をりかく
唐錦霜をはたてとたのめとも時雨のいとの猶よはき哉
露のみと思ひける哉守山はもみちこきおろすなにこそ有けれ
峯たかき嵐の山のもみち葉は麓の里のにしきなりけり
淺からぬ八入の岡のもみち葉をなとあかなくに時雨そむらん
よそにみる峯のもみちや散くると麓の里はあらしをそまつ
白露のうつしのはひやさしつらん八入の岡のもみちしにけり
龍田川しからみかけて神なひの三室のやまのもみちをそみる
秋をやく心地こそすれ山里のもみち散かふ木枯のかせ
もみちするたかはた山を秋行は下照はかり錦をりかく
紅にしくれの雨やなりぬらんふれは木葉のてりまさるかな
さほ山に丹葉のにしきをりかけて霧のたつに（はおりイ）そ任せたりける
瀧の上のみ舟の山のもみちははこかるゝほとになりにける哉
もみち葉のくれなゐ深き山里はたえす時雨やふりてそむらん
うすくこくそめかけてけり立田姫紅葉の錦むら〳〵にみゆ
秋山を越つるけふのしるしにはもみちの錦きてやかへらん

九月盡

けふのみと秋をみるこそ悲しけれ山の木葉のちるにつけても
こふ人に千々の金はとらすとも秋くるゝこそおしくありけれ
いろ〳〵の木葉手向て秋はけふ生田の森にかとてしにけり
さりともと思ひしかとも八雲立手間の關にも秋はとまらす
もみち葉の散てつもれるこの本や暮行秋のとまりなるらん
花すゝきあすは冬野にたてるともけふは眺めん秋のかたみに
ゐせきにはもらぬ水たに有物をとまらていかに秋のゆく（すイ）らん
くれて行秋し尾花の末ならは手をりてもたんたちやとまると
こゑ〳〵になく〳〵虫はとゝむるを（とゞめなましイ）きかす顔にて秋のくれ行
人ならはやよしはしともいふへきにいかゝはせまし（すへきイ）秋の別を
聲たてゝしかはかりこそおしめとも思ひしらすも過る秋哉
くれて行秋を心にしらせはやおしまは霧の立やとまると
長月の三十日にけふはなりぬれは秋はかきりと鹿そなくなる
かくはかりおしむもしらす（とイ）夕霧のともに立てや秋のゆくらん
たまさかにあひてわかれし人よりもまさりておしき秋の暮哉
命にもかへやしなまし暮て行こよひはかりの秋のけしきを

題

冬十五首

初冬　時雨　霜　霰　雪
寒蘆　千鳥　凍　水鳥　網代
神樂　鷹狩　炭竈　爐火　除夜

戀十首

初戀　不被知人戀　不逢戀　初過戀
後朝戀　遇不逢戀　旅戀　思

片思　恨

雜二十首

冬十五首

初冬

春宮大夫公實

きのふこそ秋はくれしかいつのまに岩まの水のうすこほる覽

權中納言匡房

立田川秋のとまりとみしほとに水さへこほる冬はきにけり

權中納言國信

かみな月また冬かまへせぬ物なとりもあへすもあるゝけふ哉（さイ）

右兵衛督師頼

冬くれはさひしかりけりひとりねのわか衣手な誰にかされん

修理大夫顯季

きのふまて聲たえさりし小男鹿も冬こもりせしけさの氣色か

左京大夫顯仲

かき曇りかねて雪ふる越路にはいかてかけふな冬としるらん

中宮權大進仲實

いつみ川水のみわたのふしつけにしはまの氷冬はきにけり

木工頭俊頼

いかはかり秋の名殘ななかめましけさは木葉に嵐ふかすは

右近衛少將師時

野へよりや冬はきつらん草のはになく白露の霜となるかな

藤原顯仲朝臣

大あらきの森のもみち葉散はてゝ下草かるゝ冬はきにけり

藤原基俊

まことにや冬はきにけるむへしこそ枯野に虫の聲たえにけり

僧都永緣

山ふしの苔の衣のうすけれは冬になりぬるけふそかなしき

阿闍梨隆源

冬きてはこよひそはつ夜いつのまに片敷袖のさえわたるらん

肥後

風はやみ冬のはしめは山かつのしつの松かきひまなくそゆふ

紀伊

もみち葉もみな散はてゝ柞はらけふは梢そまはらなりける

河内

賤の男の外面のむくらかれはてゝいつしか冬になりにける哉

時雨

綠なるはやまの色やかはりぬる（らんイ）いやしきふれる初しくれかな

打かつく笠取山の時雨には袂そぬるゝ人なとかめそ

みやまへの時雨てわたる數ことにかことかましき玉かしは哉

冬の夜は時雨に夢なさましつゝのとかにあかすことのなき哉

あま傳ふ時雨に袖も濡にけりひかさのうらなさしてきつれと

かみな月夕間の山に雲かゝる箕の里やしくれふるらん

水鳥の靑はの山もかみな月時雨にあへす色かはるらん

木葉のみ散と思ひししくれには涙もたへぬものにそ有ける

かみな月時雨のあめのふる里は淺茅か葉さへ色付にけり
時雨つゝ日數ふれともあたこ山しきみか原の色はかはらし
晴くもりさためなけれは初時雨いもか袖笠かりてきにけり
いかにして時雨は色もみえなくにから紅にもみちそむらん
しくれの雨木葉はかりを染けれはかつきし袖は色もかはらす
ふりはへて人もとひこぬ山里は時雨はかりそすきかてにする
かみな月しくるゝころはあつまやに雨やとりする人そ絶せぬ
人よりも時雨の音をきくことやあれたる宿のとりところなる

霜

夕こりのはたれ霜ふる冬の夜は鴨の上毛もいかにさゆらん
高砂の尾上の鐘の音すなり曉かけてしもやをくらん
道芝の霜うち拂ふ袖さえてまた夜ふかくも出にける哉
いつしかと朝戸をしあけて見渡せは道芝しろくをける霜哉
小莚に思ひこそやれ篠の葉のさやく霜夜のをしのひとりね
下さゆる草の枕のひとりねに霜の上着をたれかかさねん
年ふれはわかいたゝきにをく霜を草葉の上と何思ひけん
住吉のちきのかたそきゆきもあはて霜をき迷ふ冬はきにけり
神無備の三室の山に霜ふれは夕してかけぬ榊葉そなき
道芝に霜やをくらん小夜更て片敷袖のさえまさるかな
ひさき生る小野の淺茅に置霜の白きをみれは夜やふけぬらん
風さむみ冬のよすから置霜の朝日山にはとけやしぬらん（よイ）
初霜に籬（やイ）の花はしほみにき薬も枯れとや鵆な〳〵をく
玉ほこの朝行道の小さゝはらわくるもすそに霜寒にけり
置霜はしのひの妻にあらねともあしたわひしくきえかへる哉
霜拂ふ鴨の上毛やいかならん十ふのすかこもさゆるよな〳〵

霰

玉さゝに霰たはしろ冬の夜はいとしそさゆるとふのすかこも
人とはて葎は宿をさせれともをとするものはあられ也けり
あつまやのしつのすかきの下寒て山とよむまてあられふる也
道たえて人もたつれぬ槇の戸に冬の夜すからあられをとなふ
人めには霰たはしろ我袖をころもにつゝむ玉かとやみん
いてや猶人たのめなる霰かな玉としけともみるほともなし
さ夜寒み人待人にきかせはや荻の枯はにあられふるなり
あれはてゝむれもくもらぬ宿なれは霰ならてはもる人もなし
夜を寒み霰たはしろ山里は苔の莚にねさめをそする
故郷の槇の板戸（屋イ）の妻ひさし霰たはしる冬そさひしき
板まより霰もりくる我宿はぬきみたれたる玉そちりける
冬の夜をね覺てきけは片岡のならのかれはに霰ふるなり
おとろかぬ人はあらしな曉の霰のをとのをひたゝしさに
板まあらみ霰もる屋は白玉やよるの衣のうはきなるらん
かきくらし俄にもふる霰かな太山颪のかせにたくひて
ぬきみたる白玉かとそ思ひける木のはの上にふれるあられは

雪

ますら男か小坂の道も跡たえて雪降にけりころもかせやま
いかにせん末のまつ山波こさは嶺のはつ雪きえもこそすれ
吉野山とたつ河上雪ふれは煙や民の家ゐ（ねイ）なるらん
かきくらし玉ゆらやます降雪の幾重つもりしこしのしらやま
しら鳥の鷺坂山を越くれはをさゝか嶺に雪降にけり
今朝みれは袖ふりはへてきのふこしよしのゝ山は雪降にけり
ふみわけて誰きてとはんみ山への白雲しのき雪のふれゝは

むは玉の黒かみ山に雪ふれは名もうつもろゝものにそ有ける
雪ふれはみなたか（しろイ）ゝらぬ山もなしいつれかこしの白根（高イ）なる覧
苔莚あなれか嶺もみえぬまてよしのゝ山はみゆきふりしく
奥山の松の葉しのきふる雪は人たのめなる花にそありける
霜枯の菊のふるえに雪ふれは又うつろはぬ花そさきける
都たに雪ふりぬれは信樂の眞木の杣山跡たえぬらん
道もなく積れる雪に跡たえて故郷いかにさひしかるらん
白雪のふりしきぬれは苔莚青根か嶺もみえすなり行
難波江の蘆のまろやもいつくそとたつぬはかりにふれる白雪

寒蘆

霜枯の野へのほとりのしほれ蘆はゆきかふ駒もすさめさり覧
霜かれて花はちりぬとみしかとも玉江の蘆は冬そたえせぬ
まこもかる玉江の蘆も（はイ）霜枯てふかくも冬のなりにけるかな
攝津國の須磨の浦風ふゝたひにしほれし蘆の音のみそする
野かひせし蘆もまはらに枯はてゝくきの渡もさひしかりけり
終夜あなしふく也難波潟鹽蘆（しほれし蘆に波の花さくイ）に波の花やさくらん
難波江の涙になつそふしほれ蘆のけさ濱風にさえてみゆらん
難波潟つなてになひく蘆の穂のうらやましくも立なゐる哉
置霜におひたる蘆の枯ふしてすかたの池のあらはれにけり
難波潟汀をしなみ降雪をおもけにたはむ蘆のしたおれ
鹽風にしほれにけりなかれ蘆のおきふし春を待とせしまに
霜かれの蘆かる人の宿なれは八重垣にしてすまふ也けり
冬寒み末の枯葉も落はてゝ木しのはかりたてる蘆かな
難波潟蘆の穂末に風ふけは立よる波の花かとそみる
遠方に家ゐやすらん難波かた蘆かり小舟しけくゆきかふ
よそにのみ三嶋の蘆のねを絶てかりにたにやは今はとひくる

千鳥

志賀の浦の松吹風のさひしきに夕波千鳥たちゐなく也
月影の明石の浦（やイ）を漕行は千鳥しはなく明ぬこのよは
友千鳥むれて渚に渡る也沖のしらすに鹽やみつらん
夜をさむみ明石の浦の濱風にとわたる千鳥聲さはく也
夜くたちに千鳥しは鳴楸生る清き河原にかせやふくらん
東なるなさかの浦に鹽みちて有明の空に千鳥しはなく
橋立やよさのうら波よせてくる（くれはイ）曉かけてちとりなくなり
あらし（なイ）ふくをしまか磯の濱千鳥岩うつ波にたちさはく也
大井川くたす筏におとろきてゐせきにきゐるちとりなゝなり
風さむみ夜やふけぬらんしなか鳥ゐなの湊に千鳥しはなく
霧たちてわたせもみえぬ佐保川のしろへに夜はの千鳥なけ覧
沖津風吹上の濱の寒けれは冬の夜すから千とりなくなり
夜やさむき友や戀しきねてきけは佐保の川はらに千鳥鳴也
白波に聲打そへて濱千鳥磯のまに〳〵たちゐなゝなり
浦風に吹上の濱の濱千鳥波立くらしよはになくなり
浦つたふ千鳥の聲をしるへにてあまのとまやに旅ねしてけり

凍

ますらおか藻臥つか鮒ふしつけしかひやか下も氷しにけり
河こしのしはつみ車いかゝする氷のくさひ冬はたえせし
夜をさむみ川との氷あつけれは朝けの水をくみそわつらふ
山里の夜半のあらしの寒けれは細谷川そまつこほりける

かみな月時雨のあめのふる里は淺茅か葉さへ色付にけり
時雨つゝ日數ふれともあたこ山しきみか原の色はかはらし
晴くもりさためなければ初時雨いもか袖笠かりてきにけり
いかにして時雨は色もみえなくにから紅にもみちそむらん
しくれの雨木葉はかりを染ければかつきし袖は色もかはらす
ふりはへて人もとひこぬ山里は時雨はかりそすきかてにする
かみな月しくるゝころはあつまやに雨やとりする人そ絶せぬ
人よりも時雨の音をきくことやあれたる宿のとりところなる

霜

夕こりのはたれ霜ふる冬の夜は鴨の上毛もいかにさゆらん
高砂の尾上の鐘の音すなり曉かけてしもやをくらん
道芝の霜うち拂ふ袖さえてまた夜ふかくも出にける哉
いつしかと朝戸をしあけて見渡せは道芝しろくをける霜哉
小莚に思ひこそやれ篠の葉のさやく霜夜のをしのひとりね
下さゆる草の枕のひとりねに霜の上着をたれかかされん
年ふれはわかいたゝきにをく霜を草葉の上と何思ひけん
住吉のちきのかたそきゆきもあはて霜をき迷ふ冬はきにけり
神無備の三室の山に霜ふれは夕してかけぬ榊葉そなき
道芝に霜やをくらん小夜更て片敷袖のさえまさるかな
ひさき生る小野の淺茅に置霜の白きをみれは夜やふけぬらん
風さむみ冬のよすから置霜の朝日山にはとけやしぬらん
初霜に籬(やイ)の花はしほみにき葉も枯れと(よイ)や朝な〳〵なく
玉ほこの朝行道の小さゝはらわくるもすそに霜寒にけり
置霜はしのひの妻にあられともあしたわひしくきえかへる哉
霜拂ふ鴨の上毛やいかならん十ふのすかこもさゆるよな〳〵

霰

玉さゝに霰たはしる冬の夜はいとしそさゆるとふのすかこも
人とはて葎は宿をさせれともをとするものはあられ也けり
あつまやのしつのすかきの下寒て山とよむまであられふる也
道たえて人もたつれぬ槇の戸に冬の夜すからあられをとなふ
人めには霰たはしる我袖をこころもにつゝむ玉かとやみん
いてや猶人たのめなる霰かな玉としけともみるほともなし
さ夜寒み人待人にきかせはや荻の枯はにあられふるなり
あれはてゝむれもくもらぬ宿なれは霰ならてはもる人もなし
夜を寒み霰たはしる山里は苔の莚にねさめをそする
故鄕の槇の板戸(屋イ)の妻ひさし霰たはしる冬そさひしき
板まより霰もりくる我宿はぬきみたれたる玉そちりける
冬の夜ね覺てきけは片岡のならのかれはに霰ふるなり
おとろかぬ人はあらしな曉の霰のをとのをひたゝしさに
板まあらみ霰もる屋は白玉やよるの衣のうはきなるらん
かきくらし俄にもふる霰かな太山颪のかせにたくひて
ぬきみたる白玉かとそ思ひける木のはの上にふれるあられは

雪

ますら男か小坂の道も跡たえて雪降にけりころもかせやま
いかにせん末のまつ山波こさは嶺のはつ雪きえもこそすれ
吉野山とをつ河上雪ふれは煙や民の家ゐ(ねイ)なるらん
かきくらし玉ゆらやます降雪の幾重つもりしこしのしらやま
しら鳥の鷺坂山を越くれはをさゝか嶺に雪降にけり
今朝みれは袖ふりはへてきのふこしよしのゝ山は雪降にけり
ふみわけて誰きてとはんみ山への白雲しのき雪のふれゝは

むは玉の黒かみ山に雪ふれは名もうつもるゝものにそ有ける
雪ふれはみなたか（しろイ）ゝらぬ山もなしいつれかこしの白（高イ）根なる覧
苔莚あなれか嶺もみえぬまてよしのゝ山はみゆきふりしく
奥山の松の葉しのきふる雪は人たのめなる花にそありける
霜枯の菊のふるえに雪ふれは又うつろはぬ花そさきける
都たに雪ふりぬれは信樂の眞木の杣山跡たえぬらん
道もなく積れる雪に跡たえて故郷いかにさひしかるらん
白雪のふりしきぬれは苔莚青根か嶺もみえすなり行
難波江の蘆のまろやもいつくそとたつぬはかりにふれる白雪

寒蘆

霜枯の野へのほとりのしほれ蘆はゆきかふ駒もすさめさり鳬
霜かれて花はちりぬとみしかとも玉江の蘆は冬そたえせぬ
まこもかる玉江の蘆も（はイ）霜枯てふかくも冬のなりにけるかな
攝津國の須磨の浦風ふゝたひにしほれし蘆の音のみそする
野かひせし蘆もまはらに枯はてゝくきの渡もさひしかりけり
終夜あなしふく也難波潟鹽蘆（しほれし蘆に波の花さくイ）に波の花やさくらん
難波江の浪になつそふしほれ蘆のけさ濱風にさえてみゆらん
難波潟つなてになひく蘆の穗のうらやましくも立なをる哉
置霜におひたる蘆の枯ふしてすかたの池のあらはれにけり
難波潟汀なしなみ降雪なおもけにたはむ蘆のしたおれ
鹽風にしほれにけりなかれ蘆のおきふし春な待とせしまに
霜かれの蘆かる人の宿なれは八重垣にしてすまふ也けり
冬寒み末の枯葉も落はてゝ木しのはかりたてる蘆かな
難波潟蘆の穗末に風ふけは立よる波の花かとそみる

遠方に家ゐやすらん難波かた蘆かり小舟しけくゆきかふ
よそにのみ三嶋の蘆のねな絶てかりにたにやは今（いイ）はとひくる

千鳥

志賀の浦の松吹風のさひしきに夕波千鳥たちゐなく也
月影の明石の（やイ）浦な漕行は千鳥しはなく明ぬこのよは
友千鳥むれて渚に渡る也沖のしらすに鹽やみつらん
夜なさむみ明石の浦の濱風にとわたる千鳥聲さはく也
夜くたちに千鳥しは鳴楸生る清き河原にかせやふくらん
東なるなさかの浦に鹽みちて有明の空に千鳥しはなく
橋立やよさのうら波よせてくる（くれはイ）曉かけてちとりなくなり
あら（なイ）しふくなしまか磯の濱千鳥岩うつ波にたちさはく也
大井川くたす筏におとろきてゐせきにきゐるちとりなくなり
風さむみ夜やふけぬらんしなか鳥ゐなの湊に千鳥しはなく
霧たちてわたせもみえぬ佐保川のしろへには夜はの千鳥なり鳬
沖津風吹上の濱の寒けれは冬の夜すから千とりなくなり
夜やさむき友や戀しきねてきけは佐保の川はらに千鳥鳴也
白波に聲打そへて濱千鳥磯のまに／＼たちゐなくなり
浦風に吹上の濱の濱千鳥波立くらしよはになくなり
浦つたふ千鳥の聲なしるへにてあまのとまやに旅ねしてけり

凍

ますらおか藻臥つか鮒ふしつけしかひやか下も氷しにけり
河こしのしはつみ車いかゝする氷のくさひ冬はたえせし
夜なさむみ川との氷あつけれは朝けの水なくみそわつらふ
山里の夜半のあらしの寒けれは細谷川そまつこほりける

波かくろいはまひまなくたるひして氷とちたる山川の水
諏訪の海の氷の上のかよひちは神のわたりてとくる也けり
しなかとりゐなのふしはら風寒てこやの池水氷しにけり
つらゝゐてまもる岩まのせきなれやよ(はイ)なへて堅くなり増る哉
山里は谷の下水つらゝゐて岩うつ波のをとたにもせす
鳰鳥はよかれにけらしなし鳥のは風のさなみをともせぬまて
冬ふかみ難波の舟はかよはしな蘆まのこほりとくへくもなし
氷してみな口とちしその日より筧にかけし水はたえにき
冬ふかみ氷やあつくとちつらん音たえにけり谷川の水
奥山の水上ふかくこほれはや落きし瀧の音もきこえす
水上にいくへの氷とちつらんなかれもやらぬたに(やまイ)川のみつ

水鳥

朝戸明てひとりかけ見る池水にいかなる鳥のむれてゐ(立イ)るらん
水鳥の玉藻の床のうき枕ふかき思ひはたれかまされる
水鳥のすたく汀のうす氷われても鳰のかつくなるかな
池水にむれゐる鳥の羽風には蘆まの氷寒やまさらん
終夜霜や置らん水鳥のはらふはをとのたえすきこゆる
谷川の岩間かくれのよとますはいつこか鴛の栖ならまし
なるみ瀉沖にむれゐるあちむらのすたく羽風のさはくなる哉
しほれ蘆のふし葉か下におさりする鴨のうきよな流てそふる
川風のこよひさゆれはうきれするかもの青はに霜や置らん
水鳥は霜のさ衣かさねてやさゆる蘆まのうきねをはする
もかみ川うきねはすれと水鳥の下の心はやすけくもなし
冬のよのつかはぬ鴛のうきね(おもひイ)には上毛の霜もとくる也けり
うらやまし沈むみくすも有物をいかてか鴛のうかふなるらん
池水にむれておりぬる水鳥の羽風に波やたちさはくらん
池水のうきねなからにいかにして鴛のつかひのはなれさる覧
水鳥の鴨のうきねのうきなから波の枕にいくよへぬらん

網代

武士の年のよるをもしらぬかな(してイ)網代にひをやかそへさるらん
作々名實やあふみの海の網代木に波とともにやひをのよる覧
田上の瀬々の網代にひをへつゝ我心さへよするなる(こゝろイ)かな
網代木に錦織かく田上やその杣山に木葉ちるらし
篝火のなからましかはひをのよる網代の程をいかてしらまし
たなかみやその村きみにあらなくに先網代木なきてそ恨むる
風ふけは田上川の網代木に峯のもみちもひをへてそよる
つかのまもつもる網代の木葉にてひをへてよらん程をしる哉
氷魚のよるたひにそ拂ふ田上やゐくらにかゝる網代木の布
ゆふたゝみ田上川の網代木のゐくらにひをもくらすころ哉
山風に木葉ふりしく宇治川の網代はひをのよるところ哉
かみな月うちの網代のひをよりも年のよるこそあはれ也けれ
水涙のもらて殘るとみえつるは網代にひをのよるにそ有ける
氷魚のよる川瀬にみゆる網代木はたつ白波の打にやあるらん
網代木に波のよる／＼宿りしてあやしくひをもくらしつる哉
ひまもなくしき浪かくる網代木をひをのよるとや人のみる覧

神樂

あまとつる神の心を(てイ)とるけふや庭火の煙雲とみゆらん
曉の星さへさえぬ榊葉の霜うち拂ふ袖のかさふり

賢木とりゆふしてあそふ冬のよは天の岩戸も明ぬへきかな
千はやふる神の心も庭火たくこよひのかくらうけさらめやは
終夜取榊葉に置霜のとけさらめやは神のこゝろも
神垣や庭火のまへに君か代を猶萬代といのるなるかな
庭火たく天の岩戸の神わさはあめたちから雄猶そ嬉しき
韓神に袖ふるほとは殿守の作のみやつこ御火白くたけ
ゆふかけていはふ社の神樂にも猶朝倉のおもしろきかな
しらにきて千種の枝に取かされうたへはあくる天の岩門
夜〔よもすからイ〕をさむみとる榊葉に置霜をしらゆふ花と人やみるらん
庭火にはとる榊葉に置霜もとけやしぬらん神の心も
廣前の庭火の光りあきらけくかなつる袖をみるそ嬉しき
榊葉やときはの枝にゆふしてゝ心とけてもあそふなるかな
榊葉にゆふしてかけて諸人のときはにのみもあそふへきかな
賢木とる庭火のまへに降雪をおもしろしとや神もみるらん

鷹　狩

かりくらし上毛の雪を〔もイ〕はらはねはしらふの鷹と人やみるらん
御狩する野中のこゐのしけゝれは空とる鷹のたかへりもせす
吹渡すひらのふゝきの寒くともひつきの御狩せてやまめやは
みかりすと楢のましはをふみしたき交野の里にけふも暮しつ
しら塗の鈴もゆらゝにいはせ野に合せてそみるましらふの鷹
降雪に友むれからすしろへにてをけともみえすましらふの鷹
やかたおのましろの鷹を引すへてうたのとたちを狩暮しつゝ
日影さす豊の明のみかりすとかたのゝをのにけふもくらしつ
御狩する交野の原に雪降はあはする鷹の鈴そきこゆる
やかたおのしらふの鷹を引すへてとたちのはらを狩暮しつる
やかたおの鷹手にすへて朝たては交野の原にきゝすなくなり
とやかへるたなれの鷹を手にすへてきゝす鳴なる交野へそ行
降雪に行衞もみえす箸鷹のおふさの鈴の音はかりして
雪降にしらふの鷹をあはせては鈴の音こそしるへ也けれ
御狩人ちかくなりゆく鈴の音を交野のきゝすいかゝきくらん
箸鷹のしるしの鈴のちかつけはかくれかねてやきゝすなくなる

炭　竈

年をへてつまきこりくへ炭竈に煙〔のイ〕もたえぬ大原の里
浦嶋のはこならねともすみかまは年のあくるをくゆる也けり
山ふかみ焼すみかまの煙こそやかて〔はイ〕雪けの雲となりけれ
大原やをのゝすみかま雪降て心ほそけにたつけむりかな
すみかまのそこ〔やイ〕ともみえすふる雪に道たえぬらんをのゝ里人
朝またき冬たつ雲とみえつるはまきの炭やく煙也けり
すみかまの煙ならねと世中を心ほそくもおもひたつかな
大原やをのゝすみかま雪ふれはたえぬ煙そしるへなりける
すみかまにたつ煙さへをの山は雪けの雲とみゆるなりけり
さひしさは冬こそまされ大原や焼すみかまの煙のみして
すみかまに薪こりたく夕暮はをのれけふたきをのゝ里人
小野山に煙たえせぬすみかまをむろのやしまと思ひける哉
すみかまのくちやあくらん小野山に煙のたかくたちのほる哉
深山木をやくすみかまにこりくへて煙たえせぬ大原のさと
四方山の冬のけしきになるまゝに小野のすみかま煙たちます
須磨の浦に鹽焼〓の煙かとみそまかへつる小野のすみかま

爐　火

埋火の下にこかるゝかひなしやきえもきえすも人のしられは

ほに出てまたおきなから埋火の舟ならねともこかれ社すれ

埋火の下にこかるゝ氣色こそ難面人にみせまほしけれ

いふ事もなき埋火をおこす哉冬のね覺の友しなけれは

山里にひとりぬるよは埋火も板まの風にふきおこされて

埋火のきえなんとのみ思ふ哉いきてくゆれとかひしなけれは

夜とゝもに下はこかるゝ埋火のうへつれなくて世をすくす哉

いかにせんはひの下なる埋火のうつもれてのみ消ぬへきみを

鶯のなかぬはかりそ埋火のきえせぬやとは春めきにけり

埋火は戀する人の心哉うへはつれなく下はこかるゝ

下はもえ上は難面埋火のこかれそあかす冬のよなく〳〵

人しれすしのふ心は埋火のうへは難面こゝちこそすれ

埋火のあたりに冬はまとゐしてむつかたりすることそ嬉しき

埋火の下の心をしらすしてきえもやするとおきゐてそみる

ね覺してかきおとろかす埋火そ冬の夜ふかき友には有ける

終夜上はつれなき埋火の下にはもえておもふとをしれ

除　夜

あすよりは春の始といはふへしけふ計こそことし也けれ

よしの川なかれてすくる年波にたちゐのかけも暮にける哉

何事をまつとはなしに明くれてことしもけふになりにける哉

はかなくてこよひになれる年月は我身にのみそ雪つもりける

門松をいとなみたつるそのほとに春明かたに夜やなりぬらん

花ゆへに春のまたれし昔こそ年のくれをもおしまさりけれ

千年とそ明ていのらんかくしつゝことしの冬も今宵はてぬる

こと玉のおほつかなさに岡見すとこすへなからも年を越哉

年暮て春はとなりになりにけり今宵はかりやへたてなるらん

月よめは十月にあまり二月の晦日になるはこよひ也けり

いつくにもおしみあかさぬ人はあらし今宵計の今年と思へは

春くるはまたれしものを老ぬれは今宵のあけんことそ悲しき

みつもゝちむそちつきぬる此よはゝ思へは年のつもる也けり

過ぬれは我身の老となる物を何ゆへあすの春をまつらん

はかなしや我身も殘りすくなきに何とて年の暮をいそくそ

心なる涙さへこそとゝまられことしはけふを限りとおもへは

戀十首

初　戀

眞菅よき笠のかりてのわさみのを打きてのみや戀渡るへき

思ひかねけふたてそむる錦木の千束もまたてあふよしも哉

行かよふ中人たてゝけふこそは思ふ心をほのめかしつれ

戀せしと誓ひてし身をいかにしてこはこりすまに思ひそむ覽

思ひあまりけふいひ出る池水のふかき心を人はしらなん

あしふきのこやの玉まゆいつのまにいとかく計くるしかる覽

星崎やあつたのかたのいさり火のほのもしりぬやおもふ心を

難波江のもにうつもるゝ玉かしはあらはれてたに人を戀はや

心こそ門出するよりまとひけれ逢をかきりとなれる戀路は

下にのみ戀わたりしを玉のをのみたれてけふそ人にしらるゝ

木のまよりひれ振袖をよそにみていかゝはすへき松浦さよ姫

池水のふかき心を年ふともいひ出さすはいかゝしらさん

けふこそははつかにみつれほともなく何と亂るゝ心なるらん

またしらぬ人を始てこふる哉思ふ心よ道しるへせよ
よそなから戀は色にもあらなくに心にふかく思ひそめてき
わりなしや思ふ心の色ならはこれそそれともみせましものを

不被知人戀

なしはもる山田のくろに置かひの下焦れする身とはしらすや
春くれは雪の下草したにのみもえ出る戀をしる人そなき
打たへて（とはイ）眺めたにせす戀すてふけしきを人にみせしと思へは
逢事はさこそなからめ人しれす戀すとたにもしらせてし哉
我戀は烏羽にかくことのはのうつさぬほとはしる人もなし
人しれす苦しかりけりかきあけてはたに戀する山かつのみは
いはねとも思ひそめてき錦木のはひさす色に出やしなまし
あさてほす東乙女のかや莚しきしのひてもすこすころ哉
人しれぬ戀をしすまの浦人はなきしほたれてすこす也けり
しらせはや新桑まゆのかきこもりいふせきまてにしのふ心を
波まより明石の沖をこく舟のほには出すもこひわたるかな
しのすゝき穗に出ぬ（のみこそイ）こひの苦しきは露けゝれ共しる人もなし
人しれぬ思ひをのみそますかゝみ見し人ありと人しるらめや
谷ふかみ木葉かくれを行水の下になかれていく世へぬらん
人しれぬ（れとイ）戀には身をもえそなけぬ留まらん名をせめて思へは（おしみイ）
しほるゝをしる人もなき袂哉これやしのふの岡のかけ草

不遇戀

思ひあまり人にとはゝやみなせ川むすはぬ水に袖はぬるやと
まくりて（いくイ）の袖にも戀のかくれぬは涙の色のしるき也けり
くり返しあまてる神の宮柱たてかふるまてあはぬ君かな
思ふことありその海のうつせ貝あはてやみぬる名をや殘さん
我戀は吉野の山の奥なれや思ひいれともあふ人もなし
よとゝもにあへの浦とは思へとも袖のみぬれてかひなかりけり
たゝらたてふけはまかれもわく物を戀にとけせぬ人や何なる
逢事は刀の刄をもあゆむかな人の心のあやふまれつゝ
うとむなよあはぬ思ひにくつされて影のことくになれる姿を
錦木の千束の數はたてゝしをなと逢事のいまたまたしき（すかなイ）
はゝきゝにあらぬ物ゆへ我妹子に逢ぬ戀して世をつくせとや
みそめてし日より袂の乾かれはいつをいつとかまたんとす覽
くろゝまもさためなき世に逢事をいつともしらて戀わたる哉
難面に思ひもこりて（こりてもイ）戀渡る我心をそ今はうらむる
徒にあはて年ふる戀にのみ朽ぬる袖をないかにせん
みそらゆく月よみ男ならなくにありとはみれとあはぬ君哉

初遇戀

八（三イ）年まて錦の紐を結はせてけふそはしめて心とけぬる
わくらはに錦の紐のとけぬれは裏なきものはよるのさころも
憂事をいかてしらせんと思ひしはあはぬかきりの心なりけり
さりともなあひなはとこそ思ひしにいかてやすまぬ心なる覽
播磨かたうらみてのみそ過しかとこよひとまりぬあふの松原
あはゝまつ恨みんとこそ思ひしかさてはつらさも忘られにけり
武藏野にわかしめゆひし若草をむすひそめつと人やしるらん
蘆のやのしつはた帶のかたむすひ（もイ）心やすくもうちとくるかな
幾年に我なりぬらんかはかりの思ひしことを君にかたらて
下紐のうちとけぬれはあひ染のこよひの衣うらなかりけり

みしま江のいりえにおふる白菅のしらぬ人をもあひみつる哉
錦木の千束にけふやなりぬらんねなくに夢にあひみつる哉
東路のむろのやしまに思ひたち今宵そこゆる相坂の關
いかにして打とけぬらんよとゝもにむすほゝれたる中の下紐
つれなさに思ひこりすとなけきしをけさは嬉しき心也けり
いかにせん雪の下水打とけて名になかれなん事を社おもへ

後朝戀

なくさむるかたこそなけれ梓弓かへるほとなきけさの戀しさ
筏士の小川をくたすみなれ棹明つるまゝに暮をまつかな
露をけはあさひのいてのしらま弓かへる侘しきけさにも有哉
かへるさの朝露しけき衣手はひろまゝつへき心地こそせね
戀しさに我身そはやくきえぬへき何朝露のおきてきつらん
明ぬれは末に玉まく梓弓かへる〳〵そきみはこひしき
碑やけふのせは布はつ〳〵にあひみてもなをあかぬけさ哉
とへかしな誰もさそとはしりぬ覽けさしもしぬる心よはさは
我妹子かあひにし戀のなくさまはけさゝへ物は思はさらまし
かへりつるけさの袂は露といひて暮まつ袖を何にかこたん
けさ迄は程やへたつる程へねと又こはいかにみまくほしきそ
明つらん空さへけさはつらき哉天の岩戸をいまそさせかし
いつのまに戀しかるらん白露のおきてきつるはあけほのゝ空
仙川のせゝのしら波よるなから明すは何かくれをまたまし
逢みての朝の戀にくらふれは待し月日は何ならぬかな
昨日まて歎しことは數ならてけさこそ物はおもふ也けれ

過不逢戀

待侘ぬかりにもこかし蘆のほのしのにをしなみ露もねられす
賤機に織てふ布のせはけれは常にもあはぬむねそくるしき
過て逢ぬ戀する人の又もあらはわれをたつねてとはまし物を
今さらに戀路にまよふ身をもちてなにわたりけんさのゝ舟橋
神もきけ思ひも出よ吳竹のたゝ一よとはいつかちきりし
日にそへて思ひ亂るゝいきのをは今一たひもみてやたえなん
又いかにむすひかくらん小車のにしきの紐はとけにしものを
山賤のあしやにかけるたかすかき伏にくしとも思ひけるかな
しのはらやふたり契しかねことをあはぬかうへに人に語らん
とけさりし昔よりけにくるしきはむすひたえさる賤はたの糸
ふえ竹のあなあさましの世中やありしやふしの限りなるらん
ありしよや浦嶋か子の箱ならん明にし日よりあふことのなき
人心かれてしりせは中々にあひそめ川もわたらさらまし
諸友になれにしものをはなち鳥行衛もしらぬ中そ悲しき
かけろふのほのみし人に逢みれは有にもあらす戀にけぬへし
逢坂の關は越にし東路をなといまさらに又まよふらん

旅戀

都にてかれにし人もには鳥のひなの空にはこひしかりけり
玉ほこの道行人もはつかしき戀はけしきのしるくやあるらん
立かへり駒のゆきかふほとならはたかはかりしき獨ねましや
戀しさに忍ひしかともはる〳〵と旅の空までたつねきにけり
戀しさをいもしるらめや旅ねして山の雫に袖ぬらすとは
宮古人戀しき旅の道なれは朝夕露にそほちてそゆく
まふしさすしつおの身にもたへかねてはと吹秋の聲たてつ也

慕ひくる戀のやつこの旅にても身のくせなれや夕とゝろきは
あけてのみ杉の板戸をたゝきかれ幾夜になりぬ我旅ねして
とへかしなさゆる霜夜に思ひかね袖おりかへす旅のまろねを
家にあるいもをこふとて霜枯の草の枕に目をさます哉
いつくにも戀はせしかと旅衣草のまくらは露けかりけり
もしほやく浦へにこよひ旅ねして我さへこかれ人をこひつゝ
もしほやく蜑のとまやに旅ねして波のよるひる人そ戀しき
逢ことはなきさの浦にやとりしてうらかなしかる戀もする哉
旅衣かへしてこよひきつれとも夢のしるしもなきそ悲しき

思

ひとりぬるわれにてしりぬ池水につかはぬ鴛のおもふ心を
涙川よをうき舟のなきさには思ひたえせぬつなてひく也
水引のあはせの糸の一すちにわけすよ君をおもふこゝろは
ほともなき身にあまりたる心地してをき所なき我思ひかな
なにしかは人をうらみん(きイ)ひたすらに心よはきにつける思ひを
もの思へはまのゝこすけのすか枕たえぬ涙に朽やしぬらん(そはてぬるイ)
ひくまのゝかやか下なる思ひ草またふた心なしとしらすや
むやひするかまのほなはのたえは社あまの(いはイ)はし舟行も別れめ
戀をのみ賤のをたまき(濃イ)くるしきはあはて年ふる(はかりイ)おもひ也けり
さらてたに絶ぬ思ひにふししつみ床くつるまて物をこそ思へ
わか思ひかたち(もイ)ありせは大空にをき所なくなりやしなまし
露けさはことはりなりや夏草の思ふことのみしけき身なれは
うき人にきかせにたにもきかせはや涙の底に思ひしつむと
時のまもめかれやはする日にそへてますみの色のあかぬ思ひに
うちも出ぬ中の思ひのくるしきは煙たゝねはしる人そなき
山川の下には常になかれつゝ思ひたえせぬ水のをとかな

片　思

とはれとも君をそたのむ鳰鳥のあしまのかひこかへるへくも
つらさのみ形見にそへてくれはとりあやなや袖の猶ぬるゝ(くイ)哉
いかにしてなをるはかりにこらしめん思ひにまけぬ心強さを
思へともわか心こそこゝろえれわれをおもはぬ人をおもへは
かたしきのかた思ひしてすまの浦にたるゝ藻鹽のからき頃哉
ひとりのみ我思ひしはみつ鹽のあはにましれる色かとよたゝ
雨ふれはあまのかくみにふくとまのもろ心にもあはぬ君かな
石見かたことかた磯による波のくたけて返るものとしらすや
しぬはかり物も思はしなさけなき人には身をもかふる物かは
いかにせん人のつらさを思ふとて我のみひとり身をくたく哉
あは糸をよりもあはせぬ玉のをのかた戀するも誰ゆへそそも
夢にたにあひもおもはぬ君ゆへによるへなけき明しつる哉
心こそ心をこらす(こゝろなイ)ものなれやおもはぬ人をなにおもふらん
心をもあはせぬ人をはし鷹のなとやすゝろ(しつろイ)に戀わたるらん
波よするあらき磯へのかたおもひひまなく袖をぬらすころ哉
われなから我ともいはしもとかしやおもはぬ人をおもふ心よ

恨

うしとのみ人の心をみしま江の入えのまこもさそみたるらん(おもひみたれてイ)
きさかたや(みてもイ)蜑のとまやのもしほ草うらむる事の絶すもある哉
恨むれはかひなかりけり今(みイ)はたゝ人を忘るゝことをしらはや
としへぬる人の心をうらめしと思ふにしもそれはなかれける

思ひかねよる打かへすから衣うらみおれともしる人そなき
中々にたのむはかりのことの葉を契らさりせは恨みさらまし
はふり子にみわすへさせて祈るとも君か心のわれによらめや
何ことにたのむとなみはあやかりていとふ涙のしのに散らん
さゝ波や志賀の浦風うらめしと思ふはかひもなきさ也けり
みるめかる蜑の苫屋のかち柱しはしうらみぬ時のまそなき
人しれすみるめもとむと近江なるしかのうらみて過るころ哉
みるまゝに人の心のありしにもあらすなるとの恨めしきかな
恨みすは忘れぬ人もありなまし思ひしらてそあるへかりける
うらめしき心のつまかから衣しほりもあへす袖のぬるらん
われからと思ひしれとも眞葛原かへす〳〵そうらみられける
われからと思ふものから三熊野の恨みてのみそすこしつる哉

雑二十首

暁

暁の時つくるなり庭鳥の聲うちかはしはねをならへて
まとろまてもの思ふやとの長夜は鳥のねはかり嬉しきはなし
山路にてそほちにけりな白露の曉おきの木々の雫に
草枕旅ねの人は心せよ有明の月もかたふきにけり
山里の筧の水はせはしきに猶有明の月そやとれる
曉になりにけらしな苫ふきの蘆かり小舟しまつたふ也
長月の有明の月のほの〳〵とはねかく鴫の聲きこゆなり
あけぬ也しはしまきれよかり衣たつれんほとに猶なつさはん
霜のたく曉かたに野を越て薪こりにとやま人そゆく
草枕鴫の羽音に夢さめて空にそあくるほとはしらるゝ
明ぬなり鴫のはねかき數ふれはかけのたれ尾の長きよなれと
曉になりにけらしな我門の苅田に鴫もなきてたつなり
さしくしの曉かたになりぬとや八聲の鳥もおとろかすらん
思ふこと有明の月の曉は心すみます物にそありける
明ぬ也夕つけ鳥のなにしおはゝ曉になくわかれせましや

松

鹽風にみとりの色はまされとも浦さひにけりすみよしの松
つくはねや白雲かゝる松山の千年のかけのなをしるきかな
枝たかみもゝさしのほる松なれは千年は雲のうへにてやみん
武隈の松のみとりはあら玉の年とゝもにやふかくなるらん
玉もかるいらこか崎のいはね松いく世までにか年のへぬらん
あら磯やいはねにたてるそなれ松波にしほれぬ時のまそなき
かれてより千年はしるしいはねふみかさなる山のみねの松原
みさこゐる磯まに生る松のねのせはしくみゆるよにもある哉
嶺つゝき松のこしけくみゆる哉これや千年の山路なるらん
覺束ないさいにしへのことゝはんあこやの松と物かたりして
宮木引人もすさめぬ松か枝は谷の底にて年をへにけり
住吉の松のみとりは神さひて千世のかけこそこゝにみえけれ
冬さむみ後にしほむといふなれと變らさりけり松のみとりは
常葉木のみとりはなへて變らねと風のしらへそ松はことなる
幾千世とかすもしられす住の江の神さひにける松の梢は
みるからに心もとけすいはしろの松をはたれか結ひをきけん

竹

呉竹の色（はイ）もかはらてみつかきの久しき世よりみとりなるかな
すゝしさにいく夜かねぬる呉竹の林は夏のふしとなりけり
木枯に園の河竹かたよりになひけと色はかはらさりけり
年をへておひそふ竹の枝しけみしけくそ千代の陰はみえける
冬籠色かはりてもみえぬかな竹のよことに雪はふるとも
嬉しくも千世をこめつゝうへ竹のねさす計になりにける哉
いにしへの七の賢き人もみな竹をかさしてとしそへにける
呉竹のうきふししけくなりにけりさのみはよもと思ひし物を
呉竹の生る籬の草なれははらひもあへす夕露そをく
鶯のねくらにしむるなよ竹はいつれの枝かふしとなるらん
ことし生の籬のもとの呉竹も秋はよなかくなりやしぬらん
呉竹のうかりしふしはわすられて此後（へきイ）の世を今はたのまん
わか友とわれそいふなる呉竹のうきふし繁き身ともなれゝは
木葉ちる折ふし毎にかはられはいくよをふへき竹のみとりそ
風ふけはなひく物からなよ竹のおもふふし／＼ありけなる哉
よゝふれと色もかはらぬ呉竹を人の心とおもはましかは

苔

佐保姫のあそふ所かおく山の青根か嶺のこけのさむしろ
ふかみとり岩ほかうへにむす苔や空にのほらぬ煙なるらん
日かけはふしけみか下に苔むして緑のふかき山のかひかな
かつらきやわたしもはてぬ物ゆへに久米の岩はし苔生（むし）にけり
雲かゝる青根か嶺の苔莚いくよへぬらんしる人そなき
昔よりあれたる宿も庭にしく苔の莚はふりせさりけり
ふむ人もなき庭の面に秋のよは苔莚にそ月はやとれる
苔生のけかしき藪（やしイ）の苔の上にあたら月をも宿しつる哉
年ふれは苔のみつらをゆひかけて岩の姿は神さひにけり
よこれ嶋下はに生るさかり苔露かゝられとかはくまもなし
おく山の岩れか上の苔莚たちゐる雲のあとたにもなし
白雲の立ゐる山の苔莚わか片敷の袖かとそおもふ
れもなくて岩ほの上にむす苔はかみをおほへる心地社すれ
おく山の岩れの松の陰にてや苔のみとりもときはなるらん
打ならす人（レイ）もなけれは君か代はかけしつゝみも苔生にけり
年ふれとあたにそみゆるれもさゝていかてか苔の岩に生らん

鶴

鶴の子のすまふ入えにあさたてはあまくもりする心地社すれ
澤ふかきなか子をおもふ蘆田鶴は聲も心も空にやあるらん
つなて引灘の小舟や入ぬらん難波のたつの浦わたりする
難波潟田鶴そなくなるこれやこのたみのゝ嶋の渡りなるらん
鳴海潟朝みつしほやたかゝらんあさりもせてそたつ鳴わたる
蜑の子か玉藻かりにや出ぬらんむらしか磯にたつ（ついイ）さはく也
故郷をわすれすきなくまな鶴はむかしの名をもなのりける哉
網引するみつの濱へにさはかれてあけをさゝのへたつ歸る也
君か代のためとむれゐるたつなれは千年をかねて遊ふ也けり
朝ひこやけさはうらゝにさしつ覽田面のたつの空にむれなく
いにしへ（古郷イ）を思ひいつるの悲しきはなけとも空にしる人そなき
まことにや蓬か嶋にかよふらん鶴にのるてふ人にとはゝや
澤にすむ鶴のなく聲いたつらに空にきこえぬなけきをそする

君か代のなかゐの浦にむれゐつゝともに千年を契りつる哉（ゐたつイ）
天津空（つはつイ）雲ゐにあそふまなつるをふりさけみつゝ齢へぬ（のとイ）へし
千年ふるたつのむれゐる池水は波のたつさへしつかなるかな

山

神さふるかつらき山の高けれはあさゐる雲のはるゝまそなき
柴車落くるほとに足引の山のたかさを空にしるかな
あさみとりかすみて渡る絶まよりみれともあかぬいもせ山哉
嵐吹木くれの雪をうちはらひけふ越ぬるやさやの中山
嶺たかきこしの尾山にいる人はしは車にてくたる也けり
駒なへてくれぬと人はいそけとも道そはるけき富士（こしイ）の柴山
夕附日さす夕くれに見渡せは雲そかゝれるをはつせの山
いくしほり越てか人にいはかれのこりしく山を歸りみるへき（かなイ）
うはそくは行ひすらしまきの立あら山中にまふしさしつゝ
東路やしらぬ境にやとりして雲ゐにみゆるつくは山哉
白雲の絕まにみゆる水とりのみかもの色の春の山のは
白露のかゝる旅ねもならはぬに深き山路に日はくれにけり
むは玉の黒髮山のいたゝきに雪もつもらはしらかとやみん
白雲のかゝる高根になるほとはいくよつもれる塵にか有らん
引つれてまとゐせんとやおもふとち春はまゆみの山に入らん
足柄の山のたうけにけふきてそ富士の高根の程はしらるゝ

河

みなはまきとこなめはしるあなし川隙こそなけれ波の白ゆふ
今よりはひのくま川に駒とめしかしらの雪のかけうつりけり
わきかへり岩こす波のたかけれは山ひゝかせる鈴香川かな
すみた川ゐせきにかゝる白波のたちかへるへき心ちこそせれ
舟もなく岩波たかきさかひ川水まさりなは人もかよはし
かまくらやみこしかたけに雪消てみなの瀬川に水まさるなり
岩ふるゝ水わきかへるみわ川の清き瀬波のをとのさやけさ
大井川（りのイ）みなはさかまく岩淵にたゝむ筏のすきかたのよや
桂川てる月影のやとる夜はもにすむ魚そ底にみえける
名に（あしイ）しおはゝあふくま川を渡りみん戀しき人の影やうつると
みなせ川おちくる水の岩ふれて折人なしになみそ花さく
濡きぬといふにつけてや流れけんあふくま川のなこそ惜けれ
よしのなる大川水のよそほひは代々にもさらに絕しとそ思ふ
淵瀬をもそことそしらぬはやたつのみなきり渡る河の流は
波たかく音にきゝつる音羽川けにすきまうき渡り也けり
いそけともわたりやられぬみなれ川見馴し人の影やとまると

野

霜枯の野原の淺茅むすひをかん又かへりこん道のしるへに
すかるふす野中の草やふかゝらん行かふ人の笠のみえぬは
濱風の吹上のをのゝ淺茅原波よるからに玉そちりける
秋の野を心のまゝに分行はをのかいろ〳〵さける花かな
梓弓いる野の草の深けれはあさ行人の袖そ露けき
みやき野のちゝの草葉をむすひをきて花みん程は絕す通はん
月きよみ明のゝ原の夕露にさゝめわけくる衣さぬれぬ
さま〳〵に心そとまるみやき野の花のいろ〳〵むしの聲々
みわたせはさかも枯野となりにけり今や小倉も紅葉ちるらん
旅人のゆくほとゝなき武藏野は草さへふかくなりにける哉
昔みしみち尋ぬれとなかりけりぬるてましりのゐなのふし原

宮城野の秋の萩原わけゆけは上葉の露に袖そぬれぬる
ともかくも人にいはての野へにきて千種の花をひとりみる哉
我せこかかりにのみくるあはつ野に鶉鳴也草かくれつゝ
身にしみておもほゆる哉霜かれの野道はさらに行もゆかれす
いにしへのふる野の道をたつねきて清水を猶もむすひつる哉

関

いそく道（身そイ）かたく關もりまもるともわれ計をはめさしたくへよ
相坂の關のせきもり出てみよ驛つたひの鈴きこゆなり
波の上に有明の月をみましやはすまの關やにやとらさりせは
足からの山のもみち葉散なへに淸見か關は秋風そふく
いもか家にくもの振舞しるからんとなみの關をけふ越（いイ）くれは
はる〳〵と尋ねきにけり東路にこれやなこその關ととふまて
遠つ道いそきてすきし關路には八聲の鳥を人そとなへし
いとゝしく都こひしき夕くれに波のせきもるすまのうらかせ
白川の關にや秋はとまるらんてる月影のすみわたるかな
白雲のよそにきゝしを陸奥の衣の關を來てそ越ぬる
なにしおはゝ勿來といふも我妹子に我てふこさはゆるせ關守
相坂は越にしものを今はたゝなこその關の名こそつらけれ
もる人もまたたえなくに川口の關のくきぬきはや朽にけり
月影の明石の浦をみわたせは心はすまの關にとまりぬ
こえぬより思ひ社やれ陸奥の名になかれたるしら川の關
戀わひて昨日もけふもこゆへきになこその關を誰かすへけん

橋

板倉の橋をはたれも渡れともいなおほせ鳥そすきかてにする
まきの板も苔むすはかりなりにけり幾世かへぬるせたの長橋
打わたすまきのいた橋朽にけりまれにも人のこはいかにせん
東路のはまなのはしのはし柱波はおれともまたてりけり
明かたになりやしぬらんたえ〳〵にまのゝつきはし人渡る也
けた朽て苔むしにけりをはた田の板田の沼にわたすたなはし
朝夕につたふ板田の橋なれはけたさへ朽てたちゐきにけり
泪をふむ心地こそすれ川霧の晴まもみえすたてるうち橋
朽にけり人もかよはす石上ふるのゝ澤にわたすまろはし
夜は暗しいもはた戀しをはたゝの板田の橋をいかゝふまゝし
今はみな橋柱さへ朽はてゝはまなはかりをきゝわたるかな
思ふこと橋柱にそかきつけて昔の人はくらゐましける
さゝかにのくもてにみゆる八橋をいかなる人か渡しそめけん
わりなしやわたりかたきは信濃なるきそちの橋の絕ま也けり
陸奥の朽木の橋も中絕てふみたに今はかよはさりけり

海路

かさはやの沖津鹽さひ高くともいたてにはしれむこの浦（ろイ）まて
おほしほや淡路のせとの吹わけ（あイ）にのほり下りのかたはかく寃
波のおるいらこか崎（くたイ）を出る舟は早こきわたせしまきもそする
淡路嶋繪嶋か磯にあさりするたなゝし小舟いくよへぬらん
いかはかり波をわけてすきぬらん都のかたの雲かくれゆく
おほみ舟ゐなのゝ沖のやしほちにかろ計そまかちしけぬく
こしの海あゆの風吹なこのうらに舟はとゝめよなみ枕せん
もとめ塚おまへにかゝる柴舟のきたけになりぬよる方をなみ
手もたゆく浦つたひしてこく舟は沖のなころをゝつる成へし
かけさかりゆらのと渡る柴舟のこきをくれたる歎きをそする

月影によもの嶋へを見渡せは驪もかなひぬ舟出せよ君
追風にいたてにはしれつくし舟しきなみの關せきと〻むとも
終夜おほ嶋あらしおろす也たかさこ舟は今そ出へき
漕舟の跡しなけれはもしほやく煙やみちのしるへなるらん
舟とめてみれともあかす松風に波よせかくる天のはしたて
風吹はいそきしかひもなきさにてこきもやられぬ蜑小舟かな

旅

都出ていくかといふにまとりすむうなての森に今夜きぬらん
またしらぬ旅の道にそ出にける野はらしのはら人にとひつ〻
出しより驛の數なか(かなイ)そふれはけふそはつか(さとイ)に草枕する
さよ中に思へはくるし陸奥のあさかのぬまに旅ねしにけり
思ひ出ぬ人のなき哉かやねかり袂露けき旅のね覺は
いさよひの月や我身をさそふらん旅の空にもゆく心かな
いく夜ねぬしら玉よするましら〻の濱松かねにまつは折しき
し長鳥ゐなのは山に旅ねしてよはのひかたにめをさ(めなそ・きそイ)ましつ〻
旅人の板間(ミイ)のあはぬあつまやに宿ることよひそあまそ〻きする
さすらふる我身にしあれは象潟や蜑の笘屋にあまた〻ひねぬ
初鴈の心空なる旅ねにはわか故郷そ夢にみえける
木下に旅ねしつへし白雲のしらぬ山路は夢に見えつ〻
くれぬさき山を出んと急くまにしほりをせても越にけるかな
古郷に心ひとつはと〻めをき(人イ)て草の枕をいくよむすひつ
道とをみ駒うちはやめ行旅は草の枕もむすひと〻めし
白雲のか〻る麓に旅ねして大空をこそ友となかむれ

別

かへりこんこともさためぬ別路は都のてふりおもひいたせよ
行末をまつへき身社老にけれ別は道の遠きのみかは
けふはさは立別るともたよりあらはありやなしやの情忘るな
立別はつかあまりに成にけりけふやなこその關をこゆらん
唐衣袖の別の悲しきにおもひたちけんことそくやしき
歸りきてみるへきみともたのまれはけふの別のあはれなる哉
とまるへき道にもあらぬ別ちはしたふ(おしむイ)心や關となるらん
わするなよ歸る山路に跡たえて日數は雪のふりつもるとも
あま人の玉もかりつむ舟なれと漕わかる〻は悲しかりけり
たまきはる命もしらす別ぬる人をまつへき身こそ老ぬれ
秋霧のたちわかれぬる君により晴ぬ思ひにまとひぬる哉
庭鳥のひなのわかれの悲しきに曉ことにねをやなくらん
かへりこんこと(みちイ)もおほれておもほえすけふの別をおしむ涙に
別路はせきもと〻めぬ涙かな行あふ坂の名をはたのめと
待ほ(はイ)とのいつともしらぬ別路にそふる扇の名をたのむ哉
思ひわひたつねゆかんと思へともしほりたにせぬ別路そうき

山家

霜枯の草のとさしのあたなれは賤の竹垣風もとまらす
山里はまれのほそ道跡たえて正木のかつらくる人もなし
霧こめて露のみしけき山里は袖をぬらさぬ夕くれそなき
山里はね覺の床のさひしきに絶すをとなふ瀧枕かな
ひくらしの聲計するしはのとは入日のさすにまかせてそみる
山かつのあしのやへかき八重葎ことはりなりや人のわけこぬ
眞柴かり垣ね(かこみイ)もしめぬ山里の葎の門はとさしやはする

木枯のけしきのみかは山里は鹿のなくねも身にはしみけり
雲かゝる山のたかねのあはらやは月のやとるそ嬉しかりける
たなつ物み園にまきついさ子とも外面の小田にくはひ拾はん
つま木こるかくれ家にする山里にいかてか月の尋(見れイ)ねきつらん
月いるとなけきし山にきてすめは猶西へゆくものにそ有ける
春きてもとふ人もなき山里に夜とゝもにこそさひしかりけれ
山里の柴おり／＼にたつ煙人まれ也と空にしるかな
とふ人もなき山里の淺茅生は心のまゝにしけりこそすれ
木葉のみ散積りぬるしはの庵は嶺のあらしにまかせてそみる

田家

にゐはりのそしろの門田植しより秋は閨こそさためさりけれ
稲妻の光りのまにもまとろまて山田もるやに夜をあかす哉
かこひなき柴の庵はかり染のいなはそ秋のまかき也ける
我妹子か柴苅ふけるひまをあらみ門田の庵に月そもりくる
小山田の稲葉の露にそほちつゝ人めもるみはくるしかりけり
かりの庵にあまやとりする時のまも山田もるとや人はみる覧
山田守なしれのひたははへたれといなおほせ鳥のきなく成哉
秋の田に紅葉ちりしける山里をこともおろかにおもひける哉
むれてゐる田中の宿のむらすゝめ我ひくひたにさはくなる哉
わかゝくる門田のひたに驚きていなおほせ鳥のたちや騷かん
こきたれて雨はふりきぬ我宿のいなしろ小田をかり亂るころ
ひたふるに山田の中に家ゐして(くイ)すたく小鹿をおとろかす哉
宿もせに朝毎稲をほすよりははてをゆひてそかくへかりける
いなしきのふせや(かくもイ)をみれは庭もせに門田(ひたすら小田イ)の稲は苅ほしてけり
かりそめと思ひしやとにひたはへて獨山田をもるみとそなる
小山田のいなはの露を打はらひかりそめふしないく世しつ覧

懷舊

なのゝえの柄しところの仙人のはかなき世には何かへりけん
埋木の下はくつれといにしへの花の心はわすれさりけり
思ひ出ることのみ身にはある物を何有明のあはれますらん
徒にすくる月日をかそふれは昔をしのふねこそなかるれ
末の世の人もみよとや岩代の野中の松をむすひおきけん
いつとても思ひてもなき世中になにと昔の戀しかるらん
朽にけりこれやなからの橋柱あはれむかしの跡にかりして
戀し共いはてそ思ふたまきはる立かへるへきむかしならねは
春の岡に登りて見けんたかとりは神の代ならぬ事をしそ思ふ
思ひ出て袂そほちぬ折そなき昔をしのふはなみたなりけり
老らくの影みるたひにますかゝみ猶昔こそこひしかりけれ
かそいろのすみしあれ(あらしイ)たる宿なれはあはれ昔そ戀しかりける
みし宿の庭は淺茅にあれにけりとなりのふえの音計して
日にそへてかしらの雪は積つゝふりにしかたそいとゝ戀しき
我心すきにしかたに立かへりふるの都そいまも戀しき
年月はたちかはれとも有上ふりにしかたをわすれやはする

夢

遠妻は野へのはつ草かりそめの夢のうちにも逢そ嬉しき
百年は花にやとりてすこしてき此世はてふの夢にそ有ける
中々に浮世は夢のなかりせはわするゝひまもあらましものを
わくらはに戀しき人に逢とみる嬉しき夢はさめすもあらなん
うたゝねの夢なかりせは別にし昔の人をまたみましやは
ね覺つゝこはいかにして嬉しきそ夢ははかなき物としる／＼

夢にみし人を現にえて後そ世もすなほにははや成にける

さゝかにのいとうかりけん身の程を思へは夢の心地こそすれ

かなふやと亀のますらにとはゝやな戀しき人を夢にみつるを

みる人も【のイ】あるかなきかに成行ははかなき世こそ夢には有けれ

宵のまに枕さためぬうたゝねの夢にゆめをもあはせつる哉

なかき夜の夢の中にてみる夢はいつれうつゝといかて定めん

うつゝにもまほろしの世と思ふ身に又夢をさへ何とみるらん

花園の胡蝶となるとみし夢はこはまほろしかうつゝとやせん

何にかはうつゝのうさも【をイ】なくさまん夢みる程のなき世也せは

はかなしとたれかいひけんさめぬまの夢は中々久しかりけり

無常

空蟬のはかなき世とはしりなから蓮をねかふ人はまれ也

世中をいかゝたのまんうたかたのあはれはかなき水のあは哉

みとり子の遊ふすさひにまはす火の空しき世をは有と頼まし

はかなきを思ひしらすはなけれ共あらましにのみ日を暮す哉

朝日まつ露はかりなる命もてなからへ思ふ人そはかなき

かけろふのほのめくよりもはかなきはかりの世頼む心也けり

世中は常にやはある岩代のをかへにたてる松をみるにも

飛鳥川うき木に積る淡雪の波たちくれはたのもしけなし

かけろふのあるかなきかの身ときけはいとゝ益々あたし世中

山のはに入ぬる月そ哀なるわれもさこそは世にはかくれめ

世中をなに歎くらん山川のうたかたためくるほとゝしらすや

夢よりもはかなくみゆる世中をなと驚きてそむかさるらん

なく露を我玉しるとしられはや【にイ】はかなき世をもいとはさる覽

消ぬまもえこそたのまね道芝のかゝれる露の我身と思へは

花のちりおつる木葉をみるにても世の常なさは思ひしられぬ

けふとても世をのとかには思はれとあすしらぬ身そ哀成ける

述懐

何をして翁さひけん朝ことに鏡のかけをかつとかめつゝ

風をまつ草葉の露をおほけなく蓮の上にやとれとそ思ふ

月みてもむなしき空にあまる迄君か千世へんことをしそ思ふ

身のうさはすきにしかたを思ふにもいま行末のことそ悲しき

なそやこの我身はこしの白山かかしらに雪のふりつもるかな

入月のなこりの空をなかむれは西に心はかゝるなりけり

隙過る駒よりもとき陽炎の玉きはるいそちの春に逢にける哉

俊頼

もかみ川　せゝの岩門　わきかへり　おもふ心は
おほかれと　行方もなく　せかれつゝ　底のみくつと
なることは　もにすむ虫の　われからと　思ひしらすは
なけれとも　いはてはえ社　なきさなる　かたわれ舟の
うつもれて　ひく人もなき　なけきすと　涙の立ゐに
あふけとも　むなしき空は　みとりにて　いふ事もなき
悲しさに　ねを【をのみ】なけは　からころも　おさふる袖も
くちはてぬ　何ことにかは　あはれとも　おもはん人に
あふみなる　打出の濱の　うちいてゝ　いふとも誰か
さゝかにの　いか様にても　かきつかん　事をはのきに
ふくかせの　はけしき比は【とチ】　しりなから　うはの空にも
【をしチ】おもふへき　あつさの杣に　宮木ひき　みかきか原に
せりつみし　昔をよそに　きゝしかと　わか身の上に
なりはてぬ　流石に御代の　はしめより　雲のうへには

かよへとも　難波のことも　ひさかたの　月のかつらの(しイ)
おられれは　うけらか花の　さきなから　ひらけぬ事の
いふせさに　四方の山へに　あくかれて　このもかのもに
たちましり　うつふし染の　あさころも　花の袂に
ぬきかへて　後の世とたに　おもへとも　思ふひと／＼
ほたしにて　行へきかたも　まとはれぬ　かゝる憂身の
つれもなく　へにける年を(はイ)　かそふれは　いつゝの十に
なりにけり　いま行末そ　いなつまの　光りのまにも
さためなし　たとへは獨り　なからへて　すきにし計り
すくすとも　夢にゆめみる　心地して　ひま行こまに
ことならし　更にもいはし　冬かれの　尾花か末の
露なれは　嵐をたにも　またすして　本の雫に
なりはてん　程をはいつと　しりてかは　暮にとたにも
たのむへき　かくのみ常に　あらそひて　猶故郷に
すみのえの　汐にたゝよふ　うつせかひ　うつし心も
うせはてゝ　有にもあらぬ　世中に　又何事を
みくまのゝ　浦のはまゆふ　かさねつゝ　憂にたへたる
ためしには　なるをの松の(られイ)　つれ／＼に(とイ)　徒ことを
かきつめて　哀しれらん　行末の　人たのめには
なのつから　忍はれぬへき　身なれとも　はかなき事も
雲鳥の　あやに叶はぬ　くせなれは　これもさ社は
みなしくり　朽葉か下に　うつもれめ　それにつけても
つの國の　いく田の森の　いくたひか(おしイ)　蜑のたくなは
くり返し　心にそはぬ　身をうらむらん

返歌

世中はうき身にそへる影なれや思ひすつれとはなれさりけり
いつわれをわかなてしこのこりゐて今は昔とひとり忍はん
哀しる人しなけれは夜とゝもに我思ふことをいはてやみぬる
唐國にしつみし人も我ことく三代まてあはぬなけきをはせし
今はたゝ西に心をかけ草の葉になく露を我身とそ思ふ
あきらけき世には嬉しくあひ乍うれへ晴せぬ身をいかにせん
たくひなく人數ならぬ身のうさを思ひもしらてすこす也けり
いくめくりすこしきぬらん春秋にそむる心をうつろはせつゝ(しイ)
むつことをいはても年のへぬる哉老をともなふ人しなけれは

祝詞

君か代の數にくらへは何ならしちひろの濱のまさこなりとも
神山のふもとをとむるみたらしの岩うつ波や萬代のかす
松陰に宮作せる住吉のひさしき代をは君そみるへき
君か代はなかゐの浦にひまもなくむれゐるたつの齢なるへし
君かためゆはたのきぬ(おイ)をとりしてゝ神をそまつる萬代まてに
君か代はちひきの石をくたきつゝ萬代ことにとれとつきせし
いさなきのみことの時に定めてき我君ひさに世にまさんとは
君か代は松のうはゝになく露の積りてよもの海となるまて
にきはゝぬ民のかまともあらしかし國榮へたる君か御代には
底きよみなかれ絶せぬ佐保川のせきりの波や萬代のかす
奥山のやつおの椿君か代にいくたひ陰をかへんとすらん
住吉の神にそいのる松の葉の數しらぬまて君か御千代を
君かへんよはひのほとをかそふれは八百萬代を千たひ也けり
君か代はなかるゝ川の底清みちたひすむへきかけそみえける
何事につけてか君をいのらまし八百萬代もかきり有けり
枝しけきしら玉椿君か代にいくかへりかはおひかはるへき

群書類從卷第百六十八

和歌部二十三百首二

永久四年百首 永久四年十二月廿日 號次郎百首

題

春

元日　餘寒　春日　春曙　遊糸
賭弓　春日祭　石清水臨時祭　志賀山越
稻荷詣　未發花　紅梅　桃花　落花
躑躅　雉　殘鶯　蛙

夏

賀茂祭　夏衣　夏草　瞿麥　扇
樹陰　避暑　夏虫　鵜川　夏獵
蟬　雷

秋

殘暑　晩立　秋風　七夕後朝　八月十五夜
九月九日　秋夜　曉月　嵐　稻妻
粮田　草香　蔦　柞　秋山
松虫　鈴虫　蛬

冬

霙　初雪　野行幸　落葉　五節
椎柴　薪　衾　鴛鴦　貢調
佛名　舊年立春

戀

忍戀　隔一夜戀　經月戀　經年戀　隔遠路戀
不見書戀　且見戀　寢覺戀　待人戀　別戀

雜

雲　星　出湯　石　水海
原　瀧　池　故鄉　寺
社　榊　桂　小篠　洋
元服　賀　七夜　仙宮　唐人
王昭君　妓女　老人　泉郎　船
隣　笛　箏　蜘蛛　猿

作者

従三位行左京大夫源朝臣顕仲
前越前守正四位下藤原朝臣仲實
前木工頭従四位下源朝臣俊頼
散位従五位下源朝臣忠房
従五位下行皇后宮小進源朝臣兼昌
常陸肥後守定成女本名肥後　皇后宮女房
大進同定成女　六條院女房

春

元日　　顕仲

旅人のかりの篠やに年暮てけふ二とせに成にけるかな　　仲實

萬世の春のはしめのけふしよりつかへまつらん年にあひつゝ　　俊頼

夫けふよりは我なもちゐの増かゝみ嬉しき影なうつしてそみる　　忠房

打なひきけふ立かへる年なみのよらぬみきはゝあらしとそ思　　兼昌

冬の夜な旅の空にてあかしてや都に春の今朝き(はくイ)たるらん　　常陸

夫よき事なますみの鏡けふ見(さ)れはかれて千とせの影そうかへる(つれイ)　　大進

諸人の花見ん春のはしめとやけふは思ひのひらけぬる哉

餘寒

谷深みさこそは雪の消さらめいかにさゆるそ春の山里
春きては岩まの凍とくへきに冬にもこえてさゆる比かな
衣手のうすきや春のせきならん我身(つイ)はいとゝしみこほりつゝ
夫雪きえぬ青葉の山のあなつゝら春はくれとも猶さむきかな
春風の猶さむしろなかされはや旅のよ床はさえも社すれ
春なれと雪ふる年の猶ちかみ小野のすみかまけさや焼らん
雪消ぬみ山かくれは猶さえて春のしるしも見えすそ有ける

春日

夫思へとも昔の秋の悲しさはつきせさりける春の日くらし
百千鳥囀る春はうら／＼となれともわか身くもりつゝのみ
数ならぬ宿には春のこさりせは暮ぬなさへはなけかさらまし
から衣春たちきぬと聞しより日のうら／＼と成にけるかな
春の日は仙山遠き里なれや暮まつほとの心もとなき
花もまたにほはすみゆる山里に春の日くらしなかめなそする
わたつ海のうら／＼照す春の日に舩もみるめなかりやほす覧

春曙

天の戸をほのかにあけてこやの野の霞と共に立そやすらふ
浅みとりかす(に)める空の曙を又身(と)にしめて誰か見るらむ
いなのめは石のかけ橋ほの／＼もしはし休らへまはならす共
憂事のまきるゝとしもなけれともなかめられけり春の曙
大山端の横雲はかりわたりつゝみとりに見ゆる明ほのゝ空
梓弓はるかにみれは山のはに横雲わたるあけほのゝ空
花さかり心も空にあくかれておきゐてそみる春の明ほの

遊糸

うちみたれすめるみ空の遊糸に天の河せの水をひかはや
雲雀あかる二月の日に遊糸にみとりの空もまかひみえけり
さゝかにのくもらぬ空のいとなれは遊ふけしきの絶すも有哉
しつけくて吹くる風もなき空に亂てあそふいとそみえける
雲晴て天つみ空に遊糸のよる〳〵はなと見えぬなるらん
はる〳〵と淺緑なる大空にあそふ糸をやなかめくらさん
つれ〳〵とのとけき空に遊ふいとを我より外に人やみるらん

賭弓

春立はあつさのま弓引つれてみかきのうちにまとゐをそする
春されはかた矢たはさみともねうち我かち弓の數そかさなる
引ならすたつかの弓の矢をはやみともれにまとの鳴かはす哉
九重のうちに射てふあつさ弓はるかに雲のほかに聞かな
梓弓ひき〳〵たれもいのるらんかたわくけふの雲の上人
霞しく春の始の梓弓もろ矢しつるそ嬉しかりける
あつさ弓春の日くらし諸人のよに入までも遊ひつるかな

春日祭

春ことにけふいのられて春日山松のさかへもいやまさり也
天の下たえすそ君はさかゆへき御笠の山の神をまつれは
二月のはつさるなれや春日山みれとよむまていたゝきまつる
まつらるゝ神の御前の乙女子も花もひもとく春日山かな
こまなへて御笠の山へ行人はあめの下いのるつかひなりけり
けふ祭るしるしにとてやその神は三笠とゝもに天くたりけん
御笠山ふりにし代より天の下なひきてまつるけふにそ有ける

石清水臨時祭

山水のなかれにうかふ松か枝にかさしの藤をかけてこそ見れ
男山かさしの花も春なれはをみの衣もかはるけふかな
たつ程のかされかはらけなかりせはおほえて淀の渡せましや
春ことにすみもまさなん石清水かさしの花のかけさやにみん
おとこ山峯の櫻に諸人のかさしの花をたくへてそ見る
君か代ののとけき影をくみ見れは流たえせぬ石清水哉
石清水かさしの花のさしなからいのる心はくみてしるらん

志賀山越

またしらぬ人と共にそこえにけるしかの山路の跡もなけれと
春霞たなひく山の山の井に影見るさへもあさましき哉
志賀の山心はなにそ越つれと霞にさへもまよひぬるかな
家つとにおれる櫻をちらさしといそきそしつるしかの山こえ
立わたる峯のかすみはもろともにしかの山越するにや有らん
峯つゝき花に心のとまりつゝゆきもやられすしかの山こえ
中空にゆきもやられすおほつかな霞はれせぬしかの山越

稲荷詣

いなり山しるしの杉をたつねきてあまねく人のかさすけふ哉
稲荷山しるしの杉を春霞たなひきつるゝけふにも有哉
いなりにも思ふ心のかなはすはしるしの杉のおられましやは
稲荷坂さかしくとまる心かなみな杉のはをふけるいほりに
をそくとく宿をいてつゝいなり坂のほれはくたる都人かな
いなり坂しるしの杉のさしはへて思ふ心をねきそかけつる
いなり山しるしの杉を尋つゝゆふかけてこそ歸りきにけれ

未發花

しら雲と見ゆ計咲け山櫻さらは入日にまかひしもせし
夫春くれと野への霞につゝまれて花のゑまひのくちひるもみす
めくむより景色ことなる花なれはかれても枝のなつかしき哉
おほつかなぬひのとちめやまたからんまたほころひぬ山櫻哉
さかぬよりかれてそいとふ花の木の枝吹おろな春の山かせ
何ゆへか春をはまちし山櫻こゝろもとなくにほふはなかな
花と見て尋きつれは吉の山人はかりけるみれのしらくも

紅梅

くれなゐの衣の袖に梅花あかぬ色とや折かさぬらん
紅に咲かさなれる梅のはな新羅にやりて何にならへん
紅の梅かえになく鶯の聲の色さへことにもあるかな
匂ふかもなつかしきかなわきもこか衣に染る紅のむめ
見る人のあくしなけれは梅花うすくれなゐの色もかへらす
たくひなきかほりにそへていとゝしく紅ふかく匂ふ梅かな
色もかもめつらしきかな紅にいまさきそむるむめの初花

桃花

かきこしに枝さしかはすもゝの花誰も千とせを重てやみん
薄くこくけふ咲あへる桃のはな醉をすゝむる色にそ有ける
誰か又見て忍ふらん山かつのそのふのもゝの花のよそめを
咲にけりいはゐの水に影みえて三千とせになる桃の初花
春霞立かくさなん道のへのかきねに咲るひめもゝのはな
わかそのゝ桃のはつ花咲にけり三千世すくへき春のしるしに
三千世へん春をしれとて桃のはな君かそのにそ先咲にける

落花

夫谷川になかれて花のうすまくは岩ねか瀧の波かとそ見る
夫まこち吹花のあたりの風下は時そともなき雪そ降ける
風吹は梢もいその心地して花のしらゆふなみそこえける
櫻花ちりぬる宿の庭の面は見にこし人の跡たにもなし
木のもとに散つもりたる花をこそ庭櫻とはいふへかりけれ
庭もせに散しく花の白けれは雪ふるとしの心地こそすれ
殘なくなそやゝるらん櫻花おしまれぬ身もあれは有世に

躑躅

夫しつのおかかりてはやせるをかつゝし若枝に花の咲にける哉
夫紅のふりての色の岡つゝしいもかま袖にあやまたれつゝ
夫百たらぬやそすみ坂のしらつゝししらしな人は見にこそる共
風ふかて波のたゝるやと見るまてにいそつゝきさゝ、白つゝし哉
夫入日さすをちの岡邊のをかつゝし夕紅の色そまされる
夫東路やつゝしの岡をさて見れはあか裳のすそに色そかよへる
岡つゝし折てをゆかん花の色のあかきそたのみ日は暮ぬとも

雉

夫あはれしや燒野にもれし峯のわの村草かくれ雉なくなり
夫御狩するかたのゝみのを今朝見れはひとつ松ねにきゝす鳴也
いとゝしくをのかありかへやるいぬを愛にありとや鳥の鳴覧
雉なくのへを霞はつゝめともほろゝともれて聲そ聞ゆる
狩人はこゑをたつぬとしられはや霞の中にきゝす鳴らん
あふ事のかたのゝ雉妻戀にむへほろ〳〵とたちゐ啼らん
鈴の音や近く成らん御狩のにかくろへかれて雉なくなり

殘鶯

設しく春くれ竹の風の音に聲うちそへて鶯そなく

つれ〳〵を何につけてか慰めんもゝさえつりの鳥なかりせは

けふさらは鳴つくしてよ鶯の春の後には誰かしのはん

中々に春くれかたの鶯ははつ音よりけにめつらしき哉

をそ櫻にほふ梢の鶯は初こゑよりもめつらしきかな

殘なく春の日かすは過ぬれと猶うくひすそたえす音なふ

なくさむる方やなからん花もちり春もくれ行鶯のこゑ

蛙

夫 たかせ舟のほる堀江の水をあさみ草かくれにてかはつ鳴也

夫 春深みさやまの池のねぬ繩のくるしけもなく蛙なくなり

夫 時しもあれみなふち山を朝行はこのもかのもにかはつ啼也

夫 谷川のあさき瀨ことにみかくれて妻よふ蛙聲きこゆなり

夫 いか計いふせかるらんこやの池のみくさのもとに集かはつは

暮て行春をおしとや諸聲に井手の蛙のすたくなるらん

春ふかみ蛙のすたく聲す也ゆきてやみましゐての山吹

夏

賀茂祭

夫 めつらしく年に一度あふひをや神も嬉しと見そなはすらん

夫 白雲の八重のをちなる國人もけふのみあれにあはぬあらしな

夫 引つれてわたる景色をきてみれはいつきそ神のかさり成ける

かけて行人はかはれと年をへておなし色なるあふひくさ哉

宮人のかさしてかへるあふひ草紫野まてみとりなるかな

人よりもたのみそかくる葵草わきても神のしるしみせ南

年をへてけふかさしくる葵草神にたのみをかくるしるしか

夏衣

ぬきをうすみなれる衣のいかなれは袂に風を猶へたつらん

夫 時といへはまかれもとくる夏なれや猶ちきれかし蟬のは衣

夫 夏衣きみか御けしのあやなれや裏なきさへそしたにきまうき

夫 五月雨にぬれにけらしな夏衣ひとへひかきにかけてほさなん

夏たてとしるしも見えす衣川いつも舟よる浦しなけれは

身にちかくなるとはすれと夏衣ひとへにのみはえこそ頼まれ

いつしかと花のたもとをぬきかへてうすき衣のうらめしき哉

夏草

しつのめかをはき摘てし春の野に夏は草根を分てやとりぬ

夫 くたらのゝちかやか下のひめ百合のね所人にしられぬそうき

ひさかりはかきれかくれに立よらて誰を戀草もえたてるらん

夏山のすそのゝ草やふかゝらん分くる人の袖の露けき

夏くさはしけりにけりなやく〳〵と春みし野への道まとふ迄

見わたせはむかひの岡の夏くさをたかかふ駒の爲にかるらん

故鄕のしつけき庭は夏草のところえかほにしける成けり

瞿麥

山かつのかきはなれともなてしこは變らぬ色を盡してそさく

とこなつの是にしく花なかりけりまかきに咲る大和なてしこ

夫 今朝も又いさ見にゆかんさゆりはに枝さしかはすやまと撫子

石竹の花さくやとにいかにしてふしよき竹をませにゆはまし

おほつかなからたてしこなこゝ迄にたれかわたして植初けん
露はらひおる人もなきふる里に獨のみぬるとこなつの花
よそふるも猶なつかしみ見ることに哀つきせぬ撫子の花

扇

常よりも身にもしむかな夕去の君にあふきの風のけしきは
ふりつみし雪に心のかよへはやあふきの風の涼しかるらん
神々に心なかさなちかふともきゝひらきてそ扇なるへき
末ひろく七ほねにてはる扇やつれにけりなもとの姿に
手なるれと扇そつらき我せこかますみの色をかくすと思へは
とにかくに袂すゝしく成行は扇の風に秋やたつらむ
てなれける主はしられと紫のあふきの風のなつかしきかな

樹陰

道のへの木の下水を結ひつゝ夕かけ待そ久しかりける
夏の日もやすの河原の柳かけ吹こす風は下そ涼しき
秋もまたたちこぬさきに衣手のもりの下にはほのめきにけり
すゝしさのおいその杜の下なれと夏てふ事そわすられにける
夏河の岸の柳の葉をしけみ波もこかけによるにそ有ける
思ふとちこのもかのもにむれゐつゝ夏は木陰そ立うかりける
東路のまた行末ははるけきにけふも木陰に日をくらしつゝ

避暑

聞にさへ涼しく成ぬ若松のもりの梢のかせのしらへは
大原やおほろの水に行ふれは夏はをちなる物にそ有ける
水はよしあたりもしみゝ吹すくる風さへさゆる玉の井の里
すゝむとて暖のふせやを出つれは程なく汗の入にける哉
玉たれのみすさはく迄風ふけはよとのゝうちも涼しかりけり
おりたちてし水の里にすみつれは夏をは外に聞渡るかな
夏くれはふせやか下にやすらひて清水の里にすみつきぬへし

夏虫

ともし火の光に集く夏むしのそむく命をよそにやはみる
いかにしてもゆる中にも入ぬらん思に身をもかふる虫哉
燈に入夏むしのはかなさを身にたとへてもあかしつるかな
夏むしは思ひにしつむ世中にうきなからふる身をいかにせん
草むらにすむ夏虫は去年の秋くちし下葉のなるにや有らむ
露の命はかなくみゆる夏虫のたれを思に身をこかす覽
何ことをいとかくはかり夏虫の思ひあまりてみをこかすらん

鵜川

うふれおほく下す時しも瀨川にやなくつれして鮎子さはしる
おちくたる鵜舟のかゝりあかけれは夜川の底も澄まさりけり
篝火のほかけに見れはますらおは袂いとなく鮎子波らし
さ夜すからあゆふす河に篝火の影と共にもうかひつるかな
うかひ舟つなてくたすと見えつるは急きてたくるたなは成見
かひのほる鵜舟の縄のしけゝれは瀬ふしの鮎の行かたやなき
大井川うふれにともす篝火のかゝるせにあふ鮎そはかなき

夏獵

夏のたつおきのはすりの風の音にふすのゝ鹿は今やおくらん
夏草のしけみにかくるせこ縄にもるゝ男鹿にあひはつれつゝ
夏の野におちくる鹿を待かけてあふにあふ共みゆるせこかな

夏かりのせこかいろ野に立鹿は秋よりさきにねをや鳴らん
れらひするしつおかさまを小男鹿の一村草と見てやよるらん
夏草のしけみを分てかりくれはかくれもあへぬ鹿のむらとも
常ならぬかりのこの世はせこかいる夏のゝ鹿の心ち社すれ

蟬

山河の岩越波に打そへて谷ひゝく也蟬のもろこゑ
夫東路やけさたちくれは蟬の聲高師の山に今そ鳴なる
うつ蟬のいてかたくても過すかないかて此世に跡をとゝめん
袖かくろならのしつ枝に啼蟬の聲はたかくも聞ゆなるかな
夏山のならのひろ葉にかくろへてこのもかのもに鳴蟬の聲
深山へを獨こゆれは遠近の道しるへなるせみの聲哉
聲たてゝいかに鳴らんうつせみの我身からとは思ひしらすや

竈

眞木のやの心ちこそすれ柴の戸をいかて水鶏のかくたゝく覧
もしもやと思なからにこたふれ（なれ）はくせと水鶏の人はかるなり
夫心からたけたの里にふしそめて幾夜くゐなにはかられぬらん
たゝくともさやはなるへき柴の戸はときけはよはの水鶏也覧
水鶏ゆへあけてくやしき妻戸かな浦嶋か子のはこならなくに
おほつかなうはの空にや契けんいつくともなくたゝく竈は
夏の日のたそかれ時におほつかなたゝく竈の聲はかりして

秋

殘暑

ひとへなる蟬のは衣秋くれは今いくへをかかさねても見ん
秋立しそのよの空は涼しくて猶六月のけしきなるかな
夫殘さては風ひやかなる暮も有をあつれ（に）しめらひむつかしのよや
初秋のまた涼しくもあらぬ間はあつさもなくて夏や過けん
かたみにはあつさ計を殘しをきて秋にもあはて夏はいぬめり
秋かせの荻のはすくる音はしてまた衣手のあつくも有哉
白露とあらそひなからけふも父（猶イ）扇はえこそをかれさりけれ

晩立

夕立やくものさはきに風はやみ露をとゝむる草のはそなき
ゆふ立やたらちねならんぬれかほも猶なつかしき女郎花かな
ゆふたちはきりにきるとも梓弓いにいてさへはくれすも有哉
夫朝日山さしてきたれと夕立にかつく袂はひるよしもなし
夕たちにをちの溝河まさりつゝふらぬ里まて流きにけり
故郷をたつぬる道にかきくらし村雲さはくゆふ立の空
かき曇空もとゝろになる神の物おそろしき此ゆふへかな

秋風

秋のよの礒の音を聞からにうちつけなれや風そしむなる
思へともうきことしけき秋風は身にしむ計悲しかりけり
秋きては忍ひなあへそと思へはや風をとつれて暮かゝる覧
色見えて身にもしむ哉すかるなくこはきか原の秋の夕風
眞葛原もみちの色のあか月にうら悲しかる風の音かな
うらふれてかされぬ袖は秋かせの立につけてそ物は悲しき
ありやとも人はとはれと秋風の荻の上葉に先そ音なふ

七夕後朝

衣手のうきつにぬれて歸かなあさ吹風もなみたてなくに

ひこ星のいは枕してさぬるよは霧たちこめよ明はあくとも
彦星はあめのなしての八重霧に道ふみまとへ又やかへると
うち別袖ふるたにもみるへきを何へたつらんあまの河霧
朝風に河浪さはけ一夜つま玉ゆらたにも立かへるへく
七夕のあかぬ別を思やる我衣手はつゆけかりけり
天川今朝は淵せもしらしかしせきとめかたくあかぬ涙に

八月十五夜

むすふ手の水にやとれる光をそこよひはいとゝ望月とみる
すみのほる光のきよき秋しまれしなへうらふれ月を見る哉
望月の駒の毛つけをあふ坂の杉間の影にあはせてそみる
月かけも秋の日數をかそへてやこよひもなかにてりまさる覽
もちつきの山のは出るよそほひにかれても光る秋の空かな
秋の夜の月は海よりいつれはやしほとゝもには滿わたるらん
いとはきの葉分の露の數々によるともみえすてらす月影

九月九日

人のみな命はるかに長月と聞につけてそけふは嬉しき
けふことに菊を薬とする人は千とせのなかは過といふ也
散を見はしほめるかほか花なれはなつ共菊のしるしあらめや
幾へともいさ白菊をえこそみれ綿きせなから手折朝は
長月の九日までにふくみたるとをかの菊の花ひらけなん
おる菊の露にぬれぬるけふよりや千年の秋に逢んとすらん
老はてゝ露のしるしもなき身には猶や折てん長月の菊

秋夜

身のうさを思ひあかせは草枕いとゝ露けき秋のよな〳〵
丸寐する長月のよの久しさに鴫なきぬとてたのまれもせす
秋のよのとりの初音はつれもなき人まちし夜の心地社すれ
明かたき秋のよな〳〵幾度か窓うつ雨にめをさますらん
秋のよはなかゐの浦による浪のかへす〳〵そねさめられける
秋のよを明かたしとは獨ねの旅の空にそおもひしらるゝ
虫の音もちゝにみたるゝ秋のよの哀をいかゝいひつくすへき

曉月

ことはりや見るほともなく入ぬめり夜深く出る山端の月
いくとせを過しきぬらん秋のよの有明の月を我友にして
有明の月のけしきも侘しきに見せはや物を思ふさかりは
長月の廿日の月と諸ともにねやへもいらてあかしつるかな
岩まゆくいさらをかはのせはしきにわれてやとれる有明の月
有明の月の光を友にしてまたふみなれぬ山路にそいる
かれのをとにおとろかされて西へ行月の光をなかめつる哉

嵐

袖かはす人もなき身をいかにせむ夜寒の里に嵐吹なり
くる人もなきあはらやの柴の戸は峯の嵐にまかせてそみる
吹まよふ嵐の音や侘人の涙の玉のをともなるらむ
さもこそはみねの嵐のあらからめあなはしたなの眞の板戸や
秋深み木々の紅葉のちるまゝに峯よはり行山颪のかせ
都山おろす嵐のはけしきに柴の戸ほそも明ぬころかな
よしの山みねの嵐のはけしさにさゝの庵は露もたまらす

稻妻

夏かりのせこかいろ野に立鹿は秋よりさきにねをや鳴らん
れらひするしつおかさまを小男鹿の一村草と見てやよるらん
夏草のしけみを分てかりくれはかくれもあへぬ鹿のむらとも
常ならぬかりのこの世はせこかいろ夏のゝ鹿の心ち社すれ

蟬

山河の岩越波に打そへて谷ひゝく也蟬のもろこゑ
東路やけさたちくれは蟬の聲高師の山に今そ鳴なる
うつ蟬のいてかたくても過すかないかて此世に跡をとゝめん
袖かくろならのしつ枝に啼蟬の聲はたかくも聞ゆなるかな
夏山のならのひろ葉にかくろへてこのもかのもに鳴蟬の聲
深山へを獨こゆれは遠近の道しるへなるせみの聲哉
聲たてゝいかに鳴らんうつせみの我身からとは思ひしらすや

水鷄

眞木のやの心ちこそすれ柴の戸をいかて水鷄のかくたゝく覧
もしもやと思なからにこたふれはくせと水鷄の人はかるなり
心からたけたの里にふしそめて幾夜くゐなにはかられぬらん
たゝくともさやはなるへき柴の戸はときけはよはの水鷄也皃
水鷄ゆへあけてくやしき妻戸かな浦嶋か子のはこならなくに
おほつかなうはの空にや契けんいつくともなくたゝく水鷄は
夏の日のたそかれ時におほつかなたゝく水鷄の聲はかりして

秋

殘暑

ひとへなる蟬のは衣秋くれは今いくへをかかさねても見ん
秋立しそのよの空は涼しくて猶六月のけしきなるかな
穐さては風ひやかなる暮も有をあつれしめらひむつかしのよや
初秋のまた涼しくもあらぬ間はあつさもなくて夏や過けん
かたみにはあつさ計を殘しをきて秋にもあはて夏はいぬめり
秋かせの荻のはすくる音はしてまた衣手のあつくも有哉
白露とあらそひなからけふも又扇はえこそをかれさりけれ

晩立

夕立やくものさはきに風はやみ露をとゝむる草のはそなき
ゆふ立やたらちねならんぬれかほも猶なつかしき女郎花かな
ゆふたちはきりにきるとも梓弓いにいてさへはくれすも有哉
朝日山さしてきたれと夕立にかつく袂はひるよしもなし
夕たちにをちの溝河まさりつゝふらぬ里まて流きにけり
故郷をたつぬる道にかきくらし村雲さはくゆふ立の空
かき曇空もとゝろになる神の物おそろしき此ゆふへかな

秋風

秋のよの礎の音を聞からにうちつけなれや風そしむなる
思へともうきこととしけき秋風は身にしむ計悲しかりけり
秋きては忍ひなあへそと思へはや風をとつれて暮かゝる覧
色見えて身にもしむ哉すかるなくこはきか原の秋の夕風
眞葛原もみちの色のあか月にうら悲しかる風の音かな
うらふれてかされぬ袖は秋かせの立につけてそ物は悲しき
ありやとも人はとはれと秋風の荻の上葉に先そ音なふ

七夕後朝

衣手のうきつにぬれて歸かなあさ吹風もなみたてなくに

ひこ星のいは枕してさぬるよは霧たちこめよ明はおくとも
彦星はあめのなしての八重霧に道ふみまとへ又やかへると
うち別袖ふるたにもみるへきを何へたつらんあまの河霧
朝風に河浪さはけ一夜つま玉ゆらたにも立かへるへく
七夕のあかぬ別を思やる我衣手はつゆけかりけり
天川今朝は淵せもしらしかしせきとめかたくあかぬ涙に

八月十五夜

むすふ手の水にやとれる光をそこよひはいとゝ望月とみる
すみのほる光のきよき秋しまれしなへうらふれ月を見る哉
望月の駒の毛つけをあふ坂の杉間の影にあはせてそみる
月かけも秋の日数をかそへてやこよひもなかにてりまさる覧
もちつきの山のは出るよそほひにかれても光る秋の空かな
秋の夜の月は海よりいつれはやしほとゝもには満わたるらん
いとはきの葉分の露の数々によるともみえすてらす月影

九月九日

人のみな命はるかに長月と聞につけてそけふは嬉しき
けふことに菊を薬とする人は千とせのなかは過といふ也
散を見はしほめるかほか花なれはなつ共菊のしるしあらめや
幾へともいさ白菊をえこそみれ綿きせなから手折朝は
長月の九日までにふくみたるとをかの菊の花ひらけなん
おる菊の露にぬれぬるけふよりや千年の秋に逢んとすらん
老はてゝ露のしるしもなき身には猶や折てん長月の菊

秋夜

身のうさを思ひあかせは草枕いとゝ露けき秋のよな／＼
丸寝する長月のよの久しさは鴫なきぬとてたのまれもせす
秋のよのとりの初音はつれもなき人まちし夜の心地社すれ
明かたき秋のよな／＼幾度か窓うつ雨にめをさますらん
秋のよはなかゐの浦による浪のかへす／＼それさめられける
秋のよを明かたしとは獨ねの旅の空にそおもひしらるゝ
虫の音もちゝにみたるゝ秋のよの哀をいかゝいひつくすへき

暁月

ことはりや見るほともなく入ぬめり夜深く出る山端の月
いくとせを過しきぬらん秋のよの有明の月を我友にして
有明の月のけしきも侘しきに見せはや物を思ふさかりは
長月の廿日の月と諸ともにねやへもいらてあかしつるかな
岩まゆくいさらをかはのせはしきにわれてやとれる有明の月
有明の月の光を友にしてまたふみなれぬ山路にそいる
かれのをとにおとろかされて西へ行月の光をなかめつる哉

嵐

袖かはす人もなき身をいかにせむ夜寒の里に嵐吹なり
くる人もなきあはらやの柴の戸は峯の嵐にまかせてそみる
吹まよふ嵐の音や侘人の涙の玉のをともなるらむ
さもこそはみねの嵐のあらからめあなはしたなの槇の板戸や
秋深み木々の紅葉のちるまゝに峯よはり行山颪のかせ
嶺山おろす嵐のはけしきに柴の戸ほそも明ぬころかな
よしの山みねの嵐のはけしさにさゝの庵は露もたまらす

稲妻

はかなしや田中の里は稲妻の程なきかけをたのめ(みイ)てそふる
秋の夜のいなはの露に稲妻の光をやとす程は我身か
めもかれすまほる山田の(もイ)稲妻の光にふれてたゝならす見ゆ
夫世中のはかなき(の間イ)程にくらふれは猶いなつまも久しかりけり
夫かつらきや木かけにひかる稲妻を山伏のうつ火かとこそ見れ
里となみ山田のいほはいなつまの光のもるを友と見るかな(こそみれイ)
夜もすから山田の庵は稲妻の光をのみやともし火にする

稂田

夫谷深みそしろの狭(田夫)井にいほりして稀にそたてる稂田(ほ夫)の稲
夫そしろたのわさたかりての稂いれほのさら〳〵に秋とみゆ覧
よしさらは生るひつちのかしけつゝ物にもならて霜枯れとや
ひたかけぬおくてとやみんよそ人は室のかり田におふる稂を
いなしきやそともの小田にふす鴫のかくれぬはかり稂生に鳬
見わたせは山田の稂ひこはへてほに出る程に成にけるかな
かりはてゝもる人もなき小山田におふる稂のあるは有かは

草香

峯にお(退)へは村鳥おちく草の香あさきすそのそともやたはさめ
雲間(往)よりさえ(來)たる月を軒ちかくかはの淀みにうつしてそみる
夫いくさ(こイ)くさのかふ心やつきぬ覧今のはり道石ふますとて
夫春よりはもえ出しかと草香かは秋風ににほふ成けり
夫秋の野の花分行はくさ〳〵の香うつりぬらん我衣てに
夫我袖に草の香うつる秋の野の旅れの床はなつかしきかな
夫藤はかま匂ふあたりはおひいつる草の香のみ(めつら夫)なつかしき哉

蔦

み山木の色かへぬ枝もみえぬまてかゝれる蔦は紅葉しにけり
田豆の木にはひおほはれる蔦にしも時しり顔に紅葉しにけり
契ありてはひかゝるとも見ゆる哉つたや梢のいもせなるらん
はふ蔦のなき世なりせは松かえにかゝる紅葉の色をみましや
夫そなれ松枝に錦のかゝれるは木つたふつたの紅葉なりけり
山里のむくらのかきにはふつたの色にて秋の深をそしる
秋霧の龍田のもみち色ふかく時雨そめてやはひもさすらん

柞

山里のあらしにまよふ柞原たもとにかけて見るそ嬉しき
柞原露のしらはひさしつれは時雨の雨そうは染はする
夫はくゝみし梢さひしく成ぬらん柞の杜のちり行みれは
夫いはゝやないはたのもりの柞原へたつるきりは立ものくやと
片岡のをふしましりに生しける柞の小枝初もみちせり
うすくこきおなし梢の柞原わきて時雨の降にやあるらん
薄くこく木々のこすゑは見ゆれとも柞の色の身にもしむ哉

秋山

夫都人きても見よかし時雨つゝうつろふ山の秋のけしきを
まこ(かイ)も色の青葉の山も秋くれは露の雫に下紅葉せり
都にて誰にかたらん紅葉する龍田の山の峯のけしきを
行やらて秋の山路に暮ぬとも下てる峯の紅葉やはなき
いくそたひうしとか人にみえつらん月待出る秋の山のは
夫もみち葉のくれなゐ深き秋山に心を染て思ひぬるかな
夫をの山に朝立鹿も聲たてゝ秋の哀はしのはさりけり

松　虫

たのめつゝこぬつらさにそ終夜今や〳〵と松虫のこゑ
夫 松むしの葎の下に聲するは野原の風や夜寒なるらん
夫 夕されは野へもや物を思ふらん松虫鳴て露しめりけり（つゝイ）
夫 ときは山麓の野へに年をへていつもかはらぬ松むしの聲
夕去は萩の下葉やくらからん月まつむしの聲きこゆ也
暮にとは誰かたのめし身をつめは人まつ虫を哀とそおもふ
獨ゐてなかむる秋の夕暮はおなし心に松むしそなく

鈴　虫

鈴虫の聲をすゝかと聞からに草とる鷹そおもひてらるゝ
夫 東路の不破の關や（なる夫）のすゝむしをむまやにふると思ひける哉
數ならてふりぬることを鈴むしと鳴かはしてもあかしつる哉
時雨ふり色かはり行淺茅生に哀なるかなすゝむしの聲
御狩のになく鈴むしをはしたかの草とりて行音かとそ聞
秋をへてかはらさりけりあをによしふるき都の鈴虫の聲
あさちふになく鈴虫の聲きけはふりにし方そいとゝ戀しき

蛬

露すかる小篠か下のきり〳〵す亂てかゝる音をやなくらん
野風のみさひしき旅の草枕やかてゆひめに蛬なく
鳴かへせ秋にをくるゝ蛬暮なは聲のよはるのみかは
獨すむよもきか宿に秋きては蛬こそともになきけれ
秋のゝにやとりをすれは蛬かたしく袖のしたになく也
露むすふ草の枕の程なきに所えてなくきり〳〵すかな
ねくたれのかみの中なるきり〳〵すかしかましくも亂れ鳴哉

冬

霙

夫 夕去は雪ふるさとの柴のや（庵は夫　室イ）はしつくにてこそみそれとはしれ
あら〻山ゆきけの空に成ぬれはかいつ（海津）の里に霙ふりつゝ
夫 みそれにははなたの袂かへるとも我遠つまを見てこそゆかめ
夫 ひまをあらみ竹のすかきの下さえてよな〳〵降は霙なりけり
夫 夕暮のみそれにしみやとけぬらんたるひつたひに雫落なり
冬さむみ風もとまらぬ山里にいとゝみそれそふり増りける
あめの下ふるとはすれとはかなきは庭にたまらぬ霙成けり

初　雪

さらぬたに人もとひこぬ山里にあやにくなれやけさの初雪
都人先こは見せん山里の庭の苔ちにふれるはつゆき
めつらしき花の都の初雪を九重にさへふらせてそ見る
冬きぬと聞つるまゝにいちしるくいなしの原にふれる初雪
夫 はつみゆき降にけらしなあらち山こしの旅人そりにのる迄
霜かれの草にやつるゝ古郷はけさ初雪のめつらしきかな
めもはるに花かとそ見る霜かれの草木もわかすふれる初雪

野行幸

御狩野の草のおはなのなひく迄羽風はけしきましらふのたか
あかねさす御狩の小野にたつきゝす空とる鷹にあはせつる哉
紫の御かりはゆゝしましろなるくちの羽かひに雪ちるはひて
空とらぬ鷹もあらしな御かりのに雲の上人あはすと思へは
あはせつるましろの鷹も心あらは御こしちかくて空にとら南
冬ふかき野への御幸のけふしもあれ白ふの鷹をすへてける哉

はしたかも今日の御幸に心ありてふるまふ鈴の音そことなる

落葉

宿にしく錦を見れは嬉しくてさすかに木のはちるはおしまる
紅葉は夜はの嵐のしく庭は物（くつイ）忘せて朝きよめすな
はけしさのみ山颪はてもなきにいかて木のはをこき散すらん
夫散しけるしつはた山の紅葉は苔路にをれる錦とそみる
相坂のかけひの水になかるゝは音羽の山の紅葉なりけり
ぬれ色の錦を庭にしくものは時雨にきほふ紅葉成けり
紅葉はのちる木のもとに宿かりて旅ねの床に錦をそしく

五節

乙女子か雲の上にて袖ふれは日かけにまかふ天のは衣
夫乙女子か袖ふりそめし小忌衣豐のあかりにたえせさりけり
夫日かけさすをみのあかひも打とけて立まふ人をもてはやす也（かなイ）
ふみも見ぬ雲の梯外（よそ）にのみ天つをとめを聞わたる哉
夫もろ人の遊ふなるかな乙女子かかさみの裾のなかき夜すから
日影さす豐のあかりにみつる哉我すへらきの千世のかさしを
夫曇なき豐の明に見つるかな天つ乙女の舞のすかたを

椎柴

夫降雪もをやめやをやめをの山に椎柴かるはしはしはかりそ
いつとなく葉かへぬ山の椎柴に人の心をなすよゝもかな
夫夏そひくうなかみ山のしゐしはにかし鳥なきつ夕あさりして
おひたては椎の眞柴もなりつ也たとふるかたもなき我身かな
時雨つゝ吹山風に椎柴の枝はなひけと色はかはらす
冬さむみ霜はをけとも椎柴のときはの色はあせすも有かな
夫くらゐ山峯の椎柴としふともうつろふ色はあらしとそ思ふ

薪

眞柴かるかりはのをのに雪ふりてつま木になつむ遠の里人
夫奥山のならひとなれはあなしけの雪よりさきに薪（冬木夫）こりつむ
枯はてゝもき木となりし昔よりたきすてられん日をそ數ふる
こりつみしほたなかりせは冬深き片山里にいかてすまゝし
折くふる柴はさま〳〵みゆれとも煙はおなし（ひとつイ）色にこそたて
み山柴（木を）をのかかまとにとりくへてあさけ夕けの煙たつめ（なイ）り
しつのおかこりつむ薪我や（かイ）くと誰ゆへもゆる思ひなるらん

衾

冬さむみ霜さゆる夜は明ぬれとあさの衾そぬかれさりける
夫あせいらはうれたくせこは思はしや人は（風）たふるなまたら小衾
君こはとはにふの小屋の床の上にあさて小衾ひきて社をれ
夫きたれ（りイ夫）とも薄紅のあつふすま色によりせはさむからましを
夫閨の上にあられたはしる夜半なれと妹と衾はさえすそ有ける
荒はてゝむなしき床の形見にはふるき衾のむつましきかな
かされゝはさむけかりけり冬のよに獨ふすまは風もとまらす

鴛鴦

をし鳥のつたふいはれに涙かけてうきぬ沈ぬ身をそ恨る
夜をさむみ岩波（かつく）たかき山（さイ）河につかはぬをしのすたく成かな
をし鳥（から）のすたくいはれのうす氷けさやうは毛にとちかさぬ覧

冬さむみはたれ霜ふるさ夜川につかはぬをしの聲そ悲しき

山川に友なきをしはかけをみて一つかひある心地すらしも

夫みさひゐぬ鏡の池に住をしはみつからかけをならへてそみる

夫よとゝもに思ふ事なきをし鳥やかけとならひの池にすむらん

貢調

夫あさつまやはたさす駒に聲たてゝせたの長橋引わたす也

夫長殿の常陸の御藏開あけよけふ御調物おさめみつへく

夫御調物にゐくはまゆのいとをもてくる手もたゆく供へつる哉

御調物君か御世には吉野川よし心みよたえやしけると

夫笛竹のつかひはいつかこちくらんあなまち遠の道のあひたや

皇の民やすらけくおさむれはひまなくはこふ御調物哉

いなしきや民のいとなく道もせに盡せすはこふみつき物かな

佛名

ことのはに三世の佛の名をかけてつくれる罪は露もとゝめし

夫年のうちに積れる罪も消ぬらん三世の佛の御名をとなへて

夫かつけつる綿ひきかけよ小夜過てむろへ歸らん背中かくして

そこはくの佛の御なをみなきけは殘れる罪もあらしとそ思ふ

さ夜更て今そ法の師出ぬらん雲の上人名のりすらしも

人わたす三世の佛の名をきけは昔の罪も今や消らん

かひなくて月日はふれと年くれて佛の御名を聞そ嬉しき

舊年立春

夫年すくる山へなこめそ朝霞さこそは春とともにたつとも

あらたまのとしに二たひ春たては老のかすのみ

そはりつゝ　なきむかし社　戀しけれ　あはれ我きみ
ましゝとき　たつのみ顔に　ちかつきて　てる日の光り
身をてらし　うれしき事を　あさゆふの　ま袖の内に
つゝみても　春は柳の　まゆひらけ　花の袂も
ほころひて　喜ひのみそ　しけりける　夏のはしめの
しらかされ　たちきる儘に　ほとゝきす　はなたち花に
きなきては　五月の玉を　ときちらし　秋の初かせ
時をつけ　星あひの空を　見しほとに　峯の月かけ
木かくれて　嵐もそらに　雲をいたみ　谷のゆふ霧
むせひあひて　我らか中は　しくれつゝ　袖のつらゝも
むすほゝれ　いやかたきれる　庭なれや　かしらの霜も
はらひあへす　いかにとし月　つもるらん　むかしの藥
けかされと　さすかに命　しなれねは　たゝ大空を
あふきつゝ　身をしる雨に　おほゝれて　朽木の山の
そま人に　なり行身をは　いかにせん　けなはけなくて
あは雪の　あるかなきかの　世にもふる哉

反歌

夫一とせに春は二度立ぬれと老木の花はいかゝさくへき

夫淡雪もまたふる年にたなひけは北まとはせる霞とそみる

夫谷の戸を出すとなけや鶯はとしもあけぬに春はきにけり

とゝむるにとゝまらさりし春なれと待にはきけり年の内にも

あつまやの軒のたるひのうすらくに雪かき分て春や立らん

年のうちに春立くれはうちつけに雪けの空を霞とそみえ

戀

忍戀

物思ふといはぬ計は忍れと(しのふともイ)いかゝはすへき袖のしつくを

夫 おく山の草かくれなるはたつもりしられぬ戀にやまふ(まよふイ)比哉

思出は心はかりにかよはして衣のくひにことなもらしそ

包かね袖より玉のちる時は忍ふとしもや人は見るらん

忍ふともかゝる涙にから衣あらはれぬへき心ちこそすれ

しらしかしいひしいてねはかく計忍る戀に身をこかすとは

人しれすはれくるかたもなき物は忍る戀の煙なりけり

隔一夜戀

待わひてこよひはかりのまろふしに幾度我は(かイ)ねさめしつらん

さむしろに衣かたしきわきもこか獨やぬらんそはさくりつゝ

笛竹のあなわつらはし一夜をもこぬをつらさの節になせとや

あはてぬる一よ計をへたつるになとよることにねのなかる覽

しら浪にゆらされてくるより竹の一よもねゝは戀しかりけり

たちまちにかは(へイ)りしもせしから衣一よはかりに袖のぬるらむ

吳竹の一よはかりを隔つれはおきふしやすきいやはねらるゝ

經月戀

あはぬ夜の數やは積るいかなれはたちぬる月といふは苦しき

衣手も中にはしはしなかさりき月をへたつる君やなに也

かき絕て三月に成ぬこれやさは心つくしのかとてなるらん

あひみての後も五月をいむとてやみそかにたにも音せさる覽

夫仲實 かちそむるしかまのみそのかれはてゝあひみて過し神無月哉

衣手もくちはてぬへしあふことの月をへたてゝとはぬ恨に

三日月のいつるをみれは君にあはてみそか餘りに成にける哉

經年戀

まてといはんこと社今は賴まれね挑のみ去年も過し(はイ)身なれは

立別いくらひさゝもなけれともあはても年の過にけるかな

年越ぬさのみはまたししなか鳥いなのみそ川すましとすらん

もとかしと七夕つめや思ふらんあはぬ年なきをのかならひに

あふ事を年きりしたる我身かな花さきかたき物ならなくに

いかにせむあはて年さへこえぬるに忘ぬこひの心なかさを

立かはる春の霞そうらめしきあひみぬ年をへたつと思へは

隔遠路戀

こひしなていきの松原いきたりとつけたにやらぬ道の遙けさ

白雲の八重なる山はかさぬとも心は空にかよへとをつま

夫 すくせ山なといなむやの關をしもへたてゝ人にねをなかす覽

はる／＼と思ひやれとも朝夕にゆかぬ心のくるしきやなそ

都人戀しきまてに音せぬはなこその(をイ)關にさはるにやあらん

我戀は心つくしの道とをみ行めくりてもいつか逢へき

思ひあまりゆけははるけき玉ほこの道の空にもまとふ比哉

不見書戀

覺束なきそちの橋は年ふれとかけてそ我はふみ見さりける(つイ)

かつらきやくめの岩橋ふみみれと渡りかたしと空にしり(しるかなイ)つゝ

夫 いさや又ふみも見られすともすれはとたえの橋の後めたさに

いかゝせんさのゝ舟橋(さのみ)やはふみたにみしと人のいふへき

夫 わきも子にあふみなりせはさりと我(もゝ夫)ふみも見てまし轟の橋

逢事のとたえかちにも成行かふみたにかよへまの丶つき橋
ふみつくる跡も見えれは濱千鳥たちゐる浦もかひなかりけり

且見戀

見ても猶あかぬ心のつきせれは戀しきことそかはらさりける
風吹は礒うつ波の立かへりみれともあかぬ君にもあるかな
ひえの山その大嶽はかくれれと猶みつのみはなかれてそふる
かつみれと覺束なきをなからへはつらくやならんと思ふ心か
きおひつるおふちの駒の先立てかつみる人も戀しかりけり
かつ見れとあかぬ戀哉心さしふかき契や結ひをきけん
いかにせむあさかの沼の淺ましやかつみる人にあかぬ心は

寢覺戀

打ふさて思ひあかさむ中々にねさむるたひにくるしかりけり
戀わふる人たし夢にあふとみるねさめくるしき小夜の床かな
淺ましやねさめてみれはあともなし夢成けりな袖はひつるも
わすれすと人やは夜半におとろかす何とてしつる寢覺成らん
夢にさへ涙せきあへぬ身にしあれはねても覺ても濡る袖かな
うきしつみ身のをき所なき物はねさめの戀の枕なりけり
思ふことなくさむはかりかたらはやねさめの床の枕つとへに

待人戀

いつはりの契り計にまつら山まつらんとたに君はしらしな
今こむとたのめし人のなかりせはねて有明の月もみましや
いつとなくこぬみのはまに人まつと漂ふ波のたゝぬ日そなき
住吉の松とは人のしられはや涙うちたえてきしもせさらん
ひねもすにくれまち／＼て暮ぬれは夜もすから又人を社まて
風さへもおとろかすかなたのますはまたて中々ねなまし物を
たのめしはさしもあらしに味氣なく人まつ風の身にもしむ哉

別戀

明かたの袖のけしきの露けさに道のしつくは思ひやらなん
いつかたとゆくゑもしらぬ別ちにいかにさきたつなみた成覽
さいのくまはなつ日暮は別るともしつの砌にあはさらめやは
別行人にもそはぬ涙さへとまらぬたひの道にもあるかな
いもか家の門に關守すへてしかけさ別行我とまるかに
別にし人を戀ちにまよふ哉いつをあひみん時そともなく
別行人をおしむにあらそひて先たつものは涙なりけり

雜

雲

たかまとの山に八重たつ白雲は空にたなひく心ち社すれ
まちかくてめなれし身にもありふれは遠さかり行峯の白雲
くちなしの色にたなひくうき雲を雪けの空と誰か見さらん
白雲は雨やみて社歸りけれ花そめならはかゝらましやは
富士の山おりゐる雲は立のほる煙のやかてなるにや有らん
吹風にたゝよふ空のうき雲をいつまてよその物とかはみん
紫の色やかよふと大空にうかへる雲のむつましきかな

星

雪とのみかしらは成ていたゝきし星をよそめにみるそ悲しき
日くるれは星をいたゝくかみにしも拂ひもあへすをける露哉
時つとりなかれ雲ゐにとゝろきて星の林にうつもれぬらん
夕つゝのなとてまたきに入ぬらんねよてふ鐘の音もせなくに

ひこほしの心も空に初秋の七日のよなや戀しかるらむ
我ひとりかまくら山な越行は星月夜こそうれしかりけれ
天つ空夕のほしのよそにても戀しき人なみるよしもかな

出　湯

夜と共にしたに燒火はなけれ共嶋根のみゆはさむるよもなし
ましらゝのはまの走湯浦さひて今はみゆきのかけもうつらす
御熊のゝゆこりのまろなさす棹の拾ひ行らんかくていとなし
歎きのみありまの山にいつるゆのからくて世にもふる我身哉
わたつうみはゝるけき物ないかにして有まの山にしほゆ出覧
世の人の戀のやまひの藥とや七くりのゆのわきかへるらむ
うき事も思さましてふる物ななとやいて湯の湧かへるらん

石

波たてゝかくと計はきこゆれとかへるも見えすおきのしら石
たのめ猶河せの砂としふりてまこふの石とならん世までに
石はさもたてける人の心さへかたかと有てみえもするかな
おしからてなけもやられぬ我身こそ千ひきの石の類ひ成けれ
君か代の數にしとらはうちのほるさほの川原の石もたらしな
おく山の人もかよはぬ谷河にせゝの岩橋たれわたしけむ
いかにして水の下なるさゝれ石の中の思ひのきえせさるらん

水　海

近江かた磯のはま山なる涙に舟出やすらんみつのうら人
さゝ波や小松に立て見渡はみほのみさきにたつむれて行
夕附日えかたの浦のいりましに雲すはへしてみのもすゝけぬ
あふみの海みちくるしほもなき物なたれから崎といひ始けむ
色々の袖もかはるかから衣うちてのはまの涙なきよせそ
鳰の海はみるめもおひぬ浦にてやむへかつきする海人なかり兒
戀わふる人にあふみの海といへは海松はおひぬ物にそ有ける

原

谷おろしの風しやまれは夜と共におきつか原にくぬき涙たつ
春のうちは霞の中にみえしかときりも立けりあなやきの原
霧ないたみまのゝ萩原時雨して雫に袖なおとろかしつる
名にしおはゝ虎やふすらん東路に有といふなるもろこしか原
あさちふの露にうは毛やそほつらんあしたの原に鶉なく也
枝ことにいくその千世なちきるらんその神世よりいきの松原
道となみ日も夕暮に成ぬれはその原まてとさして社ゆけ

瀧

水上にいかなるまゆなくりけれは絕せさるらん瀧の白糸
梢より落くる瀧のしろかみはよにひさにへて成にや有覧
たなはたのなりなかしたる布なれや空より落る瀧のけしきは
かちまけなたれかは見けん年なへて同し程なる布引の瀧
名に立ぬみ山かくれの瀧なれと流は里の人にしられぬ
山たかみ落くる瀧のしら糸なむすふ雫に玉そこほるゝ
谷川やおちくるたきの白糸な水のあやにはなるにや有覧

池

汀には立もよられぬ山かつのかけはつかしき清住のいけ
冬さむみにほ鳥すたく原の池も世にむすほゝる氷しにけり

世にわひてなみたちまちにすくなれとあその御池にぬさ奉る
いせならはひかことそとや思はまし山と成てふみまさかの池
吹風にみくさかたよる池水はなかはくもれる鏡なりけり
すへらきのなか井の池は水すみて長閑に千世の影そみえける
くみてしる人もあらしな思ふ事いはれの池のいひし出れは

故郷

八重葎へたてつゝふる故郷にいつくそとたにとふ人もなし
さしなからまたなのゝえはくちなくに笆も庭もあらぬ里哉
たかやとゝしられと悲し故郷のほとは垣ねにみえしわたれは
よとゝもにまさり顔なき身にしあれは故郷人にみえまうき哉
さほとのゝさかゆるみれはかけふれて古郷と社覺えさりけれ
葎はひ蓬か杣とあれはてゝふりにし里は人かけもせす
蓬分尋そきつる故郷は花たちはなの香をしるへにて

寺

谷深み跡たに見えぬ山寺は筧の水の行にてそしる
つくゝとすきもゆくかな山寺に入相のかねの聲計して
始なき罪のつもりのかなしさをぬかの聲々くときつる哉
やとをいては尋てゆかむ清水寺名にたかはすは住やとまると
有爲の世は今日か明日の鐘のをと哀いつまてきかんとす覧
木のはちり鹿鳴秋の山寺は入相のかねの音そさひしき
法の聲入相のかねにひゝきあひて哀つきせぬふかき山寺

社

杉村にしめ引かけてうち人のひかる計にみかく玉かき
千早振いつもの杜にみわすへてねきそかけたる紅葉ちらすな
いのること奈良の社をこうゝと事あはせよく口はしるなり
神かきや三室の山のこくれにも見えまかはぬはあけの玉垣
つかねつゝたてならへたるあしやさは三輪の社のしるし成覽
たのみては久しくなりぬいそのかみふるの社の心のちきりな
ゆふたすきかけてたのめと我ためはねき事きかぬ社成けり

榊

ゆふしてやかけつゝ祈ることのはは榊か枝にしけくなるらん
霜をけと色もかはらぬ榊はは昔か千とせのかさしなりけり
さか木葉を神の三室とあかむれはゆふつけ鳥のねくら成けり
神世より色もかはらぬ榊ははさかへときはにゝほふ成けり
いこま山手向は是や木のもとにいはくらうちて榊たてたり
萬代の色もかはらぬためしには神なひ山のさかきをそとる
千早振神のしめさす榊はのさか行御世にあふそうれしき

桂

天原いつ時雨して秋のよの月のかつらもあかくなるらん
我身にはは吹へき風も吹こねはかつらの枝もおらすそ行ける
人しれすけふをし待と風はやみかつらの枝を折もよはらす
はれまなき心のやみにまよひつゝえこそ手をられ月の桂を
長月の月の光のさゆるかなかつらか枝に霜やをくらん
神山のかつらを折は月のうちに我おもふ事のならさらめやは
久かたの月の桂はとこときはに色もかはらぬ物とこそきけ

小篠

朝夕に露のしら玉見る物をいたくなかりそ岡のさゝはら
ふむ人もなき庭におふる玉さゝのこたふはかりにふる霰かな

山河の岩間のさゝのひたすらに忍ひしふしはあらはれにけり
まつはろゝ眞葛交りの玉篠はまさかにかゝるもうるさかりけり（たまさかたにもイ）
夫葉をしけみ道みえすとてやすらへはそよ〳〵といふ小篠原哉
露しけきをさゝか原を分行は衣のすそにをひくしら玉
あさまたき小篠かはらを分ゆけは露けき袖を人やとかめん

萍

泪川湊にうかふ浮草のうきねとゝめむ方のなき哉
水の上によるへさためぬ萍のよそへられぬる我身なりけり（ちイ）
かきやれはたきりなかるゝ萍も世をはやくして過ぬへら也
池の面にうへぬにおふる浮草は波やよる〳〵種をまきけん
ふる河のとたえをわたる旅人のもすそにあをくつける萍
世中は水の上なる萍のうきにたへたる身をいかにせむ
萍のうき世中としりなからのかれもやらぬ我そ悲しき

元服

夫もとゆひのこそめの糸をくりかへし衣の色にひきや移さん
夫今夜ゆふはつもとゆひの紫のまゝ袖の色にはやもなりなん（わか夫）
夫うなゐ子かはなちの髪を取たてゝまきそめ川よ淵瀬かはるな（てイ）
夫紫のやしほの色をもとかれと初もとゆひをゆひそむるかな
夫かそ色の共にいのれは二人さすしそくの影に千世そうつれる（はへイ）
夫紫のはつもとゆひを結ふより君かくらゐの山をしそ思ふ（のイ）
夫むらさきの初もとゆひに結ひをかんつるはみ衣干とせふる迄

賀

君か代は嬉しきたひにきる杖のつもらん數をしる人そなき
うれしさを袖につゝみて過きにき今は何かは身にもあまらん
かしは木を椎のしつえに折かへて左右左まてやふしまろふ覧（さえたイ）（へきイ）
我やとに嬉しき事をもりきけはふるにかひあるあめの下かな
夫わか君のよはひたけたる嬉しさはおほ宮人の身にあまるらん
夫わかきみをいはひこめつゝ竹の枝千世と契るそ嬉しかりける
つきもせぬ君か齢は幾千世とかきれる竹の枝にやあるらん

七夜

白糸をむすへることに今夜まていく萬代の數つもるらん（よイ）
君まして今夜七日に成ぬれは是より千代をかそふへき哉
きみか代はなゝひこのかゆ七かへり祝ふ詞にあへさらめやは
たけならぬ二葉の松のおひそめてこよひ七夜に成にけるかな
をしてるや鵜のはふきける昔もや今夜は千世といはひ初劔（なるらんイ）
ちとせふる岩根の松の鶴の子はけふ巣を立て七日也けり（よ）
つるの子の千とせをふへきはしめとは七日より社祝ひ初けれ

仙宮

夫いかにかく山路を出る時のまにみし人もなく年のへぬらん
夫桃の花しけき深谷に尋入ておもはぬ里に年そへにける（ふへき夫）
夫たちぬはぬ衣の袖しふれけれは三千年へてそ桃もなりける
いかにして玉の臺の久しくもなかりし程に千世はへぬらん
夫乘て行鶴のはかせに雲晴て月もさやけくすむ山へかな
我もいさ尋いりなんをのゝえの柄けん山の跡をしのひて
故郷はいかになりにしをのゝえの柄るもしらす年のへぬれは

唐人

立波に鼓の聲を打そへてから人よせくおきのしまより
なしてゐやちへの白波わけしのきわかしき嶋にいかてきつ覽
唐人はしかのをしまに舟出してはかたのおきに時つくる也
嬉しきをいかにすれはか唐人の今年も袖をせはくたつらむ
うなはらやはかたのおきにかゝりたる唐舟にときつくるなり
唐人の衣にかさる白玉のしろき光のめつらしきかな
唐國の人にとはゝやわか如く世にすみつかぬたくひあるやと

王昭君

かき流すみくつになれるいきのをゝ結とゝむる世社つらけれ
ゆきすから心もゆかす別路になをふる里のことそかなしき
見えはやなみえはさりとも思ひ出る鏡に身をもかへてける哉
誰もさはゑをまことゝや思ひけんうきに紛れぬはつかしき哉
みるまゝに我姿をはかきてまし千々のこかれを惜まさりせは
をとろふるひなの別の悲しさにきすなき玉の身をそうらむる
道すからなくさむやとてひく琴の緒ことにたまをぬく涙かな

妓女

乙女子かもすそにあまる黑髮の靡くをみるそいふかたもなき
繪にかくと筆も及はし乙女子か花すかたを誰にみせまし
乙女子かとみのお琴にひれふりてかへすま袖を忍はさらめや
をとめこかいかにおかしき姿にてみるたひ毎に打ゑまるらん
女郎花めてたき花のすかたかな衣通姫もかくやありけむ
唐衣たちもはなれて朝夕にめかれすみれとあかぬいもかな
明ほのに霞こめたる花よりもあかぬはいもかにほひ成けり

老人

いやましにひたいの波はかゝれとも消すも年のゆきつもる哉
朝露をひさしきものと思ふよに佛の兒にいかてなりけん
しくち引あこの濱やに年ふりていやみにましはしめられに鬼
あさな／＼みれと昔のかけならて日に添老のますかゝみかな
翁さひ立居もやすくせられねはつらつえつきてけふも暮しつ
年月のゆきつもるにも黑かみのかはる姿のはつかしきかな
黑髮も色かはりゆきみる人のいとふ計に老にけるかな

泉郎

黑牛かたこき出る海士の友ふれはすゝきつゐとや波間わく覽
おほ磯に朝な夕なにかつきする海士も我こと袖やぬるらん
ひく嶋の海士のうけ舟浪間よりかうてふ言といふしてをかく
ふかなから海の心やいかならんうらみぬあまはなしと社きけ
ぬれ衣今そはつきにかけてほすかつきしてけりよさの海士人
かの岸にわたりつきぬる海人小船いかにのりえて嬉しかる覽
夜と共にもしほたれつゝ須磨の海士の心つからや袖ぬらす覽

船

恐ろしやともろはしりて波間行あからな舟のあからめなせそ
雲津よりすゝめくりするこし船の沖濟さかりほの／＼とみゆ
なこかれよみすりもすまにかき積てあからな舟の灘通る日そ
水あさみ川瀬の浪はたつ物なくたす鵜舟のみつやなになる
にほてるややはせの渡する舟をいくそたひみつせたのはし守
わたつみにたゝよふ舟のうきしつみそこを泊となきそ佗しき
風はやきなるとのうみの舟よりもとまりさためぬ我身なり鬼

隣

夫冬くれは中垣あれて我やとをへたてもなくや君もみるらん
夫色かへてふりぬる物はとしたかき隣の松とわれとなりけり
垣こしにほのめくたにもある物をねたくも梅のあるしなる哉
夫たらちねの更に隣をかへけるも子を思ふゆへと聞そ悲しき
隣よりあし火の煙もれきつゝたかぬやとにもすゝたりぬへし
中かきにおふる草木のはなしけみ夏そ隣はうとく成ける(ぬイ)
諸ともにまちかきほとにすまゐしていさかきこしに物語せん

笛

夫笛竹のよをさへ月や照すらん空にも聲のすみのほるかな
夫吹たつる笛の調の聲きけはのとけきちりもあらしとそ思ふ
夫青竹を雲の上人吹立てはるのうくひすさえつらすなり
ことはりや宿につくりし竹なれは笛の音までもすめる成けり
夫なみの音にたくへてそきく住の江の汀にて吹こまふえの聲
此里に神樂やすらん笛の音のさよふけかたに聞ゆ也けり
槇の戸を明かたまてもふえ竹のこちくの聲そ人たのめなる

箏

ことの緒をひきくらへてや調へまし秋風なれは身にもしむ哉
夫空の色によそへることのことち(く夫)をはつらなる雁と思ひける哉
夫ことの音の琴ちにむせふ夕されは氣もいよ立ぬそゝろ寒さに
夫玉の緒は絶しもせぬをひく人もなき琴をのみもたる身そうき(らし夫)
夫さよ更て物の音たかく成ぬらししらふる琴はことゝあくなり
繰返し昔のことをひきかけてしらふるからに音こそなかるれ
松風の吹にかよひてことのねは秋のしらへの身にもしむかな

蜘蛛

さかり糸をみるそ嬉しきさゝかにのくる人つくる筋と思へは
さゝかにのしるしもいさやいかな覧今宵にてみんくもの振舞
さゝかには苔のたもとにふるまへと涙ならてはくる人もなし
我かとに立聞人もあらませはかくとはましやさゝかにのいと
枯のこる軒のあやめをたよりにてくりかへしひく蜘の糸筋
かき絶てとひくる人もなき物を空たのめするさゝかにのいと
心ほそくいつまて我身なからへん軒はにすかくさゝかにの糸

猿

朝またきならのかれはをそよ〳〵と外山を出てましらなく也
夕つくひさすや嵐の山本に物わひしらに猿さけふ(こゑイ)なり
たかのみこいとも怪しと見まし鳬猿まろをしも引たてゝとや
三度てふ聲たにきけはよそ人に物思ひまさるねをそなくなる
思ふ事おほ江の山に世中をいかにせましと三聲なくなる
あし引の山へにあそふ木のは猿思ふ心そありて啼なる
さらぬたにおいてはものゝ悲しきに夕のましら聲なきかせそ

右永久四年百首以甲斐權守季鷹横田茂語藏本幷流布印本及夫木鈔挍合畢

群書類從卷第百六十九

和歌部二十四百首三

久安六年御百首是第二度也初度者題同二堀川百首一

作者

御製崇德院　中納言右衞門督公能
參議左中將敎長　左京大夫顯輔
前備後守季通朝臣　隆季朝臣
尾張守親隆朝臣　右馬權頭實淸朝臣
丹後守顯廣　散位淸輔
堀川待賢門院女房　兵衞上西門院女房
安藝待賢門院女房　小大進

題

春廿首　夏十首　秋廿首　冬十首　戀廿首
神祇二首　慶賀二首　釋敎五首　無常二首　離別一首
羇旅五首　物名二首　短歌一首

春　御製

あさ緑やへの霞や二とせの行あふ空のへたてなるらん
ねのひすと春の野ことに尋れは松にひかるゝ心ちこそすれ
賤女か形見しろへく日なつめとまたうら若菜手にしたまらす
春の夜は吹まふ風の移りかな木ことに梅と思ひけるかな
大かたの色なはいはし梅の花香なもあたにはちらさゝらなん
嵐吹きしの柳のいなむしろなりしく波にまかせてそみる
鶯の鳴へき程に成ゆけはさもあらぬ鳥も耳にこそたて
春ことにたかきに移る鶯やくらゐの山のありすなるらん
山里は谷のふるすの近けれはいつさいるさにうくひすそなく
なしなへて花の匂ひしひとしくは宿の外なは尋ねさらまし
山高み岩ねの櫻ちる時は天の羽ころもなつるとそみる
ことならはさてこそちらめ櫻花おしまぬ人もあらしと思へは
ことはりやあらしの山にさく花は心長閑ににはさるらむ
田子のうら岩ねにかゝる藤波はみちくる汐の障なかるらん
老ぬれはわか紫にかさゝれて藤にも松はかゝりけるかな
くらま山木の下かけの岩つゝしたゝ是のみや光なるらん
山吹の花のゆかりにあやなくも井手の里人むつましきかな
春すきは岸の山吹殘らしなたのむかけとてかはつ鳴なり
はなはれに鳥は古すにかへる也春のとまりなしる人そなき
朝夕に花まつ頃は思ひねの夢のうちにそ咲はしめける

夏

重ねきし袖のひとへにかはるにも定めなきよそ思ひしらるゝ
みあれには誰かはかけぬいか計り廣きめぐみのあふひなる覽
時鳥鳴つる杜の一枝はあかぬなごりのかたみなりけり
心さしふかきあさきを時鳥しるしあらせて聲をきかせよ
かくれぬにいつかと待しあやめ草けふは引さす物にぞ有ける
五月雨に花橘のかほる夜は月すむ秋もさもあらはあれ
五月山弓末ふりたてともす火に鹿やあやなく(はかイ)めをあはすらん
早瀬川みほさかのぼろうかひ船まつこのよにもいかゝ苦しき
あちさいのよひらの山に見えつるは葉ごしの月の影にや有覽
諸人の御祓の數を河のせに流るゝあさの程にてぞしる

秋

いつしかと荻の葉むけのかたよりにそゝや秋とぞ風も聞ゆる
天河やす瀬の波もむせぶらんとし待渡るかさゝぎのはし
織女に花ぞめ衣ぬきかせはあかつき露のかへすなりけり
道もせに誰をりしけるにしきめもえぞしらすけのまのゝ萩原
顯れて虫のみれにはたつれとも女郎花にぞ露はこほるれ
秋立て野ごとに匂ふ藤ばかまなかふむ鹿やあるじなるらん
なさけなきかりこの耳に棹鹿のこよひの聲をいかできかせん
鴈かれのかきつられたる玉章をたえ〴〵にけつけさの朝霧
秋くれは思ひなしかも夕附夜殘りおほかるけしきなるかな
おしみかね入ぬる夜半の月なれと猶おもかけはとゝめをき兒
月清みゆる木の杜にゐる鷺のたゝすはよそにいかてわかまし
玉よする浦はの風に空晴てひかりをかはす秋の夜の月
雲の波あまの川瀬にたゝれともなにあらはれてすめる月かな
ひたすらに厭ひも果しかはかりの月をたもてる此世なりけり
秋なれと晨明の月は夏の夜の望よりもみる程なかりけり
星とのみまかへる菊のかほるかは空たき物の心ちこそすれ
初春の梅をたにこそ求しかおもへは今はひとつこのはな
入日さすとよはた雲にわきかれつ高天の山の嶺のもみぢ葉
高瀬舟かしふりたてよ大井川岸の紅葉をいかゝすくへき
もみぢ葉の散ゆく方を尋れは秋もあらしの聲のみぞする

冬

ひまもなく散もみぢ葉に埋れて庭のけしきも冬こもりけり
木枯に紅葉散ぬる山めぐり何を時雨のそめむとすらん
つらゝゐてみかける影の見ゆるかなまことに今や玉河の水
この比のをしのうきねぞ哀なる上羽の霜よ下のこほりよ
夜をさむみ心つからやなく衛をのか羽風にむすぶ氷を
み狩するかたのゝみのにふる霰あなかままたき鳥もこそたて
夜をこめて谷の戸ほそに風さむみ兼てぞしるき峯のはつ雪
あかすみる竹のうらはの白雪におはうちふるなすたくむら鳥
晴ぬれと枝もとをゝにしくれしを木の下かけは猶雪ぞふる
春きぬとはにふのこやもそよく也齡もくるゝかへりみはせて

戀

武藏あふみふみたにもみぬ物ゆへに何に心をかけはしめけん
をろかにそ言のはならは成ぬへきいはてや君に袖をみせまし
床の上にたえす涙はみなきれとあふくま河とならは社あらめ
さきの世の契り有けんとはかりも身をかへて社人にしられめ
紅に涙のいろはふかけれとあさましきまて人のつれなき
哀てふなけのなさけもかゝりなはそをたに袖の乾くまにせん
命にはかへてあひみんと思へともなれて別れは惜からしやは

いかて〳〵歎きをつみしむくひとてあひみて後に人を侘しむ

箸鷹のそらしもはてす引すへて假初にたにあひみてしかな

我妹子か思ひさくるにしたかはて戀はかみなき物にそ有ける

根はふかく思ひそめてき奥山の岩もこすけのすけはなけれと

君をたにも人傳ならておとしめは我身のとかも嬉しからまし

戀々てたのむるけふのくれはとりあやにくに待程そ久しき

和田津海の思ひしふかき汐あひはけさ立歸る涙なりけり

唐衣かされし夜半の手枕につきけるしはを形見にそみる

ゆきなやみ岩にせかるゝ谷川のわれても末にあはんとそ思ふ

ひれふりし松浦の山の乙女子もいとわれはかり思ひけんかも

我戀はなのゝえくちし人なれやあはて七世も過ぬへきかな

戀しなは鳥ともなりて君かすむ宿の梢にねくら定めん

歎くまに鏡の影もをとろへぬ契りしことのかはるのみかは

神　祇

闇のうちにきてをかけし神あそひあか星よりや明初にけん

道のへの塵に光をやはらけて神も佛の名のりなりけり

慶　賀

吹風も木々の枝をはならされと山は久敷聲そきこゆる

龜遊ふ入江の松にゐるたつはみちよかさぬる物にそありける

釋　教

方便品　若有ニ聞レ法者一無三一不ニ成佛一

一たひも聞し御法を種として佛の身とそたれもなりぬ（けイ）る

安樂行品　於ニ無量劫中一乃至ニ名字一

名をたにもきかぬ御法をたもつとていかて契りを結ひ置けん

壽量品　常在靈鷲山

世中に猶有明のつきせすとときは心のやみそはれぬる

普門品　弘誓深如海

ちかひをは千尋の海に譬ふ也露もたのまぬ數にいれなん

心　經　色即是空空即是色

をしなへてむなしとゝける法なくは色に心やそみはてなまし

無　常

かきくらし雨降庭のうたかたのうたて程なき世とはしらすや

老年況列ニ百首人數一未レ終ニ六儀一詞藻之罷。或依ニ暮齡一類ニ朝露一。或雖ニ紅顏一歸ニ黄壤一。浮生驗眼。慨然隨レ涙。故詠レ之。

はかなさは外にもいはしもゝ歌のその人數はたらすなりにき

離　別

興津波立別るとも音にきくなかゐの浦に船とゝめすな

羇　旅

都出ていくかになりぬ東路の野原篠原露もしみゝに

岩かねのこりしく山を越くれはわかくる駒はきになりにけり

あまのすむ濱の藻屑を取敷てこゝにとまるといもしらめやは

かり衣袖の涙にやとる夜は月も旅ねのこゝちこそすれ

松かねの枕もなにかあたならん玉の床とてつねの床かは

物　名

にはやなき

つみしれる人やすむ覽河せにはやなきり捨てあみいめもみす

しもつけのはな

さしくしもつけのはなくてわきもこかゆふけの浦をとひそ煩ふ

短　歌

しきしまや　やまとの歌の　つたはりを　きけは遙かに
ひさかたの　天津神代に　はしまりて　みそもし餘り
ひともしは　出雲のみやの　やくもより　起りけるとそ
しるすなる　夫より後は　もゝくさの　言のはしけく
ちり／＼に　風につけつゝ　きこゆれと　近きためしに
ほり川の　流れを汲て　さゝ波の　よりくる人に
あつらへて　つたなき事は　濱千鳥　跡をすゑまて
とゝめしと　思ひなからも　津の國の　難波の浦の
なにとなく　船のさすかに　此ことを　忍ひならひし
なこりにて　よの人きゝも　はつかしの　もりもやせんと
おもへとも　心にもあらす　かきつらねつる

春　　中納言右衛門督公能

難波潟入江の氷とけにけり芦間を分て春や立らむ
夜をこめて若なつみにといそくまに遙に過ぬ荻のやけ原
結ひ置し谷の氷も鶯の初音もけさはうちとけにけり
梅の花折てかさしにさしつれはころもにおつる雪かとそみる
かゝみ山すかたもみえす春霞八重たなひけるけさのけしきに
咲そむる花を見捨ていかなれは心も空にかへるかりかね
かりかねに春かへれとや玉章をつけゝむ人は契り置けん
いつしかと咲にけらしな鶯や枝にこもれる花さそふらん
朝またき鳴鶯にさそはれて心にもあらぬ花を見るかな
杉むらもなのみ成けり三輪の山花をや春の印とは見む
なのられと匂ひにしるし朝倉や木の丸とのにさける櫻は
紀の國やありまの村にます神に手向る花はちらしとそ思ふ
吹風をいとはてを見ん此春はなか／＼ちらぬ花もありやと
しら雲は四方の山へにたな引てたえまもみえぬ花の盛か
花のちるたひに心のくたくれはあやなく春のうらめしき哉
吹風にいと亂れぬる我宿の五本やなきおりてこそみめ
くちなしに匂ひそめける山吹にいかにいひてかはつ鳴らん
みるたひにこゝにゐてとそいはれけるやへ山吹の花の盛は
年ふれとかはらぬ松をたのみてやかゝりそめけん池の藤なみ
聲たてゝなけとかへらぬ春ゆへに心をさへもつくしつるかな

夏

心をは春にそむれと夏衣けふぬきかへつひとめかさると
千早振けふのみあれの葵草心にかけて年そへにける
時鳥まつよの數を雲ゐにてなのるしけさと思はましかは
おほつかなたれそま山の時鳥とふになのらて過ぬなるかな
石神のうらにをとはん此くれに山ほとゝきす聞やきかすや
郭公さこそは忍ふ聲ならめ音羽の里に音たにもせよ
霍公なかて過にし年もなしなか／＼またてきかんと思へは
卯の花のかきれつゝきに咲ぬれは水しら川の關路なりけり
人每に尋ねてひけはかくれぬに生るあやめもかひなかりけり
あたりさへ冷しかりけり氷室山まかする水のこほるのみかは

秋

いつしかとけさ吹風の身にしみて秋の色にもなりにけるかな
天河霧たちこめよ彦星の歸るあしたの道みえぬまて
さ夜更てふしの高根にすむ月は煙はかりやくもるなるらん
出るより入まて月をなかむれは程なかりけり秋の夜なれと
玉くしけ二見の浦の月かけは明方にこそすみ渡りけれ

見るたひに心にいれる月なれはにしの山へと思ひしもせし
秋の夜の木の下照す月影に小倉の山も名のみなりけり
雲のなみしはしなかけそ天の川よわたる月の御舟さすほと
下葉まて數もかくれす難波かた芦のよことにすめる月影
ともすれは雲間かくれにまたれつゝ空たのめする夜半の月影
なりはてぬ錦とそ見る我宿に色つきそむるはしの立枝は
色々に移ふ菊の上露はむらこにそむる玉かとそ見る
花薄人もこすのゝ名をしらてたれ招くらん秋の夕暮
玉ゆらも風にしられし花薄露ぬきかくるけさのけしきを
鹿の名といふにもしるし小萩原花の中にも聲聞ゆなる
さをしかも獨ふしみの里にては物さひしとや鳴あかすらん
女郎花露の衣をかされきて何あたしのにたはれふすらん
神樂岡吹まふ風のつてことにふり過こゆる鈴むしの聲
夜をかされ聲よはりゆく虫の音に秋のくれぬる程を知かな
あかさりし人に別し時よりも秋の暮こそさひしかりけれ

冬

さま〳〵の草葉も今は霜かれぬ野へより冬や立てきぬらん
草の葉に結ひし露のけさみれはいつしか霜に成にけるかな
時雨する夜半に木の葉の散時は音はいつれとわかれやはする
冬の夜はとふのすかこもさえ〳〵て獨ふせやそいとゝ寂しき
風にちる花かとそみる空さえてほとろ〳〵にふれるしら雪
日をへつゝ積れる雪にかくろへぬ名のみ也けりあさふりの橋
初しもや置はしむらん曉のかれの聲こそかつ聞ゆなれ
白波に聲うちそふる友千鳥むれてそ渡る浦傳ひすと
いか計ふかき契をなし鳥のさゆるうきねに羽かはすらん
ふるとしはこよひ計に成にけりあけはいはひの言の葉もかは

戀

下紐はとけすはとけす小夜衣そのうつりかにしむ身ともかな
手にとりてゆらく玉のを絶さりし人はかりたに逢みてしかな
鳴海潟しほひになける網なれやめにはかゝりてあはぬ戀する
なにしおはゝ君打とけよ近江路のしのゝをふゝき忍ひ〳〵に
戀ちには唯一かたに入にしをいつくへまよふこゝろなるらん
我戀はちきのかたそきかたくのみ行あはて年の積りぬる哉
大方の戀する人に間なれてよのつれのとや君おもふらむ
かつきするいせほの蜑もかくやあらぬしほたれに鬼戀の涙に
人しれぬ戀はいかなる色なれは心にふかく思ひそめけん
うたゝねにまとろむ程の夢計逢や此世のなくさみにせん
後の世の事をおもへは戀しなしさりとて君はなさけかけしな
契り置し事は忍ふやいかにとも逢夜なけれはとはてこそふれ
戀しさに絶ぬ命と君きゝて情をかけはおしからしかし
逢みんと契りし事を賴つゝまつに命をかけてこそふれ
つく〳〵とおつる涙に數しらすあひみぬ夜半の積りぬるかな
心こそ千々にくたくれ逢みんと忍ふる人はひとりなれとも
燒物のくゆる思ひをあかさりし共うつりかによそへてそふる
人はいさ我は忘れす吳竹の共夜計のふしはなかりき
小夜衣露のへたてはなけれとも身を分てこそいらまほしけれ

神祇

春日山神に祈れることのはゝ待ほとも猶たのもしき哉
家の風絶すもわたれ神風やみもすそ川に心そめてき

慶賀

君かへんことは子の日の小松原木高く成て花さかんまて
此君といふなもしろく呉竹の代々へんまても頼みてなみん

釋　教

いさきよき法なたもちて世にすまは月とゝもにや西へ行へき
から衣たちこそきたれ先の世に罪かさなれる身にしあられは
世の中ないとふあまりに鳥のねも聞えぬ山の麓にそすむ
春の花もとめしことも秋の夜の月もなかめしまことなられは
一すしに頼むとなしれ君にわれひかれは法の道に入りなん

無　常

世の中ははやせに落る水の泡の程なくきゆるためしにもみる
我ひとりのかるへきよと思ひせは年の積るも歎かさらまし

離　別

朝夕にきなれしよはの唐衣たち別るゝは悲しかりけり

羇　旅

船とめてみれはゑしまの松か枝にしろきな後にかくるしら浪
道なしる駒なかりせは行なれぬ旅の空にや日なくらさまし
しほりして見えし山路も夕されは猶たとらるゝ物にそ有ける
住なれし宿の事のみ面影に朝たつ旅の草枕かな
花咲し野への草葉も霜かれぬ是にてそしる旅の日数は

物　名

たきもの

大井川くたすいかたの隙そなき落くるたきものとけかられは

ひとり

夜もすから君な待まは思ひわひ鳥の鳴にもよそにやはきく

短　歌

やまのへの　跡もへたてぬ　身なれとも　この人かすに
いりしより　花のかとても　忘られす　月のあきにも
おもひてゝ　心にかけぬ　時もなく　和歌の浦波
うちいてゝ　かひなかるへき　ことの葉の　皆はつかしの
もりにふく　風の聞えな　つゝめとも　こやの池水
いひいてゝ　やかてやみなは　なをおしく　思ひあまりに
かきつむる　蜑のもくすの　すゑの世に　残りとまりて
みん人の　そしらん事も　はゝからす　もゝ歌かすな
つられつる哉

春　　参議左中將教長

月よめはまた冬なから咲にける此花のみか春のしるしは
嶺の雪谷の氷と春風にいつれかまつはとけはしむらむ
鶯の谷よりいつる初こゑにまつ春しるはみやまへの里
鶯のねくらの竹はときはにて何に付てか春なしるらん
いはねとも霞たな引雲ゐにて空にそしるき春の氣色は
子の日する人なきのへの姫小松霞にのみやたなひかるらん
若なつむ袖とそみゆる春日野のとふひの野への雪の村消
雪の色もうす紅の梅の花かほる香にてはわきそかれつる
梅の花うす紅の色よりもあやなく香こそ身にはしみけれ
春雨の降つむまゝに青柳の糸につらぬく玉そ數そふ
春の夜も久しかりけりあけはまつ花見にゆかんと思ふ心に
木の下にやとらさりせはみましやは月さしかはす花の光な
高砂の尾上の櫻なみたてる松のときはなならひやはせぬ
いかにして咲はしめけん我宿の物にはあらぬ花さくらかな

枝しあらは花は咲なん風よりもおる人つらき山櫻かな
山櫻かすみこめたるありかをはつらきものから風そしらする
櫻花いかなる風にさそはれておしむ人をはしらぬなるらん
咲しよりちらん物とは知なからはかなくおしき花の顔かな
紅に咲みたれたる岩つゝしまたありかたき花のかほかな
散花におしむ心はつくしてき暮行春は人にまかせん

夏

夜もすから春を殘せる灯の名殘はけさもけたしとそ思ふ
むつましや春の形見にとゝめ置若紫のいけの藤なみ
花ゆへにいとひ馴にし風なれはまたや夏とてまたれしもせす
しら雪のしき／＼ふれる心地して枝もとをゝにさける卯の花
紅の色ふかみ草咲ぬれはおしむ心もあさからぬかな
袂にもかゝるのみかは宿ことに菖蒲はけふのつまにそ有ける
思ひねの夢にやきかん時鳥また卯月にはをとつれもせす
時鳥いかてきかまし我宿に花橘のかほらさりせは
尋ねても聞へき物を時鳥人たのめなる夜半の一聲
床夏の花の色々散行は秋のとなりや近くなるらん

秋

常よりも涼しくなりぬ吹風に秋のたつ日を誰かつくらん
七夕のくれを待まの久しさと明るおしさといつれまされり
七夕の歸る道には鵲のはしたなきまて袖やぬるらむ
聞人もおとろかれけりなく鹿はをのれのみやは秋をしるらん
松虫の聲聞時そ打はへて君か千とせのあきはしらるゝ
鴈金はきなきときめき秋風の吹て日數はへぬとしらすや
しらま弓張てかけたる曉は程なくそいるたかまとの山
數ならぬ我身なれとも月をみてあかぬや人にをとらさるらん
けにやさは西に心そいそかるゝかたふく月も今はおしまし
いにしへもたくひはあらし月影は又こん秋のこよひなりとも
くまもなく月すみ渡る銀河なをたにかけし雲のしら浪
わたつみの清き濱へによる波のよるともみえすてらす月影
兼てよりひろとみゆれは秋の夜の明るもしらぬ有明の月
置露のをもけにみゆる眞萩原はらはゝ花の散もこそすれ
けさみれはおきゐる露にあやなくもおれふしにける女郎花哉
藤袴にほひを風にたくへてや霧に立とを人にしらるゝ
長月のけふをいかてか菊の花おりしり顔に盛なるらん
時雨にもあかれさしけりもみち葉は朝日夕日の影ならねとも
もみち葉の散てうかへる池水は錦あらひし江にやかはらぬ
ほにいてゝまねくとならは花薄すきゆく秋をえやはとゝめぬ

冬

秋の中は哀しらせし風の音のはけしさそふる冬は來にけり
散り積る檜の枯葉のなかりせは時雨ふる夜をいかてしらまし
よそに見るひらの高根の雪なれと冴るよとこの物にそ有ける
箸鷹のしらふにまかふ雪ふれは野守のかゝみよそにたにみす
雪ふかきまのゝかや原むすほれて吹とも風になひかさりけり
百敷や大みやちかき宿なれとあられの音をいかてつゝまん
難波江の芦は氷にとちられて吹とも風になひかさりけり
水鳥の霜うちはらふ羽風にや氷の床はいとゝさゆらん
つらゝゐる清き川瀬は音絶てそらに鵆の聲のみそする
立歸る年の行衛を尋れは哀れ我身にとまるなりけり

戀

河のせにおふる玉ものうちなひき君に心はよりにしものを
きく人もなき奥山の呼子鳥かひなきねをそ我もなきつる
いか計戀路は遠き物なれは年は行とも逢よなからむ
戀侘る心なくさにあひみんとかこと計にたのめやはせぬ
夕されは荻のうは風そよとたにいふ人もなき戀そくるしき
戀しなは戀もしれとや思ふらんあはゝ逢へき程の過ぬる
逢事はせめてなこやのあつ襖あるはかひなきしほれのみして
つらしとて思ひかへらぬ我戀やなかるゝ水の心なるらむ
戀しきは逢を限と聞しかとさてしもいとゝ思ひそひけり
つらさをは恨みんとのみ思ひしも逢みる時は忘られにけり
から衣かさねぬ夜半も明ぬれは戀路に歸る袖そ露けき
夢にたに逢みんとのみ思ひしはたゝ戀しなん爲にそ有ける
戀しとはことの葉にこそいはさらめ涙の色をいかてつゝまん
涙川みかさまされは忍ひこし人めつゝみをせきそかねつる
君たにもこんといひせはぬは玉の夜床に玉をしかまし物を
君待ととふのすかこもみふにたにねてのみ明すよをそ重ぬる
かく計涙の川の早けれはたきつ心のよとむまそなき
いかにせんあはのなるとに引しほのひきいりぬへき戀の病を
つれもなき君まつら山待侘てひれふる計こふとしらすや
敷妙の枕はかへしわきもこかねくたれかみにふれてしものを

神祇

榊とるほとにしなれはから神のおもしろしとや心とくらん
住吉の神も風もやまつるらん松にゆふしてかゝるしら波

慶賀

君か代は千世を限ていはし水神の心にまかせてをみむ
大空をおほはん袖につゝむとも君かへんよの數やあまらん

釋教

化緣大乖　五性各別
我身にも佛の種の有なれは花のかつらをかけてこそみめ
覺心不生　八不中道
やくさまてさらぬたかまも水上は唯たとはんのなかれ也けり
一道無相　一乘佛性
品々によつの車をすゝめすはのりはつれたる人やあらまし
極無自性　三界唯心
はかなくそ三世の佛とおもひける心ひとつにありとしらすて
秘密莊嚴　卽心成佛
照月の心の水にすむなれはやかてこの身に光をそさす

無常

秋風にあふはせをはの碎けつゝ有にもあらぬ世とはしらすや

離別

水の面にうかへる玉の程もなくきゆるをよその物とやはみる
歸りこん程は其日と契れとも立わかるゝはいよゝかなしき

羇旅

古鄕にとふ人あらは山櫻散なん後をまてとこたへよ
とふ人もなき旅ねするみ山へになのりして行郭公かな
あかす見し同し都の月なれは旅の空にもかはらさりけり
降雪にいかて家路を尋ねましをしふる駒のあとなかりせは
草枕なきゐる露は君をのみいもねてかふる涙なりけり

物名

もちつゝしの花

人毎に弓はもちつゝしのはなし何をかりこのやにははかまし

十五夜の月

五月雨をくろしふこやのつき橋もうきぬ難波の江社かよはね

短歌

あつさゆみ　春たちぬとや　みよしのゝ　山にかすみの
たなひけは　木のめも今は　はりぬらん　いつしかとのみ
花まつと　このもかのもに　たちましり　いへち忘るゝ
かひもなく　咲はかつちる　はかなさを　あはれいつ迄
なけきつゝ　我身のうへに　なりはてん　事をはしらて
夏くれは　しけき梢に　なくせみの　むなしきからと
秋はなる　かくは常なき　世なれとも　くまなき月を
なかむれは　もの思ふ事も　わすられて　心ひとつそ
ほこらしき　さてのつもりは　老らくの　身にせめくるも
しら露の　霜としなれは　冬の野に　むら〳〵みゆる
草のうへは　みな白妙に　なりにけり　是をはよそに
おもひこし　我みなかみも　いまはたゝ　くろき筋なき
たきの糸の　くる〳〵君に　つかふとて　思ひはなれぬ
浮世なりけり

春

左京大夫顕輔

よをこめて春は來にけりいつしかとあしたの原に霞たなひく
打なひき春立きぬと鶯のまた里なれぬ初音なくなり
春霞たなひき渡る夕されは梢も見えすさゝら井の里
おるもうしなしといはまし梅花香はかくされぬ物にそ有ける
君か代を尾上の松にくらへんにいく世の春かあはんとすらん
春ことにわかなは同し若なにて年つめる身の老にけるかな
梅か枝に降つむ雪は鶯の羽風にちるも花とこそみれ
青柳の糸手にかけて春毎に年のよるをもしらぬ也けり
あやしきはおるに音せぬ早蕨の手をかけれ共ほとろとそなる
をやみせす降春雨のこま〳〵と思ひしとけははるゝ間もなし
苗代に種まくしつのかけみれは爺てもはやくおいにける哉
古郷にあらましかはと思ふにも浦山しきはかへるかりかね
いつとてもおしき命といひなから花待程はかきりなきかな
かつらきやたかまの山の櫻花雲井のよそにみてや過なん
命をそ散花よりもおしむへきさすかにさかぬ春しなけれは
隙もなく井手の河波折かけてそこまて匂ふ山吹のはな
ありかたき色とそみゆる岩つゝし唐紅に匂ふとおもへは
山彦は誰としりてかこたふらんなを呼子鳥こはたえもせす
いかなれは松のしつえを置なから人の心にかゝる藤なみ
ひもたえす今宵計のなさけしてあけはみそかに歸りゆけ春

夏

いつしかとけふしらかされ立きれと思ひ染てし色は忘れす
村々にさけるかきれの卯花は木の間の月の心地こそすれ
人つてといはぬ計そ時鳥きくともなくてすきぬなるかな
契置人しなけれは終夜たゝく水鶏をよそにこそきけ
何となく花橘の香をかけはいにしへさへそこひしかりける
天津星かけみゆる夜は澤水にすたく螢をわきそかねつる
かくれぬにおふるあやめもけふは猶諱れてひかぬ人やなか覧
五月雨の日數へぬれはかりつみししつやのこすけ朽やしぬ覧
はる〳〵とたかしのやまに鳴蟬の聲は雲井の物にそ有ける

□□□いさほのかみに靡きにきけふはなこしの御秡となしれ

秋

衣手のまたうすけれは朝またき身にしむ物は秋のはつ風
霧ふかき杣山おとすいかたしの岩こす棹を思ひこそやれ
色々の玉とそみゆる秋のゝの千種の花に置るしら露
七夕のあふ夜ときけはあちきなく我こゝろさへそらに社なれ
銀河横きる雲や七夕の空たきものゝ煙なるらむ
夜もすから人まつ虫の聲きけはさもあらぬ袖も露けかりけり
天津風雲吹はらふ秋の夜は月より外のものなかりけり
秋の夜の月の光にさそはれてしらぬ雲路に行心かな
秋かせにたゝよふ雲のたえ間よりもれ出る月の影のさやけさ
秋萩の花咲ぬれは山里は鹿の音ちかくきかぬ夜そなき
しめ結しかひこそなけれ女郎花心もしらぬ風になひけは
うらやましほに出にけり花薄おもひこめてはくるしきものを
わきもこかすそ野に匂ふ藤袴露は結へと綻ひにけり
秋の田にいほさすしつの笘をあらみ月とともにやもり明す覧
くる度にかり〳〵とのみ鳴なるを故郷にてはいかにとそきく
思ふらん心そしるきから衣なかきよすから打あかしつる
相坂の木の下陰を引ほとはさやかにみえぬきり原の駒
おもふことなにしもあらぬ夕されに心まとはすさほしかの聲
秋毎にみれは小倉の山しもそ下葉もあけに紅葉渡れる
暮て行秋をおしむと徒に思ひのみこそ木からしの風

冬

朝毎にあらしの聲はかはりつゝ槇さひしき冬は來にけり
雨とふる峯の木葉のとまられはむへもる山といふにそ有ける
思ふことはれせぬ時はかきくらす時雨はよその物とやは見る
さゆる夜は所もわかぬ霜なれといかて朝日の山にをくらん
降つめるうは葉の雪の解ぬまはうらみとりなるいはしろの松
すみかまのくゆる思ひの下むせひ結ふ煙はいつか絶へき
さらぬたに寐覺かちなる冬の夜をならの枯葉に霰ふるなり
難波潟入江をめくるあし鴨の玉もの床にうきねすらしも
なにはかた□□□ころやたかゝらん蘆邊の千鳥立さはく也
かひなくて過る月日のいとゝしく積れはおしき年の暮哉

戀

思へともいはての山に年をへて朽やはてなん谷のむもれ木
年ふとも猶いはしろの結ひ松とけぬものゆへ人もこそしれ
ふみかへすたひに心をくたく哉いかになるへきはしにか有覧
高砂の尾上の松に吹風の音にのみやはきゝ渡るへき
戀するは苦しきものをいかにしてつれなき人を思ひしらせん
我戀と君かつらさとくらへむと山にたとへはいつれたかけん
いかてさは世に長らへて侘つゝもつれなき人の果をたにみん
我戀はかつら木山のそみかくた聲は聞とも逢よしもなし
かく計厭ふたにこそ戀しけれなとかへしけんおそのたはれを
中々に戀しなませは入しれすかひなき身をも恨さらまし
くれぬとてゆけは明ぬる夏の夜を難面人のとさしともかな
よそにしてもときし人にいつしかと袖の雫をとはるへき哉
逢みてはいとゝ心の隙（もイ）もなしはてなき物は戀にそ有ける
かつらきやくめちの橋は渡られとわりなかりつる朝ほらけ哉
契りしを命とたのむ我なれはいけもころしも君かまに〳〵
夜と共に涙をひちてこかるれはひ水になりてこふとしらすや

かち人の渡れとぬれぬえにもみな又あふ坂はとふとこそきけ
あさてかりしき忍ひけんあつまめも我戀計おもひけんやそ
今更に行衞もしらぬ我戀はとよ玉姫のこゝちこそすれ
年ふれと哀にたえぬ涙かなこひしき人のかゝらましかは

神祇

あしかひの顯れ出し昔より神をは君もあふきそめてき
飛くたるなゝしの雉ないさりせは天のはゝやも歎かさらまし

慶賀

君かへん年の數をは幾千代といさしら雲のはてしなけれは
何をかは君かよはひのかすにせん信田の杜の千枝もかきれり

釋教

華嚴經　法界唯心

うらやみもなけきもすまし世中は我心こそいはゝいふへき

大集經　二乘彈呵

けた物に猶をとりても見ゆる哉人をはしらぬ人のこゝろは

大品經　畢竟空

何事もむなしとゝける法なれはつみもあらしと聞そ嬉しき

法華經　闕

涅槃經　一切衆生悉有二佛性一

皇の御ゆきないてゝ見さりせはけふ迄世にはなつまさらまし
もゝ人の心のうちにすむ月をいかなるつみの雲かくすらん

無常

あしたよりくれを限れる虫よりも定なき世そはかなかりける
うちなひく末はにすかる露よりも賴かたきは命なりけり

離別

たのむれと心かはりて歸りこはそれそやかての別なるへき

羇旅

なのつからひなの別に程ふれは都のてふりかけぬ日そなき
はるへ\とくいくのゝ道に旅ねして袂露けき草枕かな
草枕袖のみぬるゝたひ衣おもひ立けん事そ悔しき
旅の空過る月日はめくりあへとなとや都のものかたりせぬ
あつまちの野しまかさきの濱風にわかひもゆひしいもかかは
のみおもかけにみゆ

物名

ときのふた

つらけれと昨日賴めし言の葉もけふ迄いける身とはしらすや

おものたな

池のおものたなひきわたる萍にはらはぬ庭と見えもするかな

短歌

うき身には　よのふることとも　たのまれす　いつれかいつれ
おほつかな　ことはりなれや　まきもくの　ひはらの山の
そまひとの　うきふししけき　まかりきと　いとひすてたる
身なれとも　心にもあらす　たちましり　かなしきまゝに
かりかれの　ひまなくなけと　あはれてふ　ことのはをたに
きかせれは　なくもゆかむも　かはらぬを　たゝみのとかに
なしはてゝ　このよのことを　おもひすて　後の世をたにと
おもひつゝ　うき世中を　立いつれと　子をおもふ道に
まとひつゝ（よイ）　行へき方も　おほえねは　天の川なみ
立かへり　空をあふきて　あり明の　難面なをし
なかしつる哉

反　歌

身をしらていふはかひなきことなれと頼めは人をと思ふ計そ

前備前守季通朝臣

春

いはまもる氷のくさび打とけて今朝より春の水そもり來る
をしなへて四方にたな引霞かなこしちの方は冬とこそきけ
いとゝしく君かよはひを野へに出て數なき松にいのりする哉
身をつめは若菜は摘しつゝましみ我も昔は老をいとひき
春のうちは久敷匂へ梅の花はな心なる人やとまると
我心はるてふ事もおもほえすいとゝかしらの雪し積れは
春雨のしつくは糸にぬきてけりむへいひけらし玉やなきとは
たとふへき物こそなけれ山里の霞のうちの鶯の聲
春は猶花の匂ひもさもあらはあれたゝ身にしむは曙の空
花みれは身にやはしまぬみにしめとかくまとはる、春はなかりき
吉野山花は半に散にけりたえ〱かゝる峯のしら雲
心なき我身なれとも津の國の難波の春にたえすも有哉
ますらおはしか苦しさを忘れつゝいつの春迄うたんあら田そ
なかむれは涙そ落るかりかねのこん秋はまた我やなからん
山吹の花をあまたにかへしみんしはしなたちそ井手の川波
松かうへに木たかく懸る藤の花手かけとるへき物とこそみれ
あなかちにけふをおしまは又もこん春を厭ふになりぬへき哉
いかなれは今宵計の春の色を卯月のかけにしはしとゝめむ
身は冬の埋木なれと勅なれは春のことはの花をちらしつ

夏

吾せこに都へいかてことつてん卯の花咲る里にとまりぬ
世中にいかていはれんほとゝきす人より先に初音きゝつと
時鳥五月のさ夜に聲す也我はこゝろのやみにこそきけ
吾すみか本の蓬の宿なれはあやめ計をけふはふかなん
かほれとも一方ならぬ風なれは花橘をいかてたつねん
むかし我あつめし事を思ひ出てみなれかほにもくる螢かな
夏とても心のとけきことそなき花は戀しく月はまたれて
おきなさひ結ふ泉の手の隙にうき影みてもおとろかれぬる
大井川のほれはいとゝすゝしきは戸難瀨に秋や通ふなるらん
けふくれは麻の立枝にゆふかけて夏水無月のはらへをそする

秋

このねぬる夜の間に秋はきにけらし朝けの風の昨日にもにぬ
七夕のけさうらめしき玉章は初かりかねやかけて行らん
野分する野邊のけしきをみる時は心なき人あらしとそ思ふ
秋の野の千草の花にをきつれは白露もみなをのか色々
野へ毎に人も許さぬわれもかうこや今やうのむさのことくさ
しなのなるとくさ吹てふ秋風はつたへ聞たにそゝろさむしも
秋の夜は松をはらはぬ風たにもかなしき事のねをたてすやは
よと共に草の庵にすめる身はま近く虫の音をのみそなく
女郎花いとゝや我をいとふらんかしらの霜のあきのふかさに
吾宿の萩のにしきはなりなからあるしの物におはすとそ思ふ
二たひとまねかれましや花薄我のみ野へにみるめなりせは
秋風のふかぬ限はひとりもる山田のひたにいとまなき哉
年へたる岩に散しくもみち葉は是やこけちの錦なるらん
かた〱に散もみち葉をかきつめて我宿にのみ秋をとゝめん
おほつかな月と紅葉といつれをかまことの秋の色とさためん

身のうさを思ひねさめの鹿のねは吾さへ聲のおしまれぬ哉
いつこにも秋はかはらぬ物なれと猶山里はかなしかりけり
ことゝはむいほしろ小田のみたやもりさて其稲はいか計そも
こと〳〵に悲しかりけりむへし社秋の心をうれへといひけれ
我命秋の爲にそおしまるゝ秋し過なはおしけくもなし

冬

さら〳〵にいやはれらるゝ山里のあしふく宿に時雨する夜は
冬ふかみかれ野をみてそ行末の我身の上は思ひしらるゝ
みほによりなかるゝ水も氷してなとなし川となりにける哉
年をへてつめる歎きをこの冬のよろこひもかなたき盡してん
さえ渡るよはのけしきにみやまへの雪のふかさを空にしる哉
鴛鳥のあたりの水はこほらすと聞しはさえぬ夜半のことかも
冬のかけうつしとゝめはこやの池の氷の鏡いてみさらめや
すみかまのせれうの里の煙をはまたき霞のたつかとそみる
まきもくのあなしの山の鶯は今いくかとか春をまつらん
年はみなくれていぬれと我身にはえたることなき歎をそする

戀

いかにしてうしと思はて戀をせん歎は人のおふとこそきけ
幾度か返してねまし身にふれて下にかされし衣ならすは
歎きつゝおほくの年を重ねつる夜半の衣のかゝらましかは
思ひやれ身の數ならぬなけきをもわするゝ程の戀の心を
今はたゝをさふる袖も朽はてゝ心のまゝにおつる涙か
今宵しもうたても鹿の鳴なるか獨ねさめの床としらすや
をのつから戀やこえんとおほゆれはみとみる人の哀なる哉
君こふる涙にくたす衣手をやす□きまゝに形見とそ見る

我戀はたのめて後につらけれは涙の色のうすくこきかな
言の葉になくさむへきをいかなれは哀とたにもいふ人のなき
我戀をねては夢にみさめぬれは面影にたつあはぬ間そなき
今はたゝ我身の程そみまほしき心にいれて君をおもへは
いかにせんいけらぬ身共成なはやしぬとしきかは哀とやいはん
逢事はわかけよそひのきぬなれや年はゆけともさせる共なし
わか戀は水なき時の池なれやつゝみなからにいひもはなたぬ
我戀はをさゝか原の露なれやことの葉ことに心をかるゝ
れやの内に干たひやちたひ臥かへり侘しけなくや獨ぬるよは
歎つゝ床もさためぬうたゝねはうたても夢の程もなきかな
今はさは人も通はすいかにして君かあたりの風にあたらむ
逢ことは命にかへししるしにやけさはいつへき心地せさらん

神祇

いせをしもむへ神風といひけるかれき事はてゝいへる冷しき
いはし水えんをむすへる人は皆うるほひをえぬことのなき哉

慶賀

はこやにはふたりの君の諸共に春と秋とにとめるとそ聞
佐渡の海のあはの鳴門をさしなから田に作る迄はましませ

釋教

心こそ牛の車をかけ渡るのりをしふかく頼む身なれは
人毎に佛の種はありとかや數ならぬ身はいかゝとそ思ふ
西方にあみた佛はますなれはことはりなれやなもとなふる
いかにしてよもきのかとを立出なはやかて蓮に宿をうつさん
あるならす又なきならすありなしに猶しもあらぬ事や何なる

無常

いとひても猶しのはるゝ命哉二度くへき此世ならぬを
現をもうつゝといかゝ定むへき夢にも夢をみすはこそあらめ

離　別

おほかりや立別れての名殘には哀いはてと思ふことのみ

羇　旅

みさふらひみかさなめしそ淺香山木の下露も今はひぬらむ
さらしなや姥捨山に月みると都にたれか我をしるらん
何よりもはかなきことは夏の夜のあしたの野への旅ね也けり
さほのをさ猶すゝめてそたかせ船我は都にさせる身なら□
おほつかな木の下かけかたけ隈の松をよきとそみて過にける

物　名

腰より上和琴下にしやうのこと

けふ過ぬあすはこんとそいひしかとこは一しやうのこと□□

おきな草を何の上に一もしつゝすへたる

音もせてきにける人を何せんにくり返しわかさそひやりけん

短　歌

おほきみの　みことかしこみ　かしこみて　かすにもいらぬ
身なれとも　このもゝ歌を　たてまつる　はこやの山に
すみわたる　あらきけものを　をしなへて　おとろきはしる
こともなく　むなしき船を　うかへたる　海にたゝよふ
うをもみな　みなきる事も　なしとかや　かゝる時には
あひなから　我身ひとつは　いつとなく　かしらの霜も
朝ことに　はらひもあへす　おきな草　ひとりかれのに
たてれとも　これをしのふる　こともなみ　涙のあめは
露はかり　とゝまる人も　なゝくりの　いてゆしほとし
おほゆれは　いつれの方へ　いなむしろ　しかしやいまは
あらしふく　みねの木の葉と　もろともに　ちりなん後も
おもひをく　ことはさすかに　おほそらを　はるかにひとり
なかむれは　霞の内に　かりかねの　きえみきえすみ
さためなく　みなみにさりて　かへりこむ　ほとをまたてや
いかならむ　雲のたえまに　いる月の　かたふく影に
さしそへて　心をにしに　やりてこそ　後の世をとも
いとなまめ　それもちきりに　よりけれは　何ともなくて
行みつの　あはれ〳〵と　いひなから　すきのいたとの
いたつらに　明くれものそ　なけかしき　今はわか身に
いくはくの　春秋とかは　とはるへき　たとひ久しく
なからへて　へぬる月日を　かさぬとも　夢に夢みし
から人の　覺ての後に　そのことゝ　わくこともなき
まとゐをは　いか計かは　おもふとはしる

反　歌

世にふるは我おほきみの哀てふなけのこと葉を待としらすや

春　　　隆季朝臣

明くるゝ同し空のいかなれはけさは今年のはしめなるらん
立歸る春のあしたを詠れは我身をとめて年は來にけり
新敷春の初音に成にけりしつの丸やに玉はゝきとる
子日する野への小松に引かへてかけおとろへぬ我身ともかな
澤水にひくものすそは濡にけりゐくの若なを摘しなふとて
いさやこらさもとの流せき分て小河の水にわかなあらはむ
うつろへはたへぬ柳の枝にゐる百さえつりの鶯の聲

鶯の春を限らぬ鳥ならは過る月日もおしまさらまし
さほ姫の色めく春に成にけり霞の衣幾重たつらん
あひきすとあことゝのほる鹽の浦の霞こめたる蜑のよひ聲
春くれはたか爲にとか青柳のかた糸にぬふ梅の花かさ
久かたの天とふ鴈の歸るさは春のしらへに立ることとちか
兼てより花の心を知ぬれは咲てもちらんことをしそ思ふ
花ゆへに我身そあやな祈らるゝ千とせの春に逢んと思へは
から衣かつく袂そそほちぬるみれとも見えぬ春のこさ雨
かき曇り雨は降きぬみつをさかあしはやを船とまやふくらん
吾せこや花かつらせむから國の昔のけふを思ふ情に
さかつきに誰ともさゝて廻り行なみの心にまかせたるらん
暮て行春は殘りもなき物を惜む心のつきせさるらん
散花を心にそめてれぬる夜のおくるあしたに春と思はゝ

夏

物いはゝ殘れる花にとひてまし昨日かへりし春の行衞を
いつしかと衣ほすめりかけろふの夏きにけらし天のかこ山
しての山こえつる宵に里なれて今もなかなん哀その鳥
かほるかのれなから袖に匂ふらん今宵あやめの草枕して
玉にぬくおりにあふちの花の色に心うつらぬ人はあらしな
おしめとも花橘のかほる香はかせのやとりにはこはれにけり
橘の咲そふ花にかさゝれてふるき身なから折に逢かな
時鳥をのかさ月かものゝへのいはせのもりに鳴とよむなり
玉のをやみしかからまし御祓する麻のをぬさに祈りかけすは
思ふことあさちのなはにときつけて淸き川せに夏はらへしつ

秋

このれぬるあさけの風やはらふらん翳なき雲の空に消ぬる
しらふるは聲もをの〳〵引かへてけさからことに秋になる哉
織女のあまつひれ吹秋風にやそのふなちを御船いつらし
さぬる夜の天の河原の礒枕そはたてあへす明そしにける
秋の野の小萩か花を露なから籬の木にうつしてそみる
庭もせの荻の上風音信ていつしかなひく女郎花かな
すを戀て歸り頻ふつはめ哉なれさへ秋の風やかなしき
くまもなき空行月をみる程に秋の半のこよひすきぬる
照月は積れる雪の心地して玉かとみゆるきり原の駒
鴈金のうかへるつはさ打たれて水田のほたちふみし立らん
竹のはに籬の菊を折そへて花をふくらん玉のさかつき
古のその玉章はかけすしてあしをふくめるかりのつかひか
つふらえのせなの霞も春消て霧立渡る秋の夕くれ
聲たてゝ妻かふ鹿もをのつから千とせの春にあふとこそきけ
しらすけやまのゝ萱原いちしるくあまたつ鹿のふみならす覽
立田姫花の錦のからきぬをいそくか虫のよるもはた織
吾宿のあさちか本の秋風に聲まもなかぬきり〳〵す哉
千年まて我行末をなか月のこえぬることに逢よしもかな
こきうすき花の色々染てきる秋の衣にけふはかりかも
いつかたに更行夜半の成ぬらん秋の殘りか冬のはしめか

冬

長月も冬のはしめになりぬとて雲の衣を立やかふらむ
すむ水を心なしとは誰かいふ氷そ冬のはしめをもしる
ちりかゝる木葉も軒の雫あらは時雨する夜はいかてわかまし
はゝそ原木末の空を吹風の日をふるまゝに聲そすくなき

霜をけは松のみとりそあらはるゝ見えわかさりし夏の木立を
いひわかぬ事そわりなき大鳥の羽には霜のふるやふらすや
降積るしられの雪はいなをさのかひの毛衣ほすとみえけり
いつみなる篠田の杜の千枝なから玉のうへ木にかさるしら雪
九重の雲の上よりやゝふるのをとにともなふふりつゝみかな
今宵ねておくるあしたや我せこかふたなく枝の松もおるへき

戀

其人ときくにけぬへし露の身のしらすしらすは過ける物を
忍ふるに名の埋もるゝ物ならは誰ともけふはいかてしらまし
相坂の關の關守心あれや岩間の清水かけをたにみむ
打はへてかこのわたりに引つなの行衛は君にまかせたらなん
淺からぬ心を文にかきのへてなくる折にや吾をしるらむ
包むへきあしての跡に忘られてまたいひそめぬ人にみせつる
いなとたに書ける筆のなさけをは束のまにても忘れやはする
忍ひやるふみみつくきの浦にこそ波の心もゆきてかくめれ
さもといへは我身も捨し朝露のけやすき命千年ともかな
うけひくは嬉しかりけり住吉のつもりのあひき我身ならねと
まゆねかき紐とき垂てまためやもしえや今宵といひてし物を
きますらん人待ほとの手すさみに吾玉とこを打はらひつゝ
乙女子かも引のすかたのみならすふりあふきつる顔も恨めし
諸共にけふそ心はゆきにける人つてならぬむつかたりして
白妙の袖おりかへすことそなきまことも君に衣かされて
逢そめぬよるはうきねの心地して枕をくゝる涙やはひし
明ぬとて君をくるまのわりなさに忍ふ心はくれける物を
立さらすあひみる人のうき物と明行空を思はさるらむ
何かそのあはぬ歎きを思ひけん歸るあしたの心のみこそ
をくりつる人の歎やとまるらん面影にたつあされかみかな

神祇

神さひていはへるほこのみゆる哉こはよも山の人のまもりか
いにしへもまつれる折は毛衣にあけの衣をきるといひけり

慶賀

したしきもうときもいはす世中に心のゆかぬ人のなきかな
さかへ行つかさ位は高濱の千年の春を待としらなん

釋教

とにかくに心は三世にわかるれといへは一つのほとけ也けり
何とてかむなしからぬと思ふこそまことはのりの心なりけり
いさきよく思ふ心のふかゝらは誰か浮世に思ひとまらん
極樂と聞に心のゆきぬれはたれか憂世におもひとまらん
ふたらくのみ山かくれに年をへてすむらん月を思ひこそやれ

無常

思へたゝみなはなすみのはかなさは有かと見れは消ぬる物を
春はもえ秋は散ぬる心地して木の葉よりけにもろき命か

離別

をくれゐて思ひをこせよあかなくの別るゝ道に迷ふ心を

羇旅

道をとみ駒引とめて相坂のせきの清水にしはしみつかへ
いとなみに柴おりかくるかりの庵の軒に引ほす旅の衣か
大ともの松のはひねを枕にてたかしのはまに丸ねしてけり
旅ねしてつかれにけりな左手の弓とるかたのたゆくなるかな
戀せぬに袖そ露けきむさしのゝ淺ちをしなみさぬるよすから

物名

千載佳句

せんさいかく

人なみに百歌よむといかにせんさいかくもなき我身と思へに

扶桑集

ふさうしふ

冬さむみさよもふけゐの浦風に嶋渡りする船やいつらん

短歌

そさのをの　みことのおりに　あしひきの　やまとことはは
あらかねの　つちにも更に　をこりつゝ　みそもしあまり
ひともしに　よみならはして　呉竹の　世々にもたえぬ
ものなれは　花さく春の　あさな〳〵　月すむ秋の
よな〳〵も　情をしれる　人はみな　わかきもいはす
おいぬるも　これに付てそ　夏むしの　おもふ思ひも
あらはるゝ　ことのはしとは　なりにける　かゝるわか世の
風なれは　今もむかしも　これにまた　しく物そなき
こけむしろ　みとりの色の　ふりにけり　ふるきみことの
おり〳〵は　此ことのはを　かきあつめ　なにはの浦の
名に付て　かた〳〵にこそ　わかるめれ　いまわかきみの
このみちを　もてあそはるゝ　ころなれは　かしこきおほせ
くたりつゝ　いへにさま〳〵　定めなく　もゝのうたをそ
たてまつる　其人かすに　ましれとも　世にうみすくる
われなれは　つたのほそ江の　つたなくて　ことはのはなも
にほひなく　おいおとろふる　心地こそすれ

春

尾張守親隆朝臣

いつしかとなるみの浦のかすめるは明行まゝに春や來ぬらん

立歸る春のみとこそ思ひつれ氷も解る物にそ有ける

春日山麓の野へのねのひこそ神の印をまつこゝちすれ

春きぬと霞むに付てしるけれは隔つるかひもあらしとそ思ふ

年をへて立かさなれはみよし野の霞そ山の衣なりける

松しまやをしまか磯の夕霞たな引渡る蜑のたくなは

鶯のはつねは谷をいつれともまつきく人のこゝろにそいる

鶯のねをは何とかおもふへき我身はいつも春をしられは

日かけみぬ岩間隠れのかたそはにまた行けれなこそのふる雪

梅かえによのまの風や吹つらんおほえぬ袖の移り香そする

櫻咲よもの山へのとをめこそいつれもこしの高ねなりけれ

朽にける身の埋木に春くれと花をによその物とこそみれ

矢矧河うへのにたてるかは櫻いつか□きはにならんとすらん

春風にしかの山こえ花ちれはみねにそ浦の波はたちける

かゝみ山光は花のみせけれは散積りてそ久しかりける

とりつなく人もなきのゝ春駒は誰ににけよと荒にけるらん

思ひ出ることもあらしを別れこし何ふる里にかへるかりかね

賤のおか小田のなはしろしめはへて室のはやわせ種かしつ覽

藤の花咲る盛は松ならぬ人のこゝろにかゝるなりけり

行春の影に身をたになしたらは立はなれてやけふはやらまし

夏

ぬきかふる花の袂の移り香のかほるや春の名殘なるらむ

ふしみつや河そひうつき花咲て波はかきねの物とこそみれ

時鳥衣の關にたつねきてきかぬうらみをかさねつる哉

しはしまてまかれふくてふ音はやめきひの中山時鳥なく

朝倉やとはぬになのる郭公木の丸とのゝ名をたかしとや

菖蒲草いつかともなき我身にはもとよりねをはかくとしらすや
五月雨に淀の水かさまさるらしみほのしるしもみえす成行
分て行鹿のをひきのかくれぬはまたしけらぬや野への夏草
しほたるゝ海士のかこ山何としてやゝとも叩く夜はの水鶏そ
流しつる麻のゆふしてかけとめて井堰もけふは夏はらへしつ

秋

秋きぬと心にとめて思へはやまたきに風の身にそしみける
またれつる月の中たちいらぬまにはや船出せよ天のわたせに
いそのかみふるからをのゝ女郎花猶いにしへのすかた也けり
えそかすむつかろの野への萩盛こやにしきゝのたてるなる覧
秋ことに猶たえすこそおとろかせ心なかきは萩のうはかせ
鶉なくくるすの小野の夕ま暮ほのめきたてる女郎花かな
月にこそいとひし物を浮雲の又かりかねをたちかくしつる
あたちのゝお花隠れにほのみゆるしらけや鹿のしるしなる覧
結ひをく愁のをたに露ならはとくる心もあらましものを
播磨かたすまの月よめ空さえてゑしまか崎に雪ふりにけり
浦山し位の山の嶺をいてゝたかくものほる夜半の月かな
いくかへり詠きつらんはしたかのしらふにみゆる秋の夜の月
かく計すむ月影は清けれと結ふに濁る山の井の水
むさし野の葛の青葉のしたはれて空まてさゆる月をこそみれ
唐衣うらむる聲はすかのねのなか〳〵し夜を打あかしつる
いこま山ふもとの野へも霜かれてすみかもみえぬくつわ虫哉
引かすもさやにみわかす夕霧の立のゝ駒は音計して
染わたす時雨ふりての紅のやしほのをかのならのもみち葉
いかにして岩まもみえぬ夕霧にとなせのいかた落てきつらん
住の江の浦にしかへる秋ならはまつとや人の思ひはてまし

冬

けさよりやさえひとりもちはかたなる松葉かきつめ冬籠る覧
枯はつるはしの杭せのわかたちに色つくとみし葉さへ散ぬる
神無月くもらは空とみし程にやかて日くらしみ山への里
降雪にそこともみえぬ東路はけふるや室のやしまなるらん
白妙に成にけらしな津の國のこやのしのやの雪のうはふき
跡たえてあらちの山の雪こえにそりのつなてを引そ煩ふ
けさしもやすはの氷のひまわれてをしうる駒の聲なつむらん
爪木とる跡絶にけり降雪にいかにかすへき小野の炭かま
埋火のあたりは春にほのめけはしたもえ渡る物にそ有ける
暮はつる年の行衛を尋れは我身に積る老にそ有ける

戀

つれなさにうき爪木とは思へともこりぬは人の心なりけり
人しれぬ涙の雨は降そへとおもひはえこそけたれさりけれ
うらしまの箱のあけくれ悔しきはかひなき人の思ひなりけり
更科やきそのあさ衣袖せはみきたるかひなしむれのあはれは
紫のゆはたそむてふさすはひのあひみあはすみ人しるらめや
さゝかにのくものはたてにかく糸のとにかくに社思ひ亂るれ
中々にたつかの弓と成にせは引とゝめてもいはましものを
いかにしてよその思ひをしらせましのもりの鏡君はみすとも
程もなく朽ぬる袖も有物をなのゝゑとのみ思ひけるかな
こやとたにいふとしきかは津の國の幾度なりといはまし物を
はくたちのさやは有へきと思へ共せめて戀しき物にそ有ける
みちのくのとつなのはしにくる綱のたゑすも人にいひ渡る哉

紅にかたしく袖のなりぬれは涙の色のかはるなりけり
東屋のなかやの軒の忍ふ草しのひもあへすしける戀路に
賤のめかはつきにさらすあさ衣いやしき戀に袖もぬれけり
しるならはいかに枕のおもふらんちりのみ積る床のけしきを
袖ふかし過かてなりし移りかのけさ汋匂ふおもかけやなに
よさの海の引てふあみのつなて繩くるをは人のこゝろとも哉
ねやまてはいるとはすれと梓弓ふさてはなそや返るなるらん
しほりつる袖はかりとそ思ひしに身をさへ戀にくたしつる哉

神祇

いはし水ふかきちかひの流れにはいくその人かわたされぬ覽
行かたき佛の道のとをけれはまちかくあとをたるゝなりけり

慶賀

君か代は榮へゆくさは濱ゆふのいく重ねともしられさりけり
いつしかと春のあしたのきゝかきに耳驚かす我身ともかな

釋教

御法をは心はかりにかくれ共いつくとえこそしられさりけれ
四十あまり多くの年を渡りつゝとくはひとつの法にそ有ける
かりそめにかゝると見えし月なれは誠はわしの峯にすむなり
誰もみな胸の蓮のあらはれてひらくる身とはいつかなるへき
うき世にはいかて此たひかへりこてやかて佛の道に入なん

無常

あたになく草葉の露の消ぬるを哀よそにや人のみるらん
つゐとして誰かは果のなかるへきをくれさきたつ程計こそ

離別

何事も思ひもしらぬ身なれともおしきはけふの別なりけり

羇旅

都出ていくよかへぬる相坂の關路のすきはとをさかりぬる
駒なつみ岩まかたそはたとり行木曾のかけ路はつらゝしに鬼
たかやかるくゝめ屋形の竹柱ふしよからぬは旅ねなりけり
日計りをたのめて出ぬ此たひはこくてもたゆきとさの舟踏に
歸るさにかしらも白く成にけりこしちも雪に年もつもりて

物名

かふりはこ

白雪かふりはこしとて庭の面にいかなる風にさそはれぬらん

すゝりはこ

人しれすすりはこのます陸奥のしのふのもけに何にかはせん

短歌

君か代は　こ高き松の　かけなれや　さかへいとゝも
ときはまて　木末はるかに　おいのほり　うれしきことを
みとりなる　ねかひをみつの　しなみれは　そのしたにすむ
われらさへ　雲井も高く　なりぬへし　おほくのとしも
なくれとも　風のけしきも　やはらかに　えたをならさぬ
ことのはゝ　いくちとせとも　かきら（しられイ）さりけり

春

有馬権頭實清

かすめとも雪そ降くるけふは猶雲路に冬や立とまるらん
暮ぬ迚惜みし春の程もなくはしめにも又なりにけるかな
梓弓春の野へなる姫小松君かちとせにひきそへらふる
小山田は雪けの水し深けれはあせ傳ひにそね芹摘ける
春の野のわかなはかりと思ひしに年をそへても摘てけるかな

雪降て去年にかはらぬ山里に春めくものは鶯のこゑ
霞たち浦はもみえす蜑人のあことゝのふる聲のみそする
咲ぬともいはぬはかりそ梅の花匂ふは人につくるなりけり
梅の花梢を渡る春風のかほる香をのみちらさましかは
さほ姫の柳の枝に引糸を吹來る風にまかせてそ見る
しつのめか小田の堤にさす柳しけくもことしはへにけるかな
歸る雁今いく程もなき物を花の盛を過しやはせむ
春風も花まつ程はふかはふけ咲なん後のかゝらすもかな
雲ならはさのみはれすや有へきと思ひわくにそ櫻なりける
水の面に移ふかけを白波のおるさへおしき花さくら哉
櫻花風に散たに有物をいかなる人の手折なるらむ
飛鳥川波の花こそ咲にけれ高間の山に櫻ちるらし
松にしも何かゝるらん藤の花さても常盤にあらぬ物ゆへ
奥山のいはれのつゝし咲ぬれは苔のみとりも色はへにけり
行春を聲ふりたてゝ呼子鳥よふにとまらは我をとらめや

夏

あかて行春の別にいにしへの人や卯月といひはしめけむ
山賤のさらせる布は卯の花のちらぬ限りの物にそ有ける
何しかも人にかたらん時鳥唯しのひねは我に聞せよ
時鳥雲井の聲のほの／＼と夜も明方に鳴わたるかな
時鳥きなく山田の早苗こそとるとはすれと取もやられね
五月雨にあしまの船はあらはれてみえし末葉のかくれ行哉
さはにふす鹿は螢におもなれてともしにめをや合せさるらん
氷ゐてひむろに冬はとまりけりすきにし春もかゝらましかは
おほつかな誰床夏の花なれは見る朝ことに露けかるらん
蓮葉の下にや魚のあそふらんうへなる露の玉そこほるゝ

秋

いつしかとけさは風こそ嬉しけれこゝろに秋の立とおもへは
葎はふやとにしもこそ白露の玉もてかさる秋は来にけれ
彦星のかへさの舟をおしむとや七夕つめはあまのひれふる
手折つる小萩か枝の露しけみ雫に袖のぬれにけるかな
しなかとりいなの篠原はる／＼と心のまゝに置るしら露
秋霧のよつまか野への女郎花わか見にくれは立かくすらん
藤袴ぬしやたれそと思ひしに秋きて後そ綻ひにける
野邊みれはいつかはをける秋もなし聲にて虫のはかるなり鬼
小男鹿の妻にこよひやあはさらん待かれ山のかひになくらん
妻こふる涙なりけり小男鹿のしからむ萩にをける白露
天の戸を長閑に渡る月の船今宵は雲の浪なかりけり
照月に人の心の見ゆる哉哀しれるもあはれしらぬも
久かたの月のさかりになりにけり天の川霧たゝすもあらなん
くのゝあき月はこよひの闇なれは心とゝめて誰かみさらん
衣うつ砧の音にこと寄て寢覺かちなる秋のよな／＼
移ろふにかさへも菊のかはりせは有し花ともいかてしらまし
秋深きあたのおほのゝ露霜にかやかうらはも移ろひにけり
けさみれはしつはた山の梢よりもみしの錦をりて染つる
紅の衣かけたる佐保山とみゆるは峯のもみちなりけり
花薄まねくかひこそなかりけれしらす顔にて秋のくるれは

冬

山里は嵐ふく夜の村時雨窓うつ音にめをさます哉
落つもる紅葉の色はふかけれとあさく成ゆく山の井の水

まはらなる賤かしのやは夜を寒み人こそあらめ風もとまらす
さえ〳〵て風の渡せる浮橋は河瀬にむすふ氷なりけり
あなし河氷ゐにけり巻向の檜原の柚木いかゝくたさん
けさみれはうきねの鴛はあくかれて氷そひたるまのゝ池水
濱風や更行儘に寒からんなこの入江に千鳥妻とふ
雪ふれはくめのさら山今さらに道踏分て人そこえける
みよし野の青根か嶺を白雲の立こめたりとみゆる雪哉
くれて行年の姿は見えれとも身に積りてそ顯れにける

戀

紅葉はの色にかはらす染てけり涙や袖のしくれなるらん
あはすとも情はかけよをのつからむくひにかゝる戀も社すれ
心には我こゝろたに任せれはことはりなりや人のつらさは
いかにせん逢より外の藥なき戀のやまひに沈む我みを
つれもなき人社あらめなそもかくめもあはてのみ夜を明す覧
なかくしも有へき物を世中にいとかく物を思はすもかな
淺ましや涙の川にうきなからいかなる戀のきえせさるらん
是をみよ朝な夕なにあさりする蜑の衣と我かしほれと
命こそあるはあたなれ有えすはかゝる戀路にあはさらましを
荒熊のすむといふなるみ山にも妹たにあるときかはいりなん
日をへつゝ戀は增りて我妹子かつらさしもなそ思ひけたるゝ
夕されはそよとをとする荻の葉の難面人の心なりせは
あしかもと何思ひけん戀侘て我も涙にうきねをそする
風をいたみ浦はによするしき波のしき〳〵人に逢みてしかな
戀わひて心ことはもつきにしをいかにたえせぬ涙なるらん
夢にたにつらくみえすはをのつからまとろむ程は歎かさらまし
いつくにも我身にそへる影のこと戀しき人の離れさりせは
よそにのみみ山か裾のさねかすらさねすて過んことそ苦しき
つれなさを歎きしよりも中々に逢みてそ猶わりなかりける
わきも子に雲隱れする月なれや暫しみぬにもゆかしかりけり

神祇

いさなきのますみの鏡手に取てうみしもしろく照す月よみ
契りたにたかへさりせはわたつみのそこにも人や行道はまし

慶賀

やをか行濱のまさこにくらふとも猶君か代の數やまさらん
君か代に三千代へてなる桃の枝いくかへり迄さかんとすらん

釋教

磯のあまよ底のかつきに思ひしれさこそは罪も深くなるらめ
花なれと主にいはてはと思ふまにおらまほしきもおられさり兒
妹ならぬ人に心やつくさまし戀わすれかひたもたさりせは
何にかは僞はせん二つなきまことののりをたもつ身なれは
さか月の影をたにみすかく計うき世に又はいてしと思へは

無常

命迚あるは有かはおしめともおしまれぬ身を何おもふらん
風そよく淺ちか末の露よりもあたなる物は浮世なりけり

離別

朝たちて別れし人はいまもかもひなのあらのに草むすふらん

羇旅

磯近き蜑のとまやの旅ねには枕の下に涙そをとする
山たかみ石ふむ道のはるけきにたつの馬をも今えてしかな
妹かふる涙もかゝる旅衣野原の露にぬるゝのみかは

播磨かたあかしのとなみさはくめりしはしな出そかこの船人
なそもかく都戀敷思ふらんいつくもかりのやとゝしらすや

物　名

からくしけ

須磨の浦のあまの藻鹽のいとからくしけき思ひに心なややく

かゝみの箱

賤のおよなれやかゝみの箱のなもに暫しかさなん妹か宿迄

短　歌

うは玉の　くろかみ山に　ふる雪の　しろしくろしも
しらすして　和歌の浦はの　もろ人と　人なみ／＼に
立ましり　むなしきなのみ　音羽川　音はかりには
聞ゆとも　誠はさらに　なつ木立　ことのはしまり
かきつめて　もゝくさ迄も　なりにけり　そのあさけりも
はゝかりの　せきやりかたく　おもへとも　君かみことの
すゑなれは　いなはの露も　いなひけと　思ひあまりに
津の國の　なにはのことも　わすられて　よきふしもなき
しほれ芦の　したにはよとむ　水の泡の　もらして後も
よとゝもに　なを消かへり　はつとしらすや

春　　丹後守顯廣（後改俊成）

春きぬと空にしるきは春日山嶺の朝日のけしき成けり
霞たち雪も消ぬや三芳野のみかきか原に若菜摘てん
梅か枝にまつ咲花そ春の色を身にしめそむる初なりける
我そのをやとゝはしめよ鶯のふるすは春の雲につけてき
冬枯のすその原をやきしより早蕨あさりきゝす鳴也
哀にも思ひ立かなかへるかりさすかにみゆる春のけしきた
詠するみとりの空もかきくもりつれ／＼まさる春雨そふる
紫のねはふ横のゝつほすみれま袖につまん色もむつまし
山櫻咲より空にあくかるゝ人の心やみねのしらくも
いか計花をは春もおしむらんかつは我身のさかとおもひて
つらきかなとて櫻の長閑なる春の心にならはさるらむ
ちる花のおしさをしはししらせはや心かへせよ春の山かせ
あちきなや何とて花のおしからん我身は春のよそなる物を
櫻花おもふ餘りにちることのうきをは風におほせつるかな
吹風の心とちらす花ならは木末に殘す春もあれかし
道遠く何尋ぬらん山櫻おもへは法の花ならなくに
櫻花まつとおしむとする程に思ひもあへすくるゝ春かな
さくらさくふもとの小田のなは代は種よりさきに花そ散ける
ますらおは同し麓を返しつゝ春の山田に老にけるかな
行春の霞の袖を引とめてしほる計や恨かけまし

夏

夏くれは衣かへして山かつのうつきかきねもしらかされなり
千早振かもの社のあふひ草かさすけふにも成にけるかな
さらぬたに臥程もなき夏の夜にまたれてもなく時鳥哉
時鳥鳴行方に添てやる心いく度聲をきくらむ
さ月こそなれか時なれ時鳥いつをまてとて聲おしむらん
夏も猶哀はふかし橘の花ちるさとに家ゐせしより
五月雨はたくもの煙打しめりしほたれまさる須磨の浦人
庭の面のこけちの上にからにしきしとれにしける床夏の花
小舟さし手折て袖に移しみんはすの立葉の露のしら玉

いつとてもおしくやはあらぬ年月を御禊に捨る夏の暮かな

秋

八重葎さしこもりにし蓬生にいかてか秋の分てきつらむ
荻の葉も契有てや秋風のをとつれそむる妻となるらん
七夕の舟路はさしも遠からしなと一年にひとわたりする
みしふつき植し山田にひたはへて又袖ぬらす秋は來にけり
何事も思ひすつれと秋は猶のへのけしきのねたく有哉
夜もすから妻とふ鹿のむれ分にあたら眞萩の花ちりにけり
身のうさも誰かはつらき淺ちふに恨てもなく虫の聲かな
夕されは野への秋風身にしみて鶉なくなり深草の里
露繁き花のえ殊にやとりけり野原や月のすみかなるらん
石はしる水の白玉かすみえて淸瀧川にすめる月かけ
月よりも秋は空こそ哀なれはれすはすまむかひなからまし
月の輪あまたへぬれとおもほえす今宵計の空のけしきは
いかにして袖に光のやとるらん雲井の月はへたてこし身を
秋の月又もあひみん我心つくしなはてそ更科のやま
月も日もわかれぬものを秋くれに夜をなかしとも誰定めけん
夢さめて後の世までの思出にかたるはかりもすめる月かな
此世にはみるへきもなき光かな月もほとけのちかひならすは
衣うつひゝきは月のなになれやさえ行まゝにすみのほるらん
山河の水のみなかみ尋きてほしかとそみるしら菊のはな
本ゆひの霜置そへて行秋はつらきものからおしくも有かな

冬

いつしかと冬の印に立田河紅葉とちませうす氷せり
まはらなる槇の板やに音はしてもらぬ時雨は木の葉なりけり
風さやくさよの寝覚の淋しさにはたれ霜ふりつるさはになく
月きよみ閑なく沖つかせ吹井のうらの明方のそら
月さゆる氷のうへに霰ふり心くたくる玉川のさと
空にみつうれへの雲の重りて冬の雪とも積りぬるかな
雪ふれは道絶にけり吉野山花をは人の尋しものを
冬の夜の月と雪とをみる程に花の時さくおもかけそたつ（ほゆるかなイ）
をの山や燒すみ竈にこり埋む爪木とゝもに積る年哉
行年をおしめは身にはとまるかと思ひいれてやけふを過まし

戀

忍ふよりやかて心そ移りぬる戀は色なるものにそ有ける
ちらはちれいはせの杜の木枯につたへやせまし思ふことのは
年ふれと人の心はつれなくて涙は色のかはりぬるかな
あちきなや思へはつらき契かな戀は此世にもゆるのみかは
戀しともいはゝをろかになりぬへし心をみする言のはもかな
ふかくしも思はぬ程の思ひたにけふりのそことなる成ものを
たのめすは中々世にもなからへて久敷ものは思はさらまし
奥山のいはかき沼のうきぬなは深き戀路に何亂れけん
人心うき田の杜に引しめのかくてややかてやまんとすらん
涙川そてのみわたにわきかへりやる方もなき物をこそ思へ
露結ふまのゝ小菅のすか枕かはしてもなそ袖ぬらすらん
戀をのみしかまの市に立民のたえぬ思ひに身をは（ヤイ）かへてん
いかにせんあまのさかてを打かへし恨ても猶あかすもある哉
忘草つゐにこしかと住吉のきしにしもこそそてはぬれけれ
思ひ侘見し面影は扨置て戀せさりけん折そ戀しき
いか計我を思はぬ我心我ためつらき人をこふらん

人をのみなとか恨みんうきを猶こふる心もつれなかりけり
戀しきに憂もつらきも忘られてこゝろなき身になりにける哉
いとふへきこはまほろしの世中をあな淺ましの戀のすさひや
しき忍ふ床たに絶ぬ涙にも戀はくちせぬものにそ有ける
はしめなき昔思ふそ哀なるいつより戀にむすほゝれけん

神祇

幾かへり波のしらゆふかけつらん神さひにける住の江の松
おもふことみわの社に祈りけん杉はたつぬるしるしのみかは

慶賀

君か代はをのゝえ朽し仙人の千度かへらん時もかはらし
まことにや松は十かへり花さくと君にそ人のとはんとすらん

釋教

華嚴

朝日さす高ねの花は匂へとも麓の人はしらすそ有ける

方等

聞そめし鹿の薗にはことかへて色々になる四方のもみち葉

盤若

雲もみなむなしと説に空晴て月計こそすみまさりけれ

法華

はるかにも匂ひけるかな法の花後の五百とせ猶盛なり

涅槃

おしむかな月の御顔も影消て鶴の林にけふりたえけん

無常

世中を思ひつらねて詠れはむなしき空に消るしら雲
常にすむわしのみ山の月たにも思ひしれとや雲かくれける

離別

曉と聞て出つる別路をやかてくらすは涙なりけり

羇旅

浦つたふ礒のとまやの梶枕きゝもならはぬ波のおとかな
遙なるあしやの沖のうきねにも夢ちは近き都なりけり
しはつ山ならの下葉を折敷てこよひはされん都戀しも
我思ふ人にみせはや諸共にすみたかはらの夕暮の空
すみ馴しすみかも常の栖かは旅はたひとも何思ふらん

物名

かすみ　やなき　さくら

花の色のあかすみゆれは歸らめやなきさの宿にいさくらしてん

月　すゝ虫　もみち

峯つゝき山へはなれすすむしかもみちたとる也秋の夕暮

短歌

新勅
しきしまや　やまとしまねの　かせとして　ふきつたへたる
ことの葉は　神の御代より　かはたけの　世々になかれて
たえせねは　今もはこやの　やまかせの　枝もならさす
しつけきに　むかしのあとを　たつぬれは　峯の木末も
かけしけく　四のうみにも　波たゝす　わかのうら人
かすそひて　もしほのけふり　たちまさり　行すゑまての
ためしとそ　しまの外にも　きこゆなる　是を思へは
君か代に　あふくま河は　うれしきを　みはたにかゝる
埋木の　しつめることは　から人の　三代迄あはぬ
歎きにも　かはらさりける　身の程を　おもへはかなし
かすかやま　峯のつゝきの　松かえの　いかにさしける

すゑなれや　きたのふちなみ　かけてたに　いふにもたらぬ
しつえにて　した行水に　こされつゝ　五つの品に
としふかく　十とせ三とせも　へにしより　蓬のかとに
さしこもり　道の芝草　おひはてゝ　春のひかりは
こと遠く　秋は我身の　うへとのみ　露けき袖を
いかゝとも　とふ人もなき　まきの戸に　猶有明の
月かけを　待ことかほに　詠めても　おもふ心は
おほ空の　むなしき名をは　をのつから　殘さんことも
あやなさに　なにはのことも　津の國の　芦のしほれの
かりすてゝ　すさひ集さすかにのみそ　なりにしを　きしうつ波の
立かへり　かゝるみことの　かしこさに　入江のもくつ
かきつめて　とまらんあとは　陸奥の　しのふもちすり
亂れつゝ　忍ふはかりの　ふしやなからん

反歌

山川のせゝのうたかた消さらはしられん末の名こそおしけれ

春　　散位清輔

いか計年の通路近けれは一夜の程にゆきかへるらむ
いつしかとかすまさりせは音羽山音はかりにや春をきかまし
朝霞ふかくみゆるや煙たつ室のやしまの渡り成らむ
谷ふかく鳴鶯の一聲におもはぬ山にけふもくらしつ
白妙の袖ふりはへて春の野の若菜は雪も摘にそありける
梅の花同しねよりはおひなからいか成枝の咲おくるらん
梅の花君まつよひのうたゝねに人たのめなる匂ひやはする
ちれはうし匂へは嬉し梅の花思ひわつらふ春の風かな
我かとの五もと柳いかにしてやとによそなる春をしるらん
わきもこか裾野になひく玉柳打たれかみの心地こそすれ
みこもりに芦の若葉やもえぬらん玉江の沼をあさる春駒
神なひのみ室の山は春きてそ花のしらゆふかけてみえける
年をへて我身はあらすなりゆけと花の姿はかはらさりけり
惜む身そけふともしらぬあたにちる花は何れの春にたえせし
梓弓春の山へにいりぬれは身のいたつきもしられさりけり
霞はれ空にさえたる月影は春も消せぬこほりなりけり
佐保姫の紅そめの岩つゝし春の風にそふかすへらなる
こやの池の汀に立る杜若波のおれはやまはらなるらん
山吹の花のつまとは聞れともうつろふなへになく蛙かな
大かたも春のくるゝはおしきかと花なき宿の人に問はや

夏

おしむともいなん春をはいかゝせん山時鳥はやもなかなん
榊葉にゆふして掛てやかつかみ祭かきれとみゆる卯の花
何事をぬれきぬにきて時鳥たゝすの杜に鳴あかすらん
早苗をは人にまかせて我はまつたこの心をとらむとそ思ふ
時しもあれ水のみこもを刈あけてほさてくたしつ五月雨の空
ことはりやさ社はつらく思ふらめともしの鹿のめをも合せぬ
夏の野をゆすゑふりたて駒なめて朝ふませ行人やたかこそ
をのつから涼しくもあるか夏衣ひもゆふ立の雨のなこりに
河社波のしめゆふ水の面は神のこゝろもすゝしかるらん
川のせにおふる玉もの行水になひきてもする夏秡哉

秋

山里は庭のむら草うらかれて蟬のなくねも秋めきにけり

人をのみなとか恨みんうきを猶こふる心もつれなかりけり

戀しきに憂もつらきも忘られてこゝろなき身になりにける哉

いとふへきこはまほろしの世中をあな淺ましの戀のすさひや

しき忍ふ床たに絶ぬ涙にも戀はくちせぬものにそ有ける

はしめなき昔思ふそ哀なるいつより戀にむすほゝれけん

神祇

幾かへり波のしらゆふかけつらん神さひにける住の江の松

おもふこととみわの社に祈りけん杉はたつぬるしるしのみかは

慶賀

君か代はをのゝえ朽し仙人の千度かへらん時もかはらし

まことにや松は十かへり花さくと君にそ人のとはんとすらん

釋教

華嚴

朝日さす高ねの花は匂へとも麓の人はしらすそ有ける

方等

聞そめし鹿の薗にはことかへて色々になる四方のもみち葉

盤若

雲もみなむなしと説に空晴て月計こそすみまさりけれ

法華

はるかにも匂ひけるかな法の花後の五百とせ猶盛なり

涅槃

おしむかな月の御顔も影消て鶴の林にけふりたえけん

無常

世中を思ひつらねて詠れはむなしき空に消るしら雲

常にすむわしのみ山の月たにも思ひしれとや雲かくれける

離別

曉と聞て出つる別路をやかてくらすは涙なりけり

羇旅

浦つたふ磯のとまやの梶枕きゝもならはぬ波のおとかな

遙なるあしやの沖のうきねにも夢ちは近き都なりけり

しはつ山ならの下葉を折敷てこよひはされん都戀しも

我思ふ人にみせはや諸共にすみたかはらの夕暮の空

すみ馴しすみかも常の栖かは旅はたひとも何思ふらん

物名

かすみ　やなき　さくら

花の色のあかすみゆれは歸らめやなきさの宿にいさくらしてん

月　すゝ虫　もみち

峯つゝき山へはなれすすむしかもみちたとる也秋の夕暮

短歌

新勅

しきしまや　やまとしまねの　かせとして　ふきつたへたる
ことの葉は　神の御代より　かはたけの　世々になかれて
たえせねは　今もはこやの　やまかせの　枝もならさす
しつけきに　むかしのあとを　たつぬれは　峯の木末も
かけしけく　四のうみにも　波たゝす　わかのうら人
かすそひて　もしほのけふり　たちまさり　行すゑまての
ためしとそ　しまの外にも　きこゆなる　是を思へは
君か代に　あふくま河は　うれしきを　みはたにかゝる
埋木の　しつめることは　から人の　三代迄あはぬ
歎きにも　かはらさりける　身の程を　おもへはかなし
かすかやま　峯のつゝきの　松かえの　いかにさしける

すゑなれや　きたのふちなみ　かけてたに　いふにもたらぬ
しつえにて　した行水に　こされつゝ　五つの品に
としふかく　十とせ三とせも　へにしより　蓬のかとに
さしこもり　道の芝草　おひはてゝ　春のひかりは
こと遠く　秋は我身の　うへとのみ　露けき袖を
いかゝとも　とふ人もなき　まきの戸に　猶有明の
月かけを　待ことかほに　詠めても　おもふ心は
おほ空の　むなしき名をは　をのつから　殘さんことも
あやなさに　なにはのことも　津の國の　芦のしほれの
かりすてゝ　すさひ集さすかにのみそ　なりにしを　きしうつ波の
立かへり　かゝるみことの　かしこさに　入江のもくつ
かきつめて　とまらんあとは　陸奥の　しのふもちすり
亂れつゝ　忍ふはかりの　ふしやなからん

反歌

山川のせゝのうたかた消さらはしられん末の名こそおしけれ

春　散位清輔

いか計年の通路近けれは一夜の程にゆきかへるらむ
いつしかとかすまさりせは音羽山音はかりにや春をきかまし
朝霞ふかくみゆるや煙たつ室のやしまの渡り成らむ
谷ふかく鳴鶯の一聲におもはぬ山にけふもくらしつ
白妙の袖ふりはへて春の野の若菜は雪も摘にそありける
梅の花同しれよりはおひなからいか成枝の咲おくるらん
梅の花君まつよひのうたゝねに人たのめなる匂ひやはする
ちれはうし匂へは嬉し梅の花思ひわつらふ春の風かな
我かとの五もと柳いかにしてやとによそなる春をしるらん
わきもこか裾野になひく玉柳打たれかみの心地こそすれ
みこもりに芦の若葉やもえぬらん玉江の沼をあさる春駒
神なひのみ室の山は春きてそ花のしらゆふかけてみえける
年をへて我身はあらすなりゆけと花の姿はかはらさりけり
惜む身そけふともしらぬあたにちる花は何れの春にたえせし
梓弓春の山へにいりぬれは身のいたつきもしられさりけり
霞はれ空にさえたる月影は春も消せぬこほりなりけり
佐保姫の紅そめの岩つゝし春の風にそふかすへらなる
こやの池の汀に立る杜若波のおれはやまはらなるらん
山吹の花のつまとは聞れともうつろふなへになく蛙かな
大かたも春のくるゝはおしきかと花なき宿の人に問はや

夏

おしむともいなん春をはいかゝせん山時鳥はやもなかなん
榊葉にゆふして掛てやかつかみ祭かきれとみゆる卯の花
何事をぬれきぬにきて時鳥たゝすの杜に鳴あかすらん
早苗をは人にまかせて我はまつたこの心をとらむとそ思ふ
時しもあれ水のみこもを刈あけてほさてくたしつ五月雨の空
ことはりやさ社はつらく思ふらめともしの鹿のめをも合せぬ
夏の野をゆすゑふりたて駒なめて朝ふませ行人やたかこそ
をのつから涼しくもあるか夏衣ひもゆふ立の雨のなこりに
河社波のしめゆふ水の面は神のこゝろもすゝしかるらん
川のせにおふる玉もの行水になひきてもする夏祓哉

秋

山里は庭のむら草うらかれて蟬のなくねも秋めきにけり

おもひやる心も冷し彦星のつま待宵の天のはころも
あたしのと人はいへとも女郎花來る秋ことに色もかはらす
女郎花あたには誰も思はねな何なあかすと露けかるらん
我やとの本あらの萩の花さかりたゝ一村の錦とそ見るゝ
薄霧のまかきの花の朝しめり秋は夕と誰かいひけん
秋の野の萩の錦にとちられて駒うちいれん隙たにもなし
立田姫かさしの玉の緒たよはみ亂れにけりとみゆるしら露
高砂の尾上の風やさむからん裾野の原に鹿そなくなる
霧の間にあかしのせとに入にけり浦の松風音にしるしも
鹽竈の浦吹風に霧はれて八十嶋かけてすめる月影
筑波山しけきかこなし秋の夜の月のいるにはさはらさりけり
おもふ事ありとなけれは秋の夜の朝戸あけてそ詠られける
夜な殘す老の寐覺におきゐつゝ秋のともし火かゝけつくしつ
日にそへて聲よはりゆく蛬いまいくよとてつゝりさすらん
限りなきよはひのみかはみるまゝに心ものふるしら菊の花
春なからとしは暮ぬと思ひしは紅葉みるにそくやしかりける
立田山松のむら立なかりせはいつくかのこるみとりならまし
山下の風なかりせは我宿の庭の紅葉なたれはらはまし
なく虫の命とみゆる秋なれはくるゝはさこそかなしかるらめ

冬

山賤のよもきのかとも霜枯て風もたまらぬ冬は來にけり
君こすは獨やねなんさゝの葉のみ山もそよにさやく霜夜な
さゆる夜に衣かたしき思ひやる冬こそまされ人のつらさは
我邊には霰ふるらし蜑人のかつくしら玉數やそふらん
四方の山初雪今宵つもるらしあくれと消ぬ嶺の横雲
消るなや都の人はおしむらんけさ山里にはらふしら雪
白妙の雪吹おろす風こしの峯より出る冬の夜の月
すはの海に氷すらしも終夜きそのあさ衣さえ渡るなり
炭竈のけふりにかすむ小野山は年にしられぬ春や立らん
はかなくて今年もけふに成にけり哀に積る我よはひ哉

戀

我戀ないはてしらする由もかなもらさはなへて世にも社しれ
なのつから行合のわせな假初にみし人ゆへやいねかてにせん
七わたの玉にも緒なはぬく物なおもふ心ないかてとなさむ
難波女のすくもたく火の下こかれ上はつれなき我身也けり
逢事はいなさほそえの身なつくしふかき印もなき世也けり
心こそおもはすかほなつくれとも落る涙はかなはさりけり
年ふれとしるしもみえぬ我戀や常盤の山の時雨なるらん
戀しなん命は露も思はれとためしにならん名こそおしけれ
君かことなにはのことないなひてん思ひ絶れといはむ外には
逢ことのかたき岩ともなりけるないかなる戀の身な碎くらん
あちきなや思ふかたこそあし引の山櫻とも身なはすてしか
恨めしと思ひねにのみねらるれは夢さへさ社つらくみえけれ
心にはいは木ならねと思ふらんたゝあやにくにかけぬ情か
移り香は薄くなれとも日なへつゝ戀しき事そ身にはしみける
初かりのこすけの枕作りなけとかひこそなけれ妹しまされは
かくはかり思ふ心は隙なきないつくよりもる涙なるらむ
朝夕にみるめなかつくあまたにも恨は絶ぬ物とこそきけ
ますらおの鳩ふく秋やはてぬらん忍ひし人の音たにもせぬ
なか〱に思ひ絶なんと思ふこそ戀しきよりも苦しかりけれ

露深き淺まの野らにをかやかる賤の袂もかくはしほれし（ぬれしや イ）

神祇

天の下のとけかれとや榊葉を三笠の山にさしはしめけん

祝子かさす玉くしのねきことに亂るゝ神もあらしとそ思ふ

慶賀

君か代は遙に見ゆるわたつ海の限れるはてもあらしとそ思ふ

鶴龜のよはひもあかす何にかも君をよそへん□□□□□□□

釋教

華嚴

世中は千種の花の色々もこゝろのねよりなるとこそきけ

大集經

徒にはかなき道に入にけりかへす〳〵もけふそくやしき

大品經

何事もむなしき夢と聞物を覺ぬ心に歎きつるかな

法華

ふたつなき御法の船そ頼もしき人をもらさて渡すと思へは

涅槃經

うつもれてくまなき玉はあるものを塵を拂はて願ふはかなさ

無常

朝顔の暮を待ぬもおなしこと千とせの松にはてしなけれは

のとけかれ月のねすみよ露のみをやとす草葉の程もなき世に

離別

行すゑを祝ひて出る別路にこゝろもなきは涙なりけり

羇旅

わか獨いそく旅とそ思ひつる夜をこめてのみ立霞かな

はしりゐのかけひの水の涼しさに越もやられぬ相坂の關

夜もすから人まつ虫に心なく草の枕をかりてけるかな

松かねに霜うち拂ひめもあはて思やる心やいもか夢にみゆ覽

たひつとにもたるかれひのほろ〳〵と涙そおつる都思へは

物名

からにしき

むつこともつきて明ぬと聞からにしきの羽かき恨めしき哉

こまにしきを句のかみにをきてよめる

こん世にも又こんよにも悔からすしのはしかりし昔は忘れし

短歌

あしねはふ　うき身の程を　つれもなく　おもひもしらす
すくしつゝ　ありへけるこそ　うれしけれ　世にもあらしの
山かせに　たくふ木葉の　行衛なく　ありなましかは
松か枝に　千代に一たひ　さくはなの　希なる中に
いかてかは　けふはあふみに　ありといふ　朽木のそまに
くちゐたる　谷のむもれ木　なにことを　思ひ出にて
呉竹の　すゑの代までも　しられまし　恨をのこす
事はたゝ　と渡る船の　とりかちの　とりもあへねは
をくあみの　しつみおもへる　こともなく　木のしたかくれ
ゆく船の　淺き心に　まかせつゝ　かきあつめたる
くちはには　よしもあらぬを　伊勢の海の　あまのたくなは
長き世に　とゝめんことも　やさしかるへき

春　待賢門院堀河

暮はてゝいつくまて行年なれはよのまにけさは立歸るらん

雪ふかき岩のかけ道跡たゆるよし野の里も春は來にけり
ときはなる松もや春をしりぬらん初音をいはふ人に引れて
霜かれはあらはにみえし芦のやのこやのへたては霞なりけり
つらゝゐし岩まの波も打とけてともにをとなふ谷の鶯
笛竹のねくらにならす鶯はさへつる聲もことにや有らん
吹過る風にたくへと梅の花にほひは袖にとまりぬるかな
こしかたにかりきにけりと聞ゆらん歸る聲々雲井へたてつ
まつ程の久しきよりも櫻花匂ふさかりのかゝらましかは
いつかたに花咲ぬらんと思ふより四方の山へにちるこゝろ哉
花さかぬ梢は春の色なからさくらをわきてふれるしら雪
白雲とみねの櫻はみゆれ共月の光はへたてさりけり
三輪の山花のさかりを尋ねつゝとふ人しけき杉立るかと
山風に岩こす瀧の白浪とみゆるは花のちるにそ有ける
花よりもあたなる身とはしりなから春に心をつくすへしやは
君か代のかさしにおらん三千とせのはしめにさける桃の初花
やとちかき笆の內に咲をこそつほすみれとはいふへかりけれ
雲とみて色をそ頼むかのきしのむかへる松にかゝる藤波
何のため暮行春のおしからん花も匂はすむもれ木の身に

夏

あかさりし花の匂ひは郭公まつね覺にも忘れやはする
時鳥雲井を過る一聲はそらみゝかとそあやまたれける
待程にをとりやはする時鳥かたらふ聲のあかぬ名殘りは
布さらす賤かかきねに咲ましりあなうの花やみこそわかれね
宿毎のつまにひかるゝあやめ草たかよとのにかれはとまる覽
五月雨の日をふる宿の水の面はみくさもとらぬ池かとそみる（思・イ）
まこも草たかせのよとにしけれとも末葉もみえぬ五月雨の比
夏の夜も月の光のすゝしさにやとれる清水結はてそみる
色々の花に心はそめしかといまははちすのうへをこそおもへ
身をすてゝ（はイ）人かとたにも思はぬを何にすかぬくみそきなる覽

秋

秋のくるけしきの杜の下風にたちそふものは哀なりけり
七夕の逢せ絕せぬ天河いかなる秋かわたりそめけん
かされてもあかぬ思ひやまさるらんけさ立歸る天の羽ころも
宮城野に朝たつ鹿も心せよもとあらの小萩花咲にけり
秋かせに何なひくらん女郎花吹はかれ行つまとしらすや
はかなさを我身の上によそふれは袂にかゝる秋の夕露
吹風も露もかはらぬ草むらになとかるかやのわきて亂るゝ
相坂の關の杉原露こめてたちともみえぬゆふかけのこま
水の面にかきなかしたる玉章はと渡る鴈の影にそ有ける
さらぬたに夕さひしき山里の霧のまかきにおしかなく也
弓張の月はいつともわかれとも引かへてけり秋のけしきは
月清み千種の花の色はへて光をそふる露のしら玉
住かひもなき夜なからの思ひ出は浮雲かけぬ山の端の月
行月のいかにめくれは秋の夜のなかにこよひは照まさるらん
雲の浪かけてもよるとみえぬ哉あたりをはろふ月のみ船は
鵲ふかく天の川水すみまさりなになかれたる月のさやけさ
殘なくわかよふけぬと思ふまにかたふく月にすむ心かな
秋深きねさめをいかになくさめむともなふ虫の聲もかれゆく
立田姫もろこし迄もかよへはや秋の梢のからにしきなる
行秋をおしむにさ夜の更ぬれは冬のさかひに成やしぬらん

冬

秋はてゝ花も殘らぬませの内に一本菊のたくひなきかな
神無月木の葉も霜にふりはてゝ嶺の嵐の音そ閑しき
晴くもる時雨の空を詠ても定めなき世そ思ひしらるゝ
芦そよく鹽風さむみかた岸の入江につたふあちの村鳥
降雪にそのゝなよ竹折臥てけさは隣の隔なきかな
槇の戸のひましらむとて明たれは夜ふかく積る雪にそ有ける
小夜更てかへす調へのことの音も身にしみまさる朝くらの聲
昔なと年のおはりをいそきけん過れはおいとなりにけるかな
山かつのそとものまつもたてゝけり千とせといはふ春の迎へに

戀

かくとたにいはぬに茂き亂芦のいかなる節にしらせそめまし
たてなから數のみ積る錦木のともに我名も朽ぬへきかな
袖ぬるゝ山井の清水いかてかは人めもらさてかけをみるへき
あら磯の岩に碎る波なれやつれなき人にかくる心は
わきかへり思ふ心は有間山たえぬ涙や出ゆなるらん
なかゝらぬ心もしらす黑髮の亂てけさは物をこそ思へ
つれなさをいかに忍ひてすくしけん暮待程もたへぬ心に
夢のことみしは人にも變らぬにいかにちかへてあはぬなる覽
疑ひし心のつらのまさしさはとはぬにつけて先そしらるゝ
うき人を忍へしとは思ひきや我心さへなとかはるらむ
あはぬまは浦のはまゆふ恨みつゝかく言の葉を夢にたにみす
待わひて幾よな〳〵を明すらん鴫の羽かき數しらぬまて
たのめすはうき身のとかと歎つゝ人の心をうらみさらまし
夢計り思はぬ人はかへにおふるいつまて草のいつまてかみん
さゝかにのいか樣にかは恨むへきかき絕ぬるも人のとかゝは
人にのみすみつく袖をかされつゝこふる印も君はしらしな
忘れにし人はなこりもみえれとも面影のみそ立もはなれぬ
深くのみ契りしことを思ひ出に音はしてまし山河の水
逢よなきなけきの積る苦しさをとへかし人のこりはつる迄
あひみても心はかりは通路の音にきゝても哀しらなん

神祇

いはし水流れの末そたのまるゝ心もゆかぬみくつなれとも
色々にうき身を祈るぬさなれは手向る神もいかゝみるらん

慶賀

君か代は枝もうこかす松風に久しきことをしらふなるかな
わたつ海ののりにたとふる花咲て八百萬代は君そかそへん

釋教

あま小船あみたに心かけつれは西のきしにはうけや引覽
皆人の道ひかるなり蓮の糸を唯一筋に賴てそふる
長きよにまよふさはりの雲晴て月のみかほをみるよしもかな
なをさりに手折し花の一枝にさとりひらくる身とそ成へき
二なき玉をこめたる木ゆひのとくことかたき法とこそきけ

無常

夢の世を驚きなからみる程はたゝまほろしの心地こそすれ
朝露は消ても暮にむすふめり猶玉のをそはかなかりける

離別

行人もおしむ涙もとゝめかれ忘るなとたにえこそいはれね

羇旅

道すから心も空に詠やる都のやまの雲かくれぬる

故郷におなし雲井の月をみは旅の空をや思ひいつらん

忍ふへき都ならねとしかすかのわたりもやらす哀なる哉

旅の空をのつからとや思ふらん宿かりかねのちかく聞ゆる

はかなくも是を旅ねとおもふ哉いつこもかりの宿とこそきけ

物名

きり／＼す

秋はきりきりすきぬれは雪降てはるゝまもなきみ山への里

たるなむし

君かためむれてきたるなむしろたの鶴の毛衣千代をかされて

短歌

ときしらぬ　谷のむもれ木　くちはてゝ　むかしのはるの
戀しさに　なにのあやめも　わかすのみ　かはらぬ月の
かけみても　時雨にぬるゝ　袖のうらに　しほたれまさる
あまころも　哀をかけて　とふひとも　波にたゝよふ
つり船の　渚はなれにし　よなれとも　きみにこゝろを
かけしより　しけきうれへを　わすれくさ　わすれかほにて
すみの江の　松の千とせの　はる／＼と　梢はるかに
さかゆへき　ときはのかけを　たのむには　なくさのはまの
なくさみて　ふるのやしろの　そのかみに　色ふかゝらて
忘れにし　紅葉の下葉　のころやと　おひその杜に
たつぬれと　今はあらしに　たくひつゝ　霜かれ／＼に
おとろへて　かきあつめたる　みつくきに　あさき心の
かくれなく　なかれてのなを　をし鳥の　うきためしにや
ならんとすらん

上西門院兵衛

春

あたらしくかはれる年とおもへとも歸りし春のきたる也けり

音絶し瀧の白糸つらゝとけわくにそ春のくるはみえける

なにことを春の印に出つらん雪消やらぬ谷のうくひす

春をへてあまたの年をつむ人もともにわかなと思はましかは

杉たてる門をもいかゝ尋ぬへきかすみこめたる三輪の山本

花もまた匂ひあへぬに散くれは降にし雪の殘りなりけり

いつかたと梅さくやと（里イ）はしられ共匂ひは風にたくひてそくる

みとりなる波のよるかとみゆる哉河添柳なひくしつえ（けしきイ）は

吹風はおりもわかしをいかなれは春しももゆる野への蕨そ

ことならは花のさかりを□歸れこし路も同しかりのやとりそ

たつね行山へにかゝる白雲のはれぬにしるし花さかりとは（のさかりはイ）

櫻花ときはの物にあらすとも春の程たに匂はましかは

百千とり木傳ふさへもつらきかな羽風にちるもおしき花ゆへ

おりてみる（本イ）枝をは風もしらなくに心と花はちるにそ有ける

櫻花木の下ことに吹ためてをのかものとや風のみるらん

花の色に光さしそふ春のよそ木の間の月はみるへかりける

朝ことにあれ行やとの庭の面にともにすみれの花そ咲ける

松嶋やかゝれる浪のしからみとみゆるは藤のさかりなりけり

山吹の花に心のうつれはや井手の里人すみはしめけん

散花の霞のうらに浪よるを暮行春のとまりとやせん

夏

花にのみ染し心のかはられは夏のころもは人めなりけり

神代より色もかはらぬ葵草いつかいつきのかさしそめけん

聞ぬ夜にかはらさりけり時鳥只一聲のあかぬねさめは
こもり江の汀のあやめ引かへて玉のうてなにかゝるけふかな
五月雨のをやまぬ程そかつまたの池もむかしのけしき也ける
あけなから槇の板戸を心みん夜半の水鶏は猶やたゝくと
とり／＼に山田の早苗いそく也穗にいてん秋もしらぬ命と
夏の夜は月の光のさしなからいかに明ぬるあまの岩戸そ
夏衣かさぬはかりに冷しきは結ふいつみに秋や立らん
かそふれは夏も末はに成にけり麻のたち枝やかりにゆかまし

秋

なつかしと思ひし水のあたりにはなか／＼秋のくるも侘しな
待わたり月日をおほく過しきて逢瀬程なき天の川浪
さらてたに風に亂るゝ糸萩を玉まくくつのうらめしき哉
あたなりといはれ野に咲女郞花露にぬれ衣きるにや有らん
きもあへすそよとそ荻のこたふなる同し心に風やふくらむ
餘所めには玉しく野邊とみつれともわけてきたれは道芝の露
立とまる人はかたのゝ花薄なにほに出てまねくなるらん
淺茅生にやとる露をは置なからたれ松虫の聲にか有らん
蛬かへの中にそ聲はする蓬か杣に風やさむけき
むら／＼に野邊の錦のみえつるはへたつる霧のたえまなり兒
暮ぬとは入相の鐘に聞つれとひるかとそみるあり明の月
秋の夜と思ひなからも月影を降しく庭の雪かとそみる
いくよしも住はつましき世中に月に心をなにとゝむらん
露なからおきてみれとも朝かほの日影まつまは程なかりけり
大かたの哀れそへはやさをしかの妻こふるねも秋はしのはぬ
おとろかすひたの音にや終夜稲葉に露も置あかすらん
咲そめてまた色つかぬ白菊にかねて心はうつろひにけり
長月の有明の空のけしきをはおくの夷も哀とやみむ
紅に秋のけしきは成にけりみとりにみえし衣手のもり
あすしらぬ身をは思はて廻りこん秋の別を何なしむらん

冬

山里のすかきの宿の下さえて冬きにけりとしらせかほなる
なやむまも聞わかれぬは終夜木葉ふりそふ時雨なりけり
花咲し秋のさかりは過はてゝ霜をいたゝく野邊の冬草
落積る木の葉は風にはらはれてあられ玉しく庭の面哉
さくら山梢の雪のきえぬまは折たかへたる花かとそみる
をしなへてかのこまたらにみゆる哉雪むら消るいなのさゝ原
何とかは浦つたふらんさよ千鳥いつくも波のかゝるなきさを
高せ舟さはりし芦はかれぬれと氷滯もえこそゆかれね
冬くれは我身のやくとすみかまの煙になるゝ小野の山人
身につもる年の數をはしらすして花みん春を先いそくかな

戀

さゝれ石の中の思ひのいかにして打出ぬさきにもゆるなる覧
岩間行山の下水せき侘てもらす心のほとをしらなん
かきなかす袖のみぬれて水莖の波立かへり跡をみるかな
よとゝもにとくるよもなき心哉戀の亂れにむすほゝれつゝ
つれなしと人をは何か思ふへきこりす忍ふは我身まされる
流れても昔にあふせの有といはゝ淵を捨て身は投てまし
さりともと頼にかゝる命にて戀の病はしなれさりけり
我袖の涙や鳰の海ならんかりにも人のみるめなけれは
君にさはつらしとみえん人もかな戀はくるしき物としらせん

宵のまも待に心やなくさむと今こんとたに頼め置なん

引かへてつらき心やつれなしと我をうらみしむくひなるらん

我戀に人のつらさをなすらへて同し心になすよしもかな

かはしても何にかはせん夢計めもあひかたきよるのさ衣

心にもあらて軒はの忍ふ草しのふ思ひは露もかはらす

思はしと思ひすつれとかひもなく戀は身をこそ離れさりけれ

何せんに空たのめとて恨けん思ひたえたるくれも有けり

古は力車につみけるを我戀草はやるかたもなし

千世迄（とイ）もたのめし折の言の葉はかくかれはてん物とやはみし

忘れなんと思ふにつけて焦るれは戀はけつへき方もしらすな

うかりける世々の契を思ふにもつらきは今のこゝろのみかは

神祇

とりわきてふるの社といふめるはいかなるよにか天くたり劔

うなひこか垣ねにいはふをやしろも思ふ事たにならは頼まん

慶賀

幾千世とかけてもいかゝかそふへきはかりもしらぬ君か齢は

まことにや八千代はふると玉椿おひかはるをは君そみるへき

釋教

長き夜の眠りをいかにさましては今よりやみに迷はさるへき

露霜にたとふる罪をけつ物はつとめていつる光なりけり

にしとのみ心計はすゝめともいかなるかたにゆかんとすらむ

いつとなく濁りに沈む身をかへて蓮のうへの玉とならはや

二つなき法にあはすはかけ離れいつゝの雲もはれすや有まし

無常

いつまてとのとかに物をおもふらん時のまをたにしらぬ命に

是や夢いつれか現はかなさを思ひわかてもすきぬへきかな

離別

限りあらん道こそあらめ此世にて別るへしとは思はさりしを

羇旅

ひれもすにみれともあかて暮ぬるを今宵は花の陰にとまらん

時鳥ことかたらはぬ宿ならはいかに旅ねのさひしからまし

秋の夜の月は都にかはられと哀そまさる旅の空には

旅人のかりのふせやは風さむみ柴折くへてあかしつるかな

常ならぬ同し浮世はかりそめの草の枕も旅とおもはし

物名

にはさくら

やまへにはさくらん物を故郷の花まつ程は行て尋ねん

からよもき

何こともいはてしのはん我身からよもきく人も哀と思ひし

短歌

春ははな　秋は紅葉の　いろ／＼に　こゝろをそめて
すくせとも　風にとまらぬ　はかなさを　おもひよそへて
なにことも　むなしき空に　すむ月を　うき世にめくる
ともとして　あはれ／＼と　みる程に　つもれは老と
なりはてゝ　おほくのとしは　よるなみの　かゝるみくつの
かひなきは　はかなく結ふ　水のおもの　うたかたさへも
かすならぬかな

春

待賢門院安藝

昨日こそ雪ふるとしも吳竹のよはの内にや春はきぬらん

引連てくる青柳の糸よりも南や北のむめそ身にしむ
春日野におふる若なは名のみして我身に年のつむにそ有ける
梅の花色をは霞こむれとも匂ひはえこそかくさゝりけれ
青柳の糸のなかさか春くれはもゝひろとのみ鶯のなく
紅のうす染衣うちなひき春のきたるか梅の立枝に
おしみかね今はあらしそうらめしき花ゆへいとふ風と思へは
こゝろあれや尋て三輪の山櫻ちるなよ神のしるしはかりに
水上に櫻ちるらし芳野川いはこす波の花と見えつゝ
峯高き梢の花をいかなれは吹亂すらん山のしたかせ
花錦ちらては四方の山櫻一むらぬすめ春のやまかせ
行やせんゆかてやあらまし東路の名こその關に呼子鳥哉
山風にさけるつゝしはさほ姫にたかぬきかけしゆるし色かも
おく山のしつりの雪を春たちてとく散まかふ花かとそみる
さもこそはいはれにおふる花ならめ口なし色ににほふ山ふき
花よりも心なかくて青柳の糸こそ春を引とゝめけれ
青柳の糸に吹來る春風を花によりてもいとひつるかな
春の田をあら打かへしこま／＼と思ひ碎けはうき我身かな
散花を葎のかとにさしこめて春はすくともみ山へのさと
行春を何につけてかおしましけふまて花の盛なりせは

夏

歸る春衣の關や越ぬらんけふより夏に立かへるかな
櫻麻のおふの下草しけれたゝあかて別し花のなゝれは
五月雨のふるの社の郭公みかさのやまをさしてなくなり
陸奥のあさかのぬまもあらしかし日數過ぬる五月雨の比
五月雨のあまのもしほ木柄にけり浦へに煙たえて程へぬ
つくは山した吹風やさそふらん花橘のかほるよな／＼
夕立にいさゝを河のまさりつゝふかくもなつのみえ渡る哉
夏草やしけみの後の麻のはになと夕立の玉をぬくらん
蟬のはゝさはかりこそはうすけれと聲に暑さをもたる也けり
たゝりなす神のなこしのはらへすと□□□□□□□□□□

秋

立秋は衣の色にあられともうらこき風の身にもしむかな
年をへてまれに逢夜の更行はみる人くるしたなはたのいと
流れ來る音そすゝしき水上の天の川瀬に秋や立らん
きてみれは衣笠岡にたつしかは夜をかさねても戀るつま哉
さらてたに色めきたりといはれのに風におきふす女郎花かな
風吹はまのゝ糸萩よることにつらぬく玉の露そとまらぬ
白露のとちめもせぬか藤袴すそのゝことにほころひにけり
何となく心細きはかるかやの葉末亂るゝ風にそ有ける
まねけとも薄のほのもみえぬまて霧立にけりをのゝ篠原
花薄誰をまねくとしらねともなまめくのへは心とまりぬ
哀猶野もせにすたく鈴虫のふりせぬ物は秋のゆふくれ
さやかなる空に心そとまりぬるこよひや月の關にや（はイ）有らん
穐ふかきよもの紅葉は紅を返しの風やふきてそむらん
おしめとも秋はいく野の花薄まねかはかへれくつのうらかせ
闇の夜のにしき折かく我宿に來る人もなき糸萩の花
葛の葉にうらみられたる花薄又こと人をまねく氣色に
うらめしく花をみすてゝゆきしかと初鴈金のめつらしきかな
暮ぬとて人をまつ虫ならねともよすからねをも鳴明すかな
なけやなけおはな枯葉の蛬われもかうこそ秋はおしけれ

冬

冬きぬといかてしらまし山里の夜半の時雨の音せさりせは
をの山をきりにきりつゝ賤のおか世に炭かまの急きをそする
衣手そさえ渡りける霰ちはわかものこしにきれはなりけり
をみ衣袖ふる夜はのそのこまにあさくら置てあかしつる哉
明くれは氷ふたかるはこやたの池には冬のすむにやあるらん
うち河にひをはくらしつ片岸のあしろによるや旅ねしなまし
獨のみふせやの上の霜置てそのはら〳〵と降時雨かな
逢ことのとゝこほりたる水の上につかはぬ鴛のうきねをそ鳴
冬ふかくかれ行人を我はたゝ草か木かとやとふへかるらん
となせ河こすけかたしく綱てなは心ほそきは年の暮かな

戀

何ことも心にあかぬ身のうさに戀しもなとか人にすくらん
谷かくれ山下水のうちしのひ戀にくちなんみなれきそうき
そなれ木のそなれ〳〵てむす苔のまほならす共逢みてしかな
しつたまき數にもあらぬ身なれ共戀はうとまぬ物にそ有ける
なつかしと思とれともすまひ草戀はちからそおよはさりける
戀をのみすかたの池にみ草ゐてすまてやみなん名こそ惜けれ
やかたおのやかてそりぬる箸鷹のても及はぬは戀にそ有ける
我戀に落る涙をわかすかなあふよ有馬のいてゆならねと
戀をのみ須磨の浦はにしほたれてやくとも袖をくたすころ哉
人心あら磯なみにぬるれともこりすもひろふいけるかひかな
うきは唯人の心にあるものを身のみつらしと思ひける哉
よそにても哀とたにも思ひ川なかれあふせはさこそなくとも
逢事ははやことはまにをく網の今ひとめたにみることもかな
我戀は雲井にみゆる月なれやかけになれとも逢よしもなし
月日のみあけくれなゐのやしほまて君に思ひはそめてし物を
我戀のすかたにみゆる物ならは君かゆかりのなくさめてまし
弓張のつきせぬ戀をいかゝせんなみたもろやと人はいへとも
よと共にみるめなければは水海の恨めしとたにいふかたそなき
戀をして伏猪の床はまとろまてぬたうちすます夜はのね覺に
袖とをりうらまてぬるゝ涙かな天乙女子にあらぬものゆへ

神祇

君か代は松ふく風のいとたかくなにはのこともすみよしの神
千はやふる君か千とせを松の尾にかゝりてさける藤ふのゝ神

慶賀

玉椿ひかりをみかく君か代にもゝかへりさくうとんけの花
芦田鶴の千世に一重の毛衣を幾かさねとは君そみるへき

釋教

教置しそのことのはのなかりせは蓮の露のいかてしらまし
あまを船佛の法をつなてにてきしへにつかんうたかひもなし
草も木も一味の雨にうるふなり世にふる人も賴もしき哉
わしの山また有明の月もみす世をうき雲に空かくれして
（一首闕）

無常

あたなれと花はときはに賴まれぬ散て又さく人しなければは

離別

柚山のくれ待つけぬ鞆かけの花よりもけに賴みなきかな

羇旅

さむしろもおつる涙に朽はてゝ君にわかれはしく物そなき

わきもこか衣かたしきまつち山すそのをはやくあゆめくろ駒
故郷に心とゝめてみつれとも戀しきたひに身をそ離れぬ
さゝのはを夕露なから折しけは玉ちるたひの草枕かな
山彦のこたふる音を友として山ふところに旅ねをそする
さもこそは草の枕といひなかめ露けかりつる夜半の袖哉

物名

はなすゝき　もみち
秋の花すゝきをしなみ霜枯て淺茅か原もみち芝もなし
まつむし　秋のくれ
君をまつ虫のねしけき故郷にしくるゝ秋のくれもゆく哉

短歌

來る春は　かつらき山や　こえつらん　ふもとのかすみ
たなひきて　なとかすか野に　けしきたつ　雪のした草
むすほゝれ　とくるこほりの　ひま〳〵に　さし出るわかな
おいぬれは　おほくの年そ　つみてける　千年をまつの
君か代に　命をのへに　子日して　梅もさくらも
青柳も　ときはに匂ふ　こゝちして　すきゆく春も
おしからす　夏のころもを　たちかへて　ひとへに君を
たのめとも　身を卯花の　かきねのみ　なきこそ渡れ
ほとゝきす　口なし色の　やまふきの　えもいはぬまの
あやめくさ　もろともになと　ひかさらん　たゝとこ夏に
わかみこそ　からなてしこの　いろ〳〵に　おもへはかけし
みな月の　つこもりにさへ　なりにけり　夕くれかたに
みそきして　あらふるかみも　なこしとる　星合の空に
ゆきかよふ　空すゝしさの　夕まくれ　くすのうらふく
風の音も　我身にしめて　色もなき　心をそむる
そめ草に　あはれしらする　おきのはの　そよやいかにと
とふ人も　なき故郷に　しくれつゝ　秋しもきみに
わかれにし　心つくしそ　つきもせぬ　なかきよすから
すゝむしの　聲ふりたてゝ　なきあかし　夜半におきゐて
しら露の　袖うちぬらし　時雨きて　世のさかのとは
おもへとも　ためしも四方の　あらし山　しつえの木のは
ちりしより　惜からぬ身の　ふる里は　涙のしくれ
くれなゐに　深くそ染る　ことのはを　にしにかけつゝ
頼めとも　猶なくさます　いにしへの　をはすてやまの
月のみそ　かけになりつゝ　身をすてゝ　いとゝすかたの
いけらしと　思ふものから　月日のみ　あけ吳竹の
ふしことに　さるはよさむに　なりにけり　まきのうすふき
めもあはて　あかつきかれの　つく〳〵と　いつかなみたを
かきやれは　鴫のはねかき　數ならす　おさまる袖の
薄こほり　我はぬれとも　おもほえす　戀にはきえぬ
物なれは　さえ行夜はに　ころ露も　なくとはなけき
ぬれはまた　ねられさりけり　さよ千鳥　もゝ聲なけと
甲斐もなし　今ははちすの　中にゐて　もろともにさは
むまれはや　なとか浮世に　ふるならん　きえもやられす
はかなくて　ゆき積りぬる　冬草の　はつかにたにも
みぬ夢も　おほめかれゆく　むは玉や　黑かみ山の
いたゝきし　いまはしらふに　成ぬへし　そらはそらはや
はしたかの　すゝろに過る　よはひかな　あはれ浮世を
捨やらて　とやかへりぬる　おきのはの　唯一すしに

君たのみ　頼むこゝろに　なくさみて　おしからさりし
身のはても　ゆかしかりけり　今はたゝ　いのちなからの
せきすへて　すきゆく年な　とゝめてしかな

反歌

哀てふことのはさへやかれにけん露の我身の置（そイ）所なき

春　　花園左大臣家小大進

相坂の關より春のとくなれはふもとのし水けさそこほらぬ
八百萬まつの千年に引そへて君かよはひな子の日也けり
さほ山に霞の衣染かけて四方の木のめもはるにや有らん
梅か枝に柳の糸のかたよるは花さかぬ日に鶯や來る
生そめし外面の若菜けさみえす夜の間に雪の積てける哉
よそめには友とやみゆるしらたつの芦間の床に殘る泡雪
移り香にあたなたちえの梅の花猶こりすまに袖やふれまし
春くれはみとりの糸の筋ことにつらぬきかくる玉柳哉
山ふしの石よりいてぬさわらひもうてはそ崩る程はしらるゝ
春なへていくへ櫻の花なれは年にかされて匂ひますらん
ほそくふる三月の雨やいとならん水にあやなる廣澤の池
春ふかきゆるきの杜の下草のしけみにはむや青さきの駒
都にて年もこしちの鴈かれはかへるとこよやたひれなるらん
足曳の山のやまひこたへすは友呼子鳥たれとなかまし
門田にはいさら（ねイ）小河なまかせつゝ水もやすらの種まきてけり
もゝの花物いはすとは聞しかは誰すきあふとたはれしもせし
かきつはたへたてなはてそ紫のねすりの衣色もむつまし
口なしに川瀨の波のかくれはやぬれ色にさく山吹の花
紫の春日のさすやはひならん今朝色ふかし藤なみの花
うらやましいかに入相の鐘なれはこの暮にしも春のつくらん

夏

あかさりし花色衣いかにせんぬきかふるこそ物うつきなれ
卯花の青葉ましりに咲ぬれはかきねもなみの衣きてけり
うら山し入日の影のさそふにはにしへもなひくあふひ草哉
かたらへはえそ過やらぬ時鳥聲には關もすへしと思ふに
れみせつるよとの忘れなあやめ草たゝかりそめの枕なりとも
五月雨のふるやの板間隙なあらみもりしめてけり床くつる迄
やと匂ふ花橘なしるへにて五月のやみもたとらてそくる
二なき御法の花は咲にけり蓮のたちはのたゝ一筋に
まし水に扇も夏も忘られてやゝはたさむしせみの羽衣
さまたくる神もやきくと六月のみそかとしつる夏はらへかな

秋

吹そむる風のけしきやつらからんけさうらみたる野への葛原
七夕の天の河もり心あらはかへさわたすなかさゝきのはし
咲にほふなのゝ糸萩てにもふれし鹿たちよらは亂れもそする
忍ひかれつみしらするそ女郎花たよりにおると思ひうとむな
秋風はにしより吹ないかなれはこちと薄のまねくなるらん
さらぬたにしとろに亂る苅萱のおれそにすかるさゝかにの糸
夕露にその下紐やとけぬらんまされて匂ふ藤はかまかな
風の音に軒はの荻のこたへすは秋の哀れな誰といはまし
こま〳〵とかく玉章にことよせてくるはつかりの數そ亂るゝ
嵐山はと吹秋のなとすれは聲な合てなしかなくなり
つはなおひしなのゝ芝生の朝露なぬき散したる玉かとそみる

霧こめてたつきもみえぬ柚山(しらイ)にたの計こそ音もかくれれ
いかにして思ひ捨まし朝顏の昨日の花のありかたき世た
千年迄よに逢坂の君か世たためしにひけるつるふちの駒
天津風更行まゝに空冴て夜すからすめる有明の月
から衣さゆる霜夜にうち侘てまとろむ間にや音たゆ(むイ)るらん
浮世には秋はてかたによはり行我身に似たるむしの聲哉
秋はゆくおのか匂ひはつきせれは冬にうつろふ白菊の花
はゝそ原ちれる湊に風吹は波さへ秋は紅葉しにけり
こよひまて秋はかきれと定ける神代もさらに恨めしき哉

冬

わきもこかうはものすその水波にけふこそ冬は立はしめけれ
れ覺する床に時雨はもりこれと音にも袖のぬれにける哉
ひさしなき板屋の霰家ことやおちさたまらて世にふりぬらん
消ぬまに繪にかきとむる人もかな雪ふる宿のけさのけしきた
きさかたや柴のとほその明方に聲うらかれて千鳥なく也
冬の池にたしのつかひの離れぬは(よはイ)いかにむすへる氷なるらん
乙女子か袖おり返すその駒はとよの庭火もおもしろき哉
小野山の心ほそくもかすむ哉たれすみかまに煙立らん
はかなしやおひもしらふのたか□雪もかさして御狩のへゆく
あすはさはこその餘やなからまし年立かへるこよひと聞に

戀

けふこそは心に朽て年ふれとよはらぬ戀た人にしらるれ
我戀は山下水にしつく行のこゝらぬるゝもしる人そなき
尋行舟路にとしのおふるまてあはぬ藥ににたるこひかな
我こそはいひはしめしかこ柴おらぬかたにやおひそめにけん
もかみ河心くたくる我戀やいなふる舟ののほるなるらむ
こふれともさゝめの簔のすけなさにあめの下さへ恨めしき哉
きて歸る物ともしらて夏衣ひとへ心はすかされにけり
ふしぬとて心の糸もよはりせはへたつる衣はほころひなまし
そことたにまたしらすけのすか枕朽ぬとつけん人つてもかな
むつこともまた有明のつきぬ間に鳥のねさして歸れとやさは
重ねてし夜半の衣のなれぬれはしなへうらふれ人そまたるゝ
忍ふまにあふよ涙のこほれつゝめより外にもちりぬへき哉
れたくわれ何としかまの逢そめてかちかほにする人たこふ覽
しらせはや恨こし路の舟ならはたしかへしたる戀にこかるゝ
山田もる心はすこの獨居にこひ計こそ身にも離れれ
しつ〳〵としつはた糸のおり〳〵に切にきりたる戀もする哉
わかことやいとひすてたゑ糸屑のもすそにつきて君た離れぬ
ねかひうる西た思はてなそもかく叶はぬ戀によたつくすらん
逢みんとはけしき山へのほる哉なのめならぬは予たおもふ道
今朝きつる心にこりぬしのゝめの空しらすして明は歸らし

神祇

天てらす神の惠みはます鏡曇らぬかけた守るなりけり
いはし水流の末もはる〳〵とのとかなるよに住そ嬉しき

慶賀

君か代は光つきせぬ日の本にあさたつ塵の數もしられす
よそれして苦むすいはほ君か代に千度そたてん天の羽衣

釋教

金剛夜叉

いつかたも心に叶ふ薬あらはにしをそつるのすみかにはせん

軍茶利

日の光てらさはなとかくらからんかくやみ深き罪の身なりと

降三世

諸人のみよの罪をしくたかすはほたひのたれに何を植まし

大威徳

ちかひありて佛の法も君か代もひさしくまもる姿とそなる

不動

立さらぬちかひたのめはをのつから花の臺にのほらさらめや

無常

あすしらぬ三室の岸の根なし草何あたしよに生はしめけん

いかにせんかゝれる草の露のよを月のねすみは音にさはく也

離別

逢事はいつとなく／＼行道にいかれはしぬる心ちこそすれ

羇旅

道みえぬ此くれ山の杣かたにましろもしらすいもかまつらん

玉しきに立も歸らは都鳥たひにまとふとやとにつけこせ

あやふまて峯よりくたる柴車法に心やそみかくたなる

雪とけは我もけぬへき旅なからはたとせさらす降そ悲しき

霜さゆる冬野にさぬる此度は草引結ふ枕たになし

物名

かゝけのはこ

霜降はなへてかれぬる冬草もいはほか蔭のはこそしられれ

ゆするつき

せこはたゆするつき草の花衣誰か爲にかぬひもなくへき

短歌

君か代は　ゆく末まつに（のイ）　花咲て　十かへりいろを
みつかきの　ひさしかるへき　しるしには　ときはの山に
なみたてる　白玉つはき　やちかへり　はかへするまて
みとりなる　さかきの枝の　たちさかへ　しきみかはらを
つみはやし　いのるいのりの　しるしあれは　願ふれかひの
みつしほに　のふる命は　なかはまの　まさこを千代の
ありかすに　とれともたえす　大井川　萬代を經て
すむかめの　よはひゆつると　むれたりし　芦まのたつの
さしなから　友は雲井に　立のほり　我はさはへに
ひとりゐて　なく聲空に　聞えれは　積るうれへの
おほかれと　心のうちに　うち忍ひ　思ひなけきて
すくるまに　かゝるおほせの　かしこさを　我身のはるに
いはひつゝ　世々をふれとも　色かへぬ　竹のこともの
すゑの代を　みかきの内に　うつし植て　にほふときくの
花ならは　霜をいたゝく　老の身に　時にあひたる
心地こそせめ

反歌

しるしけり萬のとしの千々の秋たのしみいまた半ならすと

本云

康治比賜ㇾ題。久安六年各詠進畢。

仁平三年暮秋之比。依ニ別御氣色一部類進畢。左京大夫顯廣

定家卿奥書

此百首。先人（俊成）乍ㇾ置ニ數輩之上﨟一奉ㇾ仰部類。一度奏覽之

後。隆季朝臣進上歌可二切入一之由被レ仰。返給之間。有二保元事一不レ能二叡覽一。已上人々所レ進之本。自然留二家々一。於レ家殊可レ被二 先人自筆之本相傳一候之處。或人稱二 好レ道之由一。可二借送一之由懇切。仍與レ之間經二年序一不レ被レ返。令二申驚一之處。本自不二借取一云々。事已不レ足レ云。非二計略之所一レ及。忽失二此本一。七八年。適尋下取宮内卿(家隆)以二家本一被二書留一本上。更令レ書二寫之一。挍合頗太以難レ堪。自レ今以後。如レ此文書永不レ可レ借レ人。

承久元年七月十七日　　　　戸部尚書(定家)判

于時貞和二年十一月十七日抄出。自餘作者等畧。追可レ書レ之而已。

群書類従巻第百七十

和歌部二十五 百首四

正治二年第二度百首和歌

題

春　霞毎一題五首　鶯　花

夏　郭公　五月雨

秋　草花　月　紅葉

冬　雪　氷

雑　神祇　釋教　暁　暮　山路　海邊　禁中　遊宴　公事　祝言

作者

御製後鳥羽院　範光　雅經　具親

隆實後改信實　家長　長明　季保

宮内卿女房　越前女房　神主康業家隆匿名

詠百首和歌

御製

霞

春のくる空のけしきはうすかすみ棚引わたるあふ坂のやま

み山への松の雪まにみわたせは都は春のかすみなりけり

おほかたはかすみもやらぬ曙に春をむかふるしほかまのうら

波の上は霞にくもる春の月に心はかりはすまの明ほの

梅かゝはなかむる袖にかほりきてたえ／＼かすむ春の夜の月

鶯

鐘の音にこその日數はつきはてゝ春くる空に鶯の聲

春くるとたれかはつけし春日山きえあへぬ雪に鶯のなく

谷に殘るこその雪けのふるす出て聲よりかすむ春のうくひす

梅かえの梢をこむる霞よりこほれて匂ふうくひすの聲

鶯の初音をもらせ春やとき花やをそきと思ひさためん

花

咲にけり風のこぬまにけふ櫻心のほとにたをりつゝみん

いかにして春さく花をしはしたに風にちらさてみよしのゝ山
櫻さくひらの高根の春風に木の下のみの雪けなりけり
花にくもる月みよとてやみよしのゝ梢をはらふ春のやまかせ
いはまつたひきえすなかるゝ雪なれや花ちりかゝる春の山水

郭　公

時鳥しのひもあへすもらす也五月まつまのこそのふる聲
子規一聲きけは夏のよのなこりの空にありあけの月
なのるなり雲井はるかに時鳥暗くら山のたそかれのそら
時鳥また宵なから鳴る夜の雲のいつくになきわたるらん
やとりせし花橘はそれなからまれになりゆく郭公かな

五月雨

音羽川せきいるゝ水にみゆるかな波さへくもる五月雨の空
このころのみつのわたりは軒にふくあやめに近き五月雨の浪
あま人は袖ともわかすしほるらんをしまか磯の五月雨のころ
五月雨はこやの篠屋にあらす共是もほしあへぬさゝかにの糸
水まさるやそうち川の五月雨に木すゑをかよふまきの嶋人

草　花

うちなひきさやかにみえぬ秋なれと荻吹風そかたへすゝしき
風になひく片岡山の女郎花たかよもきふに思ひたつらん
秋風の吹にし日よりしの薄しのひもあへすほに出にけり
秋はまたしかの音さそふしるへせよ小萩か原をわたる夕かせ
大かたは玉にまかひし白露もはきにしたかふ秋のゆふ暮

月

いかにいひいかにかすへき山端にいさよふ月の夕くれのそら
なかむれは木のまもりくる秋の月風にさかなき松の下陰
有明の月にはちかきなのみしてすむかひなしや西の山本
今は秋山ある里にすまゐせし月みる空に有明もなし
柞原梢をもとにそめかへてのこるくまなき松の月影

紅　葉

大井川あらしの山の影みえてそこの梢にもみちしてけり
薄紅葉ちらす風にもつれなかれ時雨にそまぬ色もかひあらは
秋の時雨常葉の山はそめかねて嵐にそかるよそのもみちを
秋ふかしそめぬ梢はあらし山時雨にもるゝあなき一枝
龍田山そむる時雨の雨やまて秋も紅葉もふかきころ哉

雪

をかや原うらかれにけり冬の雪ふるからをのゝ明ほのゝ空
このころは花も紅葉も枝になししはしなきえそ松のしら雪
冬のよのしのゝめの空は明やらてをのれそしろき山のはの雪
あやにくに時雨にたへし松の葉の心よはきは雪のしたおれ
さひしさに煙たえせぬ賤のいほとへかし人の雪のしたおれ

氷

冬くれはいはまの瀧つこほりしておもひたえたる山川の水
霜さゆる玉ものとこに氷してはらひもあへぬをしの聲哉
明かたはをちのみきはに氷してかへりてちかき志賀の浦波
浮草はなをあとゝめす冬のよの谷行水はうすこほれとも
冬のよの川風さむみ氷しておもひかねたる友千鳥かな

神　祇

いすゝ川たのむ心しふかけれはあまてる神そ空にしるらん
千早振神やしるらんもろかつらひとかたならすかくる頼みを
玉垣や神のひかりもまさりゆく月のかつらのむかしおりえて

跡たれしすきにしかたを思ふにもたのむしるしを三輪の山本
ちはやふる庭火のまへにとる榊かをかくはしみ山あゐの袖

釋教五時

花嚴

出る朝日山の高根をてらせとも行衛もしらぬ谷の埋木

阿含

しり初しかせきかその丶萩のはにひまなくをける無漏の朝露

方等

さま〳〵に教へし道のかひあれはつゐには深く悟りいてにき

般若

池きよみ水にうつれる月影やむなしといへるためしなるらん

法花

いたつらにもるゝ草木もなかりけり一味の雨のところわかれは

暁

初瀬山明ぬとつくる鐘の音に聲うちそふる峯のまつ風
秋の月ひかりそまさる玉くしけふたみのうらの明かたのそら
くもりこしひはらか下の月影も殘るくまなし有明のそら
秋のよの月の影さす槇の戸ををし明かたの横雲の空
雲はなしなかめは西にめくりきて山のはちかき有明の月

暮

三日月のほのめく暮の山端はなかめはかりも有明の空
大井川ゐせきに秋の色みえていさよふ波の夕くれのをと
山嵐に楢の木の葉つきはてゝ色なき枝の夕時雨哉
山端をめくる時雨の雲まよりとりあへすいつる夕月夜哉
ふる雪をたそかれ時のそらめには花とや人のみよしの丶里

山路

春行は霞のうへに霞して月にはつらしをの丶やまみち
葉をしけみもろひまもなし秋の夜の月おほろなる足柄の山
秋の月くまなきころはとまりせしひるにやかはるさよの中山
なかめこし心は秋の關なれや月影きよき不破の中やま
立田山もみちし跡もうつもれて木のはにまかふ岩のかけ道

海邊

なかむれはあはちのせとの夕霧にむらきえわたるあまの釣舟
月きよき明石のせとの波の上にうらみをのこす有明の雲
蜑小舟行衛もしらぬ波の上にいつくのうらへさしてゆくらん
磯の松嵐にたへぬおりしもあれ哀うちそふ波のをと哉
あかしかた浦吹風に雲きえて波よりにしに在明の月

禁中

春はたゝ軒端の花をなかめつゝ家路わするゝ雲のうへ哉
うすみとりまた夏あさき木間より春をとゝむる藤壺の藤
九重のはきのさかりはみかは水岩まの波もはなさきにけり
よもすから雲井の庭を照すなる衛士のたく火は在明のころ
くまもなき雲井の月にやすらへはうしみつまてに夜も成にけり

遊宴

千代の春谷の戸出る鶯のはつれにそひく二葉なる松
結ひあくる宿の泉の水さえて夏も夏なき物にそ有ける
秋のよの月にそうたふ舟のうち波のうへなるうからめの聲
雪ふかき粟津の原の幕かたはあはする鷹もてにかへりけり
敷嶋や大和ことの葉勝負に人の心そひとにこえぬる

公事

雲のうへにこれや春たつしるしなる袖をつらぬるけふの諸人
相坂の山たち出て雲の上にかけさしのほる望月のこま
天津風雲井の空を吹からに乙女の袖にやとる月かけ
諸人のみたらし川にするかまひ雲井にかへるあかつきの聲
年のくれ三世の佛の御名をきゝて心はれ行雲のかよひち

祝言

三笠山出る朝日の光よりのとかなるへきよろつ代の春
春くれは一しほまさる住吉の松やちとせのためしなるらん
ちはやふる神そしるらんふして思ひおきて數ふる萬代のおく
龜の尾の岩根をおつる白玉の數かきりなき千代の行末
むしろ田やかれて千年のしるきかないつぬき川に鶴遊ふなり

冬日陪　太上皇仙洞應　製百首和歌

従四位上守大藏卿兼行春宮亮丹後守臣藤原朝臣範光上

霞

越てくる春はすきぬとみせかほに霞棚引あふさかの關
櫻花ひらけぬほとの梢には霞の色もさきかゝりけり
朝日さす春日の山にかすみしてくれなゐふかし峰のすきかけ
霞たつおほろ月夜の有明はいかにいふへきなかめなるらん
海原や霞の末はしら波の雲路につゝく明ほのゝそら

鶯

百千鳥その名は君か萬代のはしめや春の數にそありける
淡雪を花とやみらんふるす出てまた聲わかし谷の鶯
初音をはわきてきかせよ鶯もまたぬ宿とやかくきなくらん
春のよもふすほともなく有明の月にたゝよふうくひすのこゑ
鶯のさそはさりせは梅かえに木つたひちらす花をみましや

花

みよしのゝ山のかひよりみえつるは雲にはあらて櫻なりけり
へたつとてうらみもはてしくれなゐの霞そ花の色に也ける
世にふれはうきもつらきも春はたゝ物思ひなき花の下かけ
花ゆへに嬉しうらめし春風に匂ひを送り色をちらして
積る色を行てうらみん花さそふ風のやとりをいかてしらまし

郭公

一聲はきゝつともなき時鳥雲のいつくにまたなのるらん
時鳥きく袖さへそしほれぬる一聲なのるさみたれのそら
郭公夜すからまちて一聲に明ぬるよはをなにゝかこたん
子規ほのかになのる曉を八聲の鳥とおもはましかは
きゝなれしそのかみ山の時鳥かはらぬ聲もめつらしきかな

五月雨

五月雨にしのふあやめはしとろにてさま〳〵にちる軒の玉水
日にそひてみかさまされは五月雨にふるの高橋名のみ也けり
五月雨の雲まもみえぬもちのころおもふもくるしあたら月影
五月雨にこやのしのやの軒はよりかゝるはこれも水ひきの糸
五月雨のはるゝまもなくみくまのゝ浦の小菅をほしも煩らふ

草花

朝またきわくる袂に白露のあたのおほのゝ萩かはなすり
手枕の野へにおれふす女郎花たをりてあたの名をやたてまし
朝またきくるすのをのゝいと萩につらぬきかくる露の白玉
藤袴きてみる人のあれはこそほころひぬらめ秋の野ことに
朝日影心ほそくもみゆるかな尾花か末のさゝかにのいと

月

月ゆへに物をそおもふわかすまひ秋よりほかにかゝらすも哉

いるを恨みいつるをまつと歎てもひとりみるへき月の影かは

秋はくれ月は更行とにかくに物思ふへきあけかたの空

更にけりまちつるかたの軒はより遠さかりゆくよはの月影

かくはかりさやけき月をいたつらに詠すてゝはいなん物かは

紅葉

秋霧の龍田の山にもみちして嵐の末そにしき也ける

もみち葉をそむる時雨のぬれ色に光をそふる夕附日哉

紅葉ちる志賀の山かせ吹からにくれなゐよする秋のさゝ波

をくら山もみち葉ちれは麓には色に染ある雨そゝく也

庭のこの葉はらはぬ色を心あらん人にみせはやみやまへの里

雪

あやしくもむこの嵐のさえ〳〵て初雪しろしいなのさゝはら

空は花庭は月かとまかひつゝ春と秋とをみするしら雪

水の面にちるしら雪のかけみえて底よりもふる心地こそすれ

おきつ嶋目をふる雪の積りゐてかへらぬ波そいとゝうちそふ

白雪をなかめて年のつもりつゝいたゝける身のはてそ悲しき

氷

なかれ行紅葉の色やおしからんこほりにとつる山川のみつ

芦鴨のかつくはかひにくたけつゝ玉かとみゆるうす氷かな

上も下もさえわたるらしをし鳥の氷のねやに霜はらふ也

こやの池の芦のかれ葉に音さえて氷をわたるむこの浦かせ

池水の氷は月のかゝみにてくもるとみゆるあしのかれたち

神祇

神風ものとけき春のはしめとてつのくみわたるいせのはま荻

皇のなかれひさしきいはし水たのめは夏もすゝしかるらん

見かも山ならのうはゝにをとつれて風わたる也秋のゆふくれ

春日山その名にいとゝふる雪を神のめくみの花かとそみる

木のもとにたれし昔の跡をわけてはこやの山に君まもる神

釋教

方便品 若人散亂心乃至以一花

みたにちる心也ともひと花をそなへよとく法そ嬉しき

安樂行品 若於夢中　但見妙事

夏の夜のみしかくむすふ夢なれと妙なることをみれは頼もし

壽量品 常在靈鷲山

望月のくまなき影をみるからに鷲のみやまを思ひこそやれ

普門品 弘誓深如海

わたつうみのふかきちかひを頼身はとつる氷の罪もあらしな

提婆品 採於千歳

千年まてつかへてならふこの法をたもては君も久しかるらん

曉

夢さむる枕に風の匂ふかな花のひもとく露やをくらん

夏草のかりそめふしにほともなく曉つくるしきのはねかき

うらやまし光ちかくやなかむらんとをかの月のにしの山里

雪ふれはしらむ板また明ぬとやまた夜ふかきに鳥のなくらん

哀なるひとりねさめのなかめ哉きえてはもゆる窓のともし火

暮

みかくらん玉とはこれか夕つく日嶺にかゝやく花のいろ〳〵

山人のつえにつま木をよせたてゝ谷の夕かせすゝむかへるさ

かれてよりうらめしきかな山のはに月まつほとの村雲のそら
雪ふかきまかきの竹の下おれにねくらあらそふ鳥かへるなり
おほつかなこゝは入日の嶺なれと山のあなたやあしたなる覧

山　路

かへるへきいつらはみえぬ山路かな花の白雲ちるとまかふに
時鳥たつねしいれはみ山への夏木立こそすゝしかりけれ
くれなゐの木の葉吹わけゆく駒のかけふみならす岩のかけ道
ふりつめは岩のかけ道うつもれて雪のくつはくきり原の駒
深山へのひしきものにはわりなくも苔の莚とたれなつけゝん

海　邊

けふ春になるとのうらをなかむれはいつしかかすむ奥津白波
かゝり火とみれは難波の浦風になひく芦まの螢なりけり
霧ふかしすまの浦風吹はらへ月も波まにあり明のそら
みちのくや末の松山ふゝきしてみとりをこゆる雪のしら波
哀なりたれをみるめとたのまれといつとなきさの里のあま人

禁　中

名にたかき大内山の花さかり風ものとけくみるそ嬉しき
むすはれと玉のみきりのみかは水みるにそ夏は忘られにける
雲の上の露ゆうてなはかけ近く月をやとさんためにそ有ける
さゆる夜はとものの宮つこ夢さめてうしみつとさす暁のこゑ
おのこともふみ轟かすをとす也なをけたかしや神のとのいた

遊　宴

思ふとち櫻かしたになかめつゝうたのむしろに花をしく哉
松かねの水に夏なきまとゐして千年のかけをむすひつる哉
白菊を折てうかふるさかつきに我かはそまつううつろひにける

雪ふれはかくやとまつそ思ひ出る鏡のかけにおもなれよ人
わか君のみこのもゝかにたひらけくとゝのほりたる萬代の祭

公　事

いつしかととくる氷のしるしとやけふたてまつる立春のみつ
とのもりはあすはいつかとあやめ草はやふきてけり九重の軒
きのふより望月の駒迎へきてやさしくみゆるひきわけのすけ
つこもりの夜はさそかしとしりなから心そ騒く鬼やらふなと
月ことのなゝせのみそきしるしあれは限りもしらす君か齢は

祝　言

我君の千代のはしめときくからにのとけくみゆる春の明ほの
たれかしる千代に一たひすむ水をいくめくりまて君結ひてん
幾千代とかきらぬ秋の月なれははこやの山に影そのとけき
吾君の千年を冬のしるしとて嬉しきことをきくもつこれり
君か代は限りもしらすありそ海の岩うつ波のかすはかりとも

冬日詠百首應　製和歌

従五位上行侍従臣藤原朝臣雅經上

霞

雪きゆる春はみとりの青への色を霞そめゆる関はのゝそら
春はなを明行空そあけやらぬ霞かゝれる横雲のやま
風の音も春のけしきになるみかた波路はるかにうす霞みつゝ
霞ゆくまゝにみきはやへたつらん又遠さかるしかの浦波
まきもくのひはらか末は長閑にて霞のうへに春風そふく

鶯

鶯のなみたの氷いかならんふきにしものを春の山かせ

春はきてまた雪ふかき梅かえにやととひかぬるうくひすの聲
初音より名殘そおもふ鶯のみやこへいつる春のやまさと
いまよいかに月影かすむ明ほのゝ梅の匂ひにうくひすの聲
古巣たつ都も春の梢にて霞をいてぬうくひすの聲

花

是もまつあかぬ餘りにいりやらて外山の花にけふはくらしつ
なかめてもれたきは雲の色なれやおもへは春の花のさかりを
よしさらは花のふもとの松にふけいとひもはてし春の山風
吉野川ゆく瀬もみえぬ霞より風になかるゝ花のしら波
何としていかなるへしとなき物は花にあらしの春のくれかた

郭公

卯花の垣ねよりこそ郭公まつちりそむるしのひねの聲
時鳥待夕くれに匂ひきてたのめかほなる軒のたち花
初音とていかにかた覧ほとゝきすまちふるしたるよはの一聲
われもまたほのかにきゝつ時鳥たかまちえたるよその一こゑ
いつもあかぬなこりなれとも時鳥一聲いこゝろみな月の空

五月雨

かすみしくおほろ月夜とみし物をへたてはてつる五月雨の空
なかめやる伊駒の山の嶺の雲いくへになりぬ五月雨の空
五月雨はもとのみきはも水こえて波にそさはくいてのうき草
五月雨のころともいはしいつとても雲は軒はの山かけの庵
我袖に昔はとはん橘の花ちる里のさみたれのそら

草花

袖のうへにうつれる色やそれならぬおりはやつさし秋萩の花
野へはれや草葉はなのか枕にて露にのみふす女郎花かな
荻原や風まつくれの下露をよそにもかこつ女郎花かな
花すゝきなにとて秋をまちけらししのひし程は露かゝりきや
まねく尾花うらむる葛にことゝへはたゝ秋風の野への夕暮

月

秋よたゝゆふへの空を哀ともなかめはつれはやまのはの月
花の春なれしなこりの面影よ秋の月とはちきらさりしを
ひかりもる軒のしのふの露なから袖にみたるゝ夜半の月影
なかめわひふけゆくまゝの袖の露月やはつらき秋のよの空
月の影なこりをのみやなかむへき秋もいく夜の在明の空

紅葉

そむるより心やつくす立田姫あらし吹そふ秋の梢に
時雨ゆくきゝの梢やうつるらん露も色つく杜の下草
たつねいる秋は外山の色なれやこれよりおくは松風の聲
秋になをたへすや松の下紅葉思ひもすてぬ色をみすらん
宿うつむ軒はの蔦の色をみよ深山か里の秋のけしきを

雪

はれくもり嵐にさゆる村雲のしくるとすれは初雪のそら
さひしさはかれ野の原の末よりも雪のあしたのと山の松
ふりにける跡ともけさはみえぬかな志賀のみやこの雪の花園
御狩野や雪はふりきぬこれもまたぬるとも花の春の面影
たつねくる人はなとせて三輪の山杉の梢の雪の下おれ

氷

石はしる清瀧川に玉しきて結ひかれたるうすこほりかな
疾きよき玉えの水のうす氷やとらぬ月もみる心地して
霜こほる尾花か末も波の音もむすほゝれたるまのゝ浦風

あらし山木の葉の音もおとはてゝとなせの瀧は氷しにけり
山川の岩本瀧津ゆく水にこほるへしとはみえしものかは

神祇

君かためあけはしめてや久かたのあまの岩戸のいにしへの空
石清水そのみなかみを思ふにもなかれの末は久しかるへし
賀茂山の高根にかゝる白雲やわけしなこりの空の通路
住吉の松にたのみをかけをきてけふは嬉しき波のしらゆふ
かけうつすおなし日吉の影なれと光はこれそあけの玉かき

釋教 五神通

天眼通

をしなへて尋れぬ山の花もみつへたつる雲のへたてなけれは

天耳通

とをさかる聲もおしまし時鳥きゝのこすへきよもの空かは

宿住通

世々をへてすきにしかたを思ふにも猶くもりなし夜半の月影

他心通

みな人の心々そしられける雪ふみわけてとふもとはぬも

神境通

思ひたつほとこそなけれ東路やまた白川の關のあなたは

曉

ゆふへとてさひしからすはなけれともたへぬ哀はあけ方の空
いとふへき契ありともいかゝせん夜ふかき鳥のほのかなる聲
今はとてたか道しはにわくる露あはぬねさめのよその袖まて
さても猶夢をはかなみまとろまんしはしなあけそ小莚の床
あつまやのまやのあまりのやすらひにまつ立人の音はすく也

暮

色かへぬ色こそあはれ夕附日さすや岡への松のむらたち
眺むれはくれたにはてぬ山のはにいつかたふける三日月の影
山端に月まつころの柴の戸をさゝすやなにを峯の松風
ゆきくるゝ山かたつきてたれかまた都の空をなかめわふらん
おほえすよ野寺やちかきいほりさすあたりもしらぬ入相の鐘

山路

なかき夜のさよの中山明やらて月に朝たつ秋のたひ人
時雨つるいくへの雲をわけくらし野原にいつる袖の月影
故郷のたよりとならはことつてん袂にむかふうつのやまかせ
暮ゆけは宿かるかたもしら雲のかゝれる嶺に立そわつらふ
行かよふかけのすそ道末たとりこゆとしらする旅人の聲

海邉

明石かた月ゆへならぬなかめまてはれてさひしき浦のうへ哉
都おもふ袖をはゆるせ清見潟さこそならひの波の關もり
哀なりいつれの浦のあまならんよるかたもなき沖の釣舟
波の音松のあらしのうらつたひ夢路よりこそとをさかりぬれ
またしらぬうきねの床のかち枕なれぬ袂になるゝ波かな

禁中

百敷やたえぬなかれをみかは水猶行末の影もはるけし
河竹のかはらぬ色のふかみとり玉しく庭の末そしらるゝ
おさまれる世のためしとやかきとめし風も音せぬあら海の波
雲かゝる大内山となりにけりいくよの塵のつもるならん
衛士のたく煙絶せぬ御代にあひて民のかまともいかゝ嬉しき

遊宴

菫つむ袖よりそてをかたしきて野をなつかしみ一夜のみかは
こゝやさは七夕つめに宿かりしあまの川原の夕くれのそら
もみち葉を袖にこきいれてかへりけん人の心の色をみるかな
御狩せし野守の鏡たつねきてふりにし影もみる心地する
壚竈にいつかきにけんとはかりのそのことの葉に昔をそしる

公　事

春のあしたはこやの山のみきりよりまついはひたつ雲の上人
けふにあふ雲井の庭のすまひ草とるてもあたにうつる物かは
これもまた千年の秋のためしかなけふことにひく望月の駒
君か世に雲のかよひち空はれて乙女のすかた月にみる哉
新玉の春をむかふる年のうちに鬼こもれりとやらふ聲々

祝　言

雲の上も春のみ山の萬代も松と竹とのすへにたとへて
いつとなく君かよはひは和歌の浦に千年をさして田鶴鳴渡る
君か代を思ふ心の末の松波はこゆとも色はかはらし
幾千代もおなし月日のめくりきて變らぬみよは空にしるしも
百草の千種にあまることの葉も君かみかけはすゑそさかへん

詠百首應　製和歌

従五位下行能登守臣源朝臣具親上

霞

けさも猶霞のうへの雲さえてみえぬ雪けのあけほのゝ空
難波かたかすまぬ波も霞けりうつるもくもるおほろ月夜に
今もまた妻やこもれるむさしのゝ霞のうちにきゝすなく也
中々になかめの末ははれにけり遠山のはのかすむあけほの
よそにのみ春は都を行鴈は霞にすくるこすゑなりけり

鶯

色はまた物うき梅の梢にも雪よりなるゝうくひすの聲
鶯のまたや涙のこほるらん空も雪けになをかへる也
都へとみな鶯はいてはてゝ谷には春をよそにきくなり
梅かえに匂ひもわくる春風に心をかるゝうくひすのこゑ
花をおしむ友にはなりし鶯のふるすにかへる心つよさよ

花

花さかぬほとは心をなくさめて風もいとはぬ嶺のしら雲
はやもさけ植ても庭の櫻花たのみもあへぬ春のけしきを
たつねてもとまらぬ花はみさりけり（にイ）吉野の春を月になかめて
花ならて人のとふとも春風ようらみに袖のぬれぬものかは
時しもあれたのむの鴈の別さへ花ちるころのみよしのゝ里

郭　公

きかぬまの心はしるや時鳥人まつ山のゆふくれのこゑ
さてもまたれなん物かは時鳥一聲とこそまちし心の
まつとなれはいかゝくるしき郭公ねぬにもあくる東雲の空
時鳥なこりもしらぬ一聲に雲まの月はあり明のそら
子規猶たゝならぬ寝覺かなきゝふりてこそみな月の空

五月雨

かれてよりかよひし雲のひまとちて幾日になりぬ五月雨の空
水のおもは庭もひとつに廣澤の月影しのふ五月雨のころ
銀川おなしゆくゑにみゆるまて雲と波とのさみたれのころ
五月雨にみかさやたかくいつみ川はゝその森は波のしらゆふ
五月雨はもりしいとまもわすれ水むすはぬ波の末にこるまて

草花

植しよりまちしこはきの花さかりなをかくまては思やはせし

ふみわけてとはぬも人のつらからす花にあとなき深草の里

ひとりねのよその袖まてなとつれて荻の上風露さそふなり

ならはれは身をはたのます庭の面の尾花かもとの松虫の聲

立かへりふりにし庭の花すゝきしのはれぬへき秋のおもかけ

月

なかめはと契りし人はなけれとも月にしのはぬ面影そなき

なかめこし心や今ははれぬらんくまなき物と月をしりぬる

雲はらふ嵐に秋の空さえて月の千里に衣うつなり

里わかす秋は心も在明になを月影は姨捨のやま

あくかるゝ心さへこそ惜まるれいるには月のすてやしつらん

紅葉

面影は庭(にはイ)の梢も立(廿イ)田山こゝろはかりの秋のけしきに

時雨する常葉の松そかはりけるよもの梢はをのかいろ／＼

ちらぬまとたのめぬ人もまたれけり花にもみちの心ならひは

龍田川わたれとたえぬ錦かなちらぬ梢の色やわくらん

木のはちりしくれもきをふ山路かなわけ行末は風にまかせて

雪

ふみわけぬ雪より跡の絶そめてなへてなるへき庭のおも哉

嶺つゝき梢はふかくうつもれて雪より下の谷のかよひち

わけこんとたのめぬ床もはらふ哉はにふのこやの雪の夕暮

こほる池の芦ふりうつむ雪の内につかひあれはとをしの諸聲

くれはてぬ蜑のとまやもなき浦のたのむ木陰の松のゆきおれ

氷

芦鴨のうきれはかりそたへにける月も氷し廣澤の池

木の葉ちりかけひの水もつらゝゐて音さへのこる庭の松風

大井川みきはゝ風にさえにけりゐせきに浪の音をのこして

霜はらふましはの嵐をとさえて野守の鏡つらゝゐにけり

音絶てこほる岩まのわすれ水わすれはてぬる冬の山かけ

神祇

やはらくる光もいとゝみかく哉はこやの山にかけをならへて

萬代もすむへきかけは神風やみもすそ川のあり明の月

みゆきするおもかはりせてみ熊野の浦の濱ゆふ千代も重ねよ

今そしる君か御代をと住吉の神さひにける松のこゝろを

石清水たのみはふかしいにしへの跡はたえゆくなかれなれ共

釋教 五品

色

花ゆへに風をもなに(とイ)かいとふへきむなしき色をみする也けり

受

身にあまる難波のことのよしあしも思へはかりの習ひ也けり

想

今そしるのこるくまなき面影に心の月のすまんゆくゑも

行

春は風秋は時雨とうらみきてこれをならひと思ひ□□□□

識

しれかしなもにすむ虫のわれからとくるしき海にしつむ心を

暮

あさちふはまた霜をかぬなかめよりいさよふ月を袖にまつ哉

頼めしをまちしならひやかはるらんつらくのみなる入相の鐘

旅人の宿とふすへにたのむ也うはの空なる煙はかりを
いとゝまたあやしかるへきなかめ哉折しも軒の蜘のふるまひ
跡たゆる谷のいほりはをのつからかれくらにかへる鳥の一こゑ

曉

行末のほとをも空にあさたてはまた山のはにあり明の月
ひとりねのかはさぬ床の枕にもならひにぬるゝ袖のうへかな
いつくにもいはゝや思ふほとはかり伏見の里の鴫のはねかき
一夜たにあかしかねつるね覺かないつよりやかて習ひ始めん
あかほしの影みえそむる山端に月のなこりをしはしみるかな

山路

行末は松の嵐に空はれて嶺よりにしの月をみるかな
雲かすむ麓やちかく成ぬらん岩うつ水の音かよふなり
おもひいる人たにすます成にけりこれよりたゆる岩の通路
心ともすきもやられす東路やまたわけなれぬ足からの關
たきゝとる跡より外は道絶ぬゆきいてん末をとふ人はなし

海邊

人とはぬあまの笘やのかち枕うらみぬ月にぬるゝ袖かな
波風のをとさへあらすなるみかた都を遠くおもふのみかは
またもこん松の檐風身にしみてとめぬなこりを思ひわひぬる
あさりせぬ袖もぬれ□□松嶋やをしまの磯のならひ也けり
月ゆへはよそにも嬉しはりまかた□つぬといつる浦の友舟

禁中

心なきとものみやつこいかならん思ふもつらし花のゆかりは
時鳥聲もおしますなのるなりたきのくちとはたれかをしへし
花さかり袖にはよそのはきのとも心はふかくおもひそめきて
みかは水いくへ氷のかさぬらん雲井の月もかせさえぬなり
君か代に雲やかゝらんちり山の千世に一たひかすはゐるとも

公事

諸人のたちいる袖のをとさえて玉しく庭の春のはつかせ
ひきつれて我もいさみん梓弓まゆみのけふのいてのてつかひ
星合をうつす光も雲晴て影より外の庭のともし火
影はれし昔も空にみゆる哉雲井の月にあかほしの聲
みそきするなゝせの川の風さ□□袖よりはらふ夕暮の空

遊宴

大かたの空さへ桃の花さかりゑひをあらそふ波のさかつき
長きよもためしにそきく菖蒲草引くらへけるさこそれならめ
昔よりたつれし跡も大井川紅葉のにしきおりにあひつゝ
今も又おきなさひにやかり衣はらひもあへぬ雪をみるらん
里わかす誰もねぬ夜のまとゐかな月ゆへならて在明の空

祝言

萬代はあまれきかけのあらはれてはこやの山に月そさやけき
いく千代もすむへき池の鏡かなのとけきかけの面かはりせて
今そしる君か御代をとかれてよりさしての磯の千鳥鳴也
年をへてかさなる千代もあらはれてわかえさしそふ松の行末
久しかれためしつきせぬ世中の昔にかへる和歌のうらなみ

詠百首和歌

散位隆實（後信一）〔上〕

霞

今朝みれは霞の衣立田山すそのゝ色もひきかへてけり

霞つみし梢もけさはあさみとりかすめる松に春風そふく
よもの山いつしかみれは朝霞たつやなそきと春めきにけり
なかめこし雪けの空の月影のはるとはすれとなな霞つゝ
きゝなれし嵐の音もうつもれてしつかにかすむ峯の明ほの

鶯

鶯のいつるふるすやいそくらんまた明やらぬ谷のひとこゑ
谷はいて宮この空やたとるらんとやまの里のうくひすの聲
呉竹のふたまたにへぬ春の色にいつさとなれて鶯のこゑ
よもきふや雪ふるとしは跡たえて春なつくなり鶯の聲
梅は雪櫻は雲とまかひてもにるものなきはうくひすの聲

花

花のかけ思ふより社さひしけれあらしののちの春のくれかた
小初瀬の花さきぬれは菅原やふしみにかほる春の明ほの
高砂の松にも春の花さかは尾上の雲のひまやなからん
花そとは匂ひにしるくなかめても猶雲わくるみよしのゝ山
まつとてはつらき梢とみしかとものこるうれしき遲櫻かな

郭公

時鳥うの花かけのしのひねにわれも五月のそらそまたるゝ
一聲は夢路なすきて時鳥さむる枕にとなさかるなり
まちわひぬさのみくらくは時鳥まかふはかりの鳥のねもかな
時鳥ねぬよつもりの一聲にうらみはまつのいろもかはらす
そらも空やとやはかはる時鳥しらぬかほにもすきぬなる哉

五月雨

五月雨のふり行まゝにすゝか川やそ瀨も淵となりはてにけり
ひまなあらみたまらぬ宿の五月雨は軒の雫の音そすくなき
いつのまに水のみかさのいつみ川□五月雨はけふみかのはら
五月雨のはれまないかに松嶋やなしまの蜑の袖もほしあへす
水の音は深きにしもそよはるなるゐせきなこゆる五月雨の頃

草花

秋やこれおなし緑にみし野へな千種にわくるなのかいろ／＼
女郎花色なうつせは夕露のちるさへおしき野への秋風
暮ゆけと匂ひはさらにかはられは猶面影にみやきのゝはき
まれくとてとまらぬなみてうらむ也いかにかすへき尾花葛花
ほに出て招きこそせれなかや原みゆらん物なしたいこたれは

月

なかむれは袂そさゆる久かたの月の都にあきかせやふく
夕暮の荻の音より空はれて秋風しろくすめる月かな
なかむれは都もかなしさらしなや姨捨山にいつる月かも
松浦かたはるかにみれはもろこしの空もひとつにすめる月哉
いたつらにまつ夜そいたく更にける山のあなたやあり明の月

紅葉

初時雨すきぬとみつる雲間より高根のはゝそ色付にける
龍田山また色あさき梢にも猶たのまれす秋の日かすは
いろ／＼にかさなる山のもみちはいくへたゝめる錦なる覧
もみち葉なさのみやよそに三輪の山杉の梢は時雨のみして
もみち葉のちるなもいはしうきはたゝ嵐に通ふ秋のくれかた

雪

さらに猶芦火たくやもさむけしや難波わたりの雪のよな／＼
秋まてはたつぬる人な松虫のおもひたえたる雪の山さと
さひしさは秋なかきりとみし宿のまたこのころも雪の夕暮

とはすとも山路の冬を思ひやれ心のみちをうつむ雪かは
瀧津瀬にまかへし風も音絶て松には雪そ□□□也けり

氷

今朝よりはもりこし水も嵐山さえゆく夜はに氷むすひて
夜をさむみ氷の下に音たえて岩まの水も冬こもるなり
瀧の音も今はのこらす氷して岩影さひし冬の山さと
うきねさめ氷をたひのすみかにて故郷こふるをしそ鳴なる
したこほる難波の芦の打なひき波よせ殘す浦風そふく

神祇

哀とも神はあらはに石清水きよき心のそこはしるらん
ちはやふる賀茂の川波たちゐにも深き頼みをかけぬまそなき
春日山かすにも神はいれすともかけてそたのむ藤のなはかり
世をてらす日吉の光くもりなくさしてそしるき君か千年は
君かへん千世のけしきをみくまのゝ蒹ましとや神も見るらん

釋教

序品

紅葉ちる法のはやしをかきわけてふかくや道を尋ね入けん

方便品

一ふさの花をつみても思ひきやつゐに佛の身とならんとは

譬喩品

たれもみな三の車にのりの道心しかけはさとらさらめや

信解品

はる〳〵と草のいほりを尋すは行衞もしらぬわかこならまし

藥草品

法のためあまねき雨やそゝくらん草木もよもに花咲にけり

曉

雲とつる松のとほそにしらむ夜は一聲つくる鳥たにもなし
ふかき夜にたれまたかゝるれ覺して野寺の鐘に袖ぬらすらん
霧まよふ外山の空のほの〳〵とあけぬとみれは鴫のはねかき
草枕いまはといそく旅人のおもひさためぬ明くれのそら
月さゆる明石のせとの明かたにほのかにきゆるかこのよひ聲

暮

夕露をはらふ嵐は音すきて梢に殘る日くらしの聲
入日さす片山かけの柴の戸に旅の宿とふ人そまたるゝ
山人はいそき出ぬる跡の雲とへとこたへぬたそかれの空
夕附日光は空にのこれとも山陰くらき大はらの里
なにとなく物さひわたるけしきかな軒の梢のくれかゝる空

山路

たちとまりいは井の水をむすふてに都もあかぬ志賀の山こえ
露わけて夕越くれはをしほ山袖より下に松かせそふく
わけいれは衣手さむみ露そへてさもわひさする秋の山みち
とはるへき道とはさすかまたれけり庵よりつゝく岩のかけ橋
たつねきて哀となとか岩根ふみかよはぬほとの山のおくかは

海邊

和田の原明れは波にうかふ蜑のいつくを宿とこきかへるらん
しほたるゝあまや關守清見潟磯のすまひになみはかけつゝ
波わけてかるもになるゝわれからとれをなく袖かあまの濡衣
しら波のよるへのみきはたつなきて沖にさひしき蜑のつり舟
夜とゝもに煙をさへやかつくらん鹽やきくらすいせのあま人

禁中

春ことにつくす心をおなしくはいかて雲井の花にしられん
きゝ渡る音たにすゝしみかは水すむらんかけを思ひこそやれ
おり／＼にかけてみよとや藤□□□梢は秋の錦なるらん
朝またき日なみそなふる御狩人雪打はらひ今やきぬらん
行末のなかれひさしくみゆるかな千代をこめたる河竹の庭

遊宴

いつしかと小松か原に出しより野へこそ春のすみかなりけれ
手に結ふ岩まの水に秋わきて月みるほとのよはゝみしかき
狩人のさかふはかりに出る野を心のほかに鹿やうらみん
紅葉ちるうちの河上よそにみてさのみ網代にひをやくらさん
思ふとち野にも山にもうちむれて所さためぬまとゐをそする

公事

雲井よりかさして出る藤の花橘にましる色そことなる
五月雨の晴りもはるゝ雲井かなふかきあさきをさとる御法に
逢坂の關路になつむ駒のあしもいはへてみゆるもゝしきの庭
千代ふへき豐の明の日影さし光をそふる雲のうへ人
きくたひに神や悪をます鏡有明方のあさくらの聲

祝言

君かへん八百萬代のしるしとて花さきそむる和歌の浦松
かゝりける常葉の山の岩根松いはねとしるし千代の氣色は
君か代のためしはなにかありそ海のくもともつきし沖津白浪
君か代は幾千年ともしらたつのをのかよはひも數ならすとや
のとけしなはこやの山をいつる日の照す雲井の萬代のかけ

詠百首和歌

散位源家長上

霞

萬代を松の緑もほの／＼とかすみそめぬる千代のはつ春
尋ぬへきしるしの杉も霞みつゝいかゝにとはん三輪の明ほの
夕霞かへるうら路も白波にあとまよはすな沖のつり舟
八重霞嶺の木末に龍田山春も色ある明ほのゝそら
空まても猶明ほのをしのひかれ霞の袖に春雨そふる

鶯

春をあさみこほれる涙風さえてまたうちとけぬ鶯のこゑ
けふも猶谷の古巣を出やらてわれをまちける鶯の聲
すみなれしなこりをしのふ古巣よりなく／＼出る鶯の聲
ぬふときく梅の花かさかひもなしたゝぬれ色のうくひすの聲
時鳥花橘になくよりも猶梅かえのうくひすのこゑ

花

咲やらぬ嶺の櫻をまつ風のかねてかなしき春のやま里
花ゆへのうらみも今はたえねとやちらぬ櫻に春風そふく
吉野山花をたつぬる古郷の（にイ）ちるをまつこそわれをまつらめ
白川の花みることもみそちへてわれやすらはぬ木の本そなき
山櫻木すゑをはらふうらみゆへ花も涙も風よりそちる

郭公

子規かたまつよひの山のはにさもあらぬ月ははや出にけり
夢なれやうの花月夜ふくる夜の垣ねにしのふ鳥の一聲
うくひすの古巣をつけし跡なれは雲路よりなくほとゝきす哉
橘のにほはぬまてそ時鳥くもにやとかるゆふくれの聲
橘の匂ひもいまはみな月に思ひのきはの子規かな

五月雨

ふりそめてたえ〳〵にみし庭たつみ一つにつゝく五月雨の頃

五月雨に水もおほゐのし水さへみしにもあらす面かはりして

五月雨にむこのわたりを見渡せはおりゐる雲そみきは也ける

あま人よいかに日影をまつ嶋やをしまか磯のさみたれのそら

五月雨にみつの濱松波かけて梢に殘るまの〻浦かせ

草花

いほ結ふ野への小萩のさきぬとはわけくる人の袖よりそしる

宮城野の小萩か色もまたみれと袂にうつるおもかけのすり

移しうふる千種の花のはなさかり心の色や庭にみゆらん

物ことに心をとむる片岡の尾花か袖に秋かせそふく

武藏野の草におほめく女郎花妻もこもれる心地社すれ

月

ちゝの秋のとけき御代の空晴て嬉しきにさへ袖の月影

雲きえてまつもおしむも月ゆへにうらみそふかき山のはの空

秋のよのはれたる空にすむ月の光そほしのくもりなりける

まはらなるもやにも影は有明の月にぬるよのなこそおしけれ

よひのまのなかめほとなき三か月をまたほのめかす有明の空

紅葉

千草みし野へわけすさみ今はとて思ひたつたの山のはのいろ

御室山紅葉のおくになりぬれは松ものこらぬ心地こそすれ

水の面にきしの紅葉やうつるらんくれなゐくゝる池のにほ鳥

ちらぬまに猶やすらはんはゝそ原これより後の秋の色かは

色そめし時雨にのこるみやまへの槇の梢は嵐ふけとも

雪

空さえて時雨も風にむすほゝれけさより庭に雪もふる也

山里のねやの板まを雪とちて煙もけさは道たえにけり

あさからぬ心のほともしるはかり道わけそむる雪のふるさと

しほやかぬ日數も今は積るまて里のあまりに雪は降つゝ

雪ふかし人めも更になしはらのむまや〳〵とたれをまつらん

氷

志賀の山おろす嵐に波きえてなきたる浦や氷なるらん

さえ〳〵て池のつらゝもよをかされ跡たえはつる鳰の通路

大井川みきはのつらゝ雪積りほそ谷川と成にける哉

瀧の音はつらゝにたゆる太山邊の松の嵐そ嶺に殘れる

よこの海の氷のはてに舟とめて恨も遠きうきねをそする

神祇

長閑なるはこやの山にはる〳〵と神と君との契りをそする

このころのやくもの末の言の葉に思ひいつものいにしへの空

萬代をまつおふる濱に年ふりて君かためにや住吉の神

さかりなる和歌の浦波立そひて恵もしるき玉津嶋姫

うきみいまやそうち人のかすなれは君をいのるはふた心なし

釋教五戒

不殺生戒

今よりはまゆみつき弓引かへてなれくるしかに哀をもしれ

不偸盗戒

さつけをくまことの法を思ひとれおしむ寶はさもあらすとも

不婬戒

我妹子に思ひ軒端の年をへてふかくもしけれ戀わすれ草

不妄語戒

攝津國の難波の事につけつゝもよしなはあしといひな隱しそ

不飲酒戒

さとりえぬ浮世のゑひをさめぬ身にかりの情は誰すゝむとも

曉

みしかよの結ひもあへぬ夢のよにうつゝともなき鐘のをと哉
東雲の思ふ思ひの數々に猶をきあまる袖のつゆかな
爪木こる賤かあさけの煙ゆへまた夜をこめてひましらむ也
よひにきくおなし野寺の鐘の音に哀は今そつきはてぬへき
さらにまたみぬいにしへの面影も心のうちにありあけのそら

暮

夕附日さすや岡邊の柴の戸に程なくかはる三日月のかけ
いそやかた煙は空に色消てほのめきそむるあまのもしほ火
たれこむるまとやはるかにへたつらん入相の鐘は遠さかる也
いかにせん月にもあかぬ光まて袖もおほろにゆふつゝのかけ
秋のみと思ひしものを袖の露いつものくれのならひとそなる

山路

此ころはいそく家路そかはりける春より後の志賀の山越
歸りみる麓の里そ遠からぬはる／＼きぬる心地すれとも
岩ねふみはしかたしく苔の上に程なき夢のむすほゝれつゝ
はる／＼と岩のかけちになつみきて駒立とまるやま川の水
むかし越し跡のなさけの面影も龍田の山の夕くれのそら

海邊

和歌の浦の波を心にかけまくもかしこき御代の習ひとそきく
なかめやるをしまかさきの濱ひさし軒端にきゆる沖津白波
蜑小舟かへる浦路の夕くれに松ふく風そしほり也ける
はりまかたしらぬ波路にこよひより浦なれそむる月の影哉
哀なりゆくゑもしらぬ波の上に浮世をわたるあまの釣舟

禁中

皇のよるのおとゝのあけかたにほの／＼殘る春のともし火
とのもりの朝清めする萩の戸にしかまのかちのみえぬ花すり
いにしへのいつゝの人もなしつほにみぬ面影は猶のこりつゝ
今さらに思ひもたえぬ煙哉月すむころの庭の火たきや
今よりやとたえはてなんいにしへはふたゝひ渡る雲のかけ橋

遊宴

ひき／＼に子日の野へにかはれとも千年をまつそもろ心なる
白川の花にみゆきの跡とへは老木のさくらはれにかへりつゝ
うすくもり櫻か木に風たえて木のもとたらぬまりのをと哉
春の花秋のもみちの木のもとに今年なれぬるわかの浦人
月ふけて都のともに逢坂のわらやにかよふ嶺のまつかせ

公事

家路より都の儀わけそめてけふたちわたる雲のうへ人
をみ衣たちぬる跡のなこりかな月にうつれる庭のくれ竹
雲の上のさ月の空のひめもすにきくもすゝしき法の聲哉
昔なれし乙女の袖もゆかしきに豐の明をよそなからみん
明そめしあまの岩戸のむかしより雲井にたえぬあかほしの聲

祝言

末よいかにまた若松の此頃をのとけき御代のためしにそひく
白川のなかれの末をむすふとも猶たしなみはたちまさりませ
くもりなき君かよはひをてらしみて月日やかすを空にしる覽
枝々も八百萬代をまつ風は君かならごを吹つたふ也

たみまても煙をたてゝしらる也にきはふ御代にあふ嬉しさを

詠百首應　製和歌

散位従五位下鴨縣主長明上

霞

春風のはらひもあへぬ嶺の雪をまつけつ物は霞なりけり
はれやらぬ心の空の朝霞雪けをこめて春めきにけり
故郷にかよふなかめの道とちて心もかすむ春のやますみ
雪きゆる荻のやけはら霞こめてたてぬ煙にもゆるわか草
山本もこめてしもこそ朝霞春の哀は色まさりけれ

鶯

雪にふすまかきの竹のよの程に春めくものはうくひすの聲
春やときまた思ひえぬ梅かえに花をおそしと鶯そなく
鶯の谷のすもりやこれならぬのこれる雪にたくふひとこゑ
たちこむる霞をもりて谷川のひゝきにきゆる鶯の聲
鶯もきてとかむ也梅のはなたちよるはかりありし袂を

花

まかへきてあらぬ梢をみつるかな雲こそ花のしるへなりけれ
谷かけの老木の櫻枝をなみともしくさける花をしそ思ふ
嶺わたる花のふゝきにうつもれてまた冬こもる谷の陰草
紅の一しほそめのうす櫻山路の雪のちるかとそみる
これもまたなにゝたとへん朝ほらけ花ふく風の跡のしら波

郭公

大かたはなくときけとも時鳥入つてならてこれそはつこゑ
夜はにきくなこりの床のあしたまておきうかるへき時鳥かな
きゝ遊る心もきえぬ時鳥遠さかりゆくあかつきのこゑ
夏ふかきかきれに殘る鶯もこの初聲を哀とやおもふ
夕やみは雲路やくらき時鳥月をむかふる山のはのこゑ

五月雨

久かたのあまの川水まさるらし雲さへにころさみたれのころ
よひ〳〵にすむらんものを空の月雲よりしたは五月雨のころ
あやめ草ぬれ〳〵ふきし雫よりたえせぬ軒の雨そゝきかな
五月雨は鏗の小舟の笘もりてうきれのうちにうきれをそする
とにかくに月に心そなくさまぬ姨捨山のさみたれのころ

草花

大かたは露にたはるな女郎花つもれはこれそ霜となるもの
露路わけ物思ふかりやすきつらん色あさからぬ萩の上の露
野へにれて袂にうつす萩か花かたみに宿をかる心地して
小萩原花にも色やうつるらん物思ふ袖の露のゆきすり
秋ふかきさかのゝ小はき露さえてすきゆく花の盛りをそ思ふ

月

夕附日山のはふかくなるまゝに影あらはるゝあさちふの月
思ひ出ん尾上の松の枝わけて月にとはるゝ苔のうへふし
武藏野の花のえことに露みちて千里のたまをみかく月影
ひかりみつもちの面影いつなれやかたまゆのこす在明の月

一首闕

紅葉

秋のくるけしきはしるし玉かしは時雨まつまの露のしたそめ
よそにみし雲の下にやしくれけん紅ふかきかつらきのみね
つまきゆふしつかゐりその末葉までみ山の秋の色はみせけり

風はたつ木の葉はもろし中々によきてをゆかん神なひの杜
いつしかとけふやはもりの神無月まはらに成ぬかしは木の森

雪

今朝も猶はけしき風の氣色にて雲に殘れる雪をしるかな
ちるよりもあやなかりけり霜をへて葉かへぬ椎の雪の下おれ
わけいれはぬれす成行袂かな外山のほとそ雪はきえける
越ぬへし雪の白波たつた山ひかりはよはにきえんものかは
たゝきこし槇の板戸の音たえて風たにとはぬ雪の夕くれ

氷

風さはく波まの床にぬる鳥もけふやつらゝの枕さたむる
すわのとにくめちの神や通ふらんよるそ氷のはしわたしける
露をきしひたのほそ江のこすけはら冬は氷にむすほゝれつゝ
ねぬる夜はむへさえけらし杉の庵の軒のたるひの土につく迄
つらゝゐるきやまつたひのそふ〳〵に朝ゆく駒の音の寒けさ

神祇

よもの海の波をしつめて跡たるゝ神やさなからあきつ嶋守
色かへぬ君にあふひのもろかつら神にそかくる千代の行末
大和なるためしをみせよ君か代に塵にましはる神ならはかみ
千代といはゝいともかしこし朝夕にいのる心は神のまに〳〵
さりともと濁りなき世を頼む哉なかれたえせぬみたらしの水

釋教

すかたこそ哀とおなしあたしのゝ露もて露をいかゝけつへき
心せよたゝなはかりの河をたにさこそ昔はわたらさりけれ
なをさりにつくるゐもりの色もはや思へは法のいさめ也けり
玉かゝる衣のそてもくちぬへしはやうちはらへくはのはの露
し□よき□むらさきの跡もなき□ほか□□□露をみしにも

曉

あけぬとかはつかあまりの冬のよの月より後にしらむ山のは
露ふかきかり田の庵のいな莚路のはてはしきのはねかき
今はとて吹すさむ也牧の笛のねをはやこゑの鳥にゆつりて
おもふとち昔かたりに夜はふけてふすかとすれは鳥の初聲
やすらひにしらてねにける槇の戸を明方にさすしのゝめの月

暮

山かつの野かひの道になれにけりなのか心とかへるはるこま
賤の男か山路をいつるをとす也爪木の下にむつかたりして
けふもまた誰かはとふとなかめやる關への松に日くらしの聲
月にこそ山のはかけてうらみしか入日の跡も心すみけり
□□□雲を友にて暮にけりこさめそほふる山陰のいほ

山路

夕されは山路にわひぬわけのほる雲よりおくに瀧つせの音
有明の月たにみえす成にけりひはらか下にみねのかよひち
山路わけうちやすむまの椎の葉も旅にしあれは心すみけり
嶺つゝきさゝわくる袖にたまる露みせはや人に旅の物とて
都いてし日數かそへてたれかけふ思ひをこするうつの山こえ

海邊

夕されは□風さむみ隔なきて濱路さひしきちかの□かま
波わくるかゝりやいつれ常陸海のかしまか崎の蜑のもしほ火
たまもゆふあまの袖かきぬしやたれけに心ある松かうらしま
□たるゝしかまのあまに宿かりてたくものほかの煙たてつる
た□□□ふく□もへのあまの濱□□□のきた□□□沖津白波

禁中

君そすむ千代をかさぬる九重の雲ゐの花のゆく末のはる
君か代に雲かゝれとや百敷のあたりにちりの山となるらん
誰こゝに草の原まてかこちけん花みし暮のおほろ月夜に
すきかてに思はぬたひはなしつほのふかき情にすむこゝろ哉
鶯のねもや雲井にうつりけん宿はととひし花をしたひて

遊宴

さも社は雪をめくらす色ならめをもけにみゆるうすものゝ袖
さらぬたに千代をこめたる竹の聲松の調にふきそそへつる
朝夕にかされてそみる君か代の久しきしまのやまとことのは
莽方のかすのあまりを袖にうけてあかぬこかけをかへる諸人
春の山秋の野原になくさめてあらるゝものは心なりけり

公事

君かため和田のはらから尋ねきてしるしをみする千代の初春
諸人の猶あらたむるあしたこそ心の春のはしめなりけれ
年へぬる豊の明に色そへて乙女さひすもみゆるけふかな
呉竹の枝もる月の在明に庭まてすれる山あゐのそて
ふけぬれは三世の佛の數ならぬ大宮人の名をもきくかな

祝言

幾千代か雲井の影をます鏡はこやの山におさまれるこころ
ことにいてあたにはいはし宮ゐする下つ岩ねの動きなき世を
色そはん千入の末そ長閑なる春のみやまの嶺の若松
いか計り恵あまれきみよなれやたかやの軒のかやもしとゐに
おりにあふ言の葉迄もきこえあくる身はしも乍ら思ふ千年を

詠百首應　製和歌

散位從五位下賀茂縣主季保上

霞

春といへは外山の霞たちにけりうすゝみわたるしからきの里
岩そゝく雪の下水もるからに霞なかるゝはるのやまかせ
海原やしらぬ行衛はたちこめて霞そ殘る沖津しら波
越きつる山路の末をみわたせはいく里こむる霞なるらん
なにとなく宿の梢をおもはせて霞にかへるはるの山人

鶯

古巣よりまつ山里に人なれてみやこへかよふうくひすの聲
さひしさはならひにけりな雪ふかき古巣に殘る谷のうくひす
露結ふ籬の竹につたひきて軒に玉ちる鶯の聲
匂ひくる梢はしるし鶯の聲にそまよふ明くれのそら
きくよりも哀やまさる鶯の春ふかくなるゆふくれの聲

花

かへるさもわすれぬ花の面影は宿の櫻の木末なりけり
白雲はいくへもこめよ山櫻みえぬも花の色ならぬかは
よしの山ふる木の櫻下はえておなしあとつく花さきにけり
をしなへて梢もわかす散おりは花に聲かす松の春かせ
なかむれは雲におほめく高根より散も嬉しき花櫻かな

子規

夜とゝもにまたれてそなく時鳥心となのるひと聲もかな
時鳥おほめくさよの一聲はきゝても人に猶そとはるゝ
名殘をはいつちわけまし時鳥おほめくよはの村雨の聲
子規聲の匂ひも契あれや花橘のゆふくれのそら

まつほとはわくかたなきな時鳥たか一聲なきゝまかふらん

五月雨

さみたれはよこの入江のわたし舟思はぬ山の麓にそよる

五月雨は軒はなよそのなかめにて心もほかへかよひやはする

はる／＼とつゝく湊なみわたせはしほちもわかす五月雨の比

中々に五月の夜はのくらき雨によの常ならすすむ心かな

一首闕

草花

風こゆるとなちの末なみ渡せは雲にほのめくなのゝかやはら

小男鹿のいる野の尾花打なひきさもあらましにたれ招くらん

わけわふる露は袂にしたひきて色こそみえねまのゝ白萩

見わたせは露ものこらぬあさ風に猶玉まくは野路の葛原

秋ふかき霧のまかきな人とはゝまつこたふへき荻のなと哉

月

なかむれは更行夜はの雲消て月吹わたすあまの川風

雲の波はるかにきえてもろこしの空へたてなくすめる月かな

なかむれは袖にしくるゝ心こそ月のかつらのいろはそめけれ

すみのほる心はいかに秋のよの月になるゝは袖のしら露

ふかき秋の哀しらるゝなかめまて殘りにてぬる在明の月

紅葉

一枝なしくるゝ山にさきたてゝこゝろとしける紅葉なそみる

龍田山もみちに殘る常葉木のみとりもふかき秋のいろ哉

もみち葉にしくるゝ雲のはれゆけは緣にのこる山のはの空

色にあまる心な人にみせんとや鹿なく山の嶺のもみちは

身にしめし色より外の梢までうつりはてぬる秋のくれかな

雪

けぬか上に積るはかりのななかへていくよふりぬる雪の白山

とふ人の跡にそみゆる降雪は心の道にたえけるものな

山路までひとへにこむるそのゝ雪に空さへしろし在明の月

中々になかめのみちははれにけりまかきの竹の雪の下ふし

こしかたはいくへの雲に跡たえてかへる山路の雪なみるらん

氷

いつしかと氷るみきはや朝風の吹すきてゆく跡なみすらん

なか／＼にこほれる程はみゆるかな水のはにたえし山川の水

池の波むすひはてつるみきはより庭までこほる霜の下草

おち瀧つ河そひましは玉こえて思はぬ後も氷しにけり

吹わたす夜半のあらしの音さえてこほるすかたも玉川の水

神祇

うつります五十鈴河上影きよみてる日になひくいせの濱荻

石清水月に契りやふかゝらん秋のなかはにわきてうつれる

みあれ山いくよの雲は嶺こめてしらぬ昔のけふにあふらん

沖つ風更行月の影さえて色まてすめるすみよしの松

宮柱はこやの山にたてそへて神代もおなし君かまに／＼

釋教五波羅蜜

布施

山風に花も紅葉もまかせてんそれも心にとまりやはせぬ

戒

世なうみなわたりはつへきしるへとや貝とる浦にかゝる舟人

忍辱

つらきなもうきなもしのふ思ひこそ心の道のまことなりけれ

精　進

もみち葉におからめなせそしたふかき岩のかけちの秋の山人

禪　定

苔ふかき杉のとほそに跡たえて心のともにすみそめのそて

曉

哀しる心のそこの數なれやほの〳〵あくる鴫のはねかき

なにとなく思はぬ外の情かないる山人の月にゆくこゑ

さめてける夢の夜床の明かたに露やはちきる手枕のそて

またきかす稲葉さかふく小山田のこやのね覺に嵐ふくなり

すきにしも今行末のあらましも心につゝくあけかたの空

暮

み渡せはあられもまつそかよひける夕日かくるゝ山かけの里

たゝならす雲のけしきなしはてゝくるゝは空も物や悲しき

思ひやる心はいつちかよふらんなかめのくれもゆふくれの空

とまるへき野山か末の里なれや柴の葉こしに煙たつなり

心こそ哀をそへてすみにけれ月まつほとのゆふつゝの影

山　路

よそにみし雲にまちてやかゝるらん花にわけいる春の山ふみ

わすれすも嵐にはらふいはか上にしはしされつる秋の山越

岩ねふみ眞柴わけいる山人の袖にこほるゝ嶺のさゝ栗

昔まて思はぬ袖もしほるらし時雨にまよふうつの山みち

なにとなく遠さかりけるかたみかなこえくる嶺に殘る白雪

海　邊

波かゝる浦の笘やの磯枕こゝろのほかの袖もぬれけり

雲の波はらふ嵐に月さえてまゆに霜ふるあはの白雪

たよりまてさひしき蜑のすまゐかな玉もかりしく磯の松陰

みさこゐる遠あら礒になとすみて波よりひゝく浦の松風

雲まよふ沖の波まのなかめよりほとなくうつるとなつ嶋山

禁　中

朝日もるかけものとけし九重のみかきの竹の春の一しほ

なか〳〵に情そふかきとのもりのきよめに積る花のちり山

たか袖にかけてしむらん梅つほの軒端の枝に風わたる也

たくひなく思ひそそふる萩の戸に村雨そゝく花のぬれ色

萬代にすむへきかけはみかは水にこらぬ末をくみてしる哉

遊　宴

流れくる岩まによとむさかつきに心のかけやまつうつるらん

櫻人こゑにかなつる袖のうへにやかてつゝめと花のちるらん

こよひはと月にちきれは諸人のなかめや空にむすほゝるらん

なにとなく嵐ふくよの笛の音にあつまの琴をかきあはせつゝ

色にそむ大和ことのはかさねなきて心の底をともにみえぬる

公　事

長閑なる春のなかめにひく駒はまつれり人のけしきにそしる

諸人のかはりてわたるかすみえておろしのみつき末となる也

雲の上にうつす星合の影みれは水にもふかき契りをそしる

天つ人袖ふる跡のけふなれや乙女たちまふ雲のかよひち

雲の上の有明にうつる庭の面に月影こほる山あゐの袖

祝　言

たのもしな老せぬかとのうちなれは幾萬代のあるしなるらん

照す日はあきつしまねの空はれてよつの海にも波そのとけき

吹風ものとけくわたる御代なれは鳥の聲までおとろかぬ哉

行末をはこやの山に契りをきて千代にちよそふ嶺の若松
君か代は人の心もをよはねはいのるやしろにまかせつるかな

詠百首和歌

女房宮内卿〔上〕

かすみ

春といへは日影もしろきけしきより心まてこそ霞そめけれ
岩橋のよるの契りや思ひ出る霞にこもるかつらきの神
なかめやる朧路の末は雲消て霞へたつる淡路しま山
心なきわかためいかて殘るらん霞のほかの春のあけほの
ゆくさきの里をしらする夕煙霞のそことやかてなりぬる

うくひす

春も猶谷の古巣はうつもれて雪より出るうくひすの聲
しらてきく人もやあらんうくひすの春にさきたつ青き鳥とは
軒ちかき梅のたちえやしるからん思ひの外にきなくうくひす
鶯のなこりもとめぬ古巣かなまたかへりくるおりもこそあれ
世中を思ひすてつるすまゐまて殘る心のうくひすのこゑ

はな

まちえても猶しら雲とみゆるかな花にさきたつ心ならひは
たつねこぬ人こそしられ花さかり谷にもいつか春のよそなる
春の夜の夢路にかよふ面影や花のさかりのうつゝなるらん
花ゆへはなかめも庭に積りけり風のつらさは木もとならて
散つもる木の下をまた吹風によせてかへらぬ波そたちける

ほとゝきす

時鳥うの花さかぬ宿ならはさのみやはとはおもはさらまし
さりともとまたれやはせぬ時鳥花橘のにほふゆふくれ
郭公さつきの雲のまよりこゑもかすみてとをさかるなり
子規きくたにわかぬ一聲のおもかけのみそあり明のそら
足曳の山時鳥いとひけんむかしをしるはねさめなりけり

さみたれ

山の井のすそわけ出しさゝれ水いつくなるらん五月雨の比
五月雨におもはぬみなのしるしかな河そひ柳のこる木末は
水そこになりやはてぬる五月雨に岩こす波の音しのふなり
五月雨の雲にもかすむなかめかな遠山もとのゆふくれのそら
五月雨に玉嶋河の水越て岸のいはねのとをさかりぬる

くさのはな

ねさめより秋の哀はかよひけり荻の上葉を風にまかせて
外山なるならの葉まてははけしくて尾花の末によはる秋風
女郎花野へをひとつにすみなしてまかきに殘るいろをみる哉
そこきよき野澤に秋の色みえてわけぬ衣さへ萩か花すり
武藏野や色をそおもふ藤袴そのむらさきのゆかりならねと

月

すめはとて宿にはとまる心かはまつこそおもへひろ澤の月
またしらぬ姨捨山も月といへは心にならすさらしなの里
あさち原露のみわけてとふ人の心そみゆる夜半の月影
なか〳〵に一むら雨のうき雲は月の光をみかくなりけり
數ならぬ賤かたな井の水まても心はかりはやとす月かけ

もみち

霰ふるみやまのいほをとはしとやまさきの桂色にいつらん
龍田山嵐や嶺にかよふらんわたらぬ水もにしきたえけり

山のはによこ雲わたるけしきよりまかふ日影や嶺のもみち葉
秋霧の立田の山をこめつれはたえまにもるゝ色をみるかな
散かゝるよその木の葉をさきたてゝ嵐そ松の色をそめける

ゆき

さひしさをとひこぬ人の心まてあらはれそむる雪の明ほの
春はなを花をのみこそ思ひしか雪にはわかぬ梢なりけり
なかめこし千種の秋は霜かれて野へはひとつに雪の明かた
降雪に袖うちはらひこき行は水にはうかぬ花そちりける
みやまへや同し雪けの空なから袖のみさゆるふるさとのいほ

こほり

うすこほりしたとけ出る谷川の音にそかよふ峯の松かせ
冬の池は月すむ夜半にさえそめて影よりむすふうす氷かな
をとつるゝかけひの水はつらゝゐて煙はかりそたえぬ山里
ひまとめて山田のこせりつむ人の袖さへこほる雪の下水
ゆく水を結ひとゝむるつらゝ哉おろす嵐やゐせきなるらん

しんき

五十鈴川なかれ久しき御代とてや天てる神はかけをとめける
住吉の松のしつえにしらゆふの風もたむけの波やかくらん
かたそきのゆきあはぬまに風さえて霜より先に月もをきけり
三輪の山とはれぬ宿に神さひて幾代になりぬ杉の秋かせ
貴舟川瀧つ岩ねにちる玉ややはらけてすむひかりなるらん

ほうもん

あさひ山まつてる嶺の小松原よそにくちぬる谷のうもれ木
やとせまていはての森の下もみちふかき心のいろそゆかしき
法のため身にもかへけるから衣くちし袂はかはかさらなん
思ふより心のやみもはれぬへし鷲の高根にありあけの月
かりそめの夜半の煙と思はすは鶴のはやしの名こそおしけれ

あかつき

霧のうちに影ほのめかす有明の月にそかよふ春のなかめは
まちえたる鐘より後も明やらて又夢をとふ鳥のこゑかな
みるまゝに明行空のけしき哉遠山のはのひまもあらはに
思ふこと有明かたの月すめはしくれぬ袖に露そいろせし
折からや春にもかよふ哀かなかすまぬものをあけくれの空

ゆふくれ

さゝかにのはかなくみゆるすまひ哉軒のしのふに宿を定めて
物思はぬ人はたへける山里に我身ひとつの秋のゆふくれ
是もけにさひしかりけり日くらしの聲より外にとふ人もなし
夕まくれことそともなきなかめにそ秋の心はのこらさりける
さても又たえける物を暮かたに雨そほふれる山かけの庵

やまみち

葛城やかけちのそこはかすかにて雲よりかよふ春の山ふし
いかにせんしほるもまかふ暮方を花ゆへなれぬ山路なりせは
旅人のやすむたよりとなりにけりさか越はつるならの下陰
麓をはなかめすてつる山路かなかすまぬ里のかすもほのかに
雪つもる谷のこすけを思ふ哉めかれないとふいはのかけちに

かいへん

み渡せは雲より波にこき出て朝日にちかきあまの釣舟
とまりとて厭はぬ物を月をみはふけゐの浦に名こそおしけれ
波まよりほの〳〵かすむ光かななかめの末やあまのいさり火
一夜たに松のあらしを思ひしになるれはなれぬあまのすむ宿

濱千鳥鹽風よする波の音にもるゝ聲さへとをさかるなり

きんちう

昔より流絶せぬ御河水いゝく萬代のかけうつるらん

隈もなき月の光にみかゝれてくろ戸もいつら名にしおひけり

うしみつといふに昔そしられけるねそすきにける人の心を

あられふる玉しく庭に影さえて月すみわたる雲のかけ橋

風ませに庭もはたらにふりにけりけさこそみゆれ初雪のそら

あそひ

春にあふ跡ともしろきけしき哉むれゐてうたふこやなきの聲

散花の陰にむれゐてしきしまやまとことのはおもひ〳〵に

笛の音やことの絶まもさひしきに名殘をのこす嶺のまつ風

行末も思ひ出ある跡なれやみゆきふりにしみよしのゝ瀧

大井川秋はむかしのおなし色の心にうかふみつのふねかな

く　し

百敷やかもの羽色の青き馬をいつしかみよとひきそつらぬる

ともかくろゐてのもろやの箏に月さへはやくいろにそ有ける

かさしとろみきのかはらけかさなりて立まふ袖そ亂れぬる哉

色かへぬためしなけふはひきそへてあやめのこしの末も遥に

雲のうへのをとめの姿みるおりそよしのゝ宮もおも影にたつ

いはひ

行末をかねてや月のてらすらんはこやの山のよろつ代のかけ

君か代は相生の松も年をへてもゝたひ春の色やかはらん

よもの海を尋ねはてゝはたへぬとも限りもしらぬ御代の末哉

君か代は猶たくひなきためしかな濱の眞砂のかすはしるとも

山路ゆく菊の下水よにすめはわれも千代にとうつすかけかな

詠百首和歌

[illegible]

かすみ

霞たつ梢はかりや春ならんまた雪さゆるみよしのゝさと

相坂の山たちこえし春霞都の空そとまりなりける

都にと春たちぬれはなしなへて霞かゝらぬ山のはもなし

うちなかめ夏行空やかすむらんおほろになりぬ春のよの月

なかむれは行末となき霞かなのとけき御代の春のみそらに

うくひす

いつしかときかまほしきは山里に春をつくなるうくひすの聲

鶯は木のまをすくる春風に今や古巣を思ひたつらん

やよいかに竹のよとこは立出て花もにほはぬ野へのうくひす

降雪は花にまかへて咲やらぬ梅のたちえにうくひすそなく

軒の梅のにほひをさそふけしきにて先をとつるゝ鶯の聲

は　な

かねてわれ花よりさきにいりぬれは幾重もかすめ芳野の山

杉ならぬ花の梢をしるしにて春の宿をも人はとひけり

ちりはてん後をはしらてくやしくも心のまゝに花になれぬる

あすよりは嶺の櫻も嵐山春とともにやつきんとすらん

ちりぬれとあかぬ匂ひに櫻花木のもとなから春はくらしつ

ほとゝきす

時鳥まつよのかすの積るかなむなしくおくる空をなかめて

子規つねよりもけにまたるゝは花橘のにほふゆふくれ

なか〳〵にまちつるよりも郭公心くたくる一こゑのそら

きゝしれとおもはせかほに子規杜の梢のほかになくなり

夏のよもなかゝりけりな夕くれの山時鳥ひと聲のそら

さみたれ

うちしめり花橘そかほるなるさ月の雨のゆふくれのそら
五月雨は庭もひとつに水越て池のあやめの葉すゑたになし
君くやとまつ夕暮の五月雨はなかめわつらふ物にそありける
さひしさに遠の雲井をなかむれはとりたにみえぬ五月雨の空
五月雨はふしみのを田のあせつたひいくかに成ぬ人も通はて

くさのはな

露ふかきまのゝうら萩咲にけり行かふ人の袖のはなすり
はやくみし人の心やあたしのゝ雲にしほるゝ女郎花かな
秋のゝの千種の色にとゝめつる心や花の露とをくらん
秋風に花やちるらん宮城野の小萩か原に鹿そなくなる
行秋をまねきかねてや花薄はてはしとろにおれふしぬらん

つき

いてぬより月のすかたをおもはせてまつ雲拂ふ嶺のまつかせ
すむ月のあはれのこらぬ秋のよに荻ふく風を猶いかにせん
たれならん更行月のくまなきをわれもみるとそ衣うつなる
いく秋の月のかゝみと成ぬらんかけみる人のおほさはのいけ
なけきけん昔の人のけしきまておもひしらるゝ姨捨の山

もみち

きのふまて青葉の山とみしものをけさや時雨に色かはるらん
はれゆけは猶しくるゝをまち顔にまた色うすき嶺のもみちは
なにをかは思ひまさまし紅葉はの此色なからときはなりせは
秋ふかみしくるゝまゝにもみちはは皆くれなゐの衣手のもり
龍田山紅葉をさそふ風すきて秋は雲井にかへるかりかね

ゆき

さらすとてたれかはとはん山里のみちたえそむるけさの初雪
つの國のこやもあらはに霜かれて芦の下葉にまた雪そふる
さらにまた花の春にそ成にける志賀の山ちの雪の明ほの
すみかまの煙を宿のしるへにて雪にもとはんをのゝさと人
いほりさすかた山そはの通ひちもそこともみえぬ雪のゆふ暮

こほり

みきはまてよせぬ波こそ立かへれ氷にけりなしかのから崎
みなと川芦まわけゆくそほ舟のさほにしらるゝうす氷かな
松陰のいは井のつらゝひまなくて結ひし水のけしきともなし
さゆる夜は池のつらゝやむすふらん更行儘にをしそなくなる
水底も氷とちてや冬くれはなかれもやらぬ玉川のみつ

しんき

五十鈴川きよきなかれは君かため萬代すめと神そちかひし
神風やもゝえの松にゆふたすきみことをかけぬ時のまそなき
もらすなよ君か八千代にあふひ草かけてそたのむ神垣の内
雲井より日吉の神もうつりきてはこやの山に萬代そへん
神代より神や植けん萬代のしるしにたてるみわの杉村

ほうもん

すまの浦の蜑のいさり火たきすてゝくゆる煙を空にたてつる
なつさはし花の香ぬすむ山風におなしたくひになりも社すれ
思へたゝ心なきさのをしたにもよそのつまには流れあふかは
忍ひつゝ心の水にせきとめてうきたることの葉をはなかさし
のちのよのつみむすふなる花にゑふ露の情もよしなかりけれ

あかつき

おとろかす尾上の鐘に相坂のゆふつけ鳥もいまやなくらん
かきくらしふる白雪のつもるよは庭のおもよりあくる東雲
霧ふかきさほの川瀬をすきゆけは暁かけて千鳥なくなり
何ゆへの名殘ともなくいかなれは明ぬとつくる鳥のねのうき
明行とあかぬ名殘にいりやらて雲にやすらふ東雲の月

ゆふへ

しつかなる外山の里のけしきかな鳥も梢にねくらさためて
行末のおほつかなさは山のはのくれぬる空にかへるかりかね
秋はたゝ心よりおく夕露を袖のほかともおもひけるかな
夕暮の空まてふくる夜半ならはたえてもいかゝうち眺むへき
すみなれぬ人にみせはやすかるなく裾のゝ里のくれかゝる程

やまみち

いさゝらは立かへりなん旅衣めなれぬ山はくるしかりけり
たつぬれはまた里遠きあらち山越もはてぬにくれんとすらん
これなれや夢にも人にあはすしてうつゝにこえしうつの山道
袖になく露うち拂ひ月影とともにすきゆくさよの中山
行末も跡も八重なる雲井にてふむ空もなき岩のかけみち

かいへん

思ひしる一夜あかしのうきねしてつれにすむらん秋の心を
鹽風やあらき濱邊に宿とりて枕になるゝ波のをとかな
興津風夜さむになれや田子の浦の蜑のもしほ火たき増るらん
二見潟松吹風に雲きえて月の影みつしほあひのはま
思ふにも猶まさりぬる哀かな千鳥とわたるすまの明ほの

たいり

九重に匂ひひさしき櫻花やとから風もちらすなりけり
心あれやきよめし庭を眺めつゝ花にやすめるとものみやつこ
萩の戸はまた花さかす雲井には風の音にや秋をしるらん
いかはかり心のうちもはれぬらん月になれたる雲のうへ人
荒き風みかきのほかにへたてつゝ花も紅葉ものとかにそみる

あそひ

皇のあまねくめくむおりにあひて萬代となる糸竹のこゑ
あつさ弓春のみ山の千代かけて思ひ／＼のまとゐをそする
諸人の波にうかふるさかつきに君かちとせのかけそさしそふ
なにとなく心やりたる諸人のけしきにみゆる君か御代かな
思ふとちいくよねぬらん花かけや苔のむしろに袖をかされて

くし

諸人の雲ゐの庭にうちむれておきふし君をいはふ初春
嬉しさは大宮人の梓弓やを萬代のためしにそひく
みたらしの河へにさよや更ぬらん霜さえわたる山あゐの袖
あかほしの雲井にすめる聲にてそあまのとあけし昔をはしる
皇のめくみあまねき御代なれや色なしとてもすてぬことの葉

いはひ

萬代もすゝしかるへき心かなはこやの山の常葉木のかけ
みかさ山松のすゑより出る日の千年の□□の光をそ□す
これやこのさしての磯の濱千鳥今よりさらに八千代とをなけ
色かへぬ竹のみとりも君か代にくらへて人のおもふものかは
君か代のためしにおふる岩根松いはねとしるし千代の氣色は

詠百首和歌

守・鎮伯耆
神主康業上

霞

いつしかと春の明行山のはにたなひく雲は霞なりけり
よしの山梢に色のかつみえてかすみそ(むはイ)花のしるへなりける(りイ)
天原ふしの煙の春の色のかすみになひく明ほのゝそら
からくにやいく霞までなかむらんまつらの沖の舟のかよひち
なしなへて春をこめける霞かな明にし日よりくるゝけふまで

鶯

谷の戸を冬のあらしにたゝかせて春のあくるに出るうくひす
春くれは谷の氷の岩まよりうち出る波に鶯のこゑ
春風の梅よりつたふくれ竹の葉末になひくうくひすの聲
花も匂ふ春のともしひきえやらてかたふく月に竹の一聲
きゝすなく春のすそのゝむら柴にまた聲やとすもゝちとり哉

花

吉野山おくゆかしくもたつぬれは花より雲にうつりゆくかな
とはしたゝ志賀の都の櫻花ちりなは庭をなをゆきてみん
たつねくるたかまと山の花さかり雲とみつるはそらめ也けり
みよし野の花なりけりと思へとも雪ふるからにはるゝしら雲
かせないとふ心も今はあらしかな花の波こすしら川の里

時鳥

郭公人よりさきにわれきかん聲をならしの岡はいつくそ
うの花のかけにかくれし時鳥けふたち花の梢にそきく
きくからにうれしくもあるか時鳥たつれ生田の森の一こゑ
時鳥まとに橘軒はあやめいかてかこゝにきなかさるへき(らむ)
軒の雨の宿とふよりも時鳥かはける聲に袖のぬれぬる

五月雨

富士のねの煙は雲にきえにけり清見か波の五月雨のころ
五月雨はいつとなきさにしほたれてかつかぬ袖をかつく蜑人
心はれぬ人やうれしと思ふらんたくひになれる五月雨の雲
人は又いとひやせまし庭の草にあなところせの雨のけしきや
水こえてみるもかひある五月雨はなからのはしの跡の白波

草花

秋風よなと萩にしも契りけん萩女郎花なひかすやあらぬ
故里の萩のにしきをかへりきてみるに心のとまりぬる哉
萩かえに松風かよふ住吉のとを里小野の夕霧のそら
小男鹿の聲かれ〳〵になるまゝになれもしほるゝ女郎花哉
藤袴きる人あらは片岡のもずのたちえやはしのかりきぬ

月

いかにせん月まつほとの山のはの松のあらしに鹿のなくなる
姨捨の山より出る月をみて今さらしなに袖のぬれぬる
ふけゆ(か)けは煙もあらし鹽かまのうらみなはてそ秋のよの月
秋そよく風も涙にしほれけりおきのまかきに雨のよの月
いつまてか涙くもらて月はみし秋まちえても秋そこひしき

紅葉

ものおもふ人のためとや龍田山うちしくれては色かはりゆく
色ふかき杉間のもみちたつねきて秋のしるしを三輪の山本
みむろ山きゝのもみちや立田姫神にたむくる錦なるらん
紅葉はをちりかもくるとまちくれて音を時雨にわきそ兼ぬる
ちりかゝる嶺の紅葉にそめられて嵐は松の時雨也けり

雪

石上ふる野の雪の朝ほらけかけそふしての色そさむけき

日にそひて秋のなこりそうもれゆく雪降山の松の下かせ
かよひなれてさこそは冬と思へとも猶雪ふかしひえの山本
なかむれはわか山のはに雪しろし都の人よあはれともみよ
跡つかて消ゆく庭の雪をみて宿をも身をも思ひしる哉

氷

夜をさむみ志賀の浦波氷ゐてなからの山に嵐をそきく
我宿は池のつらゝに鳥もこす人めは庭の草にかれつゝ
廣澤の池の氷にすむ月はなのか光をみかくなりけり
すはのとを音せてわたる嵐かな波は氷にたゝはこそあらめ
いつしかと涙の氷打とけて年のうちにそ春はたつへき

神祇

日の本は神のみ國と聞しよりいますかことくたのむとなしれ
我國をまもるは神のしるしかなをひえの杉やみわの山本
ふたつなき八年の法をまもるとてなゝます神は跡をたれける
君もしれみのりの花のゆふしてをかけても神にいのる心は
嬉しくもたのむ日吉の光をははこやの山の嶺におさめて

釋教

あさくなるみのりの水を思ふとてふかくも君をたのみつる哉
さとりえて西に心をかくるかな池のはちすにのりのしら波
月影のうつれる池の心よりあるをむなしとさとりゆく哉
蓮こそ野にも山にも咲にけれ佛の道はこれよりそゆく
たゝ獨殘りて人をすくふへきあみは阿彌陀のなにこそ有けれ

曉

かつらきやと山はかすむ山のはにまた雪しろし春の明ほの
難波かた哀もふかき霞かなあし火たくやの春のあけほの
初瀬山心も雲に成にけり雲に[illegible]はるのあけほの
今さらにおとろかれぬるなかめ哉花のよしのゝ春の明ほの
歸る鴈秋をたのむの業す也月に花みる春の明ほの

暮

住吉のしきつの浦による波の松風あらふ秋のゆふくれ
東路や月のさかりをなかめきてきよみか關の秋の夕くれ
松風はいつくもおなし聲なるをたかつの宮の秋の夕暮
花の色をなかめすくれは虫そなくわかしめしのゝ秋の夕暮
荻に鹿かやになく虫心せよ野寺のかねの秋のゆふくれ

山路

すきゝつる旅の哀を人とはゝ月に越こしさよの中山
風ふけはたかしの山の白波にひとあたりして誰かこゆらん
契りなくけふのうつゝもうつの山山ちたえなにうたゝねの夢
あくかれし花のふゝきにすきなれて雪の雲にも志賀の山越
心あらは夜はにはこえし龍田山昔のあとはきくさへそうき

海邊

思ひねのさよもふけゐの浦風に夢路たえぬる波の音哉
かよひくる浦風さむし旅衣生田の小野の秋のまくらに
明石潟嶋に朝霧ほの〳〵とこき行舟の跡をしそおもふ
波のうへの物の哀の通ひちは千鳥とわたる淡路しま山
みれはけに行衞もしらぬまさこ哉興津濱風吹上のうら

禁中

みよしのゝ山もかひなく成にけりみはしの花の春のけしきに
旅に出しその八橋はわたらねと心すゝしきみかは水かな
宮城野を思ひ出るそ哀なるけふ萩のとの秋の匂ひに

ひまもなき跡を哀とみつる哉大内山のけさのはつ春
これをみん人は心そみかくへきおほえのむらのいにしへの跡

遊　宴

もゝの花うかふ心にまちそみるあふむのつきの石にさはるを
天川光をかはす星なれやけふもてあそふしら菊の花
心ありて苔むす岩を打拂ふ人の情にもみちをそたく
庭の松のことしらふなる風の音に打あはせてもとる拍子哉
秋のいれのおさまれる代の嬉しさは春のあそひの鞠小弓まて

公　事

あしけなる馬引けふのわかなにはとれりめすこそ便也けれ
百敷や賀茂のみあれのしめのうちに佛の身をも猶すゝく哉
相坂にけふくる雲の上人は月にのりてそ駒をむかふる
雲の上はかさしの花に雪散てかもの河瀨に月そさやけき
となふなる三世の佛の名のかすをいく千代迄か君かかされん

祝　言

雲の上によはひゆつると鳴鳥は君か千年を空にしれとや
萬代の龜井の水を結ひをきしなかれ嬉しき世にもすむ哉
霜やたひをけともかれぬ竹の節のかためてけりな君か千年は
君か代は限りもしらす[はま一本]椿ふたゝひ色のかはるのみかは
身にしめて君をそおもふ神路山もゝえの松の千代のあらしに

建仁三年五月廿五日以二大藏卿本一書寫挍合了

右正治二年御百首以一古寫挍合了

群書類従巻第百七十一

和歌部廿六百首五

内裏名所百首 建保三年十月廿(ナイ)四日

作者

女房順徳院　僧正行意
参議定家卿　従三位家衡卿
俊成卿女　兵衛内侍
宮内卿家隆朝臣　左近衛中将(俊イ)忠定朝臣
前丹波守知家朝臣　前丹波守範宗朝臣
散位行能　蔵人左衛門少尉藤原康光

題

春二十首

音羽河山城　玉嶋河肥前　高砂播磨
春日野大和　三輪山同　葛木山同
手向山同　伊勢海伊勢　志賀浦近江
三嶋江摂津　鹽竈浦陸奥　宇津山駿河
葦屋里摂津　吹上濱紀伊　湯等三崎同
忍山陸奥　水無瀬河山城　大淀浦伊勢
田籠浦越中　末松山陸奥

夏十首

大井河山城　信太杜和泉　猪名野摂津
御裳濯河伊勢　伊香保沼上野　天香九山大和
大江山丹波　難波江摂津　美豆御牧山城
松浦山肥前

秋二十首

泊瀬山大和　龍田山同　須磨浦摂津
宮城野陸奥　水莖岡近江　小倉山山城
宇治河同　常盤杜同　三室山大和
高圓野同　伊駒山河内　生田池摂津
清見關駿河　武藏野武藏　伊吹山近江
佐良科里信濃　白河關陸奥　野嶋崎出羽
明石浦播磨　阿武隈河陸奥

冬十首

清瀧河山城　小鹽山同　住吉浦摂津
片野河内　田簑嶋摂津　有乳山越前
浮嶋原駿河　安達原陸奥　岡觜山丹後
鏡山近江

戀二十首

伏見里山城　霞浦常陸　石瀬杜山城
筑波山常陸　袖浦出羽　益田池大和
高師濱和泉　阿波手杜尾張　志香須香渡参河
濱名橋遠江　磯間浦紀伊　守山近江
佐野舟橋上野　安積沼陸奥　松嶋陸奥
緒斷橋同　三熊野浦紀伊　鳴海浦尾張
二見浦伊勢　名取河陸奥

雜二十首

芳野河大和　鈴鹿河伊勢　不盡山駿河
還山越前　海橋立丹後　飛鳥河大和
鳥羽山城　辰市大和　吹飯浦和泉
布引瀧攝津　長柄橋同　玉河里
生浦伊勢　佐夜中山遠江　嵯峨野山城
角太河武藏　餝磨市播磨　若浦紀伊
會坂關近江　三津濱攝津

春二十首

音羽河

女房
音羽河山にや春のこえつらむせき入ておとす雪のした水

行意
なとは河せき入し波の打出てはるきにけりとみえもするかな

定家
音羽河雪けのなみも岩こえて關のこなたに春はきに鳬

家衡
なとは河せきいるゝ水も氷とけて春やなそきと打出るなみ

俊成女
氷ゐし岩間に浪の音羽河なとに都な出るうくひす

兵衛内侍
山風に打出るなみゝ音羽河氷なわけて春はきにけり

家隆
相坂の關のこなたになとは河音にきゝつるはるはきにけり

忠定
春はきぬといはせのなみの音羽河氷打いてゝ山かせそふく

知家
つらゝゐし岩間の浪のなとは河けさふく風に春やたつらん

範宗
岩間より打出る浪の音羽河こほりの下に春や忍ひし

行能
春のたつ岩間のなみのなとは河ふかきあはれの見えもする哉

康光
降つみし雪けの水の音羽河いかなるはるの色に出らむ

玉嶋河

玉しまや河せのなみの音はして霞にうかふはるの月かけ

わかあゆつる袖も霞にまかふまて玉しまかはに春はきにけり

梅かゝや先うつるらんかけきよき玉しま河の花のかゝみに

まつらなる玉しま河の春かすみ家路しらすもへたてきにけり

いつしかと氷のゐせきもらす也たましま河のせゝの春かせ

いく千世の光やかれてかよふらん玉嶋河の春の月かけ

玉しまや新嶋守か今年ゆく河せほのめく春の三日月

浪きよき玉嶋河にうつりきて春の光も色に見えける
たま嶋の此河上もしらなみのしらすかすめる夕暮の空
石はしる玉しま河の清きせにはるの光を[のイ]ちらす月かけ
のとかなるはるの光やみかくらむ玉嶋河は浪もきこえす
みとりなる春の光そくもりなきたましま河にうつる月影

高砂

浪まより夕日かゝれる高砂の松のうは葉はかすまさりけり
時しあれは霞にけらし高砂の松のうは葉も色増りゆく
それなから春は雲井にたかさこの霞のうへの松の一しほ
しら雲に霞そふかき高砂のおのへの松の明ほのゝそら
高砂の松もふりこし[にイ]むかしまてほのかにむすふ春のよの月
たかさこの尾上は遠く成にけり浪まにかすむ松のむら立
舟人のをのかなかめも跡やなき霞にまかふ高砂のまつ
このゆふへ春雨ふりぬ高砂のおのへの松も色やそふらん
高砂の松はかはらぬみとりさへ猶あらたまる春の一しほ
春のたつ磯邊のなみは高砂のおのへにかよふ峯の松かせ
たかさこの松はまたみし色なから空のみとりに春はきにけり
高砂の松はみとりにあらはれて尾上にかすむ鶯のこゑ

春日野

春日のや去年の三月の花の香に染し心は神そしるらむ
かすか野は昨日もけふもなをさえてつまもこもらぬ荻の焼原
若菜つむとふひのゝ守春日野にけふゝる雨の明日や待らん
淺みとり草葉もえ出るかすかのに妻やこもれるきゝす鳴なり
花にまかふ峯の白雪消もあへす春日のゝへはわかなつみけり
よろつ代と君もしるらん春日野の若なつみつゝ祝ふこゝろは
わかなはやさもあらはあれ春日野のとふひのゝ守咲や梅かえ
かすかのゝ霞かくれのおもひ草したの思ひのはるゝまそなき
梅のはなそれかとはかりかすかのゝ霞をわけて春かせそふく
君かへむ千代の數つむ春日野の若なそ雪の隙もとむなる
故郷の春日の原に若菜つむ袖白妙にさゆる雪かな
春日野や木のめも春の雪の中にたれ跡つけてわかなつむらん

三輪山

花の色に猶おりしらぬかさしかな三わの檜原の春のゆふ暮
鶯鳴や三輪の檜原の木のまよりまれなる花をふく嵐かな
いかさまにまつとも誰かみわの山人にしられぬ宿のかすみは
淺みとり春のしるしや三輪山霞そたてる杉のあを葉に
たつねこしみわの杉村跡とへはかすみにまかふ春の木のもと
さひしさをいかに待見てうらむらん三わの檜原の春の明ほの
三輪山春のしるしを尋ぬれはかすみのうちに杉たてる門
みわの山ひはらの雪のこそふりてかさし折ける跡は見えけり
かさし折跡もふりゆく三輪の山いく世檜原の霞きぬらん
三輪山ひはらときくは昔にてはるはさくらそかさしなりける
山姫のそむるみとりをあかすとや三わの檜原に春雨そふる
かさしおる三輪の檜原の嵐にもはなこそにほへ春はきにけり

葛木山

淺みとり糸よりかくる青柳のかつらき山のはるさめの空
みしまゝに誰なかむらんかつらきやとよらの寺の春の明ほの
青柳のかつらき山のなかき日は空もみとりにあそふいとゆふ
春かすみかさなる山やかつらきのやまのたかれの櫻なるらん
みれ高き雲に櫻の花やちるあらしそかほるかつらきの山

葛城や高まのさくらかすむともよそにもまかへ峯のしらくも
しら雲はもとよりかゝる青柳のかつらき山ににほふ春かせ
かつらきのあらしは今やかほるらん高まのこすゑ雲そ色つく
をとめ子か葛城山のやま櫻かすみにもれしおもかけそたつ
棹姫のかつらき山の玉かつらかすみゝたれてなひく春風
かつらきやたえすたなひく白雲をこのころ花と山風そふく
葛城や高根の雲やかすむらんみとりになひく青柳の糸

手向山

白妙になひきにけりなゆふたすき手向の山に花や散らん
さくらちる手向の山に風ふけは木毎にかゝるよそのゆふして
たつあらしいつれの神に手向山花のにしきのかたもさためす
おしめともぬさに散かふ花なれや手向の山のはるの夕かせ
佐保姫の心にそめて手向山八重しく花の春のにしきを
春は又はなのにしきを手向やまぬさと散かふ神のまに／＼
秋の色にたちやはをとる手向山かすみの衣花のにしきは
さほ姫の霞の袖をたむけ山みたすな嵐うすき袂を
佐ほ姫に花のしらゆふ春かけてをのか手向の山風そふく
吹風を神やいさめむ手向山おれはかつちる花のにしきを
春の色を誰に手向の山さくらにほひもよそにふく嵐かな
はるを祈る手向の山のやま風にけさ散花は神のまに／＼

伊勢海

いせの海かすむしほひのかたをなみかへるや鴈の聲そ聞ゆる
伊勢のうみはるかにかすむ浪間よりあまの原なる海士の釣舟
いせの海や玉よる波のさくら貝かひある浦のはるの色かな
いせのうみ春の浦々霞わけて玉やひろはむきよき渚に
よる浪もきよきなきさのすさみまてかひある春のあまの袖哉
伊勢のうみきよきなきさも霞つゝ春はしほひの玉もひろはす
いせの海興津春ひの朝なきにいつへき程はあまの釣舟
伊勢のうみや浮たる舟のほの／＼と明たつ波にかすむしら雲
いせの海のなきたる朝の春の日にうら／＼かよふあまの釣舟
玉もかるいせをの海士の暇なみ長き日も猶あかすやあるらん
伊勢のうみの汐干もしらぬ夕なきに渡をわけて玉やひろはむ
いせの海かすめる方も拾てふうらの鹽貝手にもたまらす

志賀浦

さゝなみやしかの浦風吹まゝに氷をいつる春のはつはな
しかの浦や櫻吹くる（かくるイ）山かせに釣する袖は雪とみえつゝ
さゝなみやしかの花そのかすむ日のあかぬ匂ひにうら風そ吹
花やちるひらの高根の山かせにしかのうら波たゝぬ日はなし
いくしほの春のみとりをそへつらむ霞のそこの志賀のうら松
さく花に色をまかへて春は又みきはにちかきしかのうらなみ
しかの海のしらゆふ花の浪のうへにかすみを分て浦風そふく
花の雪みち行ふりの春風にかほりてかへるしかのうらなみ
山風に花やちりかひくもるらん月さへかすむ志賀のうら浪
鴈かれはおなしなからの山こえてかへるもつらきしかの浦浪
里はあれて春はいく世かかすむらん花そむかしの志賀の故郷
しかの浦やさゝなみよする春風にさきたつ花は匂はさりけり

三嶋江

みしま江やなきさにしつむ松の葉の色よりふかき春の明ほの（かけ哉御集）
ときはいま春に成ぬとみしま江のつのくむ芦にあは雪そふる
三嶋江の浪にさほさすたをやめの春の衣の色そうつろふ

なしなへて水のみとりも色ふかし角くむ芦のみしま江の春
かへる鴈雲に消ゆく有明の空も霞にみしま江の月
冬のよは氷のひまに三嶋えの玉江の月の又かすみぬる
三嶋江の芦のはかけの夕かすみかならすしもや春の明ほの
ほの〳〵と海士のたく火の煙かとかつみしま江の霞成けり
みしま江やわかしめなきしまこも草行ゑもしらす霞ころかな
三嶋江の芦まに春やうす氷霞もあかすみゆるしら浪
おほろけの春の色とはみしま江の浪もかすめはやとる月かけ
芦の葉はまたうらわかきみしまえの玉江の浪に春やよるらん

鹽竈浦

雲の浪煙のなみははれなからおほろ月夜の鹽かまのうら
月影のいつくはあれと春の夜のかすみにくもるしほかまの浦
鹽かまやうらみてわたる鴈かれなもよほしかほにかへる浪哉
なかむれは八十嶋かけてあさみ（くイ）とり霞そたてる鹽かまのうら
立まよふ煙のなみにかすみして春の哀やしほかまのうら
春もまたいつかきにけん鹽竈に釣する小ふれかすみへたつる
春よいかに花うくひすの山よりもかすむはかりの鹽かまの浦
大かたもかすめる頃そうすけふりたつはならひの鹽かまの浦
春の色はわきてそれともなかりけり煙そかすむ鹽かまのうら
たちのほる煙や空にかすむらんみとりもふかき鹽かまのうら
夕かすみ煙にまかふ浪のうへやあまのやくてふしほかまの浦
見わたせは焼もの煙立わかれかすめるかたや鹽かまのうら

宇津山

するかなるうつの山邊にちる花よ夢のうちにも誰おしめとて
宇津の山さこそはかねて聞しかと霞なわくる蔦のほそ道
うつの山我行さきもほと遠きつたのわか葉に春雨そふる
なしなへてこのめも春のうつの山蔦の若葉に道絶にけり
みるとなき夢よりかすむ春の月うつゝもたとるうつの山道
うつの山蔦の青葉の春雨にふりぬる道は猶そ露けき
宇津山道ゆきふりのしらくもにたかことつてのかりの玉章
またしらぬ道な霞にとひかれてうつゝも夢のうつの山こえ
わひつゝは夢こそあらめちる花のうつゝもつらき宇津の山越
うつの山蔦の若葉の下にたに道ある御代なたのみ行かな
旅人の霞わけ行うつの山うつる日數に春そすくなき
はらはれとたもとにかゝる雪そちる花のさかりの宇津の山道

蘆屋里

あしのやのなたの鹽屋のあまの戸なゝし間かたそ春は淋しき
あしの屋のなたの鹽屋のうす霞まかふ煙な春やわくらむ
芦のやのわかすむかたの遲櫻ほのかにかすむ歸るさの空
夜半に殘る海士のいさり火ほのかなる芦屋の里の春の東雲
あしのはの霜かれはてゝ里の名な霞にこむる空の八重ふき
心あて（りてイ）に誰かきくらん津の國のあしやの里のうくひすのこゑ
春のよのやみにもかよふ螢かな芦やのさとのあまのたく火は
芦の屋のなたの鹽屋に立けふりきえわく春の夕かすみかな
難波女のすくも焼火も打しめる芦やの里に春雨そふる
鶴霞かすみにけりなあしの屋のまた霜かれの冬とみしまに
津の國やかすむ芦屋のみこもりに下根も春のうら風そふく
わひつゝもすめは住けり津の國の芦やの里の春の明ほの

吹上濱

夕霞吹上のはまの此頃はみとりになひく沖つしほかせ

藤代のみさかを越て見渡せは霞もやらぬ吹あけの濱
けふそみるかさしの波の花のうへにいとはぬ風のふき上の濱
朝かすみ花かあらぬか春かせの吹上のはまになみや立らん
春のよのためしもしろし紀の國や吹上のなみにかすむ月かけ
これも又花かあらぬか浦かせの吹あけにたてる春のしらくも
時しあれは（時しもあれイ）櫻とそおもふ春風の吹上のはまにたてるしら雲
夕煙吹上にたてる春かすみそれかあらぬかあまのたく火か
春なれは花と咲ちる白浪の吹上のはまのおきつしほかせ
はる風の猶吹あけの濱千鳥色なき花の浪になくなり
おきつ風夕浪たかく吹あけのはま地やすらふはるの舟人
眞砂ちる吹上の濱のあかぬ色を都の春とおもはましかは

湯等三崎

櫻さく山には春もなかりけり湯等の三崎の曙のそら
ゆらの崎汐干にあまのひろふてふたまらぬ袖は春のあは雪
花鳥の匂ひも聲もさもあらはあれゆらの三崎の春の日くらし
夕霞入日を浪にゆらの崎浦ち暮ゆく春のそらかな
日にみかき風に浪よる玉の緒のゆらの三崎に袖なひくはる
誰こゝに霞を分て紀の國やゆらの三崎をわたる舟人
きさらきや湯等のみさきに風立ぬと渡る船のぬさもとらなん
浪かくるゆらの三崎を春みれはかすみの袖につゝむしら玉
かすみゆくゆらの三崎の明ほのに天の戸わたる春のふな人
行舟のゆらの三崎の夕なきに霞そわたる浪のかよひち
夕なみの礒たちのほるゆらの戸に玉をそよする春のしほ風
浪のうへも道ある御代の春風にゆらの三崎をわたる舟人

忍山

都にも花ちりあへぬみちのくのしのふの山も春風そふく（のこゑ御集）
みちのくの忍ふの山の奥とてもおなしけふこそ春はたつらめ
岩つゝしいはてや過る忍ふ山心のおくの色をたつれて
しのふ山みたれて花はほころひぬかきりしられすにほふ春風
をのれのみ春をひとりや忍ふ山花にこもれるうくひすのこゑ
思ひいれておほつかなきはみちのくの忍ふの奥も花や散らん
人とはぬ軒の忍ふの山のはにその色となき春雨そふる
春の行道のおくなるしのふ山しのへとかすむ明ほのゝそら
歸る鴈おしむ心のおくもなし忍のやまの道をたつねて
春ふかき忍ふの山の岩つゝしいはねと色にしるき頃かな
はるのゆく霞の袖の花の香を忍ふの山に尋てそおもふ
しのふ山峯のさくらや散ぬらんふるすにかへる谷のうくひす

水無瀨川

ことに出ていはぬ色とや（に御集）みなせ河かはらし春のやまふきの花
花とのみなかるゝ水のみなせ河袖つく波に折やかされむ
春の色をいく萬代か水無瀨河霞のほらの音のみとりに
みなせ河花とも水のしら浪にかすみなかるゝ春のあけほの
君もまた千年や影をみなせ河くもらぬ御代の空の光に
河水におられぬ色のひさしきを花とみなせの春はのとけし
みなせ河ありて行水青柳のうつろふかけは浪そ數そふ
すまむ世のなかれも遠し水無瀨河君か御かけの春の夜の月
みなせ河そこの玉もは青柳の波にしたかふしつえ成けり
みなせ河ちらぬ梢のうつるより櫻のなみのたゝぬ日はなし
水無瀨川なみも閑にたつ霞にこらぬ御代の末そ晴行
ちる花はうつりにけりなみなせ河山には春の色もなきまて

大淀浦

大淀の浦はのとけき春の日に霞そのこる松のむら立
君か代のためしやいつら大淀の浦に色そふ春のひめまつ
つらからぬ松もこふかくおほ淀の霞はかりにかゝるしら浪
もしほやく海士のたくなは春くれはかすみそふかき大淀の浦
あまのかるみるめをよそに大淀の松は霞てかへる浦なみ
月影を待はつらくて大よとのうらたつ波にかすむよの空
大淀の海士の乙女子春されは波のはつほのみるめかる也
おほよとのみるめはよそにかへる鴈聲にもなきぬ心のみかは
大淀の浦よりをちに行かりもひとつにかすむあまの釣舟
おほよとの浦にむれゐる友鶴のあそふ日かけの空そのとけき
大淀のうらみしもなき明ほのも袖をそほさぬはるの月影
霞ゆく春をへたてゝ大淀の浦よりをちに鴈そなくなる

田籠浦

ぬれつゝもしゐてやおらん田子の浦の底さへにほふ春の藤浪
田子の浦の底さへかけて匂ふらん浦のふち浪たゝぬ日そなき
たこの浦の浪もひとつにたつ雲の色わかれ行春の明ほの
さきにけり田子の藤浪うらとけて底さへにほふ春風そふく
春の色にそむる鹽風ふきそへて霞にむせふ田子のうら浪
田子の浦に時そともなき波よりも春は霞のたゝぬ日そなき
早苗とる田子のうら人夏かけてなはしろ水に入江せくらし
ゆく末にたかみぬためと折つらん波さへかさす田子のうらなみ
藤の花咲や彌生の夕つく日はるくれかゝる田子のうら藤
海士人のおりたつ袖やにほふらん藤さきかゝるたこのうら浪
たこの浦にさくや春へのふち浪のなみに立うき花の影かは
田子の浦やなきたるあさの春の日にかすみを出るあまの釣舟

末松山

彌生もや末の松山春の色にいま一しほのなみはこえけり
今はとてあたし心の春なれやゝよひの空もすゑのまつ山
あつさ弓末のまつ山春はたゝけふまてかすむなみのゆふくれ
はる風に末の松やまなみこさはころしも花のちるかとやみん
立なれし霞の袖も浪こえて暮行春いすゑの松やま
おりしもあれ末の松山なみこえてつらきなかめにかへる鴈金
時わかす末の松山こすなみの花を分てもかへるはるかな
月日さへいつこえぬらん霞こし波も彌生の末のまつやま
今はまた春のなかめも末の松名殘有明の山のはの月
立かへる浪よりうへのかすめるは末の松山はるやこゆらむ
すゑの松山にかゝれるしら雲のたえてわかるゝ春の色かな
春のゆく末の松山ふくかせにかすまぬなみの花や散らん

夏十首

大井河

大ゐ河御幸ふりにし色なから入江の松に夏[も御集]はきにけり
おほ井河くたす筏のくれなゐに岩波くゝる秋を社まて
大井河かはらぬゐせきをのれさへ夏來にけりところもほす也
大井河ゐせきにあまる白浪を春にをくるゝ花かとそみる
おほゐ河岩なみはやく春暮ていかたの床に夏はきにけり
大ゐ河峯よりおろす山風にいかたのとこの暮そすゝしき
大井河岸の松かせすきかてにさすや筏士夏はきにけり
おほゐ河やみのうつゝの鵜かひ舟さたかにそさす篝火の影

おほゐ河ほかにや夏をみなれさほさすやいかたの床そ涼しき
大ゐ河夏もあらしの山かせにもみちの涙のたゝぬはかりそ
おほ井河深きえまてはまたれね（ともイ）とかりの庵とふ夏はきにけり
大ゐ河くたすう舟のかゝり火にふるきなかれの跡やみゆらむ

信太杜

風の音も秋の色にやいつみなるしのたのもりは青葉なれとも
千枝にもる信太の杜の下露にあまる雫やほたる成らむ
道のへの日かけのつよくなるまゝにならす信太の杜の下かけ
ほとゝきす涙を雨とふりそへてなくやしのたの杜のした露
きく人の涙もしけしほとゝきす信太のもりの夜半のしのひ音
ほとゝきすこよひみ山をいつみなる信太の杜に一こゑそなく
涙やはしのたのもりのほとゝきす下草かけてうつるはかりは
千枝に思ふことのはしけみほとゝきす鳴や信太のもりの下露
ほとゝきす今や都へいつみなるしのたの杜のあけかたのそら
空蟬の涙の露や結ふらんしのたの杜の千枝のした草
ほとゝきす今や都へいつみなるしのたのもりに聲を手向て
ことに出て涙やあまるほとゝきすしのたの杜の夜はの白露

猪名野

風わたるゐなのゝをさゝ打なひき露もたまらぬ夕たちの空
五月雨に猪な野のをさゝ露刪て心ともなく秋を戀らし
みしかよのゐなのさゝ原かりそめにあかせは明ぬ宿はなく共
かきくもり夕立すらし有馬山ゐなのゝ小さゝかせさはくなり
有馬山おろす嵐のそよきつゝ秋をもまたぬゐ名のさゝはら
五月雨に小さゝか原をみわたせはゐな野につゝくこやの池水
夏かりのゐ名の篠原折しきてみしかきよはのいやはれらるゝ
かりれせむゐなのゝ小笹露ふかし跡なき山のゆふ立の空
ゐな野行かせに螢やみたるらんこほれて消ぬ玉さゝのつゆ
風さはく猪名野さゝ原夏の夜のみしかき夢を結ふ白露
夜をかされゐなのゝをさゝふしのまもなくや五月の山郭公
かりにきてゐなのゝ小笹露なから結ふ枕におくる空かな

御裳濯河

夏のよも涼しかりけり神風や御もすそ河にすめる月かけ
御裳濯の河せ涼しき波のうへに神代くもらぬ夏のよの月
月宿るみもすそ河のほとゝきす秋の幾夜もあかすやあらまし
神かせや御裳濯河の夕すゝみ君か千とせの秋のきぬらん
かみ風に雲はれゆけは夏のよも月かけ清くみもすその涙
やはらくる光はすゝし神風やみもすそ河の夏の夜の月（へぬへイ）
夏引のいともてをれるなかき日は御もすそ河の千世も作らし
こぬ秋を御もすそ河の夕かつらかけてゆふへの涙そ涼しき
をのつから衣手涼し神風やみもすそ河の夜半の月かけ
玉くしけはつ色なひく六月や千世までかゝれみもすその波
夏衣みもすそ河のせになひく玉もかりれの床そ涼しき
なつころもみもすそ河の神かせによろつ代ちきる水のしら浪

伊香保沼

まこもかるいかほの沼のいかはかり涙こえぬらん五月雨の比
こなきうへしいかほの沼のあやめ草長き程をも誰もとめけむ
から衣かくるいかほのぬま水にけふは玉ぬくあやめをそひく
いかほのやいかに程ふる五月雨に沼のいはかき涙もこすらん
かけくらきいかほの沼は夏草の露のみきはに月そやとれる
思ふ事あやめの草のなかきれにいかほのぬまのいかて殘らむ

五月雨にいかほの沼のあやめ草けふはいつかと誰かひくらん
岩かきもみこもりふかく成ぬらんいかほの沼の五月雨のころ
さみたれにいかほの沼のあやめ草かる人なみにくちやはて南
おりたちて引手に夏はなきの葉のいかほの沼のいかゝ涼しき
蛙なくいかほの沼にすむほたるもゆる思ひにねなそあらそふ
水鳥の玉もの床やしほるらんいかほの沼のゆふたちのそら

天香九山

白妙の衣ほすてふ夏日のそらにみえけるあまのかく山（に御集）
吹風に五月雨はれぬ久かたのあまのかく山ころもかけほせ
さみたれは天のかく山空とちて雲そかゝれる峯の眞榊
五月雨は天のかく山なしこめて雲のいつこに有明の月
さみたれのをやむ晴まの日かけにも猶くもふかし天のかく山
夏くれは霞の衣たちかへて白妙にほすあまのかく山
なつ衣いつかは時をわすれ草日もゆふくれの天のかく山
見わたせは朝たつ雲の夏衣空にほしける天のかくやま
ほとゝきす鳴一こゑや過ぬらん今そ明ゆくあまのかく山
榊葉に夏の色とやさためなきしみとりそふかき天のかくやま
夏の夜の雲まにはやくゆく月のあくる程なき天のかく山
夏の夜の有明の空の月影にくもはのこらぬ天のかくやま

大江山

大江山しけみかもとにましりても人にしらるゝ螢成けり
おほえ山行衛涼しき袂かないく野の末に秋やきぬらん
夕すゝみ大江の山の玉かつら秋をかけたる露そこほるゝ
夏ころもころもかはらぬ大江山秋にこえたる風のをとかな
よひなから明ゆく夜半の名殘さへ大江の山に月そかたふく
大江山かけ行道のやすらひにしはし駒ぬるうつせみのこゑ
おほえ山月もいくのゝ末（道イ）遠み玉ゆらまたす月ゐ空かな
夏草はしけりにけらし大え山こえていく野の道もなきまて
五月雨のはれぬ日數や大江山いまゝたゝきつ苔のした水
夏草のしけみの露はおほえ山こえていくのゝ末もとなゝに
おほえ山夕立すくる木のまより入日涼しき日くらしの聲
大江山我よりさきに行人もやとやとるらんひくらしのこゑ

難波江

難波江の芦火のけふり立のほり夕日涼しき夏のうらかせ
なには江や鹽風はらふ芦の葉に玉なすものはほたる成けり
なしてるや難波ほり江にしく玉のよるの光はほたる也けり
秋ちかき風や涼しき難波江のあしの葉分に螢とふなり
なにはかた浪のしめゆふ芦の葉にいとゝみたるゝ夏虫のかけ
難波かたもゆる螢のみをつくしふかき思ひのえにや馴ぬる
なには江の鶴の毛衣夏なうすみゝたくる蘆に立そわつらふ
いらぬより名残はつらし難波江やみしかき芦の夜半の月影
夕暮は難波堀江のあしの葉に光なわけて飛ほたるかな
夏くれはなにはほり江の芦のはにほにこそあられ秋風そ吹
なにはかたこやの八重ふきもりかねて芦まに宿る夏のよの月
汐みてはなには堀江の芦の葉になのれ亂て飛ほたるかな

美豆御牧

かりてほす美豆の御牧の夏草はしけりにけりな駒もすさめす
かりこもの五月の雲に成にけり美豆の御牧の夕暮の空
渡する遠方人の袖かとよ美豆のにしるき夕かほのはな
まこも草末こすまてに日數ふるみつの御牧のさみたれのころ

舟とむる美豆の御牧のまこも草からてかりねの枕にそする
この程はみつの御牧にかる草の露はたもとに五月雨そふる
春そみし美豆の御牧にあれしこま有もやすらん草かくれつゝ
雨はるゝみつの御牧のまこも草からて吹ほすよとの河かせ
秋かせをみつの御牧のまこも草かりにもつけてゆく螢哉
なつふかみみつの御牧のまこもくさ秋の露をやかりてほす覽
草ふりて螢むなしくたちぬ也みつの御牧の夕やみの空
五月雨によとの澤水いかならん美豆の御牧に涙こゆるころ

松浦山

夏山や松浦か沖の西の海そなたのかせに秋はみえつゝ
夏ころもひれふる山のなひ風に袂やかろきまつらさよ姫
せみの羽の衣に秋を松浦かたひれふる山の暮そ涼しき
さよ姫のひれふる袖もやゝすゝし秋をまつらの山の下かせ
夏かけに秋をまつらの山のせみ染殘す枝の露に鳴なり
くる秋をそなたの空にまつら山まつに涼しき風もふかなむ
たのめてもまたとほ海にまつら山秋もやきなん天の河波
天津空たな引雲の西にある秋をまつらの山のはの月
松浦かたひれふる山のほとゝきすあかても聲の遠さかり行
ほとゝきすもろこしまても松浦山なみのはるかの雲に鳴なり
まつらかた木のまに月を殘してももろこし船のよるそ涼しき
けふは又こゑ六月のほとゝきすまつらの山の明かたのそら

秋二十首

泊瀬山

泊瀬山ねさめおとろく鐘の音もめにこそみえね秋はきにけり
はつせやま尾上のかねの音まても夕はわきて秋そ涼しき
はつせめのならす夕の山かせも秋にはたへぬしつのをた卷
初せ山夕ゐる雲にふく風の名殘ややかて秋のむら雨
はつせ山峯の鹿の音さそひきて麓の谷にそよく秋風
杉の葉は秋たつ霧にこもり江の初瀬の山の色そ涼しき
秋の色はまたこもり江のはつせ山何をかことに露の置らん
はつせ山松の扉の朝あけて袖ふきそむる秋のはつかせ
はつせ山木葉色つく秋風にまついれかてのさをしかのこゑ
をきわたす露もさなから初瀬山いつこに秋の色をそむらん
はつせ山おのへのかねのうちつけにさひしき秋の風の音かな
初瀬山ひはらか末はしくれねと秋の色にや月は出らむ

龍田山

たつた山木の葉吹しく秋風に落て色つく松の下露
分てしもいかにそむらんたつた山時雨も露もかゝる物かは
心あての思ひの色そ立田山けさしも染し木々のしら露
わきてその色やはみゆる秋風の立田山のゆふくれの空
龍田山またきうつろふ下紅葉しくろゝいろの秋はきにけり
夕霧の麓をこめてたつた山しくろゝ色そ峯に見えける
たつ田山なをうす衣たかみそき夕つけ鳥も風うらむらん
くたりつる夜のまの露もあとみすなあけは立田の峯の秋かせ
龍田山秋ともいまたしら露のなれぬ木のはに風かはる也
いつしかと風こそかはれ立田山さらては色に秋は見えねと
夏衣秋も立田の山かせにかさねて物を猶やおもはむ
立田山また青葉なる梢よりこそみし色の秋かせそふく

須磨浦

すまの浦あまの戸わたる鴈かねの聲すみのほるいさよひの月
久かたの月すむよはゝすまの浦秋なき浪に秋そみえける
たひ衣またひとへなる夕霧に煙ふきやるすまのうら風
須磨の浦鹽くむあまの衣手にぬれてそやとる有明の月
月影を秋とやかこつ須磨のあまの鹽波袖の涙にぬれても
もしほくむあたりの空の月影に煙なとめよすまのせきもり
すまの浦に秋やく海士のはつ鹽のけふりそ霧の色をそへける
秋よまた月にいくたひもしほたれたえぬなかめそ須磨の浦人
すまの浦の蜑のたくなはくれ行は人はたのめす月そまたるゝ
もしほやく煙は霧にまきれねと行衛もみえすすまのうら波
月もゝれ風も戸たゝけ須磨の浦のあれたる關屋秋にまかせん
明わたる須磨の浦半の霧のまにたえ〳〵みゆる初鴈のこゑ

宮城野

宮城のゝ萩の葉よはき朝露を枝なから吹秋のかせかな
宮城のゝもとあらの小萩したはれて葉のほる露に月宿るみゆ
秋にあひて身をしる雨と下露といつれかまさる宮城野の原
さをしかの鳴音なからやうつるらん袂にあまるみやきのゝ露
哀のみ分るもふかし露にすむ月を袂に宮きのゝ秋
宮城野や玉ちる萩の上葉よりうつりもあへぬ色そこほるゝ
霜かれはまたことゝなき宮城のゝもとあらの萩は下そ淋しき
とれはけぬよし枝なからみやきのゝ萩の下葉の露のしら玉
宮城のゝ露分ころも朝たては忘れかたみの萩か花すり
みやきのは時雨や色もなかるらん木のした露のそむる萩原
吹あへぬ風はいかなる色とたにまたみやきのゝ萩の夕くれ
宮城野や分入秋の衣手に霜おもけなる萩か花すり

水莖岡

水くきの岡の淺茅のきり〳〵す霜のふりはや夜寒なるらん
水莖の岡の葛葉をふゝ風に衣かりかねさむゝ成けり
みつくきの岡の葛葉をあまのすむ里のしるへと秋風そふく
大かたのころの恨も葛の葉にけふ（うらイ）水くきのをかの秋かせ
水莖の岡の夕され風立てくすのうら葉に時雨降めり
れぬる夜の朝の霜に水莖のなかの木のはゝ色そうつろふ
書つられ飛鴈かねの涙にや色増りゆく水莖のなか
水莖のなかのくす原わけ過てかへる日遠く秋風そふく
鴈金の鳴わたるより水くきの岡の葛葉も色付にけり
水莖の岡の梢になくかりのなみたまかへてむら雨そふる
みつくきの岡の淺茅生ふきしほり野風さひしき秋の夕暮
水くきのをか邊の秋の葛かつらくる人やなき松むしのこゑ

小倉山

をくら山峯の木の葉に聞馴て時雨せぬ夜もぬるゝ袖かな
小倉山秋の朝けの霧かくれ色こそみえね色かはるらむ
をくら山秋の哀や知らましなしかの聲のつれなからすは
小くら山鹿なく秋の夕つくよおほろけならぬものおもひとや
てりまさる月は小倉の名をすてゝ紅葉（けイ）を分て出る山のは
をくら山心つくしの夕月夜木のまのかせにあきはきにけり
おもひかね妻とふ鹿もねにけらしわれそ小倉の山の雫に
をくら山峯の木のはや色に出てふりにし御幸今も待らん
谷陰のをくらの山の夕暮に有とはかりもさをしかのこゑ

もみちする小倉の山の夕つくひもらぬ梢も下草そてる
露霜の小くらの錦たかためになれはかつちる山の秋かせ
くれなゐの色こそこけれ夕つく日をくらの山の峯のもみち葉

宇治河

秋ふかきやそうち河のはやきせに紅葉そくたす（ルイ）あけのそほ舟
あしろ木に宇治の河波さえ暮て氷いさよふ山のはの月
河なみも待宵過は遠さかれ八十うち人のあきの枕に
橋姫のかたしく袖に波かけてはれぬ思ひやうちの河霧
かた敷の袖に馴ぬる月影のあきもいくよそ宇治の橋姫
月さゆるうちのはし姫夜やさむきかた敷袖の秋の河かせ
朝日山うつろふ波の色はかりまたそめやらぬうちの河かせ
晴行か槇の嶋かせ色見えてやそうち人の袖の朝霧
あしろ木にいさよふ秋のから錦中絶わたるうちの河かせ（霧イ）
千早振やそうち人のあしろ木にいく夜の月をかけてみるらん
白妙の月の衣手かた敷てねぬよあまたの宇治の橋姫
いろふかくしくるゝ山の秋風に木の葉を染るうちの網代木

常盤杜

秋はとも誰かはいひし椎柴のときはの杜に鹿はなく也
山城のときはの杜の夕しくれそめぬみとりに秋そ暮ぬる
はつかりの來鳴ときはの杜の露そめぬ雫も秋はみえけり
色そなき時雨の空はかはりけりときはの杜の秋のゆふ暮
そめねとも身にしむ色はかはりけり常盤の杜の秋風のこゑ
色かへぬ常盤の杜の下露にぬれて秋しるさをしかのこゑ
秋にたへぬよその紅葉のから錦ときはの杜の色そつれなき
露むすふ常盤の杜の秋風に引しめ縄も玉にかゝれる
嵐ふくよそのもみちの色よりもときはのもりの秋はしられし
秋なゝきておよはぬ花の色そみる常盤の杜にかゝる白雲
あきは猶身にしむ色もかはりけりなのみ常盤の杜の下風
鹿の音もいかて常盤の杜の露色に出へきかせの音かは

三室山

三室山神のいかきにはふ葛のうら吹かへすあきの夕かせ
かれてたにうつろひそめし三室山下くさかけてしくれふる比
三室山しくれもやらぬ雲の色のなのれうつろふ秋の夕暮
神なひのみむろの山の榊葉のかはらぬ色にかはる秋かせ
みむろ山麓のおはな霜枯て嵐のそこにかはる虫の音
神なひのみむろの榊それのみや殘るもしろき秋のもみち葉
さかきとりかけし三室のます鏡その山のはと月もくもらす
吹まゝに木のはやたへぬ神なひのみむろの葛にのこる秋かせ
ちらすなよ秋の葉守の神かきのみむろの山はあらし吹とも
よそにやは散もみち葉をみむろ山秋ゆく袖をふく嵐かな
みむろ山木のはも色やいそくらんわか袖のみの時雨ならすは
三室山神も知らん君か世に草葉もゝれぬ露のめくみを

高圓野

高まとの野分のかせにけふみれはまたき草木の色そしほるゝ
たかまとの野路の秋萩咲にけり旅行人の袖にほふらし
大空にかゝれる月も高まとのゝへにくまなき草のうへの露
高圓のゝへの秋はき散はてゝ色なき露に嵐ふくなり
うらかるゝ萩のうは葉に有明の月やむかしの高圓のゝ邊
鴈かねのこゑは雲井にたかまとのゝへの小はきになみた落

高まとのお花に風は立にけり村々しろき雲そ吹しく
からにしき大和なかけて數嶋の高圓のゝへの秋風のころ
高まとのゝへの千種の花すゝき秋も末こそ木枯のかせ
たかまとのゝへのしら露たまさかに我こそとはめ秋の行ゑな
高圓のゝ原の荻のすり衣かさなる秋の袖の色かな
めくりきて月はすめとも高圓のゝへのむかしなとふ人そなき

伊駒山

いこま山雲なへたてそ秋の月あたりの空はしくれ降(同集)とも
此ころは雲なへたてそ生駒山みつゝなおらん秋の夜の月
伊駒山嵐もあきの色に吹てそめのいとのよるそくるしき
朝またきいこまの山にたつ雲の猶はれやらぬ秋のむら雨
なかめても秋とはきかす伊駒山しくるゝ雲のかゝる夕くれ
紅葉をは霧なへたてそいこま山しくるゝ雲は又も晴なん(しイ)
いこま山村雨となく出る月雲もかゝらぬあらしふくなり
秋の色なかたのゝ暮にみわたせは伊駒のたけも時雨してけり
いこま山月ゆへとしもなけれともいとひ馴にしみねのしら雲
時雨つゝうつるはかりや吹つらん伊駒の山の峯の秋かせ
しくれゆくいこまのたけの秋の雲うき一すちに何かいとはむ
涙にも色こそみえれ初鴈のいこまのたけに雲かくれつゝ

生田池

人すまはさらにやとはん津の國の生田の池の秋の月かけ
秋きてもとはれさりけり津の國の生田の池に月はすめとも
しくれ行生田のもりの木枯に池の水草も色かはるころ
津の國の秋は生田の池水に杜のこすゑのかけなみるかな
とへかしないく田の池に月かけも杜の秋かせ吹につけても
人すまむ程なもとはん津の國の生田の池の秋のよの月
暮ぬとて生田の池な立鷺のねくらや寒きもりの秋風
秋ふかき生田のもりやしくるらんくれなゐにほふ池のうき浪(くさイ)
月にあかぬ秋の思ひになからへて生田の池のみつからそうき
たつれつゝ生田の池に玉もかる袖より秋の露もなきけり
月すまはとはましとたにまたれねと生田の池も秋そ忘れぬ
月やとる生田の池の芦の葉に霜ふきかぬる秋の風かな

清見關

清見かたせき吹こゆる秋風にいや遠さかるあまの釣舟
さすらふる心に身なもまかせすは清見か關の月もみましや
清見かた隙行駒も影うすし秋なき波の秋の夕くれ
さしのほる月は清見か關の戸にいらてやすらふ有明のそら
きよみかた月に浮れな秋そとも契らぬ波にしほる袖かな
過て行我さへつらし清見かたこゝろの關は秋の月かけ
清見かた鐘の聲さへなきさうつ浪の關とに月そ明ゆく
きよみかたやすらふ月の影なさへなのれ岩こす波の關かけ
清見かた月にうつろふ浪のうへな秋の色とや嵐ふくらむ
旅人の涙の枕や清見かた明るはおしき月のかけかな
富士の根の嵐に空は清見かた有明の月によするしら波
きよみかた浪の關守うつたへにくもらぬ秋の月やみるらん

武藏野

みとりなる春はひとつのわか草も秋あらはるゝむさしのゝ原
むさし野や草はみなからなく露のゆかりもとむる袖の秋かせ
誰かたによるなく鴈の音にたてゝ涙うつろふむさしのゝ原

あたならぬ色さへ袖にうつりけりゆかりは露の武藏野の原
涙さへぬれそふ袖に虫の音もみたれてしけきむさしのゝ原
おもひやる行衛は遠きむさし野もなかめにせはき秋霧のころ
かりいほの妻とふ風も寒き夜にいくよかれなんむさしのゝ原
月となかめ花と思ふもむさし野の末はみなからうす霧のそら
むさし野の淺茅色つく今よりや夜寒の衣鴈も鳴なん
武藏野の霧のまよひのをみなへし妻もこもれる煙とそみる
むさしのや月影なから時雨けりお花かうへの露のした道
武藏野やいつくの草に妻こめてきのふもけふも鹿の鳴らん

伊吹山

玉かつら伊吹の山の秋の露誰おもかけの松虫をこへ
夕附日さすや伊吹のさしも草露にももろゝ色はみえけり
秋をやく色にそみゆる伊吹山もえて久しき下のおもひも
梢まていふきの山のさしもいかにもえつゝ秋の色に出らむ
さしもやは身にしむ色も伊吹山はけしくおろす峯の秋かせ
さひしさをいかに伊吹のさしも草さしもつれなき秋の夕暮
色ふかきいふきの山の紅葉かなおふらむ草もさしもかれしを
袖にみつ峯の嵐の伊吹山さしも露ちる秋のならひは
つらしとや誰もいふきのさしもなと待れて出る山の端の月
雲はらふ伊吹の山の秋かせを待ける月の有明のそら
秋はさそふくる伊吹の山風を馴すかほにも鹿の鳴らむ
こきすてゝ風はいふきの山のはをさそひて出る關のふち河

佐良科里

さら科やよわたる月の里人もなくさめかねて衣うつなり
わか心さてしもいとゝなくさます今さら科の月はみれとも
はるかなる月の都に契り有て秋のよあかすさらしなの里
雲やなきをはすて山の秋の空月そ住けるさら科のさと
忘れなむなくさめかれし山のはの空を秋とはさらしなの里
さらしなの里をはかれぬ月のよもとふへき物と人はまたれす
さらしなの里の草葉はうら枯てかれすそ月に人はとひける
我としもさそはぬ月にしほれきぬ誰をうらみんさらしなの山
都にて見しにや似たる秋の月いつこはあれとさらしなの里
うつらなく夕の空の哀まて月にふけ行さら科のさと
をは捨の山より月のいつくにもそもさらしなの秋の空かな
東路やいつくはあれとさら科の里とひ出る夜半の秋かせ

白河關

たよりあらは都へつけよ鴈金もけふそこえつる白河の關
東路やまたしら河の關なれとかそへしまゝの秋かせのころ
しら河のせきの關守いさむともしくろゝ秋の色はとまらす
道のおくしらぬ山路をかされきて夕霧ふかし白河のせき
何となく哀そふかき行方もまたしら河の關のゆふきり
あはれさはいつくをはてと白河のせき吹こゆる秋のゆふかせ
しら河の關のもみちのからにしき月に吹しく夜半の木枯
染あへぬ木の葉やおつる秋の霜けさしら河の關の嵐に
行まゝに秋のおくまて白河の關のあなたにしくれ降なり
白河のせきとは月の名也けりあくとも秋のかけをとゝめよ
秋霧の朝たつ山路はるかにも來にけり旅のしら河のせき
ゆく末もまた霧ふかき夜をこめてたれ白河の關路こゆらん

野嶋崎

をとめ子か玉ものすそやしほるらん野嶋か崎の秋の夕露

都おもふ野嶋かさきのたひ衣日も吹かへす秋のうらかせ
おもかけは日もゆふ暮に立そひて野嶋によする秋のうら浪
浪かけて玉ぬく風や吹つらん野しまか崎のさゆりはの露
月影にうつろふ波にみたれ行野嶋かさきの秋風の色
浪かくる野嶋か崎のきり〳〵すもにすむ虫の聲かとそきく
風吹は波にや床のあれぬらん野しまか崎にうつら鳴なり
きのふまて色やはみえし夏草ののしまか崎の秋の夕かせ
こ萩さく野しまか崎に風こえて露ちる浪に殘る月影
浪のよる野嶋か崎の糸すゝきみたれにけりな露のしら玉
白妙の波の花すりみたれつゝ野嶋か崎の秋のころも手
物おもはぬ草葉も今やしほるらんのしまか崎の秋のむらさめ

明石浦

あかし潟海士の笘屋の煙にもしはしそくもるあきのよの月
夕霧にあかしのとなみこく船のほの〳〵消るあとの鹽かせ
ともし火の明石の沖の友舟も行かたたとる秋のゆふきり
影やとす玉をやひろふぬるゝ袖に月そ明石の浦のあま人
秋もへぬ月にれぬよのさひしさを思ひ明石のうら風の音
あかしかた霧もまよはす浪のうへに嶋かくれせぬ秋の夜の月
明石かたあまのたく火のほに出て冬も近しとうら風そふく
風さゆる明石の興の月かけに嶋かくれゆく雲のなみかな
秋の夜を事そともなく明石かた浦半の月のあかぬ空かな
あかしかた月にみえゆく浦の名を秋とふ人や空にしるらん
明石かた朝たつ霧のほの〳〵と誰行舟の誰したふらむ
長き夜を誰ふしわひて明石かた浦の笘屋の月をみるらん

阿武隈河

あすは又あふくま河のしからみにきのふの秋の色や殘らん
君か代にあふくま河の霧晴て旅なる影といつもつかへむ
立こもるあふくま河の霧のまに秋をはやらぬ関もすへなん
晴やらぬあふくま河の霧のうちに秋も今はとかへるなみかな
あけぬなり遠方人もあふくまの河せの霧に袖のみえ行
雲清き雲井の秋の萬代にあふくま河のなみの月かけ
なか月やいく有明のめくり（うつイ）きてあふくま河にやとる月影
秋ふかき思ひは遠き君か代にあふくま河の水くつ成とも
關にける月さへつらき逢人にあふくま河の瀬かたのそら
みちのくのあふくま河の末までもとまらぬ秋のけふや暮南
秋かせの袖とふ色もふかき夜にあふ隈河のみつからそうき
ふかき秋にあふくま河はしくるれと色こそみえねせゝの埋木

冬十首

清瀧川

清たきや岩間によとむ冬河のうへは氷に結ふ月かけ
くりためて今朝や氷に結ふらん清たき河のせゝのしら糸
音まかふ木の葉時雨をこきませて岩瀬に染る清瀧の浪
氷とや岩間の水もくゝるらん清たき河の冬の夜の月
音さゆるきよたき河のせゝの浪かけ（さへイ）まつ氷る冬のよの月
きよ瀧の瀬々のしら玉数そひて氷のうへにあられふるなり
清瀧のせゝの白糸冬くれはそむる木の葉の錦をそみる
きよ瀧の河せの木の葉つきにけり色なきいろにかへるしら浪
今朝よりは清瀧川の薄こほりむすほゝれ行せゝのしら糸
しら玉のきよ瀧河のうす氷ふかゝりもむすふ冬は来にけり

氷するきよたき河はせ絶して岩根をおつるまつのかせかな
今朝はまた岩間の氷とちそめてきよたき河も行なやむ也

小鹽山

なしほ山松の葉とつる夕霜に色こそなけれ峯の木からし
行秋の名殘をのこすをしほ山まつとしもなき冬はきに皃
朝霜もしらゆふかけて大原やをしほの山に神まつるころ
ふりにけり神代もしらす大原や小鹽の山の松のしらゆき
染かけて松にのこさぬ秋の色ををしほの山はなをしくれけり
何ゆへか秋の名殘をゝしほ山小松かはらはもみちやはせし
神無月はれみ晴すみ梓弓をしほのやまはしくれてそ行
をしほ山今朝ふる雪の夕かつら神代をかけてなひく松かせ
小鹽山さらぬ梢は秋くれてつゐにもみちぬ松のむら立
冬の夜も小鹽の松の木の間よりしらゆふかけて月そもりくる
をしほやま夕霜白き松の葉のちるもいく代の年つもるらむ
小鹽山秋のかたみはとゝまらて松にあらそふ木枯のかせ

住吉浦

すみよしの松のあらしやかはるらん夕なみ千鳥聲まさる也
冬も今は日數つもりの浦さえて雪にもなりぬあられ松原
淡路嶋むかひの雲のむら時雨そめもおよはぬすみよしの松
千早振神の心もふる雪にみなしろたへのすみよしの松
すみよしの涙に凄よふさよ千鳥うらかなしくそ月もふけ行
秋ならぬ風にも月は住吉の松にかされてさゆるよの霜
すみよしとあまもやいはん浦風になみあれくらす冬の苫やは
浦風のあられ松原吹まよひ玉よせかぬる（ヘイ）すみの江の波
さよ更てあられ松原住吉のうら吹かせに千鳥鳴なり
すみよしの浦にしきつのもしほ草かされてさゆる夜半の衣手
月影にあられふる也住吉の松かせいたくふきまさりつゝ
住吉の浦の松風月さえてふけゆくかたに千鳥鳴なり

片野

夕狩のかた野の眞柴むら〳〵にまたひとへなる初雪の空
御狩する片のゝ眞しは末さはき霰ふりぬと吹嵐かな
かり人のかた野のみ雪うち拂ひ豐のあかりにあはむとやする
狩暮ぬけふはかた野の草まくらかれはの霜もひき結ひつゝ
かれはつるかた野のみのゝかり衣袖さへ霜（雪イ）の色やさひしき
御狩する片のゝくれは鈴むしのかれにし聲も猶そきこゆる
狩行は片野の霰消ぬ間の玉のをまたぬ雉子鳴なり
色分ぬ入日の色も峯さえてかたのゝ里はかた時雨つゝ
みかりする片のゝ眞柴風さえてうす雪しろし道のさゝ原
はし鷹のはらふうは毛に玉散てかたのゝ原にあられふる也
夕狩のかた野の鳥たち雪をうすみかくれもはてす柴の下草
うつり行こともしふかく降雪にかたのゝとたち草ものこらす

田簑嶋

雨による田みのゝ嶋のあま衣さらてはぬれぬ冬の袖かは
難波かたゝみのゝ嶋に鳴鶴の霜をかさぬるなかきよの空（こゑイ）
をきあかす霜そかさなるたひ衣たみのゝ嶋はきてもかひなし
あま衣たみのゝ嶋にたつそ鳴なにはの芦のさやく霜よに
霰ふる田みのゝ嶋の苫やかたなにもさはらすはらふ袖かな
降雪にぬれてや寒き難波かた田みのゝ嶋の鶴の毛衣
霜うつむたみのゝ嶋に住民の名にはかくれす袖やさゆらん
うちはらふ我袖かけてさえにけりたみのゝ嶋の雪のしら波

たび人のはらふ袂も白たへの田みのゝしまの雪の明ほの
つるの鳴たみのゝ嶋も時雨つゝ芦のかれ葉に浦風そふく
さかへ行國のたみのゝ嶋守も雪ふるめくみ先あふくらむ
難波かた田簑の嶋にゐるたつの霜のうはそや浮寢るらん

有乳山

冬の夜の峯のあらしや有乳山月よりかるゝ野への淺ちふ
あらち山みれの嵐やいかならんふもとの淺茅うら枯にけり
有乳山峯のこからしふきたてゝ雲の行手におつる白雪
夜やさむき吹くる風も有乳山雪けの雲の峯にあまきる
吹しなる峯の嵐もあらち山こゝろくやしき雪の夕くれ
ゆふ暮は風のけしきの有乳山ふもとのゝへにあは雪そふる
あらち山ちりかひくもる花とみる雪に老らく道やまとはん
やたのゝに霜なく風や有乳山堪ぬ淺茅の今朝の色哉
かれてより思ひ越路のあらち山ことはりすくる峯のしら雪
嵐ふく有乳の山の夕時雨やかて雪けの雲やうつらん
さえくらす風もあらちの山高み雲よりうへにみゆる白雪
冬こもる夜のまの風の有乳山いかに木の葉のまなく散らん

浮嶋原

時しらぬ山は雪けの雲なから有明の月の浮嶋かはら
不盡の山高根の風やかよふらん今朝雪しろし浮嶋か原
ふしのねにめ馴し雪の積きてをのれ時しるうきしまかはら
寄かへる波の立ゐに浮嶋の松にさえゆく風のをとかな
降まかふ涙も空もかきくらす雪けの雲のうきしまかはら
うき嶋となかめしかとも東路や雪の下なる松のむら立
あしからの關路はれ行夕日かけみそれにくもる浮嶋かはら
波のうへに一むらかゝるしら玉や雪にしつめるうき嶋か原
小夜ちとり聲遠さかる浪のうへにはるかに月の浮嶋か原
ふき送るふしの山風さえくらし霜枯はつるうき嶋かはら
雲のなみお花の浪のはてもなし霜にかれたる浮嶋かはら
むら時雨ふけ行空の月影はこほらぬなみにうき嶋か原

安達原

霜はけさあたちのま弓散はてゝ殘らぬ色を何に染らん
もみち葉や安達の原のしらま弓のこる梢に嵐ふくなり
其方より霞や下にいそくらむ安達のま弓春は隣と
しくれ行安達の原のしらまゆみしらす木の葉は散はてぬらん
春を待あたちのま弓本末も降つむ雪にひく（しるイ）人そなき
雪ふれは安達のま弓末たはみ引手にやすく暮る空（年イ）かな
ものゝふのあたちの原のしらまゆみ分て入さの道たにもなし
安達野も雪ふりにけり狩人のひかぬま弓の末たはむまて
降雪にあたちの原もしらま弓春の梢のおもかけそたつ
白妙のすそのゝはらのかり衣あたちのはらの雪の明ほの
我ためは是やあたちのくろつかに冬草わけて人は入にき
あらし吹木の下露や結ふらんあたちの原は霜枯にけり

因幡山

雪の中に冬は因幡の峯の松つゐにもみちぬ色たにもなし
秋の田になひきし程はかれはてゝあらぬ因幡の峯の松かせ
きのふかも秋の田面に露をきしいなはの山も松のしら雪
雪ふかき因幡の山の峯の松春やみとりの色にかへらむ
年暮ていなはの山のみねの松雪消なはとちきる春風
としくるゝ冬も因幡の峯の松まつとはしるやまたかへりこん

秋の田のいなはの嶺に吹風の身にしむ聲は冬の暮まて
むなしくもことしいなはの嶺に生るまつとなつけよ春の光に
ふりすてゝ我もいなはの山のはに松はひとりや雪にしほれん
冬のよの月は因幡の嶺こえて猶山のはにまつ風のこゑ
因幡山雪の松風冴暮てむらくもしろくいつる夜の月
我ならぬ誰かはとはむ立かへりいなはの山の峯のしら雪

鏡山

ゆく年をかゝみの山の冬の月みるかけさへにくもりなきかな
あふみ路や鏡の山のやま風にゝほてる海や先こほるらむ
かゝみ山うつれる波の影なから空さへこほる有明の月
つもるとも誰かきてみんかゝみ山けさかきくもる嶺のしら雪
氷る夜は月の影みる鏡やまむかしをうつす冬のかゝみに
なかむれは冬そくもれる鏡山木の葉しくれてちりかゝるころ
近江なる鏡の山の玉かつら春をかけても千世はくもらし
みつうみになのれかけみるかゝみ山やまの姿も雪降にけり
月かけのくもるたえまも鏡山色はさやかに峯のしら雪
かゝみ山雪の梢をわれみてもいくたひ花のかけにうつりぬ
鏡山たちよるかけに年暮て老さへちかき歎そふらむ
冬きてもみるへかりけるかゝみ山梢くもらぬみねの月かけ

戀二十首

伏見里

菅原や伏見のさとのさゝ枕夢もいくよの人めよくらん
いまはたゝ思ひ絶なん菅原やふしみの里は名たに忘れぬ
笛竹のふしみの里は名のみしていつれの世にかねをも立へき
契りなく里はふしみの夕間暮まつを稲葉に秋風そ吹
歎きつゝ伏見の里の夢にさへむなしき床をはらふ松風
わすれすよ草の枕を菅原や伏見の里の明かたの夢
遠からぬ伏見の里の關守はこはたの峯に君そすゑける
獨かもいく夜ふしみの里遠みおもふ中さへ雲ゐへたてつ
里はあれてよな〳〵かよふ秋風にふしみのさとは夢も絶にき
さとの名も人の心もあれまくや伏見のよそに夢路絶つゝ
菅原や伏見は里の名なりけり人の契よあれすもあらなん
とことはに誰言葉もたのむらん獨ふしみの里の月かけ

霞浦

ほのかにもしらせてけりな常陸なる霞の浦のあまのいさり火
立まよふ霞の浦の夕けふりそれともよそにしる人のなき
はる霞かすみの浦を行船のよそにもみえぬ人を戀つゝ
晴やらぬ霞の浦にすむあまもぬれてみるめをかつきやはせぬ
ゆくゑなき空も霞の浦風にあとゝふかたもなみそこたふる
しるらめや霞の浦のもしほ火のほのかにかよふ下のおもひを
暮かたき霞の浦の春の日にくるしや心あまのたくなは
かちをたえ霞のうらに行舟のほのかに風のたよりしらせよ
しらせはや煙を雲にまかへても霞のうらのあまのもしほ火
夕霞をのれか浦に立まよひいつちよるへく波路尋ねん
立ましる霞の浦のゆふ煙しらす思ひのあまのもしほ火
もしほくむ霞の浦のよそにてもとへかし人のおもふこゝろを

石瀬杜

神なひのいはせの杜の初時雨忍ひし色は秋風そふく
をのつからかけても袖にしらすなよ石瀬の杜の秋のした露

神なびの石瀬の杜のいはずともしれかし下につもる落葉を
おもひあまりいはせの杜の下露に草はみなから色かはりつゝ
忍ふるをねにたてよとやさそふらん石瀬の杜のうくひすの聲
おもふ事いはせの杜のいはずとも色には出よあきのしたつゆ
神なびの石瀬のもりのいはしたゝわか戀まさる鳥の音はうし
うつろはむ秋の色にも思ひ出よさやは石瀬の杜のことの葉
かくとたに石せの杜の初時雨今や梢も色に出なむ
戀しともいかゝいはせの杜の露かけてもよその袖の色かは
つらしとももうしとも風のつてにたにえやは石瀬の杜の言の葉
今はとて石瀬の杜の下露もあらぬ色にや置まさるらん

筑波山

つくは山しけきまさ木の數よりもしらぬは人のこゝろ也凫
あかつきの鐘の響も筑波山人はかけせぬ床のまくらに
あしほ山やます心はつくはれのそかひにたにもみらくなき比
いたつらに人の心はつくは山いつか消へき思ひなるらん
筑波山はやまを分しなけきよりしけりそ增る深き思は
つくは山しけき歎の下露にをのか心のしをりなそおもふ
つくはやましつくに絶ぬ谷水のいかなる隙にしらせそめまし
何となく心を人につくは山かけよりしけきおもひ有身そ
枯て行これや心のつくは山葉山しけ山秋風そふく
つれもなき人に心をつくは山絶ぬなけきのしけきころ哉
筑波山しけき歎を分侘てをのれとまよふ戀の道かな
つくは山時雨る秋の露よりもまつ色かはる我こゝろかな

袖浦

袖の浦なみの花にもしらさりきいかなる秋の色にこひつゝ
跡もなき風をたよりのしるへにてうきねかなしき袖の浦哉
袖の浦にたまらぬ玉のくたけつゝよせても遠くかへる浪かな
物おもへは人の心のいとまなみしほたれ增る袖のうらかな
くちはてし契の床のかたしきに猶ほしわふるそての浦なみ
袖の浦に波よせ歸るよひ／＼や我かた數のたくひ成らむ
しきなみに獨やねなん袖の浦さはく湊はよる船もなし
涙にたにぬれてほすまはありそ海の釣するあまの袖の浦風
あかつきの別はいつもから衣ぬれてそかへる袖のうらなみ
よとゝもに忍ふ心のあらはれて絶すそかゝる袖のうらなみ
もの思へはいとゝひかたき袖の浦の涙には月そぬるゝ顔なる
枯はつる袖のうらなみかくとたにしられぬあまの身を恨つゝ

益田池

思ひのみます田の池の水かくれにしらぬあやめのねに亂つゝ
月やとる益田の池のます鏡うつろふ色そ秋にかなしき
人こゝろいとゝきます田の池水にうへはしけれる名を恨みつゝ
つらさのみ益田の池の薄氷とけぬ契を何むすふらん
思ひのみますたの池のうきぬなは絶ぬちきりそ苦しかりける
思ふ事我そ益田の池にすむをしのうきねもさやはくるしき
わか戀はますたの池の鴛鳥の玉もにあそふ跡もはかなし
片戀の益田の池にたつ鳥の羽かひの波を袖にかけつゝ
涙のみますたの池のねぬなはのねぬよくるしき物思ふらん
涙のみますたの池のみなつく／＼歎く／＼しるしや身もて朽なん
涙のみ袖にます田のいけらしといひてもおしきうき名也けり
薄やなきあはて年ふる思ひのみますたの池の鴨のした道

高師濱

おきつなみ高師の濱の松もなたぬるゝ許の名に社有けれ

興津なみたかしの濱にあかすとも君としあらは夢もみえなん

あた浪のたかしの濱のそなれ松馴すはかけて我戀めやも

よる波もたかしのはまの松かねのかはく間もなき枕なりけり

風あらきなみやたかしの濱千鳥ふみかよひこし程も絕ぬる（跡イ）（ゆくイ）

まつとたに人はかけてもしら浪のたかしの濱に袖はぬれつゝ

うつなみのたかしの濱の砂地におひける松のねこそあたなれ

波のたつなのみたかしの濱かせに松はつれなき秋の色哉

なき名のみ世にはたかしのはま風のつれなき色に戀や渡らん

戀すてふ名のみたかしの濱千鳥さのみや浪の底に鳴へき

物思ふなみのたかしの濱松のまつもむなしき色にふりつゝ（ひさイ）

なき名のみ高師のはまの松かえにいかなる風のたえす吹らん

阿波手杜

わか戀はあはての杜の夏草の人こそしられしける比かな（の御集）

さりともと色に出ぬる言のはもあはての杜の名にそおとろく

かた糸のあたの玉のをよりかけてあはての杜の露きえねとや（にイ）

日數ふるあはての杜の下もみちもりくる露の色に出にけり

名にしおはゝあはての杜の呼子鳥うきはためしの夜半の一聲

いつとてもあはての杜の夕露のなと秋かせにたへすちるらん

たゝ染よ時雨も露も霜もあはての杜の秋の暮かた

身にとまる思ひはこれもしられけりあはての杜の夜半の木枯

白露も置たにあへす枯にけり又もあはてのもりの下草

其まゝにあはての杜の秋の暮袖よりほかに色かはりけり

聞したゝあはての杜の名もつらしうきためしあるむかし成皃

侘はつる身なうつせみのなのれのみあはての杜に音なや鳴覽

志香須香渡

かくしつゝ暮ぬる秋はしかすかの渡もあさき契りとそ思ふ

うしとても猶しかすかの渡守しるへもなみのよるへしらせよ（行へおしへよイ）

秋風に鳴音なたつるしかすかのわたりし波になとる袖かは（なたとる袖哉イ）

たのまれぬ人の心をしかすかに思ひわたりて年のへぬらん

みし人の影はかりこそしかすかの渡り絕にしむかし成けり

うしとても忘れんことはしかすかの渡と聞に袖そぬれぬる

是も又稀なる中はしかすかのわたりさへこそうつろひにけれ

うきなから猶たのむ哉しかすかのわたり初てし水のこゝろを

あひみてもあはてもなけくしかすかの渡物うき夢のうき橋

立かへり心つからやしかすかの渡もあへぬなみにぬるらむ

忘れなん恨みしとてもしかすかの渡にしはし身なそやすらふ

むすひをく契はいかにしかすかのわたりも遠き中のへたてそ

濱名橋

しろらめや濱名のはしの絕すのみ下行水のふかきこゝろを

なのつからみるめもしらぬ浪の上に濱名の橋を戀やわたらん

東路や濱名のはしに引駒もさそ待わたる逢坂の關

はる／＼と思ひそわたる東路や濱名のはしの浪にぬれつゝ

あふ事もはるかに月の行方を濱名の橋の空にまかへて

行かよふ濱名の橋のしらなみのあとなき道のしるへなりけり（枕イ）

打わたすはまなのはしの磯波にたなゝし小舟誰な戀らん

白浪のはま名の橋にかけてたに思ひし事か雲のとたえは

たのつから影やとまると行てみむ濱名の橋の水のしら浪
逢事は濱名の橋に行まとひ跡なき波にのこるおもかけ
霧わたる（にる、イ）はまなの橋の夕波に人のとたえそあけてしらる丶
思ひあらはへたつる霧もなからましはまなの橋の秋の夕暮

磯間浦

かみ嶋や磯間の浦にあまのかるもにすむ虫の身を恨つ丶
かみ嶋やいそまの浦に舟出して沖つしほあひみてかへりこん
あつさ弓磯間のうらにひく網のめにかけなからあはぬ戀哉
よるへなきいそまの浦の磯波に馴てもぬる丶あまの袖かな
絶ぬへき契に袖をほしわひぬ磯間の浦の涙にぬれつ丶
いかにせむ磯間の浦にやくしほの空にはしるきけふり立けり
夕波のかけてそ戀る神嶋の磯間の浦に衣かたしき
忘れめや磯間の浦の恨きてそのかみ嶋にかけし契は
か丶りける契請ふの神嶋や磯間の浦のうらめしの身や
いたつらに磯間の浦のうつせ貝あはてや波の下にしのはん
煙たにおもふはかりのしるへせよ磯間の浦のあまのもしほ火
鴎のゐる磯まの浦の夕涙に誰面かけをかけて待らん

守山

時雨のみもる山かけの下葉（若イ）かは物おもふ袖は色も殘らす（の色もか□らす　御）
かきくらす涙時雨と守山は袖も殘らす紅葉しにけり
夜もすから夢さへ人めもる山はうちぬる中もたのみやはある
しら露のもる山風のいかならん袖よりもろき峯の紅葉々
いかにせむしけき人めを守山の下葉殘らすしくれゆくころ
わか袖に時雨も露も守山は下葉の外も色かはりけり
たらちねの親のいさめのもる山の下になけきの色にこひめや（つ丶イ）
我袖にもる山風の下露はた丶大かたの秋のいろかは
時雨もる山わけ衣ぬれしかと袖に秋なる色はみさりき
忍ひわひしくれも露ももる山の色なる袖を何にまかへん
もの思ふ名はかり色にもる山のしくれそ下の松にかはらぬ
神無月わか身時雨ともる山はわきて袂の色そくち行

佐野舟橋

かけてたに契りし中は程遠し思ひをたえねさの丶舟橋
人しれぬ心をいそのかみつけやかけてもふりぬさの丶船はし
言傳よさの丶舟橋はるかなるよその思ひにこかれわたると
東路のさの丶舟はし霧こめてよそにのみやはおもひわたらん
たつねても渡らぬ中の月日へてかけたえはつるさの丶舟橋
東路にかけても過し中川のせたえもつらきさの丶舟はし
おもふ人波のをちかたたつぬへきさの丶舟橋えやはうこかむ
もらさはや波のよそにもみわか崎さの丶舟橋かけしと思へは
中々にかくる心もくるしきにたえなはたえねさの丶舟橋
かけて猶いくせか戀んよそにのみき丶こそわたれさの丶船橋
絶れた丶うきにつれなき身なり共さのみもまたしさの丶船橋
東路や佐野の舟はしいたつらにわたりしころの袖やぬれなん

安積沼

人こ丶ろあさかの沼のうす氷かつ見なからに消やわたらむ
人心安積の沼の花かつみかつみしかくも見ゆるころかな
いかにせむあさかの沼に生ふと聞草葉につけて落る涙を
淺からぬあさかの沼の花かつみかつみる色に出にけるかな
契こそあさかの沼の花かつみかつみる色に露そこほる丶
花かつみかつ逢續る鴛鳥の安積の沼に見馴そあけん

れをふかく我こそおもへ人しれす安積の沼の春の若草(水くきイ)
しらせはや名こそあさかの花かつみめならふ契深きこゝろを
つらきをもうきをもしらぬ心かな安積の沼のかつみなからに
心さしさこそあさかの沼に生るかつみの程はなを(我そイ)そしらるゝ
人こゝろ安積の沼のかつ見てもあかぬや深き契なるらん
いかにせむ安積の沼のかつみてもぬるゝは袖のならひ成けり

松嶋

逢にかふる契をのみそ松嶋やをしまれぬ身の習成せは
松嶋やをしまのあまのならひまてみるめゆへにや袖ぬらす覧
ふくるよを心ひとつに恨みつゝ人まつしまのあまのもしほ火
松嶋やをしまの磯のあまの袖いくとし波にしほれきぬらん
逢まてと空行月を松嶋のなみより外にとはぬ袖かな
まつ嶋やおしまぬ秋の名殘にもぬれて有明の月やみるらん
海士の袖あら磯かけて松嶋や(もイ)下葉する秋そかなしき
松しまやを嶋のあまのすて衣思ひ捨れとぬるゝ袖かな
まつ嶋や小しまのあまに尋ねみむぬれては袖の色やかはると
しら浪のしらすや君を松嶋に猶立かへりかゝるこゝろを
おもひたつたよりもつらし松嶋やをしまのあまの袖の鹽かせ
くれは又いかに忍はんまつ嶋やをしまの海士のよるの思ひを

緒斷橋

東路の緒たえの橋も有ものをいかにくち行袖とかはしる
相坂をけふ越ぬともみちのくのをたえのはしの末のしら波
ことの音のなけきくはゝる契りとて緒斷の橋の中も絶にき
東路や雲路へたてゝ聞しかと緒斷のはしは身にも有けり
しらさりき忘れかたみにみちのくの緒斷の橋のうき名計りを
思ひのみ東にしめてひくことの緒たえの橋の道やまとはん
逢事はぬるをたのみの夢路までをたえの橋に月そふけ行
行末の緒斷のはしは聞もうしおもひの道のおくもしられて
忘れすは又や踏みんみちのくの緒斷の橋の年ふりぬとも
逢事はまた末遠し白雲の緒斷の橋のなをそ恨むる
忘らるゝうき身のための名もつらし緒たえの橋の秋の夕くれ
いきてこそ人をもとはめ玉の緒のをたえの橋はうき名成けり

三熊野浦

三熊のゝ浦より遠に立霧の晴ぬ思ひを猶やへたてむ
むかしより玉かとのみそみくまのゝ浦までとなる袖の涙を
時の間の夜半の衣の濱ゆふやなけきそふへき三熊のゝ浦
日にそへて人の心をみくまのゝつらさかさなる浦の濱ゆふ
へたつとも吹たにかよへみくまのゝうらより遠の八重の鹽風
三熊野の浦の濱ゆふとへかしとおもふなけきは猶そかさなる
三熊野のうらの濱ゆふしろ妙の袖のわかれもいのりかさねよ
いくたひか磯邊の鹽のさしなからつらき心をみくまのゝ浦
契りしにあらぬつらさをみくまのゝあはて月日や浦の濱ゆふ
みくまのゝうらの濱ゆふいく世へぬあはぬ涙を袖にかされて
三熊野の浦の濱ゆふ立波の世にふる袖を人(のイ)にとへかし
忘らるゝ身社はあらめ三熊野の浦のかひある名をはとゝめよ

鳴海浦

よそにのみ鳴海の浦の夕煙うはの空にもいかゝたのまむ
あまの住里のしるへ(とイ)になるみかた我身つれなき恨せしまに
よそ人になるみの浦の八重霞忘れすとてもへたてはてゝき
物おもへは音にたてゝも鳴海かた聞人波にうらかせそふく

たよりたに行衛しらすや鳴海かた浦こく船のかちをたえなは
なのつから風そ知へとなるみかた跡なき波に道迷ふとも
人心あれてみるめのよるの月いかになるみのうらみてかぬる
いたつらに幾年波をへたつ覽よそになるみのうらみせしまに
曉はなのか衣々なるみかたうらみてかへる沖津しら波
袖の色ふかくなるみの恨をそ今はかたみとおもひ初つゝ
數ならて哀なるみのうらみかな世のことはりも人のとかゝは
扨も猶あかすはいかに鳴海潟みるめかひなき世をやつくさん

二見浦

玉くしけ二見の浦の夕月夜明てもみぬは夢路なりけり
ふりおほふ二見のうらの霜の上になれかさぬる袖の月かけ
二見かた伊勢のはま荻敷たへの衣手かれて夢もむすはす
わか戀はあふせもしらす二見かた明暮袖に波そかゝれる
かされても袖の涙の玉くしけ明て二見のうらみとそなる
あかぬよの明る別は玉くしけ二見の浦に又も逢みむ
いかさまに我身を分て二見かた命にかへはあふかひもみん
友舟の契あやなき二見かた行衛もなみのうきまくらかな
別てはあかぬ名殘をますかゝみ二見の浦の有明の月
あひにあはゝ二見の浦にねもしなんあら磯涙の枕成とも
二見かた絕す涙の玉くしけ玉ゆら袖のかはく間そなき
伊勢嶋やふたみの浦のかたし貝あはて月日を待そつれなき

名取河

なろかなる涙そあたの名取川せきあへぬ袖はあらはれぬとも
いたつらにあはぬうき身の名取河やなせの波を袖にかけつゝ
名取河心にくたす埋木のことはりしらぬ袖のしからみ
むもれ木の波に朽ぬる名取河うき名はかりやうきてなかれん
あらはれてしつむ涙の名とり河袖の色かはせゝのむもれ木
埋木の名そあらはるゝ名取河あにぬためしはさても朽なむ
名取河心のとはゝ埋木の下行なみのいかゝこたへむ
なのつからもれなはいかに名取河やなせの波にせく心かな
名取河うき名はかりはあらはれて思ふ心のせゝのむもれ木
名とり河そこの埋木あらはるな紅葉はうへに色にいつとも
なとり河逢せに逢ふうたかたのうきおもひのみあらはれそ行
名取河しつむもくつに名をかへて思ひけりとは人にしらせむ

雜二十首

芳野河

吉野河あさきせもなく行水の人のこゝろはうへそつれなき
よしの河わたりし時はゆく水のかへらむとやは我もおもひし
芳野河いはとかしはをこす波の常盤かきはそ我君のみよ
吉野河なかれてはやくちる花の波のいつくに春とまるらん
よしの河ふかき流のためしにも涙數まさる君か御代かな
君か代はよしのゝ河のとこ波にたゆる時なき影そみえける
吉野河よしや世中早き瀨にたへれはこそはけふまてはすめ
みな人の行瀨をみせよ芳野河岩波はやくかけし思ひそ
芳野河岩間に流つ玉ゆらも春のかたみの花のうたかた
水上に手とせなかれて芳野河はやくそ君を昔なきてし
よし野河岩きりとほしせをはやみ過るも人のよはひ成けり
吉野川岩こすなみははやけれと音こそたてね瀨の松風

鈴鹿河

底清き鈴鹿河原のしき波のまなく時なくたのみてそふる
鈴鹿河ふりさけみれは神路山榊葉わけて出る月かけ
すゝか河八十瀬ふみ渡るみてくらも君か代なかき千世の長月
すゝか河やそせの浪にぬれてやとる月も旅ねの空やわひしき
鈴鹿河八十瀬にいのる君かため吹山かせもよろつ代のこゑ
月影もたえすやすまんすゝか河いせなのみやは世々のふる道
長きよのためしにひかむ鈴鹿河こえていつきのわたらひのしめ
ぬれ／＼す時雨も今はすゝか河伊勢まて秋の色やます（みゆイ）らん
すゝか河山には秋のくれなゐに八十瀬の浪そ色かはりゆく
よろつ代はふるとも盡しすゝか河やそせの浪のたゝむ限りは
鈴鹿河やそ瀬のみくつくちはてゝ浮名世にふる思ひ出そなき
道とめて神代なとへはすゝか河ふるきに歸るせゝのしらなみ

不盡山

ふしの根に時そともなく立煙遠こち人もおもなれやせむ（ぬゝ御集）
白妙の山はふしのね時しらぬいく世の雪に煙たつらむ
あまの原ふしのしは山しはらくも煙たえせす雪もけなくに
くらへみむ我身よ不盡の山ならはたゝ（えイ）ぬ煙にたへぬへき哉
うつもれぬ名さへ高ねの富士の山たえぬためしに雪つもれ共
人住ぬ山はふしのねいつとなくたつるや何のけふり成らん
消かてのふしのは山の嶺の雪時うつるとや霞ゐるらむ
ふしの根の嵐になひく夕煙のほりもやらぬ身ないかにせん
みな月のてる日もしらす白妙の山はふしのね雪そつれなき
よとゝもにいつかはきえむ富士の山煙になれてつもる白雪
よとゝもにふしのけふりのたつよ哉我のみ物は思はさりけり
ふしの山峯は雪氣の雲なからすそのゝ原に秋風そふく

還山

都人歸る山路はあと絶てさかひもしらぬ秋のゆふ霧
春はこよひ柴の扉にかへる山朝けのかせに誰なまたまし
いかはかりふかき中とてかへる山かさなる雪なとへ（くイ）と待らん
旅衣いく重かさなる雲井にもかへる山路の空な忘るな
あらためて君か御代にやいにしへにかへる山路も跡なしる覽
都人暮れはやかてかへる山何そはひとりとまるいほりそ
たのめての待てふ道もかへる山何そは有て人の行らむ
みやこ出て越路はるかにかへる山やまの名なのみ思ふころ哉
旅衣かねてもつらき秋かせな袖にうらみてかへる山人
鴈かねの花とひ分て歸るやま霞も嶺に殘る色かは
山の名も昔にかへる道はあれと我身ひとつの跡や絶なん
こし方も猶行末もふる雪に跡こそみえねかへる山人

海橋立

草の原いく野の末やしくるらん秋風そふくあまの橋立
ほの／＼とよさの吹井の朝霧にあらはれわたる海のはし立
烏羽玉のよわたる月の住里はけに久かたのあまのはし立
わたの原松吹かせに霧晴て月すみわたる海の橋たて
枝ことに千代なや君に結ふらん松の葉しろきあまのはしたて
過て又いく野は遠く成にけりふみみる道はあまのはし立
みつしほに朽せぬ松やはし柱海のはしたて千世もかきらし
明わたるよさの浦松ふく風に霞て過るあまのはしたて
かりてほす浦のみるめもいとまなみこや世なわたる海の橋立

うらみたる時雨は袖もうらふれて名のみふり行海のはしたて
ふりにける猶も昔の色なから波間に殘るうみ、の橋たて
世をわたるをのかしわさもいとまなみ絶す釣する海のはし立

飛鳥河

飛鳥河七瀬の淀に吹風のいたつらにのみ行月日かな
かはり行淵瀬はあれて飛鳥河かはよとしらぬ秋霧のころ
さゝれ石は岩ほと成てあすか河ふちせのこゑをきかぬ御代哉
世にふれは身にのみ積るとし淚のなかれてはやき飛鳥河かな
末遠く君をそたのむ飛鳥河明日は淵瀬をしらぬみくつに
君か代はたゆる世もあらし飛鳥河なかれてはやき月日也けり
あまの原空とふ鳥の飛鳥河かへらぬなみや故郷のあと
すむ月の都を遠みあすか河たゝいたつらに淚やたつらん
見るまゝに淚をわけても飛鳥のあすかの河の遠方のそら
飛鳥河紅葉みたれて飛鳥の行せもつらききのふけふかな
飛鳥のあすかのせたえをのれのみ深き道とふ世を賴みつゝ
あすか河下行水の早きせにうかみそ出るなみのしらゆふ

鳥羽

年經ぬる松も昔に山城の鳥羽に逢みん千世の故道
秋風の鳥羽田の面を吹なへにほなみにつゝく淀の河水
すゑ遠きとは田の面しめしよりいくよの花のみゆきふるらん
久しかれなひく稲葉の末までも鳥羽田の面の代々の秋かせ
秋もまたいくよの霜のふりぬらん鳥羽田の面の鶴のつはさに
山城の鳥羽田のいなはかたよりに君になひかす秋風そふく
八百萬とは田のいねをかりつみて道ある里の民そさかふる
さとの名も君か千年にあらはれてとはにふくへき松の風かな
夕暮は鳥羽田の露に風こえてむらさめなひくをちの山もと
千世まても民の煙や絶さらん鳥羽田の里の[illegible]
山城の鳥羽田のおくてかりにたにいつちいなはの庵もとむ覽
雁かねの鳥羽田のいなは打なひき露もとまらぬ風のをと哉

辰市

玉ほこやおほくの民のたつの市にくるれは歸る數もみえけり
こと〳〵く賑はふ民の辰の市にみよさかへたる程そみえける
敷嶋の道に我名は辰の市やいさまたしらぬやまと言のは
いたつらにけふも暮なは辰市日かすへぬへき都人かな
浮世をは今はと思ひ辰の市に身をはかへてもおしみかはなる
かすしらす行かふ民の辰の市にゝきはふ御代は是もみえけり
辰市や千とせをかけてくる民もくにの都の我君のため
諸人もけふこそこゝに辰の市やとり〳〵みゆるやまと心を
辰市や行かふ人も暮行はうるまの淸水影もとゝめす
萬代に數そふ民のたつの市はかへるも行もたゆる物かは
雲さはき日かけにのほる辰の市にうることもなき人を戀つゝ
辰市にうるまの淸水底澄て人の心のくまも殘らす

吹飯浦

芦邊より棹みちくらし天津風吹井の浦にたつそ鳴なる
あら玉の年さへ老の淚のよるいそちふけゐの恨をそする
こす波に我身ふけゐのうらみきてうちぬる夢も此ころそみる
なかめやる淚の千里の雲井まで月にふけゐの秋のうらかせ
出るより心ほそきは秋風の吹井の浦のあけかたの月
あはれ也誰世吹井のうら風によそにかたふく白雲の月
いたつらになのれ吹ゐの浦闇て子を思ふ鶴のいふかひもなし

さすらふる我世吹ゐの浦ちとりなく／＼過ぬ誰しのへとて
出にけり待とせしまに秋の夜もふけゐの浦の涙の月影
我よはひ吹ゐの浦のさよ千鳥思ひしまゝの波に鳴なり
いたつらに我世の秋や吹ゐかた袖なる月もかたふきに見
時雨つる雲も殘らて天津かせ吹ゐのうらに月そさやけき

布引瀧

立ぬはぬ紅葉の衣染はてゝ何山ひめの布引の瀧
布引の瀧の水上年をへていかにさらせはくろきすちなき
ぬの引のたきに袂をあらそひてわか年波のいつれたかけん
水上や天の河瀨にかよふらん雲井にしろき布引の瀧
誰ためになり（ほせイ）てさらせる山姫の名をなかしけむ布引のたき
布引の瀧の水上なかむれは水なき空と誰かいひけむ
ほしあへぬ我そわか世の袖にかゝるぬれて久しき布引のたき
山風に雲のはたてやみたるらん露のぬき散布ひきの瀧
たえす行水のしら糸たてぬきにたかをりかけし布引の瀧
嵐ふく雲のはたての絶々に露のぬきちるぬのひきのたき
布引の瀧のしら糸わくらはにとひくる人もいく世へぬらん
ぬの引の瀧の白糸山かせにみたれておつる數はとまらす

長柄橋

いにしへにあらすなからの橋柱ふり（くちイ）にし跡をしのはすもかな（なしイ）
をく霜にかれ行芦も朽にけり長柄の橋の行衛のみかは
さもあらはあれ名のみなからの橋柱くちすは今の人も忍はし
芦の根の浮身なからの橋柱かくて朽なん名こそ惜けれ
とまる名になかきしらるゝ身なり見長柄の橋の跡をみるにも
ふりにけり（ろイ）昔をとへは津の國のなからのはしのあとのしら浪
君か代に今もつくらむつの國の長柄の橋や千度渡らん
けふも又雲のかけはしわたしけりなからのはしの雨（秋）の夕くれ
跡をたに長柄の橋のたとるらん霧たちわたる夕暮の空
橋柱くちにける名をしるしにて昔なからのあとそはかなき
思ひ出よなからの橋の跡絶てむなしき名のみ朽（のこらイ）やはてなん
呉竹のみよはかきらす春の日のなからの橋はつくりかふとも

玉河里

日にみかき風にみかける光かなのとかにすめる玉河のさ（水イ）と
とりとむる物にしあらは玉河の底なる月もさてこそはみめ
てつくりやさらすかきれの朝露をつらぬきとめぬ玉河の里
天の原雲の波間にみかき出て月そやとれる玉河のさと
光さす里を尋てすむ月のかけをみかけるたま河の里
大方は秋とも分ぬ里の名に光をみかく玉河のさと
たま河にさらす手つくりさらによにたのむ日影の哀過行
月の秋雪のあしたもうの花のおもかけたえぬ玉河の里
袖の露秋はならひといひなからまなくもちるかたま河の里
時わかぬ身はいつとても卯花の袖に露けき玉かはのさと
あきらけき御代の光に久堅の月影きよき玉河の里
萩原や末もたはゝにをく露の枝まさり行たま河のさと

生浦

ちる波は春の色にそさくらあさのおふの浦かせ今も吹らし
しほみては入ぬる草となるなしのかたえにかゝる生の浦なし
何ゆへか底のみるめも生の浦に逢ことなしの名には立らむ（ろイ）
ありそ海の行年波をかされきていく世に成ぬおふの浦なし

春の雨にひらけし花の一枝を波にかざしておふの浦なし
なるなしは花こそかれて櫻麻のおふの浦なみ立まかふまて
いたつらに身に花さかぬ櫻あさのおふの浦波むそちこえなは
限りあれは花さく比やいつならん身はいたつらに生の浦なし
かりてほすあまのしわさもとことはに絶すみるめや生の浦波
世中に有とはなしに四十あまりかたへ過ゆくおふのうらなみ
おもふ事むなしき年の生のうらかへらぬ波そ身をとめて行
秋をへてみるとも盡し櫻麻の生の浦なし數まさりつゝ

佐夜中山

さゝの葉はさやの中山吹風にたのねねぬよの夢もむすはす
これよりもふかき嵐に關駒て今夜はねぬるさやの中山
關の戸をさそひし人は出やらて在明の月のさやの中山
てる月を岩根かたしき終夜さやかにみつるさやの中やま
都出し秋はかはらぬ袖の露もさやはみたれしさやの中やま
よそなから嵐のこゑのさびしさをそへてやきかむさやの中山
旅人の草のまくらになくたちのさやの中山今朝そ越なん
夕かりの岩根の雲にかされても猶袖さむしさやの中山
ふしわひぬ旅ねの床を槇の葉に吹やあらしのさやの中山
中々にさやの中山うき物と何しか身をもおもひしりけん
送るとて月も嵐もたのまれすわれ獨ゆくさやの中山
けふも又さやの中山越かねてしらぬ庵に月をまつかな

嵯峨野

狩人の草分衣ほしもあへす秋のさかのゝよものしら露
嵯峨の山よものみゆきはうつむとも野への故道跡やみゆらん
結ひ置し秋のさかのゝ庵より床は草葉の露になれつゝ
なへてよのさかのゝ露とみしかとも心よりなく秋も有けり
花を[illegible]し秋のさかのゝ露の色も情[illegible]の[illegible]にかはる[illegible]
さかの山むかしの跡を[illegible]はおもふも[illegible]
暮ぬともさか野は過て廣澤ややとゝはなけの月の影かは
野へ寒み秋のさかなる山里にならはぬ雪か[illegible]
名にたてゝ嵐ときゝしやま風に秋のさか野の色そしほるゝ
ゆふされは秋のさかのゝ鹿の音に山もとふかき露そこほるゝ
けふのみとたつもなけくやさかの山みゆきも遠きのへの故道
時しあれは嵯峨行秋のさかなれやかれ野の[illegible]山嵐そふく

角太河

今夜又たか宿からんいほさきの角田河原の秋の月かけ
みやこ鳥角太河原に身ならしぬさしてとふへき人しなけれは
水莖のあとかきなかす角太河言つてやらん人もとひこす
たれこゝに角太河原の都鳥みやこ戀しき月のみ鳴とも
昔こそふ月は[illegible]井に角田河はるかになしくおもふみやこも
都にてなれし月さへすみた河ことゝふ鳥のうき音のみかは
月かけのさすやいほさき角田河越てまつちの山のかひより
なかなかに我に事とへ都鳥すむや河邊の外はこたへむ
角田河なにたつ鳥の都にはまつらん月を[illegible]しむ山のは
名にしおふ鳥にことゝふ角田河昔のなみのあとを戀つゝ
忘るなよなれのみこゝにすみた河我おもふ事の[illegible]名もうし
わたし守しはしやすらへ角太河ぬれぬといはゝ暮な待らん

飾磨市

草も木もしくるゝころやあき人のしかまのかちに色増るらん
かすならぬ飾磨の市にたつ民も君を千世とやみなあふくらん

晴ぬ間に先朝霧な立こめてしかまの市に出るさと人
世にふれはしかまの市にたつ民のくるしからてはなき身也免
身にしめてなとあなかちに戀なのみしかまの市に染かへぬ覽
見わたせは秋の夕霧立ましりしかまの市はそことしられす
しりなからしかまの市のかた庇久しき御代につくりかされん
染てほすしかまのかちなみるよりもぬれて色こき我思ひかな
いかにしてうき身なかへん播磨なる餝磨の市に道なたつれて
君か代はしかまの市になくかちの千年なへても色やまさらん
思ひわひ餝磨の市にましるとも身なはなるへき浮世なるかは
なそもかく餝磨の市のあなかちに身なうき物と思ひそめけん

若浦

わかの浦や羽うちかはし飛（資俊集）千鳥浪にかきなく跡や殘らん
君ないはふたよりにつけ（かイ）よみくまのゝ跡たれそめて若の浦波
よりくへき方もなきさのもしほ草かき盡しても若の浦浪
なのつから波によりくる玉もなしふくとはすれとわかの浦風
人なみに君忘れすはわかのうら入江のもくつ數ならすとも
若の浦やまた道しらぬ浪の上にうきたる舟はやるかたそなき
わかの浦の神に書やるもしほ草心になひく手向ともかな
みつしほに靡くもくつもかたなみあしへにまかふ若の浦風
若のうらの春たつなみの夕つくよほのかにまかふたつの一聲
吹迷ふわかのうら風しるへせよ玉津嶋もる神のまに〳〵
わかの浦や塩干のたつも道はれて雲ゐの月に霜や重れん
若の浦やよるへもしらて行船のあと吹送れ沖津塩かせ

會坂關

しるしらす行も歸るも逢坂のせきの清水にかけはみゆらし
あふ坂の關の小河に引とめてしはし水かへ望月の駒
君に猶あふさか山もかひそなき杉のふる葉に（もイ）色しみえれは
待かれし世に相坂の關守はうき身ひとつにゆるさゝりけん
いたつらに杉の梢の下葉まて道ある御代にあふさかのせき
千世ふへき君かためしに逢坂のせきの杉むら色もかはらす
あふ坂の關の庵の琴の音はふかき梢の松かせそふく
たのめ猶關のし水はよとむとも道ある御代に逢坂の山
相坂の關やはけふもあれにけり時雨はかりそもる人もなし
年なへてゆきゝの人も君か代に猶よろつ代はあふさかのせき
たひ衣いつより露なかさぬらんまた都なるあふさかのせき
春の色に梢の空はかはれとも猶山さむしあふさかのせき

三津濱

みつの濱岩こすなみのわすれ貝わすれすみゆるまつかれの夢
大淀のみつの濱邊に船とめて磯の松かれまくらせんわれ
まちこひし昔は今もしのはれてかたえさひしきみつのはま松
大とものみつの濱松老にけりいく（つイ）年波の行衞しらすも
日のもとの光は君か御かけとや待戀ぬらん三津の濱松
松かれの枕の上になとつれて夢たにみえすみつの濱かせ
暮行はさしてそこふる日本のみつの濱松いつとわけゝり
ふりにけりそのよもしらぬ梢かな浪間に高き三津の濱松
霞たつみつのはま松音はかり有とやこゝにかよふうらかせ
君か代に三津の濱松いくかへりまれなる花のさかむとすらん
中々にみつの濱松たまさかにとはてそ人の過へかりけり
大とものみつのはま邊の松かえに年經てすめるあしたつの聲

右建保名所百首予之所藏三本及舊印本照應畢

群書類従巻第百七十二

和歌部廿七 百首六

弘長百首 稱七玉集

題

春二十首

初春 霞二首 鶯 春雪 若菜
梅二首 柳 春雨 歸鴈 花五首
春月 藤 欵冬 三月盡

夏十首

卯花 郭公三首 夏月 五月雨二首 螢
夕立 納涼

秋二十首

早秋 七夕 七夕後朝 露 萩
荻 薄 虫 鹿 初鴈
月五首 擣衣 霧 紅葉二首 暮秋

冬十首

初冬 時雨 落葉二首 冬月 霰
雪三首 歳暮

戀二十首

初戀 忍戀二首 不逢戀五首 初逢戀 曉別戀
後朝戀 遇不逢戀二首 忘戀三首 恨戀

雜二十首

曉 松 竹 山 河
橋 關 旅二首 海路 山家二首
田家 述懷二首 懷舊 夢 神祇
釋教 祝

作者

入道前太政大臣 實氏 常盤井
正二位藤原朝臣 基家 後九條前內大臣
正二位藤原朝臣 家良 衣笠前內大臣
入道民部卿 爲家卿
正二位行中納言兼侍從臣藤原朝臣爲氏
正三位行侍從臣藤原朝臣行家
沙彌寂西 俗名藤原信實朝臣

詠百首和歌

春二十首

初春　實　空

あさ日さす影ものとかに久方の空より春の色やみゆらん

基　家

雪はなたかきやかけて民の戸にふるもにきはふ千代の初春

家　良

あふ坂の關の杉むら雪消て道ある御代と春は來にけり

融　覺

たちかへり春は來にけりさゝ浪や氷吹とくしかのうらかせ

爲　氏

春たつといつしかみえてひさかたや空にかすめる天のかく山

行　家

春のくるひかりもしろくあさ日山嶺よりかすむ影そのとけき

寂　西

なしなへてのとけき御代の天つ空あふきてみれは春もきに見

霞二首

みるまゝに浪ちはるかに成にけりかすめはとなき浦のはつ嶋

今さらにかすますとてもなにはかたなかむる物な春の明ほの

あつまちの春の光は世にみちて霞そあまる野にも山にも

かく山のあまちのかすみなりはへて神もや昔衣ほしけん

かたなかのあしたの原のかすむよりなち方人も春や知らん

立のほる雲もなよはぬふしのねに煙なこめてかすむ春哉

いくとせかへたてきぬらん春霞ふるの山へのあけほのゝ空

なには津のしほやく煙立こめていまは春へとかすむ空哉

たちかへるとしなへたてゝ朝霞たなひきわたるよもの山端

難波かたかりふくあしのやへ霞ひまこそなけれ春のあけほの

さほひめの春のころもな立こめてまたひとへなるあさ霞かな

うすくこきかすみの色は遠近の山のみとりの見する成けり

ふるさとのよしのゝ霞たなひきぬ（てイ）ふかき山にも春やきぬらん

あさこほりはやうちとけよ川邊なる霞の衣そてはぬるとも

鶯

物ことにあらたまるなる春なれは我身ふるすなうくひすの聲

いほむすふ野原にかよふうくひすのなのれもかくる春の玉章

いくとせもきゝてふりぬる鶯のなくねはかりたむかしなり共

花さかぬみやまかくれは鶯のこゑのつてにそ春もしらるゝ

うくひすのしるへはかりやいそく覽花のかなそき春の山かせ

かくしつゝふりゆく身には今そきく四十年の春の鶯の聲

谷ないつるほとはいつくのちかけれはまた朝またき鶯のなく

春雪

あかすみて思ひあはせむみよしのゝ花よりさきにふれる白雪

おさまれるあきつ嶋ねはなしなへて道ある春の雪のむらきえ

さらにまたむすほゝれたる若草の末野の原に雪はふりつゝ

まつさける花とやいはむうちわたす遠方野への春のあは雪

たちわたるかすみのうへの山風に猶空さむく雪はふりつゝ

みこもりのゐかひの關のせきもゐすあはにや春の雪はきゆ覽

ふる雪はななこそきえねあら玉の年な吹こす冬の嵐に

若菜

都人けふや野原にうちむれてしるもしらぬも若菜摘らん

たれか又山田のはらの雪わけて神代の跡に若菜摘らん
あさみとり霞の衣春はきぬすそのゝ若菜今やつまゝし
ぬれつゝやわかなつむらんしら雪のふる里人のかすか野の原
誰か又雪またき分てかすかのゝ草のはつかにわかなつむらん
つめはかつあらはれに見まさこ行澤のみかけにおふる若菜は
つみたむるわかなそ見れはかすか野に袖こそ春の雪ま也けれ

梅二首

なにはつに今や春へとさきぬらん浦つたひ行梅のした風
すみ染の袖にはおらし梅のはなとまる色かにならひもそする
あたら夜の月たもらさて見るゝや軒端の梅のあはれしるらん
梅花南も北もおなし枝にさきちる事のなとかはるらむ
にほひこそ猶のこりけれ梅花たちよるはかりありし名残に
見し人はありしにもにすふりぬれとおなし色香に匂ふ梅かえ
むめかゝの身にしむ比の春（昔カ）風は春のたもとも人やとかめん
梅のはな色香はかりそあるしにて宿はきたかにとふ人もなし
さきさかすなにかよそなる梅花にほひそ風のしるへなりける
いたつらにちりや過なん梅花さかりまたれて人はとひこす
紅ににほへるいもか袖かけておりまかへたるむめのはつはな
ちるとみてさてもあられぬつらさ哉人のたのめし宿の梅かえ
春のきてこれそことしのはつしほのうす紅とみゆる梅か枝
しるしらす隣りはいまか梅のにはなたかためならし色も匂ひも

柳

影見ゆる入江の水の玉も猶みとりたそふるきしの青柳
あをやきのうちたれ髪の誰まつといはねの枕よるはらふ覧
さほ山のみねに霞はたなひきて川そひ柳春めきにけり

あさ緑やなきの枝のかたいともてぬきたる玉の春のあさ露
あさみとり色そめかけて春風の枝にみたるゝ青柳の糸
なひくとはみゆる物からあをやきの枝もならさぬ春の風哉
青柳のいともかしこし我君の御代の草木はさそなひくらん

春雨

春雨をなへての雨とおもふなよ四方の草木も昔かめくみそ
さゝかにもすかく草葉にさほ姫のてひきの糸の雨そかゝれる
山のはのかすむとみゆるあさあけにやかてふりぬる春雨の空
たをやめの袖もほしあへすあすか風唯いたつらに春雨そふる
山のはに雲のたえまもみえわかす霞よりふる春雨の空
岡のへはやかすともあれ春雨のふるにつけては草もゝえなん
春雨にかはつなくなりいその神ふるの山田も時やしるらん

歸雁

あまさかる雲井の雁の歸さにしらぬこしちのことやつてまし
たちわたる雲のあなたの山越て飛かすみたる春の雁かね
誰ために秋こし雁のなさけとておしむによらぬ春の別そ
山のはのかすめる空の横雲にわかるとみえて歸雁かね
つれなしや有明の月の山のはになこりしられて歸雁かね
あはれ我したふなすてゝふる郷にたかまつとてか雁の行らん
春といへと猶もこしちはしら雪のふる道とめてかへる雁かね

花二十首

なかむれはよものしら雲かくらくの初瀬の山は花咲ぬらし
風にほふうす紅のはなさくら春の衣はかすみ[illegible]なし
やま櫻[illegible]のはなる[illegible]のか[illegible]に[illegible]よすらん
風吹は雪とふる木のさくら花春のなこりはなれもかなしや

七十の春をむかえてかさす共ふたゝび花の色をこそ見め
山はみなあつまもろこしかすみけりわか國ひろく花や咲らん
今朝よりもたつたの櫻色そこき夕日や花に時雨なるらん
さくら花さけるをみれは三吉のゝ瀧は山よりおちぬ日そなき
あさことの老のつとめもやすむまは浮世のことく花をみる哉
風吹は浦はひかたのしほつ山花そみちくる奥津しら波
みとりなる外山の松のたえまよりあらはれてさく花櫻哉
白雲をそれかとはかりみしかともまかひはつへき花の色かは
いたつらに春そへにける櫻花待もおしむも身の思ひにて
この春も又こそあたにうつろはめならひをきたる花の心は
人ことにおしむ思ひの程をたにさそともしらて花やちるらん
しら雲の色はひとつをさくら花さきぬと匂ふ春の山風
春の夜のゝとかにあくる花の色になきたるあさと山風そ吹
よしさらはちるまてはみし山櫻花のさかりを面影にして
いにしへの大内山のさくら花おも影ならてみぬそかなしき
ちりかゝる花の淵とそなりにけるみなのさ川の春のみなとには
花の色はそれともわかす山櫻あまきる雲の春のあけほの
やま櫻さけるさかさるをしなへてさなから花とみゆる白雲
雲のたて霞のぬきになりはへて花はにしきの名にそ立ける
ちりはてん後をはしらすさくら花あかぬ心のふかくもある哉
来てみむといひし計にうつろひぬやよひの花の春の暮かた
花さかはゆかんとおもふ故郷のみかきか原のかすみぬるかな
なにには人ふりさけみれは雲かゝるいこまのたけの初さくら花
我宿はとふ人まれになりやせんたのむよしのゝ花も散なは
雨はるゝこ[illegible]の返しの春風に露もほしあへすちる櫻かな
ちる花をこれはえさらぬ別そとかつなくさめて猶そ悲しき
たちわたる霞にもるゝ山たかみとをき晴まそ花はみえける
さきにけりかつらき山のさくら花雲にまかふを今さかりとて
雲の上になれし昔の花の陰猶も年へて思ひやるかな
山櫻にほふさかりをみし物をあらぬつらさの春の風かな
家路をはいそかぬ物をゐにかへる程をも花のわすれましかは

春月

しら雲をいとはてそみる春の夜の花のおくなる山端の月
あはれ也うき身の影ももろ共にふけて身にしむ春のよの月
花の香は霞にもるゝやき風に猶むもれたる春の夜の月
あかすみる花のにほひもふかきよの雲井にかすむ春の月影
みすもあらすみもせぬ影の中空にあやなくかすむ春のよの月
これはこの春とて月のかすめるを涙のとかと思ひけるかな
かすむ夜の月の影こそうとからねおほゝれてみる老の寝覺に

藤

おりかくる波のかさしの花なれや袖にうつろふたこのうら藤
あま人はかさしてかへる藤なみのかけなる海に春やのこれる
かさしとておる海士人やなかるらんたこの浦藤盛りなれとも
いつはりの花とそ見ゆる松山の梢をこえてかゝる藤波
みかり人今やかさゝん春日のにさかりしらるゝ春のふち浪
年經ぬる松にこたかく成にけり咲そふ藤の雲かゝるまて
今しはしいけの藤なみ待とてやなこりを猶もかけてみすらん

欵冬

ちらぬまに行てをみはやいにしへの色はかはらし井手の山吹
山吹のもとあらの花そ咲にけるまた秋となき萩の籬に

行水は影をそあらふ岩たかきみむろのきしの山ふきの花
ちれはかつ波のかけたるしからみやゐてこす風の款冬の花
吉野川岩こす水に影みえて波におらるゝ山ふきのはな
やまふきのちりける時のゐてにきてつらき里とも思ひける哉
あはれなる春の暮かな款冬の花には物を思ひしれとや

三月盡

月日とてやすくな過そ暮て行やよひの空の春の別路
けふは又やそしまはるゝ夕霞人につけてや春も行覧
吹風のさそへは花はちりもせよ心と春のいかにすくらん
身のよそに思ひなせとも行春のなこりは猶そ物わすれせぬ
おもへともいふかひもなしとゝまらぬ春のかすみの袖の別は
しはしともえそひきとめぬ梓弓やよひの空の春の別は
いかにせんなかき春日の人たのめやよひの月はけふそ暮ぬる

夏十首

卯花

布さらすうちのわたりの垣ねよりめつらしけなくさける卯花
をそ櫻咲そふ谷のうのはなやおなし雪けの水のしら波
谷深き岸のいはねの卯花は涙のかけたる色にさきつゝ
榊とる比とはしるし白妙のゆふかけわたす杜のうのはな
うの花の色をかされてしろたへの波もてゆへる玉川の里
たちぬはぬたかいにしへの衣とて猶布さらすやとの卯花
卯花の影にかくれやなかるらんさやけき月の色にまかへて

郭公

かはらすと人にかたらん時鳥むかしの聲は我のみそきく
なをかへりたけゆき月の郭公やみのうつゝの道にとふかに
いにしへの事かたらはん時鳥今夜はやとの軒のたちはな
里人のおしむかこれもほとゝきす夕の山ないてもやられは
いかなれはあかつしたにて時鳥雲なき空の月に鳴らん
曉はうさこそまされほとゝきす袖の別の鳥なられとも
ほとゝきす鳴やさ月としりなから猶あらましに待ぬ日そなき
しのひねを誰にしらせて郭公きれなる比にまたれそめけむ
なこりまてしたふあまりに時鳥又行かたを思ひやるかな
しのふらん心もしらす時鳥五月こぬまの音こそまたるれ
郭公たれかまさると夏の夜をねぬになく〳〵あかしつるかな
里わかすなのゐなれとも郭公あさくら山のたそかれの空
またれつゝ有明までの時鳥いかにつれなき初音とかしる
うつゝともなき一聲の郭公ねなくに夢とおもひなす哉
あま雲のよそにかたらふ時鳥さすかに聲もきゝそふりぬる
忍ふへきゆへをかたらへ郭公ことはりならはこぬもうらみし
あまを舟初せの山のほとゝきすいさよふ雲のほのかにそなく
月よりもいてさきたちてよひのまのくらまの山になく郭公
年ことに心つくしのほとゝきすいつもをそきは初音なりけり
あし引の山郭公なきぬなりまたまし物をあけほのゝ空
ふる郷の花たち花に時鳥我もさ月をまつと鳴なり

夏月

雲きゆる空にや月のさえつらん庭もこほらぬ夏の夜の霜
手にならすおなしうちわの里人は夏のなかはの月やみゆらん
みしか夜の空ゆく月のやすらひをさそひのこしてあくる東雲
かさゝきの鏡の影もうつりあへすさす程もなき夏のよの月

あけやすき影こそ空にしられけり出て程なき夏のよの月
夏の夜の夕やみなからふけぬれは待いつる月をみる程そなき
見はてぬを我めかれかとおもふまにはやあけにけり短夜の月

五月雨二首

かち人のわたせの波もみちたえぬにふのかはらの五月雨の比
たえもせすけふはいくかと五月雨のいとぬきかくる軒の玉水
ふる雨のくもる五月の玉くしけあしきの河は水まさるらし
山風のさみたれはらふまきのはに日比たまれる露やおつらん
ぬれてほすひまこそなけれ夏かりのあしやの里の五月雨の比
さしも草さしもひまなき五月雨にいふきのたけの猶やもゆ覧
大井川音まさるなりゐる雲のをくらの山の五月雨のころ
五月雨の草のいほりのよるの袖しつくも露もさてや朽なん
伊勢のあまのおなしなきさの捨衣猶しほたるゝ五月雨の比
うちわたすよとの澤水波こえてつねよりまさるさみたれの頃
行人のたむけもみえす玉かきのみつのみなとの五月雨のころ
さみたれのみのしろ衣ほすまなき袖やなになり戀もせなくに
みちのへのきのゝ中川ふちとのみ見るも瀬たえの五月雨の比
早苗とるたこのをかさをその儘にぬかてそかへる五月雨の比

螢

月まつとそむくるまとの燈をゝのれかゝけて行螢かな
とふ螢いはもる水にやとる夜は思ひやいとゝわきかへるらん
こゝろにはねにたてすとや忍ふらんもゆる螢のしるき思ひを
かくしえぬむくらのやとの身の程を思ひしれともとふ螢かな
おもひあまる身をうき草のみたれつゝさそふ水あれと飛螢哉
夏の野に草の袂はつゝめともゆる螢のかくれやはする
もる水もいしまくたくるしからみにせくや思ひと行螢哉

夕立

風さはく雲のふるまひたゝならてかねてまたるゝ夕たちの空
夕立のこゝろといそくうき雲をしたりかほにも吹あらしかな
この里もふりぬと思ふ夕立のくもるはかりに過にけるかな
ときは木のした葉もたへす夕立の雲吹はらふ深山おろしは
夏山のならのはかしは風過て嶺たちのほる夕たちの雲
なる神の音にもしるしまきもくのひはらの山の夕立の空
時のまの雲の一むら里わけていたりいたらぬ夕たちの雨

納涼

し水せくいはねの床の苔むしろこゝにはしかし秋のけしきも
夏は久いてみの浦をすみよしとましはおりしき誰すゝむらん
みち野へのもりの日影の夕かせにいそくも人のえやは過ける
またきより秋かとそ思ふをくら山夕暮いそく松のした風
すゝしさはたちよるからにしられけり秋風ちかき衣手のもり
夏山の木のしたかけのいはし水風まつ程もいくむすひしつ
つの國のなにはの里の夕すゝみあしのしのひに秋風そ吹

秋二十首

早秋

秋のきてけふみか月の雲まより心つくしの影そほのめく
いその神ふる野の松の音までもむかしをのこす秋の初風
草のうへにあさをく庭の露みれは袖もすゝしく秋はきにけり
かたしきの袖こそぬるれしら露の暁おきに秋やきぬらん
いつのまに秋とは風の吹そめてあさけ涼しく音かはる覧

いつしかも身にしむ風とおもふより心に秋の色はそめつゝ

あはれなる老の世をこそおとろかせ今年もきゝつ秋の初風

七夕

代々をへておもふもくるし七夕にかしつる糸のたえぬ契は

かさゝきの川風たちぬ七夕の紅葉のとはり波やかくらん

織女のあふせの川のわたしもり暮はてすともみ舟よせなん

久かたの雲井はるかに待わびしあまつほし合の秋も來にけり

七夕の契を秋の一夜そともみちのはしにまちわたるかな

織女のをるあさぬのゝ秋ころもむれあひかたくなと契るらん

年にありて一夜なれとも七夕のそらたのめせぬ秋はきにけり

七夕後朝

かさゝきのよりはの橋の中絶はかへる別はなけかさらまし

明方のふしの煙や星合の空の別のおもひなるらん

秋風に雲の衣のかへる（原イ）さもまつ七夕のうらみとそしる

あけわたるあまの川せの秋風に七夕つめの袖かへるらし

けさよりは天の川波立歸雲るのよそに戀わたるらし

あかなくに妻をくる覧ひこ星のけさの船出はかちもいそかし

いそけはそあさ瀬もたとる天川かへさの道は舟よそひせよ

露

かりねする草の枕の秋かせに涙よりちる野への白露

浪こゆるありその眞葛うら葉まてあまりて海の露そこほるゝ

あはれしる秋の夕のしら露はたか袖よりかむすひそめけん

よな〳〵の涙しなくは苔衣秋なく露の程も見てまし

色々にうつろはんとや宮城のゝ花の千草の秋のしら露

われのみか露をくほとのゆかしきはこその袂の秋の夕暮

草むらのあさちか露のをきところけにもふかしとみゆる宿哉

萩

山里は野へもひとつに鹿そすむうつさぬ庭の萩はさく花

露草に袖すりませむ秋萩のひと花衣色ふかくとも

なく鴈の涙とはみす大かたの秋くるからの萩のした露

秋萩のかつちる花のした葉よりたかいつかてき色かはるらん

秋萩はうつりにけりなみや人の袖つき衣色かはるまて

をれは又衣手匂ふこ萩原かならす旅のしるしならねと

萩か花さかりをみれは秋のゝにたゝおりからのにしき成けり

荻

おきの葉に風まつ程の夕暮をなとつれかへて人のとへかし

荻のはにむかしはかゝる風もなし老はいかなる夕なるらむ

おきのはに秋風ふかぬ時たにもこほれならはぬ袖の露かは

いにしへはおとろかされし荻のはに吹くる風をね覺にそまつ

荻のはのそよとはつけそ我ために秋はかなしき夕暮の聲

なとそよくあしへの荻のそれとなく吹まかひたるわかの浦風

我宿に荻のはならは音せんとたのめかほなる秋の夕かせ

薄

旅人のいる野のすゝきほに出て袖の數そふ秋風そふく

秋のゝのはつほのすゝきあさな〳〵花のまくらに結ふ白露

人とはてふるき籬の花すゝきまねきなれにし秋や忘ぬ

花薄うへてたにみんまれけとも人こぬ宿になくさめにて

ほのかなるをちかた人の袖見えて秋風なひく花すゝきかな

見わたせはおはなかたよりさゝ波やなかたの原に秋風そ吹

はつお花袖の中にや秋かせのいるのゝすゝき人まねくらん

虫

日暮れは野もせの草にをく露の數よりしけき松虫の聲
きり／＼すなく聲每に身にしむはいかにきゝなすね覺なる覽
あさちはら松虫のねもなきかれて夜さむの霜そむすほゝれ行
きり／＼す思ふ心をいかにともたかひにしらてなきあかす哉
あしかきのま近き程のきり／＼す思やなそといかてとはまし
いへはえに何を思ひのよもすからなきにのみ鳴きり／＼す哉
露をさむみしつくもあまる秋草になきこほれたる虫の聲かな

鹿

をしか鳴外山のすそのはゝそ原色にいててや妻を戀ふらん
しら露をならしの岡のさねかつら分くる鹿や涙そふらむ
高砂の尾上の霧に立鹿もさそなきぬへき秋のゆふ暮
小倉山秋はならひと鳴鹿をいつともわかぬ涙にそきく
秋の野のお花か露を涙にてしほるゝ鹿の妻やつれなき
日の暮にいはたのをのをゆきしかはさを鹿なきつ妻そ戀らし
妻よふはしのひやすると思ひしにさもあらはなる鹿の聲かな

初鴈

ゆく方もさためぬ夜半のむら雲にさわたる秋の初鴈の聲
山本の雲のしたおひなかき夜にいくむすひして鴈もきぬらん
夜やさむき友さそひくる初かりのかはすつはさに秋風そふく
きけはまつ涙こほるゝ秋風やはつかりかねのしるへなる覽
今よりの衣かり金秋風にたか夜さむとかなきてきぬらん
ときわかぬこしのしらねの雪を見て秋とはいかて鴈のきぬ覽
ふりくるとおもふにつけてさひしきは鴈の涙の秋の村雨

月五首

雲もなきみとりの空の夕は山いてぬよりすむ月の色かな
さしのほるいなのみなとの夕しほに光みちたる秋のよの月
久方のあまのいは戸の關もかなとまらぬ月の影をいさめむ
なく／＼も我夜深ぬとみつるかなかたふく月を袖にやとして
老ぬとて身をもなけかし在明の月もさかりの比は過にき
月影は千里も清くみつしほにみなみはれたる吹あけのはま
かはる世にもとの光のくまなきは月のかつらやふる木なる覽
さらてたに草にやつるゝ宿の月さひしかれとてよや深ぬらん
なれきつる人もまれなる（すくなきイ）世中にのこりて秋の月をみるかな
心あらは猶いかならん數ならぬ身にたにかなし秋のよの月
人ことにかはるにかはる影もなしなさけ有ける秋の月かな
秋風の露吹とめぬ庭草にむら雨過て月そのこれる
なかめきてさのみつきせぬ涙とも老てしりぬる秋のよの月
夜さむなるいく田の杜の秋風にとは〔れ〕ぬ里も月や見るらん
かさゝきのとわたる橋も白妙の初霜いそく秋の月かけ
秋風の雲吹はらふ高砂のおのへの松をいつる月かけ
くもりなき君か鏡といにしへも今をもてらす秋のよの月
身のうさのさのみはいかにまさるそと又廻りあふ月やみる覽
つかへこし秋はむそちの遠けれと雲井の月そみる心ちする
みる人の老となるてふ秋のよの月もさかりの過にけるかな
うき雲の跡なき空の秋風に山のはきよくいつる月かけ
をのつからよそなる雲の影もなしかつらき山の秋のよの月
つかへつゝとにもかくにもなれて見む君かや千代の秋の月影
めくりあふ程は雲井の秋の月みぬよしられてすめる影かな
しほかせの波かけ衣秋をへて月になれたるすまの浦人

山のはの月出かたになり行はほのみえわたる松のむらたち
久方のあまのとま屋の隙をあらみわかやとりとや月もすむ覽
秋をへてつもれは霜をはらひつゝ老にかへてもみつる月かな
秋そかくよもさえしなと思へとも雪にまかへる山のはの月
玉くしけあしきの川の瀬をはやみあけゆく月の影そなかるゝ
まちえぬは老の身にこそおなしけれをそくな出そ山のはの月
くもれとはおもはぬ物を秋のよの月に涙のなとこほる覽
むかしをはおもかはりして思へともみもわすられぬ月の影哉
ぬれてこそ月をもやとせわか袖の露をはほさし涙なりとも
さらしなは心の中の里なれは月みることに身をやとすかな

擣衣

うつ人は千里のやとにかはれともおなし聲なるあさのさ衣
しら雲のたえすかゝれる谷の戸にすめはすむとや衣うつらん
日にそへて身にしみまさる秋風によをものこさすうつ衣哉
ふきまさる秋風さむみさよ衣たれまつとてかうちはしめけん
露霜のふるさと人のから衣おなしよさむにうたぬまもなし
君はこすふけにもふけぬ今はさはうたてやれなんよはのさ衣
やまかつのきぬたのつちをおきもせすねもせて夜半に打衣哉

霧

あけ行はみちこそみゆれたかせ舟立河霧の空にきえつゝ
夕日さす山本となくゆく船のかたほいてたる秋の川きり
さしのほる日影のたかくなるまゝに空に消行みねの朝霧
朝ほらけ嵐の山はみねはれてふもとなくたる秋の川きり
横雲のたなびく空はあけはてゝ猶きりふかき秋の山もと
岩こゆる遠かた波の音はしてゆくせもみえぬ秋の川霧

深山邊の霧かくれこそさびしけれ時雨やいつく秋のなくれ

紅葉

たてぬきに時雨の雨のたる錦龍田のまみゝいまかそむらん
夕つくひうつろふ雲の雲まより光さしそふ峯のもみちは
やたひこそ霜はをくなれ三室山神そ千しほにそめもなすらん
山のはにうす霧かゝる紅葉々の色こくなしてゆくあらしかな
おほかたの時雨もまたす露霜のいま色みする神並の森
たつた姫今やこすゑのから錦なりはへ秋のいろそしくるゝ
露をぬき嵐をたてと山姫のをれる錦や秋のもみちは
時雨の雨いかにそめてかみかさ山さしも紅葉のいろをそふ覽
そめのこす木すゑもみえす立田姫宮の下ゝのよもの紅葉は
唐錦そめかけてけり棹山の梢しくるゝ秋のもみちは
色そむる木のはの里のから錦あらくなたちそすかのやま風
露さむく秋なく蟬の日くらしもあかすそみつるやまの紅葉々
今もふる立田の山のむら時雨千入の紅葉そめぬ日もなし
紅葉はの山をめくりて色つくはしくるゝあとのみゆる成けり

暮秋

さしてたになかめわひつる夕暮の秋のかたみとなるそ悲しき
いつ方も關の戸さゝぬ御代なれはさそ道ひろく秋も行らん
ゆく秋に我手向せん立田姫紅葉のぬさはしはしなかなん
なく露もなのか物からかたみとてぬれてや秋のけふ歸るらん
行秋の風につけてもまくす原かへるうらみはいふかひもなし
ゆく秋の限りをかねて定めすは今いくかをかおしみとめまし
木のはちるやとはいかにと問人のおしみをこする秋の暮かな

冬十首

初冬

今朝よりは初霜しろし淺茅原昨日の露やむすひかふらん
おしみえぬ涙の露をかたみにて袖にのこれる秋もはかなし
へたてこしよもきのかきも霜かれてあらはに冬の初をそみる
いつとてもかるゝ人目の山里は草のはらにそ冬をしりぬる
いつしかとうらかれにけり冬きぬといふはかりなる霜の下艸
あさ霜のをきてしみれは草かれのをのゝふる道冬はきにけり
冬のくるみちのしは草霜枯とおもふそやかて人目なりける

時雨

あまの原雲ゐをかけてかつらきやたかまの山は時雨ふるなり
中空に我身しくれて行雲のかたかゝりたになとなかるらん
この比のならひそかしといひなからさも時雨ける神無月哉
いまは世に我身時雨とふりはてゝ色に出へきことのはもなし
うちつけにくもりもあへす神無月冬の空ともふる時雨哉
ふりふらぬ里のありとは夕時雨むら〳〵くもる空にこそしれ
冬はきぬ時雨は袖にほしわひぬあはれいかなる神無月そも

落葉三首

秋きぬとうつろひそめしみむろ山木の葉ふるまて成にける哉
大井河秋のなこりを尋ぬれはいり江の水にしつむ紅葉々
世をは皆はてうき物といつしりて殘る枝なく木のはちるらん
木からしもいさとやさそふ足引のかなたこなたの冬の紅葉々
神無月木のはのもろき夕暮にをとらしとふる我涙かな
神なひの山の木からしふかぬ日も時雨にもろくちる紅葉哉
ちりはつる後さへあとをさためぬは嵐の末の木のはなりけり
いまよりの霜まちえたる冬のはに心よはくもちる涙かな
もみちはの秋のなこりのかた見たにわれとのこさぬ木枯の風
かみな月空さためなき浮雲のしくれぬ隙もふるこのはかな
いつちかと心もしらぬ木からしのさそはれぬらん山の紅葉は
けふは又山ちもえこそこえやられいはたの杜ちるをみるとて
槇の屋に時雨のをとのさのみやときゝ重ぬるそこのは成ける
今はゝやこのはなかれて千はやふる神なひ川に冬は來にけり

冬月

冬さむみ瀧ある山の木枯にこほるも月の光なりけり
月のころむろのやしまの明方に思ひありとや千鳥鳴らん
をきまよふ霜ふかきよの浦風に月もこほれるまのゝ入海
おもひいつるかひこそなけれ代々ふるき豐の明の冬のよの月
冬はまた木のはかくれのくまもなしあらしに氷る夜半の月影
村雲のかゝれとてしもむは玉のよわたる月のなとしくるらん
霜の夜のみ山おろしは寒けれとさもあらはあれと月をみる哉

霰

かれはてゝ霜のしたなる荻のはもくたくはかりにふる霰かな
波はみなこほりてむすふいとは川いはをこゆるは霰なりけり
吹風のあらちのたかね雪さえてやたのかれのに霰ふるなり
吹さやく深山あらしの篠のはにぬる夜すくなくふる霰かな
冬きてははつせをとめの衣手に玉とみたれてふるあられかな
うたの野やかれ柴かくれふす鳥の飛たつはかりふる霰かな
こほるゝとみるにつけてもたまらぬはいたゝの橋の霰成けり

雪三首

みなかみやいつくなるらんわき歸空よりおつるゆきのしら波

こえしとてとふ人もなし我宿のまかきも山とつもるしら雪
たちかへるみちとは見すな芳野山いりにし人の跡のしら雪
かり衣すそのになひく冬草の葉わけの露も雪はらふらし
雪となりしくれとなりて嶺わけにかゝれる雲も二むらの山
かれてより雪なしきつの浦路まてさそすみの江と月もみゆ覧
しからきの外山はかりにみし雪の里まてつもる時はきにけり
あまの原雲まもみえすふる雪のいくかともなきみよしのゝ山
しられしなとはぬな人のなさけとはわれこそみつれ庭の白雪
さらてたにそれかとまかふ山のはの有明の月にふれる白雪
あらし山ふるもつもるもひとつにて雲ゐる嶺にこほる白雪
さそはるゝ心は雪にかはられと我身ふるれは行方もなし
つもりけるかきりもしらすたか鳴のかち野の雪の冬の明ほの
さゆる夜のあらしの風にふりそめてあくる雲まにつもる白雪
いとゝ又かりにも人の跡たえてつもれは雪のふかくさのさと
さきたゝぬくゐのれたきは人に今朝とひなくれぬる庭の初雪
ふりつもるうはゝの雪の夕こりにこほりてかゝるまきの下露
たかまとのおのへの雪に跡絶てふりにし宮は人もかよはす
ふりつみてあまりさえたる雪の上はさすや朝日も影そ氷れる
ふる雪のつもるおりこそ我宿にあしふみいれて人もとひけれ
見わたせはよし野の山にみ雪ふりあはれさむけき冬の空哉

歳暮

おとろかてことしも早く暮にけり花と月とのなかめせしまに
たかしまの杣山川のいかたしはいそく年木なつみやそふらん
しはしこそよそに過ぬと思ひしか身にとまりける年の行來な
むそちあまりなくると思ひし身の上に又かへりける年の暮哉
年くるゝいなはの山のみねの松まつとや春の今かへりこん
春のくれ秋のすきしにたらひにきおしむによらて暮る年とは
はからさる八十のほかの年の暮つもるとたにも今はおほえす

戀二十首

初戀

しらせはやまた色みせぬ立田姫袖にしくれのそむることを
また青のは山のほくしもえ初て鹿まつとたにいかてしらせん
しらせてもなをつれなくはいかゝせんいはぬをとかに人や恨まし
人しれぬ戀てふ色もわかなくにおもひそむるはこゝろ成けり
入そむるしけきなさゝの露ならてまつ袖ぬらす我涙かな
なにとして思ひそめける心そと身なから身をあやしかりけれ
涙のうついそのあら／＼しらせてそくたく心の程もみすへき

忍戀

ことの葉の露もゝらさし歎つゝ人にしのふの山のかけくさ
かりにても人はしらしなあしれはふうきに年ふるしたの心は
人しれぬこゝろの空は闇なからいかてよな／＼月なみるらん
身なさらぬ心のとはん折々はなき名といかゝいひもなすへき
せく涙それもさすかにかきりあれはいつ顯れて人にとはれん
なのつから涙のゆへやしられなんゆるす枕のさても情なは
濁江のみ草かくれのうきぬなはくるしとたにもしる人はなし
いかにせん戀ははてなき陸奥の忍ふはかりにあはてやみなは
いかゝせん身にかふ計おもへ共いはぬにすくるよその月日な
歎きつゝ戀やしなまし永らへてさそとしられは後の名もおし
しるといへは心なかれてよな／＼の枕もうとく床にけるかな

せく袖にもらはうき名もたちぬへし身をもおもはぬ我涙哉
なさへての後さへ袖にあまりなはなにを涙のかくれにかせむ
難波なる入江のを船あしのはにはたかくれても戀わたるかな

不逢戀五首

なき名のみおふのうらなし徒にならぬ戀する身こそつらけれ
風あらきすさの入江の波越てあちきなきまてぬるゝ袖かな
契こそ猶かた糸のみたるともあはすはたゆな玉の緒たまき
たのめてもあたし心をおくの海のあらき磯へはよる船もなし
をく露の玉つくりえにしけるてふ芦の末葉の亂てそ思ふ
涙川まろねのうちにまろ木橋こぬうき瀬には夢もかよはす
夏草のその名もしらぬ契ゆへ袖によるへの水やまさらむ
待かぬる我袂をもしらせはや草のはにのみ秋風そふく
つれなさを身に寒きよとかこちても君にふるさぬ月を見る哉
行あひは身にかたそきの契にてあるにまかする松そ久しき
もしほやくあまの衣はよそにしてなれすつれなき人も有けり
年もへぬいなはの山のみねの松つれなき中を倚やたのまん
いつまてかうき田のもりの椎柴のしゐても人を戀わたるへき
徒に柄やはてなんたつのなくなこえのこすけむすほゝれつゝ
いかてなを戀しぬ計こふる身を人つてにたにさそときかせん
たのめつゝいふきの草のかひもなくもゆる思ひに年をふる哉
とへかしな蜑のまてかたさのみやはまつに命の永らへもせん
誰ゆへにおもふとかしるはつせめの手にまく玉のをのれ亂て
しらせはや道のゆくてのさはかりにみしを限りの命なりとも
同しえの葦刈を船をしへやしさのみはいかゝうきにこかれん
かきりあるいのちの程のつれなさも戀しなぬにそ思しらるゝ
つらさのみおもひ亂て玉の緒のたえぬ物からあふよしもなし
いたつらにたつなはかりやふしのれのならぬ思ひの煙なる覧
戀しなん後とも人はたのまれす同し世にたにつらきこゝろは
つれなくも年月つもる涙かな我ためしらぬこゝろなかさに
あやにくにねられやはする夢にもとしゐて打ふす床のさむしろ
なにの今なをのこりてかなけく覧つくしはてぬる心と思ふに
秋の野にひとりほに出る花すゝきかはすかたなき袖の露けさ
手向してゆけと戀ちの奥なれはさもそあひつの山ははるけき
前の世に我やつれなき身と成てかゝるつらさを君にみせけん
いける身のためにと人を戀るこそ只けふあすのかこと成けれ
あふことのなきもの草にをく露とおもへは袖のぬるゝ成けり
後はいさあひみぬさきのつらさ社思ひくらふる方なかりけれ
戀草をになふあふこの悲しさよかたやすにたに逢よなけれは
たちのほる煙をみせてしなのなるあさまに人を戀やわたらん

初逢戀

ゆく末のふち瀬そみえんなけきわひあひそめ川の水の白波
うらみける我心こそくやしけれこはたれなれは嬉しかるらん
月草のはなたの帯はとけそめぬかへらぬ色をたれにとはまし
たまくらに結ふすゝきのはつ尾花かはす袖さへ露けかりけり
した紐のとけてぬる夜のかれことにあかぬ契を又むすひつゝ
あひみはと思ひ續けし言のはの向へはえこそいはれさりけれ
契あらはそれまてとこそ惜みしかあふに命ののひぬへきかな

曉別戀

うしとても今はあたなるなこりかはわすれかたみの有明の月
なに故か鐘のひゝきはうかるへきかつ人をこそ人はうらみめ

きぬ〳〵の袖の涙のもろ友にやとりわかるゝ有明の月
別路のあり明の月のうき身こそたへて命はつれなかりけれ
ふかきよの鳥のそらねといひなしてつらき別を惜かれつゝ
しぬはかりおしきわかれの曉やいのちにかへし報ひなるらん
ひとつかひゆふつけ鳥もぬる物をなとあかつきの別つく覽

後朝戀

つらしともけさは誰にか語らまし見し夜の夢の現ならすは（てイ）
河霧もたゝたちわたれあふくまに君をはやらし夜は明ぬとも
曉の別にたへてけさのまもいかにいのちの暮をまつらん
きえ歸我にもあらすまとふかなあしたの霜のおき別つゝ
たのめをくことのはなくは朝露の猶この暮をなにゝまたまし
わかれつるそのおも影のあされ髪涙をかけてゆらく玉の緒
かこちよする朝のまそと思ふまに猶きぬ〳〵の人はとまらす

過不逢戀九首

なけかしよ袖のうら波立かへりおもへはうきもちきり也けり
昨日たにむかしといはゝいはれなん身のことはりの秋の夕暮
あひそめし夜半さへ月の比ならて後忍ふへきかたみたになし
おなし世に又夕暮をなけくかなこりぬうき身の心よはさは
きえねたゝ袖にくたくる露の身よ思ひいつるもこゝろ成けり
面影をこふるあまりのしるへにそ空もたよりの月はみえける
風わたるいはかけま弓いまはとてよりこし浪も引かへるらん
おもふ中遠さかりゆくかた田船なにをあふみの海といふらん
あつま屋のかやかした行わすれ水むすふ涙や猶みたるらむ
中々に心もをかぬ程みえてうらむるしもそたのみなりける
いかにせん岩間をつたふ山水のあさきちきりは末もとをらす
見せはやな袖のわかれのそのまゝに涙はかりのこゝろ[illegible]
ねられねはさてもうらみやかさならん頼む夢とてかへす衣は
芦まゆくみなとのを舟さしもはや通ひし道のさはりはつへき
しぬはかりなけくにたへていけるみや又逢事の頼みなるらん
さりとてもありしつらさにこりもせて夢の歎をいかゝ加へん
契をきてやすらひ出し槇の戸のをしあけかたの月そ忘ぬ
すゝか山たか名をたてゝ伊勢の海人の袖なれ衣ふり捨にけん
うくつらき餘所の關守みちとちてねられぬよはゝ夢も通はす
初霜のをかのかけ草かりにのみかよひし跡はやかてかれにき
あかさりしその面影のかたみともいひてかひなき山の井の水
いかにねしその夜はかりを契にて又もわたらぬ夢のうきはし
深ぬともなをいつまてかうらみけん思ひ絶たるいさよひの月
あらさらむ後の世そともいひてましありしに限る別なりせは
契しをたかいつはりにうらむらんこたへける波のすゑの松山
思ひ川わたせのいかにかはりてか又は涙の淵となるらん
又とたに契もをかす逢事はたゝそのまゝそかきりなりける
おも影をなにそ中々身にそへてみし夜の月の哀かくるらん
あはれけに人の心のうみとのみいつれし床のあれはてぬ覽
なさけしるこゝろの程もみし物をさらにや何のいはき成へき
おなしよに有てなしとやうき人をまたみぬ夢の契なるらん
くちねとてあまの捨たるたく縄のたゆるなくると思ひける哉
つらからはたゝ前のよに別なてなにのむくひをちきり[illegible]
なからへてくやしく人の戀しきはあふに[illegible]かへすや有けん
言のはも秋にはあへす移れはやかはるつらさの色をみすらん

忘　戀三首

あらはあれあらすは何のみなと川いふかひもなきあまの捨舟
我しらぬうき身のとかを歎きても人のつらさを誰にかこたん
契られは身にこそまたれ夕暮のありしにかはる秋の空かは
うつりにきつらき心の花そめはあらはにみえぬ露のをきても
なこりとて今さへくもる夕かな待しなかめはむかしなれとも
たえはてし身には歎きのこりつみてけつかたしらぬ胸の埋火
しはしかとおもひし程にあら玉の月日へたてゝとはぬ君かな
あた人のおなしつらさになりはてゝ我さへふくる山のはの月
おもひ出やあら磯波のうつせかひわれてもあひし昔かたりは
今さらに袖こそぬるれわすれ水うきなやそれと思ひいつれは
れをそなく人やとはぬと心みにいひしまゝなる夕くれの空
忘れよと我かれことの契しをたかへぬしもそはてはくやしき
いつまてか猶またれけん今こむといひしはよその夕暮の空
契をきしもとの心の跡もなしかよひたえたるよもきふの露
よそにたに思ひも出しはしたかの野守の鏡影もみえねは
うしつらしみつの濱邊による貝をたれ我ためにひろひそめ劔
玉つさの筆のすさみの跡方もしらぬ中とも成にけるかな
かはりゆく人の契りをわすれえぬ我にならひてたのみける哉
こふるまに年のへにける悲しさよみしは昔とおもひいつれは
わすれ水おなし心にたえもせてなにしかひとり袖ぬらすらん
波こさぬ末の松山そてをみよたかひのこゝろかはりやはする

恨戀

かちをたえいり江のわたをこく船のをそくも人を恨みける哉
つなてなはひけはもとすゑ我方によりこぬ船はよそのしほ風
けにも身のうけれはとてもなくさまぬ哀恨のことはりそなき
なけきわひ人をうらみぬことはりの身にあまるこそ涙成けれ
しらせはやしたはふ葛の秋風に返々もおもふこゝろを
あま人のしほやくさとの夕煙つらき心のしるへとそ見る
たゝにおりて恨みぬさまをみすれ共けふは涙のこほれぬる哉

雜二十首

曉

むかしいま思ひのこさぬ覺かなあか月はかり物わすれせて
老らくの物うき程になれる身はねさめそいたく心すみける
ふりまさる年を重ねてしのゝめのね覺さひしくよを殘しつゝ
いたつらに老のねさめの長夜はわか涙にそ鳥もなきける
鳥の音そ曉毎になれにける君につかふるみちいそくとて
あしたつの子を思ふやみにあけやらて曉深きねをや鳴らん
なきすさむ夕つけ鳥のはつ聲にまた深夜の程そしらるゝ

松

けふそみる野暮山くれ尋こしみちのおくなるたけくまの松
千里まて枝さしかはす松嶋はいつれの木よりなりはしめけん
大井河ふるきみゆきになれ〳〵し入江の松も君をまちけむ
昔とてかゝるはかりの友もなしみのゝを山の松のふる木は
つれ〳〵とあら磯波のいはねまつ年はふれとも思ひ出もなし
たれにかも身をはうれへん宿の松それも物いふをならなくに
岩に生るまことの松とみゆる哉けにも千歳のためしと思へは

竹

もゝしきや玉の砌のみかは竹君か代なかくうへやそめ劔
としたけてみかりにあひしこの河の人のなこりや岸の呉竹

呉竹の末の世遠きためしとや玉しく庭に植はしめけん
あさ日影さしさかへゆく竹の園千代にやちよな猶そかされん
呉竹の身のうきふしの數々にわか代のほとなおもひしる哉
みとりなる竹のみその〻萬代に猶もときはのかけそしけらん
呉竹のさ枝かくれの窓なれはあけてもくらき夜なのこすらん

山

君かすむ緑のな山のたきつ瀬は千代な心にさそまかすらん
きく人もみる人もなき山そうき風と月とのみちはあれとも
いかなれは花も紅葉もかつらきの山なところと契そめ劔
さか木葉のかはらぬ色に年ふりて神代ひさしきあまのかく山
思ひやる程そ久しきいにしへにあまくたりける神のかく山
思ひあらはきちのかよひち遠とも行てやすまむいもとせの山
雲よりもたかまの峯とみる物ななとしもといふかつらきの山

河

行とまるいつくなさしてかよふらんくたれはのほる淀の川船
わたりする人もあはれやまさるらんすみたかはらの春の曙
君か代は千代なつむともせり川のおなし流につきしとそ思ふ
たえすのみ新そわたる行すゑな君にとおもふ關のふち川
せきとむる宇治の川瀬のあしろ木にあまりてこゆる水の白波
わかゆつる神代も遠し玉嶋やまつらの川のむかしおもへは
大井河ゐせきの石な君かためひろひあくるは千代の數かも

橋

きゝ渡るなからの橋は朽にけり身のたゝひなる古き名そなき
かけつくるきその み坂の橋よりもいへはあやうき世な渡る歳
跡なたにさしもや人の忍はましなからのはしのむかし朽すは
きゝわたるさのゝ舟橋かひもなししらぬ昔はかけてこふれと
ふりにけるいたゝの橋の名にありとはかりをきゝわたりつゝ
いにしへにわたすやいつこ津の國の難波の橋の跡そゆかしき
なにとなくみ渡してこそつの國のなからの橋の跡もしらるれ

關

むかしよりかよひし中のあとゝめて心へたつなあしからの關
波の上はすへてきよ見かせきなれはかゝる物なき月なみる哉
旅人の衣の關のはる〳〵と都へたてゝいく日きぬらん
相坂や關の戸あくるとりの音に木のまの月の影はさしつゝ
音にきく心つくしななにとめて年ふりにけり文字の關守
故郷はかよひなれにし道そかしふはの關もりわれなとかめそ
なしなへてせはからぬ世の道なれは行來に障る關の戸もなし

旅二首

たつれ行あつまの方やそれならん山路のすゑにいつる月影
かへり見はこなたもさこそ隔らめ誰に句入代のたひ人
おなし野も枕むすはぬ草葉にや人にはうとき露もあるらし
梓弓やへのしほちにいる舟のなしてひきこすつなてくるしも
草枕あまりよふかにたちにけり鳥のはつ音も今そ鳴なる
やすらひに別て出し古郷の月はあかすそしたひきにける
都いてし日かすおもへはふしのねも麓よりこそ立のほりけめ
嶺の雲いそへの浪はかはれともななふるさとのおも影そたつ
しのはるゝ故郷人のことつてもおもひ絶たるうつの山みち
またしらぬひなのなか道行やらて里とふほとにくるゝ空哉
山ふかみまた名もしらぬ鳥の音たあけぬときゝて今そ旅行
草枕あまたゝひれなかそふれは都の遠くなりにけるかな

あはれなるいはれのいほの旅ね哉嶺のあらしのたゝこゝに吹

やとかりし里をも過る旅の空となきそ草の枕なりける

海路

こきかへり猶みてゆかん伊勢嶋やしまめくりなるあしの浦風

松かけの入海かけてしらすけのみなと吹こす秋の鹽かせ

わたの原目にみぬ風をしるへにて波ちの船のゆくもはかなし

しほ風のなるとはかりにあはち嶋そかひにみえてわたる舟人

うつ波のたよりに風やなりぬ覽ゆらのみなとをわたる舟人

明方のよさのいそまに船とめてかたふく月をうらちにそみる

月をみてとまりはせしとこき行はしらぬ波ちに夜そ明にける

山家二首

やまさとのいは井の水は年ふともすみえぬ物は我身成けり

あらはれて我すむ山のおくに又人にとはれぬいほりむすはん

月はいるむそちの坂の山きはに光なきみそすみのほりける

山人はいてたる跡の秋のいほのこれる鶴やよはに鳴らん

なにゆへか深山のいほの板ひさし久敷とはぬ人をまつらん

山里のあかつきかたにね覺してまたすみけりと月をみるかな

人間ぬ山のおくこそ世中になきおなし身と思しらるれ

たらちねの昔の跡をおもはすは松のあらしやすみうからまし

をとつるゝ筧の水のたよりにも身をまかせぬはこの世成けり

きけは猶物をそおもふをくら山うき世のほかの嶺のまつかせ

まきのやにねさめの枕そはたてゝあはれとよもの嵐をそきく

むくらさす柴のと山のしはしとてすみし住家そ年ふりにける

山陰にしけきよもきのそまつくり我すむ庵のかこひにそかる

うけかたき世にもすみかの有けりと筧の水のたよりをそ思ふ

田家

たつらなるわら屋の軒のこも簾これやあかたのしるしなる覽

我門のいなはのしたひつたひきてたみの水もる花の夕暮

深山には木のはもいまた紅葉ぬにそとものをしね色つきに覺

おりふしの民のちからの習ひとて心をつくるをたのかりいほ

露結ふかとたのいほのあれまくは風にまかせてもる人もなし

さひしさをとふ人もかな鴫の立澤田のいほの秋の夕くれ

かりをたにたてゝるそほつはかひもなし徒ならは門まもりせよ

述懐二首

もろこしもたくひやあると尋はや三たひあひみる秋のみや人

きく人も哀とおもへ老のなみたちゐにつけてやすからぬ身を

ありふれはもろこしならぬ我國も虎の口をはえやはのかるゝ

さま／＼に歎く迄こそこの世なれ思ひかへせは人もうからす

浮沈み何かはわきて歎くへき世のことはりに身をはまかせて

あらましに思ひしよりも永らへて花と月とになかめなれぬる

傳へくる庭のをしへのかたはかり跡あるにたに猶まよひつゝ

和歌の浦に老すはいかてもしほ草波のしわさもかき集めまし

さりともと我あらましに賴まれて行末しらぬ世こそおしけれ

善あしもわかぬ難波のみおつくし世の人波にあるかひそなき

思ひ殘す事も有てやいにしへのなへてのうさに袖ぬらしけん

いかにせむ波こす磯の恨みてもいさりの蜑のたくひなき身を

猶しはしいのちをおしと思ふこそ老をいとはぬこゝろ也けれ

のほるへき身にはあられと位山をしあけらるゝ心ちこそすれ

懷舊

何事をそのことのはとなけれともむかしときけは人そ戀しき

大かたのむかしは暮のいはれにて我みし世こそまつ戀しけれ
いかてかは忍ふ心のあさからむ又もあふへきむかしならねは
みし事のたゝめのまへに覺ゆるはねさめのほとの昔なりけり
うつりゆく月日につけて忍ふ哉きくにかへらぬ世々の昔を
されは我いつのさかりのありけれは心にかゝる賤のをたまき
いにしへに又あひかたき板間よりかたみの月をね覺にそみる

夢

ぬるか中に百年過しことのはも夢てふ物そまこと成ける
いにしへの雲と雨との山かけはたかあさちふの夢ちなるらん
まとろむもおなし心のみれはこそさめても夢は忘れさるらめ
みるほとをうつゝとたのむ心にそさめても夢は思ひあはする
見ても又たのむにつけてはかなきは夢にまさらぬ現なりけり
なかきよの眠の中にある身こそ夢をゆめともおもはさりけれ
なにとして枕のうへのほかまては夢てふ物の行かへるらん

神祇

色そへよ波のかすよむ住吉のはま松か枝の露のことのは
代のためにたてし内外の宮柱たかき神ちの山はうこかし
しきしまの道をすてすは住吉の神そまほらん我君の御代
やはらくるよもの光を日の本とあとをたるゝも我君のため
萬代をさしてそいのるみかさ山のとかなるへき天のしたとて
いし河やせみのを川の流れこそ今もたえせぬかものみたらし
やをよろつ影をや移す石清水くみてもしるき御代にまかせて

釋教

さとりけるもとの心のすめはこそむすへはにこれ山の井の水
にしの海みちひくしほにまかせつゝ我とはさゝぬ法のはや舟
思ひとくふかき江にこそしられけれ水のほかなる末なしとは
すまさしなこゝろの水も蓮葉のにこるえにこそ花はさきけれ
なしへつる法のしるへとしりなから心にまよふ道そかなしき
なにかそれうつらぬ影そなかりける心やすめるかゝみなる覽
わたしもりちかひの船は心せよのりかたふくる人もこそあれ

祝

やすみしる君かまもりの神なれは萬代まてと誰かいのらぬ
うみのはて山のおくまておさめしる御代にそなひく浪も嵐も
神風や内外の宮の宮柱千たひや君か御代にたつへき
鳥のおの山のいはほの宮つくり動きなき世のためしなるへし
のとかなる君かひかりをあふく哉天つ日つきの空にまかせて
千歳とはなをよの常のことのはそいかにか君か御代を祈らん
昔君の御代をいのるとする程に身にもいはひの年そかさなる

群書類從卷第百七十三

和歌部二十八 百首七

丹後守爲忠朝臣家百首

題

春

正月子日　海路霞　竹林鶯　雪中若菜　窓前梅
河岸柳　岡邊早蕨　山路櫻　閑中春雨　澤邊春駒
關路歸鴈　谷中呼子鳥　山田苗代　古砌菫菜　野外遊糸
巖上躑躅　瀧下欵冬　沼水杜若　池岸藤花　旅宿三月盡

夏

山家首夏　遠村卯花　雲間郭公　江中菖蒲　門田早苗
曉更照射　旅泊五月雨　簷簾水鷄　叢中螢火　毎夜鵜河
遠山氷室　樹陰納涼　池上蓮　林頭蟬　河邊荒和祓

秋

泉邊初秋　七夕後朝　庭萩　籬中女郎花　野徑薄
風前苅萱　雨後蘭　隣家荻　羇旅鴈　嶺上鹿
杜間紅葉　苔上露　田家霧　垣根槿　深夜駒迎
嶋邊虫　水岸菊　十三夜月　遠鄕擣衣　閏九月盡

冬

初冬時雨　橋上落葉　寒庭霜　閨上霰　松上雪
濱邊葦　曉天千鳥　谷川氷　川上水鳥　雨中網代
月前神樂　晩頭鷹狩　深山炭竈　閑居埋火　舟中除夜

戀

洩始戀　人傳戀　被返書戀　憑媒戀　詞和不會戀
卜戀　忘傷戀　契久戀　後朝隱戀　共忍戀

雜

谷風　岑雲　遺水　嶋巖　洲鶴
楢猿　神社　山寺　和琴　高麗笛
野酌　温泉　釣舟　王昭君　上陽人
楊貴妃　浦嶋子　遊女　眺望　慶賀

作者

丹後守藤原爲忠朝臣
少納言藤原忠成
加賀守藤原顯廣 改名俊成
兵庫頭源仲正

伊豆守藤原爲業
散位藤原爲盛　左近大夫　改名[illegible]
筑前權守藤原盛忠　改名爲経
源頼政

春

正朔子日　　爲忠朝臣
たちかはる千代の初の例には子日にあたる今日そひくへき
忠成
いつしかと子日の松をひきつれはけふや千年の初なるらん
顯廣
きのふまで雪ふる年の小松原ひきかへてけり春のけしきに
仲正
めつらしく春立けふの初子日ひきあはせてもいはひつる哉
爲業
のへみれは子日の松を引かへて春のけしきにけさはかすめる
爲盛
あくるより子日の松をひきそへていはひそゝむる千代の初春
盛忠
あらたまる年を待とやいつしかとけふに子日の歸るなるらむ
頼政
いつしかと年の始の今朝しもあれ子日に逢てれはかひそする

海路霞
浦つたふ衣の關の浪の上に立かされたる八重かすみかな
舟とめてあれは霞のたな引て春はあかしのうらなかりけり
あきつしま漕はなれ行浦舟はいくへか春の霞へたつる
つなてくる舟のよすからたとる哉霞こめたる浦つたひして
見渡せは八重の潮ちに春かすみ浪とゝもにも立にける哉
追風にはしるふなともほのみえてむろつの沖は霞こめたり
たえ／＼に霞棚引あけほのは浦漕舟のみえみ見えすみ
柴船はほふれのあとをたふ物を迷ひやすらん霞へたてゝ

竹林鶯
谷ちかき竹にきつきて鶯の聲ならすなりはねもやすめす
鶯も我ともとてや呉竹のしけみにきつゝたえすなくらん
呉竹にはる鶯のさえつるやあらたまりぬるしらへ成らむ
竹のはに衣かけゝむ夕暮を思ひいてゝやうくひすの啼
風吹は竹のはやしのともすりにふしやわつらふよはの鶯
いその上ふるすを出て鶯の聲ならす也竹のはやしに
鶯の朝たつ聲のきこゆなりまかきの竹にねくらしてけり
宿近き竹の林にねくらしてしのゝめことに鶯そなく
鶯の竹の中にはふしなからよをこめてなそ音せさるらん

雪中若菜
春日野もまた白妙に埋れてけふのわかなは雪そつみける
きえやらぬ雪いたゝきてみえつれと拂ひてつめる若菜也けり
雪のなをふるのゝのへの若菜をやこそのかたみにつむへかりける
はつ／＼のわかなをつむとあさるまに野原の雪は村消にけり
衣手はぬれにけらしなかすかのゝ雪かき分て若菜つむまに
衣手に雪はつもるとうち拂ひのさはのこせりつまてかへらん
わかなゆへ我こそのへに出つるをおなし心に雪そふりつむ
あされ共いくらもつまてひは暮ぬ雪とけやらぬのへの若菜は

窓前梅

匂ひくる砌の梅のひらくれは窓をもとちすはるのよな〱

軒端より散つむ梅の花みれはあつめし雪の心地こそすれ

冬のよは雪かきつめしあかりよりかはらす匂ふ花の色かな

春風にしられにけりな梅花ふかきまとにもあまる匂ひは

軒近き梅はよこえのさしくれは窓のうちまて移りかそする

窓ちかき梅のはつ花ひらくれは玉章をのみかけてよめとか

かけてよむ玉章のみそなつかしき窓に散（そ歟）くる梅の匂ひに

なつかしく砌の梅のかほるかにいとゝふのをもうかゝはぬ哉

ひちくたす窓よりにほふ梅花ねふりをさますつまにそ有ける

河岸柳

青柳のみとりやそこにうつるらむ深くもみゆるみなせかは哉

春くれは柳のいとのうちはへてきしに浪よる山川のみつ

釣のをのひく人なしとみゆるかな河邊にたれる青柳の糸

賴むかなあやうくみゆるかはたのたふれ柳も春にあへれは

かはそひの柳のいとはもとふれて浪のよるにもまかせつる哉

風吹はきしに波よる川やなきはるは絲のふかくなりけり

春のくるかたこそまつはなひきけれおなし河邊の青柳の糸

あやかはの汀の浪のなるものはきしへにたてるあをやきの糸

岡邊早蕨

春の日の長岡に出てさはらひをおりくらしてもかへりぬる哉

しめをきし春へのをかのさはらひを我より先に人やおるらむ

春ことにこかれやすらむふな岡は蕨もえいつるわたり也けり

しめ置しわかかたをかのさはらひをまつふみおるは澤の春駒

しられてやもえ出ぬらんおりにくる人に忍ひの岡のさはらひ

雨ふれともえのみまさる早蕨やきぬかさ岡のしるしなるらん

いつれをかまつはおらましきてみれはならひの岡に生る早蕨

春くれは日をへてそおる行かへり道をならしの岡のさはらひ

山路櫻

散かゝる花の梢にめをかけて日も暮にけりしかの山こえ

よしの山花さきぬれはしるしらぬ人には是やあふさかのせき

さきぬれは櫻や春のみやきもりすきゆく人をとゝめかほなる

ちりしける花をおしむとよく程に春は山路にふみところなき

たまほこのみちもゆかれぬ山櫻さけるさかりは心とまりて

枝ことに人の心をとゝめつゝ道さまたけの山さくらかな

花の色をたちなかくしそ春霞我も山路にかゝるとをしれ

花にほふ山路に我はやすらへは家路のともにすてられにけり

閑中春雨

春雨のゝきのいと水かき分てくるひともなきみやまへの里

とふ人もなきみやまへのすみかには心細くそはるさめもふる

つく〱と日をふるさとの春雨や身をしる人の涙なるらん

雨ふれはかされのしとゝそほぬれてさへつりくらす春の山里

つく〱となかむる宿に春雨のこゝろほそくもふりくらす哉

春雨の軒の雫をつく〱とさひしきやとになかめてそふる

なくさむるかたゝにあらは春雨のふるとも何か苦しかるへき

さらてたに人めもしらぬ我やとによをうちたえて春雨そふる

澤邊春駒

もえわたる野へのみとりを待程や澤邊にあさる青さきのこま

まこも草つのくみにけり津の國の澤邊に駒のいはゆなる哉

春ふかみあれゆく駒はあしはらや野澤の水にかけもとゝめす

いはえたる心おしけの春駒はたち野のさはにともよせそする
とりつなく人もかたのゝ澤にあれてたなれし駒の心ち社せれ
冬かれになつみしかとも春くれは澤への駒はてにもかゝらす
春駒のいはゆる聲そ聞ゆなるさはへのこもゝさかりなるらむ
冬なつみかけのやうにてまこも生るおまつの入江にあさる春駒

關路歸雁

おしむへき花の都をふりすてゝすゝかのせきをかへる鴈かれ
きくひとそ立とまりける白河の關路もしらすかへるかり金
雲ちよりはるかに歸るかりかれも關のしみつに影はみえけり
雲路にもなさへの關のあらませはやすくは鴈の歸らさらまし
せきもりやそらめしつらん雲井より心のまゝにかへる鴈かれ
雲井よりかへる鴈をはとゝめれとわかためかたきすまの關守
なのりしてふる里へゆく鴈かれをなとかとゝめぬすまの關守
足柄の關をもしらすれたけにもなのりちらしてかへるかり金

谷中呼子鳥

立ならふいもせの山のなかにきていつれともなくよふこ鳥哉
山高みよふかひあらしよふこ鳥谷のそこまてたれかゝよはむ
吹おろす春のあらしや寒からむかすみのそこによふこ鳥かな
おく山の谷ふところの呼子鳥うき身かくさん栖さそひいれよ
たに川の音はかりしてくる人もあらし物ゆへよふこ鳥かな
わりなしやはひろの谷のこのまよりすかたはみえて呼子鳥哉
きくひともなき物故によふこ鳥みゝなしやまの谷になく也
みれたかくなきわたる也よふこ鳥谷のを川のをとゝよむまて

山田苗代

うち山のすそのゝをたの苗代にいくらかまきしそてのこの種
をやまたのこひちにたちてえくつむと苗代水に袖ぬらしつる
なはしろのまたきに苗のいろなるはみれの精いうつる也けり
水たまるたにのゑこ〱ほり返しわりなくうなふをたの苗代
苗草を山田のをたにかりしきてそしろの室のたれはまきける
小山田のたなゐのつほに水すみぬはやたれおろせ隣濁ぬまに
山河のあたりのをたのなはしろは水をこゝろにまかせたる哉
小山田のをたの苗代みほすとてあせきるほとに日は暮にけり

苗砌菫菜

雨たにもとまらぬやとの軒にきてたれとすみれの獨さくらむ
としをへてしけりにけりなつほ菫のきの玉水あとみえぬまて
むかしへのみほのいはやをきてみれはこけの砌に菫さきけり
すみれ咲ならのみやこの跡とてはいしすへのみそ形見也ける
さかりなるすみれの花やしほるらんあめふるさとの軒の雫に
故郷ののきはのしたをきてみれはひとりすみれの花咲にけり
こけむせるたまのつみしのひまわけてひとり菫の咲にける哉
ふるさとをたつれて見れは庭もせに心なかくもすみれ生けり

野外遊糸

我のみとおもひてのへにいてつれとおなし心にあそふいと哉
はる〱と野原も雲もみとりにてみたれてあそふ糸そ隙なき
あそふいとの春のはやしにたゝよふは花の錦やはつれゆく覧
のへみれは春の日暮のおほ空に雲雀とゝもにあそふいとゆふ
思ふ事なきにやあるらし春日ゝにうらやましくも遊ふいと哉
〔以下三首闕〕

巖上躑躅

年へたるきしの岩根にねはいりて散ことかたきもちつゝし哉

有かたき物とそみゆるいは躑躅岩にはいかてねをとゝめけん

〔以下六首闕〕

瀧下欵冬

瀧津瀬の岸にみゆるやのへのまゝもとめうへてふとへの山吹

やへよりも匂ひそまさる瀧つせのたま散かゝるやまふきの花

たきつせの玉ちる水やかゝるらむ露のみしけき山ふきの花

おちかゝるたきつほに咲山ふきは口なしひたす心ちこそすれ

さきかゝるくちなし色の欵冬にいとゝをとせしをとなしの瀧

岩間より落くる瀧の散たまにひるも露をく山ふきのはな

瀧つせの岩うつ浪にあらはれてまたきやちらんやまふきの花

山ふきのかけしうつれは岩に落るたきのしら糸色そかはれる

沼水杜若

かきつはたあさかの沼に生たちていかてか深き色をならひし

いはぬまのしたの心やいかならむへたて顔なるかきつはた哉

みさひゐてなかれも出ぬ沼水をいとゝもこむるかきつはた哉

人すまぬあら（キイ）のゝぬまをたかためとかこひてさける杜若そも

春ふかみぬま江の水にかけみえて花咲にけるかきつはたかな

ますけ生るのへの沼水もらさしとさきこめてける杜若哉

かきつはたあさかのぬまに咲つれと深き色をはへたてさり皃

杜若おなしなきさに生なからみつに心をへたてつるかな

池岸藤花

はらの池の汀の藤のはつ花をいつしか波やよりてをるらん

藤のはな咲そめしよりむらさきのさゝ波そたつまのゝ池水

むらさきに匂にさりせは藤の花いけよりかゝる浪かとやみん

こち風にみつの白玉吹かけてひかりをそふるいけのふちなみ

紫にいけの藤波さきぬれはなのみ也けりみとりのゝいけ

色ことにきしに咲たつ藤波やすかたのいけのかさり成らむ

藤の花さきぬる時はいけみつにむらさきふかき浪そ立ける

ふち波の紫ふかくいひそめていけの汀にたれかいりけん

旅宿三月盡

ゆく春もおしむ我身も旅に出て心そらなるけふのくれかな

春は唯今宵のみそとみしまなるあしのかりやのたえまうき哉

をくれしと都を出しかひもなく今宵やはるにゆきわかるらん

行春を旅ねの床にやとさはやしはしかすみのたちやとまると

ゆく春のおしむ心をしらませはおなし旅ねの宿やからまし

草枕かりねのとこにしはしいらて暮行春のみそらなかめむ

つれよりもくれゆく春のおしきかな花散里に旅寢するよは

もろともに花の都はいてしかと今宵は春に別れぬるかな

夏

山家首夏

こけのうへに散つむ花をかきためて春のなこりをおしむ山里

やま近く家ゐしせすは春過てまた散やらぬ花をみましや

春とても花の色にも染さりし賤のこゝろもかへ（かたイ）むとやする

夏くれはしける草葉のあつれつゝやゝすみにくき大はらの里

をそさゝらぬさと散かふ山里は締はるとこそあやまたれけれ

みわたせはかきれ青葉になしはてゝ稚もしけき夏はきにけり

夏くれとしるしもみえす山里は衣かへすることしなけれは

いつしかとけさは夏きぬきるへきにまたはたさむし大原の里

遠村卯花

うの花の盛なりけりしのむらやゝむらにさらす布とみつるは

たつれつゝいくたの里のうの花はみるかひありて今さかり也
うの花のかきねな雪にまかへてやいそき出つるなのゝ嵐やき
むかつらのはたのかこひの卯花や賤のさらせるてつくりの布
よそにてはたちもとまらぬ白雲とうの花さける垣根をそみる
卯花のかきねつゝきのよそめにはたゝぬのかほに更科のさと
うの花のさかり也けりよそめにて白雲かゝるやまとみつるに
見渡せはとなちの里のうつき原うつきになれや花しろくみゆ

雲間郭公

なかく〳〵にきく空もなし時鳥雲路をかくるよはのしのひね
さらぬたに待となるなるに郭公雲井になきてすきぬなる哉
いつかたときゝたにわかす郭公あま雲あくるよはの一こゑ
ほとゝきすさ月の空やなつかしき雲にむつれてすきかてに鳴
雲かゝる高まの山のほとゝきすきけは心もそらになるかな
郭公さよふけかたの雲間よりそらなきわたる聲の聞ゆる
ほとゝきす雲路になけはきく人の心も空にあくかるゝ哉
時鳥聲する方の空みれは月ななかむるこゝろこそすれ

江中菖蒲

あるまゝに繁りそまさる菖蒲草なにながれ江の年をふるれに
繰返しくる人しけみみくりくるつくま江に生る菖蒲ひくとて
みくりはふ入江に生るあやめ草ひく人なしにねやなかるらん
人しれすみなと入江のあやめ草みちひるしほやけふは曳らむ
難波江にあしまさし分來る舟はあやめかりにといそく也けり
五月雨にいとゝふか江のあやめ草はつかにみゆるは末葉よる
つくま江に生る菖蒲の長きねをいつか軒にはかけてあるへき
難波江の菖蒲も今はあらしかしひかてかへらぬ人しなければ

門田早苗

うちあけて開く門田に早苗とるたこのおほくもいりぬへき哉
我宿の門田の早苗うへしよりいきゝなかはなまかせてそ見る
かりにたにくる人もなき柴の戸はたゝうへこめよ室の早わせ
富もるみつはのうみないにりよりはひいてのなたの早苗取見よ
早苗とるかとたの庵にいくしたてみなくちまつり急く賤のな
けふみれはふしたつ程になりに兒あけは門田の早苗とりてん
我門のそとものなたもけふこそはあけつる田に早苗とるすれ
さよふけはしかも社くれたゆむなよそとものなたの早苗也共

曉更照射

あか星のあまたみゆるはこのまよりともしの影のまかふ也兒
しかのたつ端山の影のこ暗さにあくるもしらす照射をそする
ともしするほくしの松もきえつきて歸るにまとふしもつ闇哉
あか星のひかるかとのみ見えつるはたかしの山のともし也兒
山端に月の入かとみゆるかな有明かたのみねのともしは
さた鹿もめたあはせてやゝみぬらん照射の影のなかみゆる哉
照射すとさやまによをそ明しつるしかも我身もめをも合せて

〔一首闕〕

旅船五月雨

五月雨にひかすつくしのまつら舟おなしとまりに猶もふる哉
五月雨にあしやの沖にとまりして物かなしかる旅の空かな
五月雨におもはぬうらに舟とめて波のうきねに袖ぬらしつる
さみたれはとまの雫に袖ぬれてあはしほとけの南のうきはや
五月雨に猶たのみてやあま舟のみのしまわの五書とまるらむ

五月雨の猶ふるとのみよる舟はふくとまこもし柄はてぬへし
五月雨にいたしもやらぬ高せ舟いくかになりぬ笘ほさすして
行やらて日をのみそふる五月雨に道のを川のかさまさりつゝ（をイ）

寢覺水鷄

うたゝねの夢そ程なく覺にけるたゝく水鷄やおとろかしつる
身のうきを思ひつられて明すよを人待かとてたゝくくひなそ
たゝく也是は水鷄のをとならんよひにそ人はとはゝとはまし
うちねふるかりそめふしもえこそせね叩く水鷄に驚かされて
こぬ人をおもひねさめの里にきてたゝく水鷄のはるかなる哉
身のうきにね覺のみする我宿をなにおとろかすよはの水鷄そ
さよふけてたゝくゝひなのはけしさにね覺ぬ人や驚きぬらん
叩くをは水鷄のくせとしりなから槇の板戸をあけぬよそなき

叢中螢火

風そよくあさちましりの菰萱にほたるとひかふ夏のゆふくれ
しけりあふ草葉を分て夏虫のいかにみたれてとひまかふらん
おほあらきのもりの下草柄ぬらしうきたのはらに螢飛かふ
風吹はひかりをみたるほたるかなさは井の草の靜ならねは
あさちはらをく白露もかくれなくすたく螢のかけにみる哉
草ふかみほたる飛かふ夕されはをはなか末に玉そちりける
夏虫のとふひの野邊にまかふかなふる五月雨に草やくつらん
【一首闕】

毎夜鵜河

篝火のみえぬよそなき大井川おなしうふねやおりのほるらむ
夏の日のくるれはともす篝火のいくよか川にかけうかふらん
うかはにはさ月のやみもなかりけりくたれはくたす舟の篝火
鵜舟さしよるは〱といくよかは淀の渡りをおりのほるらん
篝火のかけを寫して大井川うふねくたさぬよはゝあらしな
大井川う舟のたなはうちはへてよな〱瀬々を住家とそする
夜をかされとなせのかたにみゆるひはう舟にともす篝也けり
かゝり待今宵はつきぬいかにして今一せをもたなはさはかん

遠山氷室

山かたのみちをたのみて我ゆかんやきの氷室ははるか也とも
我庵のちかゝらませはひ室やますゝみにゆかぬ人なからまし
夏なからこほりをりける奥山はこのよのほかの心ちこそすれ
たには山氷室のおものうなかしてこまの足とくみやこへそ行
近からはゆきてもみましひ室山みちなかさかと人のいふらん
やまとなるさかへのひ室道とをみいかてひつきに絕す立らむ
むかしよりひつきのお物たえぬ哉ひ室の山はちかゝらねとも
なか澤のひ室は道の遠けれはけたてそなへむことをしそ思ふ

樹蔭納涼

かまふのゝひとつかしはのこかけこそ夏ももりこぬ處也けれ
あやしくもときはのもりの夕風に秋きぬとおとろかるらん
風もらすまきのうつほの苔むしろいかに山ふしふしよかる覽
けゝらなく鳥はたゝちぬ夕すゝの〔マヽ〕むくろはかけそゝろ風ふき
松原やかけのゝのへにむれゐつゝ夏をよそにも思ひぬるかな
我宿のそとものならのはかくれを夏のひるまはすみかとそする
すゝみするやなきか蔭に風吹はよりくるなつをはらふ也けり
すゝしやと木蔭を夏のすみかにて秋まてあらは紅葉をやみむ

池上蓮

色々にうかふはちすにゐる玉やまことのいけのかさり成らん

紅のいろに心そしみまさる池の蓮の花を見るにも
にこりなくいけの心やすみぬらん今そ蓮のあらはれにける
ひまもなくはすのうきはゝちかふれとなつもれ出る池の水漠
紅にふかくも見ゆる蓮かないけの心はあさしとおもふに
夕すゝみこやのいけ水風吹はゐもさたまらぬ蓮葉のつゆ
ほとちなく露はけぬれと千歳ふる龜こそやとれ池のはすはに
よとゝもにねかふ蓮をいけ水に心のまゝにすませたるかな

林頭蟬

なみたてる木々の梢に葉かくれてみゝのまもなし蟬の聲々
みねしめてにやす梢に葉かくれて空にもひゝく蟬のこゑ哉
ぬけからは木のもと毎にぬきすてゝしらすかほなる蟬の聲々
しつえをはつまさにおれるを林のかれ葉にゐてそ蟬は鳴ける
夏山のせみのこゑ〳〵いとなれや木々の梢によりあはすらむ
しけりあふ夏のみやまにこかくれて梢の蟬の聲そ絶せぬ
夏山にみちても蟬の聞ゆるは木々の梢になけは也けり
涙たてるもとのしつえやすみにくき末にのみ鳴蟬のこゑ〳〵

河邊荒和祓

いにしへのなかれ導てかはのせにちとせの命のへてかへらむ
今日ことにかもの川瀬にみそきして千歳すむへき命をそこふ
河の瀬にあさのおほぬさうちなひくけしきや神の心なるらん
みそきする今日川上ののとけきはあらふる神のなこむ也けり
神のまへみたらし川の清き瀬に幾たひあさのみそきしつらむ
川上になこしの秡してけりとやなせにしけくかゝるおほぬさ
思ふ事みなつきぬらし川の瀬に行てなこしのはらへしつれは
昔人のよくはる瀧ときゝをきてくひみな月のはらへをそする

秋

泉邊初秋

いはもる水の白糸むすふまに秋のくるをもしらてふるかな
秋きぬと岩井の水はいはね共むすふ手にてそまつしられぬる
松かけの水の白糸秋くれはむすはぬさきにかせそ涼しき
手にむすふいつみにうつる我影のうとく成行秋はきにけり
風の音に秋たちきぬとおほはらやせかゐのしみつ浅てしる哉
たつひより賤のあさなもひたすゐりむすふ泉の水のなかれに
つれよりもいつみの水の涼しきは秋のはつかせふけは也けり
涼しさは清水しつめはおとろかすにしより秋の風そつゝなる

七夕後朝

わかれ行すかたはみれと七夕の今朝の心を空にしらるゝ
七夕のせきとめかたき涙かなあくれはかへるあまの川瀬に
七夕は雲のころもをひきかへしきのふやけふは戀しかるへき
彦星のかへるあしたなわたりこしきのふの暮を思はましかは
秋のよもみしかゝりけり七夕の歸るほとなきかけを見るには
七夕のあかぬわかれのわたしもりかへる舟出は急かさいなむ
七夕の別るゝときに心あらはひともちらなんかさゝきのはし
七夕のひるの人めをつゝますは今朝いつしかと別れましやは

庭荻

庭のおもに花のにしきをゆへ敷てはたをる虫を聞ぬよそなき
立よりて誰か見さらん庭のまにゝしきなりしく秋はきの糸
かせならて露もちらさし秋萩の花のあたりはあさよあさめすな
色々の野邊の花をも見るへきによこめせさせぬ宿の秋はき
我やとにひとめ見ましや秋はきの花のひもとく盛ならすは

にはの面に露のたまぬくいとはきの吹くる風にみたるめる哉
あさ露をおきてみたれは色々の玉ぬきかくる庭のいとはき
ともすれはしからむ鹿のなきのみや野へにかはれる宿の村萩

籬中女郎花

まかきよりたはれないてそ女郎花はし近なりと人もこそみれ
生たちし籬のうちをこほれ出てたはれかゝれる女郎花かな
我ならぬ人もこそおれをみなへしこほれないてそ竹の籬に
あた人の手もやをよふと女郎花ませをは遠くのけてこそゆへ
くれ竹のませゆひかけし女郎花よのまのほとも思ひこそやれ
女郎花ませゆひかくろかひもなくあたなる風に靡きやすらん
紫におれふしなまし女郎花竹のまかきにゆひしをかすは
をみなへし籬のうちにかくせともはつれて人のみるそ侘しき

野徑薄

たひ人のたえすいくのゝ糸すゝきみたれやすらんわくる袂に
あたし野のお花をしなへ分行はこほれてかゝる露の白玉
花薄なみよるのへの夕暮はまかひそわたるこまのふりかみ
あさ露に野への草はらわけ行はお花すりして玉もそほちぬ
花すゝき風のしわさと思へとも招くのへをはすきそやられぬ
何せんにおもひもよらす花薄すきていく野の人まねくらん
かた〳〵にまねく薄の多かれは秋ののちをはゆきそかねつる
華薄まねかぬたにも秋の野はこまにまかせて過るものかは

風前苅萱

さらぬたに下葉おれ行かる萱の野分にあへるけしきいかにそ
かたよりに風にはなひく苅萱のなそしたおれのしとろ成らん
さらぬたにみたれやす成苅かやの露吹むすふこからしの風
吹かへす風なかりせは苅萱のかたはらふしはならさらまし
風吹はみやまかはらにかる萱の亂れかちなるあきの夕暮
さらぬたにしとろに見ゆる苅かやをいとゝもみたる秋の夕風
苅萱は秋の野かせのなになれや吹にまかせてなひきそめ劔
よのつねはなに苅萱の秋かせにふきかへされて亂れかちなる

雨後蘭

村雨と思ひしかともふちはかま野ことにぬれてまたも乾かす
むら雨のなこり露けきふちはかま色も匂ひも身にそしみける
藤はかましほるはかりに也にけり時雨やしつるのはらしの原
きのふこそ時雨はせしか藤袴今朝きてみれは猶そ露けき
晴わたる雨のしるしかふちはかま秋の野毎にぬれてたてるは
宮城野を今朝きてみれはふち袴よのまの雨にほころひにけり
そゝきつる雨のしわさか藤はかまうすむらさきに移ひにけり
來てみれは雨にぬれけり藤袴つゆにはかゝるけしきこそせれ

隣家荻

あるしたに音つれれとも中々に荻の葉風そしられかほなる
まとろめはまなきしの垣へたてたる荻の葉音の人おとろかす
あやなしなさりとて秋のこなたかはいさきゝいれし荻の上風
なか垣をそゝや人こそこえくなれと思へは荻の葉かせ也けり
あしかきは隔つとすれと荻のはを吹こす風のをとはかくれす
風吹はまかきのほかの荻なれとわか思ふ事はそよといふなり
おほつかな何れの宿にうへたらむ荻ふく風の近くきこゆる
荻のをとをぬしはいかにか思ふらむ隣は人のくるかとそ思ふ

羇旅鴈

もろともにみふねの山をこゆれはや空行鴈のからろをすらん

草枕かりかねの音に夢覺て露けさ增るたひころもかな
なきわたる鴈や淚をそへつらむ草の枕のいとゝつゆけき
めつらしきはつたかりかねわたる也首途うれしき旅の空かな
我ひとりたひのそらとは思へ共やとかりかれも鳴わたるなり
いそきつゝこま打むるゝたそかれに雲井はるかになのる鴈金
夕暮に宿かりかねそきこゆなる我ひとりとも思ひける哉
身をつめはたひの空なる鴈かねの啼たひことに悲しとそ思ふ

嶺上鹿

雲かゝるいふきのたけになくしかは風のつてにそ聲は聞ゆる
さ夜更て高まの山のみね高し聲もおしますをしかなく也
ふしのねのけふりのなかに鳴鹿はもえぬはかりに妻や戀しき
夕されはみねのつゝきに妻こふとたえすきこゆるもろ鹿の聲
つきよゝみさきさか山をふみ分てをさゝかみねに男鹿なく也
いかにして秋きにけりと聞つらん耳なし山の峯のさをしか
秋風や身にさむからしつくはかはその水上にをしかなくなり
妻こひて鹿そなくなる獨ねて嶺のあらしの身にやしむらん

杜間紅葉

をしなへてみな色々にみゆる哉紅葉するきやおほあらきの森
うすくこく紅葉しにけり紅の匂ひにみゆるころも手の杜
紅葉はのやみのにしきとみゆるかなしのたの杜の秋のゆふ暮
もみちするこやのおほ杜見渡せは錦に見ける心ちこそすれ
時雨するかみなひ山をみわたせはいはせか森も紅葉しにけり
秋きぬと人はつけねと紅葉するけしきの杜にしるき也けり
露霜をたてぬきにしてたつた姬錦をゝれる衣手のもり
綠なるたもとにちれはにしきかとみれは常盤のもりの紅葉々

苔上露

朝またき苔のむしろにをく露はみとりの玉をしくかとそみる
岩の上のうちたれ髮とみるほとに露をきかさる玉かつらかも
みとりなるこけちに散す白玉は秋のみそらの露のしわさか
苔のうへにをく白露のいつはりをくたくるたまと思ひける哉
やまかつのそともの庭の苔の上にあたら玉をも露のなすかな
有明の月やとれとやみねにむす苔のむしろの露のうはしき
草枕やとれる露をけさみれはこけのむしろに置そひにけり
白露も苔むす庭にをきつれはあをたましける心ちこそすれ

田家霧

いなしきやそとものをたの朝霧に鳴子ひくなる聲はかりして
やまたもるしつのさゝもの雲なきは秋霧のみそ立へたてける
あさ霧に賤のかとたを分ゆけは人をもしかとひたならすなり
夕霧にやまたもろやをたつぬれはむねともみえぬ庵也けり
ますらをかかたとも見えぬ秋霧にひたひきならすを計して
秋霧の山田の庵はたちこめてなるこひくなるをとのみそする
あし垣をへたつる霧のたえまよりわさたの庵のほのみゆる哉
霧こめていつもみえねはもる人もなき小山田と誰かみるらん

垣根槿

むくらはふ籬かしたの朝顏はみになるまてもしほれさりけり
まはらなる賤のかきねに立そひてたれうかゝふそ朝かほの花
あたらしやしほれにけりなあへなくも賤の垣ねの朝かほの花
朝顏は垣ねの竹にまとはれてうきよをえこそはなれさりけれ
八重むくらしける垣ねにわりなくも咲かゝりたる朝かほの花
あさかほのあてなる花の姿もて賤のかきねにならされにけり

たれならむ露にしほれて山かつのかきれにみゆる朝かほの花
垣ねをはへたてさりけり朝ことにあさかほみする朝かほの花

深夜駒迎

待宵もやゝすきむらのこのまよりさしつるかけやもち月の駒
逢坂に駒ひきとめて月みるとやすらふほとにさよふけぬらし
もち月の駒やいつらと待ほとにせきのむらすき影かたふきぬ
あふさかの關のこなたにさよ更てにしへよりゆく月かけの駒
更にけり關のすきはら霧晴て今そかけつるもちつきのこま
望月はよゝめとみえす道とをしなつみにけりなきりはらの駒
さよなかにみやこを出てもち月の駒あふさかの關にきにけり
月かけはいてゝはるかになりぬれと駒のをそくもあふ坂の關

嶋邊虫

泪かくる江嶋にすたく虫のねをうつしをかはや秋のかたみに
我やとのよもきのそまの心ちしてまかきの嶋にきり〳〵す鳴
秋風にをしまかいそのまつ虫はなみとゝもにや聲をたつらん
松虫のこゑのわりなく聞ゆなる小嶋かくれのいはゝさまより
なくむしの聲聞ほとに蜑人ものしまかさきはあさりせられす
波のよるうらかなしくそ聞ゆなる身をうきしまの松虫のこゑ
今こんとたれたのめけむよもすからのしまにすたく松虫の聲
あはちなるゑしまの磯に泪うてはもにすむ虫はねをそ鳴なる

水岸菊

（堤又）くきのはかまやそこにさけたとなしなとをけさに社山河の菊
そこ清みきしの八重菊かけみれは池のさゝなみをり重れけり
水とりのすたく汀の白きくをうはけの霜にまかへつるかな
ときならぬ雪のつゝみとみゆるまて池をめくりてさける白菊
大井かはとなせのたきとみるまてそきしの白きく花咲にける
みつのおもにきしの白きくうつろへは（本ノマヽ）
水にうつる影なかりせは白菊の只ひとむらとみてやゝまし
［一首闕］

十三夜月

なをえたる今宵の月の同しくは明ゆくまてもとまらましかは
ひく駒の影そふ月もみしや（か歟）ともなを今宵こそくまなかりけれ
さきまくり今ふたよをはみてすしてくまなき物は長つきの月
かそふれはもちにふつかはたられとも光は空にみてる月かな
もち月に今宵の月をくらへはやいつれか空のはれまさると
昔よりなになかれたる長月のつきすみにけりあまのかはせに
いかなれはみたぬ今宵の月影のむかしのよゝりくまなかる覽
もちをのみ盛りと見るに長月は二夜もたらてくまなかりけり

遠郷擣衣

よもすからきこゆなるかな衣うつをとはの里は近かられとも
たひねするとをちのさとに月すみてみやこ遙にころもうつ也
はるかにもきこゆなるかなさよ衣月の都にうつにやあるらん
夜もすからとをちの里にうちわたすきぬたのをとか轟のはし
ほのかにそをちのさと人あかつきの鐘とゝもにも衣うつなり
秋風や身にさむからしよもすからをちのさと人ころもうつ也
夜もすからたえすきこゆる鴈金やをちの里人ころもうつらむ
まきかへす程にやあるらんから衣とをちの里はうちたゆむ也

閏九月盡

長月のひかすをそふることしさへあかても秋のおしまるゝ哉
秋は猶つゐにかくれぬことしわかおしみえたりと思ひし物を

常よりも今宵は秋のおしきかな久しくのへにむつれならひて
長月にまたなか月はくはゝれとなたあきたらすおしき暮かな
あやにくにおしまるゝかな長月のなかひく年の秋のくれしも
あやにくにおしくも有かな長月のくはゝるとしの秋の暮さへ
なか月のくはゝるとしの秋なれと暮行としのおしくも有かな
長月のまたかさなれるとしとてもおしむ心はいやまさるなり

冬

初冬時雨

年たへてふる時雨とは思へともいつしかけさはめつらしき哉
かみな月たつたの山を過ゆけはしくれとゝもにこの葉散かふ
けふよりははゝその杜も神無月時雨はかりやしらんとすらむ
やまふしのたのむこのもと時雨して涙とまらぬ冬はきにけり
冬きぬとそらにしるかなかみな月雲もあへぬけさの時雨に
いつしかと冬の景色をみせ顔にたつやをそきとしくるめる哉
かきくらししくるゝけふのけしき社冬きに兒と空にしらるれ
さもこそは冬のはしめのさかならめいつしかもふる初時雨哉

橋上落葉

いかにしてあやふむきそのかけ橋をやすく紅葉の散渡るらん
紅葉はの散しきにけるそま山の谷のかけはしくれなゐに見ゆ
きそちにはとたえしたりといはせはやこても紅葉を人のふまぬと
水のおもに紅葉散しくうきはしをひきわたしたる錦とそみる
けたもなきいたゝの橋をいかにして木々の紅葉のちり渡る覧
紅葉ちる峯のこからし吹たては谷のかけはしにしきゝてけり
色々にしける紅葉のみたるれはわたらまおしき谷のかけはし
紅葉ちる頃はみかはのやつ橋もひとつもみえす埋もれにけり

寒庭霜

庭もせのむすふつらゝのうへにをけは本ノマヽ
庭もせにかやか枯葉はおれふして霜はかり社おきてみえけれ
故郷はこくさかもともおれふして枯葉に霜のをかぬまもなし
はたらなるあは雪よりはなか／＼に庭ひたしろにをける霜哉
庭もせに霜ふりにけりおほ鳥のはねにのみとは思はさらなむ
よもすから庭のから草風さえてにたらに今朝は霜ふりにけり
朝ぼらけさえゆく庭にをく霜をのこれるつきの影かとそみる
初霜のあさひにあへときえぬかな庭の草葉やさえわたるらん

閨上霰

いたまより霰もりくる冬のよは玉の上着をかさねてそきる
あられふる草の庵はをともせてねやのひまより玉そ散ける
とこせはきはにふのこやのいたまより枕のうへに霰たはしる
吹はらひあれたるやとはひとりねのくみれのうへに霰ふる也
もりくるいたま霰のなかりせはたまの衣をきてねましやは
いとゝしくかたしく袖そさえまさる板間まはらに霰もるやは
いたまより霰もる夜は今更にとこのさむしろしきそわつらふ
さ莚に霰もりきてたゝく也ふるやのいたのうちくたけつゝ

松上雪

いつしかとあけはまつみん白妙に雪ふりおほふはこさきの松
雪ふれは皆いはしろの結ひ松花さきにけりとけすもあらなん
ふる雪に梢はひとつ色にしてふたもとたてるたけくまの松
朝またき松のうははゝの雪はみん日影さしこはしつれもそする
ふりつもる雪高砂を見わたせは尾上の松も花さきにけり

朝またき雪ふりきてそ色かはるころもの山の松のみとりは
白雪のこゝろに千代やかなふらんふれは花さく高砂のまつ
しらさきの松の梢にむれゐるとみゆるは雪のつもるなりけり

濱邊葦

かもめゐるしらゝのはまの夕浪にまかふはあしの末葉也けり
つきもせすきえせぬ雪の白濱はなみよるあしのほすゑ也けり
ともすれは潮みつ濱の葦のねのしつみてからくおいぬへき哉
冬くれはむれゐる田鶴にしたかれていとゝしほるゝ浦の葦原
沖つかせ吹あけの濱のあしのほにまかひてみゆるきしの白浪
しほかまの煙なひかすはま風にしほれし葦のうらはそよめく
吹風になみたか濱の葦のほはそれそれとも見えわかぬかな
難波江の入江のあしのしほれはのしほれ〳〵てあと方もなし

曉天千鳥

有明の月の入しほみちにけりうらはの千鳥たちさはくなり
おもふ事あり明方の月さえてさほのかはらにちとりなく也
たまくしけふた見のうらのあけ暮にはまつたひして千鳥啼也
さよの浦に波のしらむを明ぬとや驚きかほに千とりたつなり
浪よするをしまかいそのはま風に千鳥しはなくあけくれの空
こゑしつゝ雲間ゆく也とも千鳥有明かたの月のまに〳〵
あけかたになりやしぬらんもろ聲に霜よの千鳥なきわたる也
是きけや冬になるよも限あれはあくるしるしの千鳥鳴なり

谷川氷

今朝みれはきひのなかやま風さえてほそ谷河に氷しにけり
谷川のいはもとゝろきたきつせのをとたゆるまて氷しにけり
山陰や谷のした水つらゝゐて岩うつ浪もいまはをとせす
いはまとち露ももらさす谷河のみつほすものはこほり成けり
なかれくる音もきこえすつらゝゐてみゝなし山のたにの川水
冬さむみゝねのあらしのさえくれは谷の川水こほりゐにけり
冬くれは聲もつらゝにとちられておほつかなしや谷川の水
さよふけて谷の小川そこほるなるいはこす水のをとをくる也

河上水鳥

山川の岩まのつらゝかき分てわりなくきゐるよはのをし鳥
しなか鳥ゐなの河せをみ渡せは雪ちりまかひかもめむれゐる
筏しもみなれにけらしみなれ棹さすにも鴛のさはきけもなし
水はやみ岩きりとをす山川にむれゐてすたくをしのつるきは
こほりゐて浮ねのとこのなけれはや羽風にかもの立騒くらん
山川のいはせにすたくすゝかもの聲はふりせぬ物にそ有ける
よそなからみるたにさゆる川波にいかなる鳥の浮ねしつらむ
いか計したさはくらん浪のうへにやすけにあそふ鴛のかも鳥

雨中網代

網代木にかくる篝のしめるまてけはしき夜半の村しくれかな
おもふとて宇治の河瀬の網代木にしくれの雨と日をくらす哉
ひをのよるやそうちかはのかは浪に峯うちそふる山めくり哉
時雨しぬ網代のひをに宿からんひをのよるをしまたむと思へは
村雨にぬるゝもしらす村きえはうくらにひをのよるをまつ哉
たな上の瀬々の網代によるひをを時雨にまさる波かとそみる
網代木の水にふりくる雨のあしをひまなくひをのよるかとそみる
時雨にもさはらてそくる網代木はそれにやひをのよると思へは

月前神樂

いつるよりくまなき空にむかひゐて今宵の月とほしうたふ也

面白し物のねよりも月かけにあさくらしもそすみのほりける
つきよゝみ庭火のまへの笛の音を雲のよそにもきゝわたる哉
とのもりのみひしろくせよ晴くもるおほろ月夜に榊とるみむ
からかみのかなてになれはいとゝしく照月かけの面白きかな
あまてるや神の心もとけぬらんさやけき月にさかきとる夜は
さえわたる月の光のくまなきにいとゝ庭火そしろくみえける
月かけにほしをゝりてそあそふあるあまてる神の心とるとて

晩頭鷹狩

はし鷹を今ひとよりもあはせはやたち歸るさはよるになる共
夕月夜入のゝをさゝふみしたきましろの鷹をあはせつるかな
かりくらしこゐもしられすはし鷹のうちふる鈴のをと計して
かりくらし入日とともに箸鷹を山のあなたにあはせこしつる
夕されはの守のかゝみかひそなきこゐする鷹の影しあへれは
かりくらすましろの鷹のゆく方をおふさの鈴のをとにしる哉
とやかへるま白の鷹をあはせつゝみ狩の野邊にけふも暮しつ
つかれやる聲のみそするはし鷹の行ゑも見えすゆふくれの空

深山炭竈

しつはらやひら松やまのすみかまは煙たえせて年そへにける
うらやましやくすみかまの煙たに峯たかくこそ立のほりけれ
雲まよりかすかにけふりたつた山峯のあなたに炭やくらん
雪きえぬみやまかたそのすゝくえはやくすみかまの煙也けり
おく山にやくとはきけと炭かまの煙と人にみえすやはあらぬ
見わたせは煙たつありさゝ浪やおほさゝ山のみねのすみかま
あとたえて人もかよはぬ山中にたれ炭かまのけふりたつらん
おほつかなゆくゑもしらぬおく山にたれすみかまの煙立らむ

閑居埋火

埋火にはなのきのすみをきてけり今朝ちり計あたりはるめく
夕されは雪かき集り埋火のうつもれてよをすくすころかな
埋火をみるよりほかのともそなき宿のあるしとは誰にまかせて
ともにするよはの埋火けぬるまて老のねふりそしつか也ける
うつみ火を哀とそみるよもすからさ社は我もしたにこかるれ
ひとりして物思ふやとの埋火やしたにこかるゝたくひ成らん
おきゐつゝおこしそ添る山里はうつみ火ならぬ友しなけれは
さゆるよはおきゐてこそは埋火を友にてあかせ人しなけれは

舟中歳暮

年なみはけふこゆるきといそきつゝ春をあかしの浦による哉
今宵しもこのうらに我船とめて春になる夜のあくるをそまつ
おきつ波そことをしへよ暮はつる年のとまりに我もとまらん
月日のみつみて過行はや舟のこよひとしにもをくれぬるかな
たまくしけふた見の浦に舟よせてこよひ明なは春とこそきけ
たまくしけふたみに今宵舟とめてみてこそゆかめあけん初春
ひよりあらは年をこめてと漕ゆけとつゐに今宵に成にける哉
故郷へこかれてとゆくそまを舟今宵はかりの今年とおもへは

戀

淺深戀

三わの山しらてのみこそ過つらめしるし計はけふそ見せつる
つゝめとも涙のたまのくたけつゝそてより終にもらしつる哉
なけきつゝおほくの年はすきまより今こそもらせ山のはの月
〔以下五首闕〕

人傳戀

しらせはやいろこのみそと聞しより心にそみて君をおもふと

つけそめし人さへ今はつらきかな色に出へきかたしなけれは

〔以下六首闕〕

被返書戀

思ひ河わたす丸木のはしたなくふみかへしてもあはぬ君かな

いかにしてこつたひよらん情なく谷のつき橋ふみかへしけり

玉章は我むすひめにかはられともしやと裏をみぬたひそなき

難波潟あしてにかけける玉章をみにくしとてやかへすしらなみ

玉つさをみけりと計しらるゝは我むすひめのかはるとそ思ふ

わか文にいくたひ胸をつふすらんいなと計もかきやますると

むすひめもかはらて返すたまつさにとけぬ心のほとをしる哉

〔一首闕〕

憑媒戀

さり共とわきをかく社嬉しけれこしらへえたる氣色しるしも

よとゝもにたのむ甲斐ある君ならは逢坂山へはやしるへせよ

うくひすのさへつる聲をたのめとも猶とけかたき山川の水

我かたにかみかきやりて靡けなん朝夕たのむいもかうしろみ

心をもとりもやゝるとはしたかやあはする人にまかせつる哉

玉川はみかたとのはし重ならはつれなき人のかけみさらめや

いつしかとなか人たつるかひありてみもとのかたちきくそ嬉しき

〔一首闕〕

詞和不會戀

ことよさはきら〳〵敷て宵ことにいてほしからぬ空たのめ哉

むつ言はむつましなから下紐のむすほゝれてもあかす夜半哉

いかにせんあはぬを急くつらからぬ氣色をしらぬ心とやみむ

ことのはは風にしたかふかるかやのしたれはつよき君か心か

つらからぬ人の氣色にはかられてさりともとのみ思ひける哉

つらからは思ひこりても有へきを何とてかくる（かイ）なけの言葉そ

あひみれと今まて我か世にふるはなさけにかゝる命とをしれ

〔一首闕〕

卜戀

あふ事は何ともしらす和田津海の龜のます（うイ）らにやく（きイ）とゝふ共

春風になひきぬへくやなりぬらむしめさしをきし宿のわか草

いかならん言の葉にてかあひみんと卜より卜にとはぬ日そなき

思ひかね戀しき人をえものにてとふにかなへるうらかたも哉

あふ事をとふいしかみのゆるかねはみ難き戀と空にしられぬ

うき人の心を人にとふうらにみるめなとかといふ（トイ）をこそまて

水莖のあとにとひつゝひきしかはあふてふ卜にあたりし物を

〔一首闕〕

忘偽戀

淺からす契るにつけてつらき哉まことしからぬ心とおもへは

はしたかの君かをきゑにはかられてこりすもきつゝ恨つる哉

よしさらはれたさにをやたてゝまし偽にても頼めさりきや

つらき哉あはらまかきのかくれなく我をすかしてあはぬ（はイ）心の

頼むとはなけの言葉に云なから思ふ氣色の見えはこそあらめ

たのめつゝこぬ物故に松嶋やをしまの海人の袖ぬらすらん

今更にかはる心のつらきかな契しほとはむかしならぬに

〔一首闕〕

契久戀

雛鳥のそのはくくみに頼めなきてあはてふしきに成そ悲しき

あひみんと頼めし事を松かえにいのちをかけて年そへにける

としふれはたのめといひし一ことに命をかけていきの松はら

おもふとはつみしらせてきひゝな草童遊ひのてたはふれより

しるしあれは祈りそかくる我妹子かたのめし程もすきの社に

頼むまのそのともふしの契には世に永らへはとこそいひしか

頼みつゝ經にける年はいかゝせんあはて此世にすくさすもかな

【一首闕】

後朝隱戀

戀々てよるはあふみのあさ妻に君もなきさといふはまことか

いつしかと今朝は暮をそ待へきに行衛もしらぬ歎きすへしや

あかなくにおきつるたにも有物を行衛もしらぬ道芝の露

逢見ても心の鬼をつくりてやけさしも人のかくれみのきる

あひそめのよはに心やかはる覽今朝は有かをそことしられぬ

あひみても人苦しめの癖なれはいつしかけさはなしといふ也

くやしとやいつしかいかにあはしとや又も見しとやけさはなしてふ

【一首闕】

共忍戀

しられしと君つゝむめり我も又人めはからふ程そくるしき

賤の女か花つみたむる花かたみかたみになそや人めしるらん

しのふとも我は色にや出なましかすならぬ身を思ひしらすは

なさへたる袖になみたはあまる共もらすなよ君我もつゝまん

いかはかりあはぬたえ間を恨みまし我も人めを包まさりせは

もろともに思ひしのふのすり衣きてもなかく袖そぬれける

諸ともにしけき人めをつゝむとていはぬ數のつもりぬる哉

【一首闕】

雜

谷風

なつかしく梅かほりけり鶯の谷にふくなる春のあらしに

ふなきころますらをや今本ノマヽ　谷風さむみ胸いはゆなり

やま人の柴引むすふ谷の戸をあらくもたゝく風の音哉

散ぬとも外へなやりそ色々の木の葉めくらすたにのしたかせ

宮木こる人のためには朝夕に吹谷風そうれしかりける

夜もすから身にやしむらん賤の男かねらふなしかの谷の秋風

散殘る花の匂ひのしるへには谷よりいつるあらしをそする

【一首闕】

峯雲

花の散あみたの嶺の山端にとよはた雲をかけてける哉

谷の戸に嶺より雲の立きつゝ昔の衣のうるひぬるかな

かくらくの初瀬の山は白雲の嶺に棚引なにこそ有けれ

嶺高く花やさけると見えつるは立白雲の遠目也けり

朝またき嶺の白雲立ぬれは黒髪山も名のみなりけり

ふたみ山嶺にあさゐる白雲の晴間まつてふ伊勢の海士人

白雲の立しかゝれは苔莚あをれか嶺も名のみなりけり

【一首闕】

遣水

音高きなるたき川をせきよせて(とめイ)ときはにすめる影をこそみれ

岩ふれてとゝこほり行まし水にさえてなかるゝ月の影かな

誰宿そあれたる庭に行水の心ほそくもすみわたるかな
古郷にとゆきかくゆくやり水は心くせあるひとやまかせし
君か代の久しかるへきかけ見えて長閑に澄るみかは水かな
かきなかす宿のさゝ水よもすから岩間行なる音そさやけき
昔より長閑くすめるありすかは今行すゑも絶しとそおもふ
〔一首闕〕

嶋　巖

海人の住小嶋か崎のそなれ石にたえすもかゝる沖津なみかな
松嶋の松の木陰にそはたてる岩ねのこけも年ふりにけり
鹽はひぬいまやとしまかいはかまにうちよせつ甕貝も拾ひに
沖津嶋ゆく人かたきはなれ石にやすくも鳥の立居する哉
千鳥なくみしまのいその色々ないくしほ浪のかけてそむらん
なこゝろうつ礒はのはゐに心せよとしまか崎にかゝるふなとも
松嶋のいはまに生るかたのりを浪はひけともはなれさりけり
〔一首闕〕

洲　鶴

沖のすに長閑に田鶴そあそふなる生るひさきか陰にむれゐて
あさりして洲崎に田鶴のむれゐるを風に立よる波かとそみる
雲の上に心はかりはあくかれてうきすにまよふ鶴のみなしこ
としふりてなかすにむるあしたつの夢をさますは沖津白浪
波かくる洲崎の松の陰毎にあそふなるかな田鶴の村鳥
はる〳〵とよはひなかすにゐるたつの久しき程を浪や數へん
かのみゆる洲崎に鹽のさすまゝにむれゐる田鶴の立さはく哉
〔一首闕〕

梢　猿

この山に木のみもりはむこの葉さる梢木つたふ聲きこゆなり
木すゑにてわひしらになく聲きけは物の哀のまさるなりけり
あき果てあらしにたへぬ木の葉猿梢をつたふ聲のみそする
椎柴や梢にすかる●〔一本有脱字〕くさりたえぬ山邊やよをわたるはし
なく聲の梢にのみも聞ゆれははやたかとりといふにそ有ける
むれゐつゝましらなく也聲々に端山かみねのかえの木すゑに
山彦のこたふるはかりましらなく木々の梢にえたうつりして
〔一首闕〕

社　頭

久かたのあめしの社としふりてしろし有なそもりきこえける
住吉の松のしつえにいく千代か浪のしらゆふかけてきぬらん
浦風に神さひにけり住よしの松のひまより見ゆるかたそき
なる神はいつこか社めに見えぬ雲のかくれやほこら成らむ
神のます此御社に雪ふれはゆふしてかくとみゆるさかき葉
あめの下心ひろたといはゝれてよにふる數にもらさゝらなん
きしかゝる夕日のかけにてらされて光を添るあけの玉かき
〔一首闕〕

山　寺短歌　　爲　忠

あしひきの　山寺にくる　たひことに　こゝろとまらぬ
折そなき　花のさかりは　たちそひて　散なおしきと
するほとに　山ほとゝきす　かたらへは　雲間の聲を
待かねて　心そらなる　夕されに　さやけき月の
影もいてぬ　なかめあかして　見わたせは　梢もみちて
こからしに　かれの響も　たくひつゝ　獨すまして
つく〳〵と　みたの御前に　あふき居て　おもひをにしに

かくるなりけり

朝毎にひらきてそみゆる池水の蓮にむかふ花のとほそを

かねの音に道ひかれきて山寺のこけの庭をもふむそうれしき

晩暮の鐘より外にをのつから音する物は山おろしのかせ

すまはやな嶺のしきみの花を折谷の水汲山のこ寺に

見るまゝに滿水山の瀧津瀨は心すみます物にさりけり〔ある本〕

いとゝしくあはれうちそふ山寺のいりあひの鐘の音聞ゆなり

なやみせす雨はふれとも山深み榊をさしてわれはきにけり

和　琴

開度に聲のひゝきもまさりつゝふり行まゝになかすゝかゝな

武士もきけは哀をかくといふあつまのことをいかてならはん

面白き東のことをひくなかになをうとはまを身にはしみける

逢坂の關をは越し身なれともしらへもしらぬ東ことかな

相坂のせみ丸か手をつたへてや東のしらへかきならすらん

面白き東のことにそのかみもあまのいは戸をあくとこそきけ

しらへてはまたきかれ共よそ乍らゐのみか聾とくみてしる哉

〔一首闕〕

高麗笛

こまひとにならひつたへてあやきりを心ほそくも吹たつる哉

おほつかないつれの御代にこまふえを心ほそくも吹傳へけむ

波を分いかなる風のたよりにかこまのしらへをふき傳へけん

そりことかみきのかくやのこま笛に打あはするはから鼓かも

おひとりしいしかはひとの笛の音にはやしの歌の聞ゆ成かな

聞人の身にそしみけるふきならすこまの調へは色ならねとも

吹ならすあつまあそひの笛の音やするか舞するところ成らん

〔一首闕〕

野　酌

のへに出てめくらす玉の盃に千種の花のかけそうつれる

さかつきにかけをうかへてさゝれ水心をのへに出にけるかな

諸ともにいさかたふけん山かつの園ふへにたてる桑の葉の露

篠原やさゝのくゝたちさかなにて旅ゆく人をしゐてとゝめん

櫻さく野へはたゝまくおしき哉吹春風の醉をすゝめて

おもふとちかり場の小野に圓居してさしこそかはせ玉の盃

風そよく秋の野立て朝な〳〵くみこそつくせくはの薬の露

〔一首闕〕

溫　泉

たえすわく出湯有まのあたりには冬もけぬらし霜はをけとも

なにかち[ネイ]に岩まを分て出る湯のいつくへか又わきかへるらん

なみかくる濱のあらゆは我なれや身をうみにのみ思ひ入らむ

數ならぬ身のあやしさは有馬なるいてや出湯のしるし非しな

わけてゆくさゝまの水の出そめていくよに成と知人そなき

思ふ事有馬の里に出る湯の絕す涙をわかすころかな

かた〳〵に出湯は多く聞しかとなゝくりへ祉わきてきにけれ

〔一首闕〕

釣　舟

遙々といそらかさきの波まよりたいつるあまの舟にみゆるは

葦崎の闇のなこみに引つれて興こき出る海士のつりふね

歸るさはけふりや宿のしるへなるむろのやしまの海士の釣舟

すゝきつる海士の友船さそひ出よあさける風に波もしつけし

あなしふく鳴海の沖に釣舟の浪にたゝよふ春のあけほの

よさのうみちれのとなかに漕出て涙にたゝよふあまのつり舟
雲はらふ秋の夜風に月はれて明石の浦に海士そ釣する
〔一首闕〕

王昭君

心にもあらぬ雲井にきてみれは月はかりこそかはらさりけれ
（後拾遺）唐衣うらめしかりしみやこのみきては戀しきこの里そうき
ゆきつくる月のかつらの聲のみやみしよの人に逢こゝちする
思きや墨繪に我を書なして花の姿をけたるへしとは
思きや都の方をはなれ出てひなのあたりにすまんものとは
悔しくも鏡のかけを頼みつゝ千々のこかれを盡さゝりける
なけくまに鏡のかけそかはり行こや繪にかける姿成らん
〔一首闕〕

上陽人

（新續古）いたつらにむそちの春そ過にける宮のうくひす聲はかりして
老にける身をそうらむる鶯の百囀をひとり聞にも
春の日も秋のよのまもなかゝりきいかに過にし年のむそちそ
むは玉の黑き髮なく雪ふりて空に老することそかなしき
あけ難き秋のよすから歎くかなむなしき床におきゐられつゝ
春毎にさひしき宮の鶯を獨聞つゝとしそ經にける
さらぬたに老の寢覺はさひしきに窓うつ雨の音のみそする
〔一首闕〕

楊貴妃

まほろしの傳に聞こそかなしけれ契りし事は夢ならねとも
朝夕にみれはなみたそこほれ出るなにかきとめし姿なるらん
七夕は今も替らすあふ物をその夜ちきりし事はいかにそ
まほろしの玉のかさしのしるへ社いとゝ心のまとふつまなれ
ふりにける枕のちりを見ても猶昔の野への忘られぬ哉
もろともに昔ちきりし言の葉をたゝまほろしの傳に聞かな
人つてにことのはいかて頼まゝし昔ちきりをむすひをかすは
〔一首闕〕

浦嶋子

よさの海に釣するあまをみるからに浦嶋のこか事をしそ思ふ
戀しくとかたみの筥をあけさらは再ひあはてやみなましやは
故郷のみしよにたにも替らすは戀しさのみそなけきならまし
悔しくもうら嶋の子か筥をあけて老にふたゝひかへりぬる哉
老らくを歎かさらましをしへ置し人の契りをたかへさりせは
心からなにとかへりて思ふらん身につむ年のかゝるなけきを
古郷を戀しと思ひし事よりもかへりてのちはいかゝこひしき
〔一首闕〕

遊女

（新古今）ひとりねて今宵もあけぬ誰としもたのまはこそはこぬも恨め
あけくれはゆきかふ舟にうつろひて波の上こそすみか也けれ
うきたちて宿も定めぬ蜑のこはなか〳〵よにやすみよかる覽
川の瀬に波の浮草うかれありくそのたはれめをいかゝ頼まん
それとしも妻も定めぬ海士のこはゆきゝの舟を待にそ有ける
波の上に浮れのみする蜑のこはさせる泊りをさためぬそうき
宿毎のそともに船をつなきつゝゆきゝの人をまたぬ日そなき
〔一首闕〕

眺望

たとふへき方こそなけれ松かえに雪降わたるあまのはしたて

見渡せはなにはの浦もそこすみて芦のたえ間に鷺（ちたイ）たてりけり
いつくにかたとへていはん朝なきて霞たなひく鹽竈のうら
和田の原入江暘々はる〳〵と目も及はぬは明ほのゝそら
みわたせはあのゝうら風ふく故に伊勢の濱荻なひくめるかな
はる〳〵とみれはこしまの濱へより浪立まかふ八重の鹽みち
月影の涙に入ぬと見ゆる哉にしなる山や八雲ゐるらん
〔一首闕〕

慶賀

嬉しさの身にあまりぬるけふなれはての舞足のふまん知れす
よそなりし雲井の花の色みれはことしそ春にあふ心地する
君か代はさため置てき神代よりこのころまでの年をふるまで
こゝのたひとたひに位うつりけん人もかくこそ嬉しかりけめ
はかへせすえたさしそへよ雲かゝる位の山の嶺のしゐしは
しかしかし嬉しきことのかすならはちひろの濱の眞砂也とも
たくひなきみれのあさ日の光にて位の山をのほり行かな
いにしへは身にあまりける嬉しさの今は心もをき所なし

右爲忠朝臣家百首以兩本挍正

群書類從卷第百七十四

和歌部二十九百首八

木工權頭爲忠朝臣家百首

題

櫻二十首

山中櫻　嶺上櫻　澗底櫻　旅泊櫻　野徑櫻
關路櫻　磯邊櫻　嶋上櫻　岡邊櫻　浦路櫻
瀧上櫻　林中櫻　池岸櫻　園中櫻　庭上櫻
砌頭櫻　橋下櫻　遠村櫻　隣家櫻　山寺櫻

郭公十五首

首夏郭公　人傳郭公　寢覺郭公　深夜郭公　曉郭公
朝郭公　夕郭公　雨中郭公　閑中郭公　羇旅郭公
山家郭公　夜々郭公　船中郭公　馬上郭公　晩夏郭公

月二十首

三日月　晩月　弦月　十五夜月　亭午月
伊左與非月　立待月　居待月　寢待月　廿日月
木間月　露上月　有明月　山葉月　雲間月
朧月　雨後月　水上月　閨中月　霜夜月

雪十五首

神社雪　故郷雪　行路雪　竹園雪　杜間雪
海邊雪　鹽屋雪　仙山雪　苅田雪　葦間雪
墻根雪　風前雪　簾中雪　氷上雪　車中雪

戀十五首

未通詞戀　見手跡戀　聞音戀　纔見戀　時々見戀
隱在所戀　來不會戀　逐日增戀　憑人妻戀　絕後戀
寄井戀　寄鷹戀　寄鏡戀　寄錦戀　寄糸戀

雜十五首

卯杖　蹴鞠　鬪鷄　禊祭　賀茂祭
騎射　乞巧奠　相撲節　小鷹狩　射場始
五節　臨時祭　庚申　競馬　圍碁

讀人

木工權頭爲忠　勘解由次官親隆
加賀守顯廣　兵庫頭仲正
伊豆守爲業　散位爲盛
備後守爲經　散位源賴政

櫻二十首

山中櫻　　木工權頭爲忠

消のこるみやまかくれの雪かとてたれ初花をみてすきぬらん

勘解由次官親隆

櫻花きのふの山をたつぬれはおられにけりなをのか色ゆへ

加賀守顯廣

すきてこしとやまの花と咲にけりふかき匂ひを惜みつるまに

兵庫頭仲正

吉野山はるのよらへとみえつるはたうけに花のさける成けり

伊豆守爲業

かをとめてたつねきたれは櫻花かへる山路のしるへなりけり

散位爲盛

ゆくひとにみやまのたうけしらすとてうへし櫻の花咲にけり

備後守爲經

山ふかくたつぬるかひやなからまし初花櫻にほはさりせは

散位源頼政

花ゆへに日をやくらさむ行末もすきぬる計をきやまちを

嶺上櫻

咲にけりうすくれなゐの花櫻色をよしのゝ岑のこすゑに

よしの山花咲ぬれは雪ふりておのへは猶そ冬こもりせる

ゆふつくひいるさの山のかは櫻うすくれなゐに花そかゝやく

かみ山の岑のうへなる花をみてあふかぬ人はあらしとそ思ふ

山鳥の尾上の花をことならはかけしかゝみにうつしとめはや

よそめには岑のしら雪むらきゆるかつけ（ち歟）る花のみする也けり

しら雲や岑の櫻となりぬらんかゝらぬけふも色のかはらぬ

心なし岑の櫻にひ〔さ歟〕かはれていくさかゆくもしられさりけり

澗底櫻

流れいつるみつにそありとしられける人もかよはぬ谷の櫻は

谷深み花のあたりのうれしきはしられぬ松もひとめみてけり

ゆきはれぬちとせの谷のなそ櫻いくたひ春をよそにきくらん

高根より谷の櫻を見くたせはこすゑの花そしつえ也ける

都へやいてやこさらんうくひすはなのか住家の花にむつれて

春くれはかすみの衣かされきて山ふところのふしきはなさく

いはすへる深山かたそはおりかたみ花まきあけよ谷のつし風

谷風を咲そむるよりいとふかなこれゆへちらん花そと思はむ

旅泊櫻

さらぬ木もみゆめる物を心あらは花にとも網つなかさらなむ

けふもなを思ひわつらふ舟出哉とまりは花のなからましかは

櫻花ちるをみつこと世中をおもへはたひのうきねなりけり

櫻咲ふなをかやまのすそつかた春はすきうきとまりなりけり

有馬山いなのみなとに舟よせてしなかにまかふ花をみるかな

からことにふれひきつけて見渡せはたてる櫻そ盛なりける

ふなてせはのりやなくれん高砂の尾上の花にとまるこゝろは

うきれするひかすはふとも櫻花匂ふあたりはこきないたしそ

野徑櫻

春日野にたれや散けん八重櫻おふる若木の花そかはらぬ

み狩する野邊のかすみのたえ間よりまたらにみゆるいぬ櫻哉

はる駒の霞に入ぬとみえつるは野邊の櫻の花さかりかも

雪とこそ外山の花はちりにけれすそのめくりの道もはたらに

花すゝきまねきしよりも春の野にたてる櫻そひとゝとめける

旅人よ駒なつなきそさらにたにあたしの丶への櫻ちらすな
き丶すなくかたの丶花をみるとてや櫻狩とはいひはしめけん
はる〱とくるすの小野の花櫻その蔭ならてやすむものかは

關路櫻

心とや花はちらまし吹風のは丶かりのせき春しすきすは
櫻花風をなこその關ならは散をもなとかと丶めさるへき
月影のさやけき秋にあられ共咲花春もしら川のせき
みる程にひと丶まりけりいはてた丶花にまかせよふはの關守
花とてもはもりの神はよそにみしかしはの關にさくと思へは
さえねとも人の心をと丶むめり春は關守はなにまかせよ
白川の關をは春はもらしかし花にとまらぬ人しなけれは
ちらぬ間はすきかてにせぬ「本ノマヽ」花をと丶めよ須磨の關守

磯邊櫻

散花の雪とふれはやいそなつむ海士をとめこか袖もぬるらん
櫻ちるいそへにあさる海士人は花をかつくとみゆるなりけり
風のなともいはのけしきもよる浪もあらき磯へにいかに櫻そ
總のこふさしいての磯にちりか丶る花をかつくるかひ風そ吹
散花やいそのへちふむやまふしの苔の衣のうはきなるらむ
おきつ風ふけはあら磯ゆするめり花のしつえよ浪におらるな
風吹は浪かいその櫻花ちりてそかへるうしろめたさに
吹風のあらいそ櫻散時はうすくれなゐの浪そたちける

嶋上櫻

ふく風にうとはの櫻まかせてむ散ても浪の花とさきけり
松嶋やをしまの櫻咲にけり心しておれおきつしら浪
あたにちる櫻もよ丶やすくすらんうら嶋のこかこひしかみ山
鹽風にをしまの櫻はなかとてなみのみたてもなくてちりぬる
あけはとくあしかり小ふれこき出ても丶つしまはの花櫻見む
ちりぬともみしまの櫻かきつめて春より後のかたみにもせむ
ゆきすかふ心はかりなうつす歳えしまの花の春のよそめは
おもしろき室のやしまの花櫻いかてけふりにす丶けさるらん

岡邊櫻

櫻花つ丶しのをかに咲比はいもかきなれのすかたそとみる
あきのみと思ひしかともくれなゐの花もやしほの岡と社みれ
山風をならしのをかよ心あらはあたりの花はよきてふかせよ
こかけなるわか草の上にちりか丶る花はみますなをかの春駒
心とやちらんとすらん春風をならしの岡にさけるさくらは
櫻花しのひのをかに咲ならは風にもしはしありとしらるな
花盛衣笠岡をきてみれはにしきをはれる春のあけほの
たつれくる人まちかほにかたをかのとをみにたてる花櫻かな

浦路櫻

浪よするかすみの浦に散花を櫻かひとやひとはあ（見跡）るらむ
みさこゐるよさの浦はに風吹はさくらかひよる春のあけほの
海士のすむやとの櫻に吹風をうらみてのみもすくる春かな
浪かくるへちにちりしく花のうへを心してふめ春の山ふし
みる程になかゐのうらの櫻花ちらすはかくてよをやつくさん
すきかてにころもの浦をきてみれはみきはにさける花のかけみむ
舟よするしかの浦浪しつかなれみきはの櫻ほころひに見
さ丶浪のよする浦路もみえぬまて花吹おろすしかの山かせ

瀧上櫻

水上の春は雲井にみゆる哉ちりかふ花やおほはらの瀧

水上にはなさきぬれは布引の瀧のしら糸かさまさるらし
さきかゝるしたり櫻によらはれてしつえにまかふ瀧のしら糸
雲かゝるなちのたかねに風吹ははなぬきくたす瀧のしらいと
はるかにもたきの心のみえつるはその水上のさくら也けり
水上の櫻さかりはしら雲のなかよりおつる瀧かとそ見る
ぬの引の瀧のあたりにちる花をさらしつくとや人のみるらん
あたにちる花のしたよりおちてくる瀧は雪けの水かとそみる

林中櫻

櫻花松のしけえにましるへとあたなるくせはなをらさりけり
さしかはすきゝのしけみをかきわけてまきれすにほふ花櫻哉
さゝ栗やくぬき交りのをはやしにあないふせけの花のありかや
櫻咲うしろのかたの里はやし春はむかひになり「マヽ」けるかな
かけしけきこまの林にうちむれてみれともあかぬ花櫻かな
めつらしくみれ共あかぬ松原やみとりかなかの一木さくらは
ときはきも花のこすゑとみゆる哉よもに櫻のちりしまかへは
春過てたつねやこましさきましる花もときはのはやし也けり

池岸櫻

吹風にみきはの櫻ちるときはいけの浮草はなさきにけり
さのゝいけきしの櫻に風吹て春はたまもゝ花咲にけり
いひたつるかたそにふせるはひ櫻した行水にねやうきぬらん
くつれより池のきしへの花櫻れさへあたなるものとこそみれ
かるのいけのみきはふきおろす浦風に櫻浪たつ春のあけほの
櫻花なのかかゝみにあらなくにすかたの池にうつるめるかな
岸の花ちりしまかへはみつなしの池にも浪のたつかとそ見る
散花のかけをしみれは池水のそこにもかせのふくかとそ思ふ

園中櫻

みちよへてなる桃園にいかにしてあたに櫻のたちましるらん
山かつの竹のすかきの園のうちにあたらしくてもたてる櫻か
こかこする賤かそのふの花櫻くはのたかせにしたえおらるな
みそのなるしらかは櫻ちりかゝり春のかきねに卯の花そさく
わか園の花をうしろにまかすれはちらす風こそあるし也けれ
ふみなはすそのふの櫻花ちれはすきたてり共みゆるしつのを
餘所にちることたにおしき櫻花けふはかりのに雪とふるかな
かこへともかきのすゑこす春風にそのゝ櫻をえこそかくされ

庭上櫻

ちらしてははやすくも花を庭になかて又ふきたてゝいつち行覽
櫻あさのおふとそみゆる賤のやのそともの庭の花のちりかた
宿ふりてこのした蔭にむす苔よちりつむ花をまたはちらすな
からくらやこまもかさらぬ我宿のにはもせにさくうす櫻かな
宿に咲花もときはのものならは庭もはたらにかくはちらしな
定なくはらふ風にそまかせたる花ちるほとのよはのきよめは
庭のおもにひとき櫻とおもへともやともせにこそ花は流けれ
我心にはの櫻にとまらすは春の山邊にあくかれなまし

砌頭櫻

我宿の軒端の櫻咲ぬれは花のひかくしさすかとそ見る
やまうちのみそきはにうへし櫻花かきをきしりて咲にける哉
軒近き花はこすゑをはなるともしのふにしはしなか宿りせよ
宿ちかきわかきの櫻のきすきてはすえに花の咲にける哉
いかにして春すくともとゝめましあかすみきりの花の匂を
櫻花春の嵐にのこりなくたまのつみしに散しきにけり

櫻咲軒端のあめのつたひきてかゝるしつくのなつかしきかな
しつえをはちらてひさしにさしかけて常にみきりの櫻とも哉

橋下櫻

すちかへにわたすくちきの橋の上をかたなひきにもとふ櫻哉
いはゝしの花の光をしらむとてあけぬにかへるかつらきの神
いはゝしを渡しはてよな葛城やよしのゝかひの花もおるへく
うへしより橋本さらぬなそ櫻春のくれをやまちわたるらん
いそのかみふるみのはしの櫻はなちりしかゝれは珍しきかな
みるまゝに埋れにけり花のちるこのした水にわたすいたはし
しら浪のくもてにわたすとみえつるはやつはしに散櫻也けり
あたりなる花のよそめに山川のまろ木の橋をふみそわつらふ

遠村櫻

たれかすむ宿の櫻そおほつかなかすみのまよりみゆるしら雲
をちの里かきれにさらすしら布とみゆるは花のこすゑ成けり
はる〳〵と一村みゆる白雲はたかすむ里のこすゑなるらむ
はる〳〵と錦のちはたたてゝけり四方の木末の匂ふさかりは
白雲のかゝると見ゆるやとはゝや花の盛りのよそめなりけり
はるかにそ霞にまかふ櫻花いつれの里の梢なるらん
見渡はかすみの里に住居してたれわかものと花をみるらん
あさまたき野邊の霞の絶間よりみゆる梢や櫻なるらむ

隣家櫻

散くるもめつらしき哉をそ櫻いとよそなるににほひと思へは
餘所なから春は人めのしけき哉ならひの宿の花のさかりは
花のちる宿のあたりにすむときは吹くる風をさしもいとはぬ
ちる花をとなりの人はおしむ共こなたにそはへなかのあし垣
あさゆふにゆきてみましや櫻花うつろふ宿のあたりならすは
かきこしにふきくる風をいとふ哉我身は花のあるしならねと
わかかたにみな春風のふきこしてよその木末や花のふるさと
櫻咲はるしもわかつなかひかき心してふゐしつえまて見む

山寺櫻

さきやらぬくらまの山のかは櫻春のとちめに匂ふなりけり
花をみてくるゝそらをもしらぬには入相の鐘そしるし也ける
ふもとてら年ふるむれのこけの上に岑の櫻のたれおひにけり
山かつの小てらにさけるいぬ櫻花の數とはおもほえぬかな
たえ〳〵に霞たなひくはつせ山はつかに花の木末をそ見る
よそめにて花の盛りにみし人やくもゐる寺となをはつけゝん
谷ふかみあか井の水に散花を心きよくもそなへつるかな
山寺のあか井の水にちる花やのちの世までもしつまさるへき

郭公十五首

首夏郭公

郭公また里なれぬしのひねをきゝつるのみや人にをとらぬ
夏ころもたちゐにつけてけふよりは山郭公ひとへにそまつ
うくひすのとゝめていにし郭公けふやふるすにひとりなく覽
夏ころもたつのいちとやうくひすに山郭公聲をかふらん
春かけてみやまやいてし郭公けさいつしかと初音なくなり
いつしかとまちかけかほに夏ころもたつよりきなく郭公かな
かへりにしなかこりいろのかはりにやいつしかきなく山郭公
いつの間に花をわすれて郭公まつに心のうつるなるらむ

人傳郭公

まつことはなとらし物を郭公わきていかなる宿になくらん
人はみなきくなるものを郭公そのうちにたにいらぬみそうき
もしやとそまちわたりつる郭公なきけりやさは今はたつねん
ひとつてはいなやなにせむ郭公そのふるなのりこそも聞てき
人傳にきくたにうれしほとゝきすまつ我宿にきなかましかは
よなかされたれもきゝけり郭公なとわれにしも聲おしむらん
郭公しのふるこゑをきゝつてふかへるかたにもしたひ行かな

寢寤郭公

あまたゝひたえすなるかな郭公まとろむ宵もなきやしつらん
またすしてきくとやおもふ郭公ね覺のとこの夜半の一こゑ
まとろめはやかて覺ぬるよひの間の夢はかりなく郭公かな
さよなかにぬすまはれなく郭公きゝあらはしつおいのね覺に
ね覺してきくとやしらぬ郭公しのふる聲を露もおしまぬ
夢覺て思ひふしみのさよなかに身にしむものはうなゐこか聲
またぬなをたちやはてまし郭公なく一聲にね覺さりせは
一聲に聞おとろかれさむるめのまたあひかたき郭公かな

深夜郭公

さむしろにあやめの枕そはたてゝきくも涼しきほとゝきす哉
夏の夜のふけゐの浦の郭公岩うつ浪の立かへりなけ
郭公よはになのりて過ぬれはおひつこさにそとりのねもなく
まち兼てふしなましかは足引の山ほとゝきす夢にこそ見め
しのひねの聲なつゝみそ郭公みな里人もしつまりにけり
まちかねてまとろむ程に郭公たゝにもやまず驚かす也
聞ほとにねになるかひもふきさしてときなたかふる郭公哉

[一首脱歟]

曉郭公

あかほしのかけをともにて山の端を夜ふかく出る郭公かな
郭公なかれはいかにともしくもまたれぬきしのはなとすく也
しのひつまおきゆく空に郭公なこりおほくもなきわたるかな
あかつきに鳴のもゝはゝかくなれと山ほとゝきす一聲もせす
郭公きゝもわかれてすきぬなり八こゑの鳥の聲のまきれに
郭公いつかたとたに聞わかすのてらのとらのかいのまきれに
かつらきの神ならなくに郭公あけぬさきにといつちゆくらむ
さなしかのかへりいるさの山きはに立なから聞ほとゝきす哉

朝郭公

きえやらぬなさゝかみれの露分て聲ぬれ色になく郭公
郭公かほつくりするわきもこかれなきの髮のうちたれてなけ
まちあかす我なはしらて郭公いかなる里にあさいしつらん
郭公なか（くイ）こゑいかてかけとめむあさとり山にあまかまへして
あさか山まはゆけれはや郭公木の下かけにきつゝなくらん
郭公いかなる里にねくらしてあくれはかへる聲きこゆらん
みねつゝきあさゐる雲にまつはれてみやま立出ぬ郭公哉
郭公はなたち花の朝露におは打ぬらし今そなくなる

夕郭公

とりはみなねくらにかへるときなれとひとりやすらふ郭公哉
おほつかなくらふの山の夕闇にたとらてきなく郭公かな
もろ友にゆふすゝみせむ郭公しはしかたらへ森の木すゑに
思はすにときのとりこそきなくなれよなうみはつる湊入江に
この里の花橘にねくらしていつちすきぬるほとゝきすそも
心すむ山も入相の鐘の音に山郭公聲あはすなり
郭公夕すゝみする松かけにまつかひありてきなくなるかな

郭公入相のかねに打ませて心ほそくもなき渡るかな

雨中郭公

さみたれにしと〱とみてややみなまし郭公てふ聲なかりせは
こよひたにのきのしつくも心せよ山郭公さたかにやきく
郭公かたらふ聲とおもはゝやたえすをとするのきのしつくを
郭公をのかうはけに雨をきてひまなく聲をもらすころかな
なきてゆく聲こそあかれ郭公あまやとりせんこかけをしへよ
この里にあまやとりせよ郭公しほゝにぬれていつちゆくらん
五月雨に聲ふりたてゝ郭公すゝかの山をなきわたるなり
雨ふれとひまなきやとは郭公聲はかりこそもり聞ゆなれ

閑中郭公

たれにかはきけ共いはむ郭公あたりにみゆるひとしなけれは
つれ〱のなくさみにせし郭公それたに今はをとつれもせす
みちもなくあれゆくほとの橘にむかしのねなる郭公かな
山ふかみひとりすみかのうはそくは郭公とやことはかたらふ
あはれとやすきかてみえし郭公ひとりなかめの里になくらん
たつれくる人なきやとは郭公かたらふ聲そ友となりける
聲すへきとりたにもなきみやまへにあはれにきなく郭公哉
つく〱ときゝをらましや郭公よにいそかしき我身なりせは

羇旅郭公

つたひゆくこしのほけちのけはしきにかけりてすくる郭公哉
郭公まつよりほかのことなくて草の枕にいくよへぬらむ
しらさりしあたちの原のかりねにも聲なつかしき郭公哉
あさたちにこまのにくらをいそき置てきゝおほせつる郭公哉
郭公なくねを露にことよせて草の枕になきて聞はや
ほとゝきすみやこの聲にかはらねと旅の空にはいとゝなつかし
草枕かりねの床も郭公都になきし聲はかはらす
なきくたれふしの高根の郭公すそのゝいほはきゝもをよはす

山家郭公

あたにゆふしつの竹かきあはれつゝまはらにきなく郭公哉
郭公やまかたつけていへゐせしもとの心はなれきかんとて
みやこにはまたも鳴らん郭公とやまのいほにかれすかたらん
はなひろふかきのしたえに郭公しつの屋ちかく聲ならす也
都へといそくなるかな郭公しはのあみ戸にしはしとまらて
郭公かたらふ聲にはかられてかへりもやらすみやまへのさと
郭公たつれぬ聲をきくのみや山里にすむしるしなるらん
郭公なきかなふなるこれそこの山さとへこしわれかかれこと

夜々郭公

ふえ竹にきつつなくなる郭公夜はかはれともねこそかはられ
くれたけの夜毎に聞は郭公ふしよきねやの心ちこそすれ
郭公きかてぬるよもありなまし物おもふ事のなき身なりせは
あまりなりなかぬよゝにせよ郭公聞あきぬてふ人もあるかに
きかぬ夜もなきさのをかの郭公涙うちはえて聲もおします
我宿の花たちはなにれやしめてよかれすきなく郭公かな
人しれすまちしあかせは郭公きかてやむ夜のかすそすくなき
なかぬ夜をまつものならは郭公この五月にはあらしとそ思ふ

船中郭公

あなしけのいたてをはしるゆらのとにはやくもちかふ郭公哉
急くともせとのみやつき聲とめよむしあけのまつに郭公なく
けふは猶おきこき出し郭公なくやまもとのあけのほそ舟

まつら舟かちとりなをしこきそくるたまつしまはになく郭公
風もなみひよりよくとも郭公なくとまりをは出しとそおもふ
なみまわけはしる舟路にほとゝきす聲ほのかにも鳴わたる哉
なに事を思ひをかましほとゝきす聲する浦のふなてならすは
はるかなるふなちなすきそ郭公とわたる船のほつらやはなき

馬上郭公

郭公聞て心をうつしむまのなつむはかりにたつねゆくかな
すかたゆへわかれしたひの馬のうへをしらめにたくふ郭公哉
うち渡すこまのとゝろに郭公さやにもきかすせたのなかはし
こまよはみゆきもやられす郭公なくかた山によりによられて
鳴聲はひのくま川にあられ共こまとめて聞ほとゝきすかな
行さきに山郭公聲すれはいとゝ駒をもはやめつるかな
駒とめてゆきそわつらふ郭公鳴つる方をきゝもわかれは
おなしくは行かたになけ郭公かへせはこまの足もつかれを

晩夏郭公

五月雨に思ひなしてや郭公なを夕たちの空になく覽
夏くれて今そかへると郭公しのひし空につけわたる也
みなつきに猶をとつるゝ郭公かへる山路やものうかりけん
水無月におくての苗をさけひきてしてのたおさは猶そ長なく
郭公こよひはかりのなつやまになこりおほくもなきわたる哉
おしみつる聲つくすなり郭公夏のみ空をけふはかりとて
散のころ華たちはなに郭公五月をこふるれをやなくらん
思へはなもとは五月の郭公夏のすゑまていかてなくらむ

秋月二十首

三日月

をとらしと思ひかほなる夕つゝになに三日月の影くらふらん
いかにしておかみそめけん夏ひきの山より三日の月は出れと
秋來てはけふそわつかに三日月と思ふにかけのさえにける哉
頼むかな影すこけなる三ケ月のみちひゐこらん末のよこゐを
ゆふつくひいるかとすれは三日月の天津空にも出にけるかな
さらぬたにかけほのかなる三日月の心ほそくもこのまもる哉
見る程もなくてやみぬる三ケ月のいる山ちかく出やしつらん
かそふれはすゑたのもしき三日月を心ほそくもなかめける哉

晩　月

はれやらぬ天つみ空の夕月夜あるかなきかにかくゐひそゆく
あこの海の浪間に遊ふにほとりのほとなくいるは夕つくよ哉
有明のあかてあけゆく空よりもとゝめまほしき夕つくよかな
暮にけり西のひかくしとりのけよ月をいとふと人もこそみれ
とふ人もなしはら山の木間よりいかてもりくる夕つくよそも
よひの間にあるかなきかにかけろひて程もなく入夕つくよ哉
天津風ふきたゝよはす村雲にほのかにまかふゆふつくよかな
山かけに入日のかけののころかとおほめかれぬる夕つくよ哉

弦　月

あまの原まとにして入しらま弓あかつきやみにあたるころ哉
またきくる大宮人のともすれはかさしてたてるゆみはりの月
いつこよりいつかいてつる山の端にいるのみゆる弓張の月
いるたひにはつれぬものは雲かくるたかまの山の弓はりの月
弓はりの月にたなひく雲はれてかはきの里にかけそすみける
おしめともたちもとまらぬ弓はりの月は入佐の山のはそうき

たつか弓やまのはちかくみえつるは月の光のいるにそ有ける
おほ空に夕つゝたにもなかりせはかへりやせまし弓はりの月

十五夜月

見渡はすきぬるかたのなゝつきに今宵ひとよの影そまされる
かそふれは秋はなかはに成ぬれと月は今宵そみちまさりける
月は猶あきてふ中に秋といへと秋のさかりそさかりなりける
めくりくる秋のなかはゝまとかなる月のわにみつ今宵也けり
月影におもひこそやれ相坂の關路の駒は今や引らん
行秋の中にくまなくさやけしと今宵の月を誰か見さらん
秋の夜の月はいつともなけれともなかに今宵のてりまさる哉
いはしみつ流にはなついろくつのひれうちふるもみゆる月哉

亭午月

玉くしけ夜やあけかたになりぬらん月の光もみやすきにけり
なとやかくうしのかいふくときしまれ月は馬にも影のなる覽
まはらなるしつの柴やにもる月のみより過ぬる影のさやけさ
夜もすから山端とをくのけてみんかけかたよする中そらの月
くる程もまたはるかなり中そらにいてゝやすらふよひの月哉
こぬ人をうしとゆふまにてる月の影はむまにもなりにける哉
なみたてるきゝのこかけの靡かぬは空ゆく月やたかく成らん
照月はそらのなからになりにけり庭のこたちの影もなひかす

伊佐與非月

みちて出し昨日のくれの氣色にもをとらすみゆる十六夜の月
いさよひの程になりぬと思へともいつらは月の遲くかけする
やとことに思はせたりや暮はてゝしはしまたるゝ伊佐與非月
はかなくも我よのふけをしらすしていさよふ月を待わたる哉
ことならは明石の浦へおもふとて詠めにゆかむいさよひの月
あき風のふけは涙よる雲間よりやさしくみゆるいさよひの月
なにめてゝ宿ことにみし宵よりも長閑にすめるいさよひの月
み空よりいさよふ月にさそはれていたらぬくまもなき心かな

立待月

人しれすまちたてるかな足引の山よりいつるかつらおとこそ
さのみやはまち渡るへきともふさのやすらふ程にいつる月哉
露分は袖にさへこそやとりけれ旅のみそらの立待の月
あつまちやさやの中山しけくとも早ぬけいてよたちまちの月
秋の野の露分ころも打はらひ今やいつるとたちまちの月
くるゝより心みやまのはにかけていまや〳〵とたちまちの月
心みに立出てみれは岑たかみこもれる月のすみのほる哉
ひとりのみたゝすむほとに久方の月出てこそかけもつれけれ

居待月

花すりのころもそ露にぬれにける月まつ宵のたひのしはゐに
かるもかくゐ待の月もまち出つ今はいやすくれもやしなまし
山里はやまのさむしろしきゐにて居待の月をまつもさひしき
山さつかしかきのかけや隙もなきゐ待の月のいてよさりする
たはれめのならひ居待の月をみてせなか事をも語りあはする
身のうさの忘るゝことは思ふとち月まつ程のよひゐなりけり
槇のとをさしてけるこそ嬉しけれひとりゐまちのよはの月影
山かつのそとものにはにすゝみ居ていらぬさゝにも出る月哉

寢待月

あつまちのすゝのあみとをたしあけて獨すゝくもふし待の月
まとろまて今宵もあけぬ月をみてねまちの空はなのみなり鳧

槇のとにまちれにしはしまとろめはさしおとろかす山端の月

たちてゝも人なみならぬ物うさによりふしまちの月を社みれ

かすならぬ身のうき事をつく〳〵と思ひねまちの月を見る哉

うたゝねの枕にやとる月影にいてにけるとそおとろかれぬる

さらぬたに心もとなくおもひねの月をなこめそ山端の雲

まち兼てふしみの里にまとろめはさしおとろかす山のはの月

廿日月

ひとへやまはつかにみゆる月影のいつる心そかたみなせなる

すみよしの岸ならねとも山のはにはつかの月をまつそ久しき

しいしはやしけきみ山の月影は今宵ならねとはつかにそみる

こえこむとさゝらへ男いてたてや山のはつかに影のさきたつ

月影にはしにたちおふ草みれはやゝおちにけりとはを殘して

さしのほる廿日の月のかたふけは旅ゆき人もいほりたつなり

程もなくあけなん物をあやにくにはつかの月のいてやらぬ哉

よひのまに思ひしことを思ふ哉はつかの月のすみのほるまて

木間月

小夜更てまつのこまよりほのめくは月のかつらの枝の影かも

武藏野のあさちの原のこくれよりしかわけいつる秋のよの月

草ふかき人もかけせぬおほあらきの杜の下にも月そもりける

おほのかに空行月はみえ乍らこのまかそへてもらぬよそなき

もみち葉も嵐の風に散はてゝこのしたてらす秋の夜の月

もる月の影やすからすなみよるは木すゑを風の渡るなるへし

えたしけきたれその杜の木間よりほのかに月の影そもりくる

ますらをのまちきの下にたつ鹿をまたらにみするよはの月哉

露上月

みる人も心すめとやいけみつのはちすの露にやとる月かけ

なさゝ原すゑはにむすふ白露のひかりの間にもすめる月かけ

あさち原月をやとしてしら露のをのかひかりと思ひかほなる

闇ならはいかてかみまし草の葉に玉ゐる露のみかくかすをも

いかなれはひかり長閑き月影のあたなる露にやとるなるらん

あさち原うははの露のかすことにわかすもやとる月のかけ哉

かりになく野はらの露にいかにしてたま影やとす秋のよの月

月のすむなにすて山のした露やむかしの人のなみた成らん

有明月

うちとけて中空にすむ月影をまちはかりけるしのゝめそうき

月影のあく夜なけれは時わかすいつも有明とおもはましかは

秋の夜のふかきあはれは有明の月みしよりそしらしはてまし

秋くれはよかれせすみるかひしなくかたはれもてゝ有明の月

なかむれはこゝろすみます月かけにしきなきわたる有明の月

なこりなくふけゆくまゝにはれのきてくもなき空に有明の月

雲とのみみえつる月のいらぬ間は明るもえ社しられさりけれ

くらかりしよひにも出て有明のあたらひかりをあましつる哉

山葉月

高根よりひかりはかりをさきたてゝ心もとなきよひの月かな

おしめとも入ぬる月は山端の木すゑはかりやなこりなるらん

かくれぬとうき世の人にみえしかとなを山端に月はすむ也

いつるさに峯をのほりてゆく月は入山端やくたりさかなる

山端をわかすみるかもおもはゝやさてもや月のいるは惜きと

まつよひに山端出る月みれは物おもふことそなくさまれける

月により何山のはをいとはましまつもおしむも苦しからすは

秋の夜の月の出入やまのはにむかへをくるは心なりけり

雲間月

定めなくたゝよふ空の浮雲にみえかくれするあきのよの月
あまの原くものころもは重ぬれとたちのきてすむ秋のよの月
風ふけはむらたつ雲の浪のうへに流るゝ月は見えみみえすみ
あまつ風ふきもはらはぬ空なれや雲のみやこを月のみるらん
村雲のたえまよりつるたひことにめつらしくなる月のかけ哉
雲のなみわけゆく舟は秋のよのあまのとわたる月にそ有ける
むら〳〵にかたくもはしる大空は長閑き月もはやくみえけり

〔一首闕〕

朧月

入ぬるか有明かたのほのかにもかたふく月のかけのみえぬは
秋風におはななみよる野邊にきてほのめく月の影をこそみれ
うす雲にかけなおしみそ秋の月みてたにしはし心はるけん
なみかたのみつまさ雲にかけくれて朧にみゆる月のふなかけ
さやかにも月のひかりのみえぬかな天の川霧たちやこむらん
くもり夜のあるかなきかの月影やはれぬ思ひのたくひ成らん
さらぬたにうす雲かゝる月かけになをはれやらぬ秋の夕霧
夜もすから霧たつ空の月かけにさやかにみえぬあきの山里

雨後月

いとひつる雨のなこりの庭たつみさしくる月そまつ宿りける
しくれつる空のけしきを引かへてことにも月のすみのほる哉
ふきはらふあなしの風に雲はれてなこのとわたる有明の月
しくれつるくものぬれきぬぬき捨て心きよくもすめる月かな
村雨ははれわたるとも月かけは軒のしつくのなをみゆるかな
山めくりするしくるめの雲はれてなか〳〵月の影そくまなき
よひの雨に水やまされる天の川はれゆく月のなかれ渡るは
吹はらふかへしの風にかれてきし月のあま笠ぬきすてゝけり

水上月

たちとまる人もなけれといなみのゝ野中の清水月はすみけり
月かけに水のしら浪みかゝれてたまゐる玉のひかりをそます
たちもあへす川瀬にめくる水車くむかすことにやとる月かな
西へゆく水にやとれる月かけは山のはまものすみかなりけり
吉野山岩こすなみははやけれとやとれる月はなかれこそすれ
やとるめる月ものとけくすみた河心のとまるわたりなりけり
たくひなきみ空の月と思へともあふくま川にまたもすみけり
川はたのうつまく水にうくちりのめくるも見ゆる秋の夜の月

閨中月

山風にまやのかやふきうへわけてまくらにやとる夜半の月影
賤のめかふせやのねやの板まよりおしくも月のもりてすむ哉
夢覺てたまかとそ思ふ板まよりころものうへにかゝる月かけ
はし近くあさまにねやをしつらひて空行月をはれぬよはなき
板まよりもりくる月はこひつまの枕のちりのかすをみよとか
ひとりぬるねやの板まのあかれよりさしきてやとる月の影哉
あしふきの軒のつまなきあつまやはねやまて月の入そ嬉しき
月のいる閨にあけたるひきものをおろすとみするよはの浮雲

霜夜月

あきふかみ露むすふよのこからしにそらさえのほる山端の月
かれはつるよもきかそまの庭さえて霜にしもをもそふる月影
秋ふかみよな〳〵月のさえ〳〵て霜とは露やむすほゝるらん

小夜更て庭おもしろく照月にけたれにけりな庭の初霜
月かけにいろなまかへて衣てのさゆるにこそは霜としりぬれ
さえてなくささきか山の霜のうへに宿れる月の影そくまなき
しら菊の花もてはやす霜のいろに月のひかりなさしそふる哉
なく霜にけかしき庭とかくろへてきよくも月のすみわたる哉

雪十五首

神社雪

うつきゝてあさとひらきはけふなれとなをしら山の雪深き哉
いなりやま[本ノマゝ]　しらゆふかけてみゆる也けり
白妙にきふれの道はなりにけり山なみのはなも雪つもりつゝ
雪とけは社の軒にめつらしきしろかれみかくしけたるきして
みゆきふる時にしなれは久方のあまつやしろな思ひこそやれ
霜のみとおもひける哉かたそきのゆきあひのまより積る白雪
山城のいはたの杜に雪ふれはきことにかくろゆふかとそみる
あけなるなやしろといひしいつはりは雪ふる時のまこと也皃

故郷雪

たかまとの尾上のみやな今朝見れは雪ふる里となりにける哉
むかしみし宿の木すゑもうつもれて雪ふる里となりはてに皃
冬かれのあさちか原もゆきつみて昔のあとやいつくなるらん
古里はけきよし人もかよひこて雪ふみけかすあとたにもなし
むかしにもあらすなりゆく宿なれとふる白雪は色もかはらす
住馴し宿の木すゑな來てみれはゆき降てこそあはれなりけれ
あれはてゝすむ人もなき山里は雪ふるときそみしにかはらぬ
雪ふれは宿のさくらそ咲にけるならの都のふるき木すゑは

行路雪

あつまちのさやの中山ふゝきしてさゝめのころもかはす旅人
ふる雪にきそのかよひちあと絶て駒の足ともみえすなりゆく
吹雪して越のれわたし風たけしいかゝあらちの山はこゆへき
雪ふかき山路に人な尋ぬれはこまさくりこそしるへなりけり
こえて來る道もなき迄かつら木のたかまの山は雪ふりにけり
はらへともかつふる雪にたひ人の[本ノマゝ]
初雪のふまゝおしさに道すから我よりさきのあとなゆくかな
くやしくももとみし駒に乗かへてこしちの雪にまとひぬる哉

竹園雪

すゑなもみそのふの竹の雪おれに立さはくなりさきのむら鳥
我宿はうさきかそのになつらへておれふす竹の音のみそする
うれはもるしつりや繁き吳竹のふるれも雪ないたゝきてける
竹にふすれくらの雀けからしくうへはにゆきのふりにける哉
白ゆきにそとものの竹のうつもれてしたえのみこそ緑なりけれ
かつゝもるうはゝの雪やおもからんおれふしにけり園の若竹
夜なこめてふる白雪な今朝みれは竹の園生もうつもれにけり
そのにまたまのゝ林なたてなから雪のしらはなはきてける哉

杜間雪

ひにそへてふりつむゆきのかさなれはみな白妙の衣手のもり
繁りあふちえの木すゑもみえぬまてしのたの杜は雪降にけり
ゐる鷺はなのか色にやまかふらんゆるきの森にふれるしら雪
世中にこりはてぬるかふるゆきのかゝる方なきするもきの森
神まつる心ちこそすれしら雪のゆふしてかくるかしはきの杜
さきむらのたちもやらぬとみゆる哉ゆるきの森のきゝの白雪

千枝なから皆たいらにそなりにけるしのたの森に雪し積れは
友とてやゆゐきの森の雪なみてあらそふ鷺のしつらかすらん

海邊雪

岩にゐるうら□もさきになりに見しらゝの濱の雪のあしたは
沖つ風吹やる方にさそはれてゆきもとわたるものにそ有ける
ゆきふれはなみのぬくみにうらに出て男鹿の角も花そ咲ける
和田の原あまきるゆきを空にたつなみのそゝきと思ひける哉
時ならてさくらの花と見えつるはまかきの嶋の雪にそ有ける
ゐみてさくあしたちもなく雪つみていかゝはすへきよさのあま人
きの國やしらゝの濱にふる雪のきゆとも雪のとゝめなかなむ
みくま野のうらの濱ゆふ埋もれていくかされともみえぬ雪哉

鹽屋雪

鹽こしのかけひもうつむ雪間よりいかてたくもの煙たつらん
しほきつむあまのかまやに雪ふりて立煙さへしめらひにけり
ふる雪にあまの鹽やも埋もれてたくものけふりゆく方もなし
うしほゐるかなとの煙けなぬるみ雪もたらぬあまのあはらや
白たへのあまの鹽やはうつめとも煙はゆきにかくれさりけり
煙たつ鹽やのすゝけみせしとて雪のうはふきけさはしてけり
もしほ草やくとやあまのはらふらんすまのとまやに積る白雪
きえなまし鹽やのうへの雪ならはしたの思にかくからき身は

杣山雪

ふる雪に岑のともくまいりぬらし柄木の杣のまきのうつなに
みや木引くちきのそまのやま出し雪きえはやと思ひたつらん
みや木ひく音絶にけりまきもくのひはらの山や吹雪しぬらん
うちたつるたつきにひゝく杣山はひ原のうれに雪そとまらぬ
ふるゆきに杣山人もあと絶ていつらはなのゝなと聞ゆらん
わりなしや葛の杣木もとらぬ哉ひさすかみれも雪しとけれは
なやむへきけしきそみえぬみやき引泉のそまにふれるしら雪
杣人は峯のうすきなふりかくす雪なからこそまろにしてけれ

苅田雪

しめかけてかりしみとしろ冬されは雪いたゝかぬ稻茎そなき
この頃は鷸のねやもさえけらしかり田のくろに雪はふりつゝ
いたつらに雪にむもれむ爲とてや山田のひつち秋になくれし
冬かりの山田のつほゐえ社みねわかつなはても雪のしたにて
山かつのかり田も雪にうつもれてしきのふすへき方もなき哉
ひつちおふる山田のくろも雪ふれはなにはたかひて成も行哉
そこひおふる山田にたてる稻草の隱れもはてぬ今朝のあは雪
賤のなかなしねかりつゝやすみゐしくろ共みえすふれる白雪

葦間雪

分のほるなる舟みとろしあしはらにこほるゝ雪やおほくつむ覽
難波江の葦のあさはのしつれこそ下はふなしのうはき也けれ
ゆき通ふ葦まは雪にかくされてにほのふるすにみちや絶なん
横はしる葦まのかにも雪ふれはあなさむけとや急きかくるゝ
心してたなし小舟さし分てあしまのゆきのしつはとそする
いとおしくおれふす葦なあやにくにかつのわかほに積る雪哉
なにはかた葦ねにつもる白雪なむれゐるさきと思ひけるかな
ふる雪なかされて白くみゆる哉あしまにたてる鶴のけころも

墻根雪

朝日さすまきのおりとのあやかきに散ましりの雪そましゐる
かきつけし賤のまつかき花咲とみゆるは雪のふれるなりけり

冬こもるしつの垣ほに雪ふれはひたきしはまに霏いふすする
やきはやす垣ねの雪はつゐのはのもとしみにこそきえ殘けれ
人もこぬ垣ねにおふるからなつなふりつむ物は雪にそ有けれ（これ）
しつのをかうつきかきねに雪ふれは冬も花さくけしきなる哉
朝ことにやとにさへつるむら雀こしはの雪をふみなちらしそ
なをきけはとゝまるへくもなき物を籬のもとにきえぬゆき哉

風前雪

風ふけはたてぬきにふるしら糸はしつはた山の雪にそ有ける
東路やいふきおろしのはけしさにのかみの里に吹雪しにける
風はらふ木末につもるしら雪なちれはかつさく花かとそみる
このまより露ふきませて散花は風そはへするみそれなりける
水鳥のたまものやとに風さえてうははに雪のふりつもるかな
いさゝらはこの下道はよきてゆかん嵐に濡ぬしつりひまなし
おきつ風なひかす雪のかたよりな吹上のはまの浪かとそみる
雪をたに花とさかせてみるへきに猶ふきはらふこからしの風

蘆中雪

たまたれをまなくなひかすよこ風のふきしく雪やしとね成覽
あさまたきまやの板とを開たれはすゝのわれより雪そ散くる
軒せはきこやのしのやの葦すたれはつれにけりな雪もとまらす
北くちにけゐのとこまて通りくるみ雪はみつのふるふ也けり
あれはてゝ風もとまらぬたまたれのひまもる雪にぬるゝ袖哉
わりなくもこすのあらふのひま分て風に散くる雪の花かな
年へたる葦のすたれのひまをあらみもりくる雪に袖は濡つゝ
うちなひくこすのこはしにわかれきて床の前にもつもる雪哉

氷上雪

こほりみつ池のかゝみや曇るらんはれせぬ空の雪のちりゐて
はこの池（新イ）の氷の上にふる雪はかゝみにちりのいるかとそ見る
こゐも川むすふ氷のけぬか上につもる雪をやとおかさぬらん
とちわたす氷に雪のうはきしてさむけにみゆるこゐも川哉
つらゝゐるいつぬきかはにふる雪をわかけ衣とたつやみる覽
空はれてむすふつらゝにいとゝしくとかさしとてや雪積る覽
水のうへもふる白雪はつもりけりむすふ氷のひましなけれは
こやの池につらゝのやれいなかりせはいかてかせまし雪のうはふき

車中雪

ふる雪にあふ坂山のたひくるますきのしつりに袖そぬれぬる
はつかしやその荷車のうしよはみ雪つみぬれはひきそ煩らふ
山路出るしはの車に雪ふれははなの木つめる心ちこそすれ
うちはやめかさしたさまへ荷車におふ〳〵雪のふりもつむ哉
うち路ゆくあしろ車にふる雪をひをのよるかとおもひける哉
しろたへに雪ふりつみし曉のすみのくるまはいかゝ見えけん
はらへともなを白雪のふりつめはつるをのせたる車とやみる
おろせともはつれすたれの絶間よりうちまて雪のふる車哉

戀十五首

未通詞戀

いかてかとおもひなからの橋柱みこもりにてもくたしつる哉
いかさまにいひ出ましと思ふよにむせひてのみもすくす比哉
人しれす戀はみやまのたにかれやいひ傳ふへき橋たにもなし
人しれぬ歎きのえたは下もえてまた音のはのえこそめくまれ
さのみやはいはまほしくてすくへきにいさもらしてむ山川の水

思へともわかみつゝみにせかれつゝいひたに出ぬ佐野の池水

なつかしき餘所のけしきや咎とて中々えこそいひも出されね

思へともいはてしのふのすり衣心のうちにみたれぬる哉

見手跡戀

人しれぬことをかきけるからすはをみるよりうつる我心哉

水くきのうかりしあとゝみなせともいとゝ涙のなかれそふ哉

かき亂す心ちこそすれつの國のこやその人のあしてと思ふに

水莖のこ墨うす墨かきつらんてつきゆかしきなかめをそする

九重のみつのなかれにおちてこしかきのことのは露も忘れす

うすくこく皆なつかしの墨つきや白し黑しはしらぬ身なれと

はなちとりあとをほのかにみてしより立ゐに物を思ふ比かな

つらき哉たか玉章に筆なれてかきつけたりとみゐにつけても

聞音戀

夜もすから餘所に眺めし言の葉に露も思ひをかけぬまそなき

尋ぬるにありとしきけは慰みぬうれしけもなきけはひなれ共

笛につく秋の男鹿は我なれや聲するたひにこゝろまとはす

わきもこか聲はへたてすくるゝきのなとあけ難き中と成らん

これやさは我こひわたる忍ひ妻あかれやさしき人のけしきよ（にイ）

いかにせむあな美しなつかしく誰とたはるゝけしきなるらん

何事をいふとは聞もわかさりきぬれいろなりし聲は誰そも

わきもこかいろなる聲を聞からに身にしむ計物をこそおもへ

總見戀

玉かほのひまにはつれしそはかほを心かはしていかて迎へむ

いはみかた嶋かくれ行もかり舟みあへぬ程になにこかるらん

野分してまよひしこすのかさまよりいりにし心君はしるかも

ほの見えし尾花末なる妹か髮いつゆるゝかにかきそへてねむ

わきもこは嶋かくれ行舟なれやほのかに見えてすき渡るらん

夕されにさしてかけしをほのかにもみしより君を星と社思ふ〔マヽ〕

さし隱すいつへかされのひ扇のひまより見えしまみそ戀しき

猫の緒に懸りし簾のはさまよりほのみし人なれうとこそ思へ

時々見戀

涙間より稀にさしての磯におふるみるめはかりにぬるゝ袖哉

しまなひく沖のしら石しら涙のおりおりみてもぬるゝそて哉

袖の裏はかゝる涙にくちぬへしいりぬる磯のなけきするまに

人こゝろ花か紅葉かあかすのみおりおり見えて我をさはかす

釣の緒のうちはへてしもあひみねは蜑の小舟のうかれ社すれ

いかにせんさそと汀の度ことに涙よすへくもあらぬけしきを

見るたひに心はかりをつくさせて餘所の情はうれしけもなし

いかにせむあふ夜はなくて笛竹のおり節みゆる人のつらさは

隱在所戀

尋ぬれと雲にありてふ事もなしこはからくにの人にや有けん

いかにせんあふこと難き箒木のそのはらそとはしらする物を

から國や虎ふす野へにすむとたに聞て一つにみをもかへはや

我といへはとへと答へす色好むけしやうやりとも口をかためて

こひつまのいつかふせやの信濃なる園原とたにいはさりし哉

津の國の難波の事もいはしとやそこに有馬としらせぬそうき

妹か宿とへともさらにいはし水みそきをうけはそこと敎へよ

かりもらす男鹿の笛のおきよりもふかくも君かしのひける哉

來不會戀

夕鹽の涙にひかれてよりたけのれも心みてあかしつる哉

から衣よことにきては重ぬれとまたむれあはぬ物をこそ思へ
あはてやは立かへるへき関原やふせやにおふる物ならなくに
くることを心やすくて背つゝらとけすしふれき妹かしたひも
頼めをきてつまきの山のかひなしや谷の氷のうちしとけれは
うちとけて今宵あふみと思はすはなにかは更にくるもとの里
契り置て歸りしことをたのみつゝあはてもねたくしつる物哉
かつきする蜑のむすへるたく繩のくるとはすれととけぬ君哉

逐日增戀

昨日まていろはなかりし我袖をいかにそめけるかはの涙そ
なけきつゝあはてひころのふるまゝに涙の色の增り行かな
いとかくやすきにし方はこひさりしぬるよもありて夢に見えしは
我戀はきれかいもゐにひきそふるもゝかのしめの重なりそゆく
わか戀の日をふるまゝに增るとは涙の雨のいろにてそしる
しはしこそしほりもせしか今は只くちなはくちれ數ならぬ袖
いかにせんあはぬ日數のふるまゝに涙の雨のもりしまさるを
雨とふる涙にぬるゝ戀草はひにそへてこそもえまさりけれ

憑人妻戀

形見にとうるむはかりもつみし哉人にすみれの花としる〳〵
せなかなきそのひま〳〵に尋ねあひて是をいみしと何思ふ覽
やよいかに心にしのふしけからん人すむ宿のつまとみなから
人つまや秋おさめする稲葉かり頼みをかけて餘所にのみ見る
思ふ人ありその海としりなからなみの心にかけぬ日そなき
頼むへき巾をたのまて喜しくもあたなる我をあたに思はぬ
我はかり思はし物を心みにたゝかけさかれ餘所のたまくら
忍ふれとぬけつゝもくる人つまはこゝろあはせのころも也覽

絶後戀

今更にいひな出しそかつまたい泪のつゝみはむかしされにき
あふ事は絶にし物をされかつらまたいかにして苦しかるらん
ことつけてつらくもなるかあら玉の年のみとせを心みしまに
戀しさのためにをこゐなゝさへかれ昔にかへる心はよはゆふ
くろ髪のあかてわかれしいちよりに亂れて物のなけかしき哉
おもなれしむかし契しむつ言は思ひいつやといかていはまし
むかしみしふる野のさはのわすれ水何今更におもひ出らん
雲かくれあまとふ鳥のほのかにもみえすなりぬる人の戀しき

寄井戀

人こゝろいてあさましやさらし井の更にいはしと思ひし物を
我戀はいた井のしみつみさひゐて心なくみてしる人そなき
草枕やとやからましあすかゐに影見し人の影やみゆらん
たかにくむとを井の水のかけられて語るしほなる戀もする哉
つゝ井つに立むかひけるむかしけのひとの心やたくひなら南
我戀は古井におろすつるへ繩のたえぬと見えてくるそ久しき
しらせはや昔みそいろほりし井にふかき心ななとりやはする
いたつらにあはて古井の淺からす思ふこゝろをくむ人そなき

寄鷹戀

年をへてつらき心をおほ鷹のいくかへりかはみてすきぬらむ
とやかへるしらふの鷹のやかたおい戀て戀にもかゝりぬる哉
夜たかすむはやしのはしに住鳥のとけてもえれぬ戀もする哉
わきもこか心あら鷹よとりつゝかへりさすまてなつけてし哉
はし鷹のよとりにあかすますらおかいれすと人をこひ渡る哉
いかにせむかくれる鷹の見えかたくつれなき戀にさはく心を

ならせ共なな見えかたきはし鷹のはしたなきまであはぬ君哉
しはしかと思ひし程にやかたおのたかとそりぬる人ぞ戀しき

寄鏡戀

日にそへて戀をますみのます鏡かけとはそはて影とこそなれ
かゝみをはさしなく事やなからまし戀しき人の影うつりせは
答へするかけしうつらはます鏡しのふる事もかたらひてまし
我こふる人はみえこてます鏡しらぬおきなのむかひのみゐる
見るもうく鏡のかけのならましやこひに姿のかゝらさりせは
淺ましや鏡の影をみるたひにをとろへゆくは戀のしはさか
から人のいもとわかちしから鏡われても君にあはむとそ思ふ
くりかはに鏡しつめししの原のいとひめよりも袖そぬれぬる

寄錦戀

から人のところせしといふとこにしきみ難き戀もする我身哉
を車の錦のことのはをかけてふたそちへてもあふときかはや
淚川にしきをあらふ身なりせはふかきいろをもみせまし物を
からくしていとゝぬるよのさ莚にとこ錦とそあやめられける
忘らるゝみの古里へたちかへし人はにしきのころもならねと
よと共に人のつらさにからにしき色々にのみおもひをるかな
よひ毎に人にしられてから錦おりたによくはたれかあやめん
今ははや身になれなましわきもこかまもりにつゝむ錦也けり

寄絲戀

深くのみ思ひそめては年ふれとこよひはあはてあけのから糸
ふたこもりうらやまなれとしけ糸のふしにくしとやくるよりをなみ
我戀はおほ海のものこしのいとのいか計かはむすほゝれゆく
人しれぬ戀はすゝしの糸なれやよるはおきゐて露もねられぬ
秋のよもあけのいとこそくるしけれいもゝかへれは心亂れて
なつひきやわくての糸のいくそたひこひしてふ事くり返す覽
かき絶てくる人もなき白糸の思ひみたれてふる我身かな
やにさせるうるしのしたの糸なれやとくるよもなき人の心は

雜十五首

卯杖

初春のはつうの杖をたてそめて幾よになりぬかすのみやつえ
ひかけ草花のいろ〳〵むすひもてはつうの杖を祝ひつけつる
玉つはきはつうの杖にきることはやちよの坂も君こえよとか
うつえつき昔にかへる道もかなさらにわかえて春にあふへき
萬代のむらのきしもきゝり初ていろこなつえの久しかるらん
いかにして日かけの糸を取そへて千歳の卯杖たてそめにけん
幾度かしらたまつはきあらたまる春の卯杖とならんとすらん
八千代まて君かつくへき杖なれは白玉椿ゆひそへてけり

蹴鞠

しつえまてこしけき庭のはかゝりは落くる鞠のみえすも有哉
人は皆立出るものを庭まりのかゝるかたなき身をいかにせん
とにかくに春は風こそいとはるれ鞠につけても花につけても
ひれもすにかゝりのまりの枝馴て花にむつるゝ春のたはふれ
庭まりに立ならふかな花さかりこの下風はちるかおしさに
ふちとのみ思ひしかとも春くれはまりも松にはかゝりける哉
山里の木の下草のしけからぬ春來る人のまりはなりけり
おしむへき人なき空をふりさけてこへと木末にとまりぬる哉

鬪鷄

春雨にみのけあらしてれる鳥のふせこなかさにきてかへる哉
からしふく黄金うつちのはれおもにかちふせこなをつきてける哉
咲花もなくうくひすも春は花なとりあはせたるころにも有哉
はこくみてわか育てたる雛鳥のこはいちよちそにけぬつかふな
春雨のなこりの庭にぬるとてもあはするとりのみのけ立らむ
さりともと羽にしほふくあか鳥のまくろ氣色のからけなる哉
覺束な何れの鳥かかけにけんあこれのかれとはれのからしと
ぬりなきしとりのはかひのからし故からくもまくろ君か方哉

神祭

青かしはさすやひらてをなめすして白ゆふかくる榊をそとる
なら柏そのやひらてをそなへつゝ宿のへついにたむけつる哉
まつらるゝからや薬守の神ならんならの葉柏とりもいさめぬ
山かつの垣ねにいはふやかつかみ卯花さける闘にみ□るかと
あつかたてはさらとりすへやかつかつかみ祭る卯月に早成ぬとか
やまとこにならの薬柏さし置てゆふしてかくる卯月きにけり
楢のはにちる卯花と見えつるやゆふしてかくる神のひほろき
けふことにつらぬきまはす玉柏ひもろきにてもときちらす哉

賀茂祭

諸鬘かけてもいはしいつくしきいつきの宮のけふのみゆきを
うないこかつし〳〵はらふ音す也今や光りのわたるなるらん
もろ人のけふみなかくろもろ鬘あまれき神のしるしなりけり
年をへていく祭にかあふひ草けふをとりわきかけてきぬらん
はふりこももろかつらして神山のみあれのすゝを引ならす哉
ひとなみにしつのたはかみうちはらひ皆諸鬘けふはしてけり
春秋のみやのつかひももろ共にはなめきつきむ賀茂の御祭
みあれひくけふにあふひの鬘してかみに離かぬ人はあらしな

騎射

五月雨にくまのむかはきそほぬれてあけゆくいてや宿り成覽
からはたけみつのつはものてまとひて騒くやけふのみものなる覽
同しくはなのりてすきよ郭公ひおりのそらもやゝくれぬめり
あやめふく五月のゆみを昔はなからのもりへみにそゆきける
しきりはのやさしき物はあやめ草けふひきつるゝまゆみ由鬼
艇にはあやめやさしくさしそへてひたりのまゆみけふやひく覽
菖蒲ふく砌のふちのつるむまのたゝすみまとをいさせつる哉
あやめ草長きれならぬまゆみをも共にけふこそひく日也けれ

乞巧奠

ひこほしも空にてらしてしりぬらん七日のよひのこゝの燈火
こゝのつのえたの燈火掲けつゝ祭るしるしのとりのあとみむ
もゝ草のはなのけふりや七夕の雲のころもの袖にしむらん
いつ草の糸もてぬけるなゝはりをかちの一はにさしはさむ哉
七夕のなかのなたえぬ秋ことにあふ言の葉そたてまつりつる
ふみつくるとりのあとこそ彦星の心ゆきあひのしるし也けれ
おもふ事かなひやするとみとせまて星合の空をまつりつる哉
七夕をまつる心はひとつにてれかひのいとはをのかすち〳〵

相撲節

進み出てひさこはなとるすまひおさのつきくし共きさりよる哉
さしかれてなけまふよりもすまひおるのひるとはなとるけしきまつみよ
ゆふかほに葵の花のさしあひていつれか色のうてんとすらん
秋霧の立なからこそうてにけれいてつるかたやおほえさる覽
きゝあはせ弓とる方なかたひかんひたりすまひの強くみゆれは

いつかしとうらてに出てうてぬれは恥かしけなる夕かほの花
とりものに顔は隠れて見えわかすいつろうらては誰にか有覽
やふれ屋のよはけに鏬くすまひ哉いてゝさゝみよ我方のすけ

小鷹狩

出るよりはやるこのりを引すへて苅田の鴫にあはせつるかな
小萩原のたつ雲雀のしりとひてまちはからるなつみの落はよ
色々の花にまきるゝかやくきをかるとて野へに暮しつる哉
雲雀とるこのり手にすへこまなへて秋の苅田に出ぬ日そなき
しらつみのあかれのつるにまとはりて羽黒の鳥のまけにける哉
うち出て小はきふみ分たかのこにいさあはつ野の鶉とらせん
いかなれはあはつの原の萱莖の日をへてかれとつきせさる覽
はしたかのはかせにさはく萱くきのとり亂れたる秋の野へ哉

射場始

ゆたちとくいての諸人ことつけて鈴のいたつさまつならす也
神無月たつかの弓をひきつるゝけふやまとゐのはしめ成らん
まゝきいるおほ宮人はけふやさは冬のゆみ場に立はしむらん
霞たつ春のゆみ場のとをけれは〔本ノマヽ〕
もろ人やまはかけからて梓弓ひくころも手のさへわたるらん
けふやさは雲の上人もろやしていはけのせにき心かくらむ
御垣守つきしあつちにいつしかとけふ社まとをかけはしめつれ
もみちする神無月よりあつさゆみひきつれてみん春の花まて

五節

むれたちて遊ふなる哉をとめこかをみの袖ふる豐のあかりに
けふやさはみそきのはてとをとめこかひれふる豐の明なる覽
いかならん更行空の月影にとよをかひめのよはのみやひと
冬の夜の雲井の月を見ることにとよのあかりを思ひつるはや
餘所なから乙女袖ふる九重のとよのあかりをおもひこそやれ
もろ人の心もはれてあそふかな日影さしそふとよのあかりに
雲の上にいつたひふりし袖をみてよし野の宮のことをしそ思
入日さすよし野の宮のことのねに袖ふり初しあまつをとめこ

臨時祭

姫小松はやすみきりにもろ人のかさしの花をさしそふるかな
かへりたつ庭火の前のかなてこそあな面白といふへかりけれ
つらゝゐるみたらし川もそこさえて山あゐの衣かけやみゆ覽
暮ぬ間にものみ車のまへはたれあをすりはくの雲のうへひと
冬されはかもの川浪立出てみかひもかくるすかたをそみる
おもしろや立もやられぬにはのさのをみの袂にふれるしら雪
をとさゆるみたらし川に影見えて袖をつらぬるするかまひ哉
うと濱の浪の音をはたつれ共なをしつかなる賀茂のみたらし

庚申

うちて遊ふみつめたならてその外のみさるかうらはせぬとしらなむ
しろいあさのかみつみあくる今宵こそさひ戯れのれて明しつれ
敎へ置てせきより西に逃れにしあと尋ぬとてよをあかしつる
午をうしといひける人と友なひて寅の時まてよそとほしつる
つきませのれぬよや今宵ぬるよとて物思ふ身には枕さためん
宿ことにねぬよをまほるめさましに亂れあひつゝ遊ふなる哉
夜もすからこてのせにをそ思ひやる共つらならぬまとゐなれ共
たれそこのぬしをはをきて高岡のみさる處のはなをなしおる

競馬

をよひつる手は打かけに見え乍にゐにとられてにけふちの駒

みるためのしるしありとやきないむまの葦毛にのりてかけぬめる哉
程もなくとりつゝきても過るかな是やひまゆく駒にあるらん
なとらしときなひくして先にたつにけの駒なそかけふちとみる
きなひ馬に同し程にやのりつ覽とりならひてもぬきぬめる哉
足亂る駒はいかゝとみつれともせひみとけてもかへるめる哉
〔本ノマヽ〕なとらすふちなうちそあはする
駒の足ははやしとみるにまけぬるは人の心のなそきなりけり

圍碁

やま人の斧のえくちしいにしへもかく面白き手なやめてけん
古へのなのゝえくちしことわさにけふも心なうちつくしつる
さゝれ石のかたみに思ひあることの誰かいにしへうち出し劍
白浪はまさこうつなり浦々によするたまもなかけものにして
うちなける手なみの程のいかなれはとるへきはまも渚なる覽
勝まけは濱のかい石おほけれとなみうち果てみゆるなりけり
いかにしていつれともなく亂れ石な思ひ忘れすとり直しけん
うちうたす昔か手並なしらぬまは濱の眞砂そあやふまれける

右爲忠朝臣後百首以流布印本挍正了

群書類從卷第百七十五

和歌部三十百首九

句題百首 稱五玉集

作者

頓阿法師
法印良守 大納言基良子　續後撰　續古今　續拾遺　新後撰　玉葉集作者
權大僧都良春 猪熊大僧正　参議季遠子　新續古今作者
頓宗 新拾遺　新續古今作者
禪僧周嗣 新千載作者

點者

頓阿法師

春十五首

遥峯帶晩霞

頓阿
すか原やふしみの暮の面かけにいつくの山も立霞哉

良守
くれかゝる遠山とりの尾上よりまたき隔て立霞かな

良春
暮にけりそこ共みえす春の日のなからの山はかすみへたてゝ

頓宗
入かたの日影に見えて霞たつ山は夕そあらはれにける

周嗣
暮行は遠さかる也山のはに霞やいとゝ立隔らん

殘雪更結枝

山ふかみ春ともいまたしらかしの枝なる雪そ消かてにする
吹は猶あらしの音に氷りつゝなのれとけたぬ松の白雪
きえかての雪そ落そふ春風の梢なはらふ松のしつえに
きえかてに猶こそ殘れ松の雪はらふもさゆる春のあらしに
さもこそは春の光りのよそならめ雪さへ消ぬ谷の松かえ

春淺霜連夜

朝ことによのまの霜の消やらてまたもえ出ぬ萩の燒原
春きても光よそなる玉さゝのいくよの霜にむすほゝるらん
春も猶冬かれなからみしま江の芦のよことに霜はふりつゝ
よな／＼の霜も何なく手枕に春とや夢の結ふともなき
春は猶あさゝはぬまに住たつのうは毛に冴るよな／＼の霜

梅殘數點雪

梅花且咲にけりたえ／＼にのこる垣ねの雪とみるまて
白妙の雪のうちより咲初てちるまてまかふ梅のはなかも
むめかえに今は春へと咲花を猶冬こもる雪かとそ見る

梅かえにかつさく花を鶯の鳴とも消ぬ雪かとそ見る
窓ちかき梅のはつ花咲しより春さむからて殘る白雪

清月上梅花

さよふけて月そもりくる出ぬまもそれかとまかふ梅の梢に
春の日のくるゝもしらすなかむれは軒はの梅に月そいさよふ
よな〳〵は花咲かへてむめかえにもりくる月の影そかはれる
吹わくる木間の月の影なから匂ひをゝくるむめの下風
梅かえの木間を出る春の夜は花にかすまぬ月のかけ哉

柳間黄鳥路

心せよ露たにおもき青柳の糸に木傳ふ春のうくひす
鶯の木つたふほとの羽風にも亂れやすきは青柳の糸
なきとめぬ花こそあらめ鶯の木傳ひちらす青柳の糸
青柳のいとの絕まや鶯の枝よりえたに移るかよひち
春風にむすほゝれ行青柳の糸の亂れを分るうくひす

春江霞捎空

明わたる空もひとつになにはえや霞よりたつ沖つ白浪
漕かへる同し入江もまよふらん霞の下によする白なみ
難波江や霞のおくに立波の花こそ空のかさし成けれ
見渡せは空のかきりもなこの江の霞にかゝる沖つ白波
なにには江や霞のまよりよる波も雲ゐにかへる春の明ほの

春深花始開

待ほとの半は過ぬ今よりの春や花みる日數ならまし
咲やらぬ春の日數はかさなりてまた一枝のはつ櫻哉
さきにけり花はいくかとかそふれは春の彌生に成にける哉
山櫻まつに日數のつもりきてさけは殘りの春そ少き
いとゝ猶日數を花におしむ哉咲初ぬれは春もほとなし

花間紅樹亂

花の色に亂にけりなさほ姫のしのふにはあらぬ春の衣手
花さくら咲そめしより紅の色に亂るゝ庭のはるかせ
さくら花うつろはんとや朝日影にほへる雲に山風そ吹
紅にうつろはんとやさく花にみたれてましる嶺の白雲
雲なからうつりにけりな紅のはつ花さくら色もひとつに

花發（開イ）風雨多

世中はかくこそ有けれ花さかり山風吹て春雨そふる
いかなれは嵐も雨もあやにくにいくかもあらぬ花にそふらん
花さかりしつ心なき山風に先さそはれて春雨そふる
つらき哉雲と見えつゝさく花は雨と風との宿り成けり
ふる雨に猶やしほれんさくら花あらしにおほふ袖は有とも

坐久落花多

見るまゝにふかくも花のつもる哉休らふ陰にほとや經ぬらん
からにしきたゝまくおしき木下に散しく花の幾重成らん
雪とのみまとゐの中にふりはてゝそなからあらぬ花の陰哉
いとゝ猶つもりそまさるちる花の名殘をしはししたふ木陰に
木本のすみかも花にうつもれぬおしむ心に時はうつりて

花落樹猶香

花ちりて青葉にかはる梢より吹くるかせの猶匂ふかな
思ひつゝよれはや花のかほるらん花は散にし枝の青葉に
花の香のうつるはかりに吹とめて青はそ匂ふ木々の春風
木下を花の跡とて外よりも尙にほひある春風そふく
散にけるそのなこりとてしはし猶木のもと匂ふ山さくら哉

顔詹掛古藤

紫の雲かとそみる庵ふりてうき世をのきにかゝる藤なみ

あはれにも傾きのころ軒はかなかゝれる藤のつなく許に

玉水も色にそおつる春雨のふるやのゝきにかゝる藤なみ

年ふりてかたふく後は咲藤の花にそかゝる軒はなりける

たこのあまの宿まてかゝる藤の花なみにあれ行軒はともみゆ

歳時春猶少

おしまるゝ心なれはやいつはあれと春の過るは程なかるらん

夢なれや春はいくかもあら玉のとしにまれなる花の面かけ

尋はや花なき里にすむ人も過る月日は春やすくなき

春は尚ありて暮ぬと思へはや同し日數の分てほとなき

一年の月日を春に過すとも花はわかれやほとなかるへき

春盡鳥聲中

鶯のこゑさへ花となりにけりつもれはくるゝ春の日數に

なくとりはあらぬ心に任すらん春の日數はかきり有とも

花の山なこりもとめす行春のけふはしはしとなくとりもかな

鳴とめぬ花こそあらめ鶯のしるしなき音も限とそきく

暮て行春よりも猶鶯の別れをかこつこゑそ物うき

夏十首

深谷夏聞鶯

春たにもはるはよそなる谷かけのしけるこ木間に鶯そなく

雪を出て谷の鶯いつのまにふかきみとりの底に鳴らん

身はかくて春たにとちし谷の戸に時しらぬ音は鶯そなく

谷ふかき夏のみとりに殘る也雪になれにし鶯のこゑ

卯花の雪かとみゆる谷かけになくうくひすの聲そ殘れる

綠樹連村晴

夏山のしけきまされは木かくれて有ともみえす岡のへの宿

なつは猶人めはかるゝ山里のとなりも見えすしける木陰に

山さとの梢は花の跡もなし人めにかへてしけき比かな

常葉なる色もわかれす眞木の村よその梢もしける青葉に

をしなへてしける梢もみえわかすいつれときはの里の一むら

山雲夏亦繁

山のはにいつもかゝれる白雲の猶立のほる夏の空かな

さらぬたに晴ぬ雲井の山たかみ猶すみわふる五月雨の比

夏衣かされてほすや白妙の雲立のほる天のかくやま

たえ〳〵にいつもかゝると見し雲の山のは埋む五月雨の比

遠近のけふりも雲に埋れぬ淺間のたけの五月雨の比

松風五月寒

五月山雨はれそめてせみの羽に衣手さむく松風そ吹

時しらぬさこそは谷の松ならめ夏のもなかも秋かせそ吹

雨晴ておふる五月の浮草の末よりさむく松風そふく

氷室山あたりの松に音たてゝ夏の半も風そ身にしむ

時鳥なくや五月の山風も松をはらへは音そ身にしむ

風樹咽鳴蟬

山風の梢もさはくならのはにしはし聞えぬ蟬の聲哉

夏山の松のこすゑを吹風にあらそひかぬるせみのもろ聲

しはし又蟬のもろ聲とたえしてならの葉さはく山風そ吹

瀧つせのひゝきはまさる山風に梢のせみのこゑむせふなり

鳴蟬の聲は梢にとたえしてかせのみさはくもりの下かけ

秋聲帯雨荷

風わたる池の蓮葉露おちて秋にすゝしき雨の音哉
露は玉はすの浮葉に夏なへて秋とあさむく雨の音哉
蓮葉に雨ふりなける玉のなのゆらくほとなき秋の聲かな
ふる雨ははすのうきはにちる玉の秋にもこえて音そ涼しき
音たてゝ秋やいつしかかよふらん村雨すゝし池のはちす葉

扇罷風生竹

しはし又ならす扇の風やめて笆の竹のそよくなそきく
手もたゆくならすあふきのひまなれや竹によるよの窓の秋風
竹のはゝ露もたまらす吹風にならす扇やなきまさるらん
手にならす扇のひまも涼しきに風になるよの窓のくれ竹
夏のよはならすあふきの風のまも音なそのこす窓のくれ竹

泉聲到（入イ）池盡

石はしる山の瀧つせひゝきゝて末は音なき夏の池水
せき入る岩ま計に音たてゝしつかにすめる庭の池水
音せぬも涼しかりけり石はしる瀧のなかれの末のいけ水
瀧つせなせけは音こそ聞えねと涼しさかよふ庭の池水
池水に音はなけれとすゝしさは末またえぬ山の瀧つせ

雨餘生晩涼

雨はゝや過ぬる跡もそのまゝに夕露涼し木々の下陰
むら雨はよそに成ぬる木かくれにたつことやすき夕すゝみ哉
秋かけて思ふもすゝし夕立のなこり許のもりの下水
ふる雨のなこりも涼し淺茅原秋になひきて結ふ白露
村雨のなこりもすゝし露結ふ庭の淺茅の夏の夕くれ

螢入定僧衣

時しもあれうらなる玉や顯るゝほたるそ宿る僧の衣手
影みえぬ心の水のすみそめな有しや袖にほたる飛らん
飛螢山な出へきほしなれや曉ふかき苦のたもとに
とふ螢なれてそかよふ袖なたにはらはぬ計しつかなるよに
かけうつす心の水やしつか成袖の螢の玉なそふらん

秋十五首

露氣早知秋

明わたる朝のはらもなゝ露の光にみえて秋はきにけり
夏草のきのふも見えし露のまに袖まて結ふ秋は來にけり
吹結ふたもとの露なかそふれはいそちにかゝる秋のはつ風
荻のはのかせなもまたて露結ふ袖よりやかて秋そしらるゝ
かせは猶吹も定めぬ秋の色なさやかにみする野への白露

一雨洗殘暑

夏のまゝにてる日のかけも村（にれイ）雨の音より秋にかはる空かな
雲井より秋はくれはや村雨の行ての風のすゝしかるらん
庭草にのこる日影もこの夕涼しくなりぬ秋のむらさめ
ふるまゝにてる日のこりて村雨の跡より雲の空そすゝしき
とこなつは花の名のみの草村にあつさ[illegible]こさぬ秋の村雨

野色混秋光

なく露も花のひかりに成はてゝのへは千種の色そまかはぬ
宮城野の木の下露と花の色といつれかまさる光なるらん
さきましる花のゝ露の下染に秋のおもひの色なそへつゝ
うつろへはいつれな露の光ともいさしら菅のまのゝ萩原
暮行は日かけはうすき秋のゝに花のひかりと露や成らん

天高一鴈横

雲もはれきりも隔ぬ中空をかすかにわたる鴈の一行

雲井まて聞るかりのつらさ（はイ）たにひとりなくるゝ音をや鳴らん

しろらめやあしへの友と音をそ鳴あまとふ鴈はつらを離れて

はるかなる空にもわたるほとみえて月にそちかき鴈の一つら

あまつ空くもゐにみえてくる鴈は聲こそいとゝかすか成けれ

終夜着蛬聲

きく人の涙はしるやきり〳〵す夜はすからに枕にそなく

床の霜おきゐてきけは老か身のたくひによはる蛬哉

いつまてと露のよすからきり〳〵すかへなる草の底に鳴らん

夜もすから鳴もよはらぬ蛬われにもまさる思ひとそきく

よもすから思ひを人に猶そへてをのれ音をなくきり〳〵す哉

稲花千頃浪

なかめやる（入日さすイ）遠山もとをかきりにていな葉なみよる秋の夕風

秋の田は雲をなすかはみわたせは風のまに〳〵なみそ立ける

末となきふしみの田面霧晴てほなみによするうちの柴船

風わたる田面の末の山もとは稲葉のなみのみきはなりけり

みなと田のたのも遥にみつしほは風に波よるいな葉なりけり

江聲入秋寺

いそ山のふもとの入江汐みちて月待出るみねのふる寺

なには江や月のてしほのなみの音に打あはせたる入相のかね

さとは荒てなにはの寺の入相にこゑ打そふる秋の夕しほ

月もはや入江の波の音更てかねいそく也磯のふるてら

みつしほの音計して明行は月は入えのいそのふるてら

月色一窓虚

わか心むなしき空の月影を窓しつかなる庵りにそみる

おなし窓幾よの月になれぬ覧あれすはいかにさひしからまし

雪をたに集めし窓に月みてもよるはすからにするわさそなき

しつかなる夜はの窓より思ふことむなしき空の月を見る哉

夢さめて閑なる夜の窓の内をとふもむなしき月のかけ哉

江清月近人

あま人のしほくむかけもなにはえや月と共にそ波にうつれる

なにはえや芦分をふれさす棹のさはる計にやとる月かな

月やとる入江の波の立よれはかけふむはかりみゆる空哉

難波江やうつれる月のかけ清み氷にうかふあまの釣舟

夜もすから月をや波に三嶋江の芦邊さし行あまの釣舟

鶏聲茅店月

たれ住て明行月をおしむらん鳥の音殘る淺茅生の宿

思ひきや草の庵りに旅ねして鳥のねいそく月をみんとは

月そすむ鳥はそらねとかこつへき人こそとはねあさちふの宿

鳥の音の聞るまてに月は猶露に夜ふかき淺茅生の宿

鳥のねのしはしは殘る月ははやかたふくほとのあさちふの宿

山暁月初上

よこ雲のわかるゝひまに顯れて山たちのほる在明の月

秋の夜も明なんとする山のはにはかなく出る有明の月

おなし吹ひはらかうへのやまかつらつれなくかけて出る月哉

待得てもみるほとそなき秋のよの明行みねに出る月影

秋の夜も明行山の木間よりつれなく出る月のかけかな

月向白波沈

しはし猶かくれなはてそ波の上に半の月の殘るともみん

わたつ海やかせ吹ことにうき沈む玉にあらそふ月の影哉
梓弓すゑの松山入月のかくれぬさきにこゆるなみかな
波に入かけかとみえてわたの原空のかきりに月そかたふく
よひのまの山のは出しおもかけな波に殘して月そかたふく

遠山青入霧

木末のみまきのと山に顯れて里まて晴ぬうちの川きり
はつせ山霞にまかふおもかけのきりに殘れる秋の夕くれ
つまかくすやのゝ神山たつ霧にまた末となき秋の色哉
なかめやる末の松山跡もなしふきこすきりの八重の潮風
山のはゝ埋れはつる夕きりに殘るとなちのさとの一むら

風便數砧聲

此里もはや急けとや秋風の砧のなとなさそひきぬらん
衣うつなとたさそはぬ時たにも答やはするれやの秋風
里わかぬ夜寒のつてに打そへてよその砧なさそふ秋風
さそはれて砧の音も聞ゆ也秋寒きよのおなしあらしに
よそにうつ砧のなとも聞ゆ也雲井の隔なさそふあらしに

新霜染楓葉

紅なにゝそむらん立田山霜のたてもてなれる錦に
木末よりうつるひ初て初霜のなく程みゆる庭の紅葉々
夕露もまたほしやらぬ紅葉々な霜と成てやけさは染らん
秋さむき霜もよな〳〵おく山のいは垣もみち色まさるらし
いつしかに木葉も色やかはるらん月のかつらの初霜の比

冬十首

落葉無行路

山人のもみちふみ分行跡なやかてそうつむ木からしの風
ふりしけるふもとの木葉きてもとへ我庵まてはふみ分すとも
みるまゝに道もさりあへす木からしの吹と吹ぬる山の紅葉々
落葉にもかへさに道やしられまし分くるまゝに跡なきこきは
もみちはの散しく山はとふ人も道もみなから分やかぬらん

木落見他山

遙なるいこまの山もあらはれて梢の冬にかはる比かな
時雨ふる音はまちかき木間よりみゆる尾上に雲そかゝれる
神無月風もたまらぬ木間より山端なからもる日かけ哉
冬かれの庭の木間に顯れて軒はに近き遠の山端
ちりぬれは山は木間に顯れてよその紅葉の色なみる哉

人迹板橋霜

霜ふかき谷の板はし跡みえて日かけのさきに出る山人
しゐて行たか別路の跡ならん霜に殘れるまゝの板橋
跡つけて出つる人の歸るまてしもとけやらぬ谷の板はし
なく〳〵霜に谷の板はしあとはあれと柴の戸まては問人もなし
置しもの跡あらはれて山人のかよひふりたる谷の板はし

疎林霜後月

枝に猶のこる紅葉の散みえて霜よりの月のもりの下陰
紅葉てるしものはやしの木間より錦なやふるそのよの月
月そもる今は木葉もふりはてゝ霜ふかきよの雲の林に
［一首闕］
この比はもりくる月に霜さえてしくれし雲の林ともなし

山寒水欲氷

ほかよりも先や氷らん夏み川嵐も寒き山陰にして
さえ〳〵らすかつらき山のやま風やあすかの川の氷ならまし

さえくらす霜の後せの山かせに谷の小川も行なやむ也
山風もくるれはさむし夜のほとに氷やとちん谷川の水
夏箕川かはなと寒き山陰に月の氷や先結ふらん

一鳥過寒水

山河のいつくを床と夕暮は鳴になくをしの獨行らん（ねにゅくイ）
夜を寒みうきねの床をあくかれてつかはぬをしのいつち行覧
跡をたにたれしのへとて山川の友なし千とり鳴て行らん
池水にしはし友まつあしかもの氷れはたえすよそに立也
をし鳥の空につまよふ聲す也くるゝ川とや氷とつらん

清晨雪擁門

霜かれのむくらの門をとちてけり八重降しけるけさの白雪
朝またき草の戸さしも跡つけてあけまくおしき庭の白雪
かくてはや身は初雪のあさ氷とちにし門を誰かはらはん
けさも猶人の跡をはいとはねと降つむ雪そ門をとちける
降雪に道とちはてゝ待人のたのみもけさは杉たてる門

晴雪落長松

朝日さす嶺の梢の雪おちて松はみとりにはるゝ空かな
あさ日かけさすやおのへの松の雪解るもしろく打なひきつゝ
なしほ山松も木たかく晴初て嵐のつてにおつる白雪
日かけさすたかねの雪のむら〳〵に松あらはれて山風そふく
あさひさす梢はかりはあらはれてなを松陰におつる白雪

獨釣寒江雪

降つもる雪には跡もなこのえの氷をわけて出るつりふね
枯はつる入江のあしの雪のうちに一葉のよるやあまの釣舟
ふりすさむ雪はともまつ水のえに先あとみせて出る釣舟
ふる雪に又友もなしなにはえや袖さゆる日のあまの釣ふね
なには江やこやもかくれてふる雪に歸る宿なきあまの釣舟

流年川晴度

月も日もしはしよとまて行年や淵せもしらぬ山河の水
とまらすよ雲のみおにてみし月のつもりて年の暮に成ぬる（けるかなイ）
あすか川月日なかれていたつらに昔をとをみくるゝ年かな
天川行水よりもとしなみのくるゝややすき月日成らん
河水のよとまぬ波のみおよりも猶瀬を早み過る年哉

戀十首

心知人不知

なにとたゝ我のみしりて過るまのうきあらましに袖ぬらす覧
かはらやのおなし思ひの下もえにあらぬけふりと人やみる覧
しらせはやしのふか原にさすしめの草はにつけて露かゝる共
しらせはやしのふもちすり忍ふるもたれゆへならぬ下の亂を
思ひかれしられぬ中に戀しなはけふりをなにの行衞とかみん

唯有涙痕多

袖にはやせくほともなし涙川なにをか今はしからみにせん
みえぬらん人めしのふのすり衣涙のかゝる跡のみたれは
はかなくも人めを袖につゝみけるうき名は身にもあまる泪を
よしさらは朽たにはてよわか袂泪のあとのみえぬはかりに
朽はては何につゝまんうき名とてさのみ泪の袖にせくらん

三年不見書

なをさりの玉札をたに待もみす雲ゐの鴈の三たひくるまて
新枕われは昔の秋そともせめてつけこせ鴈の玉つさ

そのまゝにひろ予も今は立ぬらんかきもなかさぬ水莖の跡

藻鹽草かく玉札もまたみれはすまのうらみに三とせわひつゝ

新まくらむすはてまつとしらせはや三とせまてみぬ人の玉札

涙盡腸欲斷

限あれは涙も今はつきぬらんけふを過へき心地こそせれ

なみたこそ色かはるまて成にけれ思ひはいつをかきり成らん

かきりそとけふ啼つくす涙こそ我後の世のさきにたつらめ

しろらめや泪も袖につきはてゝ色もえぬへき胸の思ひを

きえやらぬ胸の思ひのせくまゝに袖にたえたるわか涙かな

入夢到如今

思ひねのはかなきゆめにかはす哉打もはらはぬよはの枕を

うつゝ社はかなかりけれむは玉の夢路はもとの足もやすめす

みし夢の面かけくもる年月や身にそふ中の隔成らん

おもかけのありしなからにみる夢はうつゝになるそ別也ける

なれてみし夢をしたへは今更にいとゝ驚くうつゝとそなる

花開更憶君

たのめこし花のたよりをすくす哉色見えてこそ移ひにけれ

花になす心ならひにわか宿の庭のさかりはたちまたれつゝ

とへかしなあらぬ色かもなき物を花にそ人の心かはらて

花よりも猶あたなりや色かはる心つからの人のちきりは

山さくらあたなる色もひとつにてみるに猶そふ人の面かけ

空閨殘燭夜

明るまて思ひ盡せぬ獨ねに涙かきくらす夜半の灯

獨のみおきゐるねやの灯や思ひつきせぬたくひ成らん

きえわひぬ空しき床のともし火やねなくに明る夜を殘すらん

待人もむなしき閨の灯の消てやいとゝ思ひたえなん

夜もすから待に心を盡す哉ねやの灯きえのこるまて

恨別鳥驚心

ふかき夜にいそくとかこつ別路に又とりのねの驚すらん

鳥のねに心はあらしわかるゝはこゆるならひのあふ坂のせき

此まゝに又も聞すはしのはれん物とや鳥のおとろかすらん

別路に人は待えていそけとも身一つにうき鳥の聲哉（わか身ひとつにうき鳥のこゑイ）

われたにもかこたぬほとの別路を何とよふかく鳥の鳴らん

別後會難期

わかれなはこよひはかりの人またに又いつかはと思ふ悲しさ

立わかれまた夕暮を待たにもたえてあらんと思ひやはせし

えそ知らぬさらにはいつかあふくまや霧立わたり今夜明なは

別ては後のあふせもたのまれは是やかきりの中川の水

あふまての後の命も賴ねは是やかきりの別れ成らん

何處更相逢

いつかみんつらき所はおほくのみ月日つもりて待ひまもなし

今たにも手にもたまらぬ大ぬさのつゐのよるせないかゝ賴ん

いつくにかめくりもあはん下帶のとけて別れし道をしらねは

ありしのみわすれぬふしのさゝ枕又結ふへきかたもしられす

命こそ猶おしまるれいつくにて逢みん事はたのみなけれは

旅十首

棧路雲間沒

行末の岩のかけみちたえ〳〵にうつみもはてす峯のしら雲

いつくにかきそのかけはし行末も跡をも埋むみねの白くも

岩ねふみいまいくへとも白雲のたな曳わたるみねのかけ橋
かけはしは雲より下に埋れて夕日にのこるみねのかよひち
うつもろゝみねの梯みえれとも分れは雲にのこるかよひち

江邊問船子

舟よはふ聲はかりしてみしま江や人こそ見えね秋の夕暮
おほくらや思ひいりえのわたし守世をうち山の道しるへせよ
ことゝはん舟さしよせよ住江のゑなつを過るむこのうら人
くるゝ日に里とひかれて湊江のあまの舟をそ宿と定る
あまの子のとへとこたえぬ湊江は舟にもぬしや定さるらん

船行夜已深

はりまかた尾上のかねの聞ゆ也沖こく舟にさ夜や更ぬる
ともし火のかけをしるへに漕つれて明石の沖に夜そ更にける
さよ中と更行月に舟出してとわたる空に鴈そきこゆる
ゆらの戸を夜わたる月も更にけり浦こく舟や遠くきぬらん
うら風も磯邊の松に音すみて澳こく舟そ月に更行

棹入黄芦浦

あしま行うらの小船にさす棹のみなれぬかたに宿やからまし
舟とむるあしのかれはのさら〳〵に夢ちゆるさぬうら風そ吹
枯はつるあしのうら船さす棹のさはらぬ宿はうきれなりけり
あしへ行ほとはかくれてさすさほの末のみ見ゆる浦の友舟
なには人あし分小舟さすさほのかよひなれてやさはらさる覧

着苔満山徑

くれぬより日影もみえすみ山木のうへはしけれる苔の通路
草も木もふみ分かたきおく山は苺こそ道のしるへなりけれ
旅衣なりはへほさぬ山路哉眞木の下露苔の雫に

ふみ分てこゆるいはれの苔莚よるは旅ねの山路にそしく
霜むすふあしたのほとそみ山ちのこけにも人の跡は有ける

郷信寄胡鴈

ふる郷にわふとこたへよ山たかみ晴ぬ雲井にわたる鴈金
今ははや古郷人もわするらんまつも空なる鴈の玉つさ
故郷のつてもわするな歸りこんほとは雲井の秋の鴈金
歸るさをいつとさためて鴈かれの都へ行にことはつてまし
ことつてんかひこそなけれ行鴈の歸る雲ゐも都ならねは

人行秋色中

旅人のさきたつ袖も秋草の花にわけ入むさしのゝ原
たひころもたつたの山をこえ行は袖に色つく秋かせそふく
みむろ山そめもゝらさぬ時雨哉秋行袖は木葉ならねと
咲にけり秋のはきはら露分て旅行人の袖うつるまて
くれぬとも猶分ゆかん秋萩の花のゝ露を袖にかけつゝ

路明殘月在

さゝ分る道もたとらす月まちて曉出るゐなの山もと
あふ坂やこえ行跡にのこる也空にも關や有明の月
明ぬれはさそひし月を中空にのこしてこゆる足からの關
在明の山邊さやかにのこらすは夜ふかく出て道やまよはん
行まゝに山した道もあらはれて木間さやけき有明の月

灘聲入夢寒

なれぬ夜の川音寒き草枕みるとしもなく夢路おとろく
すさましき河せの波のうつゝとも夢ともわかぬうき枕かな
いそまくら川音さむみうつゝとも夢ともしらて明ぬこの夜は
都出てみるゆめもなしいつみ川かは音さむみ夜半の枕に

ふる郷の夢はたえたる手枕に川音かよふ夜はのさむしろ

客愁憐雪鬢

草枕たひの夜寒なかされきて蓬のかみも霜そ置そふ

富古出ていく秋風にたえぬらん鏡のかけもしら川の關

草まくらよもきか霜もふる郷につけのな枕いつかとくへき

かゝみ山立よりてみん旅にてはかしらの雪もなをやくもると

旅にきてつもる日數は覺えぬにかしらの雪のふりまさるらん

閑居十首

幽居有餘樂

心さへとまるはかりにうき事なきかぬみ山は住よかりけり

かくてこそ身なも心の休るなしらてや人の山陰の庵

ひとりすむまやのあまりのたのしみや君にしられぬ惠成らん

是も又心なとめはしつかにて住よきやとのかひやなからん

かねて思ふ身のあらましの程よりも猶山里はすみよかりけり

盡日掩柴扉

今更にくれてもとちす山風のおほふまゝなる柴の戸ほそは（あみとイ）

さしこもるしはのとほそは自から明ぬにくるゝ日こそ多けれ

閉はてき柴の戸ほそのしはしこそ明ぬ暮ぬと人もまちしか

さしなから又そ暮ぬるけさまても夜はのまゝなる柴の扉な

くるゝまてさなからとつるしはの戸な絶す嵐の倚たゝくらん

秋月離喧見

ふけゆけはひはらの風も音さえて月閑なる山のおく哉

世なすてぬ人もみるらめ秋の月心のすむはすみまさりつゝ

澄のほる月に吹よゝ松風はこゝろの空に音も聞えす

すてしより身のうき雲も殘られは心に晴て月なみるかな

世中のうきよりほかとみるにたに月にはぬるゝわか袂かな

深居絶是非

水清き山のおくには世中のすむもにこるも聞えさりけり

水上な尋てそすむ山河のかはる淵せはさもあらはあれ

山川のすみそめしより音たえてふちせにかはる世なも歎す

人とはぬ山の奥にはよしあしの世のことはりも聞えさりけり

なへて世の色になかめはおく山の花も紅葉もかひやなからん

山中無曆日

春秋は梢の色にしらるれと月日なわかぬ山のおくかな

うつり行月日もしらぬ深山路な何とて老の尋きぬらん

時そとて火はたかねとも春はもえ秋はこかるゝ山の色哉

山里につもる月日は知られとも松のあらしの音そなれぬる

おく山にしらぬ月日の積りきて老やうき世にかはらさるらん

鳥啼人不見

きゝなれぬみ山の鳥の聲はして苔のいほりに住ひともなし

問人もなきおく山の苔衣なのれきなれて鳥や鳴らん

山ふかみまた聞しらぬ鳥のねもあらはそ人に名なも聞へき

人みえぬ柴の扉の明暮は鳥もしつかになれてなく也

名も知らぬ鳥の聲のみ聞えつゝ身なおく山にとふ人もなし

殘生隨白鷗

老の波こゝなとまりと立そよるなるゝかもめの契たかはて

老のなみよる方もなき捨舟になるゝかもめや我な知らん

すてしよりなるゝ鷗も驚す世なうき舟の我なわすれて

年なへてなれし鷗ようき身世によるかたなみの行衛しらせよ

日にそへて浮身の友と波の上になるゝかもめに心へたつな

閑門留野鹿

のへ近き蓬か門をとちやせんかよふをしかのふしなるゝまて
松の門さすともしらて夕暮の籬を山としかや鳴らむ
のへ近しみのりの門にさしこもる庭のそのとや宿をなさまし
さしこもるむくらの門の明るまて庭をものへと鹿そ鳴なる
山里はむくらの門もさしはてゝ庭なるしかのかよひもそする

身在能無事

今はたゝなす事もなし老らくの心のまゝに世をやつくさん
何事をなすとはなしになかゐして人のためうきかりの宿哉
世を祈る心そ猶もわすられぬなす事もなき身はやすくして
かくてすむ身はやすけれとすてゝみん中々世をは厭はさり兒
心をも身をも同しと聞しよりすめともやすき浮世なりけり

竹徑通幽處

尋はや是やうきよの外ならん竹のは山のおくのかよひち
いにしへの竹の林のあとなれやうきふし遠き苔の下道
ふみまよふ竹の下道よの中にあらぬ所やいつく成らん
末みゆる竹の下みち程もなし栖もさそなかすか成らむ
幽なるけふりに里もしられける竹よりおくの道の一すち

雜二十首

半山帯夕陽

あすもみん夕日かくれぬあし曳の山の半の松のむら立
山もとは山のかけより暮はてゝ峯に入日の色そうつろふ
夕附日かくれもやらぬ山のはのこなたの松はかけもうつらす
ふもとより先くれ初てをくら山みねに入日の影そのこれる
殘りける高ね許は顯れて日かけの下に雲そ暮行

鐘聲雲外殘

明わたるおのへの雲のいつくともしられす遠きかねの音哉
出てこし宿はいつくそはつせ山雲井にのこる入相のかね
おいとなるね覺のかねのなこりまてわかれはおしき横雲の空
よこ雲の明はなれ行尾上より夜ふかきかねの聲そ聞ゆる
雲うつむひはらかおくは暮はてゝよそにはつせのかねそ聞る

水窮天盡頭

みわたせは空もかきりは有物を入日かたふく沖つしら波
みくまのゝ山のあなたや天河雲よりおつる瀧のしらなみ
わたの原日も暮かたはしられとも空のはてこそかきり成らめ
わたの原遠き限りをみわたせは涙もひとつにかゝる白雲
なかめやるほと計こそ和田の原波と空との限なるらめ

流水淩雲根

風こしの峯に夕ゐる白雲の中にそおつるきその山川
きえぬともたれかはしらむ雲かゝる山の岩ねの水のうたかた
世とゝもに雲そかゝれる石ま行水の水かみ音許して
雲の波倚立そひて水上はみねよりおつる山の瀧つせ
たえ／＼に末はなかれて行水の涙かけみれはかゝる白雲

山光落釣舟

夕日さすいそ山もとのあまを船浦をへたてゝみるそまちかき
宿やなき磯山かけを暮ぬとてとまひきかへるあまの釣船
いさりしてあさこく舟の過かてに日かけうつろふ磯の山もと
磯山のかけみるなみのみとりよりあしへにうつるあまの釣舟

いそ山のかけや波まにうつるらんみとりもうかふあまの釣舟

船與涙高低

うきしつみさも定なき人の世や涙にたゆたふ浦（沖イ）のつり舟
おきつ舟風にたゆたふ波まより見えみみえすみ遠さかり行
おきつかせ立しらなみのかす（うつイ）ことにたゆたふ舟の定なの世や
世中は涙のさはきにこく舟の心さためす浮しつみつゝ
定なく立しらなみの世をうみに思ひたゆたふあまの釣舟

風林無鳥宿

ふしなるゝねくらの鳥の聲もなしあらしふくよの竹の林に
風ふけはたゝ一枝のねくらたに住えぬ鳥の音をや鳴らん
風ふけは林の鳥もいつくにか南の枝のすをうつすらん
むら鳥のやとらぬよはの枝たれてはやしの竹のなひく山かせ
村とりのとまる林と思ひしに今夜やかせのやとり成らん

天色無情談

心なきむなしき空をかこつ哉人はあはれといはぬあまりに
なかむれはあはれとそ思ふ大空はなにの心の色もあらしを
いにしへに心をとめて言とへはみとりの空はいふかひもなし
おほ空のむなしき色はいかなれは詠るからにあはれそふらん
草木までうるほふ雨はおほ空のむなしき色のめくみなりけり

人間多苦人

人ことにそむかれぬ世をうき物とおもふや同し心なるらん
かくてみな老の坂にやむかふらんみるもくるしき浮世なり鳬
世のうさは我にそしりぬ過る身に捨ぬにかはる人はあらしな
捨はてぬ我身なりせはよの中のうき人數に今やいらまし
人ことに心ひとつを捨はては住うかるへき世間もなし

世路山河險

柚川やおろすいかたにさす棹の心ゆるさぬ世にこそ有けれ
うき世をそ猶すてやらぬ車をも舟をも返す道と見なから
いかたこす柚山川の早き瀬にうつはあやうき世を渡りつゝ
柚山のみたちに有をいかたしのくたす早せもさそなくるしき
山よりも水よりも猶よの中の人の心の道そさかしき

清溪照孤影

朝な〳〵あかくむたひに老らくの影みる谷のみつからそうき
谷川のなかれをむすふたひことにあふ伴や友となるらん
我さへにすますなりせは谷水の苔の下にや影も埋れん
わかむすふかけより外は友もなしすむもひとりの谷の下水
年をへて結ひなれたる谷水にしらぬ翁のかけそゝひ行

松多寺不見

陰ふかき松よりおくや寺ならんくるゝ山路に人歸る也
年をへてその宮寺の道とへは一夜なからの松もしけれる
行暮て尾上のかねも音たえぬ寺こそしられ松かせそ吹
松原のおくよりかねは聞ゆれとありとはえこそみねの古寺
幽なるかねのひゝきにしられけり松をへたつるおくの古寺

遠嶂收殘雨

此さとに晴ゆく雨の末みえて一むらくもるをちの山のは
雨はるゝ雲のとたえやたちぬはぬ遠山とりの衣なるらん
はれそめてみとりそふかきあま雲のよそになり行遠の山のは
雲のゐるとをちのみねや中空にはれ行雨のなこり成らん
ふりきつる雨かと思へはほともなくとをちの嶺に雲そ殘らぬ

落日沈沙頭

吹上のまさこもたかし夕日影かくろゝ山のみれとみるまて
みつしほの入日のかけのうつろひて紅くゝろ濱のまさこ地
白妙のほむけのあしの追風に夕日もなひく濱のまさこち
玉かしはみかくとそみる夕つく日ひかりをうつす吹上のはま
しほかせにまさこの山は雲消て日影かたふく吹上のはま

清風隔世塵

松風のふくもいとはしかくてこそ浮よのちりは遠さかりけれ
まつかせを知人にせん山ふかみこれそうき世の塵もましらぬ
山鳥の尾上の松のちりもせすうき世隔るかせのをとかな
心にもうき世のちりをのこさぬはいかにはらふそみねの松風
いかにしてうきよの塵をはらはまし松の風きく山なかりせは

衰鬢臨朝鏡

朝ことにみるかけもうしますかゝみいつ迄知らぬ翁なりけん（くもれたイ）
手にとりてみれはなけきのます鏡なにと面に年のへぬらん
翁さひみるかけもうしいにしへをてらす鏡にあらぬ物ゆへ
これそ此老となるもの朝な〳〵向ふかゝみにつもる白ゆき
いつのまに霜もをくらんあさな〳〵みれは鏡のかけそ替れる

瀑近夜疑雨

れ覺して雨かとそきく此里の枕になるゝ瀧のひゝきを
あらし山今は木葉のふらぬ夜も雨かとおもふたきの音哉
今更に涙もからす瀧の音も雨ときく夜の枕となりて
山さとになるゝ枕のたきの音は雨と聞夜そさらにさひしき
山さとのまくらにひゝく瀧つせはなれても雨の音かとそきく

鷺立斜陽天

舟よするうらのみなとの夕日影うつろふ水にさき渡る也
夕日かけ雨とふらしをかさゝきのいつくの空をさして行らん
かけうつるかたちをましえ夕つく日さすや河へにたてる白鷺
夕日さす遠山もとの秋の色にをのれまかはてわたる白鷺
ゆふつく日さすや河へにゆく舟のあとにも殘る鷺の一むら

山田級々高

ふもとまていなはの末をつたふらし岡の早田の秋の夕風
高よりひきゝになよふを山田の水の心に人ならはなん
吹まよふ山田のおもの秋かせにのほれはくたる雲のなみ哉
をのつからうへなる小田を餘りきてまかせぬ方もおつる山水
たら〳〵の霧の上なる小山田に秋のいなはの雲そ立そふ

僧談悟色空

とく法の花の下ひも色もかもむなしきほとを辞てそしる
夢のよをかたりあはせてしほる哉同しみ山にすみそめの袖
是も又むなしとそきく墨そめの色を深しとおもふ心は
とくのりを又とく人のなかりせはむなしき道に猶やまよはん
驚かす友なかりせは夢の世をまことにすむとみてややみなむ

朗詠百首

春部

池凍東頭風度解

はるの池の汀をわたるこち風に氷のくさひうちとけにけり

東岸西岸之柳遅速不同

春のくるそなたやまつはめくむらむこのもかのもの岸の青柳

望長安城之遠樹百千万茎薺青

おちかたの遠き梢をみわたせはてことに摘し若菜なりけり

浅紅嬋娟仙方之雪媿色

たちぬはぬ衣にかゝる雪の色もはつらんものを梅のにほひは

山桃復野桃日曝紅錦之幅

もゝの花ところ／＼に咲ぬれは野にも山にもにしきをりかく

花明上苑軽軒馳九百之塵

花みにといそく車はすきぬれと我のみゆかて思こそやれ

不明不暗朧々月

くまもなくさえぬものゆへ春の夜の月しもなそや朧けならぬ

西楼月落花間曲

春の夜の有あけかたの月をみて花になつさふ宮のうくひす

留春春不駐春帰人寂寞

留むれと春はとまらて帰りにきいかゝはすへきけふの淋しさ

□□□□□□□□□□□

あけかたに春の夜たゝもなりぬれは西にそ廻る星のやとりは

夏部

生衣欲待家人着

ぬきかふる人をまつらむ春すきて夏のけさたつ蝉の羽衣

班婕妤團雪之扇代岸風兮長忘

川風のきし吹夏の夕すゝみいつらあふきのゆくゑしるらむ

燕昭王招涼之珠當沙月而自得

空はれていさこを照らす月の色を涼しき玉のかけかとそ思ふ

五月蟬聲送麥秋

神まつる卯月もたては五月雨のそらもとゝろになく蟬の聲

五月菖蒲素得名

むかしより行かたもなき沼水にいかてあやめの名を流しけむ

一聲山鳥曙雲外

あし曳の山郭公一聲をあけゆく空のよそにこそきけ

池冷水無三伏夏

こやの池のみきはゝ風の涼しくてこゝには夏をしらてふる哉

松高風有一聲秋

松風のこすゑを渡る一こゑにまたきも秋のけしきなるかな

六月瀬聲似秋雨

みな月のかはせをたゝくさゝ水の音にそかよふ秋のむらさめ

螢火亂飛秋已近

夏たけて秋もとなりになりにけりすたく螢のかけをみしま江

秋部

二星適逢未叙別緒依々之恨 五夜將明頻驚涼風颯々之聲

たまさかに秋の一夜をまちえてもあくるほとなき星合の空

秋夜待月纔望出山之清光
あれやさは隈なき月のいつるかけ山のまに〳〵またれ〳〵て
秦甸之一千餘里凛々氷鋪
あまのはらそらさえ渡る月かけにいく里まてか氷しくらむ
胡鴈一聲秋破商客之夢
鴈かねはこしちにやとる旅人のまとろむ夢やおとろかすらん
不是花中偏愛菊此花開後更無花
一すしに咲にうつろふこゝろかはこの後花のなけれはこそは
鷓胡背上數片之紅纔殘
しもをいとふ鳥のうはけのくれなゐは散し紅葉の殘なりけり
秋夜長夜長無睡天不曙
さらぬたにあくろひさしき秋の夜を物思ふ人の心つよさよ
巴峡秋深五夜之哀猿叫月
月の入かた山かけになく猿はふけ行秋をものかなしとや
縱以崤函爲固難留蕭瑟於雲衢
天のはら雲のかよひちとさしせよ空に暮行秋やとまると

冬部

十月江南天氣好可憐冬景似春華
神無月いりえの南そのさとは空にそ春のかけをしろらん
曉入梁王之苑雪滿羣山
くれ竹の夜もあけかたに見わたせは山の高根に雪こえにけり
山深感動先侍四皓之鬢邊
年ふれとみ山をいてぬおいらくのもとゆひことに霜や置らむ
暖泉流處草冬青
冬くれとなを霜かれぬさゐたつま氷らぬ水のぬるきあたりは
爐火欲銷燈欲盡
埋火の消るのみかは窓の前にそむくろかけもかゝけつくしつ
香爐峯雪撥簾看
こゝなからやとの簾を巻あけてみるおもしろき山のすゑふり
龍頷珠投顆々寒
風やこれあられの玉をもて來らむちろかす毎に寒さまさるは
四時零落三分減
いつちとて春夏秋のすきぬらむとまるは冬のかけはかりして
急於流水難迴浪
みつのこと流てすくろとしなれはゆく月なみのたち歸らめや
白頭夜禮佛名經
年暮れてかしらに雪はつもりつゝみよの佛の御名をこそきけ

雜部

新豐酒色清冷鸚鵡盃之中
もろ人の涙にうかふさかつきのそこまて澄るおほみきの色
韓康獨往之棲花藥如舊
ひとりのみ詠るやとの木末にも花はむかしにかはらさりけり
僕夫待巷雞籠山欲明
かへれとや我まつ人を思ふ覽よこ雲わたる山もしろめは
嚴粧金屋之中青蛾正畫
たはれめか朝けのかほをかさるとてけさうやりとをけさやあくらむ
三壼雲浮七萬里之程分浪
みつのしま雲ちはるかにわけたれは思ひ〳〵にかくる白浪

傳氏巖之嵐雖風雲殿夢之後
あたにみし夢よりさきはしらさりき覺てそ人は思ひあはする
且南暮北鄭太尉之渓風夜人知
たに風のあした夕にかはるかなゆきかふみちに心せんとや
遊子猶〔殘イ〕行於殘月函谷鶏鳴
あそふ子の入月かけなしとふとてゆけは關ちに鶏の聲しつ
南望則有關路之長行人征馬駱驛於翠簾之下
たますたれあけてもみつるあら□□駒うちなめてすくる旅人
鷄人曉唱聲驚明王之眠
すへらきのかしこき夢を驚かせともの宮つこあけぬとならは

祝部

萬歳千秋樂未央
ちゝの秋よろつの年をへぬれとも思ふ事なきみとはしらなん
尊猶南面松花色十廻
千年ふる松は十かへり花咲とおもかはりせぬ君かみよかな
不老門前日月遲
年ふれとおいせぬかとをたてたれは過る月日もしられさりけり
谷水洗花汲下流而得上壽者三〔十イ〕百餘家
しらきくのした行水をくむ人はいのちなかれの末はるかなり
本朝之延曆延喜胤子多我君亦胤子多
古へのひしりの御門のみならす君もなかれのかすよしらすも

管絃部

第一第二絃索々秋風拂松而疎韻落
琴の音のしらへにいかてかよふらん松のこすゑをはらふ秋風
管絃之在長曲怨不關於伶人
所せやかなつる袖も久しきにいかにつきせぬことのねそこには
慈岡類於相求雖渇去觴之徳春囀
わかれ行雲井のかりのなく聲にてもさえつる春の鶯
一聲鳳管秋驚秦嶺之雲
すみ登るふえのしらへにはひとこゑに嶺の白雲おとろかしけり
萬葉宛轉夢歟非夢歟
うつゝとも夢共えこそ聞わかれふきあはせたる笛のこゑ〳〵

閑居部

不獨記東都履道之里有閑居泰〔秦イ〕適之叟亦令〔今イ〕知皇〔大イ〕唐太和之歳有理世安樂之音
ひとりゐて日なのみことは記し置む治る世なも人にしらせん
幽思不窮深巷無人之處
さ夜更てゆく人もなき道すからいつくにかよふ心とかしる
愁腸欲斷閑窓有月之時
ひとこすてさひしき窓にある物はさし入月の影はかりのみ
陶門跡斷春朝雨
くる人のあとそともしき我かとに雨ふりこむる春のあしたは
陵園閑夜月前心
春のおもひ秋のあはれそつきもせぬひとりそえ行月を詠て

羇旅部

鳳凰池上月送我過商山

水のおもに宿りし月のこよひさは秋の山ちをともにすきぬる

曉入長松之洞巖泉咽虢嶺猨吟

あか月はいはもる水もむすふ也山とよむまてましらなゝきそ

蒼波路遠雲千里

はる〳〵と雲のはつかにみわたせは漕ゆく舟の波ちいくらそ

白霧山深鳥一聲

みねつゝき霧たち渡るみ山へにきけは稀なる鳥の聲かな

壯士衣單易水秋

ものゝふの衣やうすき秋風にかは瀬も寒きたひれしてけり

述懷部

恨同伯鸞歌五噫而將去

なけくこと一つのみにもなかりけり人の心や我身なるらん

顧不運之質多積淪落之悲

いかにこは我身のうきになしはてゝさのみこりつむ歎なる覽

范蠡收責棹扁舟以逃名

さゝなみやうかふ小舟に棹さしてところせき世を漕離れにき

駿驥倚輈於吳坂馬鳴良樂知與不知也

顧みてひく人なくはやかてさはなつみし駒やいはえさらまし

昨日山中〔之〕木才取於已「諸イ」

いかにさは思ひさためむ世中をとてもかくてもありあけの月

餞別部

前途程遠馳思於鴈山之暮雲

ゆく道のほとをもえこそしら雲のゆふゐる山に眺めをそする

李門淚高人送我何日

としことに人をのみこそ送りつれいつまた人の我を送らむ

泣尋沙塞出家鄉

なく〳〵そしらぬ越ちへ尋いるふるき宮古をいつるわか身は

昔爲鴛與鴦今作參將商

思ひきやなしの契をたちはなれほとは雲ゐのやとりせんとは

潯陽江畔夜送客

いさよひの月も入江の夜ふかきにいつくをさして漕はなる覽

戀部

爲君薰衣裳君聞蘭麝不馨香

うらめしやそての匂ひはかはらぬよ人のこゝろの昔にもにぬ

南翔北嚮難付寒溫於秋鴈

ひきつれて秋は南へゆくかりよ□□たまつさを人につたへよ

可憎病鵲半夜驚人

一人ぬるやもめ烏はあなにくやまた夜深きにめをさましつる

楊貴妃歸唐帝思

面かけを戀ふる我身に添をきて命はのへの露と消にき

李夫人去漢皇情

たまかへす草をもうへし中々にみるに思ひのしけさまされは

懷舊部

金谷醉花之地花毎春匂而主不歸

ちれとまた花はさきけり春ことにかなしや人の「家イ」行てかへらぬ

南楼嘲月之人月與秋期而身何去

年ことに月と秋とはめくりきてみし人の身はいつちなるらむ

王子晉之昇仙後人立祠於緱嶺之月

このみれにたつるやしろは昔みし人を忍ふのものとなりけり

遺文三十軸軸々金玉聲

水莖のあとはむかしにかはられはみるに涙のかはくまそなき

東平王之思舊里也墳上之風靡西

ふる里をなを戀しとやおもふ覧そなたへなひくとりへの丶草

無常部

未及暮景蜉蝣之世無常

いかにとよ常有へしと思ふかは夕かけまたぬかけろふのよを

孟嘗君之多樂猶泣雍門之微吟

琴のれに物のあはれをしらさりし人の心をひきかへしてよ

生者必滅釋尊未免栴檀之煙

生れてもしぬるうきよのためしにはいて丶そいりし中空の月

樂盡哀來天人猶逢五衰之日

空なとふ天つ乙女も限あれは花のかさしはしほますもあらし

夕爲白骨朽郊原

はかなしやかはれは野邊に曝されていつらけさまて有し姿□

法文部

十方佛土之中以西方爲望

かりのみなしはし此世にやとし置て心は西にはこふとなしれ

昔忉利天之安居九十日刻赤栴檀而摸尊容

隈もなき月のみかほをうつしもて歸らぬ程のかたみとそせし

十二因縁心裏空

世の中に人となるよりおはりまて思へはなにかまこと也ける

念極樂之尊一夜山月正圓

夜もすからあはれ心のすむ月にみたのみかほをよそへたる哉

願以今生世俗文字業狂言綺語之誤翻爲當來世々讃佛乘之因轉法輪之縁

はかなくも風にあさむく言の葉をまことの道にひろかへしてむ

此朗詠百首者。壬生二品家隆卿眞跡也。而本文未見類。故人之注釋尤可握翫者乎。

黄門源通村

右以土浦侯秘本書寫挍合畢

群書類從卷第百七十六

和歌部三十一百首十

俊成卿文治六年五社百首

年ころ人の家々歌合にも。又或神社佛寺にも。ことをよせつゝ歌合とすゝめて。先判をうけむと申によりて。おほえぬよしなしことをのみかきつゝる事のやくなくおほえて。ちかひたるよしを申て。せすなりて後。よしなき判をのみかきつもりたる事を思ひて。春日日吉の社に歌合をしてまいらせむとて。人々すゝめ侍しかは。上達部たちもおほく事うけはしなから。なにとなくをくられさりしかは。今はとけかたかるへき事になるへしとて。そのかはりに兩社にあやしくとも。百首の歌をたによみて奉らむと思ひなりて。文治五年より思ひ立て。よみつられ侍しほとに。住吉の社賀茂なとにもまいらせてやはと思ひ。又太神宮にまいらせはとて。五社の百首とて讀そへて。文治六年の春そ清書てたてまつりはむへりし。

立春

太神宮

いつしかと霞の衣たちかけてみもすそ河も氷とけ行

賀茂

つらゝゐし賀茂の川上うち解て瀬々の岩波春とつく也

春日

古郷のまたふるとしに春たてはかすかの山そ先かすみける

日吉

春は先にほの海をやわたるらむ霞をよするしかの浦かせ

住吉

住よしの浪より春や立つらむ松ふく風もあらたまるなり

子日

君を祈る子日もあまた過にけり哀とおもへ春日のゝ松

君か代を野へに出てそ祈りつる初子の松の末もはるかに

春日野におふる子日の松はみな千世をそへつゝ神やひくらむ

さゝ波や志賀のはま松ふりにけり誰世にひける子日成蘭

子日には野へならねとも住よしの松のかけにて祈るはかりそ

霞

霞こそたちこめたるを鈴鹿山春になるとはいかにいふらん

立かへりむかしの春のこひしきは霞をわけし賀茂の曙

かつらきやつくりさしける岩橋も春のかすみは立わたりけり

あさみとり四方の山邊にうちなひく霞や春のすかた成らん

明石かたゑしまをかけてかすめともかすみのうへも沖つ白浪

鶯

谷を出て心たかくそうつるなる神路の山の鶯のこゑ

鶯の音はかはられと神山に春を告るはうれしかりけり

年を經ておはれとそ聞鶯の宿をもわかす春をつくらん

關こゆる春のつかひや行やらぬ音羽の山のうくひすの聲

さらねとも難波の春はあやしきに我しりかほに鶯の鳴

若菜

今日とてやいそなつむらん伊勢嶋やいちしの浦の蜑の乙女子

しつの女かかはたの原につむせりも誰爲にとて袖ぬらすらん

若菜には數ならねとも春日野におほくの年をつみてける哉

いさやこら若なつみてん根芹生るあさ澤小野は里遠くとも

あやなくも摘に來にけるわかなかな澤のねせりは袖ぬらし鬼

殘雪

おなしくは花の咲まて待つけよ吉野の山の峯のしら雪

しろたへの手向の木綿にまかふかなかた岡山の雪の村消

よしの山ふもとは霞たなひけとまた雪深し岩の陰道

神山や杉のしけみの去年の雪きえぬしるしを殘す成けり

松かけに久しく消ぬしら雪はこそのかたみに神や殘せる

梅

一木たに匂ひは遠しもろこしの梅咲峯を思ひこそやれ

色につき匂ひにめつる心とも梅かえよりやうつりそめ劔

宿のうちに軒はの梅の香をみてゝ槇の板戸もさゝぬ頃かな

契りあれや花の中にも梅はなかゝる匂ひににほひそめけん

難波津はむかしも梅の咲ければ蜑の笘やも風かほる也

柳

たをやめのよとての姿おもほえてまゆより青き玉柳かな

玉柳にほふともなき枝なれと緑の色のなつかしきかな

あさみとりさほの河邊の玉柳つりをたれけん糸かとそみる

露ぬける春の柳はさほ姫の玉のすかたをみするなりけり

あさみとりをのか色とやおもふらん柳の枝に鶯のなく

早蕨

誰ために忍ふの岡の下わらひ畑はたてすもえわたるらん

たのみこししめちか原の下蕨したにもえても年へにし哉

いにしへを思ひこそやれ山ふかみふたり折ける春の早蕨

炭かまの烟になるゝ小野山は春の蕨もまつやもゆらん

つらゝゐしたるひの杜の早蕨の折にたにやは人のこさらむ

櫻

なをもおもへ櫻の宮に祈りみむ花をちらさぬ神風もかな

わすられぬその神山の花盛よもすからみし春のよの月

是そ此ならの都の花さかりこりかさなりて匂ふ白雲

山櫻ちりに光をやはらけて此世に咲る花にや有らん

吉野山春の雪とはみえなから風こそかほれ花にや有らむ

春雨

春雨はみとりの空をうつしもて野への色をもそむるなりけり

草も木もあまねく惠春雨に袖はぬれてもかひなかりけり

春雨はとひくる人も跡たえぬ柳の門の軒の糸水

つく／＼と濡そふ袖におとろけは降ともみえぬ春雨そふる

春雨は軒のいと水つく／＼と心ほそくて日をもふるかな

春駒

小笠はらやけのゝ薄つのくめはすゝろにまかふかひの黑こま

若草を妻とや駒は思ふらん野をなつかしみはなれさりけり
故郷のみかきか原のはなれこまさこそ野かひのあれてみゆ蘭
とりつなけはなれもはてし春駒のあるゝは草になつく成けん
はむ駒のあし毛にのみもみゆる哉難波の春や深く成らん

歸鴈

秋はきて春は常世にかへる鴈夏や涼しきすみか成らむ
歸鴈こゑに涙やたくふらんなかむる袖に露の落そふ
何となく思ひそ送る歸る鴈ことつけやらん人はなけれと
秋きてもなるとはなしに歸るかり春はわかれの心地こそすれ
春の空ことちにみえてかへる鴈松の風にそ聲かよふなる

呼子鳥

あはれとは夜の鶴をそおもひしを春の山にも呼子鳥なく
人の思ひたゝすの杜の呼子鳥心のやみは空に知らん
老の身をいとはぬ人はかた岡に珍らしく鳴呼子鳥哉
あはれなり春の山ちの呼子鳥花の陰にを人とまれとや
おもふとはいはせの杜の呼こ鳥あはれしれらん人のきけかし

苗代

くもつ川せき入てまける苗代に秋の空こそかれてみえけれ
賴もしなみたらし河をせきかけてみしめはへたるみと代の種
しめはふる苗代かきのけしきまて植ん田面のほとそしらるゝ
花のちる山河せける苗代に賤かこゝろもみつへかりけり
賤かせくなはしろ水のなかれまて難波わたりは心ありけり

菫

三熊野のはまゆふわけて咲菫かされて色のむつましき哉
むらさきの野へのしは生のつほ菫かへさの道もむつましき哉
いにしへの籬の野らのつほ菫むかし戀てや露けかるらん
菫さく淺茅か庭はふみわけてとふ人なきもさもあらはあれ
菫咲遠里をのゝ朝露にぬるともつまむ旅のかたみに

杜若

こなきつむあかたの井戸の杜若花の色こそへたてさりけれ
神山やおほたの澤のかきつはた深きたのみは色にみゆらん
紫の色はふかきをかきつはた淺さは小野にいかて咲らむ
春ふかき沼江の水の岩垣になをかきこむる杜若哉
こやの池の汀にうつる杜若あしのかこひをまはら成とや

藤

あはれともうしとも思ふ藤の花なとかしつえに我をなしけん
藤のはな雲にまかへて散したに雨そほふれる夕暮の空
藤の花うちのもろ人見し時も雲の衣をつられしをはや
當初保延之頃於勸學院行藤花宴之時爲雲客交其席賦詩故云
志賀の山松にかゝれる藤のはな浦のさゝ波こすかとそみる
住の江の松に藤こそ咲にけれ梢にかゝるむらさきの浪

歎冬

むかし誰うへはしめてか山ふきの名をなかしけむ井出の玉水
さくら散春の暮ゆくもの思ひもわすられぬへき山吹の花
駒とめてなを水かはむ山吹の花の露そふゐての玉河
やまふきの名をは冬とそ聞しかと春のゆふへの風にこそさけ
ゆく春をいつちさへともいはしとや口なしに咲山吹のはな

三月盡

けふくれぬ夏のこよみを巻返しなを春そとも思ひなさはや

さりともなかくおしむ共わかれゆく春も心にあはれならしや
年をへて春のおしさはまされとも老は月日のはやくも有哉
行春はしらすやいかに幾かへりけふの別をおしみきぬらむ
かへる春けふの舟出はむやゐせよ猶すみよしの松陰にして

更衣

けふも又めつらしき哉百敷や雲の上人衣かへして
花の色はわすれすなから夏ころも薄きにも又うつる心か
花の色をかふるならひのつらきかな昔は春やおしまさり劔
墨染の袖はよそなる花の色を人の爲にもなをおしむかな
たれも猶はなの色をは身にしめて人めはかりや蟬の羽衣

卯花

卯花のさける山路の夕月夜ひかりは雪のそふるとそ見る
中河やわたりに咲る卯花はかきねつゝきに波そ越ける
夕月夜あやしくことにさやけきはうの花さける山ち成けり
うのはなの波のしからみかけそへて名にも越たる玉川の里
卯のはなのかきねは雪のあしたにてよその梢は夏の山さと

葵

あふひ草日かけに靡く心あれは天津やしろもあはれかくらし
みあれひく今日の葵をみても先神にたのみをかけそふる哉
哀にそ草のなかにももろかつら神のかさしとひかれそめける
よそなからけふの日吉の祭にも賀茂のみあれは葉なりけり
いかなれは日影にむかふあふひ草月のかつらの枝をそふらん

郭公

またれてもたゝには過す時鳥ことかたらふそあはれ成ける
夏ことに契とならは郭公かくしも人になとまたるらん
郭公さやかにちかく啼こゑはにこれる世にはあはすも有かな
なくさむるかたなからまし夏のよをあはれにもとふ郭公かな
子規はな立花になく時は聲さへにほふ心ちこそすれ

菖蒲

奥山の谷のうきぬの菖蒲草ひく人なしにねやなかるらむ
瑞籬やさ月のけふの御戸ひらきかさる菖蒲のかさへなつかし
をしなへてふかぬ宿なき菖蒲草いかによと野にさのみ殘らん
みくりくるつくまの沼の菖蒲草ひけとつきせぬねこそ有けれ
難波人芦まの菖蒲あしのやにやかてそへてや今日はふくらむ

早苗

伏見津や澤田の早苗とる田子は袖もひたすらみしふつくらん
おほあらきのうき田の早苗老にけり杜の下草とりなまかへそ
早苗とる鳥羽田の面をみ渡せは幾なみあらんた子のたかさよ
かるもかくゐたのこひちに立田子は早苗よりこそそほつ也覽
種まきしわさ田の早苗うへてけりいつ秋風のふかんとすらむ

照射

ますらおは鹿に心をかけつろや忍ふの山に夜をあかすらむ
夜を重ねともしになつむますらおは鹿をまつをや燒つくす覽
雲ゐまて行螢かとみえつるはたかまの山のともし成けり
ますらおは幾よともしに迷ふ覽ほくしもしての山はあらしを
ともしにもしなか鳥とやますらおかゐなのは山を今忍ふらん

五月雨

五月雨はおふの浦なし浪越てなりもならすもしらぬ頃哉
さみたれは岩波あらふ貴船川かは社とはこれにそ有ける
五月雨は水上まさるいつみ河かさ木の山も雲かくれつゝ

若草を妻とや駒は思ふらん野をなつかしみはなれざりけり
故郷のみかきか原のはなれこまさこそ野かひのあれてみゆ覧
とりつなけはなれもはてし春駒のあるゝは草になつく成けん
はむ駒のあし毛にのみもみゆる哉難波の春や深く成らん

歸雁

秋はきて春は常世にかへる雁夏や涼しきすみか成らむ
歸雁こゑに涙やたくふらんなかむる袖に露の落そふ
何となく思ひぞ送る歸る雁ことつけやらん人はなけれと
秋きてもなるとはなしに歸るかり春はわかれの心地こそすれ
春の空ことちにみえてかへる雁松の風にそ聲かよふなる

呼子鳥

あはれとは夜の鶴をそおもひしを春の山にも呼子鳥なく
人の思ひたゝすの杜の呼子鳥心のやみは空に知らん
老の身をいとはぬ人はかた岡に珍らしく鳴呼子鳥哉
あはれなり春の山ちの呼子鳥花の陰にを人とまれとや
おもふとはいはせの杜の呼こ鳥あはれしれらん人のきけかし

苗代

くもつ川せき入てまける苗代に秋の空こそかれてみえけれ
賴もしなみたらし河をせきかけてみしめはへたるみと代の種
しめはふる苗代かきのけしきまて植ん田面のほとそしらるゝ
花のちる山河せける苗代に賤かこゝろもみつへかりけり
賤かせくなはしろ水のなかれまて難波わたりは心ありけり

菫

三熊野のはまゆふわけて咲菫かされて色のむつましき哉
むらさきの野へのしは生のつほ菫かへさの道もむつましき哉
いにしへの雛の野らのつほ菫むかし戀てや露けかるらん
菫さく淺茅か庭はふみわけてとふ人なきもさもあらはあれ
菫咲遠里をのゝ朝露にぬるともつまむ旅のかたみに

杜若

こなきつむあかたの井戸の杜若花の色こそへたてさりけれ
神山やおほたの澤のかきつはた深きたのみは色にみゆらん
紫の色はふかきをかきつはた淺さは小野にいかて咲らむ
春ふかき沼江の水の岩垣になをかきこむる杜若哉
こやの池の汀にうつる杜若あしのかこひをまはら成とや

藤

あはれともうしとも思ふ藤の花なとかしつえに我をなしけん
藤のはな雲にまかへて散したに雨そほふれる夕暮の空
藤の花うちのもろ人見し時も雲の衣をつられしをはや

當初保延之頃於勸學院行藤花宴之時爲雲客交其席賦詩故云

志賀の山松にかゝれる藤のはな浦のさゝ波こすかとそみる
住の江の松に藤こそ咲にけれ梢にかゝるむらさきの浪

欵冬

むかし誰うへはしめてか山ふきの名をなかしけむ井出の玉水
さくら散春の暮ゆくもの思ひもわすられぬへき山吹の花
駒とめてなを水かはむ山吹の花の露そふゐての玉河
やまふきの名をは冬とそ聞しかと春のゆふへの風にこそさけ
ゆく春をいつちさへともいはしとや口なしに咲山吹のはな

三月盡

けふくれぬ夏のこよみを卷返しをを春そとも思ひなさはや

さりともなかくおしむ共わかれゆく春も心にあはれならしや
年をへて春のおしさはまされとも老は月日のはやくも有哉
行春はしらすやいかに幾かへりけふの別をおしみきぬらむ
かへる春けふの舟出はむやゐせよ猶すみよしの松陰にして

更　衣

けふも又めつらしき哉百敷や雲の上人衣かへして
花の色にわすれすなから夏ころも薄きにも又うつる心か
花の色をかふるならひのつらきかな昔は春やおしまさり覽
蠶染の袖はよそなる花の色を人の爲にもなをおしむかな
たれも猶はなの色をは身にしめて人めはかりや蟬の羽衣

卯　花

卯花のさける山路の夕月夜ひかりは雪のそふるとそ見る
中河やわたりに咲る卯花はかきねつゝきに波そ越ける
夕月夜あやしくことにさやけきはうの花さける山ち成けり
うのはなの波のしからみかけそへて名にも越たる玉川の里
卯のはなのかきねは雪のあしたにてよその梢は夏の山さと

葵

あふひ草目かけに靡く心あれは天津やしろもあはれかくらし
みあれひく今日の葵をみても先神にたのみをかけそふる哉
哀にそ草のなかにももろかつら神のかさしとひかれそめける
よそなからけふの日吉の祭にも賀茂のみあれは葉なりけり
いかなれは日影にむかふあふひ草月のかつらの枝をそふらん

郭　公

またれてもたゝには過す時鳥ことかたらふそあはれ成ける
夏ことに契とならは郭公かくしも人にな とまたるらん
郭公さやかにちかく啼こゑはにこれる世にはあはすも有かな
なくさむるかたなからまし夏のよをあはれにもとふ郭公かな
子規はな立花になく時は葉さへにはふ心ちこそすれ

菖　蒲

奥山の谷のうきぬの菖蒲草ひく人なしにねやなかるらむ
瑞籬やさ月のけふの御戸ひらきかさるる菖蒲のかさへなつかし
なしなへてふかぬ宿なき菖蒲草いかによと野にさのみ繁〔茂ノ・〕らん
みくりくるつくまの沼の菖蒲草ひけとつきせぬねこそ有けれ
難波人芦まの菖蒲あしのやにやかてそへてや今日はふくらむ

早　苗

伏見津や澤田の早苗とる田子は袖もひたすらみしふつくらん
おほあらきのうき田の早苗老にけり杜の下草とりなまかへそ
早苗とる鳥羽田の面をみ渡せは[illegible]なみあらんた下のたかきよ
かるもかくゐたのこひちに立田子は早苗よりこそそほつ也鳬
種まきしわさ田の早苗うへてけりいつ秋風のふかんとすらむ

照　射

ますらおは鹿に心をかけつるや忍ふの山に夜をあかすらむ
夜を重ねともしになつむますらおは鹿をまつをや燒つくす覽
雲ゐまて行螢かとみえつるはたかまの山のともし成けり
ますらおは幾よともしに迷ふ覽ほくしもしての山はあらしを
ともしにもしなか鳥とやますらおかゐなのは山を分忍ふらん

五月雨

五月雨はおふの浦なし浪越てなりもならすもしらぬ頃哉
さみたれは岩波あらふ貴船川かは社とはこれにそ有ける
五月雨は水上まさるいつみ河かさ木の山も雲かくれつゝ

さみたれはなからの山も雲とちてしかの浦舟篷くちぬらん
有馬山雲まも見えぬ五月雨は出湯の末も水増りけり

盧橘

雨の後はな立花を吹風に露さへ匂ふ夕くれのそら
いにしへを忍ふ心をそふるかなみおやの杜ににほふ立花
古郷よいかにむかしを忍へとて花たちはなの風に散らん
さ月こそはな立花もにほひけれ春を暮ぬと何おしみ劔
住の江に花たちはなの匂ひけり松もやむかし思ひ出らん

螢

夏むしのはかなき身よりいかにしてくらきを照す契有けん
わか玉もあくかれぬへし夏虫のみたらし河にすたく夕暮
ともしけつ光をみるもあはれなりあれにし道の螢成とも
なかむれは心もつきぬゆく螢窓しつかなる夕くれの空
なつ虫のなたの鹽屋にすたく夜は蜑のたく火のしけくも有哉

蚊遣火

かやり火の烟はかりや山かつの宿をしらるゝよそめ成らん
あはれさを人見よとても立さらむ煙淋しき賤か蚊遣ひ
蛙なくかひやに立る夕けふり賤かしわさも心すみけり
山かつのふせやの床の蚊遣火もけふりはおなし雲と成らん
山かつのしわさにも猶いらむとや埴生のこやもかひたてゝ皃

蓮

夏の日も心の水をすませとや池のはちすに露そ涼しき
野へになくおなし露ともみえぬかなはすの浮葉にやとる白玉
はちす咲池の夕風にほふなり浮葉の露はかつこほれつゝ
はちすさき水さへ匂ふ夕くれは身をかへてみる心ちこそすれ
浮草のすゑより風は吹なれと池の蓮そ先かほりける

氷室

冬の後夏もよりこぬ氷室山秋やはしめて時を知らん
岩かけや松かさきとのひむろ山いつれ久しきためし成らむ
春日山ふるき氷室の跡みるも岩のけしきは猶そ涼しき
ふゆとちし岩戸あけても氷室もり夏はとをさぬ關ち成けり
春も過夏たけぬれと氷むろ山冬をおさめてをける成けり

泉

まし水のいはもる聲を夜きけは枕のしたの心地こそすれ
ふりにける朧の清水結ひあけて昔の人の心をそくむ
玉ほこの石井のし水手にむすひかくても夏は過ぬへき哉
いつくにか夏はよりこぬ山陰や岩もる清水宿しはしかせ
萬代も御法のなかれ絶しとや龜井の水の清くすむらむ

六月秡

けふも誰五十鈴の河に御秡してあらふる神をなこし成らん
思ふ事今はみな月はてぬらんみたらし川に御秡しつれは
水上に秋や立らむ御秡川またよひなから風のすゝしき
御秡する麻のたちえの靑にきてさはへの神もなひけとそ思ふ
おなしくは難波の浦に出てこそあしてふ事は御秡にもせめ

立秋

いつしかも今朝は袂のかろきかな秋は衣に立にそ有ける
けさみれは嵯峨のゝ露も色つきて嵐の山に秋風そ吹
秋ははや立田の山の山おろしの麓のさとにつくる成けり
あきのくる曉かたとおもふよりやかて露をく苔の袖かな
須磨の關秋のはつ風こえにけり敷津の浪の音もかはれる

七夕

たなはたや天の川よりかよひけむ誰か名つけし星合の濱
七夕のあふよのそらの更るにそ秋の心はくたけそめける
天河ほしあひの空なうつすより秋はことなるおりとみえけり
契けむ秋のはしめよ天河心もふかしほしあひの空
織女のとわたる船のかちの葉に幾秋かきつ露の玉章

萩

ものゝふの入野のはらと知なから萩咲ぬれは鹿の鳴らん
山田もるかり庵に眞萩咲ぬれははなにそうつも立る成けり
露しけき宮木か原の萩さかりにしきの上に玉そ散ける
身にしむる秋とは萩の名成けり露に花咲月に鹿なく
春といひし人にみせはや津の國の遠里小のゝ秋萩の花

女郎花

女郎花露なは玉のかつらにて霧のまかきに立かくるらん
たみなへし虎ふす野へに匂ふ共おらてはいかゝ人のすくへき
すか原や伏見の野への女郎花誰になれてかけさは露けき
女郎花色にめつとはいひなからさのみやの〻への露にしほれむ
あはれなる蓬かやとの女郎花思ひしほれて露けかるらむ

薄

過かてに我こそみつれ花すゝきまれくは風になひくなりけり
何事なおもひみたれて糸薄ほに出なからむすほふるらん
露むすふあたの大野のはな薄何まねくらむ袖ぬらせとや
出にけり入野の原のはつおはな誰か枕にしなへてもせん
はりまかたいなみの野への花薄むら〳〵よする波かとそみる

苅萱

神□やみやの、はらのかるかやなかられて秋も逢人物かは
はし鷹やはつとやたしの秋風にまたきしほれぬ野への苅かや
哀なり野へのかるかやみたれても下葉はしはし露とまりけり
なたしとてあさのよもきは何ならす亂れてもあれ野への苅萱
昔より誰みまくさにしなふとて苅かやとしも名つけそめけむ

蘭

藤はかま草のまくらにむすふよは夢にもやかて匂ふ成けり
ふちはかま咲ぬる時そむさし野のわか紫の色もみえける
藤はかまおもひこそやれ花の時草の庵の秋の雨にも
藤はかま匂ふうてなもよそなりきあやなくふれし昔の袖には
秋のきてほころひにけり藤はかまうつりかこくも猶匂ふかな

荻

荻にしく秋のあはれはなかりけり野原の花は千くさなれとも
かくしもは秋ふく風もおもほえすくやしく宿に荻なうへつる
秋風の荻の葉わたる夕くれは身なわけて吹心ちこそすれ
いにしへはあはれと聞し荻の音もこともおろかに成にける哉
きゝなきし生田の杜の秋風も荻のはよりや身にはしみけん

鴈

いつしかと鴈はきにけり玉くしけ二見の浦の明かたの空
もろこしの涙ちや過し秋の鴈雲ゐにきてもからろなす也
なしれほす田面にきゐて秋の鴈たのか當世のものかたりせよ
かへる鴈又もあはしと思ひしなあはれに秋の空に聞かな
はつかりはみとりのかみの玉章なかきつらねたる秋の空哉

鹿

山ふかみ松のあらしのほかに又宿とふ物はきなしかの聲

あらし吹まかきの萩に鹿啼てさひしからぬは秋の山里
鹿のねはよそにこそきけ春日野は草の枕のものにそ有ける
心ある人いかはかりおもふらん秋の山邊の夜半の鹿の音
たのめをきて妻やこさらん棹鹿のまちかねやまの曉のこゑ

露

秋くれは玉串の葉に露をきて香をかくはしみかほるらんはや
秋のよもしは生の露をふみわけし猶そのかみの戀しかるらん
野へにこそ露はをくかと思ひしかやとりは苔のたもと成けり
花の枝もあさちか末もなく露のちれは心のまつくたくらむ
露を誰あたにいひけむ住の江の松の下葉の玉にそ有ける

霧

朝きりは勢田のなかはしこめてけりゆきゝの駒の音計して
霧はれぬふもとの里はをのつから人のとふさへ淋しかりけり
山里は野への眞萩をかきりにて霧のまかきに鶉なく也
なそやかくなかむるかたも霧こむる深山の里に心すむらん
朝霧に武庫の波ちを見わたせはほのかに成ぬあはち嶋山

槿

見し人のなきかおほかる世中に秋はかならすあさかほの花
月草はうつしの色もあるものを露たに殘せあさかほの花
槿の露も千世をやへぬへきと山路の菊にうへそへましを
あさかほを誰かはかなしといひをきし明れは咲ぬ秋毎にして
日影さすほとをもまたぬ朝かほはたゝ俤の花にや(そイ)有らん(けるイ)

駒迎

かけふちにあまたみえける逢坂の杉まを出るもち月の駒
霧原の駒もこゝろや晴ぬらん雲の上人あふさかにして
東路やいく山越しこまなれや關の岩かとなつまさるらん
逢さかの關の清水にことゝはむ幾夜かみつる望月の駒
夕霧のたちのゝ駒をひく時はさやかにみえす關の杉原

月

月よみの神にもいかて祈りみむ秋の空には雲なくもかな
久かたの月のみやこもかくやあらむ賀茂の河原の有明の空
あらさらむ後も心やなをすまん三笠の山の秋のよの月
此世には又なくさめもなきものを我をはしるや秋のよの月
たとふへきかたこそなけれ玉津嶋てらしかはせる住の江の月

擣衣

秋ふかく浦吹風にいせしまや蜑の笘やも衣うつ也
月きよみ千里の外に雲盡て都のかたに衣うつなり
野となれる秋の山風さむしとや衣うつなりふか草のさと
吹おろすひらの山かせ夜やさむきみつのはま人衣うつ也
衣うつ音こそ空にさえぬなれこやの篠やによや深ぬらん

虫

神風や竹のまかきの松むしは千世にちとせの秋やかされん
ありす河いつきの宮の秋の花千世をかれたる松むしの聲
わきてなをあはれなる哉いそのかみ古き宮古の鈴むしの聲
虫の音もよもきか本にしけゝれは野への旅ねはいふ方そなき
常よりも露しけしとや菫野へのたひねの床に啼らむ

菊

千々の秋も山路の菊は匂(かほるイ)ふなり神代より咲花にや有らん
みつかきやあたりに咲る菊よりや久しき秋の花と成けむ
秋くれてひとり咲たに有ものを二たひ菊の色をかふらん

かたそきや玉のみと野の初霜にまかひて咲る白菊の花
稿をへて思ひそ出る雲のうへの星にまかひし菊のこの花

紅葉

立田姫よもの山邊をそめさらは身にしむ秋の色を見ましや
神代よりいかに契りて立田ひめ秋の紅葉をかくは染覧
もみち葉のこきも薄きも立田姫心のほとそ深くみえける
旅衣にしきたちきぬ人そなき紅葉散かふしかの山越
住の江やかゝれる蔦の紅葉はゝ波も幾しほよりて染らん

九月盡

春もすき秋も暮るはかきりあるを又も逢みむことをのみこそ
いかゝせむ關の岩戸はかたむとも雲路に歸る秋のくれをは
都こそむかしうつらめ古郷は秋たにしはしとまらましかは
むしの音も鹿の聲をも聞捨ついかに暮行秋の心そ
ゆく秋の歸る雲ゐをなかむれは夕の空も涙ちなりけり

初冬

しくるとも神無月とは誰かいひし天照光かきりあらしを
かくこそは秋も時雨し空なれと今朝は嵐のはけしかるらむ
山里はかけひの水のつらゝゐて音つれぬにそ冬を知ける
冬くれは霜をけとてや山かつの園生いつきて庭と成らん
秋の後をそ心の殘りけるあらしの音のけさも悲しき

時雨

夕月夜かたふく空のむら時雨ひかりより散露かとそ思ふ
なかむれは心さへこそあくかるれ時雨るゝ頃の村雲の空
村雲の外山の峯にかゝるより麓の里は時雨てそ行
をのかやかて染し紅葉の散時はおなし聲にそ又時雨ける
うち時雨人の袖をもぬらす哉空もや秋の暮を慕ふらん

霜

あはれにも露とみしかと霜といひて冬のしるしに結ひをく覧
月のすむみたらし川の橋の霜玉しけるともみえ渡る哉
今朝みれはみのくま川は水こほり小篠か原は霜むすひけり
霜さゆる枯野の尾花あはれなりその雲まてしほれ通けん
初霜は降にけらしなしなか鳥ゐなのさゝ原色かはまるて

霰

山かせにたくひて夜半に降くるは霰は峯のものにや有らん
時雨せし雲のけしきはおなしくて空さえつるは霰なりけり
霜の上に霰ふる夜の冬の月裏そみける身をはいとはし
ふもとにはまたしくれとやおもふらんみ山の里は霰ふる也
月そすむ玉つくり江は霰ふり氷みかける名にこそ有けれ

雪

はまゆふも幾重か下になりぬらん雪降しける三熊野の浦
冬はこれ水の心の空にみちて氷れは雪の降にそ有ける
いつくかは雪のあしたのをろかなる猶限りなしみよしのゝ山
雲ふかし雪のみ山やこれならむ御法の末も絶しと思へは
空さむみ雲さえ／＼て降雪は冬のすかたをみする成けり

寒芦

しほ風に伊勢のはま荻うら枯て草の枕も霜そさえける
冬の池の芦の枯葉のみたれこそ鳰のうきすのたより成けれ
あとたにもなからの橋のわたりには枯葉の芦そかたみ成ける
難波かた芦のかれ葉に風さえて汀の田鶴も霜に鳴也
なには江や入江の芦は霜かれて月のやとりそくもらさりける

千鳥

伊勢の海清きなぎさに鳴千鳥聲もさえたる有明の空

河千鳥なれもやものはうれはしきたゝすの杜に行歸り鳴

月清み瀬々に氷やむすふらんさほの河原に千鳥なく也

ことはりやまのゝ入江に啼千鳥浦風さむきあり明の空

明石かた月の出しほやみちぬらんすまの浪ちに千鳥とわたる（鳴なりイ）

氷

冬なれは水の氷るは常なれとことにはすはの渡りをそ聞

貴船河岩こす波の氷りゐて冬そ静に月はすみける

やまとちや駒うちわたす山河の氷ふみわけかよひしなわか

壯年當初常參當社經凝寒故云

かつ氷かつはくたくる山川の岩まにむせふあかつきの聲

冬の池にやとれる月の光よりやかて氷りはむすふ成けり

水鳥

夜もすから鴛のうは毛をはらふにそ霜はまことに降物ときく

〔水鳥のいけになれたるけしきにそ哀をしれる宿はみえける〕

こやの池の芦のかれはの八重ふきやともれの鴛の住家成らむ

はらひあへぬ上毛の霜にいかにして鴛の青羽のかはらさる覧

浪のうへに消ぬ雪かとみえつるはむれてうかへる鷗なりけり

網代

田上や宇治の網代にもるゝ□てひをへん程もあはれいつまて

むかし誰宇治の網代をうちそめて今も心を人のよすらん

千早振うちの河長老にけりあしろは年もよるにそ有ける

月清み田上川のあしろ木は氷うちよする名にこそ有けれ

ひをのよる宇治の網代に舟とめて氷をかくる月をこそ見れ

神樂

かく山の榊の枝にゝきてかけそのかみあそひおもひこそやれ

千はやふる賀茂の社の神遊ひ榊の風もことにかうはし

吹たつる庭火のまへの笛のねは天の岩戸もさこそ明けめ

あなさやけあなおもしろとみゆるかなとる榊葉に霜のをく程

松風に和琴のねひゝきあひて庭火の笛も空にすむ也

鷹狩

風さむみかりはの小野を朝ふめは忍ふもちすり散りかふ

おほつかなとかへる鷹もいかならん狩はの小野のゆき暮の空

雪降ぬしはしやすへむ御狩野にしらふの鷹のこぬやまかへん

はかなしや交野の原に立雉子たえぬかりはとかつはみゆらん

みかりするかた野のをのに日はくれぬ草の枕を誰にからまし

炭竈

炭竈の山のおくまて見ゆるかな民のつとめやかきり成らん

すみかまのをのか畑の空さえて雪ふれは又かよふ旅人

遠かたや都のたつみ誰すみてまきの炭竈畑立らん

炭竈も氷室もちかき小野山は火と水とこそへたて成けれ

冬くれはをのゝ炭やききほひ出て時にあへりと思ひかほなる

爐火

埋火をかきおこさすは冬のよのね覺の床は友なからまし

有とたに人□□□□はいの下に何か思ひのなを殘るらん

年くれて有にもあらぬ埋火に老はつる身の程を知らん

うつみ火にすこし春ある心地してよふかき冬をなくさむる哉

山かつの丸木さしあはせうつむ火の世に有物と誰かしるへき

歳暮

月日のみなかるゝ水とはやけれと老の底より年はかへらす
おもひきや暮行年をおしみつゝ八十もちかくならん物とは
岩根こす八十宇治川の波よりもはやくも過る年のくれかな
けふことにつもる年波かさなりてへたゝり行はむかし成けり
けふことにいくとし涙を過ぬらんつもりの浦の濱松のきし

初　戀

うれしさを袖につゝまむ思ふ事みつの柏にけふそことゝふ
みしめひく卯月のいみをさす日より心にかゝる葵草哉
誰となきそらたきものゝ匂ひこそうきたる戀のしるへ成けれ
はしめより思ふ心はきはもなし法の道をもさこそいふなれ
袖ぬれぬしちのはしかきかきそめて末また遠き道芝の露

忍　戀

忍はすはほさても袖をみすへきにしほりそかぬる夜半のさ衣
いかにせんいは田の小野のしの薄ほにも出すや秋もくれなん
みせはやな賤のしのやのしの薄しのひ侘ぬる床のけしきを
みちのくの忍ふの里の近からは立かくれてもすまゝし物を
秋の野の萩のしけみにふす鹿の深くも人に忍ふ頃かな

不逢戀

いたつらにゆけともあはて歸る哉君はふせやにおひぬ物ゆへ
契あらは世々のあはれもいふへきをあはすは何か恨しもせん
逢事は渚によするうつせ貝むなしき波にぬるゝ袖かな
身をなけて生田の川にしつみても逢瀬なくては何にかはせむ
ぬる夜有て夢たにみえはそのつからあはする人もあらまし物を

初逢戀

朽はてし夜の衣をかはすかなしほとけしとやあはれ成とや
錦木の千束のかすにけふみちてけふの細布むれやあふへき
契あれやこよひ伏見の里にきて草の枕をかはしそめぬる
あふ坂の關守神に手向せしぬさのしるしはこよひ成けり
ひとりのみ歎し床を君か爲うちはらふにも袖はぬれけり

後朝戀

わかれつる床に心はとゝめ置て袂にまよふ春の明ほの
暮にもと契をけとも杣川や筏の床はなきそわひぬる
くれをまつ命さりともなからめや今朝の別れのなとや悲しき
あはてこし道の露にもまさりけり衣々になるしのゝめの空
浦千鳥入江の波に起侘てなきてそ出る有明のそら

過不逢戀

移りかはかされし袖に有なからぬれきぬとやはいひ放つへき
現にはあはぬけしきに難面くて見しをは夢にいひなさんとや
あさましや袖ぬれてこそ結ひしか又影みせぬ宿のまし水
名をたてゝ我つらきともいふへきに只戀しきそわりなかりける
うら山しあたちの峯のそりまゆみそりはてましを引かへしけむ

旅　戀

夢路にはなれし宿みゆ現にはうつの山邊の蔦ふける庵
露ふかき野原の草の枕こそ戀の涙もしのはさりけれ
わするなよ契しやとはいかゝあらん野にも山にも俤そたつ
夢にこそ都のこともみるへきに袖に波こすちかのしほかま
難波女の芦のしのやのしのすかき一夜のふしも忘れやはする

思

深からぬ澤の螢のおもひたに身よりあまるはあはれならすや
戀しきも思ふゆへこそ戀しけれこひと思ふも何かことなる

水鳥のうける心のあさきたに下の思ひは有とこそきけ
戀しともうきをつらしと恨るもおもふ心の深き成けり
まとりすむ杜の神にもとひてきけ思へはこそは思ふともいへ

片思

夜とゝもに我のみ思ひくたくらむ岩うつ磯の波ならなくに
あちきなやつれなき人をいたつらに思ふ思ひのおしくも有哉
さきのよの我身そつらき君か爲かゝりけれはやむくひ成らん
中々にうるまの嶋の人ならはうきに思ひをかへまし物を
涙かくる岩根につけるあはひ貝こや片戀のたくひ成らん

恨

なみこさはうらみむとこそ契しかいかゝ成ゆくすゑの松山
心あらん人をそ人は恨むへきうらみけるこそはかなかりけれ
恨わひなをかへせとも小夜衣夢にもおなしつらさ成けり
なとめつか後は梢そなひきける恨はたえぬ物とこそきけ
何せんにうしとも人を恨みけむさてもつらさはまさる物ゆへ

曉

いつとても有明かたは露けきを猶かきりなし長月の空
明ぬるか有明の月はかたふきてかもの河原に千鳥啼也
あし鴨のはかひの霜や置つらん尾上のかれもほの聞ゆなり
曉は鐘のこゑより鳥の聲千とり友よひ鴫のはねかき
旅の空殘の月にゆく人も今や越らんあふ坂の關

松

人しれす百枝の松をたのむかな藤の末葉もあはれかけゝん
たらちねのむかしの跡と思ふにも賴（なイ）そわたる松の尾の陰
をしほ山小松か原はしけくともたのむこすゑは神もわかなん

霜の後ひとりのこれる谷の松春の光のさす時もかな
うきなから久しく世をそ過にけるあはれやかけし住よしの松

竹

竹のみや籬に植て千世まてと祝ひそめけん此君そこれ
百舗やみかきにならふ竹の子の末の世までも神のまに／＼
くれ竹のかはらぬ色を友とせし人の心のうちを知かな
もゝしきやなかれ久しき川竹の千世のみとりは君そみるへき
窓に植て我ともとみる吳竹は袖にかはらす露もをきけり

苔

いにしへのみほの岩屋は苔むしてみれ共あかすとこめつら也
あはれにも苔よ衣となれ／＼て終には下にくちむとすらん
にほへとも花は春のみよしの山こけの緣そ常磐成ける
おち瀧つたきのうちはの岩の苔わか袖の上といつれ露けし
おく山の岩根のこけそあはれなる終には人の衣とおもへは

鶴

與津波あはれをかけよ和歌の浦の風に立そふたつの行末
松の本千とせの鶴の夜のこゑ龜のみ山にさそかよふらん
雲はれてつるこそあまた聲すなれ君か千とせを空にしるとや
子を思ふ事はかはらし夜のつるいかて雲ゐに聲聞ゆらむ
難波かたむれたる田鶴の上毛こそ千とせも消ぬ霜には有けれ

山

たけちほのくしふる峯そあふかるゝ天のをすめの初め思へは
月みれはなくさめかたしおなしくはをは捨山の都なりせは
世をすてはよし野の奥（ちきりイ）に住へきを猶たのまるゝ春日山哉
たのむかな我たつ仙と祈り置て山のかひある峯のけしきを

あし曳の山のなかにも富士の山いかに契て烟たつらん

河

宮はしらしたつ岩根の五十鈴川萬代すまんすゑそはるけき
行かへり馴し都のしのはれて音もなつかし賀茂の川浪
折ことに思ひそ出るいつみ川月をまちつゝわたりしものを
當初毎月參仕當社三ケ年故云
ひえを山岩きりとをす谷川のはやきしるしを猶たのむ哉
秋くれて紅葉なかるゝ立田川はやくみし世や戀しかるらん

野

野へは秋あきはまはきの花盛をしか妻とふ夕くれの空
我袖にくらへてみはや宮城のゝ木の下露は今朝やしけきと
春日野は子日わかなの春のあと都のさかは秋はきの花
鶉なくあはつの原のしのすゝき過そやられぬ秋の夕暮
秋風に野へのけしきをみるはかり身にしむ事は猶なかりけり

關

月を見て千里の外を思ふにも心そかよふしらかはのせき
關守はすくしやれとも清見かた心のとまる波路なりけり
隔たる關の中にも須磨の關名をとゝめける波の音かな
逢坂の關のせき守老にけり哀とおもふあはれとをおもへ
よと共に過る月日をかきとめて文字の關とはいふにや有らん

橋

鈴鹿川きりの古木のまろ木はしこれもやことのれに通ふらん
ひさしくも隔たるかなかつしかやまゝのつき橋苔生ぬらん
宮古より伏見を出る明かたは先うちわたすひつ川の橋
あはれなり長柄は跡も朽にしを大江の橋の絶せさるらん
東路や勢田の長はしむかしより幾千世へよとわたしそめけむ

海路

ひれふりしむかしをさへや忍ふらん松浦のうらをいつる舟人
百つたふ八十嶋かけて見わたせは空こそ海のきはめ成けれ
何となく心そとまるそれとみて濱はなれ行むしあけの松
浪のうへに遙かにうかふあし鴨はとり嶋かよふ船にや有らん
すみよしの松吹風はをくれとも心そとまるすくる舟人

別

春の過秋のくれ行わかれにもとしふるまゝにたへすも有哉
入江こくを舟になひく芦のほはわかるとみれと立かへりけり
別てふ名こそつらけれ旅衣立わかれては日數へすとも
かりそめの旅のわかれと忍ふれと老は涙もえこそとゝめね
浦波は立わかるともすみよしの松をたのみそたのみ成へき

旅

いつくをも旅ならすやは思ふへき浮世はかりの宿とこそきけ
角田川古郷思ふ夕くれに啼音をそふるみやこ鳥かな
まろふしの柴のしき井に露そ置夜や重ぬらん小夜の中山
かきすつるあまのもしほの草枕こゝろそとまるわかの浦風
みやこちは幾日もなきをもしほ草敷津の波は袖にかけけり

山家

春は花秋は紅葉そ散まかふたれ山里をさひしといふらん
山里はぬしをは置て瀧の音も心ほそきのすむにそ有ける
松のかき竹のはしらの山里は千世もへぬへき心地こそすれ
山里はたへてもいかゝすこすへき松のあらしに鹿も鳴也
爪木こる山路はかりはふみ分て蓬か門は跡たえにけり

田家

ますらおは月を友にてもろなれや門田の庵のまはら成らん
長岡やおちほひろひし山里にむかしをかけて田つらにそ行
をしか啼山田の庵は月もゝるおとろかさてそみるへかりける
秋くれぬ今は我見んすみ馴し山田のいほは紅葉ちるらむ
稲葉ふく風もことにそ身にさむき生田の里の秋の夕暮

懐旧

思ひいてはむかしもさらになけれとも又かへらぬそ哀成ける
あはれとはみをやの神も照さなんむかしの人を忍ふ心を
むかしをは神も哀と思ひ出よ月に山ちを十とせみし人

先人納言毎月参仕當社之事十ヶ年故言

昔たにむかしと思ひしたらちねの猶戀しきそはかなかりける
ふりにけり難波ほり江のみをつくしいつれの年のしるし成蘭

夢

うき世をは何によそへてさとらまし夢そまことの道に有ける
夢路をそはかなき世には頼むへき思ひあはするかたも有けり
夢をなとはかなき物とまとふらん三世の事迄みゆとこそきけ
夢とのみ過にしかたはおもほえて覺てもさめぬ心ちこそすれ
見ても又思へは夢そあはれなるうき世はかりの迷ひと思へは

無常

常なきは常なる事に馴ぬれはおとろかれぬそおとろかれぬる
春のたち年の暮ぬとかはれともまた世の常とみるそはかなき
くれをまつ朝の露もかたき世に猶さためなし野への秋風
なをいとへ蓮のたち葉の露たにも此世の池は風ちらしけり
何か世を常ならすとはおもふへきなからの橋も名やは朽たる

述懐

かけまくもかしこき豊の宮はしら直き心は空に知らん
いのり置し心のうちをみたらしの末に逢みんことそうれしき
春日山谷の松とは朽ぬとも梢にかゝれ北の藤なみ
世を照す日吉と跡をたれてけり心のやみをはるけさらめや
和歌の浦の道をはすてぬ神なれや哀はかけよ住の江の波

祝

君か代は千世ともさゝし天の戸や出る月日のかきりなけれは
きみか代は賀茂の社の姫小松十かへり花そさかんとすらむ
天か下のとけかるへし君か代は三笠の山の萬代の聲
君か代はこやの山に千世を經て不二の高根に立まさるまて
四方の海のとかなれとそ住よしのつもりの浦に跡をたれけむ

右俊成卿五社百首以百花庵宗固本挍合了

秋日陪　社壇同詠祈雨百首　和歌

神主從四位下津守宿禰國冬

春二十首

雨中立春
きのふみし雪ひきかへてふる雨のみのしろ衣はるは來にけり

雨中子日
ねのひする野への小松の春雨に置しら露は千代のかすかも

雨中霞
三輪の山霞にしのふ雨の音も人にしられぬ春のゆふくれ

雨中鶯
深山にはなけともいまた雪降て都は雨にうくひすのこゑ

雨中若菜
春日野は春雨ふりぬあをによしならのあすかちわかな摘てん

雨中殘雪
淋しさをふる春雨に讓をきてあとなき庭の雪そきえ行

雨中梅
白妙の梅のたちえの雨のよにおもひのほかの月をみるかな

雨中柳
春雨にまたぬきとむる青柳の露はかりたにふかぬ風かな

雨中蕨
萌出る野邊のさわらひみるほとに我も物うき春さめの空

雨中春駒
わか草の露ふみゝたす春駒はあめのうちにもあとや尋む

雨中雉
かり衣ぬれてよふかき春雨に野へのきゝすも露になくなり

雨中雲雀
春雨やはや晴かたに成ぬらんをのつからたつ雲雀なく也

雨中歸鴈
いつはりのたか言の葉そ春雨にかきくもりたる鴈の玉つさ

雨中花
山里のたちよる軒の春雨にぬれたにもせて花をみるかな

雨中苗代
水こめていまこそ種をまきもくのあなしの山田春雨そふる

雨中菫菜
雲雀鳴小野の芝生のつほすみれ此春雨に咲にけらしも

雨中蛙
あら小田も降春雨に水こめてよもきかくれにかはつ鳴なり

雨中款冬
降雨によその尾上は見えわかて窓にのそめるやまふきの花

雨中藤
雨に咲たこの浦藤をきあまる露のそこさへさそにほふらん

雨中暮春
をのか入やよひの雲の春雨にさそうくひすのなみたそふらん

夏十五首

雨中更衣
藤の花ぬれ〳〵折し衣手をたちかふるけさも雨はふりつゝ

雨中餘花
めつらしき卯月の雨のくもりかなのこれる花の嶺のしら雲

雨中新樹
降雨やたまるひろ葉にあまるらんならのしけみに雫おつなり

雨中神祭
かしは木のもとつはなしみもろ雨にぬる共けふや榊とるらむ

雨中卯花
玉川の卯花くたしふる雨に波そたちそふなみそきえ行

雨中郭公
此水にさなへとれとや時鳥田のもの雨に啼わたるらん

雨中早苗
をのつから袖のみじふをすゝくかな早苗は雨にとるへかり兒

雨中菖蒲
袖ならぬ軒のあやめも置露に玉をはなれぬさみたれの頃

雨中橘
たち花の木すゑの花を舟なからたおる小嶋のさみたれの頃

雨中夏草
五月雨にまさるみかさの高嶋やかちのゝ草もなみやこすらん

雨中蚊遣火
五月雨にもしほはやかし芦の屋の浦のけふりやよはの蚊遣火

雨中螢
五月雨の水かさの底のかまくちて空にむなしくゆく螢かな

雨中蟬
蜩のなく山かけをいとゝ又暮ぬとみせて雨はふりつゝ

雨中納涼
むすふ手の雫をそへて涼しさは山井の水のむら雨の空

雨中六月祓
もろ人の出る河瀬にふる雨のあかすや涙のゆふかさぬらん

秋二十首

雨中立秋
あさち原秋くるけさのかきくもり雨こそ露のはしめ成けれ

雨中七夕
中々に雨にさはらてかよふらしあさせもしらぬあまの川ふれ

雨中露
虫の音を雨にまちぬる夕暮はみたるゝあともまたもとのつゆ

雨中萩
袖にのみふるかとそおもふ只ならぬ萩ふく風の夕くれのあめ

雨中萩
萩かはな下葉色つく秋の雨は音をきくにもいられさりけん

雨中女郎花
降雨に波こす澤の女郎花あまるなみたにたれをこふらん

雨中薄
ふる雨もまた一村そそゝくなるまた野とならぬ庭のすゝきに

雨中苅萱
ひとかたに風にはなひく苅萱のとにかくになる雨のゆふくれ

雨中虫
名にしおへはかれ行色は染てけり寒き時雨のまつ虫のこゑ

雨中鴈

鴈鳴てしくれふる也いとゝ又山のこのはや色かはるらむ

雨中鶉

かりにとふ道やさはらん鶉啼深草の野の秋のむらさめ

雨中鴫

たのかふす草ねに水やこえぬらん澤邊のしきの雨に立ぬる

雨中鹿

いか計荻の下露ふかゝらん鹿なく暮のあきのむらさめ

雨中稻□

穗なみにやたのきのさいの上るらむ稻葉に餘る雨のみかさに

雨中霧

かた岡の霧よりつゝく村雨やけさくる鴈のなみた成らん

雨中月

心ありてもみちを染る時雨こそ月のあたりにくもらさりけれ

雨中擣衣

衣うつよさむの雨に山姫のにしきの袖もおりかさぬらし

雨中菊

降雨にきくの下水まさる也くむにつきせぬよはひしれとや

雨中紅葉

色そむる時雨とみすは立田山もみちへたつる雲やうからん

雨中暮秋

冬をさていかに分てか浮雲の秋にかゝりてまつしくるらん

冬十五首

雨中初冬

都よりひらの高根の浮雲をみれは時雨るゝ冬は来にけり

雨中落葉

木の葉ちり時雨降よそせめてうき寢よといさめし人もなき身に

雨中霜

枯もせす色をもかへぬ榊葉の霜にかされて降しくれかな

雨中寒草

荻の葉の末こす風の吹さえてはや冬かれになける霜かな

雨中寒松

雪けなる時雨吹しほる風にまつ下をれぬへくなひく松かな

雨中氷

さはた河氷る朝けに行人の猶袖ぬれて降しくれかな

雨中千鳥

千鳥にはＹてねぬへき須磨の浦時雨やつらきよはの關守

雨中水鳥

龍田川いかに時雨をはらひてか鴨の青羽の紅葉さるらん

雨中網代

網代木の涙ふきたつる山風にすくる時雨の行衛しらすも

雨中霰

そめもあへす外山の正木風さえて霰ましりに降時雨かな

雨中雪

うつもるゝ宿の時雨の庭たつみしたこそとけれ雪のうは水

雨中鷹狩

雪をこそうちはらひても狩衣とたちの雨そせんかたもなき

雨中炭竈

冬さむくしくるゝまゝに炭かまの煙をそへてくもる空かな

雨中爐火

降雨のもりてきえぬと思ふまて影かすかなるねやのうつみ火

雨中歳暮

ふり／＼て空にや雪のつきぬらん雨に成ぬるとしの暮かな

戀十首

寄雨初戀

わか袖に冬の時雨はしりそめぬいつ秋風にあはんとすらん

寄雨忍戀

人しれぬ戀のくもりを便りにてなみたの雨のふらぬ日そなき

寄雨不逢戀

哀しれ長きよつらき窓の雨のうちまかせたるおもひならぬを

寄雨契戀

いつ迄かふるとも雨を契りけんなきたる朝といとはるゝ身に

寄雨祈戀

戀衣もとの袖こそほさゝらめみたらし川に雨はふりきぬ

寄雨待戀

これ程のかことはなきにこぬ人をこよひの雨になにか待らん

寄雨逢戀

降雨にとふこそいとゝなさけなれ月をたにみす歎かまし身を

寄雨別戀

まつ宵にいひしかはやと分れちの雨にも人のさはらさるらん

寄雨絶戀

山の端にしけき時雨もある物をめくりあはてもふる月日かな

寄雨恨戀

わかうらみ末もとをらぬ涙かな過る時雨のあめもある世に

雜二十首

寄雨曉

明はてぬ尾上の雲の村しくれはなれもやらて降よなりけり

寄雨松

たけくまの雨にたちよる松笠もおなし雫の宮城のゝつゆ

寄雨竹

嵐ふく露も葉わけにこほれけり籬の竹のいさゝむらさめ

寄雨鶴

あふみちのうれのゝたつの聲はして明ぬや雨の曇るなるらむ

寄雨苔

緒捨山あらそふ槇の村時雨思はぬこけもさこそ染らめ

寄雨山

降雨ももらぬこすゑのしけみかなかさとり山に笠とらぬまて

寄雨河

もとの瀬はなをこそみゆれあすか川淺き淵ある五月雨の頃

寄雨野

あさちふの小野の夕立空にさへしのをたれてもふれる雨かな

寄雨關

清みかた行へきいそのしほかれに猶關をもる五月雨のなみ

寄雨橋

待人のさそさはるらむ雨のよにあはれとは思ふ宇治の橋ひめ

寄雨海

五月雨のもらぬ芦屋のかひもなしやかぬに消る海士のも鹽火

寄雨旅
富士の根そ雲にかくるゝ大井川雨にやすらふあたら日數に
寄雨山家
いかはかり草の庵の雨のよにしきみかはらの露けかるらん
寄雨田家
まはらなる庵をもしらす秋の田の雨をうれしと思ひけるかな
寄雨夢
過やすきね覺の雲のはては又をのれ夢にもなる時雨かな
寄雨懷舊
かしこしな時雨降をけるならのはのひろくあつめし敷嶋の道
寄雨述懷
言の葉の雲のうへまてきこえよと身はしもなから雨いのる哉
寄雨神祇
神よかみ民の草葉に雨そゝけ物思ふ人の袖はほすとも
寄雨釋教
神垣やたむくる法のことのはに露あまるまて降雨もかな
寄雨祝
打はへて時をたかへす降雨におさまる御代を空にしるかな

為兼卿鹿百首 春日社法樂

春二十首

立春
春日山春立くらしさをしかの朝行峯に霞たなひく
子日
さをしかも子日やすらん春日野の小松かはらにけさそむれ行
鶯
秋はをのか心にわきし鹿までも鶯の音に春を知らし
霞
朝々に霧わけなれしさをしかもかすめる空の春やさひしき
若菜
□□□□□雪まのわかなつみ分て鹿そむれにむ春日のゝ原
殘雪
□□□□□むら／＼見ゆる雪の上に消はさ鹿の跡そのこれる
梅
□□□にや心をうつす梅かえの匂ふあたりは鹿そはなれぬ
柳
鹿の立とをちの野への柳かけなひくけしきも春そのとけき
早蕨
いとはやもゝえ出にけりさをしかのあさる岡への春の早蕨
櫻
あつさ弓春の日あかぬ櫻かりわけ行末に鹿そおとろく
春雨

春雨に花ちる山のさをしかは木の葉しくれし秋や忘れぬ

春駒

若草を妻とやともにたのむらん駒にましれる春のさをしか

歸鴈

秋霧をまたわけてとや契るらむ鹿立峯にかへる鴈かね

呼子鳥

をしか立山路の末に呼子鳥誰をよふとかさのみ啼らん

苗代

せきかくる苗代水に立しかはをのか影にや友をしるらん

菫

さをしかもつねより野へやなつかしき菫花さく春の此頃

杜若

かきつはた花咲比はさは水の分行鹿も影そへたつる

藤

□□みぬたのみをかくる春日山鹿もあれぬか北の藤波

款冬

さをしかもいはてやおしむ春暮る名殘の色の山吹の花

三月盡

鹿はかり野山をわくる身ともかなわかるゝ春をしたひ送らむ

夏十五首 一首不足

更衣

衣手もうすきにうつる今よりや鹿も夏けにかへんとすらむ

卯花

山かけや野へにつゝける道なれは卯花かけに鹿も立なり

葵

秋山にすむやをしかも葵草かさすみあれのけふは知らん

郭公

郭公こゑをたつねて分ゆけはさき立鹿の跡そ殘れる

菖蒲

もろ人のあやめひくてふ沼水に鹿もけふこそおり立てけれ

早苗

さなへとるすそのゝ田子の聲々におとろく鹿はみ山にそいる

照射

五月やみ尾上にみゆる火のかけは山のさつおの鹿まつらしも

五月雨

歌闕

盧橘

かほる香におのへの鹿も立そよるたち花にほふ山陰のやと

螢

鹿のふす夏野の草の露までも螢のかけに光をそみる

蚊遣火

かやり火の烟はよはる夕暮の月出る峯に鹿の入ぬる

蓮

はちす葉も花さくほとに成にけりをしか妻こふ秋ちかゝらし

氷室

氷室山すゝしき陰とたのみてや木の下草に鹿もふすらん

泉

やとにせく石まの水の涼しさに鹿もつれにそ立ならしける

六月祓

御秡川夕なみかけて立風も鹿の啼へき秋いそく也

秋二十首

立秋

秋來ぬとけふふく風になしかふす野原の草も今や露けき

七夕

七夕もあふ夜になれはさなしかの妻戀すへき時は知らん

萩

なきあかす白露おもみさなしかの分行野へに萩そかたよる

女郎花

なのか妻おもひなしてや女郎花露けき野へに鹿は臥らん

薄

なしかなく野への尾花の上よりもうれへの袖そ露はひまなき

苅萱

露なから亂れそまさるさな鹿の鳴音もしけき野へのかるかや

蘭

小男鹿の妻とふ野邊の藤はかましほれて露のなかぬ日もなし

荻

荻はらや秋に吹てふ風の夜に妻戀すらし鹿そなくなる

初鴈

はつ鴈も今そ啼なるさなしかのしからむ萩の色かはるころ

鹿

三とせふる秋のうれへは春日野に音に鳴しかも思ひ知らむ

露

春日野の露も色そへわかうれへ鹿もあはれとおもひしるまて

霧

鹿よりも音そなかれける三とせまて雲井へたつる秋霧の空

槿

なしか立野原は庭もひとつにて垣ほにはへる朝かほの花

駒迎

さなしかもむれて行也望月の駒ひきつゝくあふさかの道

月

鹿はかり鳴音あはれとみかさ山さしもくもらぬ月は知らん

擣衣

なく鹿もきぬたの音も打たえてねられすなけく夜と成ぬる

虫

たゝに啼むしのねよりもさなしかの妻戀するそ思ひそふらん

菊

さなしかも花にやめつる秋ふかき山路の菊の陰になく也

紅葉

妻こひの鹿の音聞ゆ時雨ふる山の木の葉も色まさる比

九月盡

此頃もまた暮はつる身のうさは鹿もともに音な啼にける

冬十五首一首不足

初冬

冬のきて木のは吹しく山陰に鹿も涙やもろく落そふ

時雨

むら時雨降まさる頃は山風も鹿の鳴音もひまなかりけり

霜

さをしかのふす野の尾花末ふして霜置まさるけさの寒けさ

霰

霰ちる野風はけしく小男鹿のをのかふしともふしうからまし

雪

雪ふかきみ山の鹿も我はかりうつもれまさるものはおもはし

寒芦

冬枯の澤へにたてるあしかもゝふしける鹿そ風におとろく

千鳥

さほ川に千鳥しは鳴春日野の鹿もこよひの霜や寒けき

氷

春日山やました水も氷る夜に鹿のうは毛も霜むすふらむ

水鳥

さる澤の池邊に立るさをしかの影におとろく鴨のむら鳥

網代

あしろ木によるてふ波の立居にも世をうち山は鹿やすみうき

神樂

三笠山さよ更かたの神あそひ庭火のかけに鹿そ立よる

鷹狩

御狩野やとたちをあさるかり聲におとろく鹿そ立のきにける

炭竈

さをしかの跡にまかせて炭竈の烟わけみるおほ原の山

歳暮

今年さへさてや暮なん春日のゝ鹿もあはれをかけよと思ふに

戀十首

初戀

こひそむる心よりしてさをしかの音に啼はかり思ふとはしれ

忍戀

さを鹿は音に鳴頃も我はかり思ふ心をしのひやはせん

不逢戀

鹿はかり聲にたつともあはれとはいゝもいはぬかも逢事なしに

初逢戀

をしかふす野原の秋の初尾花かはしそめても袖そ露けき

後朝戀

時しもあれ鹿も鳴なり衣々になり（恨賦）わかれ行しのゝめの空

逢不逢戀

又もやとたのみし中はむなしくて身を秋風に鹿も鳴なり

旅戀

をしか啼たひねの野への露の床いも戀あかし夢もむすはす

思

音にたてゝ鳴やを鹿も我はかり思ふおもひはおよひしもせし

片戀

身をしれはあはれそふかきさを鹿も心かよはぬ妻やこふらん

恨

をしか啼野原のまくす秋風にうらみても猶あかぬ比哉

雜二十首

曉

身のうれへ心にあまる曉のねさめことゝふよその鹿のね

松

みかさ山神の恵を松かけに鹿よりもなを音はなかれけり

竹

うきふしはなれもやしけきさゝ竹の夜をかされても鹿の鳴覧

苔

をくら山苔の岩かねふみならし鳴やをしかも世中やうき

鶴

春日野の鹿もあはれめ和歌の浦に道まとふ鶴の獨鳴音を

山

みかさ山神たにすつなさをしかの音に鳴よりも深きうれへを

河

袖ぬらすあはれは鹿も思ひしれたえて影見ぬさほ川の水

野

ふみわけし道たえはつる春日野に又もや聞んさをしかの聲

關

鹿はかりかよひなれまし春日野にいかなる關そわか道もなき

橋

はし姫も月に鳴音やかよふらん宇治のわたりのさをしかの聲

海路

月にこく夜舟はるかに音すみて鹿のねおろす武庫の山風

旅

鹿の音も草の枕もかなしきは都こひしき松風のよは

別

鹿の音もあはれとかなく古鄕をわかるゝ跡のしのゝめの空

山家

松のかせ鹿の鳴音も聞わひぬ浮世におなし山かけの庵

田家

世を秋に思ひ侘ぬる時しもあれ門田の面に鹿も鳴也

懐舊

すみなれし雲井をこふる月の夜に哀をそへて鹿も鳴也

夢

雲のうへにかよふと見つる夢たにも鹿の鳴音に又たえにけり

無常

鹿のなく聲のうちにも常ならぬ世のことはりは聞えさりけり

述懐

あやまらぬ身をやはすてんことはりを哀さためし春日のゝ鹿

祝

みかさ山君のさかへを松風に鹿も千とせの聲かよふ也

此百首は春日社にて爲兼卿夢想の事ありて一時に鹿の百首をよみて奉納せられ侍ると也

永和四年五月日

右百首借ニ持明院三位基春卿本一書寫之者也。

明應九年季秋廿日

以ニ中御門大納言宣秀卿自筆本一書寫。

享祿元年十月晦日　倉部下[花押]

右以松岡辰方本書寫挍合畢

南都百首幷序

後成恩寺關白兼良公

たましきの平のみやこをさすらへ出て。あをによしならの京にすまゐせしよりこのかた。六とせの春秋をゝくりむかへて。きのふの夢のまたさめぬかとうたかひ。ひとつ空の月日をあふき見ては。むかしの友にむかへるおもひをなせり。三かさ山のふもとのちりにましはり。天か下のしつかならむことをいのり。春日野のとふ火のかけをのそみても。雪まのわかなつまんに。さまたけなしといへとも。七十あまりのなみのしはのふるはかりのおもひてもなく。千とせをふへき松ならぬ身は。なけきのもとをはなれかたし。武士の家にし生れされは。弓馬の道にたつさはるへきにもあらす。法の師の門をはこゝろさせとも。いたつらにあかし暮し。なをさりに起ふすひま〳〵には。からの歌やまとの言の葉をもてあそひてそ。花の朝月の夕をなくさみにける。是によりて堀川院の百首の題をえらひて。大和の國の名所の名によせつゝ。硯の水のあさきこゝろさしにまかせて。くさのはやしにくちぬること葉を。かきあつむるといふ事しかなり。

春二十首

立春

あすか河なかれてはやき年波もけふを春とや立かはるらん

子日

ふのひするまゆみの岡の姫小松ひくやまとゐのはしめ成覽

霞

杉たてる門をや春もたつねけん三輪の山邊のけさはかすめる

鶯

春といへは出るひかりにさそはれてあしたの原に來鳴鶯

若菜

〔歌闕〕

殘雪

とのへもり誰跡つけて出つらんみかきか原の雪のむら消

梅

泊瀬川はやくみしよの古里にむかしわすれぬ梅かゝそする

柳

玉柳六田のよとに糸はへてわかあゆつるとみゆる春哉

早蕨

うちけふる若草山の下わらひ木のめも春と今やもゆらん

櫻

昨日けふ峯にも尾にもしら雲のたつたの櫻今さかりかも

春雨

こけむしろしく〳〵ふれる春雨は青根か峯そ色まさりける

春駒

小篠原なつみし駒もひきかへつ日のくま川の春のけしきに

歸鴈

霞しく雪けの澤をたつ鴈のまた古郷はさえかへるらん

呼子鳥

なけやなけさほの山邊のよふこ鳥はゝそも春にひこはへに㒵

苗代

いくしたて引やみしめの苗代にふるのわさ田も春や知らん

菫

一夜ねし露たに袖はしほれしを雲けの岡につむ菫哉

杜若

猿澤の池の玉もやへたつらんそこにはさかぬかきつはたかな

藤花

藤なみのかゝる末葉もめくみけり南のきしにたてし誓は

欵冬

ぬしゝらぬ花染衣春くれて口なし山にさけるやまふき

三月盡

けふとのみ春に手向の山さくらむへこそ花はぬさと散けれ

夏十五首

更衣

立かへぬ雲の衣は春なからつ（夏ヵ）なきて見ゆる天のかく山

卯花

咲にけり神のみむろの榊葉にしらゆふかくるきしの卯花

葵

神山のあふひはよその契りにて佐々かけし葛城のはし

郭公

聞つともいはせの杜の郭公人傳ならぬ一聲もかな

菖蒲

年をへて五月のけふはたえせぬ玉ゐの沼にあやめひく也

早苗

すか原や代見のさなへほの〳〵と明る田面にそよくをそまつ

照射

明るとやともしするおのわかるらんくらはし山によこ雲の空

五月雨

五月雨は水分山の名もしるく雲におちそふ瀧のしら浪

橘

いにしへをみきのつかさの袖の香や奈良の都にのこる立花

螢

山陰はまたよや殘る夏箕河かはと明てもとふ螢かな

蚊遣火

拂ひえぬうちはの里のかはしらに煙たてそふよるのあくたひ

蓮

たをやめの花のすかたの池水に舟をうかへてとるはちす哉

泉

秋はけふまた夏なから辰の市やうゐまの清水むすふ袂に

氷室

春日山日かけはもらて氷室もるしけみか下そ夏の外なる

六月祓

夏はつる御禊やうけし神なひの杜の秋風ゆふかけて吹

秋二十首

立秋

三笠山きりの一葉もおちそめて天のしたには秋風そふく

七夕

七夕の手向にさらすけふはかりなに山姫の名をやからまし

萩

花すりの衣は露にみたるともなをわけゆかむまのゝ萩はら

女郎花

綸にかけるかたちのをのゝ女郎花心うこかす秋風そふく

薄

かりねする手枕の野のしの薄くるれは露や先むすふらん

苅萱

風かよふあきつの小野のかるかやの亂れて物はわれそ悲しき

蘭

藤はかま春のゆかりの花の名におほ川のへを秋そ匂はす

荻

秋風をならしの岡にならしてもそよとおとろく荻の音哉

早雁

飛鳥のはかひの山の山かせもはらふか峯の遠のしら雲

鹿

さをしかの妻とふ聲も高圓の尾上のまはき今さかりかも

露

物おもふ袖にもさそなしけ岡の草葉にあまる秋の夕露

霧

宮のたき霧のとはりのひま見えておつる白玉はもる人もなし

槿

あさかほの花にも霧の晴まよりみそめのさきの仰そたつ

駒迎

春日野のおとろの道はわけすとも鹿毛なる駒もけふやひく覧

月

あひにあひて露の光も玉きはる内の大野の月そさやけき

擣衣

里人のうつや衣もたゆむらん十市の山に月かたふきぬ

虫

夜さむそふ秋ははつせの山風になをもつれなき松虫の聲

菊

みゝなしの池のそかひに咲にけりなにをか音に菊のしら露

紅葉

時雨ふる三輪の檜原をかきわけて秋や紅葉のかさし成らん

九月盡

はつせめか賤はた帶の長月もくるれはけふに老めくりつゝ

冬十五首

初冬

かしは木の杜はくち葉に埋もれて道こそなけれ冬は來にけり

時雨

まてしはしさのゝわたりの夕時雨やとゝふ三輪の里になる迄

霜

白妙の雲間の虹は中絶て霜をきわたす久米の岩橋

霰

神南備のあさ篠はらに降霰ひろはぬ玉や世にのこるらん

雪

玉くしけ三室の山の明るよにかゝみをかけてふれる白雪

寒芦

冬の夜はたく火にせむとしめし野に澤へのあしも霜枯にけり

千鳥

月影の清き川原に小夜更て千鳥友よふさほの浦かな

氷

きのふけふ霜さえまさる飛鳥風七瀨のよとや氷はてなん

水鳥

きよすみの池のかゝみの根あれやつかはぬ鳥の涙のうきねは

網代

瀨を早みよし野の川の網代木にしらゆふ花のさかぬまそなき

神樂

庭火たきうたふあなしの山かつら曉かけて神あそひせん

鷹狩

かたの野のみゆき跡ある君か代に逢や嬉しきやかたをの鷹

炭竈

雲よりもたかまの山に立けふりよそにもしるし峯のすみかま

爐火

消ぬるか春より冬にならの山のくろ木のこやの夜半の埋火

歳暮

まきなかす丹生の河瀨の筏しのさこそはとしの暮いそくらむ

戀十首

初戀

けふよりは袖ふる山のみつ垣もしらぬためしに人をこひはや

忍戀

もらすなよ夕ゐる雲の下比山谷にしつめる鳥の一聲

不逢戀

目にそへて思ひます田のいけるよの爲にはぬなはさそな苦しき

初逢戀

流れてのうき名思へはみなれ河みなれそめしそ今はくやしき

後朝戀

こりすまに又はまつちの山なりと濁りやせましのゝめの月

逢不遇戀

二本のすきにしかたそしのはるゝふる河のへに思ふ心は

旅戀

旅ねする枕のたちのつは市にかへてうき身の逢夜しらせよ

思

かるもかく猪かひの岡の草なれや起ふす床の露のみたれは

片戀

うしつらし二上山の峯の雲こなたはかりになと時雨らん

恨戀

とはゝこそいはせの山の秋風にしたはふくすの露こほるとも

雜二十首

曉

月やとるとよらの寺のえのは井にむすひもあへぬ曉の袖

松

名におひて高木の山の松なれや空のみとりに枝をかはせる

竹

うつり行鶯山の春風は伏見の竹やまつなひくらん

苔

みよし野の奧の岩ねにすむとてもこけの雫に袖はぬれなん

鶴

幾年をふる野の澤になれぬらん今もおりゐる鶴の毛衣

山

雲とのみ御舟の山の花ならはつれにあらなん春はすくとも

河

むかしみしきさの小河はかはられと我とし波そ立かされぬる

野

葛城やたかまの草にあらすともしめさす野へは後もきてみん

關

よしの山花の關守櫻とは人をそとむる春はとまらす

橋

さほ川に橋うちわたし我家のむかしの跡をみるそうれしき

海路

立田山あらしをさむみ大伴のみつのとまりに舟そ休らふ

旅

大和路やすみた河原に宿からむ遠く聞けるほとにはあられと

別

よしさらはかたみとをなれあかすしてわかるゝ袖の岡越の道

山家

まきもくの檜はらくもりて峯深き月にはうとき山の下庵

田家

吹風にひかぬなるこをひくて山麓のひつちもる人もなし

懷舊

かきつめし大和言のはちり〳〵にならの里人名のみふりつゝ

夢

曉のかれのみたけにやとからんこむよをかけて夢やさめぬと

無常

あたし野の朝の露の消ぬまになにをむさほる心成らん

述懷

くるまかもことをなしそ思ふ神のます春日の原に家居せしより

祝

君かためとよをか姫の跡たれし玉木の宮に千世やかそへん

右百首一條禪閤詠也。以自筆之本書寫訖。于時文明第五仲秋下旬候。

右南都百首以百花庵宗固本書寫挍合了

群書類從卷第百七十七

和歌部三十二

道助法親王家五十首和歌

題

春十二首

初春　雪中鶯　橋邊霞　行路梅　春月
岸柳　旅春雨　遠情鴈　山花　關花
庭花　河欵冬

夏七首

社卯花　早苗　里杜鵑　岡子規　夜盧橘
籬瞿麥　江螢

秋十二首

早秋　萩露　荻風　尋虫聲　山家月
野徑月　船中月　曉鹿　河霧　擣衣幽
夕紅葉　殘菊匂

冬七首

朝時雨　竹霜　池水鳥　鳴千鳥　松雪
湖雪　惜歲暮

戀六首

寄雲戀　寄露戀　寄烟戀　寄草戀　寄鳥戀
寄枕戀

雜六首

曉述懷　閑中燈　山旅　海旅　野旅
寄松祝

作者

御詠　入道二品道助親王　後鳥羽院第二皇子　二十二首
春宮權大夫實氏　常盤井入道前太政大臣　七首
參議藤原雅經　十七首
正三位藤原家隆　二十八首
從三位藤原知家　三首
中宮亮藤原範宗　四首
右大將公經　西園寺入道前太政大臣　九首
民部卿藤原定家　二十七首
正三位藤原家衡　一首
從三位藤原保季　三首
法印權大僧都定範　七首
中務權大輔藤原信實　二首

散位藤原行能　一首　法印權大僧都幸清　十一首
法橋覺寛　一首　已灌頂阿闍梨隆昭　十六首
僧經乘　五首　但馬守源家長　四首
宮内少輔藤原光經　三首　藤原孝繼　八首
河内守藤原秀能　二十八首　僧俊孫　六首

春

初春　御詠

春とゝもに立にけらしな朝かすみきのふの山そ遠さかりぬる

公經

たちそむる霞の衣うすけれと春きてみゆる四方の山端

實氏

ふる雪はことしもわかす久かたの空にしられぬ春やきぬ覽

定家

春の色とたのむまてやはなかめつるいふはかりなる山の霞を

雅經

久かたの天の岩戸のむかしよりあくれは霞春はきにけり

家衡

朝日かけさしてそれとはなけれとも空よりしろき春の色かな

家隆

よし野川こほりのひまにとけにけりうち出る波の花のした紐

保季

朝みとり初しほ風の波の上に春さへこゆるすゑの松山

知家

春日のゝ雪のした草色に出てあともみとりに春はきにけり

定範

けさはまた山も霞になりやらていふはかりなる春の明ほの

範宗

山のはのかすむはかりをみよしのゝ雪まの草も春やきぬらむ

信實

春立て峯の朝日の出しより身にしみよはる山の下風

行能

山姫の霞の衣はるたてはきえれとうすき峯のしら雪

幸清

あさ霞とを山もとに立たみの里をもわかす春はきに鳧

覺寛

春の色のいたり至らすなしなへて霞にけりなよもの山端

隆昭

いつよりの春の色ともみよしのゝ草のはつかに雪ま分らむ

經乘

朝ほらけ岡への松のかすめるは千世のはしめの春やきぬらん

家長

白妙のみのしろ衣うちはらひ春ともわかす雪は降つゝ

光經

玉しきの都に春は立にけりあつまのかたや先かすむらん

孝繼

たちそむる霞の衣風にうすみなにさほ姫の春いそく覽

秀能

春くれは氷なかるゝあなし河檜原の雪やとけはしむらん

俊孫

はるたつと誰みよし野にかきりけんその山となき今朝の霞を

雪中鶯

梅かえにこその宿とふ鶯のはつ音も寒く淡雪そふる
うちきらしたまらぬ雪の花のえにうつりにけりな鶯のこゑ
春やとき草葉もみえぬ雪の中にむすほふれたるうくひすの聲
松のはは今もみゆきのふる里に春あらはる丶鶯のこゑ
はるとなく初ねはかりそ鶯の羽風を寒みゆきは降つ丶
春やときまた降雪を花とみてをのか古巣に鶯そなく
うくひすの雪の花かさぬひ侘（かねイ）ていつれを梅とぬれて鳴らん
なこりふくあらしや寒き鶯のこゑする山にきえぬしら雪
今はとて春をいそかす鶯のなけともきえぬ山のしらゆき
何ことに春をしるらむうくひすの雪のふるすを出てこそなけ
うくひすのこゑするかたをたつぬれはまたしら雪の谷の通路
またさかぬ軒はの梅に鶯のこつたひちらす春の淡雪
雪ふかき谷の鶯をのれのみ鳴とも春としる人やなき
れぬる夜のはかなき夢も鶯のなく音に氷る雪の明ほの
鶯の聲するかたを尋ねてもわかなつむへき野邊の雪かは
梅かえにか丶れる雪を花とみて宿ありけりときゐる鶯
谷の戸やまた春寒き雪まよりはれ白妙に出るうくひす
あは雪のあはれ我みはふりゆけと春あらたまる鶯のこゑ
山ふかみ猶空さえて降雪に春もまれなるうくひすの聲
はつ音いまた雪につ丶める鶯のなみた吹とけ春の谷かせ
うちとくる涙もこほる雪のうちにまたかきこもる鶯のこゑ
ふるゆきをさそふはかりの花とやは匂はぬ風にうくひすそ鳴

橋邊霞

あとたにも今はなからのはし柱かすむあたりの春のゆふ暮
なかめても契り朽せぬ春なれやこそもかすみしま丶の繼橋
里人のよわたる音はたえもせす霞のまなる淀のつきはし
かけたえて下行水もかすみけり濱名のはしの春の夕くれ
しもとゆふかつらき山に春やくる霞とたえぬくめの岩はし
岩橋のとたえも見えす春くれはかすみわたれるかつらきの山
行人を思ひそ渡る東路や霞か丶れるさの丶舟はし
聞わたる跡はなからのはし柱名をは霞もうつまさりけり
かつらきや神のこ丶ろもやすらひに猶よをこめて霞む空哉
あつまちや風もなきたる朝ほらけ霞たな引さの丶舟橋
山のはを霞のひまにみわたせは夕日にのこる峯のかけ橋
橋はしらたつるやいつこ春の日のなからの濱は霞こめつ丶
明ぬれと猶やわたさむ春かすみたな引山のかつらきの橋
よしさらは霞もはてよ今はた丶よをうちの橋の跡たにもみし
橋姫のまつらんかたもへたつらしかすみ吹とけうちの河かせ
岩橋の神は春とそ契らましあくるもみえす霞む山端
春たてはかすみの衣かされてやこぬ夜はぬらん宇治のはし姫
みわたせは霞の波にうきしつみかつみかくる丶せたの長はし
白たへの濱名の橋もみえぬまて遠かたこめて立霞かな
たえにけるくめちのはしのなか空も霞そ渡る春のあけほの
春くれは霞たな引雲まよりたえ／＼みゆ（すイ）る山のかけはし
とたえにしくめの岩橋今さらに霞そ渡る春の明ほの

行路梅

みちのへに行かたしたふ梅のはなありとやこ丶に丶ほふ衣手

散位藤原行能 一首　法印權大僧都幸清 十一首
法橋覺寛 一首　已灌頂阿闍梨隆昭 十六首
僧經乘 五首　但馬守源家長 四首
宮内少輔藤原光經 三首　藤原孝繼 八首
河内守藤原秀能 二十八首　僧俊孫 六首

春

初春　御詠

春とゝもに立にけらしな朝かすみきのふの山そ遠さかりぬる

公經

たちそむる霞の衣うすけれと春きてみゆる四方の山端

實氏

ふる雪はことしもわかす久かたの空にしられぬ春やきぬ覽

定家

春の色とたのむまてやはなかめつるいふはかりなる山の霞を

雅經

久かたの天の岩戸のむかしよりあくれは霞春はきにけり

家衡

朝日かけさしてそれとはなけれとも空よりしろき春の色かな

家隆

よし野川こほりのひまにとけにけりうち出る波の花のした紐

保季

朝みとり初しほ風の波の上に春さへこゆるすゑの松山

知家

春日のゝ雪のした草色に出てあともみとりに春はきにけり

定範

けさはまた山も霞になりやらていふはかりなる春の明ほの

範宗

山のはのかすむはかりをみよしのゝ雪まの草も春やきぬらむ

信實

春立て峯の朝日の出しより身にしみよはる山の下風

行能

山姫の霞の衣はるたてはきえれとうすき峯のしら雪

幸清

あさ霞とを山もとに立たみの里をもわかす春はきに覓

覺寛

春の色のいたり至らすなしなへて霞にけりなよもの山端

隆昭

いつよりの春の色ともみよしのゝ草のはつかに雪ま分らむ

經乘

朝ほらけ岡への松のかすめるは千世のはしめの春やきぬらん

家長

白妙のみのしろ衣うちはらひ春ともわかす雪は降つゝ

光經

玉しきの都に春は立にけりあつまのかたや先かすむらん

孝繼

たちそむる霞の衣風にうすみなにさほ姫の春いそく覽

秀能

春くれは氷なかるゝあなし河檜原の雪やとけはしむらん

はるたつと誰みよし野にかきりけんその山となき今朝の霞を　俊孫

雪中鶯

梅かえにこその宿とふ鶯のはつ音も寒く淡雪そふる

うちきらしたまらぬ雪の花のえにうつりにけりな鶯のこゑ

春やとき草葉もみえぬ雪の中にむすほふれたるうくひすの聲

松のはは今もみゆきのふる里に春あらはるゝ鶯のこゑ

はるとなく初ねはかりそ鶯の羽風を寒みゆきは降つゝ

春やときまた降雪を花とみてなのか古巣に鶯そなく

うくひすの雪の花かさぬひ侘（かねイ）ていつれを梅とぬれて鳴らん

なこりふくあらしや寒き鶯のこゑする山にきえぬしら雪

今はとて春をいそかす鶯のなけともきえぬ山のしらゆき

何ことに春をしるらむうくひすの雪のふるすを出てこそなけ

うくひすのこゑするかたをたつぬれはまたしら雪の谷の通路

またさかぬ軒はの梅に鶯のこつたひちらす春の淡雪

雪ふかき谷の鶯をのれのみ鳴とも春としる人やなき

ねぬる夜のはかなき夢も鶯のなく音に氷る雪の明ほの

鶯の聲するかたを尋ねてもわかなつむへき野邊の雪かは

梅かえにかゝれる雪を花とみて宿ありけりときゐる鶯

谷の戸やまた春寒き雪まよりはね白妙に出るうくひす

あは雪のあはれ我みはふりゆけと春あらたまる鶯のこゑ

山ふかみ猶空さえて降雪に春もまれなるうくひすの聲

はつ音いまた雪につゝめる鶯のなみた吹とけ春の谷かせ

うちとくる涙もこほる雪のうちにまたかきこもる鶯のこゑ

ふるゆきをさそふはかりの花とやは匂はぬ風にうくひすそ鳴

橋邊霞

あとたにも今はなからのはし柱かすむあたりの春のゆふ暮

なかめても契り朽せぬ春なれやこそもかすみしまゝの繼橋

里人のよわたる音はたえもせす霞のまなる淀のつきはし

かけたえて下行水もかすみけり濱名のはしの春の夕くれ

しもとゆふかつらき山に春やくる霞とたえぬくめの岩はし

岩橋のとたえも見えす春くれはかすみわたれるかつらきの山

行人を思ひそ渡る東路や霞かゝれるさのゝ舟はし

聞わたる跡はなからのはし柱名をは霞もうつまさりけり

かつらきや神のこゝろもやすらひに猶よをこめて霞む空哉

あつまちや風もなきたる朝ほらけ霞たな引さのゝ舟橋

山のはを霞のひまにみわたせは夕日にのこる峯のかけ橋

橋はしらたつるやいつこ春の日のなからの濱は霞こめつゝ

明ぬれと猶やわたさむ春かすみたな引山のかつらきの橋

よしさらは霞もはてよ今はたゝよをうち橋の跡たにもみし

橋姫のまつらんかたもへたつらしかすみ吹とけうちの河かせ

岩橋の神は春とそ契らましあくるもみえす霞む山端

春たてはかすみの衣かされてやこぬ夜はぬらん宇治のはし姫

みわたせは霞の波にうきしつみかつみかくるゝせたの長はし

白たへの濱名の橋もみえぬまて遠かたこめて立霞かな

たえにけるくめちのはしのなか空も霞そ渡る春のあけほの

春くれは霞たな引雲まよりたえ〳〵みゆる（すイ）山のかけはし

とたえにしくめの岩橋今さらに霞そ渡る春の明ほの

行路梅

みちのへに行かたしたふ梅のはなありとやこゝにゝほふ衣手

匂ひのみみちゆきふりのむめの花それともみえす春のよの闇
みちのへのかた岡山の梅のはなたちよるはかり春風そふく
玉ほこの行てはかりなをむめの花うたて匂ひの人したふらむ
分やらぬにほひそふかき梅かえの花のゆきゝも道まとふかに
春かせのゆく袖にほふむめの花宿こそしられ香やはかくるゝ
誰袖のゆきゝもわかし玉ほこのみちてにほへる梅の下かせ
行てこそとはましさとの梅かゝを先吹なくる春の山かせ
みち野へのいつの人まにむめの花うつろふはかり風の吹けん
さとはいてぬおほえぬ袖のうつりかを嵐にかこつ梅のした道
梅花にほふさかりそ道のへのしつか垣れも人にとはるゝ
ふめはおし花は行てに故郷のみかきか原のむめの下陰
春かすみ朝たつ袖もかほれとや梅さく山にふくあらしかな
玉ほこの道ゆきふりの梅のはなきえすは人の跡やとふ覧
吹なくるかせなはたのむ道のへの行てにあかぬ梅の匂ひな
くらふ山やみにもしるき梅かゝになか〳〵春は道まとひけり
みちのへの老木の梅のいにしへにたか行袖か匂ひそめけむ
人はいさまちもやすらん梅のはな行過かたき香に匂ひつゝ
みちのへの垣ねにさけるむめの花たか袖わかすにほふ比かな
道のへの野中の梅の春風にたかなをさりのそても殘らす
わきもこかなれし袂にくらふ山やみに越れと梅のかそする
もろ人の行かふのへの春かせに衣手わかすにほふむめかゝ

春月

白妙の花よりほかは雲もなし霞にかきる春のよの月
花さかぬ枝にもかけやたまる覧木のめも春の山のはの月
山のはに花のかゝみとみる月もちりのまかひに霞む比哉
やまのはも霞の外の花のかにこの比ふかきいさよひの月
大かたの空にそ春の色をなす霞にかすむはるのよの月
ときはなる松はみとりの色そへてひとしほ霞む春のよの月
雲はなをよもの春風吹はらへ霞にゆるすおほろ月よそ
おほかたの春はおほろの山のはにこよひかすまぬ月を見る哉
けふも猶花はつれなき木のもとにをのれうつろふよはの月哉
かつらきや明るはおしき山のはの月にかゝれる花のうす雲
あはれしる人やなからん霞むよの月と花とは春な忘れす
立渡る朝けの霞ふかゝらてすむ程みゆる春のよの月
ふけぬるか雲より上の影みえて霞にあまる春のよの月
ひとりみて思ひつゝくる春のよの月もはかなき身の行衛哉
心とも（や暁）おほろなるらむ春のよの月を霞にかこつへきかは
さそはるゝ花もゆく系の大空に風よりくもる春のよの月
ふけぬとて恨みなれにしかたそきのいろ山霞む春の夜の月
ふかき夜の月と花とのひかりゆへよそなるれやの春の燈
久かたの空吹はらふ春風にかすみかゝらぬ山のはの月
大空はわきてかすまぬ春のよのこゝろ〳〵の宿の月かけ
はるきてはまたうらわかき初草のみしかき夜半に霞む月影
庭もせに軒はの梅の咲しよりかすまて移る春のよの月

岸柳

青柳の岸よりかゝる糸ことにみたれて落る水のしら波
春風のたつたのきしの柳陰なかれもやらぬ波の下くさ
なかめやるみむろの岸の柳原霞のうへに春風そふく
なそくといつれの色を契る覧花待ころの岸の青柳
最上川かけこそおなし稲舟ののほれはくたる岸の青柳

あさみとり岸の青柳うちはへて春きにけりと波もよる也
はつせ川なひく玉藻はみかくれてきしの柳に春風そふく
たつ田川岸の柳なこきませて波の花にも春は見えけり
立田川した行水は淺けれと陰のみ深き岸の青柳
かせふけは河そひ柳そこ消てなみこそかけの霞なりけれ
たつ田川きしの柳はさほ姫のうちたれ髪やかけてほす覽
青柳の神南備川の春風にみむろの岸なあらふ白波
河よとのさはかぬ水もさはきけりきしの柳や陰なひくらん
岩まゆく河そひ柳玉ゆらもほしえぬ枝な春かせそふく
君か代に四方の草木のなひくとも先しらするは岸の青柳
なみのうへに岸の柳なこきませて花の錦のおれは亂るゝ
よしの河きしの青柳うちなひき涙にこほるゝ露のしら玉
龍田川みむろの岸のふる柳いかにのこりて春なしるらむ
神南備のみむろのきしの柳かけみとりも深き水の色哉
かけうつす岸の青柳うちなひき下行なみも春風そふく
かみなひのみむろの岸の河柳かはらぬ波も春めきにけり
うき草は根なたえて行河かせにさそはれはてぬ岸の青柳

旅春雨

花とみてけふやぬれなむ春雨にゆけとかけなき峯の白雲
行くらし雨ふりすさふ春の日のなかくもみえぬ道のしは草
みやこにはわかなつむらん東路やきのふもけふも春雨そふる
たひ枕こやもかくれぬあしのはの程なき床にはるさめそふる
春雨のふるさと人のかたみとてみのしろ衣ほさすともきむ
都にはこのめも今ははるの雨日數ふり行たひの空かな
ゆくてにもまたむすはれぬわか草の枕いそかす春雨そふる
分來つるみちは木のめもはるさめの故郷深き跡のしら雲
たひ衣ぬれてそ袖にしられける霞にわかぬ春雨のそら
春雨も晴ゆくすゑなみわたせは遠山さくら雲そつれなき
わか草の露の枕もふしわひぬ春雨そゝくむさしのゝはら
かすみゆく都のさかひよそにのみ猶山かくすはるさめの空
きのふまてまた冬かれに分し野もけふは緑に春雨そ降
昨日今日越ゆく山の苔のうへに夕日色ある春雨そふる
春雨も旅の日數もふる程はのへのみとりの色にみえけり
春雨のふるのかり庵さゝなあらみ軒はともなく落る玉水
明日ゆかむ野原の草はもえぬらし旅ねの庵に春雨そふる
宿も猶（かなイ）さのゝわたりのさのみやはぬれてもゆかむ春雨の空
ふみまよふ山路の苔の色そこき旅袖はさぬはるさめの比
たひ衣ぬれて春雨けふふりぬあすやみとりの野への若草
忘れすはしほれて出し春雨のふるさと人も袖ぬらすらん
白妙の袖のわかれにぬれそめて猶ほしかたき春雨のそら

遠歸鴈

わかれなはよるとなきても思ひ出よいく山遠くかへるかりかね
みるまゝに心ほそくもとふ鴈の雲になり行春の明ほの
かへるさのさかひいつくに成ぬらん雲なき空に消る鴈かね
いく霞いくのゝすゑはしらくものたな引空にかへるかりかね
かすみ行四方の木のめもはる／＼と花まつ山に歸るかりかね
雲かくれ霞な分てかへる鴈かけたにみえぬ春のよの月
霞たつ春の山への花のかなふきくる風にきゆるかりかね
天つ空みやこなうとくとふ鴈のはたての雲に遠さかる聲

われながらつらきわかれをなくかりの名殘の空は雲も殘らす
雲に入こゑもすかたも消はてゝおもかけ計かへる鴈かれ
いまははやかすめる峯のしら雲にたえ〴〵みえてかへる鴈金
歸るかり程はくもゐになくれ（もなのれまたイ）ぬるたのむのかたやみえす成行
歸る鴈霞ていぬる山のはに面影のこるしのゝめのそら（月イ）
今はとて山とひこえてゆく鴈のひとつ雲ゐに殘るゆふくれ
歸る鴈みちゆきふりのことつても忘るはかりに遠さかりぬる
かこつへき雲も霞もなかりけりみとりの空にきゆるかりかれ
今は又いつくの里にきこゆらんかすみていぬる春の鴈かれ
春の日のなかき通路あとしあれは霞のをちにかへるかりかれ
かへる鴈かすめる空に數きえて山のあなたに遠さかりぬる
わきてよも跡は霞もふかゝらし雲井の鴈そとをさかるらん
なき渡る雲井の鴈のかへる山來てもとまらぬ名こそつらけれ
歸る鴈遠さかり行山のはに殘る月さへなを霞みつゝ

山花

梓弓をしても花とたのみつゝいるさの山にかゝるしらくも
さくらさく山は霞にうつもれてみとりの空に殘るしら雲
ちる花をよしのゝおくにみる人はいとゝもよほす色やそふ覽
あしひきの山さくら戸をまれに明て花こそあるし誰を待らめ
あたなりといひはなすとも櫻花たかなはたゝし峯の春かせ
山さくらをのれ幾よのはるをへぬ花にふりゆくみよしのゝ里
山櫻おほふはかりのかひもなしかすみの袖は花もたまらす
明わたるいまはの月の山のはにうす花さくら色そうつろふ
ものことにあらたまれとも春をへて花にそまかふ峯の白雲
峯つゝきなかめもかゝる山のはの雲のいつくかさくら成らん
くれなゐのうす花さくら咲にけり峯のしら雲色そまかはぬ
山のはのさくらたゝよひふく風にかけてあたなる雲の色哉
みよしのゝ山のさくらは移ろひてあれたる宿に人そまれなる
すみかへて思ひし山の櫻戸をなを此世とて吹あらし哉
きのふけふ山の朝けそ色かはるいさうちむれて花を尋む
花の色の春はかさなるよしの山槇立みれの雲そすくなき
よしの山よのまに花は咲にけりけさ立まさる峯のしら雲
芳野山ふるき枝折そあはれなる今年も春の花を尋ねて
三輪の山春のかさしの櫻はな檜原を分て誰か折らむ
あさ霞たつたの峯の木のまより人つてならぬ初さくら哉
みよしのゝ遠山さくら春ことに心も空にかゝるしらくも
しら雲に櫻こきませみよしのゝ山もかすまぬ春のあけほの

關花

あふ坂や霞もしろく吹かせにいつれを雲とはなとしりける
山さくら花の戸さしを明そめて風もとまらぬしら川の關
ちらすなよあふさか山の山さくら袖にあらしの又かへりこむ
櫻花たか世のわか木ふりはてゝすまの關やの跡うつむらん
おしむとも花もとまらす不破の關山吹越る春のあらしに
風すきぬ關路なりせは山さくらのとかに春の花はみてまし
會坂や明ほのしろき花の色にをのれよふかき關の杉むら
いろみえぬ花のかのみやかよふらん雲にとちたるしら河の關
櫻色の衣のせきの春風にわすれかたみの花の香そする
花をたにとゝむか名をもとゝめはや春はもちゐぬ關の嵐に
しら河の關のしからみかけとめよ花をさそひて春そ暮行
音羽山をとにはたてぬ花なれや關の杉まにみゆるしら雲

逢さかの關もりすまぬ御代なれと花みて過る人やなか覧
世にふれはさそなの春にあふ坂の關もの花にけふは暮しつ
ちらぬまはみすてゝ過る人もあらし花にまかせよしら河の關
清見潟さくら吹おろす山風にしほひもしらぬ浪のせきもり
とはれけるせきのわらやはむかしにてあるし殘れる逢坂の花
かつこえてぬさも取あへす逢坂の花のしらゆふ關のまに〳〵
心あてにそれかとそみる櫻花かすみのせきの春のゆふ暮
せきの名も人たのめなる逢坂に花たちそひて過るはる哉
散花のかけやはとまるあふ坂の關のしみつの名さへうらめし
音羽山せきのいさめはなけれとも散しく花を道もゆるさぬ

庭花

庭の面にこれもや風のかけたらん木より外の花のしからみ
ふめはおしふまては人なとひかたみ風ふき分よ花の白雪
とはれつる人のかたみもとゝまらす跡と跡なき花のしら雪
跡たえてとはれぬ庭の昔の色も忘るはかりに花そ散しく
雪とのみふるはならひの花なれと宿から庭の跡やたえなん
こぬ人なとへともまたし櫻花ちりなは庭のふまゝくもおし
けさみれは梢の花は散にけり風のしたなる庭のしら雪
さひしさなとはゝ恨みし春ふかみ跡なき庭の花なわくとも
年なへて花のしら雪ふりにけり哀いくよの宿の春かせ
ちる花に降そふ雨の庭たつみたまさかにみる春のみそれな
山里の軒はのさくら吹かせにうくひすならてとふ人もかな
こすゑには青葉ましらて散はなのつもれはあらぬ庭のさゝ原
とふ人の移ろひはてし庭の面は花にまかせてすむへかりけり
雪とふる花は□へえぬ庭のおもにこすゑなしらぬ風そ殘れる
春來てもとはれぬ庭の櫻花ちらぬさきより人そこひしき
きてみれはきのふの花に跡たえて雪の下たる庭の蓬生
又とへよけふの櫻に吹かせのあすさへふかは庭のしらゆき
庭もせにちり行花の梢にはのこりすくなき春の暮かな
なのつからとひくる人もみるはかり花散庭の朝きよめすな
人こゝろ風も吹あへぬふるさとは跡なき庭の花そつれなき
あさてほす庭にふきまく色みれは風のやとりになる櫻哉
ちりやらて待みる庭の櫻はなつもらぬさきをとはゝ問なむ

河款冬

よし野川いはてうつろふ山ふきも春の日數たにふかはなる
散はつる山吹の瀬にゆくはるの花にさほさすうちの川長
かさしおるやそうち人の袖衣ぬれてこしまの山ふきのはな
山吹の花にせかるゝおもひ川なみのちしほはしたにそめつゝ
やまふきの井手の里人ぬしや誰花はこたへす春の河なみ
くちなしにゐての川なみうち出て見つともいはし花の色は
石はしる瀧なき河もかひそなき折はこほるゝ山ふきの花
ちりぬるか水上しらぬ山ふきの色になかるゝ井手の川なみ
よしの河おられぬ水に袖ぬれぬ波にうつろふ岸の山吹
吉野川さくら山ふきこきませて春のにしきなあらふ岸なみ
よしのかは岩行なみもうつろひてみてな淺らん山吹の花
あすよりは春のかたみな立はなの小嶋に散れる山ふきの花
山ふきの花のさかりは過にけりゐての蛙よ鳴て恨みよ
やまふきのうつろふ花やしけからん波な染たる井手の川水
衣手はゐての川なみかゝれともしゐて折つる山ふきの花
よしの川さくらにゝる、春の色のしはしやすらふ岸の山ふき

春のゆく河への波にぬれ／＼もけふこそおらめ山ふきの花

ゆく水は下くゝるとも山ふきの花なもらすな井手のしからみ

山ふきの花さきしより吉野河岩なみはやく春そ暮行

よしの川春ゆく水の早きせになのれうつろふきしの山吹

芳野河おちくる水に今そしる人にしられぬ山ふきの花

さきかゝる下行水のおもかけに川なみおしき岸のやまふき

夏

社卯花

すみよしやゆふしてなひく松かせにうら波白くかゝる卯花

みかけ山卯のはな月夜露なからほすやちはやのふるの神垣

手向さすたか世の花のくちもせて神のう月の色に咲らむ

御幣とろみわのはふりやうへ置しゆふして白くかゝる卯花

神まつる卯月の花や咲ぬらむ下くさかゝる杜のゆふして

白妙に神の垣ねはさきにけり卯のはな月よくもりあらすな

神かきに咲やうの花あめにます曉たか姫の手向なるへし

卯木かきしらゆふかけてみたらしや花のいくしは神やうく覧

たか荒和しらゆふかけて神かきのみたらし川にさける卯花

神代よりひかりやかけて卯花のはなもあまてる月よみの杜

夏くれはみむろの山のさかきはにゆふしてかけてさける卯花

河のせにたてぬやしろも卯花のしのに衣なほすかとそみる

あまつ袖ふるの山なる榊はに雪のしら木綿かくるうの花

夏かくらけふやしつらむ卯花の白ゆふかくる賀茂の川かせ

いそのかみ神さひにける玉かきに猶うの花のかゝるしらゆふ

咲あへぬ花よりしめなゆふかつら卯月なかけて神も徐けり

卯のはなや玉かきしろく咲ぬらむはるかにかゝる賀茂の川波

いなり山杉のしたかけ下はれて卯花月夜道もさやけし

神山の青葉ましりに咲にける初うの花の色そすくなき

卯花のしらゆふかゝるこの比そ手向にあけるふるのみつかき

ゆふしてにまかふうの花うちなひき神のい垣としろくも有哉

手向なくたかゆふしての色とてか神垣しろく咲る卯花

早苗多

村雨にとる手ひまなき早苗かなきのふもけふも袖ぬらしつゝ

けふいくか千里の田子のとりもあへすまきし早苗の程そしられぬ

あめか下田子のもすそやしほる覧いつくもおなし早苗とる頃

うへくらすみとりのさなへ里ことに民の草葉の数もみえけり

うへ盡す千里の田子のいとまなみつけのなくしも早苗とる頃

うちはへてとれとも盡す曳しめの外まてあまる早苗成らん

行つるの鳥羽田のさなへ里つゝき千世の数とる御代の民哉（なりイ）

ますらおか千町の早苗とり／＼にけふはさ月とこゑ急くかな

となる山田みちある御代にたつたみのその数しらすとる早苗哉

君か代は千町の早苗ひきつれておりたつ田子の数もしられす

立ならふ民の小笠も数そひてけふも千町にさなへとるなり

まちえつゝあまれきとしの五月雨に荒田の澤もさなへとる也

玉ほこや道ある民も數そひて山田のさなへとらぬ日そなき

里つゝきいく田の面にうつりきて數そふ民の早苗とるらし

さと毎にたこの數そふ君か代になたとりあまるさなへ成けれ

とりくらす早苗はあすも山城の鳥羽にあふへき田子の秋かな

千里まてとれはつきせぬ早苗よりかねて末葉の秋はみえつゝ

あめかした廣き田面に立たみもとるや早苗のやむ時もなし

けふいくか田子のもすそのぬれなから千町の早苗とり暮す覽
あめかしたしけき惠やみたやもり急きもあへぬけふの早苗に
さなへとりおりたつ田子の聲々に御代さかへ行程そしらるゝ
里わかぬ四方のさなへの數々に君の惠みの色やみゆらん

里郭公

いろ深く誰もしのふの里の名を山ほとゝきすなく〳〵そ問ふ
今もまたなみたやさそふ郭公わか衣手のさとになくなり
この里に今も鳴なむほとゝきす聞しにゝたるこそのふる聲
ほとゝきす誰しのふとか大あらきのふりにし里を今もとふ覽
尋ねきて里とふ人も鳴ふるす山ほとゝきすわれのみそきく
このさとの軒はにきなく子規なをへたてたる五月雨の雲
白妙の衣ほすよりほとゝきすなくや卯月の玉川のさと
かりにきてふしみのくれのむら雨にぬれて里とふ郭公哉
何かしのふをのかさ月もほとゝきすあすかの里の夕くれの聲
ほとゝきすいつみよしのゝ里なれてたのむの鴈の跡しのふ覽
郭公おきゐのさとは過ぬなりいかなる人の夢むすふらん
すかはらや伏見の里のほとゝきす夜半にやきつる明ほのゝ聲
たかまとのあれたるさとの郭公なく夕暮をたれかしのはむ
誰里へおもひたつらん杜鵑秋みし色にふりてこそなけ
鳴すてゝ急きなすきそほとゝきすなか井の里の名をも賴まむ
さとわかすなけや雲路の郭公そら行月の跡をたつねて
やすくやはふしみの里の杜鵑人つてならぬはつ音まつころ
深草の里をはかれぬほとゝきすなか鳴かたを誰うらむらん
春秋もしらぬときはのさと人に夏をきかするほとゝきす哉
有明の月をもまたし郭公なかなく里のむら雨のそら
いまはとてまたれし物をほとゝきす外山の里に聲のふりぬる
あけぬとや岡への里のほとゝきすまつよりにしの月になく也

岡郭公

ほとゝきす鳴や岡への松のはのかはらてあかぬよゝのふる聲
ほとゝきすやすらふ月の入かたに猶こゑ殘る岡のまつかせ
草むすふをかのやかたの郭公ぬれにし袖そ心してなけ
またしらぬをかへの宿の子規よその初ねにきゝかなやまむ
朝戸明ののきはの岡の杜鵑をのかれ山も今や出らむ
五月まつ山ほとゝきす人しれす聲をならしの岡に鳴なり
あふち咲をかへにきなく子規藤のゆかりの色やとふらん
ならしはの名にあふをかのほとゝきす故鄕人もいまや聞らむ
ほとゝきすたか住宿にとひなれてゆきゝの岡のやすらひの聲
聞つとはしられてきかむ子規はつ音ならしのをかの忍ひ音
郭公いつとわきけりゆふ月夜さすや岡への松になくこゑ
ほとゝきす夜半のなこりは飛鳥河ゆきゝの岡に又もたつねん
心なき人やはとまる郭公なくや五月のをかの松かけ
ほとゝきす鳴すてゝ行かたをかの松にかたふく有明の月
まつ人をなとかたらはて郭公ひとりしのひの岡になくらん
夕日さすむかひのをかの郭公雲のはたてになりはへてなけ
ほとゝきす誰を忍ひのをかのへのよふかき雨にぬれて鳴覽
ほとゝきすなくや岡への松のはのいつともわかぬ聲の色かな
水莖のをかへの里のほとゝきすねての朝けに聞ぬ月はなし
玉鉾のゆきゝのをかの子規いま一こゑにくらすころかな
かたをかの梢の木かくれ風過て聲ほのかなる郭公かな
ほとゝきす鳴や五月をいつとてかなをも忍ひのをかの一こゑ

夜盧橘
うたゝねの枕みしかき夏のよに夢もむかしとにほふたちはな
ふしわひてむかしなかむる古郷のまやのあまりににほふ立花
風かほる花たちはなにやとりして月も昔の色やそふらむ
たち花の花ちるさとの夕月よ空にしられぬかけや殘らん
さためなく夢もむかしと烏羽玉のやみのうつゝに匂ふ立はな
たち花のはなちるよひのむら雨に昔をかけてぬるゝ袖かな
月やあらぬむかしやたれとにほふらん花橘ももとのみにして
こよひしも袖のかしるし橘の小しまのとまり浦風やふく
かた糸をよるの袂も匂ひけり花たちはなを玉にぬきつゝ
誰かしるひとり忍ふの軒はなる花橘のよはのねさめを
のき近き花たちはなのにほふ夜はむかし忍ふの袖そ露けき
かけやとす月もむかしのよそならす花橘のにほふたもとに
眺めつゝねぬよの袖やかよふらん花たちはなも露そこほるゝ
わすれすは花橘にしたれして跡はむかしの夢とたにとへ
たちはなのにほひそのころさよ衣かされしそては昔ならねと
みもはてぬ夢のいつくに橘のとをきむかしの香をさそふらん
橘のにほふ軒もる月かけに昔の袖の色もみえけり
月かけにむかしわすれぬおもかけのけに橘は袖のかそする
夏のよもやゝふけ行は橘のしたふく風の袖にすゝしき
いにしへやたかみしか夜のなこりより袖のかたみに匂ふ橘
ふかき夜をとふ人もかな閨のへのおとろか軒にゝほふ立はな
さ月やみめに見ぬ人のそてのかを匂ひにさそふ軒のたち花

籬瞿麦
古郷の庭もまかきもなく露のわきて色こきとこ夏の花
わか宿の籬にうへしなてしこの花もまとをにとふ人のなき
雨そゝくおなしまかきの草なから露おもけなるなてしこの花
なてしこのたのむ籬もたはむまてよのまの露のぬけるしら玉
をく露ややとりなるへき夕暮のまかきはやかて大和なてしこ
たれゆへに籬の露のをきゐつゝぬれてかはかぬとこ夏のはな
朝露のまかきのすかたうつたへに見れ共あかぬなてしこの花
しら露の玉に錦をしきしまや笆をかさるやまとなてしこ
花の色によるはこえしと宿りしてくるゝ籬をやまとなてしこ
茂りあふ草もへたてぬ庭の面のまかきあらはす床夏のはな
朝日かけ露さへにほふなてしこの花のまかきを誰にみせまし
あたにゆふ籬のうちを床なつのをのれふしてや露にぬるらん
床夏のまかきもしつむ故郷の草にやつれぬ花のいろ〳〵
ふるさとのまかきはやまとなてしこの花に殘れる夕くれの空
むかしみしもとの籬はかはられと露そうつろふ床なつのはな
うすくこき笆にうへしなてしこの色をわすれぬ花の朝露
うつしうへしまかきあれ行床夏の花は昔の露そうつろふ
日をへつゝ籬にあまる匂ひかな咲そふからのなてしこの花
螢なかぬゆふへもあはれなりまかきにさけるやまとなてしこ
秋やいまちかき笆の朝ほらけ露のをきゐる常夏のはな
うへをきしやまとなてしこ詠れてそ古き籬の程はしらるゝ
秋をまつ草のまかきになく露のうつろひ初る常夏の花

江螢
しら露の玉江のあしのよひ〳〵に秋かせちかく行ほたるかな
難波えや芦のはかくれすむものを小屋もあらはに飛螢哉
夏むしのをのれはやみにあられ共まよふ入えは月もやとらす

こき歸る棚なしをふねおなし江にもえて螢のしるへかはなる
なにはめかすくもたく火の深きえにうへにもえても行螢哉
難波えやあまのいさりか螢かもあしのほのかに秋風そふく
いせの海の入えの草のしほひかたあまも螢の玉はひろはし
行ほたる玉江のあしの葉かせにかりそめならぬ秋や待らん
なにはえやみるめはあまのいさり火の影ほのかにも行螢哉
難波江やからぬ芦火を焼そめてなみのよるをもしる螢かな
くれ行は螢とひかふみしまえの玉江のまこもしはしからすな
なにはかたもゆる螢も同しえにけふりそあらぬ蜑のいさりひ
なには江のあしまの螢もえてのみこやあらはなる思ひ成らん
夏と秋とたれかはわきてみつのえにかたへ涼しく行ほたる哉
つらき江にみたれそめにし夏むしの玉ちるはかり物思ふらむ
堀えこくみふねふりにし波の上に縮玉しくは螢なりけり
難波江やさのみはともすあまもあらし螢やそふる漁火のかけ
かゝりさすたなゝしをふねこきかへり入えの螢数そゝひ行
大ゐ河くたすうふねの篝火にいり江のほたるかすまさるらし
深き江の思ひよいかに夏むしのとへとしら玉あはれとやみん
身よりあまるおもひは誰もなにはなる深きえにしもとふ螢哉
暮やらぬ芦の葉かくれとふほたる入江の水や夜をいそく覽

秋

早秋

今よりの夕露ふかき秋の色にしらぬむかしをしる涙かな
いつまてとむれゐし鳥も今さらに立ことやすき秋のはつかせ
草の葉にけさなく蟲の色みれは風よりさきに秋はきにけり
あまの河わたせの瀬に風立てやゝ程ちかきかさゝきの橋
うつせみの羽におく露もあらはれてうすき袂に秋風そふく
秋きぬと風にさやかにおとつれて色こそみえねのへの草はに
たかへなるわさ田の穂むけうち靡き昨日のさなへ秋風そふく
衣手のすゝしきまてもなけれともおもひなさるゝ夕暮の空
あきや来る色はつれなき常盤木の青葉の山に風かはる也
夏ははやいな葉のなるこ引かへてきのふのさなへ秋風そふく
いつしかと身にしむはかり立田姫あき吹風に人や戀しき
さひしさのあはれをしらぬ宿もなし四方の草木の秋の初風
風の音もいつかはるらん秋はきてまた淺ちふの小野のしの原
大かたは誰秋ならぬ荻のはに忍ふもつらきかせの音かな
やとかるかまたひとへなる衣手にひかりもうすき秋の三日月
おもふたに露そとまらぬ今よりの草の戸さしのあきの夕かせ
けさみれはしくれぬさきの音羽山いろかはり行秋かせそふく
露おつる早田の稲は打なひきけさよりまほにあき風そ吹
いつも閑庭の松風ふきかへて衣てさむき秋はきにけり
今よりの朝けの袖もこゝろせよくるゝ夜かはる秋のはつかせ
夏ころもなくしら露の明かたにしられぬ程のあきかせそ吹
ふか緑つれなき松にふく風もうつるはかりの秋はきにけり

草露

をくつゆの色に出ゆくあきはきや物思ふくさの袂なるらん
萩かはな散てふことをまたきよりをのれならはす秋のしら露
をふひかは移れはかはる袖の上にかこちかほなるはきの白露
わきてよもあまとふ鴈のをきもせし宿から深き萩の朝露
年をへてうつろふ秋の露やそふいつかは袖のもとあらの萩

色ことに萩のうはになく露やめにみる秋の哀なるらん
咲かくすのもりか庵のさゝの戸もあらはになける萩の朝露
はきのうへの露には何のとはかりになれて移ろふ宵の月影
小萩はら下葉のこらす色に出て露もうつろふ秋風そふく
露おもき枝にもさよや更ぬらん小萩かくれの月かたふきぬ
かせわたる萩のしたはにうつろ露それもこの比色かはりゆく
萩の上の露なかされてなく鴈の涙にうかふ秋の色かな
となる山田かりそ鳴なる秋はきの下葉の露や色に出らむ
秋はきの葉すゑにおもき夕露の色なかへても吹あらしかな
ものおもはぬ宿もかなしや萩かえに鴈の涙の露おつる比
秋にあひて物思ふ宿の萩の露かならすかりの涙ともなし
この程は何のなみたの露かなく鴈もまた來ぬ宿の萩原
野かせたつ萩のにしきのぬきなうすみ結ひとゝめぬ露の白玉
なきわたる鴈の涙となく露といつれかそむるのへのはきはら
ぬきとめぬ萩のしら露袖ふれて物思ふ秋のなみたにそかる
秋のゝにむすほふれたる萩かえの露よりさきに袖はぬれにき
あきはきの花ちるのへのしら露はそめぬ袂も色そ移ろふ

萩風

おきはらやすゑこす比の夕くれにめにみぬ風も秋そかなしき
うらみても秋まて人のとひこかし風のやとりの庭のおきはら
さひしさのことはりはかり吹かせも我身にとまる宿の萩はら
今よりの夕くれかこつ下おきなうちつけにふく秋のはつかせ
大かたのなひく草木はわかれ共おきのうはゝそ秋風はふく
下おきに露のしら玉くたく也わか身ひとつのあきのゆふかせ
草も木もさそなあらしの山かせにひとりしほれぬ萩の音哉
萩のはにはしめてかはる秋かせな空にまちける手枕の露
あきの色なそれともわかぬ夕暮も心やすめぬ萩のうは風
あれはあれとみし人なから萩のはのかはらてそよく秋風も哉
萩の葉に夏はしのひしかせの音もはけしくなれはあきの夕暮
おきはらやすゑのゝ露に風立て身にしむ時の秋のゆふくれ
秋なうしとなかめぬ宿の萩のはに夕くれならぬ風やふくらん
かれ／＼に秋の心のなるまてもいかなる色のおきのうはかせ
大かたのあきの哀のなかにしも夕くれちきる萩の上風
萩の葉なよきて吹ゆく風ならは袖のよそなる露やこほれん
こゝろから色の萩なうへそめて秋かせことにぬるゝ袖かな
ねやちかくうへしはたれそ萩のはの末こす風も人のとかゝは
うへてすてゝ聞人もなき故郷のまかきにのこる萩の上風
すみすてしあはれいくよのふるさとに風は昔の庭のおき原
ね覺する庭の萩はらうちそよき人もうらめし山おろしのかせ
さらぬたに袖ほしかぬる故里の月によふかきおきの上かせ

蟀虫聲

まつむしのこゑにや宿なかり衣すそのゝ秋にみちもまとはて
聞つやとそのなくさめのことのはも誰にとはましのへの松虫
秋のゝに袖はにほへと松むしのなのかありかは風もおしへす
まつ虫のなくかたとなくさく花の色々おしき露やこほれん
まてしはし聞てもとはむ草の原あらしにまかふ松むしの聲
夕されはなのれ鳴てそ松虫の草はの露のやとりなはとふ
わけわひぬもすの草茎そことたにおしへぬのへの松虫の聲
とひわひて入野よふかき刈萱の下れに誰なまつむしのこゑ
秋の野の草葉の露にしほれきて此ゆふ暮も松虫のこゑ

うつしうへし花の跡とふむしのねものへになとめそ秋の夕風
夕暮にふきくる風よしるへせよいつれの〻へに松むしの聲
誰なとふ道のゆくてもまつ虫のこゑなしるへのよもきふの宿
草のはらむしの音しけき宿とへはひとむらすゝき秋かせそ吹
夕暮はしの〻葉くさのあとかたもみえぬ道とふ松むしのこゑ
たかやはら露こほるとも松むしの聲なはよそに聞やすくへき
たかためかまつなな虫のねにたて〻尋ねぬよその露に鳴らん
なく虫の聲やいつことたとるまに草むらことの露にぬれつ〻
いつくにか我松むしは恨むらんまよふの原にさよふけにけり
松むしのこゑする野へなたつぬとて草村ことに袖ぬらしつ〻
ふみ分し野中ふるみちあとはあれと虫のねたとる秋の夕暮
中々に分てもつらし淺茅はらむしの音よはるのへの秋かせ
いくかへりわけぬ草はもなかりつるそなたの露に松むしの鳴

山家月

山さとは軒はのみねのたかけれは松のはなから月そふけゆく
谷ふかき松の梢な草はにて庭より出るやまのはの月
すみかふる宿から色やまさる覽みやこにも見し山のはの月
月ならてたれそま山のかけはかりふかき柴やの秋なとはまし
袖のうへにやとさすとてもこの山の嶺には近き月そなれぬる
住なれぬ宿ゆへかはる哀かな軒はに見つる山端の月
松の戸ななし明かたの山かせに雲もかゝらぬ月なみる哉
軒ふかく梢もる月の葉なしけみいく度おなし袖に消らん
さひしさはとふにつらさなましはしく外山の庵の床の月影
いとひこし雲なは谷にすみなしてうきよな出る峯の月かけ
なかむれはかすさへちかくとふ鴫の軒はにかゝる山のはの月

さらしなやなはすて山の柴の戸にしはしも秋の月はくもらす
秋やあらぬ月やみしよにまさる覽住こし山の庵そうかる〻
世ないとふ心のおくの山さとにひとりそ月なみても過ぬる
のかれきて又あくかる〻山里にすみなれにける月の影かな
山ふかくとふ人さへに夜半の月花のあるしな春はかこちき
とはれまし月も梢の外そゆく檜の葉しけき秋の山里
山さとにいまは(さはイ)の心月のみやかはらぬ秋のともとみるへき
なのつから風もとまらぬさゝの庵深山もさやに月はもりけり
ならはては(そイ)深山の友とたのみこし住うかりける月の光な
くもるへき木のは吹しく山里の風よりのちに月は出けり
結ひなきしましはの庵や荒ぬらん露なからもる山端の月

野徑月

あたしのや夕の露のたま〳〵もぬきとめかたき草の上の月
なかめ行月にうらなき葛のはのかへるもしらぬの〻への秋かせ
雪にすむたかねの月やさそふらんふしのすその〻秋の旅人
むさしのは露なく程の遠けれは月な衣にきぬ人そなき
なかめつ〻更行すゑも忘られぬ山のは遠きの〻への月影
やすらひに空ゆく月もやとりけり露分わふる野ちの篠原
とまるへきすゝのまろやはあれにけり里迄なくれの〻への月影
すみのほる月なは月となきなから木のしたはれぬ宿の〻露
むさしのは行すゑ近くなりにけり今宵そみつる山端の月
やとるへき裾の〻露な置なからなな山のはにかゝる月かけ
分くれしのはらの露のしら玉なあかすもみかく月の影哉
春日野は秋ゆくみちも白妙の袖ふりはへて月なみるかな
ゆきとまるみちなき秋の思ひかはすみのみ野るの〻の月かけ

はる〳〵とかきわくる草の葉末よりにはかに出る武蔵野の月
月かけのをくらん程はなを分むいくのゝ露は末遠くとも
しくれつる生野のすゑは晴にけり遠かた人の袖の月かけ
おもふことそれとはなしの（にイ）月そみむさゝ分る野の露の衣手
月にゆくふしの裾野そいそかるゝ清見か關のみほのうらまて
武藏野や行たひ人の跡もなし月の光の秋のしら雪
印南野は分ゆく露のふかければ淺ちか末に月そかたよる
分くらすのはらの露も白妙の衣手さむき夜半の月かけ
はる〳〵と行のゝすゑの草はまて露をかきりにやとる月影

船中月

とまりふれ寐覺に殘る月かけをむかしの夢になく〳〵そみる
月にこくおきつ舟人波まより數さへみゆるすみよしの松
わたの原とをき舟出に行くれてみちもやとりも月に馴ぬる
しらさりき秋のしほちをこく舟はいかはかりなる月をみる共
こく舟の外行なみも月さへて雲はへたてすやへのしほ風
わたの原いさよふ浪に舟出してまほにも月をなかめつる哉
木のまなきもろこし舟のうきねにも心つくしの月はみえけり
又やこむひれふる山を漕はなれ便もしらぬ月にまかせて
月かけのあかぬ光をみなれさほさすや雫にそてもぬれつゝ
みもきゝもならはぬよはのね覺哉笘もる月に礒の松かせ
あたら夜の月を雫にさす棹の行てもおしきうちの川長
夜ふねこくしるへの風に雲消て跡なき波は月そさやけき
沖つなみあら礒しろく夜は更てうきねの袖によする月影
秋のよはやそしま分るあまをふね人にも告ぬ月やみるらん
いまそしるよはに棹さす蜑小舟月みむとてのしわさなりとは
をのつから月みる友となりにけり契らぬ蜑の沖の釣舟
をのれさへうきたる船にやとりきてよな〳〵波にぬるゝ月影
由良のとをよわたる月にさそはれて行衛もしらすいつる舟人
湊入のあし分小ふね漕出てなにはの沖の月を見る哉
わたつみや秋なき波をこく舟も浦ちの月に袖はぬれけり
涙のみうきつの波のなみまくら月にひたせる袖そかなしき
あまをふねよるへの濱にこす棹の末よりつたふそての月影

曉　鹿

契りをく深山の秋のあかつきに猶うき物としかは鳴なり
をのかつまもつれなくみゆる限りとや有明の山にさを鹿の聲
夕月夜あかつきやみのむら雲に涙しくれて鹿もなく也
なかきよにあかすや（にイ）月をしたふらん業行しかの有明のこゑ
あくるまて妻待かせも高砂のをのれつれなきさをしかの聲
立かへる思ひやつきぬさをしかの聲のかきりは曉そなく
有明の月のかつらのもみちはを峯に殘しておしか鳴なり
鹿よいかにすそのゝ妻をおしむ共いるやましらぬ明方のこゑ
あけくれのをくらの山の秋かせに寐覺やすらん棹鹿のこゑ
さをしかの妻こひかねてぬるよはもなを曉をうしと鳴なり
この比のあか月露にいかはかり妻とふ鹿のぬれてなくらん
有明のつれなき山になく鹿も猶うき物と妻をこふらむ
秋のよはねさめの後もなか月の有明の月に鹿そなくなる
すみわふる世をうち山の朝ほらけ猶思ひ入しかそ鳴なる
曉をうき物そとはさをしかもいつならひてか聲に立らん
をのか妻なきてや鹿のわかるらむうつろふ萩の曉の露
戀つまにあはて明ぬとなく鹿のおしむもしらす月そかたふく

さを鹿のなのゝ草ふし起わかれかへるならひの霜もうらめし(ましきうイ)
夕月夜あかつきやみのくらふ山木のしたたとる鹿の鳴らん
つまをなみ鳴やおしかの涙よりちゝにくたくる嶺のつゆ
しをりするあかつき起の袖の上に鹿のねならぬ露やおくらん
さをしかのなくや涙をかけそへて暁深き山のした露

河霧

橋姫の待よの月やいたつらに霧たちこむるうちの川なみ
秋ふかき川せの霧のはれやらて人こそみえねことはかよへと
大井川ふかきゐせきに立きりもむかしのよゝの秋やこふらん
飛鳥川ふちともしらぬ秋のきり何にふかめて人へたつらん
つれもなきまきの小山はかけたえて霧にあらそふうちの河浪
秋かせや立田の河の霧のうちに色こそみえね水くゝる也
河きりにうちのはしひめ朝な〳〵うきてや空に物おもふ頃
とふとりのふるさとこめて飛鳥川かはせもはれぬ霧の暁(あけほのイ)
もみち葉のしくるゝ色はなかりけり霧のみ深き秋の川なみ
朝日山きりはよふかく立こめてひとり明行宇治の河浪
ゆふされは遠かた舟やまよふらん霧になりゆく佐保の河なみ
よしの河岩なみこめて立霧も早くそ秋の深くみえ行
遠かたや明ゆく霧のたえまよりたか袖したふうちの橋姫
よしの河岩なみこめて立きりのはやくなかるゝ山風そふく
あけぬとて遠かた人や出ぬらむ川せのきりはまたよふかきに
阿武隈にたつ河きりの朝な〳〵しゐてもやらぬ人なへたてそ
あらし山ふもとの川の夕霧によその紅葉の色そきえゆく
さしかへるうちの河長霧のうちにたゝこゝもとの友よはふ也
最上河きりの下行(こくイ)いなふねののほるもみえぬ秋の夕くれ

なかれても深き契の思ひ川あたにへたつるせゝの朝きり
ほの〳〵とをちかた人の聲なから風になかるゝうちの川きり
ふもとより立川霧をはらひかねかせも空なる秋の山のは

擣衣幽

こよひたれそなたの風の便とてぬしさたまらぬ衣うつらむ
まとゐめはそれかあらぬか秋風のふきくるかたに衣うつなり
聞まよふ聲さへきゆるうす霧の遠(き)やま人そ衣うつなり
秋かせにさそはれきえてうつ衣をよはぬ里のほとそ聞ゆる
から衣うつかきぬたも初鴈の雲ゐをわたるねにまかひつゝ
衣うつ音もおほろに霧こめてふけ行月のさむき(とみイ)空哉
夜やさむき里は雲井のこからしに聲さへうすくころもうつ也
へたて行雲にあらしの遠かたや誰さとゝなく衣うつらん
里遠くけふはいくのゝ花すゝきほのかに秋のころもうつなり
さとやとをきたえまはきえて秋風の吹につけてそ衣うつなる
たかさとの有明の月の明かたにこゑもほのかにころも打らむ
衣うつそなたのつてもたえ〳〵にをとつれかぬるさとの秋風
いく里の人にあはれをしらす覧衣うつよの庭の[illegible]かせ
ちかゝらぬよその砧もをとつれぬ人のしつまる秋のよな〳〵
たえ〳〵にきぬたの音そよはるなるそなたの風や吹かはる覧
風かよふまくらのそこにおとつれてかたもさためす衣うつ也
遠里やそなたの月に誰か住あるかなきかのころも打こゑ
さとの蜑のしほやき衣うつ音もまとをにひゝく風のつて哉
秋のよのなかきねさめの月影にとをき砧の音そさひしき
しつのめか月におき井の里となみなひ風しるく衣うつなり
衣打さとやいつくとわきかぬるとやまのすゑに月もかゝりぬ

ふけはてゝ猶たか里のとはかりもきこえぬ程に衣うつなり

夕紅葉

しからきのとやまの紅葉なのれとや夕日なそむる色まさる覧
大かたのゆふひのかけもあかねさすやしほの岡の秋の紅葉は
そめわたす木のはのうへの露も猶夕は分て秋やみゆらん
たつた姫雲のはたてにかけてなる秋の錦はぬきもさためす
暮かゝるゆふつけ鳥のうちはへて錦たつたのあきの山のは
秋もいまは夕くれなゐのもみちはや野にも山にも殘る色なき
とく暮るなくらの山のかけもなし秋の紅葉のしたてらす比
夕つく日下てる山のうすもみち時雨も露もそめぬ色かな
もみちする秋のはやまの夕つく日うつろふ雲の猶しくるらん
夕つく日そめ殘したる山かけの木のはゝかりや時雨まつらん
しくれつる木すゑははれて夕附日にしきほすてふ天のかく山
けふも又くれなはなけの道ならて紅葉を分る山のおくかな
まつとなき人もうらめし山里に木のはのおつる秋の夕暮
夕しくれふり出て色やそめつらんからくれなゐの嶺の紅葉々
時雨のみ染さりけりな夕つく日うつろふ山の木々のくれなゐ
くもるとも紅葉はのこせ山のはに月待そらのよもの木からし
ゆふつくひうつろふ峯のうすもみち今一しほは時雨せれとも
夕時雨ふるからなのゝもとかしはもとつ葉なから紅葉しに鳬
小倉山夕日かくれやしくれつるぬるゝかほなる秋のもみちは
行秋やいまはたむけの山風に夕くれかけて散もみちかな
山風にかけもたまらす夕雨日もりの木のはのうつろひしより
なくら山雲よりにしにめくる日のなこりあらはす嶺の紅葉々

殘菊匂

色に出てしはしは匂へきくのはなこれより後の秋もすくなし
あさな〳〵移ろふ色にならふとも香なたに殘せ霜のしら菊
暮て行秋のたむけに色かへてふたゝひ匂ふ菊の白露
なきそめていく世つもれる匂ひともいさしらきくの花の下露
ものことにうつろふ比の色なから秋もかきらすにほふしら菊
こと〳〵に匂ひやかはるはつ霜にうつろひ殘る白菊のはな
竹の園まかきのきくのにほふ袖千世もかされよ露のまに〳〵（いく千よ露にぬれてほすらんイ）
秋ふかみまかきの菊はしほれてもうつろふ色にかやは殘らぬ
けさはまた移ろふ色もしらきくの花は老せぬ秋の霜かな
霜かれのうつろひなから白菊のふたゝひ花のさかりなそみる
草も木もうつろひはつる秋かせにひとりしほれぬ庭の白きく
いまはとて霜にかれ行しら菊の色こそあられかやはうつろふ
とふ人の袖にゝほひなとゝめても移ろひ殘れ秋のしらきく
白菊のうつろふ花はむらさきの草のゆかりの色とこそみれ
それかとも匂ひにかりそ殘りける色は跡なききくのませかき（きにイ）
色はみなうつろふきくの垣ねよりもとの匂ひの秋風そふく
うつろひて霜のみいまは白菊のにほひもさむく秋かせそふく
植しよりねこしてかれぬしらきくの深き匂ひは長月のすゑ
うちはらひおる袖寒くにほひけり霜の籬に殘るしら菊
霜ふかき垣ねのきくのこむらさき誰もとゆひの匂ひ成らん
きくの花にほひもうすきはつ霜に移ろひ殘る色そかなしき
あし曳の山路のきくのしら露にぬれてほしけむ袖の香そする

冬

朝時雨

なくら山しくれもかはく峯のうへにけさあらはるゝ嶺の木枯
もみちゝる山は朝日の色なからしくれてくたるうちの川なみ
あらしふくはらの外山の朝かしはぬるや時雨のいろに出つゝ
秋すきてなをうらめしき朝ほらけ空行くもゝうちしくれつゝ
朝な〳〵しほるゝ袖もますかゝみみる影さへにしくれてそ行
この里の朝けのけふり晴やらて嶺の時雨の雲つゝく也
春日野に朝ゐるくもの山風にしくれて渡る冬はきにけり
ほの〳〵と明る朝戸の時雨よりふゆはきにけりみ山へのさと
冬きぬとけさはいはたの柞原なとにたてゝもふるしくれ哉
夜のまには山のいつくなめくりつゝけさは軒はに時雨きぬ覧
あさな〳〵しくれの音そよはり行眞木の板やにもみちふく比
冬きぬといふはかりにや神無月けさは時雨のふりまさりつゝ
初しくれふるさと寒く冬はきてかはらぬ松もけささそさひしき
その色とみえはこそあらめ時雨ふる常磐の山のけさのむら雲
神な月思ひもあへぬ朝戸出にまやの軒はのうちしくるらん
むら時雨あさひもさためなきものを何山人の衣ほすらむ
山めくり夜のまの秋をなくりてやなこりしくるゝけさの村雲
初しくれくもりもはてぬ朝つく日むかひの岡にみかくしら玉
神無月しくれて明る山端にはなれもやらぬ横雲のそら
かみな月峯に朝日はさしなから夕をいそくむらしくれかな
かきくらす木のはの色も晴行はけさはまはらに降時雨哉
まさ木ちる外山の峯の朝くもり何にしくれの色をそむらん

竹霜

秋たきし霜ものこらぬ呉竹の葉分の霜の色そつれなき
なきまよふかさなる霜におとろけは我世もふけぬ窓の呉たけ
呉たけ葉かへぬ色にさゝ竹のおほみや人の袖いあさしも
いつよまてなれてふりぬる河たけのまた下蔭に霜そなきそふ
竹のはによな〳〵霜のふる里は庭もまかきも冬そあれ行
なく霜のよゝなかされて竹の園かはらぬ色にとしやふりなむ
山鳥の末尾の里もふしわひぬたけのはしたりなかきよの霜
霜のなくまかきのたけの下みとりやつれぬ色なこからしそ吹
冬の日はやかて程なく呉竹の葉にをく霜のきえあへぬまて
つゆは霜に結ひかへたる呉たけの葉にしたかひて風も吹也
いくちよもかれぬためしな見よとてや緑の竹に霜のなくらん
木にもあらぬまかきの竹に冬草の霜につれなき色かとそみる
竹のはのさやさや霜夜におとろけはさえたる月はかたふきに鬼
あられふる音こそよはれ竹のはにやゝなく霜のふかきよの空
ひとりふす窓の呉たけ風さえて葉分のしもゝ謡まよひけり
竹のはになく夕霜のなのれのみあらしにもあき色はみえつゝ
呉竹のかはらぬ色になきなれてあたなる霜も千世はへぬへし
木にもあらす草にもあらす呉竹は霜はなけ共色そかはらぬ
なかきよのね覺の窓の竹のはに曉さむく霜やなくらん
此ころの夕しもしろき竹のはに出るもまたぬ窓の月かけ
霜こほり衣手いたくさゆるよにたけのは白く明るしのゝめ
ふりつまむ雪のすゑはのいかならん霜たにおもき園の呉竹

池水鳥

すみわひていけのあしまなかもの水に殘るあともはかなし
池さむき芦まに氷る水とりのあな羽のこさぬ冬のよのしも
いけ水によりたる鳥もなれぬらんおなしやとかる有明の月

にを鳥の下のかよひもたえぬ覧殘るなみなき池のこほりに
ゆられ行にほのうきすもよるへなみ氷らぬ程そ廣澤の池
池水に浮なからこそ年をふれおしからぬ世をおしとなきつゝ
この池の木のはにあそふあしかもの靑羽こきませふく嵐かな
夜や寒きうきねの池のうす氷ひとへはかりのをしの毛ころも
此池のつらゝの床のさゆるよをあかしかねたる鴛のひとりね
月さゆるこやのあしまに住をしのをのれはらはぬ霜のむら消
みるめかるたよりにあらぬ池水をかつきわひぬる鴛の獨ね
池水の玉もの床に住かものうは毛の霜に冬はきにけり
中々に霜夜の空やさむからん氷にかへる池のをし鳥
見るもうしつかはぬをしのひとりのみいたつらに立跡の池水
池水にわれとむすはぬつらゝゆへみなれし鳥の遠さかりぬる
鳰のすむ池の氷にふる雪のうへにもかよふ跡はありけり
冬の池のつらゝの床のひとりねはかなしき物と鴛そ鳴なる
池にすむをしのうきねもなけかれぬ袖の氷におもひあはせて
冬のいけの水草をしなみふる雪に已もしろき鴨のむら鳥
影たえて凍りはてぬる池水にたくひもみえぬをしのひとりね
さゆるよの氷ふみ分池水に身をゝしとりのすむかひも哉
あしかものゆきゝも今はやすからす絕々氷る冬の池水

嶋千鳥

わたのはら漕出しふれの友千とり八十しまかくれ聲きこゆ也
風よする沖の小しまの濱ちとり涙のおりゐにこゑくたくなり
いせしまや玉しく浦のしほひかたのちしのへともなく千鳥哉
濱ひさしなけのかたみの友千鳥とわりすつる沖のこしまに
あはちしま渡るちとりも白妙の浪まにかさす與つしほ風
浦つたひしほくむあまの袖ぬれてをしまの千鳥月に鳴也
聞なれぬ旅しまもりかあさ衣さゆる霜よに鳴ちとりかな
なくちとり聲のよふかくなるまゝに月かたふきぬ松か浦しま
友ちとり鳴ねはかりをかはしまの水のしら波たちわかれつゝ
淡路嶋ゆふしほさきや立ぬらんすまのむかひに千鳥なく也
さよちとり浦のはつしま行かへり有明の月の空になくなり
むしのねは野しまの草にかれはてゝをのか霜よの千鳥なく也
小夜ちとり鳴やそなたの波まよりみゆる小嶋に月そかゝれる
ありと聞うらの初しまほの〳〵と降をける霜に千鳥なく也
松しまやいそこす波に立ちとりぬれてや夜半に浦つたふらん
さよ千鳥こゑもをしまの笘やかたなれたる蜑の夢はつれなし
あかし潟嶋たちかくす朝きりに舟こそみえねちとり鳴なり
あさりするあまや家路にかへるらん小しまの千鳥聲さはく也
さゝしまや磯こす波に立ちとり心とぬれてなかぬ夜そなき
遠近のしほかせさむみもゝつての八十の嶋はにちとりなく也
しまかくれ浪うつ磯にゐる千鳥くたけて聲はよはそかなしき
行舟もさそなあかしの嶋かくれをのれあらはに鳴千とり哉

松　雪

山のはに殘るみとりはみえね共音あらはなる松の雪おれ
もろともに老その松そ色かはることしも深くつもる白雪
わか宿はけさふる雪にうつもれて松たに風のをとつれもせす
したゝへす梢おれ臥よな〳〵にまつこそうつめ雒の白ゆき
庭の面はすゝきをしなみ跡たえてとひこぬ人をまつのしら雪
あとたえて日數ふりつむ里なれやむなしく人をまつのしら雪
高砂の尾のへのしかのなかぬ日も積りはてぬる松のしら雪

たかさこのおのへに風の音はしてしつえもみえぬ松の白雪
とはれぬを心の松もいたつらにうつもれはつる山のしらゆき
をとつれし庭の松さへうつもれて雪には風の跡も絶けり
そめまさむ春の一しほ松の葉のみとりもみえす雪そ降しく
高砂のおのへの松もむもれ木の朽もやすらん雪のしたおれ
あと絶てとふに音なき雪のうちも嵐を告る庭の松かな
おとこ山松はかひこそなかりけれふるきみゆきのあとの曙
ふりつもる雪を花とやみれの松をのかあらしにはらはさる覧
さひしさははらふあらしの音もあれと猶おく山の松の雪おれ
谷ふかみありともしらぬ松か枝も雪おれしるき冬の明ほの
ふかゝらぬ松の下さへみちそなきたへぬしつえに雪おもる比
しからきの外山はうすき白雪のうつみもはてぬ松のむら立
とふ人は思ひたえにし山里にきのふもけふも松のしらゆき
そめかねしけさは常盤の名もつらし雪吹はらへ峯の松かせ
白雪のみなふり埋む山のはに風をたよりの松の一むら

湖雪

にほの海や氷に雪のつもるより沖に残れるなみのうへの月
しかの浦のこほりのうへに立なみも猶音たゆる雪のあけほの
志賀のうらやさゝなみ遠く行舟のやかたもしろくふれる白雪
鳰のうみやみきはの外の草木まてみるめなきさの雪の月影
さゝ浪や浦ちはるかに風さえてみれもたひらの山のしらゆき
しかの浦よるともみえぬさゝなみや比良の高ねの雪の明ほの
立かうへによこきる波やさゝ浪のひらのあらしのさそふ白雪
もみちゝる梢につもるしら雪を波にこきおろす比良の山かせ
降雪はそれともみえすさゝなみのよせてかへらぬおきつ嶋山
しかの浦や氷る汀のあともなし音こそたてれ雪のしらなみ
霜かれのあしりのうらを漕行は雪の花ふくおきつしまかせ
白妙の雪をかさねてさゆる夜にこほりそ高きしかのうら波
さゝなみや山にしめゆふ人はなし釣するあまや雪に出らん
音たつる志賀のうら風吹さえてかへらぬ浪やゆきの夕暮
しかのうらやあまきる雪の曙に氷はとけぬさゝなみそよる
にほの海や波まにしろき沖つしまさすかに雪の色そまきれぬ
滋賀のうらや絶々積る白雪に下のこほりの程そみえ行
しかのうらや遠さかり行雪の色に結ふ氷のほとそしらるゝ
しかのあまの釣する袖や寒からし雪に成行比良（ヒエイ）の山かせ
しかの浦や波まもしろく降雪にそれ共わかぬあまの袖哉
さゆるよの雪ふきをくる山風に両かたしろきしかのから崎
こほりゆくしかのうらはの程みえてさゝなみ遠くつもる白雪

惜歳暮

とゝめはや流れて早き年なみのよとまぬ水はしからみもなし
思へともかひなきみつのわたしもりをくりむかふる年の暮哉
月はなを有明の山のかけもみきつれなく過るとしの暮哉
おもひやれさすかに物のとはかりもうらみぬふしに積る年哉
年きはる身の行衛こそ悲しけれあらはあふよの春をやはまつ
夜半の空あけは越なむいたつらに行年なみのせきもりもかな
つらかりし袖のわかれのそれならておしむを（にイ）いそく年の暮哉
あはれ又いそちの冬もくれはとりあやまたぬ身の老をかこては
行年のくれをや人のいそく覧誰も我身につらき分れを
年つもる雪のくれこそかなしけれいかなる人の春をまつらむ
かへる山雪ふりつもるかひやなき暮行としの道もまかはす

身にとまるならひもつらき暮ことにおしむは年たいとふ也見
ふりまさる我みに霜たかされても暮行としな鶯のひとりれ
いつまてとしらぬ命もくれて行年たかそへておとろかれぬる
年暮てむかふる春はよそなれと身の老らくそうきたきらはぬ
こしかたの夢たはかなみ數ふれはいやまさりにもおしき年哉
春秋のわかれしたにもおしまれきなへて今年の夕くれの空
いかにせむあすより春のたつか弓引とゝめたる習ひなければは
うつり行月日そおしきとふ鳥のあすかもあらは年や暮なん
おしめともつれなくかへる年波のとゝめかたみにぬるゝ袖哉
飛鳥川かはるふちせもある物たせくかたしらぬとしのくれ哉
身のならひ今行すゑもたのまれはつもらん年のおしきけふ哉

戀

寄雲戀

わするなよ夕の雲の跡もなく空に成行人のおもかけ
たのみけむそなたの風そさためなき人の心の空のうきくも
しられしな思ふあたりに行雲のうき身たかへて消わたる共
いこま山いさむる峯にゐる雲のうきて思ひのきゆる日もなし
おもふより淚ふりそふ雨雲のよそにも人は見えぬものから
よそにして色しみえれは思ふともまた白雲のうはの空なる
契りしは夢になかむるうき雲の消て跡なきうつゝなりけり
思ふかたの雲にしくれよ(そイ)たのつからつれなき袖も色や變ると
明ぬとて山立わかれゆく雲のよにふるからにつらき空哉
よそにみるかつらき山の雲たにも高ねの松にかゝりやはせぬ
戀わひて身はうき雲と消ぬともあたのためしやよゝに殘らん

夕くれはよそにやこひん天つ空くものはたての行衛しられは
ゆふ暮の空にはかなく行雲の跡なき道におもひたつらん
わか戀は風ふく空にまよふ雲の思ひ定めぬ夕暮そうき
ゆふくれはおもふ心たかけてしれそなたの空の雲のはたてに
空になる人の心のたくひまて我ゐる山の雲そつれなき
人しれす思ふそなたにしくれても我袖つけよ空のうき雲
わすれすよううき雲かくれすむ月のほのかにみえし人のおも影
もろともにかよふ心やへたつらむいもせの山の中のうきくも
たのめとや夕の空(峯イ)たかなむれは分れてかへる遠のしらくも
風ふけはかつらき山の嶺の雲あとなき戀に思ひきえつゝ
緣なる山のはわたるしらくものよそめもしるくぬるゝ袖かな

寄露戀

君かすむあたりの草にやとしてもみせはや袖にあまる白露
吹風に誰ことのはたかるかやのみたれてかゝる露もうらめし
おもひくたく千くさに色やうつる覽身よりあまれる秋の白露
道のへのあたなる露たゝきとめて行てにけたぬ戀そかなしき
たくといひぬとは忍はむ白露のれたくや袖の色に出らむ
わか戀は秋の草はの露しけみしはしも君たかけぬ日はなし
秋もなたのはらの露のたかぬよはあれ共袖のぬれぬ日そなし(〔マヽ〕)
花にこそまたるゝ露の置ところめつらしからぬ袖のうへかな
あた人の心の秋の露よりそみしことのはも色かはりける
宵のまのことしけき露の袖なからやとしてけりな有明の月
秋かせにたきところなき白つゆの我身ふり行ことのはそなき
わか袖の淚の色におもなれて草葉に淺き秋の露かな
山ふかみ秋の木のはに置つゆのむなしき色にそてや朽なん

思ひいれぬ風にもいろはある物を何といはたの森の下つゆ
身にしれは四方の草木も哀なり物な思はて露になくかは
よそにのみきくのしら露いくよしもつもらぬ袖の淵と成らん
朝夕のよそのくさはの露まても袖のならひに哀とそ見る
わか袖はまつのうらはにあられともつもりて露の淵となる迄
分れにしその曉のなこりより（とてイ）かならす露はそてになきけり
いたつらに行てはきぬる宵のまは我のみはらふ袖のしら露
いかにして人の心を秋の野の露わけ衣うらみそめけん
木のはちる秋の山へになく露のしたにうつろふ色もうらめし

寄烟戀

ふしのねや絶ぬけふりの行衞たにしらぬ思ひの年やへぬらむ
不二のねの空にや今はまかへまし我身にけたぬむなし烟を
みるめなき浦よりをちに立烟われをはよそに何こかゝる覽
いかにせむあまのもしほ火絶す立けふりによはる浦風もなし
恨みしろなにはのみつに立けふり心からやくあまのもしほひ
人しれぬ戀をしほやの烟かな心の底を螢やくむらむ
たつねはや烟を何にまかふらん忍ふのうらのあまのもしほ火
なひけとて（ヤイ）たえぬもしほの煙をもめたてぬ方へさそふ浦かせ
うらみても我身のかたにやく鹽のおもひはしろく立けふり哉
中々に今はあさまの夕烟そらに思ひをしらせてしかな
さひしさに柴折くふる山里も身よりおもひの煙やはたつ
ふしの山みねに煙のあらはれはいかにせむとかおもひ初らむ
行衞なき空に思ひのみちぬれはふしの烟はふもと也けり
わすれしと契りしことはかはらやの下にやむせふけふり成覽
須磨のあまのやくしほ煙なれても靡く習ひないかてしらまし
もしほくむ礒やのけふりあはれなと靡かぬ方に身をこかす覽
よそへてもみせんと思ひしふしのねの煙をうつむ雲も恨めし
淺間のや立名もよその夕けふり遠近人もいまやとかめむ
するかなるふしのしは山しはしたにきえぬ思ひに立けふり哉
立まよふあまのもしほの夕けふりおもふそなたの浦風もかな
ふしのねのもゆる思ひにくらふれは烟はよその物とやはみる
身にあまる思ひよ空にくらへみよ不二の煙も外にやはたつ

寄草戀

あさちふのをのゝしの原露なからたか秋風にみたれそめけむ
月草のうつろはんとや染をきし人の心もいろかはりゆく
わか袖の露の下おきとにかくに思ひみたれて秋風そふゝ
すゑまてと誰か契りし秋の霜むかしかたりの庭のした草
いかにせむ人の心の種たえておもひわするゝ草のはもなし
いたつらにかれやはてなん草の原いかに契りを霜そ結へる
うは玉のねての夕のおもひ草こよひもむねにもえや明さん
ひろまなきゆふかけ草の白露のしられすけなむ身社おしけれ
なけきわひたのむ夢路の忘草ねられぬまゝに茂る比哉
わするゝもしのふも人の軒はなる草におもひの種はまきけり
いかにせむ忍ふのおくの思ひ草われのみしりて年はへにけり
忘草しけれる宿はうき人の心のたれもつゆやなくらん
わするなといひしはかりの庭の面にいく度草の生かはる覽
吹かせの音にはたてししら露の身はかけくさの下になくとも
花すゝき草の袂に露そへて秋のさかりもくるしかりけり
かれにけりそれをかきりに朝霜のをきて別れし道の芝草
冬くさのかれてはやまぬ春みれは猶たのまるゝ人こゝろかな

思ひ草かれなて誰かみちのへのお花か下に種を蒔けむ
我こひは軒のしのふのうす紅葉たえぬ涙やふるさとの秋
等閑の契りあさかの沼水に生てふ草のかれのみそゆく
人こゝろあさち色つく折しもあれ夕日かくれに何たのめけむ
なく霜の下に朽そふ冬草のかりの契りもいつたえにけむ

寄鳥戀

鶯のこほれる涙むすほふれとけぬ思ひをしろ人そなき
かれはてし契りの末の春かすみたてるやいつこ鴫の草くき
とりのねをむなしき袖にかこちても哀いく夜の有明のそら
逢坂のゆきゝにたつるとりの音のなく／＼おしき暁そうき
そてのうへも數かくはかり成にけり鴫の羽音のしけき涙に
芦鴨のうきはわすれて一すちにみなれんまてを思ひ社やれ
なきなのみ夕つけ鳥のあふ坂に捨られてたに音をも鳴はや
おもひあれはひとり色こき衣手のもりには鴈のなみたなく共
いかにせむ夕つけ鳥のをのつからなくねをいとふ暁もかな
しほのみつ袖しの浦のかたをなみ芦へのたつの音をのみそ鳴
わすらるゝ身を鶯のよな／＼にふしもさためぬ宿のくれ竹
かれとや立田の梢色かへてゆふつけ鳥もしくれてそなく
まつよのみむなしき空にとふ鳥のよそにも人の遠さかるらん
夕暮はあまとふ鳥の行かたもおもひしらるゝ身の契り哉
なけきつゝあかしかれたるなかきよの鳥のねいとふ暁もかな
かへるらむ誰暁のとりの音にうきもよそなる有明の空
今もなくゆふつけ鳥よ哀又たかあふ坂のゆきゝみるらん
見るまゝに人の心のかりのこをいくつ重ねていかにたのまむ
たつねみるのへの通ひち跡もなし誰いつはりのもすの草くき
雲かくれ鳴行とりのよそなからありとは聞といかゝたのまむ
いまはとておもひ絶たる鳥の音のつらきや人のなさけ成へき
つきもせぬ鴫の羽かきいくかへり暁ことに物おもふらむ

寄枕戀

あちきなく契りのほともしられつゝ古き枕の誰したふらん
なにと又枕のちりをはらふらむならひなきみの閨の秋かせ
いかて我心を人のまくらまておもふ計の行衛しらせむ
思ひ出る契りの程もみしか夜の春の枕に夢はさめにき
しられしな我袖はかりしきたへの枕たにせぬよはのうたゝね
物思ふ日かすは塵のつもれとも夜のまくらのするかたそなき
白妙の枕は今もくれなゐのちしほや涙そめて朽なむ
まち侘てまくら定めぬうたゝねもかりそめなから幾よ積りぬ
床はあれて枕にこけの結ひ置し露の契りやあたにくちなん
しれはこそ夢にも人をみせつらめつけの枕よ物おしへせよ
もろ共になれし枕のかたみさへ今はあたなり夜な／＼そうき
心からをのれうちねぬ夜をへては枕のうへの夢のせきもり
さむしろに身はならはしの秋の風たか手枕のひまもとむらん
かくて世に古きまくらの跡はあれと閨は空しき人のおもかけ
みるめかるかたをなしへよしきたへの枕の下にかよふあま人
まくらとてねむかたもなし涙川うきて思ひのよるへしられは
ありし夜のかたみもつらし菅こものならふに殘るつけの小枕
枕たに人のきかくにかたるなよそれをそ今はおもふことゝて
しきたへのまくらの下にをく露はなきてぬるよの涙なりけり
いかにねしゆめのならひも絶はてゝよそに成行つけの小枕
いかにしてつけのをまくらたのめしを苔深き迄待としるらん

うたゝねの夢てふ物を契りにて有し枕に殘るおもかけ

雜

曉述懷

契りあれはあかつき深く聞鐘の行末かけて夢や覺なん

夢さむる身を曉のかれてしも月よりにしにかゝるこゝろは

有明の月にむかへる住よしのまつことおほき我みなりけり

をのつからまた有明の月をみてすむともなしの憂にたへけり

限りあれはけふも暮ぬとなかめつるきのふの鐘の曉のこゑ

鐘の音にこんよの夢も驚きて思ひしらるゝ明かたの空

思ふことまたつきはてぬなかき夜のね覺につくる鐘の音かな

たとりこしおとろのみちも踏分つ行すゑてらせ有明の月

おもふより曉ふかき寐さめかな我身に近き秋のしくれに

なかき眠さめぬかうちのうたゝねの一夜の夢そ明るかひなき

曉はうき身をいとゝ秋のよの露をく物と袖やしるらん

我かくて今宵も明の衣手に老のねさめの露そちかつく

曉の寐さめに思ふ身のはてをしる人あらは哀とやみむ

あはれにもかならす老のね覺とて曉ふかき夢そ殘れる

身のうさを思ひつゝけぬ曉にをくらむ露の程をしらはや

しら露のをきゐていのる曉の空はさりとも我をしるらん

のとかなる曉まさる身のうさにたへて幾よのはてをしらはや

おとろかす山端ちかき月かけにいそちの夢の名殘をそとふ

いたつらに我よふけぬと眺むれははつかあまりの月そ出ぬる

有明のつれなくみゆる曉もわか身の外にうき物そなき

晴くもる有明の月を待えても心の外と誰なかむらむ

思ふ事わするゝ夢のさむしろにいとふもしらぬかれの聲かな

閑中燈

これのみとともなふ影も小夜更てひかりそうすき窓の燈火

ひとりのみ有明の月の入までに殘りあらそふよはのともしひ

なかきよもひとりしぬれはまとろまてかゝけそ盡す秋の燈火

つく／＼と明行まとのともしひの有やとはかりとふ人もなし

人とはぬわかよやいたく更ぬらんかけよはり行窓の燈

冬の夜のかゝけかねたる燈にはなれぬ影の猶はのかなる

きえやらて殘るかけこそ哀なれわかよふけそふ窓のともしひ

つたへ來て窓しつかなる君かよに光をそふる法のともし火

深き夜の夢のなこりはほのかにて殘る共なき秋のともしひ

つたへきて殘るともなきともし火の窓に螢をつく人そなき

長きよの夢路たえ行窓のうちに猶殘りける秋の燈

くらき雨の窓うつ音に人はこて影ほのかなる秋のともしひ

明ぬるか光もうすくなりにけりむなしき床の秋のともし火

消やらぬひかりもしろく明にけり窓に殘れるよひのともしひ

うきにそふ影より外の友もなししはしな消そ窓のともしひ

身のうへを思ふもかなし柴の戸に有かなきかの宵のともし火

山里はまとより出る月かけにそむけもあへぬよはのともしひ

なかきよのやみは此よもかなしさに獨かゝくる閑のともしひ

なにとなく昔こひしき夜の雨におなしかたみの窓のともしひ

哀なりなかきよをくる燈のきえなむとするしのゝめの空

里はあれてみしはそれ共分かねぬあらぬか窓に殘るともし火

なか／＼にさひしき物を眞木の戸にありとしもなく殘る燈ひ

山旅

吹まよふみやまのあらしよさむにてなれにし里の夢もまれ也
おもかけに今なく露そ茂り行むかしに越るうつの山みち
さゝのやの袖しく程の陰もなしふるは涙のやまのしつくに
わきてなと我しもたへぬ露けさそ山路は誰も旅人そ行
立かへり又もやこえむみねの雲あとも定めぬよものあらしに
あつさ弓はる／＼きぬる旅衣かさなる山は秋かせそふく
千早振神かき山も越ぬへし故郷人をおもふあまりに
都出し衣手かれてあさち山色かはり行あきかせそふく
ならしはの麓の露を分すてゝうちむく山も秋風そ吹
明やらぬ雲行みねに入にけりをくらぬ月の跡のみやまち
ほとふれはわすれやしぬる故里にさやは契しさやの中山
さてもぬる岩ねのあらし身にしめて誰ならはしのさやの中山
たひ衣かされぬ床の山かせも朝たつ空はあはれ也けり
越わひてなくさむ山の月影もしけき木かけの外まてそみる
われのみと思ふ山路の夕暮にさきたつ雲の跡もさためす
都出て遠山とりのなく／＼もひとりやねなむしらぬおのへに
外山にはなを殘りける哀かなかさなる峯のおくのゆふ暮
しりしらす行あふ暮の旅人はかたみ山ちのすゑそとはるゝ
あし曳の山路や遠きたひ人の跡よりうつむ嶺のしら雲
故鄉の空もたよりの月に又見しおもかけのさやの中山
白雲のかさなる山の苔むしろしきりにぬるゝ我袂かな
そてに又なれくる月の分れさへかさなる山の雲の下みち

海旅

ふる里の月はいくよかめくりあはむ波の數そふとこ（うイ）のうら風
わするなよ一夜なれぬる友ふねの出なん後の跡のしら波
あま衣たみのゝ嶋に宿とへは夕しほみちて田鶴そ鳴なる
明る夜の夕つけ鳥に立わかれ浦なみ遠く出るふな人
影やとす袖はうきねの我からに月そ藻にすむむし明のせと
うちはへてあまのたくなはくる人もいくよ渚にかち枕して
漕出ぬと人に告へき便たにやそしま遠きあまのつり舟
にしの海夕しほたとる波まよりこしかたしるく出る月かけ
明くれの行さきしらぬ涙の上をかせにまかせていつる舟人
うきねする一よの袖をほしかねて思ひしらるゝ里のあま人
暮かゝるすまのうら路の夕霧に漕行舟そよるへたつぬる
わたつ海は道のしをりもなき空にたゝこきすくる跡のしら浪
松（せイ）かうらのとまりの磯と聞ものを名にもさはらすかへる浪哉
暮ぬとてとまりにかゝる夕波にこと浦しるきあまのいさりひ
衣手をしきつの浦のうき枕なみたも涙もかけぬまそなき
ことしゆく新嶋もりの袖にしれましてならはぬよはのうら浪
くるとあくといつかと待し波の上に都の山はけふそみえ行
故鄉もちかのうら浪こゝろせよかよふたゝちの夢をのこして
たひねするいそのとまやに月をみて涙の枕にゆめそたえぬる
さたまらぬ風をしるへのあた波にその日もしらす故里の空
思ひ出るむかしの涙に袖ぬれて又おりふするいせのはまおき
故鄉はとをき浦はの涙のみうき出て行あまのつりふね

野旅

草まくら一夜の露（野へイ）を契りにて袖にわかるゝのへの月かけ
草まくらかりねの庵のほの／＼とお花かするに明るしのゝめ
たひ衣いくのゝおはなかるしつの手たまもゆらになひく秋風
のへの露うつりにけりなかり衣萩の下葉を分とせしまに

里遠き野中の庵に人はなし草の袂をまくらにそかる
都いてゝ草のまくらに結ふ露いくよかされてのへの初霜
霜かれの野寺のかれの夕月よたへてもぬへき旅の宿かは
しなかとりゐなのゝ小笹かたしきて玉ちる床に月をみるかな
旅人の袖のなみたにかゝるかやの露そみたるゝ野邊のあき風
たれか又霞たつ野ちの末ならむ遠かたしろき袖のしのゝめ
わするなよ野への庵のきり／＼す今宵はかりの床にぬるとも
一むらの宿のこすゑにとひなれて野中の杜にけふはきにけり
あれはつる野中の庵にやとかれは住ける人の跡もはかなし
見渡はけふりはかりそ立のほる里にちかつくのちの行末
なく鹿のなみたは袖にかり衣まくらならふる小野の草ふし
武藏野にやとりはすへし旅ころもひもとく花も露のゆかりそ
なかめやる遠の草はに立けふり野なかの庵のしるへかほなる
枕とてたのむ冬のゝ草なから衣手かれてねむかたそなき
草まくら結ふ野はらのさと遠み鳥の音聞ぬ曉のそら
わするなよ契りて出し分路の野原のまくす秋風そふく
しられしな夏のゝ草のみちすから茂き思ひにむすほゝるとも
むさしのや何のゆかりの露かをくその色しらぬ草の枕に

寄松祝

龜山の岩ねの松をふく風に千世のかすそふ瀧のしら玉
のりの花たえすならひの岡の松ともに千歳のかけはかはらし
たれまきし磯への小松君か世にいく度くちて生かはるらん
大かたの松の千とせはふりぬ共人のまことは君そかそへむ
神代よりまもるちかひのつきせねは君かちとせも住よしの松
君か代はたかのゝ山の峯の松まつも久しき月やみるへき
さゝれ石のいはほとならん苔の上に松もふりてや君にあひみん
ふりにけりいく世かへぬる竹くまの松はたけても木そ久しき
千世をへて君やみむろの岩ね松まつに久しき花の色かは
さゝれ石の巖となるを松かえにすむ鶴の子は君そそたてむ
いくちとせかきりかなきし君か代にならひの岡の松のむら立
住よしの松の千とせもかけはあれと君かみかけは猶そ久しき
君か代をときはの山の岩ねまついはねと茂きかけはみえけり
きみかよの限りそしらぬ高砂の松はふたゝひ生かはるとも
岡のへに生そふ松のかす／＼に千歳をゆつる御代そのとけき
契りなくまつときみとの行末をつもらん年のいつれたかけむ
すみよしの濱松かえにさく花のいくかへりとも君そかそへむ
松かけに萬代すめるのりの水結ふにつけてよはひのふ也
いくちよもときはかきはと契らん竹の園ふく松かせのこゑ
梓弓いそへの小松よろつ代の君かためしと誰もひくらむ
契りある高野の山の嶺のまつなを行末の千世もかはらし
千早ふる神やみかきの松のはにたえぬ千とせの色をそむらん

上皇勅書云。
五十首和歌事。已先例歟。其上者雖レ爲ニ重代一無下未練之由
風聞候。不レ可レ然歟。雖ニ人數之外一家長。光經。秀能尤可レ詠
雅等也。家長和歌所預也。光經依ニ堪能一已被レ聽ニ昇殿一。御獻ニ
中殿會和歌一者也。秀能於ニ當世一大略無ニ雙之者也。於ニ撰沙汰一
者被詠必可レ被レ具者也。依ニ建久例一者僧詠定有レ之歟。其能
何人候哉不審ニ候。
八月二十二日

吹まよふみやまのあらしよさむにてなれにし里の夢もまれ也
おもかけに今なく露そ落り行むかしに越るうつの山みち
さゝのやの袖しく程の陰もなしふるは涙のやまのしつくに
わきてなと我しもたへぬ露けさそ山路は誰も旅人そ行
立かへり又もやこえむみれの雲あとも定めぬよものあらしに
あつさ弓はる〳〵きぬる旅衣かさなる山は秋かせそふく
千早振神かき山も越ぬへし故郷人をおもふあまりに
ならしはの薩の露を分すてゝうちむく山も秋風そ吹
都出し衣手かれてあさち山色かはり行あきかせそふく
明やらぬ雲行みれに入にけりなくらぬ月の跡のみやまち
ほとふれはわすれやしぬる故里にさやは契しさやの中山
さてもぬる岩れのあらし身にしめて誰ならはしのさやの中山
たひ衣かさねぬ床の山かせも朝たつ空はあはれ也けり
越わひてなくさむ山の月影もしけき木かけの外まてそみる
われのみと思ふ山路の夕暮にさきたつ雲の跡もさためす
都出て遠山とりのなく〳〵もひとりやれなむしらぬおのへに
外山にはなを殘りける哀かなかさなる峯のおくのゆふ暮
しりしらす行あふ暮の旅人はかたみ山ちのすゑそとはるゝ
あし曳の山路や遠きたひ人の跡よりうつむ嶺のしら雲
故郷の空もたよりの月に又見しおもかけのさやの中山
白雲のかさなる山の苔むしろしきりにぬるゝ我袂かな
そてに又なれくる月の分れさへかさなる山の雲の下みち

海旅

ふる里の月はいくよかめくりあはむ波の数そふとこ（うイ）のうら風
わするなよ一夜なれぬる友ふねの出なん後の跡のしら波
あま衣たみのゝ嶋に宿とへは夕しほみちて田鶴そ鳴なる
明る夜の夕つけ鳥に立わかれ浦なみ遠く出るふな人
影やとす袖はうきれの我からに月そ藻にすむむし明のせと
うちはへてあまのたくなはくる人もいくよ渚にかち枕して
漕出ぬと人に告へき便たにやそしま遠きあまのつり舟
にしの海夕しほたとる波まよりこしかたしろく出る月かけ
明くれの行さきしらぬ涙の上をかせにまかせていつる舟人
うきれする一よの袖をほしかれて思ひしらるゝ里のあま人
暮かゝるすまのうら路の夕霧に漕行舟そよるへたつぬる
わたつ海は道のしをりもなき空にたゝこきすくる跡のしら浪
松か（せイ）うらのとまりの磯と聞ものを名にもさはらすかへる涙哉
暮ぬとてとまりにかゝる夕波にこと浦しるきあまのいさりひ
衣手をしきつの浦のうき枕なみたも涙もかけぬまそなき
ことしゆく新嶋もりの袖にしれましてならはぬよはのうら涙
くるとあくといつかと待し波の上に都の山はけふそみえ行
故郷もちかのうら涙こゝろせよかよふたゝちの夢をのこして
たひねするいそのとまやに月をみて涙の枕にゆめそたえぬる
さたまらぬ風をしるへのあた波にその日もしらす故里の空
思ひ出るむかしの涙に袖ぬれて又おりふするいせのはまおき
故郷はとをき浦はの涙のみうき出て行あまのつりふね

野旅

草まくら一夜の露を契りにて袖にわかるゝのへの月かけ
草まくらかりれの庵の（野へイ）ほの〳〵とお花かすゑに明るしのゝめ
たひ衣いくのゝおはなかるしつの手たまもゆらになひく秋風
のへの露うつりにけりなかり衣萩の下葉を分とせしまに

里遠き野中の庵に人はなし草の袂をまくらにそかゝる
都いてゝ草のまくらに結ふ露いくよかされてのへの初霜
霜かれの野寺のかれの夕月よたへてもぬへき旅の宿かは
しなかとりゐなのゝ小笹かたしきて玉ちる床に月をみるかな
旅人の袖のなみたにかるかやの露そみたるゝ野邊のあき風
たれか又朝たつ野ちの末ならむ遠かたしろき袖のしのゝめ
わするなよ野への庵のきり〳〵す今宵はかりの床にぬるとも
一むらの宿のこすゑにとひなれて野中の杜にけふはきにけり
あれはつる野中の庵にやとかれは住ける人の跡もはかなし
見渡はけふりはかりそ立のほる里にちかつくのちの行末
なく鹿のなみたは袖にかり衣まくらならふる小野の草ふし
武藏野にやとりはすへし旅ころもひもとく花も露のゆかりそ
なかめやる遠の草はに立けふり野なかの庵のしるへかほなる
枕とてたのむ冬のゝ草なから衣手かれてねむかたそなき
草まくら結ふ野はらのさと遠み鳥の音聞ぬ曉のそら
わするなよ契りて出し分路の野原のまくす秋風そふく
しられしな夏のゝ草のみちすから茂き思ひにむすほゝるとも
むさしのや何のゆかりの露かをくその色しらぬ草の枕に

寄松祝

龜山の岩ねの松をふく風に千世のかすそふ瀧のしら玉
のりの花たえすならひの岡の松ともに千歳のかけはかはらし
たれまきし磯への小松君か世にいく度くちて生かはるらん
大かたの松の千とせはふりぬ共人のまことは君そかそへむ
神代よりまもるちかひのつきせねは君かちとせも住よしの松
君か代はたかのゝ山の峯の松まつも久しき月やみるへき
さゝれ石のいはほとならん苔の上に松もふりてや君にあひみん
ふりにけりいく世かへぬる竹くまの松はたけても末そ久しき
千世をへて君やみむろの岩ね松まつに久しき花の色かは
さゝれ石の巖となるを松かえにすむ鶴の子は君そそたてむ
いくちとせかきりかなきし君か代にならひの岡の松のむら立
住よしの松の千とせもかけはあれと君かみかけは猶そ久しき
君か代をときはの山の岩ねまついはねと茂きかけはみえけり
きみかよの限りそしらぬ高砂の松はふたゝひ生かはるとも
岡のへに生そふ松のかす〳〵に千歳をゆつる御代そのとけき
契りをくまつときみとの行末をつもらん年のいつれたかけむ
すみよしの濱松かえにさく花のいくかへりとも君そかそへむ
松かけに萬代すめるのりの水結ふにつけてよはひのふ也
いくちよもときはかきはと契らん竹の園ふく松かせのこゑ
梓弓いそへの小松よろつ代の君かためしと誰もひくらむ
契りある高野の山の嶺のまつなを行末の千世もかはらし
千早ふる神やみかきの松のはにたえぬ千とせの色をそむらん

上皇勅書云。
五十首和歌事。已先例歟。其上者雖レ爲二重代一無下未練之由
風聞候。不レ可レ然歟。雖二人數之外一家長。光經。秀能尤可レ詠
羅等也。家長和歌所預也。光經依二堪能一已被レ聽二昇殿一。朗獻二
中殿會和歌一者也。秀能於二當世一大略無雙者也。於二歌沙汰一
者彼詠必可レ被レ具者也。任二建久例一者備詠定有レ之歟。堪能
何人候哉不審ニ候。
八月二十二日

五十首和歌。加二一見一返二獻之一。五卷詠不レ用捨一。皆以神妙也。就中於二隆昭詠一者事外物候也。凡握翫之餘悉加二愚點一畢。不レ顧二後見嘲哢一。愚意所レ及隨二歌淺深一。存二點長短一。旁以可レ令二猶豫一次第候歟。抑定家。家隆。秀能等之詠之外。大略異樣無レ極候。不レ足レ言次第候。其中如二家衡詠之中一。求二一首一猶以難レ得。可レ謂二未曾有一。中々定範なとは無二過失一候。

十月十四日

建保六年御年廿三

出題　定家卿

御點　上皇

右道助法親王家五十首和歌以兩本挍正了

群書類從卷第百七十八

和歌部卅三

新古今和歌集竟宴倭歌

後鳥羽院御製 新古今和歌集竟宴

和歌

いそのかみふるきをいまにならへこし
むかしのあとをまたゝつねつゝ

暮春新古今和歌集竟宴高一尺一寸七分 端六寸

應　製倭歌

攝政太政大臣從一位臣藤原朝臣良經上

しきしまやゝまとこと
はのうみにしてひろ
ひしたまはみかゝれ
にけり

暮春陪新古今和歌集竟宴高一尺一寸五分 端四寸五分

應　製一首

從一位行皇太子傅臣藤原朝臣頼實上

わかのうらなみもいと
けきみよなれはかき
あつめたるたまもし
ほくさ

暮春陪新古今和歌集竟宴高一尺一寸四分 端四寸五分

太上皇應　製一首

從二位行權中納言兼左衞門督臣源朝臣通光上

ちよまてとよするたま
もなかきつめてなみ
もいくよのわかのうら
風

暮春陪撰新古今和歌集高一尺一寸七分 端五寸五寸

竟宴應

太上皇製倭歌

參議正三位行右衞門介督イ兼備中權守臣源朝臣通具上

むかし、いまのむかしな
うつすたまのこゑ〳〵
きみかちよそきこゆる

春日陪新古今和歌集竟宴高一尺一寸五分 端四寸

同詠一首應　太上皇製倭歌
參議正三位行伊豫權守臣藤原朝臣隆衡上
よろつよのことのは
いまやしけからむ
けふふきそむるわかの
うら風
暮春新古今和歌集竟宴應高一尺一寸三分 端三寸七分
太上皇製和歌
正三位臣藤原朝臣經家上
ふりにけるあとにまか
するみつくきもなを
ゆくすゑのためしに
そかく
暮春新古今和歌集竟宴應高一尺一寸八分 端四寸
太上皇製和歌
大藏卿正四位下兼行長門權守臣藤原朝臣有家上
しきしまやゝまとし
まれのかせのつてけ
ふのためとやたえすふ
きけむ
春日陪　太上皇仙洞新古今集高一尺一寸一分 端五寸
竟宴應　製和歌
正四位下行左近衞中將臣藤原朝臣經通上
いくちたひきみかみ
ことのけふにあはむ和歌
のうらかせふきつた
へつゝ
春日新古今和歌集竟宴應高一尺一寸五分 端四寸
太上皇和歌 製イ
散位正四下臣藤原朝臣保季上 位イ
わかきみのなかきた
からとしきしまやゝま
とことのはかきあつ
むらむ
暮春新古今和歌集竟宴應高一尺一寸三分 端三寸五分
太上皇製和歌
散位正四位下臣藤原朝臣家衡上
よろなみもこゑしつむ
らしいにしへにいま
ふきかよふわかのう
らかせ
春日陪新古今和歌集竟宴應高一尺一寸六分 端三寸一分
製和歌
前上總介從四位上臣藤原朝臣家隆上
きみすめはよするたま
もゝみかきいてつ
ちよもつたへよわかのう
らかせ

春日侍讌古今和歌集竟宴應製高一尺一寸一分端四寸
太上皇製和歌
正五位下行左近衛權少將兼加賀權介臣藤原朝臣雅經上
きみかよになれぬる
わかのうらかせに
あまれきなみやしま
のほかまて
暮春侍讌古今和歌集竟宴應製高一尺一寸八分端三寸六分
太上皇製和歌
防鴨河使正五位下行左衛門權佐臣藤原朝臣親房上
ふりにけることのはとては
あつむれとむかしはかゝる
ためしやはある
春日陪新古今和歌集竟宴高一尺一寸五分端三寸六分
應
太上皇製和歌
正五位下行宮内少輔臣平朝臣宗宣上
なかきよのためし
なるかなしきしまや
やまとみことのゆくすゑ
のはる
暮春侍讌古今和歌集竟宴應製高一尺一寸五分端四寸五分
太上皇製和歌
左近衛權少將正五位下兼行阿波權介臣藤原朝臣忠定上
みなひとのことはの
つゆもあらはれて
はこやの山にみかく
月かけ
春日陪新古今和歌集竟宴應高一尺一寸四分端四寸
太上皇製和歌
從五位上行左兵衛佐臣源朝臣具親上
ふくかせものとけきき
みのよゝのあとむかし
にかへるわかのうらなみ
春日陪新古今和歌集竟宴應高一尺一寸九分端三寸五分
太上皇製和歌
從五位下守兵庫頭臣源朝臣家長上
わかのうらにもしほもる
みのいとまなみけふより
のちやたちもはなれむ
春日侍新古今和歌集竟宴應高一尺一寸九分端五寸
太上皇製和歌
正六位上行左近衛將監臣藤原朝臣清範三本書上字无
よものうみのうら／＼
ことにたつれみてひ
ろへるたまのこゑもあ
りけり
春日侍新古今和歌集竟宴高一尺一寸九分端三寸

應　製倭歌

正六位上行主馬首兼左衛門少尉臣藤原朝臣秀能上

いくちよもことはの
はなのいろにみよむか
しもきかぬはるのま
とゐな

元久二年三月廿六日新古今和歌集竟宴
和歌

御製講師　右衛門督通具
講師　前上總介家隆
讀師　前太政大臣

正安三年十一月廿六日巳上透而寫畢
本曰　內裏被下之

右新古今和歌集竟宴和歌以長鹽信行藏本書寫以一本挍正畢而本脫御製今據白雲書庫本補之件本家隆卿筆云々稱異本者是也

續古今和歌集竟宴倭歌

後嵯峨御製
續古今和歌集竟宴
和歌

三代までに古今
の
名もふり
ぬ
光おみかけ
玉つしま
姫

紅薄樣　淡唐花　蝶小鳥
大宮院權中納言

わかのうらにかき
あつめたることの
はや

世々にたえせぬ
ためしなる
らん

白薄樣　泥下繪　古今序の心をかく
中納言

ことのはのつゆの
たまぬくあをや
きの
いとのたえすそ
よゝにつたへ

む

暮春續古今倭歌集竟宴
應　製和歌
關白從一位臣藤原朝臣實經上

おりえたるやまとこ
とはのはなのいろなみ
とりのほらの月に見
るかな

春日續古今和歌集竟宴
應　製倭歌
從一位臣藤原朝臣公相上

むかしいまひろへる
たまもかすかすに
ひかりなそふるわかの
うら浪

春日侍續古今和歌集竟宴應
太上皇製和歌
從一位臣藤原朝臣實雄上

わかくにのなかきた
からと君か代に
ふたゝひつけるやまと
事の葉

春日陪續古今和歌集竟宴
同詠一首應　太上皇製和歌
正二位行兵部卿臣藤原朝臣隆親上

もしほくさいにしへ
いまなかきとめてみ
たひつたふるわかのう
らかせ

春日陪續古今和歌集竟宴應
太上皇製和歌
正二位行大納言臣藤原朝臣良教上

ゆくすゑのちとせもし
ろしわかの浦にもとの
ひさしきあとおた
つねて

春日陪續古今和歌集竟宴應
太上皇製和歌
正二位臣藤原朝臣資季上

いくちよもきみゝん
とてやひろふらんわか
のうらわによするし
らたま

春日侍續古今和歌集竟宴應
太上皇製倭歌
正二位行權大納言兼皇后宮大夫臣藤原朝臣師繼上

あつめつくいにしへ
いまのことの葉のかす
も千とせのためしな
りけり

春日侍續古今和歌集竟宴應
太上皇製和歌
正二位行權大納言兼右近衛大將臣藤原朝臣通雅上
かす〳〵にみかくたま
ものあらはれて三代
しつかなる和歌の
浦なみ

暮春陪續古今和歌集竟宴應
太上皇製和歌
正二位行權大納言兼中宮大夫臣源朝臣雅忠上
ゆくすゑのためしなる
へきいにしへになを
たちまさるわかのう
らなみ

暮春續古今和歌集竟宴　應　製倭歌
正二位行權大納言兼左近衛大將臣藤原朝臣家經上
つきもせしはまのまさ
このかすおほくいま
もつもれるやまとこ
とのは

春日侍續古今和歌集竟宴應
太上皇製和歌
正二位行中納言兼侍從臣藤原朝臣爲氏上
わかのうらにみかける
たまをひろひをきて
いにしへいまのかすを
みる哉

春日侍續古今和歌集竟宴應
太上皇製和歌
正二位行權中納言臣藤原朝臣長雅上
於奈新名乎萬多者喜
計登宴伊丹志邊能安東
任古盈堂類王賀乃宇
良奈美

春日侍續古今和歌集竟宴應
太上皇製和歌
參議正三位行右近衛權中將臣藤原朝臣經平上
きみはなをよろつ代ま
てもわかのうらにみか
かむたまのかすやつ
もらむ

春日侍續古今和歌集竟宴應
太上皇製倭歌
參議正三位行左兵衛督兼伊與權守臣藤原朝臣高定上
わかのうらや代々にも
ひろふたまなれとこの
たひはかりみかける
はなし

春日侍續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

參議正三位臣源朝臣資平上

いにしへに今たちかへる和歌のうらのなみも千とせのかずはみえけり

暮春續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

正三位行右京大夫臣藤原朝臣行家上

しきしまのみちの光ときまき〳〵のなかにみかけるたまな見るかな

春日侍續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

正三位行右兵衞督臣藤原朝臣爲敎上

いまもなをわかのうらかぜたえすしてまたたまみかく御代にあふかな

春日侍續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

正三位行左近衞權中將臣藤原朝臣公雄上

いにしへもいまもかはらすわかきみの御代にかすそふやまとことの葉

春日侍續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

造東大寺長官參議正四位行左大弁臣源朝臣雅言（上闕歟）

わかきみの御代なかしこみいにしへになをたちまさるわかのうらなみ

春日侍續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

藏人頭正四位行右近衞權中將臣源朝臣具氏上

けふやまた代々のためしなくりかへしまさ木のかつらなかくつたへむ

春日侍續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

正五位上行左少弁兼皇后宮大進臣藤原朝臣經任上

いにしへもいまもかはらぬあとゝめてたまもなみかくわかのうら涙

暮春續古今和歌集竟宴應
太上皇製和歌
右近衞權少將正五位下臣藤原朝臣隆博上
まつの葉のちらぬを
御代のためしにてなと
ふきまさろわかのう
らかせ

文永三年三月十二日續古今和歌集竟宴和歌
御製講師中納言爲氏
講師具氏朝臣
讀師前太政大臣
御製講師可有奥歟而今度
銘如件被書之

右續古今和歌集竟宴倭歌以爲氏卿筆本不違一字書寫挍
合畢挍公卿補任及職事補任雅言朝臣上階具氏朝臣下階
而不書上下字蓋脫字乎

文治六年女御入內御屛風和歌

題

正月小朝拜　子日　霞　二月春日祭　鶯　梅
三月春駒　櫻　藤花　四月更衣　葵　早苗
五月郭公　菖蒲　瞿麥　六月山井納涼　夏草　六月祓
七月秋風　野花　鹿　八月月　駒迎　田家
九月菊　紅葉　霧　十月千鳥　網代　鶴
十一月五節參入　臨時祭　鷹狩　十二月神樂　雪　歲暮

泥繪御屛風

夏納涼　冬氷

作者

攝政太政大臣 後法性寺殿　左大臣 後德大寺
右大臣 三條實房　左大將 後京極殿
從三位季經卿 前宮內卿　隆信朝臣 右京權大夫
定家朝臣 左近權少將　入道皇太后宮大夫

月次十二帖　各三十六首

正月

小朝拜　殿下
立そむる春の光とみゆるかなほしなつらぬる雲の上人

むらさきの袖にもあまる嬉しさよ立ゐかなつるけふにも有哉　左府

袖たれて玉しく庭なうちはらひふしてそ春の初とはしる　右府

たちそむる雲井の春は諸人の袖なつらぬる庭に見えけり　左大將

色々につらなる袖はみゆれともたちゐのさまはかはらさりけり　前宮内卿

河竹の千世なこめたる庭に出ておきふし君ないはふ諸人　隆信朝臣

霞しく春のはしめの庭のおもに先たちわたる雲の上人　定家朝臣

こゝのへや玉しく庭に紫の袖なつらぬる千世のはつ春　三位入道

子日　野邊小松はらに子日したる所

けふよりは君にひかるゝ姫小松いく萬代か春にあふへき

千世までといはふ子日は君か代のよはひも松もまた二葉なり

ちよ經へき春日のゝへの姫小松長くたもてるためしなそひく

春日野のこまつに雪な引そへてかつ〳〵千世の花咲にけり

又さらに子日の松は引にこむけふのちよなは君にゆつりて

ことしより千年のかけなならへよと二葉の松なためしにそ引

小松はら春の日影にひきつれてちよのけしきな空にみる哉

春日野のけふの子日の松な社千世のためしにひくへかりけれ

霞　住吉に霞たちわたるところ

さひしさはなな住吉の朝はらけ松やはかすむ難波江の春

住吉の濱松かえのたえ間より霞てみゆる淡路しま山

すみよしの松にかゝれる夕霞千年ないのるためし成けり

詠やる遠里なのはほのかにてかすみにのこる松のかせかな

やへ霞ふかくみとりなこめつれは千年はもれし住吉の松

山たかみ霞な分てなかむれははるかにみゆるすみよしの松

春かすみいまゆくすゑなゝしこめて思ふもとなき住吉の松

霞しく春の光になかむれは千とせはしるしすみよしの松

二月

春日祭

けふまつる神の心やなひくらむしてに波たつさほの河かせ

天の下君かさかへはけふまつるみかさの山の神のまに〳〵

けふまつるみかさの山のはふりこは天の下なそ祈りこひける

いく春のけふのまつりな三笠山峯の朝日の末もはるかに

けふまつるみかさの山の神風はのとけきあめのしたにや有ん

今日まつる三笠の山の名におへる大宮人もさして來にけり

みかさ山さしけるつかひけふくれはすき間にみゆる袖の色々

春の日も光ことにやてらすらん玉くしのはにかゝるしらゆふ

鶯　人家花中に鶯ある所

綠なるうは毛のみかは鶯のこゑさへ春の色にはゝらむ

鶯のひなひきつれてあさゝらす花のねくらなしめてけるかな

花のみはひるのみましか鶯のねくらの竹なおき出てゐる

春の日の長閑にかすむ梢よりうちとけそむる鶯のこゑ

か計に梅のにほはぬ宿ならはまれにやきかん鶯のこゑ

鶯の聲の色さへ身にしむは花のたよりにきけはなりけり

里わかぬ春の光をしりかほに宿をたつねてきゐる鶯
谷を出てたか木にうつる鶯は花さく宿のありす成けり

梅　人家并野邊に梅花さきたる所

梅か丶をほかへや風のさそはまし夜ふかく明ぬ槇の戸ならは
むめの花にほふにしろし我宿の久しき春にあはん物とは
開そむる若木の梅の年をへて匂ひをまさむ末そゆかしき
梅のはなにほふのへにてけふ暮ぬ宿の梢をたれたつぬらむ
いつれをか先はとふへき此里も梅のにほはぬ宿なかりけり
をしなへて野面にほふ梅よりも宿のかきれを先はとはなん
遠近の匂ひは色にしられけり槇の戸過る梅下かせ
野邊にさく梅のにほひもたえぬれは宿の花こそあるし成けれ

三月

春駒　澤邊春駒

花の山に駒さへはなつみよなれは我しも春にあふとしらすや
草も木もきみかめくみに逢春は澤邊の駒もけしきことなる
おり立て野澤に駒のあさるかなまたみこもれる芦のわか葉を
霜かれしはらののさはの淺みとり駒も心は春にそめけり
野澤にはおなしかけなる駒なれと引かへてけり春のけしきは
芦めくむ澤への駒のけしきまてつれの春にはひきかへてけり
春ふかく澤邊のまこも萌ぬれは立もはなれすあさる駒哉
春駒の野澤になる丶けしきにて芦の若葉のほとそしらる丶

櫻　山野并人家さくら盛に咲たる所讀有

櫻花風ものとけきみよに逢てちらぬ春をしかさぬへきかな
花さかりわきそかれつる我宿は雲のやへたつ峯ならねとも
吹かせに散とも見えす山櫻花はけふこそさかり成けれ
をしなへて雲にきはなき花盛いつくもおなしみよしの丶山
櫻花開みちにけるうれしさを霞の袖につ丶みつるかな
野も山もあまれき花の匂ひにて思ひひらくる春を知かな
もろ人の心にかほる花さかり長閑きみよも色に見えけり
峯の雲野への霞もかほりあひて春にむすへる宿とこそみれ

藤花　人家庭に藤花盛にさきたる所

たのもしなけふもかひある姫小松か丶れる藤のゆく末の春
兼てより汀の松のしろきかなきたの藤なみか丶るへしとは
春の日のめくみもしろく見ゆるかなた丶せぬ北の家の藤なみ
萬世は春しりそむる藤の花宿は雲ゐとみする成けり
よはひをは松にか丶りて藤の花久しく匂へ宿のかさしに
代々をへて絶せぬ藤のはなさかりか丶る春にも逢にけるかな
春の日の光てります庭の面に昔にかへる宿の藤なみ
池水はしつかにすみて紫の雲たちのほるやとの藤なみ

夏四月

更衣　人家に更衣したる所

春もおしあつさもまたしいなやそれ卯月のけふの蟬のは衣
けふよりは卯の華かきもしろたへの衣かへして見えわたる哉
夏衣たち出てみれは卯花のかきれさへきるしらかされかな
けふよりは千世をかされむはしめとてまつひとへなる夏衣哉
たちかふるうすき袂は花を見し春をへたつる衣なりけり
限ありて花色衣ぬきかふと千里の春もおもかはりする
けふことにひとへにかふる夏衣なを幾とせをかされてかきむ

しろたへにけふたちかふる夏衣千世にかはらぬ色にそ有ける

葵　賀茂下御社神館辺に葵付人あり

ねきかけつゝいつきの宮のあふひ草今よりたゆな神のしるしに
いくかへりけふのみあれに葵草たのみをかけて年のへぬらん
けふはみなともに葵をかさすかな頼むみをやの神のしるしに
今日みれはかものみあれに葵草人のかみにもかけてけるかな
朝夕にたのみをかけて過れともけふめつらしき葵草かな
千早振神にかけつるかひ有て君か八千世にあふひ成けり
千はやふるかもの水かき年をへていく世のけふに葵なるらん
神世よりいかに契てみあれひくけふにあふひをかさし初けむ

早苗　うへたる所

植わたす伏見の田子の旅ねにはさなへそ草の枕成ける
苗代のみな口まつりいくしたて急けやたこのてまはなくとも
小山田におり立田子のほかに又水のそこにもさなへとりけり
早苗とる田子のこゝろはしらね共そよきし秋の風そまたるゝ
急きとる竹田の里のさなへ哉ふしたつまてにおいやしぬらん
限なき君かみしねの早苗をはいくよろつよかとりかさぬへき
あめのしたけしきもしるくとるなへは水を心に先そまかする
数知らす田子のおほくもみゆるかな千町の早苗とれは成けり

自正月至于四月堀河ノ大納言清書、自五月至于八月伊經書之。

五　月

郭公　人家侍聞郭公ある所

時鳥過ぬるあとにおもふかな名残はまつにまさる成けり
ほとゝきす雲の上よりかたらひてとはぬになのる明ほのゝ空
ほのかにそ鳴て過なる時鳥くも間の月やなれかともなる
思しれ有明かたのほとゝきすさこそは誰もあかぬ名残を
聞人の心のみかはほとゝきすなれも家ちはゆくゑしられし
すきぬとや人はきくらむ時鳥心にとまるあか月のこゑ
いく里の人にまたれて郭公宿のこすゑに聲ならすらむ
雲路にて夜半にかたらふほとゝきす千年きく共あかしとそ思

菖蒲　菖蒲かりたる所又人家にふくもあり

君か代のためしあらはすなかき根は何れの沼のあやめなる覧
いかはかり茂るあやめそみな人の宿にもふきつ枕にもゆふ
あやめ草こゝのふしをやとゝのへて玉の淀野にけふはふく覧
風吹はよはの枕にかはす也軒のあやめのおなし匂を
幾とせとかきらぬにひくあやめ草久しき宿の妻と頼まむ
長きねも猶しあかれは菖蒲草君かためしにひきはくらへし
あやめ草長き契をねにそへて千世のさ月と祝ふけふかな
絶すひく淀野の澤のあやめ草猶萬世もねはとゝむらん

瞿麥　人家庭に瞿麥さきたる所

立よれはいつらあつさのまさりけるおる手にかゝる床夏の花
床夏のいつもかはらぬ色なれは君か宿にはむへし花さく
二葉よりしめゆひたつる撫子の花咲けふに逢やうれしき
ませの内に君か種まく床夏の花のさかりを見るそ嬉しき
たくひなき錦をしける心地してとこめつらなる撫子のはな
久しかれ君千世ませの河竹に色にへまさる床夏のはな
種まきてちりたにすゑ〔ゑ歟〕ぬ床夏の花の露は君のみそ見ん
宿からにさかり久しき床夏は千世の秋にもあはんとやする

六月

山井納涼　人家にも有

岩井くむあたりのをさゝ玉こえてかつ〳〵結ふ秋の夕露
山の井の清水むすひて日はくれぬ月とゝもにや宿なからまし
結ふ手にとりてや夏をすてつらんあたり涼しき宿の眞清水
山陰にいつか清水のさゝ波に秋をよすなりならの下かせ
夏衣袂にかせはふかれともむすふ泉は秋にかはらす
岩間もる水に心のうかひきて結ふちきりの程を知かな
なかき日に春秋とめる宿やこれ結へは夏もしらぬまし水
立とまるほとたに涼し山のゐにすむらん里の人をしそ思ふ

夏草

日數ゆく野はらしのはら夏ふかし分いる袖の露の草すり
下草の茂みをしなみ夕涼みたちそやられぬおほあらきのもり
夏草は日をへてふかく成にけり淺みとりなる野へと見しまに
涼みにと分いる道は夏ふかしすそのにつゝく杜の下くさ
霜かれし野へのけしきと見えぬかな道分かぬる杜の下くさ
風のをともまたき秋とそきこゆなる下草なひく杜の木かけは
分ゆけは夏のふかさそしられける杜の下草末もはるかに
夏ふかみのへのさゆり葉風過て秋おもほゆる杜の陰かな

六月祓

みそきするかへさを秋やむかふらむ袂にふけぬ夜半の河かせ
萬世といはふみそきはますけよきそかの河原の夕暮の空
御祓する汀にたつる麻の葉は又夕なみをかけてけるかな
夏の日をかけてみそきにすつるかなあすこそ秋の初と思に
みそきしてたつるいくしの河風になひくや神のこゝろ成らん
さほ河のたえぬなかれにいくしたて祈るみそきも君か世の爲
御祓してむすふ河波としふともいく世すむへき水のなかれそ
君かためけふの御祓にいつみ河萬代すめといのりつるかな

秋七月

秋風　山野并人家に秋風吹たる所

野はらより秋のなさけをさそひきて籬の荻に風つたふ也
いつもきくふもとの里と思へともきのふにかはる山颪のかせ
槇の戸をたゝく嵐にこたふれは荻のうはゝやあるし成らん
夕されは野山の錦いかならむ秋かせたちぬ庭の荻原
過かてに荻ふくかせや思ふらんをとこそすなれま木の板戸に
をしなへて荻吹風のをとさへそのとけき秋をしらせかほなる
照月の光そふへき秋きぬときくも涼しき荻の上かせ
松かせをすそのゝ荻のつたへきて千年の秋と宿に告なる

野花

見渡せは千種の花のひもとけてこゝろやらるゝ秋のゝへかな
萩か花玉しく庭にうつし植て露をきなから千世の秋見ん
色なりと思ひとかむな女郎華又さくのへにうつるこゝろを
秋の野の千種の色を我宿に心よりこそうつしそめつれ
しら露はをきて見んとも思ふらんさのみうつさし花の色々
宮古人千くさなからにうつし植はのへには殘る花やなからむ
をしなへて花に心はいりにけりのへの千種を分るもろ人
もろ人の千種の花の時にあへる心々を野へにみるかな

鹿

ねきことを神やうけひく春日山いかきのおくのさをしかの聲

足引の山は萬世よはふなりしかも聲をやたくふへらなる
萬世とさこゑそはよはふ山ならめ鹿のこゑさへきゝなされけり
春日山松の嵐にこゑそへてしかもちとせの秋とつくなり
さを鹿の萩か花つましからみて伏見のゝへをよかれさりけり
風のをとものとけき御世はさを鹿の聲のみ秋のけしきなる哉
かすか山朝日まつ間の嶺ほのに鹿もかひある秋と告なり
春日山萬世よはふ松かせに鹿も秋をはしるにやあるらむ

八月

月

秋の月やとる清水となりぬれはいつれもおなし廣澤の池
月ゆへにまかする水にあられとも久しくかけをとゝむへき哉
さやけさは空にあまりて池水のそこまてすめる夜半の月かな
雲はるゝみそらや池にやとるらむみな底よりも月は出けり
池水に雲ゐの空をうつしもて手にとるはかり月をみるかな
萬世もすむへき宿の池水にのとかにやとれ秋のよの月
天つかせみかく雲ゐにてる月の光をうつす宿の池水
池水にのとけき月をうつしもて心はれたるやとのもろ人

駒迎

吾妻よりけふ逢坂に引駒のなつますなから關の岩かと
逢坂の關の清水に諸人の駒むかへゆくかけそうつれる
たちのほる月の影をもむかへけり關をこえつる駒にまかせて
あつまよりけふ逢坂の關こえてみやこに出る望月のこま
はるはるとたちのゝ牧に引駒のなつますこえぬ相坂の關
ひく駒やちかくなるらし相坂の關の岩かとをとひゝくなり
關水のかけもさやかに見ゆるかなにこりなき世の望月のこま
君か代に逢坂山の關水もかけしつかなるもち月の駒

田家

苅田よりおくの野へにやつたふらんいなはに風の音信てゆく
風たにもあらくはふかぬ御世なれはいねにけらしな門田もる賤
いなむしろ敷わたしたる宿なれはあるしも旅の心ちこそすれ
山田もるしつかいほりにをとつれて稲葉にやとる秋の夕かせ
秋かせになひくいなはの稲關よりほのかに見ゆる賤かしは庵
驚かすいなはの風にうちそへてもるひまもなし蘆の八重ふき
秋深き山田の鳴こをしなへておさまれる世のためしにそひく
秋の田の五百代田より宗ゐしてちつかやなしね摘んとすらむ

九月 自九月至十二月[illegible]

菊

末むすふ人さへのふるよはひかな千世をやうつす菊の下水
幾秋も何かしほれむ足引の山路の菊の露もさなから
しら菊の花を千とせの友として山路に秋をゝくる成けり
君か世に匂ふ山路のしらきくはいく夏露のぬれてほすらむ
年へたるふかきみ山の仙人は幾世の秋の菊をみつらむ
露の間に千代ふる人のともとてや山路の菊の咲かさぬらん
限なき山路のきくのかけなれは露もや千代を契をくらむ
仙人のおる袖にほふ菊の露打はらふにも千世はへぬへし

紅葉

すゑ野より峯の梢にうつりきてさかり久しき秋の色かな
木のもとに又吹返すから錦大宮人にみましかせむ

花の春あかす思ひし心こそ紅葉の秋もかはらさりけれ
秋霧の晴ゆくまゝに色みえて風もこのはをそむる成けり
いつこをもやしほの岡といひつへし薄き紅葉の色しなけれは
常よりものとけかるへき秋なれは散ぬもみちの色をみるかな
うつしうふる花も紅葉もおりことに尋る人の心をそしる
尋見る麓の里のもみち葉にこれよりふかきおくそしらるゝ

霧

つれよりもふかきたくもの煙かなしほ屋をこめて霧や立らん
むこ海の朝霧かくれこく舟にたくふやまかふ木のはなるらむ
朝霧の絶ま〳〵を詠れはむら〳〵にたつ沖津しらなみ
ほの〳〵と明石の沖を見渡は霧の絶間に沖津しらなみ
はる〳〵といつくまてとも見えさりし鹽路は霧に埋れにけり
磯つたひそことも見えぬ朝きりに立こめられぬ波の音かな
たちまさる浦半の霧に長月の日數計をあらはにそみる
すまの關秋のひかすをやらしとや浦ちをこめて霧立にけり

冬十月

千鳥

小夜ちとり更行なみにうちそへてうきねの床に聲をくる也
明ぬ也見ゆるこ嶋の波のうへに雲間を分て千鳥とわたる
在明の空に千鳥のこゑす也月のいてしほみちやしぬらむ
友千とり沖の小嶋にうつるなり岸の松かせ夜寒なるらし
風寒ると嶋か磯のむら千鳥たちゐは波のこゝろ也けり
八千世とそ千鳥鳴なるしほの山さしての磯の跡を尋て
君か代をやちよとつくるさよ千とり嶋の外まて聲きこゆなり
よもの海のあまの鹽屋も數そひて浦半の千鳥千世よはふ也

網代

散積る木のはのしたをみぬ程はまたひをよらぬせゝの網代木
風吹は紅葉とゝもによるひをゝ波かさなりとおもひけるかな
見渡せは瀬々の網代木てにかけてほすや紅葉の錦なるらん
もみち葉を都の人の心まて日をへてよするせゝの網代木
もろ人の日をへて絶ぬ網代かなほかに心をよせすや有らん
紅葉ちるうちの網代はひをへつゝ花の都の人もよりけり
此ころは瀬々の網代に日をへつゝ言とふ人のたゆる間そなき
絶すゝむ八十うち河の網代木にいくよ紅葉の錦かくらん

鶴

難波かたうはゝの霜に涙こせは芦間に洗ふ鶴毛ころも
難波潟芦のあなたにはむたつのかくれぬまてに霜かれにけり
難波潟あしのうれこす鹽風を身に寒しとやたつの鳴らん
なにはかた芦はかれはに成にけり霜をかさぬる鶴の毛衣
冬こもる芦まにたてる友鶴は千年の春を待にや有らん（マヽ）
君か世は芦へのたつの聲にさへおもふ心そあらはれにけり
ゆく末もいく世の霜か置そへん芦間にみゆる鶴の毛衣
難波潟あしへは冬のけしきにてかはらぬ物は鶴の毛ころも

十一月

五節參入

雲の上にくもらぬ御世の久しきはとよのあかりの光也けり
おとめ子の雲の梯のほるなりとよのあかりのみ火しろくたけ
雲のうへにたま裳のこしを引つれて昇りもやらぬ天津乙女子

小夜更てとよのあかりの諸人の乙女むかふる雲のかよひ路
今宵こそ雲ゐはるかにのほるなれ雪なめくらす天津乙女子
久かたの天津乙女子引つれて雲のかよひち尋きにけり
白妙のあまの羽衣つられきて乙女まちとる雲のかよひち
乙女子か雲のかよひ路空晴て豐のあかりも光そへけり

臨時祭

みたらしや汀によするさゝ波をおらてもかへすなみの袖かな
小忌衣みたらし河に影見えて立まふ程に明ぬこの夜は
榊葉の霜うちはらひまつりきて幾世になりぬかものみつかき
御手洗の河へにさ夜は深にけりたちまふ袖に霜寒るまて
神山のみたらし河に影みえて大宮人のかさすふちなみ
青摺の袖をつらぬるみたらしに影もこゝろもとまるけふかな
ふる袖はみたらし河にかけさえて空にそすめるうとはまの聲
月寒る御手洗河に影見えて氷にすめる山あひの袖

鷹狩

冬の日の暮ぬにつもるあふ事はきゝすたつのゝみかり也けり
けふも又みしまの原に狩暮ぬしらふの鷹の見えみ見えすみ
けふも又かたのゝみのに打出てとたちも見えす狩くらしつゝ
今日暮ぬあすもかりこむうたのはら枯野のしたにきゝす鳴也
けふも又やかて狩のに暮にけり幾とたちをかあはせきぬらん
けふいくか日なみの御狩かりくらし交野のをのを行歸るらむ
いそきたつ日なみの御狩雪ふかしかたのゝをのゝ冬の明ほの
又もなを人にみせはや御狩するかた野のはらの雪のあしたを

十二月

神楽

神代よりなかく雲ゐにます鏡光をかはすあかほしの聲
もゝしきの大宮人の神あそひ千世とそたかくこゑはきこゆる
百敷の年をかさねて神かきのみ室の山の榊をそみる
雲の上に神も心や晴ぬらむ月さゆる夜のあかほしのこゑ
聲さゆる星に光やまかすらむもゝしきてらすやたの鏡は
ます鏡光をそふる雲のうへに星さえわたるこゑきこゆなり
空さえてまた霜ふかき明かたにあかほしうたふ雲の上人
ことはりや天の岩戸も明ぬらむ雲ゐの庭の韓倉のこゑ

雪

はなのおりなた絲なるときは山ゆきゆく梓に逢そあやしき
けさみれは夜の間の雪にうつもれて枝もたはゝの窓の村竹
雪ふりてところもわかす咲花は梢も庭もさかり成けり
詠やる心の道もたとりけり千さとのほかの雪のあけほの
日をへつゝ山路も見えす降雪にふかき契の程そしらるゝ
みゆきふり年もつむへき君か世は竹の末までなひく成けり
呉竹も松のすゑはもおれふしてちよをこめたる雪の内かな
冬こもり野山しめたる梢まて花の春にもなせる雪かな

歳暮

賤のおは雪をこ松に引そへて春いとなみにみやま出なり
年くれて今そみ山をいたすなり兼ていはひの賤のかと松
賤のおか松もておるゝ山路をやつゝきて春の越んとすらむ
千世ふへき松さへ山を出にけり春をいとなむしつにひかれて
賤のおか祝ひてきれる松みれは千とせをたもつ心ちこそすれ
山人のかへる家路に年くれて松こそけふのかさし成けり

民もみな君か八千代を松かえに數とりそむる年の暮かな
引つれて山路に松のみゆるかな春のむかへをいはふ成けり

泥繪御屏風和歌　各二首

夏

納涼

はゝそ原茂る梢は夏なから袖に秋たつ杜のしたかせ
尋ゆく山のこかけの涼しきや夏にしられぬところなるらし
をのつから木の間もりくる日影こそ流石に夏のしるし成けれ
夏草の風にみたるゝ夕暮は秋のみふかき大あらきの杜
立みれは涼しかりけりはゝそ原梢は秋の色ならね共
枝茂きならの廣葉に風はれて夏にしられぬ山のかけかな
すゝみにと道は木のまにふみなれて夏をそたとる杜下〔くイ〕かせ
君か代はよもの山邊もしけゝれは木陰涼しく清水すみけり

冬

氷

池のうへをうつむにしろき氷かな水には雪のつもる物かは
氷しく池のかゝみの底すみてちとせのかけをうつしてそみる
風わたる池の氷はひまなくて波よる物はあられ成けり
池水にさゆる光をたよりにて氷は月の結ふなりけり
芦間にはいかてか雪のつもらまし氷らぬ池の汀なりせは
おしのゐる池の汀のうす氷ふかき契りを結ふ成けり
宿からは夜をへてこほる池水もかされむ千世の影そみえける
冬くれは池の鏡に氷ゐてみかきそへたる千世のかけかな

右文治六年女御入内御屏風和歌一巻以横田茂語藏本書寫一挍畢

昭慶門院御屏風押色紙和歌

霞　爲相朝臣
かこ山のむかしのひかけたちかへり思へはとなく霞むはる哉

一條
咲ぬまは羽風いとはぬ花のえたに木つたひつくせ春の鶯

梅　前關白
とはれぬも花の名たての身のとかに梅咲宿を住やかへまし

爲世卿
よしさらは思ひのほかの人もとへまつに梢の梅匂ひを

歸鴈　爲相朝臣
一ふてを霞のうへにかきすてゝ跡もとゝめぬ鴈の玉章

花　爲藤朝臣
立田山ゆふつけ鳥のをのかれを夜ふかき花の色に待かな

覺助法親王
とはるへきあるしは春にうとけれは花の便もえやはたのまむ

家寂
をのゝえの朽木の櫻幾かへり入山人も春にあひ見む

院御製
いにしへの春をそ思ふ今の世の花に成ぬる人のこゝろに

春月　爲藤朝臣
山風にしはし霞のひま見れは春とて月はくもらさりけり

内大臣
花の色もやよひにうつる山陰に猶春ふかく霞む月かな

欵冬　法皇御製

山吹の誰あやまちに咲そめて冬なはよその色と成けむ

郭公　爲相朝臣

ねさめする我なはとはて時鳥またぬいつくの夢に鳴らむ

爲世卿

鳴ぬへき心のうらも急雨のたよりまさしき時鳥かな

圓冬宿禰

めくりあふ同しさ月のほとゝきす聞ふるしても猶そあかれぬ

盧橘　法皇御製

忘れしよ右の閨の袖ふれし花立はなや今かほるらむ

爲世卿

古郷のはなたち花も色よりは香こそ哀と昔わすれぬ

五月雨

五月雨は日數經ぬれとしかま川海に出ては水もまさらし

夕立　右大臣

くもるよとおもへは晴る山のはに日影さためぬ夕立のそら

七夕　權大納言局

淵は瀬にかはらぬほとも天の川としのわたりの契りにそしる

露　爲世卿

聞置しその言の葉に忘られぬ庭のをしへの秋のしら露

秋夕　一條

なかめしと思ひなりぬる夕くれの秋のこゝろなやるかたも哉

院御製

あはれさはいつれなる寛身にしむも夕と秋とわけてなかめむ

内大臣

こりすまに又袖ぬらす夕かな身はならはしの秋のなかめに

虫　公顯卿

更にけり風夜寒なる月のかけむしの恨も身にとまるまて

實覺

蓬生のもとの心はしらねとも聞は悲しき虫の聲かな

月　太政大臣

荒にけり誰と住こし跡ならんあはれ幾世の蓬生の月

定爲

たきすさむ煙やのころ秋の田のかひやか上に殘む月かけ

霧　頼覺

捨し身に猶まつことや光なき谷にはうとき秋の月かけ

前内大臣

まよへとも猶ゆく末にたのまるゝ道ある御世の野邊の秋霧

紅葉　實泰卿

朝な〳〵こかれそまさる瀧の上のみふねの山は時雨ふるらし

初冬　太政大臣

霜かれの朝の原は跡もなしいつくな道と冬のきぬらん

覺助法親王

淺茅生に秋より霜は置なれて冬のしるしも見えぬ庭かな

時雨　爲相朝臣

いまゝてにほしこそやられ柏木のかけなはなれし袖の時雨は

落葉　重經卿

吹しほる枝やすからぬ山風にのこる紅葉の一葉たになし

雪　爲相朝臣

里あるゝよし野はふるき跡として積るも久し世々のしら雪

定爲

踏分し昔ゟのあとも絕ぬらむ日を經て雪のなのゝふる道

歲暮　爲信朝臣

ゆく末を賴むまてこそいそかるれうきはかへりておしき年哉

待戀　尙侍

今はたゝ忍はんかたもなく〳〵そ我淚よりあらはれぬへき

爲藤朝臣

はかなくて待らんとこそ僞に契し人もおもひ出らめ

權大納言局

ちきれはと賴むも悲し僞のなき夕暮にいつならひけむ

尙侍

つらさをはしらすかほにて過しきぬ戀しき事を誰にうれへむ

不逢戀　爲信朝臣

富士の根も空しき名をや立そへんあとなき戀の煙くらへに

恨戀　俊光

身のとかとことはり知も暫しにて人のつらさに又かへりぬる

山　頓覺

富士のねはなへての山をはたちまて重れてたくふ名社高けれ

川　院御製

よしの川よしとは誰か岩なみのたかきむかしの跡しのへとも

橋　俊定卿

開わたる跡そかしこき諸神のかたちわかれし天のうきはし

旅　公顯卿

哀なり野山の木立水のをとこれを都とおもはましかは

實敎卿

都をはさてもわすれし角田川住らむとりの名はしられとも

神祇　前內大臣

天津神國津社とわかれてもまことをうくる道はかはらし

本云

本書此和歌は昭慶門院の御屏風に爲世卿女の筆にて。色紙にかきて押給しを寫し侍なり。口一首は色紙のちらしのやうにうつしぬ。奥はいそき寫しなり。各先年の百首の內歟。

徳治元年十一月三日

又云

爲世卿女。于時權大納言局役。後入二撰集一。贈從三位爲子。歌人云。文才云。能書云。名譽之女房也。

應安四月六日　判有

右昭慶門院御屏風和歌以屋代弘賢藏本挍正畢

最勝四天王院障子和歌 建永二年

春日野 大和

若菜摘む春日の原の雪まよりそれかとにほふ野への梅か香　御製　大御集

春日山のへの若菜にしられけり年なつみける神の恵みを　大僧正慈圓

また消ぬ雪かともみむ古里の春日の野への梅のはつ花　大納言通光

霞たち消あへぬ雪も白妙に（のイ）梅か香にほふ春日のゝ原　俊成卿女

若菜つむ春日の野への春霞三笠のやまの聲かよふらし　有家朝臣

春日のに咲や梅かえ雪まよりけさはる〳〵と若菜摘つゝ　定家朝臣

春日野の雪まの若菜尋れは我衣手に匂ふむめか香　家隆朝臣

春日野や咲ける梅も白妙の雪ふりやます若菜摘袖　雅経

消あへぬ雪そひまなき若菜つむ袖さへ色な春日のゝ原　具親

袖ぬれて霞にしのへ若菜つむ春日のはらの雪の下みつ　秀能

吉野山 大和

三吉野のたかねの櫻散にけり嵐もしろき春のあけほの

みよし野の外やまの花なふく風にしはしもはれぬ嶺の白雲

吉野山おくまて花や咲ぬらん霞もかほるよもの春かせ

みよし野の花のしら雲猶かけて櫻にくもる春のやま人

よし野山〔マ〕こほれ匂ふ〔・〕花なれは霞のおくの嶺のしら雲

みよし野は花にうつろふ山なれは春さへみゆきふる里のそら

春は今いくかなるらむみ吉野の山の櫻に霞たなひく

花はたゝ猶しら雲にかすみぬといふはかりにやみ吉野の山

春霞かすめは曇るみよし野のよしのゝ山は雪そふり舗

吉野やまうつろふ花に朝霞たな引わたるみねの春風

三輪山 大和

三輪の山杉の木かくれゆく月に涼しくなのる郭公哉

三輪の杉たつねてきなく郭公山もとしめし契ならねと

ほとゝきすみわの神杉すきやらて問ふへき物と誰を待らん

郭公いかにたつねて三輪の山杉のふるえに昔とふらむ

千はやふる三わの神杉としふともたえすことゝへ山郭公

けふこすはみわの檜原の時鳥ゆく手の聲を誰か聞まし

過かてになりはへて鳴けかさしおる三輪の檜原の山郭公

ほとゝきす一聲すきの木のもとに尋ぬみわの山ちくらしつ

時鳥またも待みん三輪の山なこりも涼し杉の下かけ

ほとゝきすなこりを袖にとゝめ置て村雨はるゝ三輪の茂山

龍田山 大和

木の葉（御集）

もみち散る秋も龍田の山おろしよ鳴ても惜めさなしかの聲

秋の色は木の葉のみかは龍田山袖にしほるゝさ男鹿のこゑ

龍田やま嶺にはけしきこからしに立迷ふ鹿の秋の夕暮

龍田川せゝにみたるゝ秋の色に山かせふかき袖そなれ行

たつた山しくるゝ雲の下もみち秋の日かすも色に出らし

龍田やまよもの時雨（こすえイ）の色なから鹿の音さそふ秋の初風（嵐イ）
龍田やま風のしからみ秋かけてせくや河瀬の嶺のもみちは
さなしかの紅葉ふみわけ龍田山身な（いくイ）秋かせにひとり鳴らん
來てみれはふかくそ涙もたつた河しくるゝ山の色に出にけり
龍田やま時雨にぬるゝ我か袖のまたひぬさきに散るもみち（このはイ）哉

泊瀬山 大和

はつせ山世のうきものは住ぬへし杉の窓（松御集）ふく雪の下かせ
雪くもるはつせの檜はら哀也かれよりほかの夕暮の空
たつれみむ雪こそ今ははつ瀬山ちきりし杉の色かはるとも
初瀬川ふる川のへにいくよへて霜につれなき二もとの杉
はつ瀬やま花かあらぬかしら雪のふる川のへの杉の二もと
なはつせや峯のときは木吹しほり嵐に曇雪の山もと
雲のうちに年も暮ぬや初瀬山入あひのかれに雪はふりつゝ
すかはらやふしみのかたは時雨して雪そはつせの山のはの空
初瀬川ゐてこそ涙もさえにけり〔マヽ〕かれのみ響く雪の曙
初瀬山おのへの鐘そ哀なる雪の庵のあけかたの空

難波浦 摂津

難波江や芦の葉しろく明るよの霞の沖に鳥も鳴也
難波かた霞にきえてゆく鴈のなこりを殘す海士のつり舟
ゆくすゑの秋やなにはの若葉より契りそめたる芦のうら風
なにには潟かすみの空に鴈そゆく芦のわか葉や春いそく覽
霞ゆく難波の芦のうらわかみ汀の駒も春をしるらし
春の色はけふこそみつのうらわかみ芦の若葉をあらふ白浪
難波江にこゝろありてやすみそめし春のけしきをみつの浦人
難波かた波も霞のみこもりに下根とけゆく芦のうら風
なにはえの芦のわか葉をはむ駒に立まかひてもよする波かな
芦火たく煙もかすむ難波かたうらむとすれとしのゝめの月

住吉濱 摂津

住よしの浦こく舟のたえ〳〵に霞ますとても跡は見えしを
思ひやる神代の春そ住よしの遠さとをのゝ霞也けり
たとふへき色こそなけれ住吉の遠里をのゝ春の曙
淡路しまみとりにまかふ住よしの霞の浪に春の舟人
行すゑは遠さとをのゝ春かすみはるかにちきれ住よしの松
しら菊の匂ひし秋もわすれ草おふてふきしの春浦風
淡路嶋夕の浪をすみよしの松さへかさす春の浦かせ
淡路しまうら漕舟のほの〳〵と霞に明るおきつしら波
住吉の浦こく舟のほの〳〵と霞にあくるおきつ白浪
すみよしの霞のうちに漕舟のまほにも見えぬ淡路しま山

芦屋里 摂津

ほたるとふ芦屋の浦に蜑のたく一夜もあけぬ五月雨の空
五月雨はひま社なけれ津の國の芦屋の里の雲のやへふき
もしほ燒芦屋の蜑のうきねたに涙にしほれてゆく螢かな
いさり火のかけよりほかに行螢まよふ芦屋の里のしるへか
くれぬとはつけの小櫛をさらすとも芦屋里に螢飛也
芦の屋のかりねの床のふしのまに短くあくる夏の夜な〳〵
みしか夜のまたふしなれぬ芦の屋のつまもあらはに明る東雲
夕されは秋の濱へなふく風に軒うちそよく芦の屋の里
いさり火はまか（にイ）はぬ磯の螢かなあし屋の里の五月雨の比
五月雨は芦屋のとまや朽ぬらん軒の玉ゆらぬるゝ袖かな

布引瀧 摂津

布ひきの瀧のしら糸うちはへて誰山かせにかけてほすらん
芦の屋の嵐のぬきにおりなみて涼しく落る布引のたき
落たきつ瀧のしら玉わか袖にかけてそすゝむ夏の日くらし
夏衣秋たつ袖にいとふまてまなくみたるゝ瀧のしら玉
久かたのあまつ乙女の夏ころも雲井にさらす布ひきの瀧
布引の瀧のしら糸夏かイくれはたえすそ人の山路たつぬる
ぬきみたれ散るやしら玉白妙の衣手涼し布ひきの瀧
足曳の山分ころもぬきなうすみよれは涼しき布ひきの瀧
風も夏と吹や袂に散る玉のぬきみたれたる布引の瀧
布引の瀧のしら糸よるかけて月みんとてやとひこさるらん

生田杜 攝津

大かたの秋の色たに悲しきにいく田の杜に露そうつろふ
しら露のしはし袖にと思へとも生田の杜に秋風そふく
しかそとふいくたの杜の下もみち露も時雨もそめぬ梢を
問したゝいく田の杜の秋の色露のかことを風にまかせて
秋にふく生田の杜の下風に誰かすむとかは鹿の鳴らん
秋とたに吹あへぬ風に色かはるいく田の杜の露の下くさ
たつねつゝ生田の杜に宿かれは鹿の音なから秋風そ吹
津の國の生田の奥の秋風に鹿の音なるゝ杜の下露
秋ふかき心の色もしられつゝ生田の杜のさをしかのこゑ
しくれつるいく田の杜に雲消てうつろふ色に秋風そふく

葦浦 紀伊

わかのうらの芦まとひ分ゆくつるの聲きく方に月そすみぬる たつ御集
玉津しまむかしの跡に風吹はこゑしまにぬるゝわかの浦波
わかの浦や汐干たさして行鶴のつはさの波にやとる月影
千々の秋の光なかけて若の浦の玉もになひく有明の月
わかの浦の芦へに波のよるの鶴ふけ行月に子なおもふなり
夜の鶴鳴ふりにし秋の霜ひとりそほさぬわかの浦人
わかの浦やあしのまよひの田鶴の音は雲井の月も哀しらなん
つるのすむわかの浦風ふけぬらし芦への波に月わたる見ゆ
千世ふれとわかの浦波けふよりは君にゆつるの栖なりけり
古しへたかけてそおもふ久かたの月待宵のわかのうら浪

吹上濱 紀伊

かちなたえ夢路もたえぬ沖津風ふきあけの濱音のあらさに
紀の國やいさ吹上の濱に出て雪のしほ風空になかめん
波風に吹あけのちとりうち侘てなく音悲しき暁の空
ふりまよふ雪氣の雲の濱風に吹上の千鳥こゑまよふ也
吹上の濱風寒み跡とへは雪におまきるむら千鳥哉
しほ風の吹上の雪にさそはれて浪の花にそ春は先たつ
鳴千とりそれかあらぬか沖津風吹あけの濱の雪の白波
冬さむみそれかあらぬかおきつかせ吹上の濱の雪のしら濱
衣手もさえゆく霜の小夜千とりねさめて渡る吹上のはま
千とり鳴吹上のたてる浦風の聲すむ袖に月そやとれる

交野 河内

宿かさん人もかたのゝ篠の葉にみやまもさやと霰ふる也
散る雪に冬もかた野の櫻かり花ならなくにぬれ〳〵そ行
霰ふる音そ淋しきみかりする交野のみのゝ楢のはかしは
かはらしな霰ふりにし狩衣かた野の原の冬かれのいろ
かりくれぬ交野のみのゝ楢の葉に雲霜ふる村雨の空
風ないたみ交野のとたちしたはれて忍ふかれはに霰ふる也

たち歸り汀の宿やかり衣交野の霰袖にふる也
かり暮し今はとたちも交野なるふみなら柴の雪の下折
夕つく日鳥立も見えぬ山のはのくるゝ交野に霰ふる也
露わけし野への秋草かれしより御かりはつらき天河風

水無瀬川 攝津

みなせやま木葉あらはになるまゝにおのへの鐘の聲そ近つく
水無瀬川木の葉さやけき初風に鹿のねあらふ菊の下水
落瀧津木々の下水みなせ川なかれをめくる萬代の秋
よろつよの秋まて君を水無瀬川かけすみそめし宿の白菊
萬代の契そ結ふ水無瀬川せきいるゝ庭の菊の下水
この里に老せぬ千世はみなせ川せきいるゝ庭の菊の下水
山かせのよそに紅葉はみなせ川せきいる宿の庭のしら菊
庭にうつす山路の菊をみなせ川ぬれて吹ほす千世の松風
波かせにつけても千代をみなせ川峯の松やま菊の下水
菊の花にほふ嵐にみなせやま河の瀬しらむ霧の遠かた

諏磨浦 攝津

すまのあまのしほたれ衣うちはへて來てはなとみぬ涙の月影
朝なきにならはぬ涙に夢も見すなれなはいかにすまの關守
もしほやく須磨の關守我からに猶おもひそふ秋の夕暮
なれぬとて袖にやとなき夜の涙すまの浦かせ秋ならてたに
秋は猶衣手さむみもしほやくあまりに吹やすまの浦風
須磨の海士のなれにし袖もしほたれぬ關吹こゆる秋の浦風
ことそとて詠なれたる色もなし秋しもしろき須磨の浦かせ
定めなき心ひとつを須磨の浦の月に出たる秋のあま人
秋の夜はかさねて袖も朽やする月をのみ見るすまの浦人
須磨の浦になか雨あかすはれにけり月は西へもいらぬ物ゆへ

明石浦 播磨

袖ぬれていくよあかしの浦風におもふかたより月も出らん
秋の夜の月ゆへくもる浦の名を雲にあかしのつけて過ぬる
あかし潟なみよりおちに雲晴てすむらん月のはてをしらはや
しらぬよの雲井のほかの秋まても明石の波にすめる夜の月
秋の夜の月をあかしのとまひさし久しく起て見つる月かな
明石かたいさおちこちも白露のおかへの里の涙の月かけ
あかし潟うらみぬ袖も月や宿るねなまし海士のもしほ汲つゝ
明石かた月は波ちの果もなし秋をかきりの有明のそら
くまもなくすむへきよゝの友なれや明石の涙にうつる月影
あかしかた雲をへたてて行舟の待らん月に秋かせそ吹

餝磨市 播磨

播磨なるしかまの市にたつねみよ世にたつとても物や思はん
古のあゐよりもこきみよなれやしかまのかちの色をみるにも
播磨なるしかまに染るかち人の袖よりふかき秋の夕暮
いとまなみしかまの市にたつ民もしのに數そふ君か代の秋
たえすたつしかまの市の數々に千代もとあふくみよの行末
君か代は誰もしかまのいちしるくとしある民か天津空かな
たつ民もしかまの市に數そひて千とせの秋のかひを待哉
しるしらす行かふ秋の名殘まていかにしかまの市の夕暮
君か代はしかまの市にたつ民の數かきりなく國そさかふる
秋くれはしかまの市にほすあゐの深き色なる風の音かな

松浦山 肥前

まつらかた波にちかつく冬の夜の月なへたてそ八重のしほ風
唐にしきさらにみよとや松浦やまのこゑもみちも枝に一むら
もろこしの秋をや今はまつら山ひれふる嶺に霜まよふ也
木のまより嵐に月をまつらかた時雨るゝ浪に渡る舟人
白妙のひれふる雪をみれたかみ松浦の沖の遠つ舟人
たらちめやまたもろこしの松浦舟ことしも暮ぬ心つくしに
まてしはしみやまおろしのしくる也松浦の沖をいつる舟人
宮古には春をかけてや松浦舟とし立かへる波にまかせて
松浦やま霜ふきむすふしほかせにから國さへや月は澄らん
唐人のたのめし秋は過ぬとも松浦の沖に雲なへたてそ

因幡山（因幡）

天の戸やあけはいなはの嶺にしもまつ夜な更そ秋のよの月
嶺の松すそ野の萩もなひきゝていなはの山はたゝ秋の風
たちわかれ誰かいなはの山のはに契し跡の松風そふく
さらて又まつにしつらき夕かはいなはの山の秋風の聲
よそにみていなはの山の嶺の松まつらんとかはたのみ渡らむ
これもまた忘し物を立かへりいなはの山の秋の夕くれ
秋も今はいなはの山の嶺の松かはらぬ色をしほる嵐に
いつかとていなはの松の秋かせに身をまかせたる山の夕暮
いかてかはまつともきかんはる／＼と因幡の山の嶺の秋かせ
別てもよしやいなはの嶺に生る松となつけそ心つくしに

高砂（播磨）

たかさこや尾上の秋のなかきよも明ぬとひとり鹿そ鳴なる
高砂のおのへに風や渡るらむ松のしつえをこゆる鹿の音
高砂の尾上に秋やふけぬらん嵐にかへるさをしかの聲
高砂のおのへの暮の鹿の音にうきねの夢を松風の聲
高砂の松のすゑこす秋かせになれすはこそはさ男鹿のこゑ
たかさこの松もつれなき尾上よりおのれ秋しる棹鹿の聲
たかさこの尾上の鹿の聲よりも浦こく舟もよるへしりけん
松風にうきねの涙も高砂の尾上のかたやさを鹿の聲
高砂の鹿の音をくる秋風に又とをさかるおきつとも舟
吹かせの色こそみえね高砂の尾上の松に秋は來にけり

野中清水（播磨）

いにしへの野中のしみつ尋ればさゝわくる袖に露そ置そふ
心あれや野中の清水かけすみて昔にやとる夏の夜の月
年へても思ひいつやと印南野のふるき清水に昔をそとふ
草ふかき野中の清水たえ／＼になひく末葉の風そまたるゝ
さゝ深き野中の清水かせ過てさらに昔の心をそくむ
玉ほこのみちの夏草末となみ野中の清水しはし影みん
昔とふ野中の清水立かへりもとの心に夏そくまれん
いにしへの野中ふるみちことゝへは清水流るゝよゝのさゝ原
いなみ野や野中のしみつ結ふ手に玉ゆら涼し笹のかり庵
契あれは野中の清水むすひあけてもとみし影を又やとす哉

海橋立（丹後）

久かたの天の橋立かすみつゝ雲井をわたる鴈そ鳴なる
橋立や松風かすむあけほのにあまのとかへる春の鴈かね
浦風に霞もなひく松原のみとりに明る天の橋立
鴈かへるよさの雲井の涙まて春にかすめる天のはし立
鴈かへる浪ちはるかにうちかすみあけ社わたれ天のはし立

ふけもみぬいく野のよそに歸る鴈かすむ波まの松とこたへよ（つイ）
春の鴈聲をほにあけて行舟もあまの戸渡る天の橋立
浪路わけ釣するあまの橋立や霞にまかふよさの浦舟
いまはとて歸る鴈かね聲までも霞てわたる天のはし立
たちまよふ波と霞のたえまより雲井に見ゆる天の橋立

宇治川 山城

はし姫のかたしき衣さむしろにまつ夜むなしき宇治の曙
網代木にいさよふ浪の音ふけてひとりやねぬるうちの橋姫
網代木や八十うち川のしき波にこほりもあへぬさむしろの床
橋姫の氷の袖に夢たえて嵐吹そふうちの川波
ものゝふの八十氏人のまとひして浪にいさよふせゝ（とイ）の網代木
あしろ木や浪の霧まに袖見えてやそうち人は今かよふらん
網代木にこほれはやかてくたく也八十うち川の水のしら浪
さむしろに宇治の橋姫いかならん浪のみよるの瀬々の網代木
うち山の嵐におつるもみちはや網代によるのにしきなるらん

大井川 山城

大ゐ川なみのかよひち立かへりあと有風に木葉ちりつゝ
あらし山けふの御幸のかり衣にしきとなれと散るもみち哉
大井川入えの松をしるへにてむかしの浪にうかふ（とも）もみち葉
河霧の色にはあらし大井川むかしをうつす紅葉也けり
紅葉はをみゆきふりにし大井川跡なき水に秋の有ける
大井川まれのみゆきに年へぬる紅葉のふなち跡は有けり
さかの山みゆきをうつす大井川もみちにまかふかり衣かな
この川にもみちは流るあしひきの山のかひある嵐ふくらし
紅葉はのふりにし世より大井川たえぬみゆきの跡を見る哉
大井川ふるきを忍ふ事ならはもみちの錦みふれかさらん

鳥羽 山城

雲ゐとふ鴈の羽風（はさ山家）に月さえてとはたの里に衣うつなり
さとしむる鳥羽田の稻葉ほの／＼と霧かくれ行淀の河舟
おしねほす鳥羽田のくろにゐる鴈の泪にむせふ秋の稻つま
やゝそよく稻葉の露やさそふらんとはたの秋の鴈の羽かせよ
秋の夜は宮古のみなみ月そすむとはたの面の雲ゐはるかに
もろ人の（もイ）千世のみかけに宿しめてとはにあひみん松の秋風
君すみてとはにみるへき里なれはたのもはるかに松風（砧イ）そ吹
鳥羽田ゆく鴈の涙のちるなへに秋の山への色をかふなる
見渡せは鳥羽田の稻はかたよりてつとふる風の末そはるけき
秋立て月をおしねの露こほるとはたのおくて鴈も鳴也

伏見里 山城

おしねほす伏見のくろにゐる鴈のとをさかりぬる曙の空（聲イ）
秋は空里はふしみの夕まくれ雲よりおろす萩のうは風
一夜ふす伏見の里のおかへなるわさ田もかりに鹿そ鳴なる
鹿の音にねさめを秋と松の風ふしみの床に露や契し
門田ふく野風をさむみかりに來て伏見の里のいねかての露
ふしみ山つまとふ鹿の涙をやかりほの庵の萩のうへの露
袖のうへもことのほかなるよるの露に鳴や伏見のさを鹿の聲
稻葉もるふしみの田井のいねかてに千世を一夜と松風そ吹
獨りねのなこりも露そ置あへぬ伏見の月の曉のそら
をしかなく床の月かけ夢たえてひとりふしみの秋の山かせ

泉川 山城

いつみ川かはなみしろく吹風に夕すゝしきさほのやまかせ
泉河いくみかのはら過ぬとも夏はおもはぬ衣かせやま
涼しさに秋そうち出るいつみ川はゝその杜のきしの下水
作ちるもりの下風たのつから立よるはかり秋やとふらん
秋の色なやゝみかのはら泉川むすへは露の玉の井の水
いつみ川かは浪きよくさす棹のうたかた夏をおのれけちつゝ
白妙の夕浪涼しいつみ川はゝその杜のたけの下みち
いつみ川いくせの水も深みとりしけるはゝその杜の下陰
暮るゝまはかはらす秋に泉川はゝその杜の月そもりくる
いつみ川かは浪すゝし水鳥のはゝその杜の夏の夕かせ

小鹽山　山城

なしほやま小松かはらの明ほのにみれをへたてゝたつ霞かな
小鹽やま神のしるしを松の葉に契し色はかはるものかは
萬代をはるの嵐になしほ山かすみもなひく嶺の松はら
おほはらやをしほの松も契らん霞も春もちよの色とは
小鹽山小まつか原の朝かすみ君のためにや千代をこむらん
春にあふをしほの小松かすくに祈るみとりの末そ久しき
をしほ山今一しほの春の色に君もみとりの松そ久しき
大原や神代かけたるゆふ霞はるやをしほの松の下かせ
夕つく日暮ゆく春も小鹽山まつはいつともわかぬ物ゆへ
をしほやま松に霞も色に出ぬうけひく神にみよのしめなは

相坂山　近江

あふさかのせきの梢むら霞めり行も歸も春の道とて
關霞せきの岩かとたちならし逢坂こゆる春は來にけり
逢坂やしるもしらぬも行人のかすみの袖に春かせそ吹
春にはまつ梢の梢のうすみとり霞をそむるあふ坂の關
これやこのしるもしらぬも君か代の春の光にあふ坂の關
今はとて歸るさそふ花の香にあふさか山の光かすむらん
春に今は逢坂やまのいはしみつ木かくれいつる鶯のこゑ
いくそたひおなし霞の立かへり春のゆきゝにあふ坂の關
東路やいくへの霞へたつらん立はしめたるあふ坂のせき
あふさかや霞もやらぬ梢の葉の下水こほるあけほのゝ空

志賀浦　近江

しかのあまの袖吹あらしうらふけぬ歸れや汀こほりもそする
志賀の浦やしはし時雨の空なから雪になり行山おろしの風
からさきや氷吹ゆく松風に汀の田鶴もとをさかる也
こほり行しかの浦はにゐる田鶴のちよの翅に拂ふ白雪
雪ふれは氷汀もさゝ浪や志賀のうらはの月の明ほの
志賀の浦や氷もいくへゐる田鶴の霜の上毛に雪は降つゝ
さゝなみや志賀のうらはの水の面に氷ふきしく比良の山かせ
峯さむみ比良山おろし雪ちりて汀氷れるしかの浦なみ
をちかたや比良山おろし雪降ははらひわひたるしかの濱松
志賀のうらや夜半に霜ふむあしたつのはかひの霜を吹嵐哉

鈴鹿山　伊勢

すゝか川ふかき木の葉に日數へて山田の原に時雨をそきく
もみち葉のせきは鈴鹿のいせの山錦をぬすむ風をもなすな
すゝか山嵐よこきる木のまより八十瀬の浪に秋そみたるゝ
秋の色もふりすてかたきすゝか山またきも木末も時雨そめつゝ
秋ふかくなりにけらしなすゝか山紅葉は雨とふりまかひつゝ
秋は來て露はまたかふと鈴鹿やまふるもみち葉に袖そうつろふ

木の葉ちる時雨も袖にすゝか山からくれなゐにふり出て行
八十瀬ゆく水はまさらて木葉のみふるやすゝかの山の秋かせ
鈴鹿山ふるや時雨も吹かせも散るもみち葉の色を尋て
すゝか河木の葉にふかき秋の色にしはしも淀む波のまそなき

二見浦 伊勢

ふたみかた月をもみかけいせの海のきよき渚の春のなこりに
玉くしけ二見の浦の名なりけり明るならひは夏の夜の月
二見潟つりする海士の夏衣ほしあへすしらむ夏のよの月
波のうへの秋にまたれぬ月影は二見の浦の明かたの空
玉くしけ二見か浦の波まくらうちふす程に有明の月
ますかゝみ二見の浦にみかゝれて神かき(セイ)きよき夏の夜の月
夏の夜はたまゆらもなし玉くしけ二見の浦に明る月影
玉くしけ明行そらや二見潟うらみもあへぬ波のうへの月
程もなくうらみは深し玉くしけ二見の浦の明かたの月
風ふけはいせの濱荻おりしらぬふたみの浦の月の影かな

大淀浦 伊勢

大よとの浦風かすむあけほのゝ(に御集)雲ゐを鴈のをとつれて行
おほよとの春たつ波のいかならんうらみてのみも歸る鴈かれ
大よとのみるめはうとく也ぬとも涙にかりかれ秋をわするな
おほよとの霞吹むすふ松風にうらみてのみや鴈かへるらん
大淀の松とやつくる古里にうらみぬからに歸るかりかれ
大よとの浦にかりほすみるめたに霞にたえて歸る鴈かれ
霞ゆく松さへつらし大淀の浦たつ波にかへるかりかれ
大淀の松はつらくも霞まれと波ちへたてゝ歸る鴈かれ
大よとのうらみて蜑やいさりするみるかひもなき霞夜の月
大淀の春の波ちにゆく鴈のうらみてかへる曉のそら

鳴海浦 尾張

よる浪もあはれなるみのうらみさへかされて袖にさゆる比哉
きくからにあはれなるみの小夜ちとり霧立波のすゑの松風
浦人の日も夕暮になるみかた歸る袖より千鳥鳴なり
旅人の日も夕くれに鳴海かた浦かせさむみ千鳥鳴也
東路やいつより春に鳴海かた浪に花ちる雪のあけほの
鳴海潟雪の衣手ふきかへす浦風をもくのこる月かけ
故さとも今や夕になるみかた宿とふ雲はまたしくれつゝ
夕きりにともとなるみの浦千鳥跡なきかたの汐ひたそとふ
冬ふかきけしきに今そ鳴海かた雪吹おくる沖津汐風
風吹はよそに鳴海のかた思ひおもはぬ波になく千鳥かな

濱名橋 遠江

たのむとてれになきかへりこし(ろこしのかり御集)鴈の濱名の橋の秋霧の空
又やみん雲ゐの鴈にことゝはん濱名のはしの秋きりの空
鳴わたる雲井(もイ)の鴈よしるへせよ濱名の橋の霧のまよひに
はつかりの雲ゐに今そ鳴わたる濱名の橋の秋霧のうへに
朝霧に濱名の橋もとたえして雲井を渡る秋の鴈かれ
霧はるゝ濱名の橋のたえ〳〵にあらはれ渡る浦(松イ)のしき浪
東路やはまなの橋の朝霧におちこち人の聲かはす也
初鴈の聲のゆくゑもしら浪の濱名のはしの霧の曙
鴈かれも霧のとたえやうらむらん濱名の橋の秋の夕暮
秋かせに夕かなしき東路の濱名のはしにかゝるしら波

宇津山 駿河

日くるればあふ人もなし宇津の山うつゝもつらし夢はみえぬに
蔦の色むかしな今に分なして心ほそきは宇津の山みち
夕月よ露吹むすふ秋風にわか袖こいぬや宇津の山みち
色々の木葉しくるゝ露分てうつゝともなき宇津の山道
蔦の色もうつりにけりな宇津の山秋もふけゆく時雨せしまに
宇津の山うつるはかりの峯の色はわきて時雨や思そめけん
ふみわけてさらにや越ん宇津の山うつろふ岩の蔦の細みち
ふみ分しむかしは夢かうつの山跡ともみえぬつたの下道
誰にかは風のたよりもしらすへきもみちふみしく宇津の山道
しられしな今もむかしも宇津の山蔦よりしける思ひ有とも

佐良之那里 信濃

あちきなくなくさめかねつ更科やかゝらぬ山も月やすむらん
月出はよもさらしなの夜半の空なはすてならぬ秋の山かは
更科や峯ふきくたす秋風に霧にしほれて出る月影
里の名の秋にわすれぬ月影に人やはつらき更科の山
しなの路や雲井に聞し更科の里のしるへはたは捨の山
嵐吹く山の月影秋なからよもさらしなの里のしら雪
秋風の吹く大空の月の色もたゝ里からの更科の山
雲ちかき山路の月な人とはゝいまさらしなのなは捨の空
なかめわひ誰も心のおもひ哉かくてふりぬる更科の月
更科の月ふく嵐夢にたにまたみぬ山の麓そなくなる

清見關 駿河

きよみかた月に出ぬるとも舟のこき行波にあくるほとなき
清見かた涼しや月の秋の夜もれぬに明るはならひ成けり
きよみ潟月はつれなき天の戸をまたてもしらむ浪のうへ哉
月のすむ雲井をかけて清見かた夏の夜なかき浪の上哉
清見かた月ゆへかよふよな／＼の秋なはゆるせ浪の關もり
きよみかた袖にも波の月をみてかたへもまたぬ風そすゝしき
清見かた夕たつなみに雲消て月もすゝしく出る釣舟
きよみかた關な岩根にもる月の波ま過行夏のしほかせ
清見かた磯たちのほるしら浪のよるほともなく明る月影
きよみ潟みしかき夜半の浪のまにほともなくふくる有明の月

富士山 駿河

ふしの山おなし雪けの雲路よりすそ野を別て夕立そする
雪のうへになひきてのこる富士の根の煙凉しき夏の雲かな
この頃のふしの白雪いかなれや猶ときしらぬうき嶋の松
水無月のてる日やうすき富士の根に猶清かたき雪の白雲
時しらぬ雪はふしの根としへても一日もいつか水無月の空
ほとゝきす鳴や五月もまたしらぬ雪はふしのはいつとか空
ふしの根の雪よりおろす山風に五月もしらぬうき嶋のはら
ときしらぬ山とは消てふりぬれと□□□峯のしら雪
時しらぬ山こそ雪のきえさらめ月さへこほるうき嶋か原
裾野には夕立しけりふしの山けふりも雲も消ぬ物から

武藏野 武藏

むさし野や暮はいつくに宿とはん霞も道も末なしらねは
武藏野の春やく草のゆかりとて煙に深き朝かすみかな
行すゑのなかめははてもなかりけり霞そあくるむさしのゝ原
むさし野の春はゆかりもなけれとも霞にこもるわか草の露
かすみても誰にとはまし武藏野のゆかりもしらぬ春の若草

木の葉ちる時雨も袖にすゝか山からくれなゐにふり出て行
八十瀬ゆく水はまさらて木葉のみふるやすゝかの山の秋かせ
鈴鹿山ふるや時雨も吹かせも散るもみち葉の色を尋て
すゝか河木の葉にふかき秋の色にしはしも淀む波のまそなき

二見浦 伊勢

ふたみかた月をもみかけいせの海のきよき渚の春のなこりに
玉くしけ二見の浦の名なりけり明るならひは夏の夜の月
二見潟つりする海士の夏衣ほしあへすしらむ夏のよの月
波のうへの秋にまたれぬ月影は二見の浦の明かたの空
玉くしけ二見か浦の波まくらうちふす程に有明の月
ますかゝみ二見の浦にみかゝれて神かききよき夏の夜の月
夏の夜はたまゆらもなし玉くしけ二見の浦に明る月影
玉くしけ明行そらや二見潟うらみもあへぬ波のうへの月
程もなくうらみは深し玉くしけ二見の浦の明かたの月
風ふけはいせの濱荻おりしらぬふたみの浦の月の影かな

大淀浦 伊勢

大よとの浦風かすむあけほのゝ雲ゐを鴈のをとつれて行
おほよとの春たつ波のいかならんうらみてのみも歸る鴈かれ
大よとのみるめはうとく也ぬとも涙にかりかれ秋をわするな
おほよとの霞吹むすふ松風にうらみてのみや鴈かへるらん
大淀の松とやつくる古里にうらみぬからに歸るかりかれ
大よとの浦にかりほすみるめたに霞にたえて歸る鴈かれ
霞ゆく松さへつらし大淀の浦たつ波にかへるかりかれ
大淀の松はつらくも霞まれと波ちへたてゝ歸る鴈かれ
大よとのうらみて誰やいさりするみるかひもなき霞夜の月
大淀の春の波ちにゆく鴈のうらみてかへる暁のそら

鳴海浦 尾張

よる涙もあはれなるみのうらみさへかされて袖にさゆる比哉
きくからにあはれなるみの小夜ちとり霧立波のすゑの松風
浦人の日も夕暮になるみかた歸る袖より千鳥鳴なり
旅人の日も夕くれに鳴海かた浦かせさむみ千鳥鳴也
東路やいつより春に鳴海かた涙に花ちる雪のあけほの
鳴海潟雪の衣手ふきかへす浦風をもくのころ月かけ
故さとも今や夕になるみかた宿とふ雲はまたしくれつゝ
夕きりにともとなるみの浦千鳥跡なきかたの汐ひたそとふ
冬ふかきけしきに今そ鳴海かた雪吹おくる沖津汐風
風吹によそに鳴海のかた思ひおもはぬ波になく千鳥かな

濱名橋 遠江

たのむとてれになきかへりこし鴈の濱名の橋の秋霧の空
又やみん雲ゐの鴈にことゝはん濱名のはしの秋きりの空
鳴わたる雲井の鴈よしるへせよ濱名の橋の霧のまよひに
はつかりの雲ゐに今そ鳴わたる濱名の橋の秋霧のうへに
朝霧に濱名の橋もとたえして雲井を渡る秋の鴈かれ
霧はるゝ濱名の橋のたえ／＼にあらはれ渡る浦のしき浪
東路やはまなの橋の朝霧におちこち人の聲かはす也
初鴈の聲のゆくゑもしら浪の濱名のはしの霧の曙
鴈かれも霧のとたえやうらむらん濱名の橋の秋の夕暮
秋かせに夕かなしき東路の濱名のはしにかゝるしら波

宇津山 駿河

日くるれはあふ人もなし宇津の山うつゝもつらし夢はみえぬに（も御集）
蔦の色むかしを今に分なして心にそきは宇津の山みち
夕月よ露吹むすふ秋風にわか袖こぬや宇津の山みち
色々の木葉しくるゝ露分てうつゝともなき宇津の山道
蔦の色もうつりにけりな宇津の山秋もふけゆく時雨せしまに
宇津の山うつるはかりの峯の色はわきて時雨（蔦イ）や思そめけん
ふみわけてさらにや越ん宇津の山うつろふ岩（岩イ）の蔦の細みち
ふみ分しむかしは夢かうつの山跡ともみえぬつたの下道
誰にかは風のたよりもしらすへきもみちふみしく宇津の山道（ふへイ）
しられしな今もむかしも宇津の山蔦よりしける思ひ有とも

佐良之那里 信濃

あらきなくなくさめかねつ更科やかゝらぬ山も月やすむらん（は御集）
月出はよもさらしなの夜半の空をはすてならぬ秋の山かは
更科や峯ふきくたす秋風に霧にしほれて出る月影
里の名の秋にわすれぬ月影に人やはつらき更科の山
しなの路や雲井に闇し更科の里のしるへにはをは捨の山
嵐吹く山の月影秋なからよもさらしなの里のしら雪
秋風の吹く大空の月の色もたゝ里からの更科の山
雲ちかき山路の月を人とはゝいまさらしなのをは捨の空
なかめわひ誰も心のおもひ哉かくてふりぬる更科の月
更科の月ふく嵐夢にたにまたみぬ山の鹿そなくなる

清見関 駿河

きよみかた月に出ぬるとも舟のこき行波（の御集）にあくるほとなき
清見かた涼しや月の秋の夜もねぬに明るはならひ成けり
きよみ潟月はつれなき天の戸をまたてもしらむ浪のうへ哉
月のすむ雲井をかけて清見かた夏の夜なかき浪の上哉
清見かた月ゆへかよふよな〳〵の秋をはゆるせ浪の関もり
きよみかた袖にも波の月をみてかたへもまたぬ風そすゝしき
清見かた夕たつなみに雲消て月もすゝしく出る釣舟
きよみかた関を岩根にもる月の波ま過行夏のしほかせ
清見かた磯たちのほるしら浪のよるほともなく明る月影
きよみ潟みしかき夜半の浪のまにほとなくふくる有明の月

富士山 駿河

ふしの山おなし雪けの雲路（閑御集）よりすそ野を別て夕立そする
雪のうへになひきてのこる富士のねの煙涼しき夏の空かな
この頃のふしの白雪いかなれや綿ときこえぬうき嶋の松
水無月のてる日やうすき富士の根に綿消かたき雪の白雲
時しらぬ雪はふしの根としへても一日もいつか水無月の空
ほとゝきす鳴や五月もまたしらぬ雪はふしのねいつとわく覧
ふしの根の雪よりおろす山颪五月もしらぬうき嶋の（ふイ）はら
ときしらぬ山とは消てふりぬれと□□□□峯のしら雪
時しらぬ山こそ雪のきえさらめ月さへこほるうき嶋か原
裾野には夕立しけりふしの山けふりも雪も消ぬ物から

武蔵野 武蔵

むさし野や暮はいつくに宿とはん後も道も末なしられは
武蔵野の春やく草のゆかりとて煙に深き朝かすみかな
行すゑのなかめははてもなかりけり霞をあくるむさしのゝ原
むさし野の春はゆかりもなけれとも後にこもるわか草の露
かすみても霜にとはまし武蔵野のゆかりもしらぬ春の若草

むさし野のゆかりの色もとひわひぬみなから霞む春の若草
過來つる野山もうつる程もなし春の日數はむさしのゝ原
淺みとり霞むはかりの若草に春もこもれるむさしのゝ原
みわたせは霞そなひくむさし野のまた若草の春風の比
武藏野やよこ雲かすむ明ほのに春の影なき色は見えつゝ

白川關 陸奥

雪にしく袖よ夢路よたえぬへしまた白河の關のあらしに
初雪に冬草わくる朝ほらけおくそゆかしきしら河の關
しら川の關の秋をはきゝしかと初雪わくる山のへのみち
そことなく山路も雪にうつもれて猶たのみこし白河の關
五月雨のふる里となく日數へてけさ雪深し白河の關
くるとあくと人をこゝろになくらさて雪にもなりぬ白河の關
けぬかうへにふりしけみゆき白川の關のこなたに春も社たて
おもひなくる人はありとも東路や雪ふりぬとはしら川のせき
みやこより初雪寒し東路やみちのおくなる白河の關
陸奥のまたしら川の關みれは駒をそたのむ雪のふるみち

阿武隈川 陸奥

風はやきあふくま川の小夜ちとり涙なそへそ袖のこほりに
君か代にあふくま川の友ちとりやちよときけは末はるか也
小夜ちとりなく音すさむる人もこすあふくま川の霧の遠かた
さよ千鳥やちよをそふる君か代はあふくま川のしき波の聲
冬の夜をなかくや契る友千鳥あふくま川のたえぬ汀に
思ひかね妻とふちとり風さむみあふくま川の名をやたつぬる
君か代にあふくま川の埋木もこほりの下に春を待ける
わすれしなあふくま川の河風にしはしなれぬと千鳥鳴也
夜をさむみつまとふ千鳥うらむ也あふくま河の名やたのむ覽
年へてもあふくま川の友ちとり鳴音身にしむよはの月影

安達原 陸奥

人とはぬあたちのまゆみ誰ひけはすゑさへ夜の錦なるらん
もみちさへあたちの原の夕つくよまゆみに春の色はみさりき
たつね來る心の秋はおくなれや安達か原の木々の梢を
みちのくのあたちのまゆみいく秋か色をこすゑの秋に染らん
故鄕の梢もかくやしくるらん安達か原のゆふ暮の空
しくれ行あたちか原の夕霧にまたそめはてぬ秋そこもれる
かり人の安達のまゆみ末たはによるやをしかの秋の紅葉は
色つくや安達のまゆみ秋の末しくるゝ雲の空にたなひく
そめはてぬ木葉しくれもみちのくの名よりあたちの原の山風
安達野の秋かせそよく村すゝきうき物とてや鹿の鳴らん

宮城野 陸奥

みやき野や曉さむく吹かせに鳴音もよはき蛬かな
草まくらまた宮城野の露にしてあさくも秋を詠つるかな
旅人の袖にあらしの秋ふけてしらぬ露ちる宮城のゝ原
宮城野の秋にみたるゝ虫の音に露とふ風の袖にまかへて
みやき野の木のしたわくる旅の袖露をたよりの秋の花すり
うつりあへぬ花のちくさに亂つゝ風のうへなる宮城のゝ露
宮城野はやとかる袖も松むしの鳴夕かけの萩の上露
ふるさとを忍ふもちすり露みたれ木の下しけき宮城のゝ原
宮城野の草葉の露をあらそひてまた古里の誰思ふらん
みやき野のうつろふ秋にあしひきの山たちならし鹿そ鳴なる

安積沼　陸奥

さゝわけし安積の沼の花かつみかつみる夢のあくるはかなさ
宮古おもふあさかの沼の花かつみかつみるかたは三日月の空
花かつみかつみるからに波こえぬあさかの沼のさみたれの比
五月雨の葉すゑの波に花かつみあさかの沼の水深きころ
花かつみかつみるからのしるへかなこれや安積の沼の岩かき
ふみしたく安積の沼の夏草にかつみたれそふしのふもちすり
夏はまた安積のぬまの花かつみかつみる色にうつる比かな
夏はまたあさかの沼にかる草のかつみるまゝにしけるころ哉（野はしまた…）
年をへて又咲にけり花かつみあさかの沼のちきりともかな
みちのくやなこり安積の花かつみ深き色をは尋てもとへ

鹽竈浦　陸奥

しほかまや春のもしほのうきまくらおほろ月夜に浦風そ吹
人とはゝいかゝ語んしほ竈の松かせゆるき春のあけほの
あはれとや霞むにつけて鹽かまの浦こく舟の遠さかる聲
あさくても春をわけたる朝ほらけ霞る波はしほかまの浦
こゝろあらは袖をいかにとあま乙女おほろ月夜の鹽かまの浦
霞とも花ともいはし春のかけいつこはあれとしほかまの浦
しきしまややまとにあらぬもろこしの春にもきかす鹽竈の浦
霞より今一しほの鹽かまに松の葉なひき浦かせそ吹
春の月まつに霞そふかみとり山のはもなき鹽かまのうら
あま人の波まにみゆる白妙の衣てかすむしほかまの浦

御製　八首　吉野山　立田山　住吉濱　水無瀬川
　　　　　　因幡山　宇治川　鳥羽　鈴鹿山

大僧正　十　泊瀬山　生田杜　交野　飾磨市
　　　　　　小鹽山　志賀浦　宮城野　海橋立　鹽竈浦
通光　四　春日野　三輪山
　　　　　若浦　清見關
俊成卿女　二　野中清水
　　　　　　　佐良之郡里
有家　二　布引瀧
　　　　　武藏野
定家　六　難波浦　松浦山　伏見里
　　　　　泉川　逢坂山　大淀浦
家隆　六　芦屋里　明石浦　富士山
　　　　　白河關　阿武隈川　阿逹原
雅經　四　大井川　二見浦
　　　　　宇都山　安積沼
具親　二　吹上濱
　　　　　濱名橋
秀能　二　高砂
　　　　　鳴海浦

右最勝四天王院障子和歌一卷以立原萬本書寫一挍畢

群書類從卷第百七十九

和歌部三十四

句題和歌

臣千里謹言。去二月十日參議朝臣傳レ勅曰。古今和歌多少獻上。奉レ命以後。魂神不二安臥一。重病延以至レ今。臣儒門餘孽。側聽二言詩一。未レ習二艶辭一。不レ知レ所レ爲。今臣纔搜二古句一。搆二成新歌一。別亦加二自詠十首一。惣百廿首。悚恐震懾。謹以擧進。豈求レ駭レ目。只欲レ解レ頤。千里誠恐懼誠謹言。

寛平六年四月廿五日　散位從五位上大江朝臣千里

春

囀レ霧山鶯啼尙少

山高みふりくる霧にむすれはや鳴鶯の聲まれらなる

鶯聲誘引來二花下一

鶯の啼つる聲にさそはれて花のもとにそ我はきにける

偸レ閑何處無レ不レ尋レ春

しつかなる時を尋ていつこにか花のありかをともに尋む

花枝攀處芳紛々

花のえた折つるからにちりまかふ匂ひのあかすおもほゆる哉

不レ見二洛陽華一

神さひてふりぬる里に住人は都に匂ふ花をたに見す

晚歸多是看レ花回

今ははやかへりきなまし道なりし花を見しまに程そへにける

綠柳條弱不レ勝レ鶯

こつたひて綠のいとのよはけれは鶯とつるちからたになし

尋レ花不レ問二春深淺一

花をのみ尋こしまに春はまたふかさ淺さもしられさりけり

夜風吹送每年春

はかなくて空なる風の年をへて春吹送ることそあやしき

春暖山花處々關

あたゝけき春の山邊の花のみそ心もわかす咲みたれける

落蕊閑華不レ見レ人

あと絕てしつけき山に咲花のちりはつるまて見る人もなし

老眼花前暗

としふかく老ぬるひとのかなしきは咲る花さへをとる成けり

花下忘レ歸因二美景一

花を見てかへらんことのわするゝは色こき花によりて成けり

歲時春猶少

年月にまさるときなしと思へはや春しも常にすくれたるらん

逢レ春那得レ不ニ慇懃一

あかてのみ過行はるをいかてかは心をいれてをしまさるへき

春光只是有ニ明朝一

かねてよりわか惜こし春はたゝあけむ朝そ限なるへき

南處春光同日盡

春をのみこゝもかしこもおしめともみな同し時盡ぬるかうさ

春若酒易レ悲

はる〳〵にあひて老ぬる身なれはや膝に泪のあかれきるらん

あはれとも我身のみ社おもほゆれはかなき春を過しきぬれは

惆悵春歸不ニ留得一

歎つゝ過行春をおしめともあまつ空からふりすてゝ行

一歳唯殘ニ半日春一

ひとゝせに又ふたゝひもこし物をたゝひる中に春はのこれる

夏

春條長定夏陰盛

このめはるさかへこしゝも仇なれは花の陰とそ成まさりける

鶯多ニ過春語一

うくひすはすきにしはるを惜みつゝ鳴こゑ多き比にそ有ける

蟬不レ待レ秋鳴

空蟬のみとしなりぬるものならは秋をまたてそ鳴ぬへらなる

鶯語漸稀

鶯はときならねはや鳴聲の今はまれらになりぬへらなる

餘花葉裏稀

ちりまかふ花はこのはにかくされて稀に匂へる色そともなき

春盡啼鳥遲

限りとて春の過にしときよりそなく鳥のねのいたくきこゆる

蓮開水上紅

秋ならてはちすひらくる水の上は紅ふかき色にそありける

枝空花落稀

吹風に枝もむなしくなりゆけはおつる花こそまれに見えけれ

鳥思ニ殘花枝一

なく鳥の聲ふかくのみきこゆるはのこれる花の枝をわふるか

月照ニ平沙一夏夜霜

月影になへてまさこのてりぬれは夏のよふかき霜かとそみる

但能心靜即身涼

我心しつけき時はふく風のみにはあらねとすゝしかりけり

澗潤路甚清涼

山たかみ谷をわけつゝゆく水はふきくる風そすゝしかりける

秋

天漢迢々不レ可レ期

あまの河はとの遠になりゆけはあひみん事のさためなきかな

秋霜鬢似ニ年空長一

秋のよのしもにたとへて我かみは年のはかなくおひし積れは

秋來只識ニ此身哀一

おほかたの秋くるからに我身社かなしきものと思ひしみぬれ

霜草多枯虫思急

なく霜に草のかれ行時よりそ鳴むしのねも高くきこゆる

今宵織女渡ニ天河一
ひとゝせにたゝ今宵社たなはたの天の河原を渡るといふなれ
心情逢レ秋一似レ灰
ものおもふ心のあきになりぬれはすへて人社みえわたりけれ
秋悲不レ到ニ貴人心一
おほかたの秋を悲しとみることも仇なる人はしらすそ有ける
樹葉霜紅日
つれよりも秋の木の葉にをく霜の紅ふかく見ゆるころ哉
蕭條秋思苦
かすかなる時のみ見ゆる秋しのは物思ふことそ苦しかりける
悲ニ秋々多レ老
すきてゆく秋の悲しく見えつるは老なんことのをしき也けり
紅樹蟬鳴
もみちつゝ色くれなゐにみゆる日は鳴蟬さへやなくは成ぬる
□□□□□
秋のよた寒みなきつるむしのれは我宿に社あまたきこゆれ
ゆくかりの秋すきかたに獨しも友におくれて鳴渡るらん
吹風の音たかくさへきこゆれは置露さへもさむくも有かな
このはみなから紅にしくるとて霜のさらにも置まさるかな
秋のよをさむみなきつゝ行雁の霜をしのきて行かへるらん
しのゝめに秋をく露の寒けれはたゝひとりしも虫のなくなる
鳥栖ニ紅葉樹一
秋すきはちりなんものをなく鳥のまつもみちはの枝にしも鳴
秋雁過盡無ニ書到一
秋のよをかつはなきつゝ過れともまつ言傳は見ゆるよもなし
寒雁飛□□□□
行雁の飛ことはやく見えしより秋はかきりとおもひ成にき
寒雁聲靜客愁至
鳴雁の聲たに絕てきこえれは旅なる人を思ひまさりぬ
なく蟬の聲高くのみきこゆるは秋すむ虫の秋そしるらし

冬

迎レ冬先有ニ好風一
いつしかと冬を迎ふるあしたからまつよき風の吹そうれしき
中宵似レ有ニ春風至一
小夜更て猶れられれと春風の吹くるかともおもほゆる哉
一年冬至夜偏長
ひとゝせに春くる事は今そしるふしをきすれはあかし難きに
新愁多待ニ夜長一來
あたらしきうれへはおほく寒きよの長きより社はしめ成けれ
心灰不レ改ニ爐中火一
物を思ふ心ははひとくたくれとあつきたきには及はさりけり
鬢雪多ニ於砌下霜一
我髮のみな白雪と成ゆけはをける霜ともおとろかれけり
年々只見ニ人空老一
年々とかそへこしまにはかなくて人は老ぬる物にそありける
十分一盞暖ニ於火一
あくまてにみてる酒こそ寒きよは人の身までに暖まりけれ
老眠早覺常殘レ夜
老てぬる日ははや覺てとこしなへよはに過れは音をのみそ鳴

霜未レ殺二萋々草一
よひ〳〵にまた置霜の寒けれは草葉なたにそからささりける
□□□□□□□□
獨ゐてもゆる螢にむかへはやかくなともなき身とそ成ぬる
長年老不レ惜二光陰一
かく計老ぬと思へは今更に光の過ることもおほえす

風月

風皺白浪花千片
おきへより吹くる風はしら浪の花とのみこそ見えわたりけれ
月照波心一顆珠
照月は浪のこゝろにひかされてひとつかたにも見え渡るかな
柴扉日暮隨レ風掩
わひてすむやとにもかかりのくれ行は吹風のみそとさし成ける
不レ明不レ暗朧々月
照もせすくもりもはてぬ春のよの朧月夜そめてたかりける
鵲飛山月曙
かゝさきの嶺飛こえて鳴ゆけはみやまかくるゝ月かとそ見る
清景難レ逢
雲はれてよき月影も常ならすあらんかきりはおしみ社せめ
非レ暖非レ寒漫々風
あつからす寒もあらすよき程に吹くる風はやますもあらなん
殘月照レ山閑
ふたつとも見えぬな月の山ことにてり渡りつゝあきらけき哉
風索屬二閑人一
さためなく吹くる風はかき分てなとかしけきに人に告らん
月宮有レ路無二思人一
てる月の都はかりはありといへと尋てゆかん程そしられぬ
可レ憐春風老
おしみてもとめまほしきな春風の吹過かたく成ぬと思へは

遊覽

山雲初晴水色新
雲もなく谷は山さへはれ行は水の色こそあらた成けれ
猶愛二雲容多在レ山
白雲の中な分つゝ夕くれのめてたきことは山にそ有ける
借問春山何處高
とひしりて雲のかけ橋とひゆかむ何れのかたか山はさかしき
水落青山出二白雲一
ゆく水の青き山より落くれは白雲かとそ見えまかひける
遙見二人索一花使入
よそにても花な哀と見るほとにしらぬ山にそ我はきにける
可レ憐悲靜地
さしわけてふかく哀と見えつるは晴てしつけき所なりけり
非下水頭無二秋日一
影しけき水のあたりは年なへてすきゝぬれ共見えすそ有ける
欲レ倫二風索一繋、遊レ春
吹風の光なとめんと思へはそしはしもはるに遊ふへらなる
長歳作二獨遊人一
あやなくも年の緒なかく獨してあくかれ渡る身とや成南

天高暮山遠
天津空ちかく見えつゝはへつるは暮行やまの麓なりけり
野曠白雲浮
かぎりとて野へのはるかに見えつれは立白雲も深くそ有ける
山花織レ錦無レ緣
山ことに花の錦をたれゝはそ見ゆるところのやすき空なし
□□□□□□□
谷水のことの音絶す聞ゆれはときのまなたにへたてすそ見る

雜

淚流雙袖面成レ文
なく淚こふる袂にかゝりてはくれなゐふかきあやと社見れ
別無二遠近一皆難レ見
別るともいひつる時ははるけきを近きをみぬそ戀しかりける
別後相思夢魂遠
別にし君を思ひてたつぬれは夢のたましゐはるけかりけり
朝結古鄕意
あさことにむすほゝれつゝすくしつる□□□□□□□□□□
別後愛惜容華改
わかれにし君に見せすて徒にかたちのかはる身社つらけれ
白雲一片隨レ君去
白雲のわかるゝことに立つれと君ともにこそゆきかくれぬれ
後時相見是何時
別ての後も君見むと思へとも是ないつれの時とかは見る
送レ故辭レ春雨樣多
人を送るともに春さへ過ぬれはこれかうらみはあまる也けり

萬里經レ年別
近からすはるけき程に年をへて獨ある人はくるしかりけり
不レ知何日又相逢
別ての後はしらぬをいかな覽ときにか又はあはんとすらむ
沈吟難レ別情
そこゐなく物をそおもふ有てのみ別るゝことを思ふ我身は

述懷

自靜二其心一延二壽命一
定なき心ひとつをなしつるそ命をのふる物にそありける
心更老二於身一
世の中をおもひ知ぬる心こそ身よりは過て老まさりけれ
□□□□□□□
心をしあまのうき木になしつれはなかるゝ水に心まされり
何獨朝々暮々閑
はかなくていつも我身の獨して朝夕にしつこゝろなき
浮生短二於夢一
よるへなく空にうかへる心こそ夢見るよりもはかなかりけれ
憂喜皆心灰
かなしきも嬉しきことも多かるを心ひとつそなたつかりける
自遠二浮雲無名著一
我身をは浮へる雲になせれはそゆく方もなくはかなかりける
幻世去來夢
まほろしのよとし知ぬる心にはさかなき夢と思ふ成けり
浮世水上漚

かりそめにしはし浮へるたましゐの水の泡とも譬へられつゝ

黒髪俄假變二春花一

黒かみのしろく俄に成ぬれは春の花とそみえわたりける

恩光春景去

我君も春の光にひとしくはさきなる身ともしらぬへらなり

夢中歡樂又緣レ愁

夢にても嬉しきことを見る時はこゝにちりくる身には増れり

詠懷

しもわけて都尋にくる鴈も春にあひては飛かへりけり
春毎にあひてもあはぬ我身かな花の雪のみ降まかひつゝ
春のみや花は咲らむ谷寒みうつもる草は光をも見す
しら浪の立かへりくる數よりも我身をなけくことは増れり
あし田鶴のひとりをくれて鳴聲は雲のうへまて聞へつかなん
天雲や身をかくすらん日の光我身てらせと見るよしもなき
年毎に春秋とのみかそへつゝ身はひとゝきにあふよしもなし
思ふこと啼鶯につけたれは色もかはらぬ我ひとりてふ
みやこ迄浪立くともきかなくにしはしたになと身のしつむ覧
哀とも我みのみ社おもほゆれはかなき春をすくしきぬれは
郭公さつきまたすになきにけるはかなく春をすくしきぬれは

右百廿首。大江千里之和歌也。自二寛平六年二月十日一至二同四月廿五日一之詠。看二日數一幾間詠也。彼人一世之詠歌雖レ可レ有二數首一。依レ隔二時代一今見稀也。此後歌者昔隨レ所レ見書二加之一。今世雖レ有二不レ好之詞等一。古風體儒門之詠歌何可レ捨乎。不斷勘可レ被レ見レ之。誠温レ故而知レ新之謂宜哉。

文保二年六月四日　參議藤判

寛平の御時きさいの宮のうた合の歌

春

鶯の谷よりいつる聲なくは春くることをいかてしらまし

夏

いくらなつなき歸るらん足引の山ほとゝきす聲ははれすも

秋

うへしとき花まちとをにありしきく移ふ秋にあはんとやみし

冬

光りまつえたにかゝれる雪をこそ冬のはなとはいふへかりけれ

戀

ほのにみし人に思ひをつけ初て心からこそしたにこかるれ
やとりせしはなたちはなもかれなくになと郭公聲たえにけん

ちまきといへることを

後まきのをくれておふる苗なれと仇にはならぬ賴みとそきく

題不知

ねに鳴てひちにしかとも春雨にぬれにし袖ととはゝこたへん

やまひにわつらひて侍ける比こゝちのたのもしけなくおほえけれはよみて人のもとへつかはしける

紅葉はを風にまかせてみるよりもはかなき物は命なりけり

寛平の御時うたゝてまつりけるつゐてにたてまつりける

あしたつの獨をくれて鳴聲は雲のうへまて聞えつかなん

題不知

しらゆきのともに我みはふりぬれと心はきえぬ物にそ有ける

つゆかけし袂ほすまもなきものをなと秋風のまたき吹らん

世中の心にかなはぬなと申ければゆくさきたのもしき身にてかゝる事あるましきと人の申侍ければ

流れてのよをも頼ます水上のあはにきへぬるうきみと思へは

つみなかりしかとも人の事につきてしはらく籠居すへきよしありしころ式部大輔のもとへこまやかに申をくりしふみのおくに

都〔主脱〕さて波立くともきかなくにしはしたになとみのしつむらん

かへし　千古朝臣

しつむみと聞から袖に波かけてうしろやすくはいかて思はん

美材朝臣のもとにて山月照といへる事を

いつくにか今宵の月の曇るへきをくらの山も名をやかふらん

松樹不レ變レ色

はなをめて紅葉めつる折々もつれなる松は猶もめてたし

式部大輔の庭のはなみんとてこれもかれもまかりて木のもとにたちよりてさけなとたうへてよみ侍ける

盃のかけさしそへて思ふとちはなにまとゐのあかぬへら也

難波にとまりてよみ侍ける

なには江やおきつすとりのねぬこゑも旅なる人そ哀とはきく

大舟はかけてとまりのたゆたひの旅なる人はねられさりけり

ものへまかり侍けるにはゝの例ならぬときゝて歸るとて

秋の日は山のはちかしくれぬまに母にみえなんあゆめあか駒

薄暮鳥鵲飛

雲まとひ夕の雨もおつる江にからすも鵲もしほれてそ行

伊豫の任に侍ける時よみ侍ける

うみやまのめつらかなるにむかひても都にみはと思ふ心あり

あした

けさはしもおきけん方もしらさりつ思ひ出るそきえて悲しき

明るよりいてゝやまつるみつしほのひるま計もみれは戀しき

あふことはゆめか星合の朝風にこひしき波のよるみしほとに

き　く

秋なゝきてとき社ありけれきくの花移ふ秋にあはんとやみし

なにしおふ色そめかへし雨ふらん花もてはやす君もこなくに

たかんなを人のもとにたてまつるとて

秋もこは花にもみはやさをしかのふみしたかんなおしき夏草

う　め

折人のてにも袖にも梅香はかきりなくこそしみわたりけれ

立よれはにほひを袖にうつす社花もさすかの心あるなれ

いへさくら

向ひゐてあかすそ思ふいへ櫻くるとあくとにめをもはなたて

伊豫の任に侍けるとき人のふなてし侍りけるにあふきにそへてつかはしけるうた

いまはとてこき出る舟のさはりなみ扇の風はへにもかけなん

あつまにまかる人にあふみをやるとて

東路にへたてはつとも武藏あふみふみたかふなと思てそやる

いはひ

すみの江の濱のまさこは限りなく君か世々へん數にとるへし

右大江千里句題和歌以一本挍合

三月三日紀師近曲水宴序 序不書

花浮ニ春水一　躬恒
やみかくれ岩間を分て行水の聲さへ花のかにそしみぬる
燈懸ニ水際一明
水底のかけもうかへるかゝり火のあまたにみゆる春のよひ哉
月入ニ花灘一暗
とくも入月にもある哉山のはのしけきに影の隠るとやいはむ

これひら
水の面に花はうきつゝ行らめとかにこそめつれ色をやは見る
岩波のかけてゆくともみなしたの影はてります物にそ有けれ
花のせに思ひよせつゝ思へとも月なきよひはかひなかりけり

友則
山かくれ櫻をそ思ふ行水にかさへなつかしせゝのまに〳〵
みきは行螢よりけにかゝり火のかけもあかくそ見え渡りける
月の入てほとのへゆけは春のよの風につけつゝ花をおもふ哉

藤興風
せゝ毎にかけてそ思ふちる花のうきて流るゝかはみつのかは
白玉のふれるとや見む汀よりさやけくはれるかゝり火のかけ
花のせも見るへき物をやすらはてとくも入ぬるさらしなの月

大江千里
春のよの更ゆく水のかをかけはいつくともなく花こそ有けれ
そこにさへてりつゝふかき篝火のかけにそ春の色も見えける
みか月のわれのみならんものなれや花のせにこそ思ひ入ぬれ

さかのうへのこれのり
何れをかいつれとわかん河浪のくさたつ花のかにまとはれて
汀よりてりて渡れるかゝり火のかけはしられぬ物にそ有ける
花をかすせをもみるへきみか月のわれて入ぬる山のをちかた

壬生忠岑
岩そゝく水にゆきつゝ花のかの空にめてたきやみかくれかな
浪まよりてりつゝみゆるかゝり火の影にもふかき春のよひ哉
新拾遺 ちりまかふ花はこゝろもにかゝれともみなせをそ思ふ月の入方

紀のつらゆき
春なれは梅にさくらをこきませて流すみなせの河のかそする
かゝり火の上下わかぬ春のよは水ならぬみもさやけかりけり
入ぬれはをくらの山のをちにこそ月なき花のせともなりぬれ

みつれか序にいへること。さてもこよひあらさらん人は。うたのみちもしらてまとひつゝ。あめのしたにしりかほするなめりと。かきたるもことはり。まことにめてたきうたよみともかな。この世にむまれて。この人々のゐなみてうたよみしけんを見ましかは。なにこゝちせましとおもふも。すきたるこゝろなり。

右紀師近家曲水宴和歌以一本挍合

三百首和歌

春七十首

中務宗尊親王

稽古 おほとものみつの濱松かすむなりはや日本に春や立(きぬイ)らん
首尾相叶。姿よく聞え。本歌の取成御躰殊珍重候。
東路の逢坂山も關なれはいつくなこえて春のきぬらん
いつくより霞そむらむ足引の山にも野にも春はきにけり
立初る春の霞のうす衣なな袖さえてあは雪そふる
山川の氷の關やこえつらん岩間の波にはる風そふく
春風そ吹ならは。氷のとくる事も候へきと存候。
つれもなき音なたにさそへ鶯のこそのやとりの春の初風
下句なと。優美に候へとも。つれもなき音にと候哉。聊不ニ思
得ニ候間。令過候。
光なき谷の鶯いかにしてよそなる春の色なしるらむ
如レ此本歌。存旨候之間。故不レ申ニ子細ニ候。
心にもかなはぬ音なやつくすらん芹つむ野へのまつの鶯
此鶯。面白くめつらしくも候へとも。猶軒梅窓竹はとより
も。
奥山の去年の白雪けぬか上にすかの□□□鶯そなく
下句同前候歟。
風さゆる山のかけのゝ初草のはつかに去年の雪そ殘れる
故郷のよしのゝ山は雪消てひとひもかすみたゝぬ日はなし
只此等之躰にこそ。歌は候へきと承候しか。尤珍重候。

春はまた霞のそこに成にけり雲井に見えしかつらきの山
遠近の霞そふかき煙たつ淺間のたけの春の明ほの
ふき拂ふ峯のあらしもうとけれは霞もとなき武藏のゝ原
武藏野の遠き心。近代滿ニ耳目ニ候。めつらしけなく存候處。
此嵐うとくて。野霞遠き景氣浮レ眼候歟。
ひれふれしむかしな遠み松浦かた霞の袖に春風そふく
稽古 心ある蜑の磯屋はかすかにて霞に殘る松か浦しま
稽古 わたつ海の浪の千里や霞らんやかぬ鹽せにたつ煙かな
餘々事な申上候。雖ニ其憚候ニ。燒ぬ鹽せにと申事は。造立た
る事にて候。推美麗候詞候歟。
尋こむたかしるへとはなけれ共梅か香さそふ庭の春風
稽古 今日もまた人もとはてや紅のこそめの梅の花のさかりな
袖にほふ山路の梅の花かつら夕こえかゝるはるのたひ人
梅花香なつかしみ春のゝに菫もつまぬ旅ねしてけり
菫もつまぬ鹽の時申上候。
ひるは雪夜は月とそいひなさは軒はの梅の花やみさらん
雖ニ其興候ニ。非ニ本意ニ候歟。
なにかあらぬ春も昔の袖の上に梅かゝにほふ古郷の月
初句。あまりにめつらしくや候覽。
玉 山のははそこともみえぬ夕暮に霞て出る春のよの月
稽古 あすか風河音更てたをやめの袖にかすめる春のよの月
閑渡る長柄の橋の跡ふりて声間にかすむ春のよの月
春のよのかすめる空なけふりとてすこさぬあまなかこつ月影
第四句。先々申上候。結搆之躰歟。

こきまする柳櫻もなかりけり錦のうらの春のあけほの

浦名雖二珍重候一。花柳失二本意一候歟、

いひしらぬつらさそふらし鴈金も今は(のイ)と歸春の明ほの

東雲の霞の衣きぬ〳〵にうらみて(わかれイ)歸る春のかりかれ

前大納言基良續後撰歌。立わかれてや歸る鴈かれ。いくほとかはらす候歟。

棹姫の春の衣のせきもゐすたつや霞にかへるかりかれ

都をは住うしとてやひとやりの道ならなくにかりの行らん

松ならぬ柳か枝も玉かけてきなれの里にはるさめそふる

上句。雲(定イ雨歟)而様候哉。短慮難レ覃候。

春雨は降にけらしなとをつらのあと川柳ふかみとりなり

是又あと川柳、或人詠之時此事廢忘之。至愚難レ覃之由。亡父申候き。

古郷の池のつゝみの柳原さすかに春はわすれさりけり

髓雖レ不二覺悟一。近年此偁見及候やらん。以二此等一適愚點憚之隙と存候。

今こふる若木の櫻花さかは此春よりやひとのまたれん

(新後撰)音羽山花咲ぬらし逢坂の關のこなたに匂ふはるかせ

毎句。花麗かくこそ有難候へ。珍重に候。

ひとかたに恨やはせん散らぬ間の花の香さそふ春の山風

櫻さくあなしの山のやまかつら檜原を掛て匂ふはる風

影うつす汀の櫻ちらぬまも花をそよする池のさゝ波

嶺ならて草葉にかゝる白雲や野中の杜の櫻なるらん

初五字草葉の雲も耳に立候哉。

櫻色に雲の衣もうつろひて霞の袖は花の香そする

(續古)常盤木にましりてさける山櫻うつろふ色をいつならひけん

花さかぬ常盤の山の峯にたに櫻をみせてかゝるしら雲

いたつらに軒端の櫻うつろひぬ獨さひしき詠せしまに

新古今。式子内親王。風より先にとふ人もかなとかや。

かさすとておるたにおしき櫻花大宮人はいとまなくとも

哀けに見せもきかせす花盛人まつ宿の鶯のこゑ

初五文字不二幽玄一候也。

(續千)哀しる心ありてやあたらよの月と花とに鴈のなくらん

雪とふる花をこしちの雲(寒イ)と見てしはしはとまれ春の鴈金

歸かり霞のそこに音をたえてさそふ嵐の花をみし(なしみしイ)よや

終句つよく聞候歟、

いかにせん嵐のさそふ花の山しはしとなかてかへるかりかれ

うかりける花にいつより馴そめてちるはることに物思ふらん

散を見て更に我身の惜しきはさくらにそめし心なりけり

ちりぬれはとふ人もなし山里は庭の櫻のおしきのみかは

常盤なる松にもおなし春風のいかにふけはか花の散らん

ときはなる物にしあられは山櫻哀あなうと散をみる哉

末は雲もとには雪と散花のなくれ先たつはるの山かせ

あかすみる人もはかなきあたしよにおしまれんとや花の散覧

以上二首故不レ申二子細一候。

吉野川岩間吹こす春風におられぬ波のはなも散けり

櫻色の衣ふきかへす春風に夢となり行花のおもかけ

殿守の心ある花の百敷にあさきよめするにはの春かせ

かきりあれは日數は殘る春風に別ないそく山櫻かな
嵐ふくたかねの木末雲消えて花の跡もる在明の月
咲散てつらさもしらぬわたつ海の波の花ふく春の浦風
山吹はいはての里の春よりやくちなし染のはなに咲らん
飛鳥川ゆきゝの人のかさすらん岡へのつゝし今さかりなり
終句。近代滿二耳目一候。
花さそふ風の便なしらへにて跡なきかたに春そ暮行
鶯は物うかるねにうらふれてのかみの方にはるそくれ行
第四句。不レ優候歟。
とゝまらぬことなあまたにしたへとや春の別そ歸るかり金
くれかゝる今日は彌生の末の松夕波こえてはるや行らん

夏三十首

雲のゐる遠山鳥の遲櫻心なかくものこるいろかな（春イ）
姿詞。尤珍重候。但山鳥の尾と存候。非二本意一候歟。
空にみし霞の衣はる過て今はかきれにさらす卯花（ほイ）
あけぬとも猶影のこせ白妙の卯花山にみしか夜の月
（後拾）待侘て今宵も明ぬ時鳥たかつれなさに音なならひけん
人ならは侘つゝやれん時鳥いとゝまたるゝよはのむらさめ
（玉續古）尋てもいかに待みん時鳥はつれつれなき三わのやまもと
逢坂の關のとやまの時鳥あくる雲井に初音なくなり
いとゝまた夢てふ物なたのめとや思ひねになくほとゝきす哉
この頃ないつとさためて時鳥なのか五月もつれなかるらむ
とり啼て㒵行よはの時鳥なとか八聲ななら（ろイ）はさるらん

早苗とるあへの田面の村雨にさかこえてなく郭公かな
坂こえてあへの田面。近代耳なれたるやうに候へとも此鵑は。さなへも面白くとりなされて候歟。
茂はつるあすかの鄕の時鳥都なとなみ音ななやなくらん
橘のかけなき山の時鳥宿かりかれてはなやなくらん
第二句。又結搆の心ち仕候て。猶隣と存候。
しほたるゝ音なや鳴らん時鳥とはたの浦の五月雨の空
浦人のとるや早苗もたゆむらんひちきのなたの五月雨の頃
第二句。いとみなれても覺えす候。名所から非二幽玄之境一候歟。
水まさるにふの川瀨の五月雨の杣人しらぬ槇なかるめり
是も妖艶の姿にては候はれ共。けにもさ社候はんと覺え候。
（新千）露にたにみかさといひし宮城のゝ木の本くらき五月雨の比
殊勝珍重候。
ほに出ぬまのゝ入江のしの薄かれて波こす五月雨の比
汐のみつ入江の松の木間よりみらくすくなきみしかよの月
村雲のうつれはかはる詠かな夕立しつるやまのはのつき
是は。さしたる難にては候はれとも。次に言上候。哀はあはれなる事。なかめは詠る事と詠へし。哀といふ物。なかめといふもの。別にあるやうには不レ可レ詠之由。亡父正しく申き。又第四句。つよくきこえ候にや。
いつくにか宿なもからん有間山いなのゝ原のゆふたちの空
せはくともわらやののきに立よらん夕立向ふ逢坂のせき
初句第四句。非二幽玄之躰一候歟。
長木こるしつはた帶の夕すゝみかたふきかふる谷の下風

婆木ころしつはた帶は定而候覽。旗帶いか、候覽と存候。
知此事、雖不レ知二子細一候。萬葉集しつはた帶、按旗帶に
しにや。後賴朝臣。賤はた帶のかた結ひと詠し候にも。若賤
かはたに付たる帶に候歟。
打なびく野島の崎の夏草に夕波かけて浦風ぞふく
身を秋としつか山路にいりもせんことは夏のゝ茂き世中
故不レ申二是非一候。
夏草のしけみか下の忘水たえ〴〵見えて行螢かな
惜難二覺悟一候。上下近年多見給及候。
たえ〴〵に數をはみせてあすか井のみまくさかくれ飛螢かな
かけろふの岩かきふちの草かくれあるかなきかに飛螢かな
上句。不レ優候歟。
夏ふかき澤の螢も飛あしの一夜ふたよに秋やきぬらん
水上に誰かみそきをしかま川海に出たるあさの夕して
此しかま川。又近年毎々人詠候。此あさのゆふして。海に出。
水上のみそきをしるし心殊珍重。同事もかくはなと人は仕候
はぬやらんと存候。

秋七十首

このねぬる朝露かけて玉たれのこすの大野に秋は來にけり
詞たくみに目出見え候へとも尚隙候歟。
今朝みれは露そ隙なき芦のやのこやの一夜に秋の來ぬらん
みなと風涼しくなりて水くきの岡の朝けに秋やきぬらん
寂しさはきらてもたえぬ山里もいかにせよとか秋のきぬらん
今よりの哀をいかにしのはましとやまの庵のあきのはつかせ
うたゝねのときの秋風吹そめてまた一重なる袖そ露けき
更ゆけは月さへいりぬあまの川あさせ白波さそたとるらん
たかよゝり身にしむものと成にけん秋の夕の荻の上かせ
とけそむる千種の花の下ひもを結ひかへたる秋のしら露
とへかしなまかきのはきの花さかり朝な〳〵露の消やらぬ間を
名にめてゝおる人もなし女郎花とはれぬ庭の秋の夕くれ
心詞 毎句珍重。近々難二有躰一候歟、
故郷のみかきか原のふしはかまたかぬきかけし何ひなるらん
泪には秋の夕も昔なくに哀しらする袖のつゆかな
草も木も露そこほるゝ大かたの秋の哀や泪なるらむ
我身いかに秋のならひの泪にはことはり過てぬるゝ袖哉
初句 少耳立候哉、
秋はきの花の笆のあれしより同野原と鹿やなくらむ
月草のはなたの帶のゆふは山たえぬる妻を鹿やこふらん
無レ何おもしろく珍重候へとも、老心みたれ不レ得二心一候、
秋露のふかきみやまにたつしかも思ひつきせぬ音や鳴らむ
大方に秋はかなしき風の音も夕そわきて袖はぬれつゝ
第四句 又不二覺悟一候、近代定多候歟、
かりほさすしつくの田井に露ちりておはな吹しく秋の夕風
此田井。難レ讀候之間。難レ申二是非一候。
かりにたにとふ人もなき淺草の野邊をはかれす秋風そ吹
色かはる野へよりも猶寂しきは槇木の山の秋の夕くれ
寂蓮法師。さひしさはその色としもなかりけり槇たつ山の
秋の夕暮と仕候同躰候歟、

遠ざかる蜑の小舟も哀なり由良の湊の秋のゆふ暮

おり〱に詠はすれとさひしさのことにもあるか秋の夕暮

よしやたゝ思ひもいれし是もまたつもらは老の秋の夕くれ

雲まてもあはれにたへぬけしき哉秋の夕の村雨の空

是も次に申上候。氣色といふこと。たゝに不レ可レ詠由亡父申候き。

初かりも鳴てきにけり浮ことを思ひつらぬる秋のゆふくれ

秋風に草葉色つく片岡の向の峰にかりはきにけり

とやまなる槇の葉そよく夕暮に初鴈鳴て秋風そ吹

あらち山鴈かれ寒みやたのゝに淺茅色つく秋かせそふく

はつかりの峯飛こゆるおほひには霜置あまる秋のよの月

昔建保之比。此おほひ羽よみたる人候しかは。おそろしと云事にて候しかとも。この比はさならぬ事も多く候うへ。これは面影あまりて。面白見え候にや。

白雲の跡なき峯に出にけり月のみふねも風を便に

にの字。あまた差合候歟。小野小町。花の色はうつりにけりな徒に我みよにふる詠せしまに。殊秀逸候へは何事候哉。

天の川月のみふねのゝほりせにみかくはかりやわたす玉はし

のほりせ。大井川よりもやさしからすや候覧。かやうの事は。一旦はおもしろく候ことも。誠しきことには。いかゝと存候。

新後撰　雲拂ふ夕風わたるさゝの葉のみ山さやかに出る月かけ

たゝかやうに。やさしくうつくしうこそ。ありたく候へ。

一本の松はくもりもなかりけりみのゝを山のあきの夜の月

鶉なくのへのあさちの露のうへにとこをならへて月そ宿れる

第四句。もとめたるやうにや候覧。猶陳と存候。

中々に木葉かくれも哀なりあきのけしきの杜の月影

是また陳候歟。

津の國の生田の森に人はこて月にこと吹よはの秋かせ

山鳥のをたえの橋にかゝみかけなかきよ渡る秋の月かけ

山鳥のをの事。以前申候了。是又巻詞つゝきたくみに殊勝には候歟。

岩たかきしほたの川に船うけてさしのほりたる月を見る哉

是は。ことはたくみに力ある様歟。

舟出するあかしのと波霧晴て嶋かくれなる月をみるかな

舟出して今こそみつれたまのうらのはなれ小嶋の秋のよの月

鴈のくる汐ちの末をみわたせは月に横きるあまのつりふね

以上三首陳候歟。

さゝ波やしかつのうらは荒果てひとりや月の宮木もるらん

いとまなきなたの蜑人秋のよはやすくもねすて月をみる哉

第四句。やすらかならす候歟。

いつまてか立る煙を恨けんあるゝ蘆やのあきのよの月

うらみつる煙もうすく成にけりあまのとまやのあけ方の月

さそなうきすまの關守名のみしてとゝめぬ月の在明の空

在明のつれなき峯に住鹿も月に別の音をやなくらん

うき雲をとやまのすそに分過て嶺に別るゝ秋の村さめ

けしき面白く見へ候へとも。其様不二分明一候間暫巻遺候。

我からの袖とやあまのしほるらん玉も刈浦の秋の村雨

八重とつる葎の門をふき明て野分そやとの道はみせける

第三句不.優候。
露結ふ田つらの庵の月影になしれ色つく秋かせそふく
いかはかりよ寒なるらん故郷に獨ある人の袖のあき風
續後撰に。鳥羽主の夜風な寒み故郷にひとりある人の衣う
つらしと候歟。
續古
いつみ川かは風寒し今よりや國の宮古はころもうつらん
眞萩散遠里なのゝ秋風にはなすり衣今やうつらむ
家居してたか住ならしたましまの此川上に衣うつこゑ
よはにふく浦風寒みあしきたの野さかの里は衣うつ也
以上二首諒と存候。
立田山時雨ぬさきの秋風にまつうつろふは心なりけり
小初瀬の山の木の葉[セノマヽ]染つらん伏見のくれに時雨ふる也
時雨つる紅葉の山は雲晴て夕日うつろふみねの秋風
みなふちのほそ川山そ時雨なるまゆみの紅葉いまさかり也
山の名[セノマヽ]、さゝしからす候也。
武士のやしほにみゆる紅葉々やまゆみの岡の梢なるらん
啼鹿の聲きく時の山里な紅葉ふみ分とふ人もかなん
露ふかき尾花かもとのきり〴〵すさそ思ひある音なや鳴らん
なかきよの竹田か原のきり〴〵すうきふし茂き音なや鳴らん
眞葛原また露なかぬ秋かせにまつうらかるゝ松虫のこゑ
誰もまたくれ行秋は悲しきな已れ獨と虫のなくらん
くれて行秋はとまらぬ夕風にかへりやすきはのへのくす原
久堅の天の岩戸の關路にもとまらて秋の今や行らん
此岩戸の關も。勅撰以後滿二耳目一候歟、尚珍重候。

冬三十首

常盤山冬に成ぬと時雨めりとなき山邊に雲のかゝれる
秋の色な木にも草にも染はてゝ竹の葉そよきふる時雨哉
うき雲ははれぬる跡の月影にしくれのこれる峯の松かせ
藻鹽やく煙な雲の便にて時雨ないそくすまのうら風
續古
しくるへきけしきなみする山風に先さきたちてふる木の葉
氣色以前言上候。
積りてはふちとやならんみなの川嶺におつる峯の紅葉々
さそひ行木葉なやかてせきとめて氷そあぬるたに川の水
菊の咲笆や山とみえつらんくれにし秋の色のやとれる
さひしさは身にそふ物となりにけり秋より後の夕暮の空
是もまた夕はまたし權のかれはの上におけるあさしも
以上二首、聊擇存旨候歟。
續古
月影さす枯野の眞葛霜とけて過にし秋にかへる露哉
霜こほるあしまの月の寒るよに聲うらかれて千鳥鳴也
こまやまのあらしや寒き泉川わたりな遠み千鳥鳴也
あへしまの岩うつ浪のよるさえて住ともさかぬ千とりなく也
むろの浦の汐ひのかたのさよ千鳥なきしまかけてせと渡る也
以上三首諒と存候。
故郷の河原の千鳥うらふれてさほ風寒し在明の月
河原千鳥、無念候歟。
榊とる大宮人の袖の上にやたひ霜なく在あけの月
わきも子か袖にみたるゝ玉かつら夕風さえて霰ふる也
雪はたかことのはなれはふるまゝに獨あぬ人の袖またるらん

ひま寒き庵のさしかきうつもれて一夜の程に雪そ積れる
さらてたに閑しく見えし一本のなる尾の松に雪ふりにけり
波かくるむこの浦風音たえてあはしましろく雪そつもれる
白と申事。又亡父申旨候き。
吹おろすあそ山おろし今朝さえて冬野をひろみ雪そつもれる
白雪のとこしく峯の苫蓬松のみとりはいろかはるらん（冬かなイ）
よもすからこりにし柴をおりたきて雪にそあかす大原の里
花とみる小松かくれの白雪を日影やさそふあらしなるらむ
以上四首。隙と存候て罷過候。
まきのやにつもれる雪やとけぬらん雨にしられぬ軒の玉水
またさかぬ冬木の梅の花の枝にかつ色見えてつもる白雪
雪のうちにすみやく山や富士の根に立もかはらぬ煙なるらん
霞より霜よに月を詠きてつもれは老とくるゝ年かな

戀七十首

昨日みし人の心にかゝるかな是やおもひのはしめなるらん
上句。あまりに詞にてや候覧。
戀そむるからあゐの衣の色に出て深き心をしらせてし哉
紅のはつ花染の下衣人こそしられふかきこゝろを
中々によそにも見しと思ふこそ人めを忍ふ餘也けり
是又上句うちとけて候やらん。
忍ふ山心のおくに立雲の晴ぬ思ひはしるひともなし
人しれぬ忍ふの山に鳴鹿も音に立てこそ妻をこふらめ
ほのかにもみてを戀はやしの薄逢坂山の名はしらすとも
思ふともいはての杜のみしめ縄くるしや何と忍ひ初けん
打もれす忍ふ思ひのあらはれてしらぬ枕を猶やかこたん
れすしらぬ。集巻にも多く候得とも。無には劣候歟。
下もえのあまのたくもの夕煙末こそしられ心よはさに
物おもふみしまかくれを行舟のほにこそ見えね浦風そ吹
數ならぬみしまかくれのと新勅撰に詠し候歟。
とにかくにこかれて物を思ふ哉しほやく浦の蜑の釣舟
こととはん鹽やの里に住あまもわかことからき物やおもふと
消かへりくゆる思ひになからへてはては煙の夕暮そうき
聊存候旨候。
下燃にたえぬ煙の末よりや戀すてふ名の空に立らん
人しれすこやにたく火の下煙いかなる隙にうき名立らん
またあはぬつらさも悲し人の身をならはし物と誰かいひけん
祈りみん鴨のみあれの詣かつらかけても人にあふひあれやと
いかにしてよそにもみはと思ひしはつらきに馴ぬ心成けり
さりともとひとつなさけを頼かなつらき心を岩木ならねは
なかしとそ思ひ果ぬるあはてのみ獨月みる秋のよな〳〵
庭つとりかけのたれをの折はへてなかきよすから亂てそ思ふ
やま鳥のをろのはつかに見し人の影をとゝむるかたみ成せは
ことのはのあとなき末を尋てもあはての森のこからしのかせ
時雨にもつれなき松はある物を泪にたへぬそての色かな
袖に餘る泪の露やしるからん秋のならひといひはなすとも
無二指要一文字餘事。強不レ可レ好之由。亡父同申候し。御事同
事由言上候。
ほし侘る袖のためしよ何ならん草葉も秋そ露は置ける

朽にけり袖や昔の袖ならぬつゝむなみたそもとのみにして
見せかはあさきは人の契にて袖つく涙はほす隙もなし
あちきなや人の心のうきにさへたゝ我からと身を恨つゝ
哀なる身の思ひかな偽の人の契をなくさめにして
むすひ置し契よいかに岩代の松にむなしきよをかさぬらん
中々にたのめぬよはそまたれける人の心のかはるならひに
ふけすともまたてやねなん月にたにこさりし物をよひの村雨
雨ふらは恨さらましこぬ丶の心見え成よはの月かな
第四句ニ不レ優候歟。
幾秋の泪の露をはらひかね物思ふ袖に月をみつらむ
物おもふ我からくもる月影を泪のとかに何うらむらん
いのらすよゆふしてかけしかたそきの行あひ遠き契なれとは
有明を何つれなしと思けんよふかき月にをきわかれつゝ
曉はものうきそともいにしへのたか別より恨そめけん
曉はうきときなれはあふ坂の夕つけ鳥も音をや鳴らん
曉は恨てのみや歸るらむ別路におふるくすの下かせ
くれなはと契ても猶かなしきは定なきよの曉のそら
存旨候間罷過候。
忘れしといひて別し曉もなにのつらさに袖のぬれけん
なきぬとて鳥より先にいそきしや忘らるゝ身の初成けん
以上二首。又隙と存候。
有しよの形見と何を詠まし月に別ぬわかみ（我イ）なりせは
別しと契らさりせは兼てより思ひしまゝの憂身ならまし
おもはすよねくたれかみのそのまゝに亂て人をこひん物とは
かつらきや久米の岩橋神かけて契し中のいつ絶にけん

うたゝねに頼はかりの夢も哉戀てふことのなくさめにせん
夢の中に行てやみましかへすてふよはの衣の浦のはつしま
みる夢の名殘もつらし今はたゝかへさてねなんよはのさ衣
第三句無念候歟。
もろこしも夢にみしかはとはかりをよな／＼毎に頼はかなさ
玉ほこの道行人。郭公なくやさ月とは可レ詠、櫻散木の下風
なとは不レ可レ詠之由。亡父申候き。
恨侘かへす衣の關すへて思ひたえぬる夢のかよひ路
夢にたに逢みんことをたえれとやぬるひまもなき思ひ成らん
思ひ餘りくるれはたのむ夢路にもたへ（マヽ）ゆる中はあふ隙もなし
已上二首又隙と存候。
しらさりき我玉のをはなからへて逢みし中のたえぬ物とは
わたつ海の底の玉ものみかくれに亂てそ思ふ逢よしをなみ
逢事はなたの汐瀬に行舟のいさ遠さかる中そかなしき
あふことも今は空しきうつせみの羽にをく露の消やはてなん
あふ事はなすのゆりかねいつまてか碎けて戀に沈みはつへき
忘るなよ身のうき雲は隔ともよな／＼なれし袖の月かけ
身をあきの袖の月かけ更にけりかはる契りの末のなみたに
已上又隙と存候。
なく露も色こそかはれあた人のわれをふるせる秋の袂に
うつろはし色かはれとや契置し憂身しりける袖の露かな
あたに散花よりも猶はかなきはうつろふ人の心なりけり
うつり行人の心のはなかつら後世かけて何たのむらむ
また隙候歟。

逢坂の關路におふるさねかつら枯にし後はくる人もなし
恨ても里をはかれぬくすかつらくるしき物と誰をまつらん
眞葛原うらみしころの秋風やかれ〳〵に成はしめ成らん
故郷のさかひはるかになるみかた汐みちぬれは行人もなし

雜三十首

歸りこん月日へたつな立別いなはの山の嶺のしらくも
いかにねて夢も結はん草枕あらし吹よのさよの中山
月影に今宵は山の嶺こえて誰か野原に枕ゆふらむ
其心不二分明一候之間。隙と存候。
岩代の松の下ねのくさ枕さても結はぬ夢そかなしき
さゝ枕いくのゝ末に結ひきぬ一夜はかりの露の契りを
旅衣尾花か露を片敷て野邊にも波のうきねしてけり
景氣殊勝候。但俗正道超風躰や過候はん。
さゝのやのかりねの枕夢たえて袖もよ寒の秋風そふく
故郷は遠津の濱の磯枕やまこゑてこそ波になれぬれ
是又をろかなるこゝろまとひて不二分明一候。暫卷過候。
うき枕またふしなれぬさゝ嶋のいそうつ波の音のはけしさ
河の名もことゝふ鳥もあらはれて住絶ぬるは都也けり
立歸りみてこそゆかめ富士の根のめつらしけなき煙なれ共
するかなる富士の白雪消る日はあれとも煙たゝぬ日はなし
見渡せは鹽風あらし須磨の小松かうへにかゝるしらなみ
ほし侘る袖師の浦のあま人と人も汀にもしほたれつゝ
出てみる向の岡のかゝみ草露にみかける月のかけかな
以上また念して讀過候。
垣の苫瓦の松のふかみとりとしふりにける宿と見えつる
賤かすむ外やまの松のふかみとりうすきや里の煙なるらん
都人とはぬもよしや山里はさひしきにこそ心すみけり〔マヽ〕
きゝ馴ぬ松の嵐もかれてより思ひしまゝのみやまへの里
深山邊里。ふく嵐哉。不レ可レ詠之由、亡父たしかに申候き。仍
隨分加二制止一候。
山里は軒はにたてるそなれ松馴ても風の音のさひしき
前はうみうしろは山の松風にひとかたならぬ波の音かな
一かた不二幽玄一候歟。
敷嶋や大和嶋ねの外までも渡せはわたす夢のうき橋
夢の内に猶みる夢や世中のはかなく過しむかし成らん
徒にあすかの川のせをはやみ過る月日のしからみもかな
濱千鳥昔の跡を尋ても猶道しらぬわかのうらなみ
凡中々兎も角も不レ能二言上一候。
千年山これや昔のさゝれ石岩ほにふかき苔の色かな
此山少似二大嘗會歌一候歟。
住吉のうらはの松のふかみとり久しかれとや神もうへけん
千代ふへき大内山の峯の松いやとしのはに色まさるらん
百敷やあまてる神のます鏡きみか御影をさそ守らん
鎌倉殿御詠事。申入候之處。先日如レ被レ仰候、御所存之旨、具
可レ令レ注申給候條、尤可レ有之由、御氣色候哉。恐惶謹言。
十月六日　宮内卿資平奉

献上
大納言入道殿

此一卷。給て見まいらせ候。大かた心も詞も不ㇾ及候。末代には歌もありかたく成候ぬと存候へるに。かくやすらかに出來候御事。世のためもたのもしく。道も今更さかへとぬと覺候。本歌とりなされて候。面白もたゝみにも候。中々短き詞。なるかなる心に申のへかたく候。定家は八十一に成とし。候成に四十餘年そひて候ひしかは。申ことたに候けん。融覺は八十まて候し。定家に四十餘年うちそひて申事も時々承候き。書て候ものも。今にひき見しにも。かやうのすちにそ。歌はよむへきやうに申候しか。身こそ不堪申計候はねとも。庭のおしへ計は。僅に承置て候へとも。年老候候は。心もうせたるやうに罷成て。年もわかなき人の様にも候はねとも。このめつらしく目出られ候御事存候旨。可ㇾ申之由。御下ㇾ候に。何事も覺候てかやうに申候き。かへすかへすかたはらいたく思おほえ給候。此度勅撰には力つき候ぬと覺候。自筆に候まゝに。點もおほく成候。時に、いそき候て。罷過候得共。猶力及候はねよしを。御心得申させおはしますへく候。あなかしこく。此由を申候へは。かやうに被ㇾ申候し上に。めてたく候鎌倉殿の御歌。おかしきやうなる御事にてそ候はんと。思ひまいらせ候に。左様の御事にて。わたらせおはしまし候はん。返すかへす目出度覺候。かやうにまことに申され候。御文とも。あの御所にゆかしき御事にて候。時にまいらせられ候はんするに。まことにて候哉らん。

以上坐書之者。九條前内府被ㇾ注ㇾ之。

此和歌。先年書寫之所。紛ㇾ失于兵之後候間。更以ㇾ貴本ㇾ一書ㇾ之畢。

右三百首以ㇾ官代以ㇾ貴本ㇾ挍合　頌阿

七夕七十首

従三位藤原爲理

七夕天
たなはたの心のうちのあらはれて人まちかほに見ゆる空哉

七夕日
七夕はあかすや猶もいそくらんくれやすき日も心つくしに

七夕月
たなはたのなとはつ秋と契りけん月のよさむの比なわすれて

七夕霞
織女のとほきわたりのあさかすみはれぬ思ひの名にや立らん

七夕風
七夕のまちこしよひもちかつきて荻のうら葉に風わたる也

七夕雲
あふ事のさはりやせんと七夕の心さはかす宵のむらくも

七夕雨
たなはたのなみたほすへきこよひたに猶袖ぬらす秋の村雨

七夕露
帽檐の秋の契りは草の葉の露とゝもにやむすひたきけん

七夕霧
逢ことのまれなる中もかはられは心へたつなあまの川霧

七夕煙
久かたのあまつ星あひにたむくれはけにそら焼の煙とそ見む

七夕河
逢こそあまのかはとともなりぬらめあふ稀なる中に流て

續後拾 逢坂の關路におふるされかつら枯にし後はくる人もなし
恨ても思をはかれぬくすかつらくるしき物と誰をまつらん
續古 眞葛原うらみしころの秋風やかれ〲に成はしめ成らん

雜三十首

歸りこん月日へたつな立別いなはの山の嶺のしらくも
續古 故郷のさかひはるかになるみかた汐みちぬれは行人もなし
いかにねて夢も結はん草枕あらし吹よのさよの中山
月影に今宵は山の嶺こえて誰か野原に枕ゆふらむ
其心不二分明一候之間。隙と存候。
岩代の松の下ねのくさ枕さても結はぬ夢そかなしき
續古 さゝ枕いくのゝ末に結ひきぬ一夜はかりの露の契りを
旅衣尾花か露を片敷て野邊にも波のうきねしてけり
景氣殊勝候。但僧正遍昭風躰や過候はん。
さゝのやのかりねの枕夢たえて袖もよ寒の秋風そふく
故郷は遠津の濱の礒枕やまこゑてこそ波になれぬれ
是又をろかなるこゝろまとひて不二分明一候。暫欲過候。
うき枕またふしなれぬさゝ嶋のいそうつ波の音のはけしさ
河の名もことゝふ鳥もあらはれて住絶ぬるは都也けり（りイ）
立歸りみてこそゆかめ富士の根のめつらしけなき煙なれ共
續古 するかなる富士の白雪消る日はあれとも煙たゝぬ日はなし
見渡せは鹽風あらし姫嶋の小松かうへにかゝるしらなみ
ほし侘る袖師の浦のあま人と人も汀にもしほたれつゝ
出てみる向の岡のかゝみ草露にみかける月のかけかな
以上また念して罷過候。
垣の苔瓦の松のふかみとりとしふりにける宿と見えつる
賤かすむ外やまの松のふかみとりうすきや里の煙なるらん
都人とはぬもよしや山里はさひしきにこそ心すみけり〔マヽ〕
きゝ馴ぬ松の嵐もかれてより思ひしまゝのみやまへの里
深山邊里。ふく嵐哉。不レ可レ詠之由。亡父たしかに申候き。仍
隨分加二制止一候。
山里は軒はにたてるそなれ松馴ても風の音のさひしき（のイ）
前はうみうしろは山の松風にひとかたならぬ波の音かな
一かた不二幽玄一候歟。
敷嶋や大和嶋ねの外までも渡せはわたす夢のうき橋
夢の内に猶みる夢や世中のはかなく過しむかし成らん
徒にあすかの川のせをはやみ過る月日のしからみもかな
濱千鳥昔の跡を尋ても猶道しらぬわかのうらなみ
凡中々兎も角も不レ能二言上一候。
千年山これや昔のさゝれ石岩ほにふかき苔の色かな
此山少似二大甞會歌一候歟。
續後撰 住吉のうらはの松のふかみとり久しかれとや神もうへけん
千代ふへき大内山の峯の松いやとしのはに色まさるらん
百敷やあまてる神のます鏡きみか御影をさそ守らん
鎌倉殿御詠事。申入候之處。先日如二被レ御候一。御所存之旨、具
可レ令レ注申給候條、尤可レ有之由、御氣色候哉。恐惶謹言。
十月六日　宮内卿資平奉

進上
大納言入道殿

此一卷。給て見まいらせ候。大かた心も詞も不レ及候。末代には歌もおりかたく成候ぬと存候へるに。かくやすらかに出來候御事。世のためもたのもしく。道も今更さかへとぬと覺候。本歌とりなされて候。面白もたくみにも候。中々短き詞。たゞろかなる心に申のへかたく候。定家は八十一に成とし。俊成に四十餘年そひて候ひしかは。申ことたゞ候けん。爲家は八十まて候し。定家に四十餘年うちそひて申事も時々承候き。書て候ものも。今にひき見しにも。かやうのすちにそ。歌はよむへきやうに申候しか。身こそ不堪申計候はねとも。庭のおしへ計は。聞に承置て候へとも。年老候後は。心もうせたるやうに罷成て。年もわなゝき人の様にも候はねとも。このめつらしく目出られ候御事存候旨。[illegible]申之由。御下二候に。何事も覺候て。かやうに申候き。かへすへすかたはらいたく思おほえ給候。此度納撰には力つき候ぬと覺候。自學し候まゝに。點もおほく成候。時に、いそき候て。罷過候得共。筆力及候はぬよしな。御心得申させおはしますへく候。あなかしこへ。此由を申候へは。かやうに被レ申候し上に。めでたく候[illegible]の御歌。おかしきやうなる御事にてこそ候はんと。思ひまいらせ候に。たゞ様の御事にて。わたらせおはしまし候はん。返すへす目出度覺候。かやうにまことに申され候。御文とも。あの御所にゆかしき御事にて候。時にまいらせられ候はんするに。まことにて候哉らん。

以二某者之者一九條前内府殿注レ之。

此和歌。先年書寫之所。紛失[illegible]之筆。
頓阿

右三百首以[illegible]代[illegible]本校合

七夕七十首

從三位藤原爲理

七夕天
たなはたの心のうちのあらはれて人まちかほに見ゆる雲哉

七夕日
七夕はあかすや猶もいそくらんくれやすき日も心つくしに

七夕月
たなはたのなとはつ秋と契りけん月のよさむの比なわすれて

七夕霞
織女のとほきわたりのあさかすみはれぬ思ひの名にや立らん

七夕風
七夕のまちこしよひもちかつきて荻のうら葉に風わたる也

七夕雲
あふ事のさはりやせんと七夕の心さはかす宵のむらくも

七夕雨
たなはたのなみたほすへきこよひたに猶袖ぬらす秋の村雨

七夕露
棚機の秋の契りは草の葉の露とゝもにやむすひたきけん

七夕霧
逢ことのまれなる中もかはらねは心へたつなあまの川霧

七夕烟
久かたのあまつ星あひにたむくれはけにそら焼の煙とそ見む

七夕河
涙こそあまのかはともなりぬらめあふた稀なる中に流て

七夕河原
さよふくる天の河原のいは枕かさぬる袖も涼しかるらん
七夕瀬
銀河こそのあさせやたのむらんかはらぬ中の心ならひに
七夕渡
七夕のなにたのみけんあふ事はやすのわたりの名のみ也けり
七夕磯
ゆくすゑは又こそ年をこゆるきのいそかてたのめけふの星合
七夕津
波たてば八十のふな津に舟とめてやすらふ程に夜や更ぬらん
七夕岸
すみのえのたれにはあらて天の河わすれぬ草や岸におふらん
七夕波
あすよりはあまのかは波こしかたに又立かへり物やおもはん
七夕宿
七夕もやとりやすらむ久かたの中なる里の名をたのみつゝ
七夕床
七夕の今宵はかりやちりつもるゆかのあたりをうち拂ふらん
七夕橋
織女のこゝろなからのはし〳〵らあらたまる世もなき契かな
七夕陰草
なみこゆる水かけ草の末葉こそみらく少なきたくひなるらめ
七夕梶
けふをまつ心をとへはかちの葉に我思ふ事そまつかゝれける
七夕鵲
まちわたるあふせそとをき鵲の羽をならふる契りなれとも
七夕鶴
袖うすきまたはつ秋の星合にかすともうけし鶴の毛衣
七夕鶏
あけぬともしはしはみまく星合の空にきこえぬ鳥の音もかな
七夕舟
あし分るみちとはきかすこよひたにさはらてわたせ天の川舟
七夕□
かちの音ほのかにきこゆひこほしの妻むかへ舟今かこくらし
七夕賀伊
こくふれのかひのしつくもしろきまて袖に露をく星あひの空
七夕棹
あかてこそ立かへるらめさす棹のしつくににころ天の川なみ
七夕機
七夕の五百機たてゝおりしもあれおなし秋まつ虫の聲かな
七夕絲
秋をへてけふかす糸のひとすちにたえぬをなかき契とそ見る
七夕布
たなはたのうすき衣にたちぬはむけふの細布今日をまちえて
七夕衣
まとをなるあまのは衣しるらめや鹽やくうらにたくひ有とは
七夕袖
織女のひと夜はかりの契ゆへうきになれゆく袖の秋風
七夕領巾
こよひまつ七夕つめのあまつひれふりさけみれはふくる空哉

七夕裳
ひこほしにこよひあはんと七夕のあかもたれ引時は來にけり
七夕紐
下ひものとけてぬる夜のなきまゝにあかてやたえぬ星合の空
七夕鬘
秋をまつ七夕つめのたまかつら思ひもたえしかけもはなれす
七夕挿頭
棚機のあかぬなみたをかけそへてかさしにあまる露の白玉
七夕秡麻
七夕のあはぬ月日はおほぬさのひくてあまたにならぬ計そ
七夕琴
七夕にたむくることのしらへさへ秋の聲にやこよひあふらん
七夕渡守
天河かへさのふれはわたし守やすらひにこそよすへかりけれ
七夕別
たなはたの又こむほとは遠けれと頼みありてや起わかるらん
七夕淚
天の河わたす紅葉のくれなゐに淚もさこそ色かはるらめ
寄七夕初戀
七夕の雲のよそなるかけはかりほのかにみてもそふ思ひかな
寄七夕忍戀
人しれぬ心はかさしたなはたのしのはゝいとゝ物やおもはん
寄七夕不逢戀
いかにせむわか身はせめて七夕のひさしきほとの契たになし
寄七夕尋戀
銀漢たなはたつめにことゝはむあふよかたのゝつらき渡りを
寄七夕祈戀
たなはたの心のうちやかよふとて我おもふことを祈りつる哉
寄七夕誓戀
七夕の長きためしにちかはすはしはしまことゝ頼まれやせん
寄七夕契戀
七夕をかけてはいはし逢ことのたえぬ計はたのみなれとも
寄七夕待戀
牽牛のゆきあふ空をよそにみて我まつかたは更に[illegible]哉
寄七夕逢戀
今宵とて身にはいとはす七夕の久しきほともならひなけれは
寄七夕後朝戀
七夕のわかるゝ空のきぬ／＼はたかゝたにかゝる淚なるらん
寄七夕稀戀
あふといへと今宵はかりの契りにて又一とせのすゑそ久しき
寄七夕久戀
七夕は稀にあふよもたのむらん心なかさは我そまされる
寄七夕絕戀
うき中は思ひたえてもあられけりなと七夕をよそにみつらん
寄七夕忘戀
うき人もおもひいつやとまたれつる契よそなるほしあひの空
寄七夕恨戀
七夕は行すゑまても頼むらんなとあたし世に[illegible]
禁中七夕
雲の上は星の宿りのちかけれはおもかけかよふ[illegible]

旅宿七夕
草枕たひれ露けき袖のうへにみやこにゝたる星合の空
山家七夕
たなはたも逢よになりぬ今よりのみ山の秋にいかてたへまし
野亭七夕
野風ふくかり庵さむし七夕の秋さり衣我にかさなむ
海邊七夕
天河かよふみちとはきかれともしほせのあまも舟やかすらん
寄七夕懐舊
ほし合を雲井になれてみし秋はなをほと近きこゝちせしかな
寄七夕述懐
ほしあひの影をはいかてうつさましさのみしつめる水の鏡に
寄七夕釋敎
七夕のまれの契りは名のみしてつきぬまことのさとりとそ聞
寄七夕神祇
世をてらす神の御代よりたえしとそ契りやをきし天津七夕
寄七夕祝
世中にたえぬためしをたつぬれは我君か代にほしあひの空

右七夕七十首以長鹽信行本一挍了

大和田五月
知念武雄
小林正直　挍

昭和四年八月十日印刷
昭和四年八月十五日發行

不許複製

發行者　東京府西巣鴨町大字巣鴨二千五百七十番地
續群書類從完成會代表者
太田藤四郎

印刷者　東京市京橋區新湊町五丁目一番地
高橋赤次郎

印刷所　東京市京橋區新湊町五丁目一番地
續群書類從完成會工場

發行所　東京府西巣鴨町大字巣鴨二千五百七十番地
續群書類從完成會
振替東京六二二六〇七　電話大塚〇七一八